THE CENTRAL REVIEW

中央公論

臨時増刊

秘密と開放號

第三十三年第八號　第三百五十九號

大正七年七月十五日發行（毎月一回一日發行）
大正七年七月十四日印刷納本

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



腦神經病に適藥ありや？

コヽに最良の適藥あり

島村博士有効證明

健腦丸を服め!!

コンナ兆候はありません？

▲頭が變で重い物被つた心地はありませんか

▲頭痛眩暈がして眠られぬ事ありませんか

▲氣分悪しく逆上せて便祕に苦む事ありませんか

▲仕事も手に付かずクヨ〱思ふ事ありませんか

▲記憶力が薄くなり決斷力が乏き事ありませんか

コレ腦神經病の症候也健腦丸服用あれ



健腦丸を常用せば逆上を引下け頭痛眩暈を治し、腦充血を快治し便通をよくし、怖る可き中風卒中を未發に豫防し、記憶力增進頭腦明快の効あり。

藥價　半週分四十錢　五週分二圓八十錢
一週分七十錢　十週分五圓
二週分一圓卅錢　到る處にあり

本舗　大阪東京　丹平商會藥房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

時代の要求に應ずべき眞摯なる露國研究記にして類書中の白眉

新刊
發賣

露西亞文明記

今井政吉先生新著

突如として起れる革命の爲世界の視聴は期せずして露國に集り其後國情亂麻の如く紛糾するに及び收拾果して如何は何人にも興味多き問題となれり。斯くて世界の思潮を語り文化を談ずるもの先づ露國々情を審にする要あらんとす。この際著者は多年研究の結果を傾倒して本書を公にせらる。内容は單純なる感想や片々たる觀察を集めたるものにあらずして滯露四年の生活に基き露國の社會生活の眞相を叙述し併せて露國文明の實情を説明せるもの新時代の要求によりて生れしこの新著は必らずや江湖讀書子の一讀すべきものならん。敢て識者の淸鑒を待つ。

四六判最上製美本
全壹冊五百頁
寫眞版四拾個挿入

正價壹圓七拾五錢
郵税金八錢

日蓮宗大學講師『法華』編輯主幹
小林一郎先生新著

日蓮主義概論

熱狂的歡迎を受け初版旬日に賣切第貳版本日出來發賣

日蓮主義は現代の人の宗敎的要求に應ずべき最も進歩せる敎義なり。國運の發展も個人の安心も此の敎義に礎きて初めて可能なり。本書は著者が何れの宗派にも囚はれざる自由の見地より。日蓮上人の眞精神を發揮せんが爲めに特に執筆せるものにして先づ法華經の梗槪を擧げ次に日蓮上人の敎義精髓を語り現代思想との交渉近世科學との關係を論及し極めて大膽に極めて眞面目にその所信を告白せるものなり。思想問題に注意せる人は心ず本書を一讀するの要あるべし。

四六判最上製
美本箱入七百頁

正價壹圓七拾錢
郵税金八錢

東京市神田區表神保町し番地
大同文館發行
振替貯金口座東京八七貳番

▼大田三郎氏新著並畫

最新刊

鍾情夜話

古紙千載の堆積に
埋もれたる愛戀の佳
話五十篇此處に
新しき目覺をなして
讀者の心胸深く
流れ入らんとす

著者は洋畫家也而も加ふるに文筆の才の豊潤を以てした書の新譯傳說の聚集に於て夙に世の風潮の魁をなしたるの人也本書は乃ち其の廣く限りなき才藻の渾然たる結晶にして收むる所愛戀の佳話五十篇を總て皆珍籍古典の間に於ける多年の涉獵に其題材を得ん之を典麗の筆に傳へたるもの也而も其題材の取扱方に至つては徒に繁瑣なる外形に累はされて內容の至純を傷くる事なく銳犀なる感覺の閃を馳せて直に古人の生命に觸るゝ所あらんとしたるもの恐らくは彼の古紙千載の堆積に埋もれたる麗人の想ひは此篇に再び新らしき目覺をなして更に脈々として讀者の心胸に流れ入らん添ふる所の別刷の繪畫五十面またよく夫れに呼應して淸新の中に自ら古の風趣を忍ばしめ典據を誤らざる時裝の裡に巧に今人の血を盛つて其處に素地をなす西歐の書風と有識古實の造詣との融合が齎す圓暢の快味に讀者を陶然たらしめんとす裝幀の優婉にして而も高雅なるも亦近時稀に見る所にして蓋し爲に架上宮王の光輝あらんか敢て一本を江湖にすゝむ。

中判最新刊總布天金
箱入全一冊裝幀頗優雅
三色版凸判別刷五十面
紙數繪畫共約三百六十頁
定價金壹圓五拾錢
送料金八錢

東京神田美土代町三丁目一
文陽堂
振替東京三三〇七番

此廣告に依り御用の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

田山花袋氏著

中澤弘光氏挿畫及裝

□新刊□
□發賣□

山行水行

著者が新たに書き下したこの書は『山水小記』の姉妹篇と言つたやうなものである。例の繪卷物風に日本の山水風俗を描いたものである。『山水小記』に於ては、著者は主として山を敍し水を記したが、此篇に於ては、更にそれ以上に、名勝を記し、道路を記し、歴史の趾を記し、一たび卷を繙けば、容易に手を置くことの出來ないのを讀者は覺えるであらう。また單に臥遊の書としても腕下に涼風の生ずるのを禁め得ぬであらう。著者獨得の美しい描寫、すぐれた敍述、旅行の興味は、一頁に漲り溢れてゐる。

中判新形上製箱入
全一冊裝幀頗瀟洒
挿畫廿五面
寫眞版卅餘面挿入
定價 壹圓貳拾錢
送料八錢

石井柏亭氏畫及裝幀

好評三版

山水小記

飽まで新式のスタイルと、情緒に富んだ絢爛の筆と、足跡到らざる處なき山水の描寫と批評とを以て滿たされてある。單なる紀行文ではない、又單なる案内記でもない。著者は言つてゐる『いや別に意匠はないが、日本の山水を一卷の繪卷物として書いて見たつもりだ、そこを買つて貰へば貰ふんだ』實際一卷の繪卷物であり、又繙しても繙しても興味の盡きぬ長い長い繪卷物である。

中版新形全一冊
挿畫及び寫眞版
約五十餘面挿入
定價金壹圓拾錢
送料八錢

東京神田美土代町三ノ一
文陽堂
振替東京三三〇七番
電話神田二〇五四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

島崎藤村先生著

山本鼎畫伯装幀並挿繪



▽渾然たる一大藝術！情趣縹渺たる海の文學！

著者の近業たる「海へ」「地中海の旅」「燕の如く歸る」「故國を見るまで」「故國に歸りて」の五篇を收めて一大長篇となす、終始一貫せる一大旅行記と見るも可也、人間の深き内面生活を描ける一大長篇小説と見るも亦可也。

海より海に途上の風物を叙し、沿海諸港の人事を髣髴せしめ、船上の生活を語る所渾然たる一大藝術を爲す。

吾人は未だ嘗て本書の如く清新にして雄渾精彩にして情趣縹渺たる海の一大文字あるを知らず

▽定價壹圓三十錢　送料八錢　四六判上製函入

六版出來

▽島崎藤村先生著——七十七篇の童話を收む

幼きものに

定價六十錢　送料六錢小型　挿繪深山入　佛蘭西土産

竹久夢二先生新著

青い船

高雅なる童話十六篇と洗練せられたる詩廿一篇とを收む。山青く水白き舊都に退いて静に想を練り徐に繪筆に親しめる著者の最新畫集也。全篇悉く香り高き花の如く繙く者をして卷を抱いて思はず恍惚たらしむ。

▽定價壹圓　送料六錢　菊判上製頗る美本。

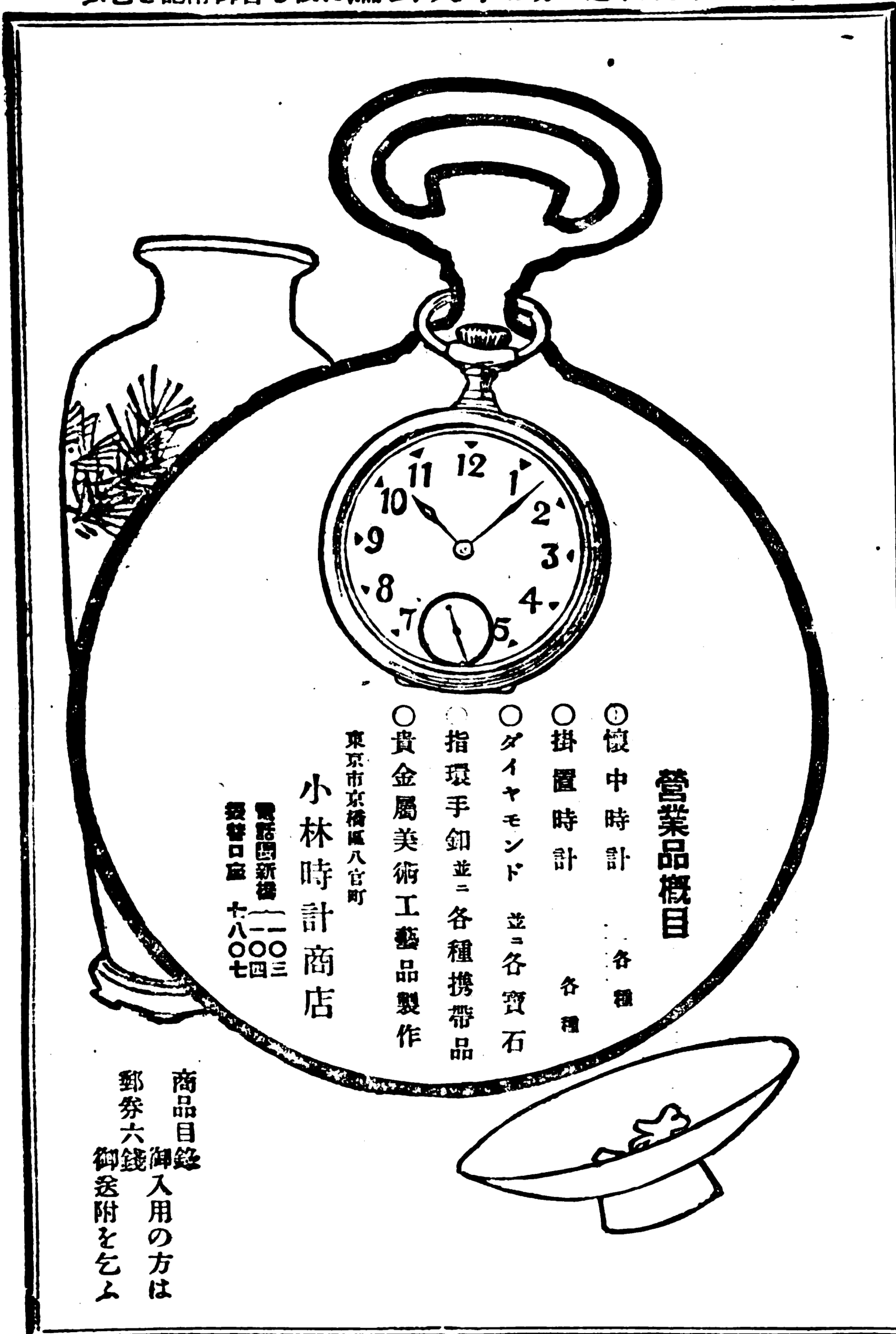
東京南紺屋町　實業之日本社發行　振替東京三二六番


涼しい
マツダランプ
涼しい
神奈川縣川崎町
東京電氣株式會社
東京出張所
銀座尾張町
大阪出張所
門司出張所
西本町三ノ二九
D-111



中央公論第卅三年（第八號）定期增刊「秘密と開放」號





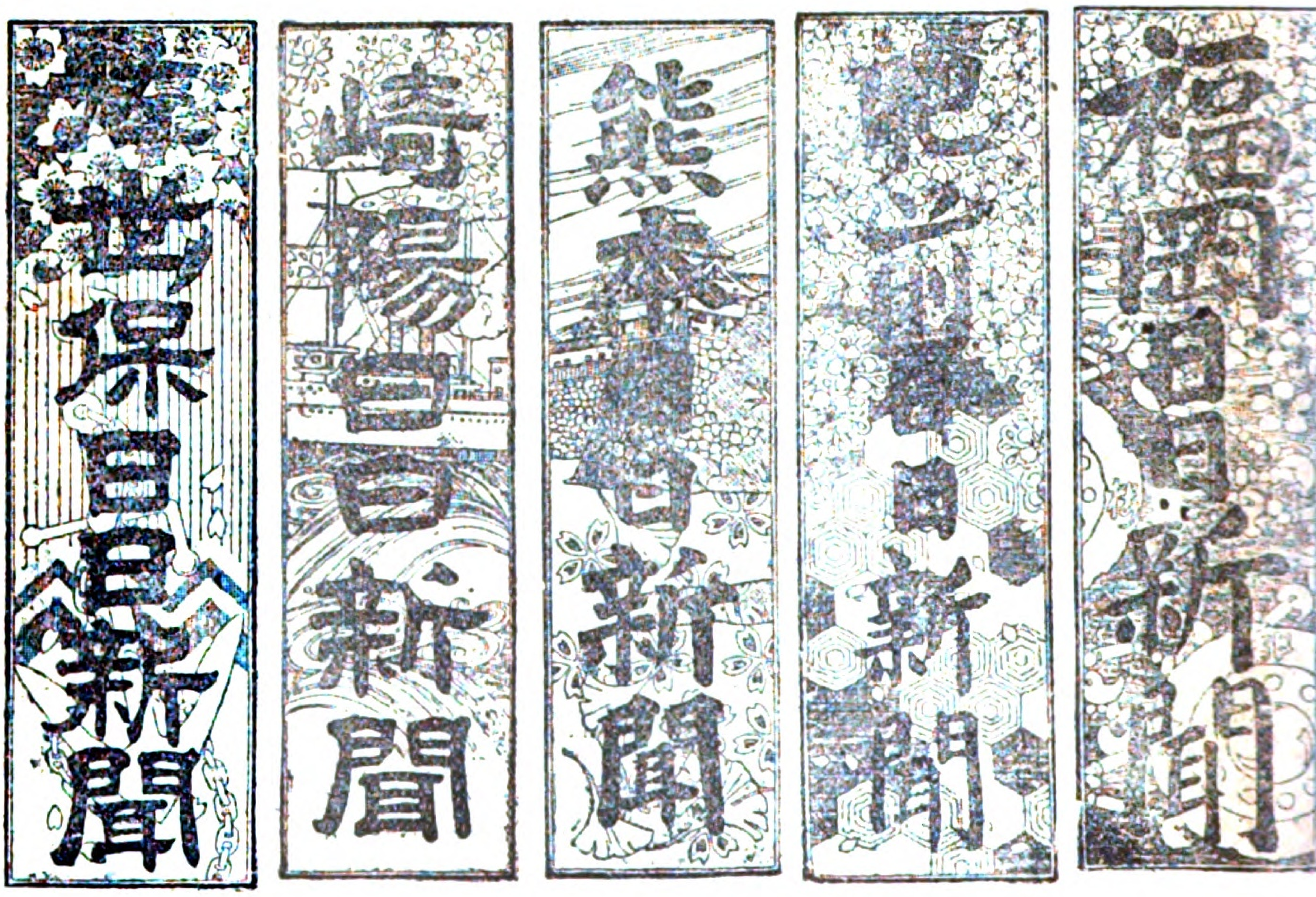
營業品概目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋　一一〇三　一一〇四
振替口座　一八〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



"A COUNTRY ROAD"

BY HANS FRANK

年中無休刊　毎號拾頁



明治十年創刊（福岡日日新聞社）

福岡日日新聞に御申込の廣告は本社經營の

肥前日日
熊本日日
崎陽日日
佐世保日日

新聞にも同載すれば其効果は頗ぶる多大なり。

本社　福岡須崎土手町十五番地

福岡日日新聞合資會社

電話二〇二。四七二。六〇三。三五六。七二〇（振替口座福岡二十番）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▶出版界空前の名著◀

理學博士横山又次郎著

前世界史

（總布製全一冊七百餘頁
正價金參圓郵稅十二錢）

好評再版成る

人類に歷史あるが如く地球にも亦その歷史あり。本書は卽ち此の歷史にして、世界の開闢より說き起し、次ぎに地球の創成を述べ、更に無水時代と無生物時代とを經て生物時代の今日に至るまでの地球面の變遷と生物の進化とを精叙し、最後に類猿人と原人との發生を縷述せり。又日本と支那との地質並に化石は最新發見のものに就て說明したれば、此の點に於ても毫も遺憾あることなし。挿圖約五百、中に新怪動物のもの數十あり。

理學博士 横山又次郎 著述

- 改訂 天文講話 正價壹圓參拾錢 郵稅拾貳錢
- 改訂 地學概論 正價壹圓參拾錢 郵稅拾貳錢
- 改訂 天文地學講話 正價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢
- 人文地學講話 正價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢
- 海洋學講話 正價壹圓五拾錢 郵稅拾貳錢
- 陸文學講話 正價壹圓九拾錢 郵稅拾貳錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一一二三 早稻田大學出版部

（賣捌）神田東京堂 日本橋至誠堂 京橋北隆館 京橋東海堂 大阪盛文館 名古屋星野（其他）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論



第卅三年第八號
秘密と開放號
第三百五十九號

秘密と開放

文學博士 三宅雪嶺

秘密は暗黒を意味し、開放は光明を意味する。暗黒に惡事が潜み、光明がその反對になる。暗い家に種々の黴菌が蔓延し、其中に棲むと病氣に罹る。之を除くには、光の入り、外氣の通ふやうにせねばならぬ。强盗でも、窃盗でも、大抵夜中に於てし、晝間に於てするは甚だ鮮い。人類ばかりでなく、猛獸が餌を漁つて歩くのも夜間である。人は自づと夜の暗黒を恐れる事になつて居る。實際に無い危險を想像して恐れたりする。草木も眠る丑三時と云ひ、化者が出ると考へる。百鬼夜行など有りとあらゆる怪しきものは、殆と全く暗い所に限る。如何なる化物も、日中に現はれ出ては滑稽となる。暗い所は怪しい事

が有り、明るい處は怪しい事が無い。何でも人を安心させるは、光明を得るに越した事がない。大體に於て秘密多い處から、その少い方に向ふのが、向上進歩と稱して居る。秘密の必要を感ずる者は、何等かの欺罔りがある爲めで、少しも人を欺罔るの意無ければ、在りの儘に明つ放して云ふ。秘密を保つなど、餘計な事に屬す。

所で秘密を守るといふ事が肝要になつて居るのは、或る部類の人を敵と見なさねばならぬに由る。何も此世界は極樂でなく、修羅の巷も珍らしくない。何時誰が欺かぬとも限らぬ。場合に由つて切つたり拊つたりする事もある。舊幕時代に、「門を出づれば七人の敵あり」と云ふたが、何の恨みで斯く敵が有るかと分らぬにしても、兎も角油斷の出來ぬ事になつて居つた。今でも何處に敵が隱れて居らぬと云へぬ。動物が保護色で他の目を掠めるやうに、人も人に分らぬやうにする事を好む。意識的に好まぬとも、秘密にしようとする。世間が秩序立たず、不安心なる時ほど秘密にするに努め、太平が續くに伴ひ次第に打明ける事が多くなる。性分にも由る事で、秘密好きがあり、開放好きがあるが、周圍の狀態に由る所が少くない。秘密好きなものが競爭場裡に立つ時など、何でも彼でも秘密にし、必要の無い所まで秘密にするやうになる。他から觀れば、何の爲めに秘密にするか、餘計な事を心配するやうに思はれる。

秘密にするのも加減物で、必要と思はれる所に秘密を守るのは當然と考へられ、必要無い處にまで秘密を守るのは、相手を疑ひ之に敬意を失ふ事になる。人を見れば泥棒と思へとて、友人と共に住居して居りながら、頻りに財布を隱くすに努めるが如き、其友人を疑はぬにしても、疑ふと同樣の結果に成る

事がある。餘りに秘密を事とするものは、參謀役に適しても、群集を支配するに適せぬ。人を疑ふものは人に疑はれる。事を秘密にするのは人を疑ふ所あつての事で、夫れだけ人に疑はれる。必要が有つて秘密にするのは他人との關係で、他人に迷惑を及ぼす恐れ有る所にある。自分一身でも、競爭場裡に立つては、策略を秘密にする必要が無い處で、頻に秘密を念とする。我が力の足らぬを知り、つまり力を量して分らなくしやうとするのである。策を考へるのも、我が力の足らぬ所を敵に見透されまい、何とか之を補はうとするに外ならぬ。眞に力が有れば、在りのまゝに現はれ出て、何處からでも突いて來いといふ態度に現はれる事が出來る。力が足らぬので敵を騙まさう、何とかして我が力の分らぬやうにしたいとしての事であつて、斷えず騙くの意思を離れぬ。「英雄人を欺く」といふのも、英雄の力無く英雄たらうとするに由來して居る。眞に力が優つて居れば少しも人を欺くに及ばぬ。公明正大晴天白日に濶歩して足る。昔の亞歴山王の如き、殘酷な事があつても、人を欺かうとしなかつた。惡賢い事は嫌である。事に臨み我が力を以て決定するの確信がある。英雄で群集を相手にしたのは、割合に秘密が少い。唯英雄として力に限あり、突立つた儘に、何處からでも突いて來いと云へるやうな力あるものは無い。橫綱が褌擔ぎに向ふやうな譯には行かぬ。如何なる英雄も幾分か弱點を隱すを要する。弱點が知れたが最後、どんな目に逢ふかも知れぬ。戰場に出て敵を欺く意味に於て、平生でも幾許かの秘密を保たねばならぬ所がある。實力乏しければ尙更らの事であつて、親戚友人にも秘くすやうになる。佛國のルイ十四世は一時歐洲の覇權を握る勢があり、列國の使臣を集めて饗宴する時など、堂々たる相貌寔に一世の英雄であるかに見えた。歿した時に靴の踵(かゝと)を數寸高くしてあつたのが分つた。常に傍に奉仕して居つ

た者も之を知らなんだ。脊丈を高くするに力め、之を何人にも知らさなんだのである。併し之は脊丈け許りではなく、一切の事之れに似て居る。餘程見せ掛けに骨を折つて居つた。力の足らぬ者が、力の餘るやうに見せるが爲め、秘密に苦勞したのである。併し彼は尙自ら多少の能力があり、足らぬ所を飾り立てたのであるが、普通の君主や貴族や、本來それ程の實力の無いので、いよ〳〵秘密を事とせねばならぬやうになる。在りの儘にして居たならば、愛想の盡きるやうな事がある。儀式の場合に立派に見えながら、內實不仕鱈で話にならぬ事がある。是等を秘密にして置く方が、當人及び他人の爲めになる。「知らぬが佛」とは、其邊の事を指す。分らぬ所に有難味がある。「鰯の頭も信心から」であつて、勿體さうに取扱へば勿體が着く。此所に秘密の必要が無いではない。

併し實力を恃むものは、かゝる狀態にて滿足して居れぬ。何の爲めに秘密にするのか、自分で可笑しくなる。在りの儘に打明けて得意になつたりする。大統領として選擧される者は、餘り秘密を心掛ける譯に行かぬ。互に相許す仲間なる事を明かにすべき事情がある。得べくんば悉く打明けると云ふ調子を要する。併し國務の衝に膺つて居り、一から十まで打明ける事は出來ぬ。內外多端、迂濶と口が滑つて取返しの着かぬ事がある。矢張戰場に莅んだやうに、策略を秘密にするに傾く。けれども何の爲めに秘密にするか、人に惡い感情を與へずに諒解させる所に、特殊の能力が現はれる。奥齒に物の挾まつたやうな口吻は、大統領として禁物である。リンコーンは天性其邊に優れて居り、人が納得するやうに話しつけた。それでは無理も無い成程と思はずに置けぬやうにした。グラントは沈默を以て評判であり、容易に口を利かなかつたが、それは軍功を以て尊敬せられたので、初めから政治的能力に重きを置かれなん

だ。秘密を好むのでなく、事情を知るまいと思はれた。ルーズベルトは自ら秘密無しとし、他からも秘密無いかに思はれた。その餘りに開放するので、人が驚いたやうな事がある。友人と黨略上の事を話し合ひ、其友人は秘密であると思つたのに、彼は平氣で他に話し、友人が異逆と思ふたのにさうであつたかと驚いた事もある。何でも打明けて話すと云ふもの丶、全く秘密が無いとは云へまい。開放して居る内に、秘密を守るべき所は守つたらう。さう何でも話して國務を執行するのでは、如何に米國でも六つかしい。併し彼は比較的秘密の少いものに相違ない。住宅でも何んでも、一身上の事は絶對に開放して居る。幾分か誇大妄想狂の嫌ひあり、自ら英雄氣取りで秘密なんか必要無いと思ふ所もあらうが、又實際に多少尋常の大統領に優つた所がある。普通に秘密を保つ所を、秘密にせずとも濟んで行く。種々の非難を蒙りながら、愉快なる人物と知れ來つて居るのは、其邊の事が與つて居る。至誠國の爲めにし、至誠世界人類の爲めにし、我に秘密の必要無しとする所、割引して聽くべきにしても、少くとも面白味を感ずる。

　和製ルーズベルトの名ある後藤男も、開放を心掛ける所幾分か之に似て居る。脱線振りは其跡形がある。何でも秘密一點張りで置かうといふのと違ふ。云ふだけは云ふといふ調子に出掛けるのは、世間に受けられる處である。併し不用意に開放するのでなく、隨分考へて居り、時として考へ過ぎる。氣の毒な程心配する。自ら矛盾するの餘儀無い所もあらう。開放しながら秘密を保つに巧みなのは大隈侯である。後藤に比べて幾倍か開放し、何でも人に應じて旁々から話し懸けるが、それで秘密が無いのではない。あ丶喋舌り過ぎても困る、も少し考へて貰はねばならぬと云ふが、其邊は心得て居る。その喋舌

り過ぎるのは秘密を保つ所以と云ふても可い。尋ねれば何でも答へる調子であつて、要點に觸れぬ事が多い。一方に向つて云ふ所と、他の一方に向つて云ふ所と全然違ひ、出鱈目にも程があると憤つたりする者があるが、實は憤る方が智慧が足らぬので、大將先刻承知して居る。然し元老准元老が秘密にせねばならぬと思ふよりも、確かに秘密が少い。元老准元老は埒も無い事まで秘密にするに努める。努めるのは、努める必要があつての事である。實に彼等の地位を保つには、在りの儘に打ち明ける事の出來ないのが多い。矢張正體を匿して有難くせねばならぬ所がある。何人とでも話し合つては、箔が剝げてしまふ。其邊に大隈程力を恃まぬ。分を知つて居ると云へば云へる。箔の剝げぬやうに後生大事に引込んで居る。道が大隈は明治初年佐賀から飛び出して來て、伊藤、山縣等の上に位した丈け、何かの力を具へて居る。比較的開放するのも、それ丈け力有つての事である。今少しく要領を得るやうに開放したならば、一層力有ることを證明するけれど、それほどまでに行かぬのは仕方が無い。矢張彼は彼丈けである。併し他の何でも無い事まで秘密にし、秘密が洩れたとて大騷ぎするのに比べて餘計な心配の少いのを認める事が出來る。

元老准元老及び之に附隨した官僚は秘密一點張りである。秘密を以て萬事の秘訣としてゐる。桂公が、不言實行と云ふたのが、格言になつて居る。果して秘密にする必要があるかと言へば、多く習慣から來て居るに過ぎぬ。唯秘密に爲る事になつてゐると云ふ丈けである。之を改める程の見識も無く、力も無い。而して桂が眞に不言であつたか。桂はニコポンと評判された程、人を口說き落すに巧みであつた。普通に政府關係者が秘密にして居る所をば、偶々桂に尋ねるや、彼は君に限つて云ふといふ調子で、詳

々として說き出す。實に斯く〳〵の事情で已むを得ずして爲した事、面目無いが仕方が無かつたと云ふ。如何にも誠心より出て居ると聞え、成程と感心して去るのが常であつた。其邊は山縣公も如才が無い。彼は容易に人に面會せぬけれど、面會すれば頗る親切、尋ぬる事は諄々として答へる。秘密で云ふまいと思ふ處まで云ふを辭せぬ。其處で聽く者が成程と感心する。

割合に維新頃の時勢に育つた者は開放的に出る。餘り隱し立てせぬ。伊藤公もなか〳〵打明ける方であつた。何でも無い事まで秘密にするのは、元老の御機嫌を損ふとか上官の小言を受けるとか心配しての事であつて、屬僚が概ね其習慣になつて居り、元老及び上官が何とも思はぬ事まで秘密にするやうになつて居る。然し下手に口を滑らせては地位に關係するので、口を開かぬのが安全第一であらう。又事に由つては上官に對して同僚の手前何處までも秘密を守らねばならぬ事もある。今日の處、政府に居る者は或る程度まで民衆を敵と心得るの傾向があり、秘密にして籌を運ぐらさねばならぬと考へるのも無理は無い。彼等はさういふ風に育てられて來て居る。習慣に背く者があれば面倒が起る。先づ何でも秘密にするに若くはない。自分の爲めでなく、人の爲めとあつては、秘密を守るを美德とする。最も安心なのは能く秘密を守る人物と云はれるのは、跟形が無いではない。二代將軍秀忠の時、松平信綱が十一才で家光のお傅きをして居つた。秀忠の御殿の屋根に雀が巣を喰つて居り、家光は雛の子が欲しくて堪らぬ。信綱は夜中屋根に登らうとして滑つて落ち、秀忠及び御臺所が出て見て信綱を折檻した。信綱は實を云はぬ。秀忠は信綱を袋に包み、吊り下げて翌朝まで置き、之れに訊ねたが矢張事實を云はぬ。御臺所が密かに食を與へ、將軍に取做してやつと許された。信綱は終に實を云はなかつたのである。秀忠の云ふには、

あの調子で行けば一廉の者にならうと云た。實に後智慧伊豆として、三代及び四代の間に力を露はした。此邊で秘密を守るの、所謂「父は子の爲めに隱し、子は父の爲めに隱す」といふ處である。守るべきを守つた事になる。舊幕時代友人の口が滑べつた許りで、大事が破れた事がいろ〳〵ある。由井正雪の陰謀の破れたのも、丸橋忠彌が迂濶と口の滑べつた所からである。正雪は後忠彌と密議したのを悔いたといふ事であるが、陰謀をなすには絶對的に秘密を要する。武士は相見互、一度口より洩らした上は承知して貰はねばならぬと詰め掛けるのもそれである。秘密を洩らした以上、生命を賭するといふ事になる。博徒も仲間同志殿に秘密を守る。國定忠治が時々誰にも告げずに出て行く。子分が私かに後をつけて行つたが、其子分は死骸になつて發見された。忠治はその隨けて來たのを怒り、之を殺したのであらう。何人にも知らせる事の出來ぬ秘密があつたと見える。

　危險の伴ふ程秘密が必要になる。戰爭は最も危險の伴ふもの、延いて秘密を大切にする。實に戰爭程秘密の多いものはない。陸海軍省の書類は、何でも無いものまで秘密の印を捺してある。斯くまでせねばいよ〳〵の場合に秘密を保ち難い。實に戰場に於ては、唯敵のウラを搔き、マンマと之を欺くのを能事とする。けれども互に欺き合ふのは軍事の進歩せぬ間の事であり、現戰役の如く兵器が進歩して居ると、以前の如く敵を罔るのが六つかしい。幾十臺幾百臺の飛行機で、斷えず敵陣を瞰下して居る。寫眞でありありと寫し撮る。何處に何軍あり、何處に銃砲があり、重砲があると、一々分かる。山の後に隱れ、不意に顯はれるなど、容易に出來なくなつた。今は實力が第一で、兵が足りないと、何うする事も出來ぬ。運用の妙はあるけれども、以前のやうに敵を欺くのと違ひ、滿目の見る所で戰はねばならぬ。若將

棊と違ひがない、皆が見て居る。ペテンで戰ふ事が出來ぬ。何段と段が違つては、勝負が豫め分る。今は未だ十分に進歩せず、尙敵を欺く餘地あるが、漸次欺くの程度が減ずるであらう。最も秘密を重んずる軍事に於てもさうであつて、國内の政治なんか全く秘密が無い事にならう。國内の政治に秘密を重んずるなど以て外である。何人を敵とする心算であるか。國外に知れて不利益で無い限り、悉く人の知るやうにせねばならぬ。秘密ある處必ず腐敗がある。腐敗あれば國家の害になる。補缺選擧で各政黨が爭ひ、互に戰略を秘密にするのは、碁將棊に夢中になると見て許すべく、それで國政の爲めになると思へば大間違である。今日何分にも敵味方と分れ、秘密を守るのが必要になるけれど、之れは次第に改まると定つて居る。敵に對しては、味方の爲めに秘密を守るの必要がある。其秘密は必ず守らねばならぬ。けれども其敵味方の關係は畢竟何の狀態なるかを考へねばならぬ。甚だしく友人に迷惑を及ぼさねば、成るべく秘密を撤廢し、悉く開放すべきである。但だ玆に注意すべきは、開放とて自分の事を語るの、人に迷惑を及ぼす事である。人が尋ねれば自分の事でも語るが可い。尋ねもせぬに自分の事を語り、秘密が無いと思ふのは間違である。自分の事はさう人が聞きたがりはせぬ。或る事件に關して、眞相を得やうとするに外ならぬ。要するに眞實を求めるのである。要も無い時に自分の事を語るのは、開放でなく心得が足らぬのである。それはそれとして、他人に迷惑を及ぼさぬ以上、秘密無いやうにして然るべきである。

秘密の倫理

田中王堂

一

瀧田主幹足下

先月十日前後の事であつたと覺えて居ます。御社の高野氏があなたの命であるとて、お訪ねになりました。同氏のその時のお話に、『今年は、毎年七月十五日に發行する臨時號を「秘密と開放號」と云ふものにし、其れに關する記事を滿載しようと云ふ社の計畫である。就いては、あなたにも其れに因んで何か一つ文章を草していたゞきたい』と云ふのでありました。『秘密と開放號』！わたくしは、初め、この言葉を高野氏より聽いたときに、わたくしの聽き違ひではないかと幾度か自分の耳を疑つた程、この御計畫の餘まりに突飛であり、そして、（若し當時のわたくしの感じを忌憚なく申し上げることをお許しになるならば）、餘まりに輕浮であるのに驚いたのでした。

數多くある部下の雜誌記者の中で、夙に世人の趣味の向ふところの機微を捉へることと、記事の選擇と配合とをして特異の潤ひと光りとを有たしめることに於て卓絕した才能を有つて居るものと一般に認められて居るあなたの考案ではあるが、この御計畫だけに就いては、其れが、果して、どれだけの成功を贏ち得るか、どうかと云ふことが、わたくしには陰かに危まれたのでした。斯くして、（大きなお世話のやうではあるが）わたくしは自分の構想の可能性を考へる前に、編輯の成立の可能性を考へざるを得なかつたのです。この疑惑の黯雲の中に座して、是れまで、大抵の課題には、一度も引けを取らず、即座に應諾して、可なりに成績を擧げて來たわたくしも、今度のに關しては、應諾するの

に大分躊躇しましたのです。わたくしにして、三題噺に類したものを工夫することに滿足しようとするならば格別であるが、苟も、平生、わたくしの把持し、主張し、宣傳して來た學說、見地に憑つて、この論議に於て、嚴肅に事相を觀察し、透徹に其れの意義を究明して、哲學的に、文明史的に、或る效果を擧げようとするならば、其れは可なりに困難な事業であらうと考へたのであります。このために、御承知の通り、一日待つていたゞきました。そして、その間に於て、この問題に關して、わたくしの理會と、文章とが、現下に於けるわが文藝界と思想界とに如何なる種の貢獻を爲し得るか、現下に於けるわが同胞の品性と生活とに如何なる種の暗示と、啓發とを與へ得るかを、篤と熟考して見ました。(是れまで、わたくしは、如何なる問題を取り扱ふに方つても、まだ、一度も、先代人の足跡に追隨したこともなく、現代人の蠢動に附加したこともない、必らず、或る程度と或る意味とに於て、『新道開鑿』の見込みが立つて、始めて沈默を破つて來たことはあなたの優に承認されるところでありませう)、さうしたとこ、秘密の事實に就いても、他のあらゆる事實に就いてと等しく、世人は其れを實行して居る場合にも、若しくは其れを非難する場合にも、彼等は秘密なる事實が、如何にして人間の交際の中に出現したか、其れが過去に於て如何なる進化を經過して來たか、其れが現在に於て如何なる作用を滿たしつゝあるか、はた、其れが將來に於て(わたくし共の努力の感化の及ぶ限り)如何なる傾向に從はしめらるべきであるかと云ふことを考慮せずして、一方は無自覺に其れを實行し、他方は無反省に其れを非難して居るのであります。つまり、彼等は秘密と云ふ事實に關しては、まだ、些しも、其れを生活の組織の特質と、文明の進行の趨勢とに對照して、其れの意義を限定したこともないし、其れの價値を測定したこともなく、たゞ、本能的に、習慣的に、云爲して居るだけに止まつて居るのであります。然し、若し秘密と云ふことが、生活の中の一つの事實として儼として存在する以上は、出來るだけ速に、

出來るだけ自由に、聰明と同情との増加を努めることが、生活の改善と向上とを圖ることに取つて、最上の、否、唯一の道であると信じて居るわたくし共は、あらゆる事實に對すると等しく、秘密に對しても、一切の固陋と僞善と怯懦とを棄てゝ、現在の生活のはたらき振りを中心として、眞劍に、大膽に、合理に其れの眞實性を握まねばならぬと思ひます。

今、「秘密と開放」號をお出しになるあなたの動機は、よくわたくしに解かりません。そこには、いろいろの動機が含まれて居ることと想はれます。然し「現在の生活のはたらき振りを中心として、眞劍に大膽に、合理に、其れの眞實性を握ま」うとすることを其れの一つ、然も、其れの優なるものの一つとわたくしは考へたいのであります。何故ならば、若しさうでないとしたならば、最高の人生評論を標榜する一雜誌の臨時號の題目とする理由とするところに不十分であると思はれるからであります。其れは兎に角、わたくしとしては、こゝに、わたくしに固有なる考察と推斷とを試みるの餘地と要求とがあることを發見したのであります。是れ、熟慮の末、わたくしが「秘密の倫理」の題目の下に、秘密の起原と、作用と運命とを論議して見ようと決心したわけであります。

二

わたくしは秘密に關する考察を始めるに先きだち、この文章に於て論議される秘密の意味を限定して置くことが便利である、否、必要であると考へます。

一概に秘密と呼ばれて居るもの、呼ばれ得るものの中にも、(この論文の目的からすると)そこには、確かに、識別されなければならぬ二種があるとわたくしは考へます。一つは無智より生ずるものであります。他の一つは執意に依つて構成されるものであります。今、わたくしは、この識別が如何なる事實に基くかを説明するために、こゝに一つ例を取つて語つて見ませう。

わたくしが電車に乗るとする。そこに、一杯に乗り込んで居る人達の總べては、悉とくわたくしの知らぬ者ばかりであります。わたくしは彼等の生活と品性と

の内容の萬分の一、十萬分の一を、彼等の衣服と、言語と、動作と、表情とから、ぼんやり揣摩し得ることとの外、(多くの場合に於て、其れも當たることとのあるよりも、當らぬことの方が多いのであるが)、彼等の父母、生育、敎養、職業、來歴、思想、感情より進んで、今、彼等が何んな心配を以てどんな用事のために、何を考へつゝ、何を感じつゝ、何處へ向つて行くかは聊しも解からないのであり、解からう筈はないのがあります。是等は、悉とく、わたくしに取つて秘密であります。そして、今後、彼等とわたくしとの間に新たに特別の關係の生じない限りは、其等は永久の秘密として殘されるものであります。是れは、全然わたくしの無智より生ずるところのものであります。然し、若しわたくしが彼等の或る者に對つて、(さうする必要あつて)、彼れの姓名、住所、乃至、職業を尋ねた時に、彼れにして、其れをわたくしに告げることを避けたとすると、其等の事實は秘密としてわたくしにまで現はれるでありませう。是れは、彼れの意志に依つて構成されたものであります、(若し是等の二種のものに或る稱呼を與へることが多少でも便利でありますならば)、わたくしは、前者に心理的の秘密の稱呼を與へ、後者に倫理的の秘密の稱呼を與へようと思ひます。

是等二種の秘密の間に必然の關係のあることは明かであります。そして、思索を進めるに隨つて、この關係の案外に密に且つ深いことが知れて來ます。(今、この關係に關して、わたくしは其れの特殊の場合に立ち入り、そこに存ずる、若しくは、生じ得る微妙の事情を精細に叙説して居る暇を持つて居りません。其れの追究の如きは、讀者自身が、その經驗と想像とに據つて、擅にするに一任して置かねばなりません。)が、其れの兩極端を取つて、見ただけでも、この關係の性質は髣髴されます。假りに普遍知(universal vision)なるものが實現される期が來たるとすると、その時は、一切の心理的の秘密は無くなると同時に、一切の倫理的の秘密も構成され得なくなりませう。又、其れに反して、人間の交際に何等の知識も成り立ち得ないもの

とすると、彼等の一切の云爲は悉とく心理的の秘密となるがために、如何なる場合も悉とく倫理的の秘密を構成する機會を與へることとなりませう。是等の空想を兩極端として、心理的の秘密の增減が倫理的の秘密の增減に必然の關係を有つことの心理は、容易に推定されるのであります。

然し、是等二種の秘密は それ の意義と作用とに於て、同一のものではありません。例へば人間の性情よりして、或る一人の精神生活と他の一人の精神生活との間に存在する外存性と差別性とは、如何なる事をしても、決して全く撤することの出來ないのみならず、尠しでも減ずることも出來ないものである以上は、どんなに親しき友人や、どんなに溫かき愛人の間と雖も、多種に、多量に心理的の秘密は念々、刻々に相續して行く外はありません。が、斯くの如き人達の間に於ては、倫理的の秘密は殆ど絕無に近かき 域にまで 達することとはあながち不可能の事ではありません。心理的の秘密は、未來永刧に、今日とは大して違はない體裁に存續するでありませう。然し、倫理的の秘密は特殊の團體に限つては無論の事、人類一般に取つても、だんだんに減少して來た通り、又、是れより先きます／＼減少し行くであらうと想像することは決して架空のことではありません。そして、本論の主として題目とするのは、後の種に限られるのであります。限られねばならぬのであります。

三

瀧田君、以上を序言として、わたくしは、是れより、自然に、容易に、秘密そのものの考察に入ることが出來るやうに思はれます。

あなたの御承知の通り、人間が近世生活に入つて以來、いろいろの制度や、信仰や、情操は、驚くべき程度にその價値の轉換を閲しました。然し、其等の中でも、秘密は其れを閲したものの最優なるものの一つであります。秘密に關しての價値の轉換の性質を、方向を、一言にして云つて見れば、其れが低減の一方に趨せて來たことであります。

　過去の時代に於ては、生活の或る部分、たとへば、政治のやうなものに於て、秘密が重要なる原理、又は、方針として、總べての政家法家に依つて、のみならず、多數の哲人義人に依つてさへも、如何に尊重されて居たかは、マキアベリの"The Prince"に行くの手數を煩はさずとも、孔子の語つた「民可使由之不可使知之」の一句に徴するだけで、この間の消息は十分に窺はれるのであります。近世に近づき、人間の生活の中に、理會と、同情と、科學の精神とが增して來るに隨つて、秘密を實行しなければならぬ必要と、實行し得るの餘地との減じて來たことは事實であります。尠なくとも、さうなつたと見られる程度に、秘密の性質が變はつて來たことは事實であります。

　されば、(こゝに、わたくしは、如らく觀察をわが國の狀態だけに限るとして)、わたくし共が、到頭、逢著する沒批判な告白文學の流行と、無思慮な政治開放の要望との如きも、確かに、この一般傾向の一指標であるとすることが出來ます。何故ならば、是等のものの多くは、(不幸にして)、本能の衝動としてはたらいて居るのであつて、理性の判斷としてはたらいて居るのではありません。が、そこに、過去の生活の様式の產出した種の秘密と、現在の生活の理想の要求する種の秘密との間には、其れの有すべき質と、其れの行はるべき範圍との二點に關して、大なる扞格があつて、畢竟するに是等のものの横溢は(尠なくも、其れの志向に於てだけは)この扞格の存在から生じ、現に生じつゝある不安定の情緒を調節しようとする欲求の發動と觀なければならぬからであります。そして、其れが合理的に、反省的に、改造の相對性の形を取らないで、不合理的に、沒反省的に、革新の絕對性の形を取つて居るのを見るにつけても、わたくしには、この扞格の極めて大なるものであることが容易に會得されるのであります。

　然し、まだ、一度も明確に、秘密を人間の性情と現代文明の趨勢とに參照して、其れの起源と、作用と、進化の經路との意義を考覈したことのない人達が、或は、

實行でなくして單に情操であり。憧憬たるに止まつて、まだ、意志とはなつて居ないこの宣言を一轍に受け取り、皮相に解釋して、現代の生活に於ては秘密の構成は(如何なる場合に於て、如何なる目的のために行はれるも)、無條件で惡である。秘密の解放、若しくは、其れの暴露は、(如何なる場合に於て、如何なる結果を齎すも、)無制限に善であると、無分別に、不聰明に想像し、先斷することのあらんかを大に憂ふるものであります。若しわたくし共にして、斯かる幼稚な、單純な格言を揚言するだけに滿足せず、併せて、其れを實行しようと實際に企てたならば、さうすることに依つて、現にわたくし共の營んで居る文明は尠しでも助成されるでありませうか。わたくし共の現に送つて居る生活は、眞に、破滅を以て脅されることはないでありませうか。

今日に於ける程、秘密の不評判に陷り、其れの解放、若しくは、暴露の喝采を得て居る時代は他にありません。今日に於ては、どんな僞善者にしても、低能者にしても、(一方は、何人の幸福に對しても、責任を分たず、他の一方は、其れに就いて、理會を持たないために)秘密の問題に關して、よく、容易に世人の稱賛を受けることを心得、そして、其れに成功して居ります。何んとならば、彼等がさうするのには、たゞ、一般の風潮に追隨し、附和して、現に不評判に陷つて居るものを更に不評判に陷いれ、既に喝采を得て居るものを更に喝采するだけで十分であるからであります。

然し個人の幸福と、併せて、團體の幸福の保障と增加とを生活の最大要件として居る者に在つては、秘密の問題に對して、決して、そんな不誠實な、不眞面目な態度を取ることは出來ないのであります、出來ない筈であります。

四

瀧田君、あなたは、一個の哲學者、若しくは、評論家として、わたくしの力量と特徵とを可なりによく御承知の筈です。人生の、社會の諸事相の究明と評價とに關して、是れまで、わたくしが如何なる見地に據り、如何なる態度を取つて來たかを可なりによく御承知の

答です。わたくしは、異なる興味に從ひ、異なる題目に應じて、平生、自分の把持し、主張し、宣傳しようと志して居る主義に、學說に、隨時、隨處に、象徵主義、作用主義、哲學主義、乃至、具體理想主義等の名稱を與へて來ました。然し、要するに、是等のものの統一となり、是等のものの動力となつて居つたものは、終始、單一でした、同一でした。わたくしは、こゝでは端的に其れに實驗主義の名稱を與へませう。

つまり、わたくしの實驗主義の特徵は、どこまでも、忠實に、生活のはたらき振りを觀察し、記錄する結果として、そこに、其れを組織するあらゆる要素、又は勢力が自づから如何に協同し、如何に一つの階統を形造るかを見出だした上、この階統を出來るだけ自然に、出來るだけ親切に醇化することに依つて、一層明瞭に、一層適確に、生活のはたらき振りを理會し、鑑賞しようとするところにあるのであります。

わたくしの現實主義は生活に卽します。生活に卽することの外に、何物をも知りません、爲しません。然し動的に卽して、靜的に卽しないために、時としては、或る勢力、又は、要素の價値を變更して居るやうに見えます。

然し、其の實は、たゞ、其れをして、その本來の價値の發達を遂げしめて居るのであります。斯くして、わたくしの實驗主義に在つては、觀察と改造とは殆ど同一活動の繼續であることになります。十分の意味に於ける觀察は、必然に、改造でなければならぬことになります。改造にまで進んで行つて、觀察の志向は始めて完成されたことになります。

今、あなたは、斯かる主義、又は、學說を道具として生活の統一と評價とを圖つて居るわたくしに對つて、秘密の事實を問題として提供されたのです。あなたはわたくしより、如何なる種の答案を期待して居られますか、如何なる種の答案を期待して居られませぬか。

昨日、わたくしは、あなたの社のお送り下すつた中央公論七月號を受け取りました。そしてそこに挿まれてこの臨時號の內容に關する豫告を見出だしました。

その文書の中に、「内政に、外交に、家庭に、多くの場合に於て、「秘」、密は腐敗と陰險と暗黒との源泉にして、之を「開放」して人生をあらゆる方面に於て、公正と光明と和樂との發現たらしむるは、是れ近世文明の特徴の一にして、殊に現代人の最も痛切なる要求たるを疑はず」との一句がありました。わたくしは、あなたの今度の計畫には十分の敬意を表して居ります。然し、實驗主義を標榜する一個の哲學者、若くしは、評論家として、飽くまでも現存の事實を認識し、尊重しなければならぬところからわたくしは、あなたのこの觀察には反對しなければなりません、そして、其れを悲しみます。

一體、秘密なるものは、通例、わたくし共が無雜作に考へて居るよりも、遙かに廣き範圍に存在し、遙かに雜多な動機を以て實行されて居るものであります。固より、惡人は其れを惡用して來ました、現に、して居ります。然し、其れと同時に、善人も其れを善用して來、現に、して居るのであります。あなたは、「多くの場合に於て」と云ふ制限辭を附せられました。然し實際のところ、其れが善用される場合が多いか、惡用される場合が多いかは、確かに十分の吟味を遂げた後になつて、始めて解かれ得る疑問であるとわたくしは思ひます。わたくし一個の觀察と、推測とからすれば、其れが善用される場合は、其れが惡用される場合に比して遙かに多いとしなければなりませんのです。そして、上古、中古の時代に方つて、自己の利益のために、互に反噬と、陷穽とを事として生活して居た人々の間に在つては兎に角、苟しくも現代に於て、現代人の理會と、責任感とを以て生活して居る人々の間に於ては、わたくしのこの告白は彼等の實驗と推測とからして想應の裏書きを得ることであらうとわたくしは信じて居ります、わたくしは重ねて力説します、現今に於て、(多分人間の根本性の全變せざる限りは、永遠の未來に到つてもさうであらうと想はれるが)秘密は實行されて居ります、そして、其れは、惡人に惡用されて居ると等しく、或は、其れにも勝りて、善人に善用されて居ります、

と。(何故、さうなければならぬかは、わたくしがこの文章を草するに到つた中心興味の一つとして、わたくしが、今、直に叙説しようと志して居るものであります。)若し一般世人にまで、わたくしの上の言明が尠しでも奇異に聽えるならば、其れは彼等が公正に秘密の實際のはたらき振りを考察したことのないところから、一向に、秘密は利己的の目的のためにのみ構成されるものである、決して、其れは利他的の、若しくは、公共的の目的のために運用されて居るものでないと定めて居る先斷より、其れの善用されて居る場合と、惡用されて居る場合とに從つて、同種のものに對して、大した理由もなく、異名を與へて居るからであります。

五

秘密は、其れの作用の上から、(虐待、竊盜、殺人等のやうな、謂ふところの生活の、若しくは、社會の疾患から峻別されて)、他の制度、敎化、習慣等と共に類別さるべきものであります。隨つて、其れの價値に關する批判の標準は、其れの原理と目的とに於て、是等の價値に關する批判の標準と全然同一であるべきものであります。言ひ換へれば、批判は秘密の存在に關してなさるべきものではなくして、其れの性質と運用とに關してなさるべきものであります。秘密は人間が彼れの性情の特徴と制限とに鑑みて、宗敎や、科學や、戰爭のやうに、彼れの幸福を保障し、増進する道具の一つとして工夫したものであります。されば、秘密の價値を批判するに方つて、批判の對象となり得るものは、其れの That でなくして、必然に、其れの How でなければなりません。極々、追究を進めて行つたところで、其れの What に限られねば何等の意味をも持ち得ないことになります。

是れまで人間に工夫された生活の道具にして、其れが利用されると等しく、惡用されなかつたものが一つでもありますか。實際の跡に就いて觀ても、尠しくパラドックスのやうではあるが、効用の大なるもの程、(例へば、政治や、宗敎のやうに)、其れが惡用された

範圍も亦廣くあつたと云へるのであります。なる程、多くの罪惡が秘密の中に計畫されたことは事實であります。然し、其れと同時に、多くの善行、大計が更に秘密の中に胚胎されることを必要としたこと、尠なくも、必要の順序としたことも事實であります。あなたは、この事實あるのを悲しまれますか。其れならば、あなたは、秘密の存在を悲しむに先だち、其れを必要とする人間の性情を悲しまれなければならぬではありますまいか。

わたくしの考へるところでは、人間が或る種の（無論、或る種のです、決して總べての種のではありません。そして、何が或る種のものであるかは、獨り、當の行爲者の聰明と、善良とが判斷すべきことであります）、行爲をなすに方つて、秘密が解放より一層多くの價値を有つて來るには、時としては、其れが絶對の價値を有つて來るのは、

一、今日生存する個人間に、若しくは存在する團體間に利害の矛盾のあること

一、今日生存する個人間に睿智の相違のあること

の二大事實に歸することが出來ます。

是等の二つの事實に憑つて構成される秘密の外に、羞耻の本能より生ずる秘密も多分に人間の行動を支配して居ることは事實であります。そして、是の種のものも獨立して、極めて面白い題目をわたくし共に提供します。然し、こゝでは、この論文の意趣と、精神とからすれば、是等二つの事實を以て、人間に依つて秘密の構成される最も重要なる理由として置いて差し支へありません、否、さうすることが賢明なる道であります。

わたくしは、反省された、即ち、嚴密の意味に於ける秘密の構成される理由を、個人若しくは、團體の間に利害の矛盾のあることと、個人の間に睿智の相違のあることとの二つの事實に歸しました。善人が善行をなすにも、惡人が罪惡を企てるにも、人生に儼として存在する是等の二條件より來たる不便、若しくは、障碍を考慮する結果として秘密は構成されるのでありま

す。是れは、（こゝには、その經緯を詳說する遑を持たぬが）、公事に關しても、私事に關しても、道理は一つであります。一つ例を現下の出來事に取つて見ませう。

今次の世界戰亂に對して、米國大統領・ウヰルソン氏が取つた態度は、世界の識者の大數から、二十世紀に於ける最大の哲人政治家、人道主義の最高の使徒たるの歎美を捧げられて居ります。彼れの宣戰の布告、その他、隨時、彼れの發して來た敎書の數々は、彼等に依つては、直ちに、永久に互つて「平和の福音書」として尊信されて居るのであります。公明正大なること、彼れの如きは容易に見出だされ得ぬものと思惟されて居ります。其れならば、公人として、然かも、この一事件に關聯して、彼れには秘密はありませんか。秘密を構成することの義務はありませんか。苟も彼れにして、政治家として、何等かの事を成就しようとするならば、彼れには、二種の秘密を構成し、保留するの義務があると、わたくしは信じます。さうすることは、彼れに取つて最高の德義となるとわたくしは信じます。

其れならば、是等の二つとは何んですか。云ふまでもなく、其れの一つは、敵國獨逸に對する戰略上の秘密であります。も一つは、自國の民衆を統率して行くための政策上の秘密であります。前者は、利害の矛盾の存在から來たるものであつて、後者は、睿智の相違の存在より來たるものであります。

是れは、ほんの一例に過ぎません。然し、人生到る處に、利害の矛盾と、睿智の相違との見出だされる今日に於ては、是れに類似の事例は、公事に關するものと、私事に關するものとに論なく、生活のあらゆる部分から抽出することが出來るのであります。そして、是等の事實の存在する間は、秘密の考慮は、實に生活の一要訣として、永く殘らねばならぬこととわたくしは信じて居る者であります。

實に、わたくしは、今日秘密の工夫と保留との必要とされる主なる理由は、一方には個人と併せて團體の間に利害の矛盾があり、他方には個人の間に睿智の相

違があるためであると信ずるものであります。されば、是等の狀態を改變せずして、たゞに、生活より秘密の掃去を望み、そして、そこに、開放の普及を期するのは、其れに自由と幸福とを齎す道に於て、決して當を得たものとわたくしは信じない者であります。秘密の存在に依つて、共同の利益が毀つけられ、意志の疏通が阻てられることは事實であります。然し、利害の矛盾をして、睿智の相違をして、今日、其等が在るまゝに在らしめながら、一時に、絶對に、秘密を開放するとしたならば、その結果はどうなるとあなたはお考へですか。弱者は强者の肉なり、衆愚の少賢を壓することに於て、何んの制限を見ざるべきは、あなたの容易に逆覩し得るところでありませう。されば、或る階級の人々よりして、現代文明の特徴の指標とされて居る討議の政治も、國民外交も、わたくし共の進路を暗示する理想としては、至極結構のものに相違はありませしが、わたくし共の現狀を支配せしむべき實行としては、是れほど間違つた、そして、危險なものは他に多くはあるまいとわたくしは思ふのです。

瀧田君、あなたは、この點に就いて、如何にお考へになりますか。

否、あなたのお答を竢つまでもなく、平生、極力、秘密を主義を攻擊し、開放主義を皷吹して居る議會政治の實行が、すでに、十分に、彼等の口說するところのものゝ、以て憑據するに足らざることを證明して居ります。そして、是れが、わたくしの問に對する恰好の答となつて居ります。

彼等は、政黨員は、自黨の政策を決するのに如何なる方法に依つて居りますか。彼等は他黨と選擧の輸贏を爭ふのに、如何なる方針に依つて居りますか。自黨の政策を決する場合に於て、先づ秘密に其れを少數の幹部の手に於てするのは、彼等であります。選擧に方つて、他黨と輸贏を爭ふ場合に於て、秘密に、暗中飛躍を試みて居るのは、彼等であります。開放を主張して居るのは、誤れる彼等の理論であります。秘密を實行して居るのは正しき彼等の本能であります。

この一事に依つて觀ても、人生に、社會に、利害の矛盾と睿智の相違との存在する間は、秘密の構成と保留とは止むを得ざるものであるの理が可なりに明晰に、有力に、證據立てられて居るやうに思はれるではありませんか。

六

以上の所説の本旨をあなたは、どうお取りなりますか、讀者はどう取るであらうと、あなたはお考へになりますか。あなたは、彼等は、以上の所説よりして、わたくしを單純に、頑冥に、秘密の謳歌者であつて、開放の呪咀者であるとお取りになるでせうか、取るでせうか。若しさうだとしたならば、其れは飛んだ見當違ひです。わたくしは、たゞ、正當なる秘密の主張者であつて、迂愚なる開放の非難者であるだけです。

わたくしは實驗主義者です、自由思想家です。實驗主義者であるがために、自然に、自由思想家となつて居るものです。實驗主義者の特徴として、無論、わたくしは現實に即します、現實を尊重します。然し、獨り、徹底的にと云ふ意味に於て、其れに即し、其れを尊重するのです。わたくしはこの見地よりして、正直に秘密の存在を認識し、忠實にその理由を説明しようとしただけです。

わたくしは、現に、個人の間に睿智の相違があり、個人の間に、若しくは、團體の間に利害の矛盾のある限り、或る目的のために、或る範圍の內に秘密の工夫され、運用されることの必要なる理を説明しました。生活が、社會が、このやうな狀態にある間は、無制限に秘密を排斥し、無反省に開放を歡迎することの、わたくし共の自由と幸福とを增進せずして、反つて、其等を毀損するの理を説明しました。わたくしの爲した事、爲さうと志した事は正しく是れだけであります。

わたくしは、永久に互つても、現に、個人、若しくは、團體の間に存在する矛盾を全然調和することは至難であると信じて居ります。特に、現に、個人の間に存在する睿智の相違を平等にすることは不可能であると信じて居ります。この限りに於て、秘密は永遠に、

要とされるとわたくしは信じて居ります、然し、同時に、わたくしは、是れまで人間が閲歷して來た經路と、成就して來た事績とに徵して、利害の矛盾と、睿智の相違とは、將來に於て、無制限に變化して行くであらうと云ふことを信じて居ります。隨つて、秘密も無制限に變更されて行くであらうと云ふことを信じて居ります。そして、變化にしても、變更にしても、其れは、主として質に關したもので、量に關したものでないことだけは明瞭であります。(專制政治と代議政治との差別は運出の上にあるのであつて、原理の上にあるのではないことに氣付かなかつたり、悲劇の要素は、だんだんに社會から、その跡を絕ちつゝあると想像したりして居る俗衆は、或は、この變化と變更とは、共に、量に關するのであるのと誤認するの結果、この事實は、末來に於て、利害の矛盾と、睿智の相違と、秘密の構成との、等しく斷滅に歸することを暗示するものと速了するかも知れませしん。が、實際のところ、尠しも、是等のものの斷滅を意味するものでなくして、たゞ其等の組織の轉換を意味するに過ぎないのであります。

然し、其れがさう成ることに依つて、(其の實質は、『朝三暮四』に類したものであつても)、苟も其れが、尠しでも、人間に自由と幸福との增加を齎すものならば、實驗主義者たるわたくしはこの傾向の眞相を正視し、其れの本流を精察して、其れの改整と醇化とを圖つて行かなければならぬのであります。

善や、眞理の意義は、靜的に、存在的に觀照すべきものではない、動的に、作用的に、改釋し、改整して行くべきものであるとの信條を以て生活して居るわたくしは、秘密の意義に關しても、同一の覺悟を以て生活して居ります。

七

瀧田君、こゝまで、わたくしは秘密の作用を論議して來ました。是れより、わたくしは尠しく其れの告白の效果を考察して見たいと思ふのであります。さうして、始めて、わたくしは當初、あなたに依つて課せ

られた任務の全班を果したと云はれ得るのであります。

秘密、そのものを論議して居た時には、わたくしは其れの正用の側面を力説しました。こゝに、秘密の告白を考察するに方つては、わたくしは其れの誤解の側面を指摘して見たいと思ひます。わたくしは孰づれの場合に於ても、さうすることに依つて、是等の問題に關して、最もよく俗見を破ることが出來ると信ずるからであります。

わたくしをして、秘密の告白を一つ研究の題目として見たいと思はせるやうになつた興味は、秘密の告白、そのものに、果して、道德的價値が含まれて居るか、どうか、若しさう云ふものが、含まれて居るとしたならば、其れは、如何なる意義、又は、關係に於てであるかと云ふ一點に集中されて居たのであります。

當面の問題に至密の關係あるものとして、わたくしには、豫め、罪と呼ばれる事實の性質をざつと說明して置く要があります。

わたくしは、廣義に罪を解釋して、『其れは現在の自己が正當と承認することを欲しない種の彼れの過去の行爲に對して、現在、彼れが持つ意識である』として置きませう。若し罪がさう云ふものであるとすると、其れは、何人と雖も、何時か、何處かで、實驗したことのある最も普通な經驗であります。然し、こゝに、わたくしが下した簡單な、或は、不完備な定義からしても、罪の中には、互は反撥する二つの異なつた意識の含まれて居ることが明らかに見出だされます。其れの一つは、其れが、たとひ過去に於て爲されたものであるにしても、どこまでも自分のしたものに相違ないとして、其れを『我』の一部として承認しようとするものであります。も一つは、其れが現在の自分からすれば醜惡なものと見えて來たがために、自分の尊嚴にふさわしからず見えて來たがために其れが『我』の一部たることを否認しようとして居るものであります。そして、この不思議な二重自覺の特徴は、一方が否認しようと苦悶すれば、するほど、他の一方は、ます〳〵、

是が非でも其れを承認させようと强壓するところにあるのであります。罪が觀照の對象として、或る人々に取つて、一種の恐ろしい、然し、美しい魅力を持つて居るのは、全く其れの成分となつて居るあの二重自覺の爭鬪から來るのであります。

然し、この二重自覺は、當の人の精神生活が如何なる過程にあることを暗示するものですか。其れは、過去に遂げた行爲の意義に依つて、自己の改造は始められようとしては居るが、其れは、まだ、實行の手順にまで達して居らないことを暗示するものです。そこに行はれようとして居る自己の改造は、知力の方面からすれば、なほ形式的、(formal)のものに止まつて、まだ、現實的(actual)のものにまで進んで居ないと云ふことになり、感情の方面からすれば、其れは、なほ、情緒的(sentimental)のものに止まつて居て、まだ、情意的(emotional)のものになつて居らぬと云ふことを暗示して居ます。自己の改造も、この幼稚な段階に在る間は、自己の一部は舊態に執着して居ります、そして、他の一部だけが更新に憧憬して居るのです。斯くして、自己は分裂し、抽象的となつて居ります。秘密を告白するの其さうすることは壓迫と、興味と、さうすることを回避する氣分とは、自己の改造が、この段階にある間に起るのです。謂ふところの告白文學は、この矛盾せる精神狀態の所產であります。

數多くある宗敎の中で、最も賢く感情の微妙なはたらきを利用することに依つて、生活の改造を圖つて居るのは基督敎が一番であります。然し、基督敎は感情と、主觀の評價との魅力を信じ過ぎた自然の結果として、智識の力量と、客觀の條件とを輕んじ過ぎた嫌があります。この意味からして、基督敎はあらゆる宗敎の中で、最も「心理的」であるとも云へるし、同時に最も「非心理的」であるとも云へるのです。其れが罪の告白に法外な、殆ど不合理に近い價値を認めて居るのは、たしかに、其れが「心理的」であり、同時に「非心理的」であることの證據であります。

救極の理論と共に、罪の告白の實行は、基督敎が人

間の性情に關して、實に驚くべき省察を有つて居ることを證明します。一方に於て、如何に罪深き者でも、一度、神に對つておのれの罪を悔ゆる時に、神は、よく、彼れのために、その一切の罪を拭却することが出來ると說くと同時に、他方に於て、衆人の前に立ち、緣を舊き生活と絕ちて、勇ましく、新らしき生活に入ることを習はしめた事には、實に驚歎すべき智慧が含まれて居つたと謂はねばなりません。

然し、罪の自覺だけでは、罪の自覺の告白だけでは、生活の改造には不十分です。彼れが現に有てる性格は長い間の習慣と生活狀態とに依つて作り上げられたものです。されば、其れの表現たる彼れの生活の改造には、やはり相應に長い間に亘つての努力も必要です、智識の運用も必要です。

精神生活が健全にはたらいて居る時は、感情、卽ち、主觀的評價は必らず知力、卽ち、客觀的條件に隷屬して居るべきであります。たゞ、其れが不健全の狀態に陷つた時にのみ、前者は後者より遊離して、僭越にも擬似存在の形を取ることになります。されば、今、主觀的評價たる罪の自覺や、告白が客觀的條件たる生活の改造より獨立して、自足の中心を形作らうとするならば、是の事實が精神生活に及ぼす弊害は大なるものであるに定つて居ります。この自然の結果として、妙しくパラドックスのやうには聽えようが、罪の自覺や告白に餘りに熱中する者は、(彼れは意識しての上の僞善者でないにしても)、反つて、生活の改造に忠實な者の中に多いと云ふことが云へます。斯かる人物の最後はたゞ精細なる到徹した罪の鑑定家ヂレッタントとなつて了ふのであります。

基督敎は其れの唱道する道德の「內的」なることを誇りとして居ります。然し、わたくしは、其れが、もつと「外的」でなかつたことを大に惜しむ者であります。

レスリイ・スチイヴンは嘗て「自敍傳」と題する論文を草して、當時、世間に流布されて居た種々の自敍傳に就いて廣汎な觀察と透徹した評言とを費しました。彼れは、其れの冒頭に於て、「自敍傳は小說の一種であ

る」と喝破して居ります。「世の最後に到り、喇叭の聲は天地の隅々まで鳴り渡つた時に、自分は一卷のこの書を手にして神の前に立つてあらう。さうして、「自分は斯くの如き者であります、斯くの如く、自分は生活しました」と叫ぶであらう」と云つたルッオの「懺悔錄」にさへ、故意になる虛僞と誤謬とが幾多見出だされると云はれて居ります。して見ると、スチイヴンのあの大膽なる宣言の中にも多大の眞理が含まれて居ると謂はねばなりません。

司馬光は嘗て或る人に語つて、「自分は是れと云つて、何も、人に優れたところはない。若し一つあるとすれば、他人に對つて語ることの出來ないものを、一つも有たないことが、其れである」と云つたさうであります。然し、エマソンの考察に據りますと、「如何に完全なる人格とし、莊嚴なる品性とし、完全なる人格として、衆人の崇敬、歸依の的となつて居る稀代の英雄や、偉人の誰れ、彼れにしても、若し彼れにして眞に自分の身の上を省察したならば、自分だけの知つて居る缺陷に對して忸怩たらざるものは、恐らく一人としてあるまい」と云ふのです。斯くして、司馬光が一つの秘密を持たぬことを聲言して居るのに反して、エマソンは（間接ではあるが）彼れが秘密を持つこと、持つことの有り得ることを認容して居るのであります。わたくし共は、どちらの意見に一層の信を置くべきでありませうか。わたくしとしては、是等兩人の告白に就いて、エマソンの謙遜にして、正直な告白に一層の信を置くものであります。實に、わたくしは、そして何人と雖も彼れの一生に亘つて、自分の云爲を、嚴密に、誠實に、吟味するならば、必らず、わたくしのこの意見に贊同を表するであらうとわたくしは思つて居るが）この世に於ては、善人にしても、惡人にしても、はた、大人にしても、小人にしても、一人として、自分こそは、一個の秘密も藏しないと云ひ得るものはないと斷言します。又、秘密の一切を告白したと云つて居る誰れにしても、眞に、何物をも殘さないで、其等を告白し盡したと云ひ得る者はあるまいと推測します。

是等の事實と、推測とからして、稀有の例外はあるにしても、一般の眞理としては、最も深刻と見られ、最も眞實と見られて居る告白にして、必らず、或る事實の誇張と共に、或る事實の脱落のあるは免れません。之れを要するに、總べてが「小說の一種」に過ぎないことだけは明瞭であります。事實さうであるとすると、秘密の告白の人生文書としての價値は今日一般に想像されて居るよりも大分に尠ないことは明らかです。

然し、「人生文書」として、秘密の告白の價値を論じようとするのは、決して、こゝであたくしの目的とするところのものではありません。わたくしの目的とするところは、生活の改造に關して、其れの有する感化と效果とであります。

さきにも、尠しく言及したやうに、初め、生活改造の方便として、告白を工夫した基督敎が、すでに、其れの利用を誤つて了つたのでした。そして、其れは、ほんの生活改造の準備の一つに過ぎないのに、其れを生活改造、其のものであると錯認したところに在つたのです。今日、秘密の告白をして居る人々の中には、他の點に於ては、全然基督敎の敎へるものとは別種のものを持つ者の多いに拘らず、獨り、告白の價値に關してだけ、極めて柔順に基督敎の迷信を受け取つて居るのは一體どう云ふわけでせうか。

秘密の告白は、如何に深刻に、如何に頻繁になされても、其れだれでは生活改善の方便として何等の道德的價値はないのであります。然し、世の中には秘密さへ告白すれば、過去に於て、彼等が犯した一切の罪科は消滅するものであると（何の根抵も、證明もなく）、妄信して居る人々が寡くないのであります。然し、わたくしには、さうしただけでは彼等の罪科は、決して消滅しないかと云ふことを明らかにし得る一つの試驗石があります。其れは他ではありません。その後に於ける彼等の品性と生活との狀態であります。斯くして、彼等は幾度か同じやうな告白を重ね、幾度か同じやうな罪惡を繰り返して行くのであります。

こゝに、甲乙の二人があります、そして、是等の二

人ともに、過去に於て、殆ど同じやうな罪惡、又は、過失を犯しました。(暫らく、さう假定しませう)然るに、甲は其れを告白するに拘らず(或は一層適切に眞理を語れば)、否、さうするがために、實際に、彼れの生活の改善を圖かることを怠ります。之れに反して、乙は告白が過去に於ける彼れの罪科を拭却するに効果のないことを信ずるがために、念々、刻々彼れの生活改善に努めて居ります。是等兩人の中、どちらが、一層多く自分の責任を感じて居る人ですか。どちらが、道德上、一層多くの價値ある人ですか。

わたくしは、決して生活の改善に秘密の告白を眞に必要として居る人々に對して、其れの價値の有無を爭論しようとして居るのではありません。たゞ其れに不合理の價値を置く結果、何人に在つても、生活の改善は、必然に、秘密の告白より始らねばならぬ、さうしない處には、いかなる意味に於ても、如何なる程度に於ても、生活の改善のやうなものの實現されることは、全然、不可能であると主張する獨斷論者を非難しようとして居るだけであります。

八

「往て再び罪を犯す勿れ。」是れは、當時、ユダヤに於て、或る罪を犯したと云つて、彼れの前へ連れ來られた女に對つて、基督の語つた言葉であります。その時、彼れは、自分の態度を說明して、「我も爾の罪を定」と語つては居ります。然し、その實、彼れは、さきの言葉に依つて、啻にあの婦人の罪に關してのみならず、あらゆる種の罪に關して、最も賢明なる、最も公正なる判決を與へて居たとわたくしは考へます。何故ならば、或る人が或る罪を犯した時に、其れに對して、彼れより要求され得る最も公正なる賠償は、その罪を再たびしないだけに、彼れの品性を改善することであらねばならぬからであります。近世に於ける刑法は、悉ごとく、この精神の上に建てられて居ります。プレトオの意見に從へば、善人の善行に對する眞の報酬は、彼れが善を爲し得ると云ふことであました。是れは、表裏の相違こそあれ、再たび同じ罪を犯さな

いことをその罪に對する最適の賠償と考へた基督の意見と、全然、一致して居ります。

然し、今日に到つても、過去の行爲と、其れに對する賠償とに關して、世人の理會と判斷とは、あの場合に於て、基督が示したレヴヱルにさへも達して居りません。之れがために、現に、世の中にどれ程多くの無益な苦悶と、不公正な非難が生ずるか解かりません。

この事件に關して、世人の一般に懐いて居る誤謬の淵源は、過去に於て、彼等が一度爲した行爲は、決して、改修も、改造も出來ぬものである、其れは、その當初の形のまゝで、一つの dead weight として、永久に生活を壓し付けて行くものであるとする空想であります。然し、彼等がこのやうな空想を抱いて居るのは、彼等が傳説に囚はれて、些しも端的に生活のはたらき振りを觀察することをしないからのことであります。

現在の行爲は悉とく過去の行爲の繼續であります。或る人が、或る罪を構した時、其れから以後の彼れの行爲は、その罪の變形を、其れの成分の一つとして居るのであります。されば、彼れが現在の生活に對照して、さきの罪の意義を反省し、其れを繰り返さないほどに自分の生活を改造すれば、この事績其のものが、すでに十分に其の罪を賠つて居るのであります。否、わたくしの考へるところでは、どうしても、是れに勝つた、是れ以上に公正な賠償と云ふものは有り得ないやうであります。然し、悲しいかな、このやうな、簡單な、平明な事實が、まだ、世人の一般に解かつて居らないのみならず、彼等を指導する職分を持つた宗敎家、文藝家等の或る者にまでも解かつて居りません。わたくしは、それが好適の證據を、(他にも是れに類したものは可なりに多くありませうが)一二年前、本誌上に於て公けにされた野上彌生子氏の「放火殺人犯」と題する脚本に見出だすのであります。

わたくしは、こゝに、あの作全體に就いて、わたくしの意見を述べる興味を有つては居りません。たゞ其れの題材が、たま〳〵、わたくしがこの文章に於て論議して居る問題と極めて密邇の關係のあるものである

から、その中に現はれて居る、一二の思想に對して聊しく、わたくしの意見を述べて見たいと云ふまでのことであります。

あれだけのキアタストロフエも、畢竟するに、(一)、過去の行爲の意義に關する河上と桑田と春代三人の誤解と(二)、秘密を告白することの價値に關する桑田と春代、二人の無理會とから生じたのです。そして、わたくしの推測するところでは、作者自身も彼等の取つた是等二つの態度を是認されて居られるやうです。)この點に關して、わたくしは大に不滿を感ずるのです。

大貫と春代との關係は、河上が彼の女に結婚を申し込んだ當時は、すでに過去の出來事の一つに過ぎぬものになつて居たのです。無論あんな事が大貫と彼の女との間に起らなかつた方が、大貫に取つても、彼の女に取つても幸福であつたに相違ありません。然し、彼等は、(多分彼等の無智のために必要以上に)、あの事件のためには大なる苦痛を嘗めて居ります。非常な犧牲を拂つて居ります。彼等は、乾度あの不幸な事件の感化に依つて、(彼等の事であるから、その效果の範圍はよくわたくしに解りませんが、)一層、聰明になり、善良になつて居たことは十分に想像出來ます。して見れば、さうなることに依つて、彼等は已に彼等の過去の行爲に對して、十分に賠償して居たではありませんか。さうすると、彼女が河上の結婚の申し込みに應ずるか、どうかを決する唯一の問題は、今、現に、彼の女は、眞實に、純一に、河上を愛して居るか、どうかと云ふだけであつたやうにわたくしは思ひます。若し彼の女にして、そこにあつた事實を正視し、其れの眞相を正解して居たならば、彼の女は、何の種の煩悶をも持たなかつたのであります、持ち得なかつたのであります。たゞ、彼の女は誤つた、(しかも、舶載の)傳說と、道德とよりして煩悶の幻影を作ることに努めて居たのでした。變態心理の所有者たる河上は別として、多少の冷靜と、分別とを領有して居たやうに想はれる桑田までが、この點に於ては、大して彼の女の理會の上に出て居なかつたのは、一體、どうしたものでありませうか。

又、彼の女は、どんな事が起らうとも眞實を語らなければならぬと叫んで居ります。そして、桑田も、終に彼の女の意見に贊成します、否、内心は初めから贊成して居たのです。然し、この場合、最高の、最眞の意義に於て、何が眞實でありましたか。わたくしは、どこまでも、さきにわたくしが述べた見解が正しいものとして、彼の女にして眞に意義あり、生命ある眞實を語らうとするならば、卽ち、今の彼の女の生活と結婚問題とに對照されての眞實を語らうとするならば、そこには、改まつて語らるべき何物も無かつたのであるとわたくしは云ひませう。されば、何物も語らないで、始めて、彼の女は眞に意義あり、生命ある眞實を語つたことになつたのであるとわたくしは云ひませう。事實、彼の女がしたやうに、現在と何等の關係なき、あのやうな「死骨」をしかも、彼の女が其れに與へる意味を以て語るのは、結局、虛僞を語つたことになるのであります。

假りに彼の女は眞實を語つて居たのであるとしても、わたくしは借問します、眞實を語ることに、そんな絕對の價値があるか、どうかと。

人間の原始の生活に於ては、虛僞も、眞實も紛糾し、錯綜して居ました。彼れが經驗と實驗とを積んで來るに隨つて、生活の實利のためにだんだんに、虛僞より眞實を識別し、虛僞を輕蔑して眞理を尊重することを學んで來ましたのです。されば、眞實を尊重することは幸福なる生活に取つて、重大要件であることは云ふまでもありません。實に、眞實を尊重するとはわたくし共に取つて、最も神聖なる義務の一つであるとも云はれ得ます。然し、人間の生活することの必要から、大抵は、放任して置いても、彼れは自然に虛僞によりも、眞實の方に、一層の價値を置きます。其れが證據には、今日、故意の、若しくは、偶然の虛僞は、隨分、わたくし共の生活の中に入つて居るやうではあるが、其れでも虛僞と眞實と、どちらが多く入つて居るかと云へば、無論、虛僞は眞實の萬分の一、百萬分の一にも足らぬのであります。絕えず虛僞のみを語り續

けて行く人々は（無論そんな事の出來る筈のものではないが）、結局、如何なる社會に於ても、自滅するの外はありますまい。『狼來れり』と三度人を欺いた小童の末路に鑑みて見てもこの道理は解かるではありませんか。何人に取つても、眞實を語ることは義務であるに先だち、習慣です、實利です。

然し、わたくし共は、如何なる場合に於て、如何なる犧牲を拂つても、眞實を語らなければならぬと云ふ義務はないと思ひます。否、さうすることは、わたくし共に取つて、大なる罪惡であると思ひます。されば、トオマス・グリインも、あの『倫理學序論』に於て、一つの有名なる裁判事件をスコットの小說の中より引用して、かゝる場合に於ては、如何なる學說も、虛言をする方が善いか、或は惡いかを指定するわけに行かぬ。たゞ、當人の聰明に任せる外に道はないと說いて居ります。

わたくしは、あの場合に春代が、强ひて（彼の女の謂ふところの）眞實を語らうと主張し、終に、其れを實行して了つたことは、大なる罪惡であつたと確信し、斷言する者であります。

九

瀧田君、以上、あなたより課せられた題目に就いて、聊、わたくしの意見を披瀝しました。多分あなたの期待に背いた歸結に到着したことも多いでありませう。しかし、わたくしは實驗主義者として、この文章の一點、一劃に到るまで、わたくしの理論と主張とに遵つて說いたことを、こゝに一言附け加へて置きます。

所謂亞細亞的術策を排す

中野正剛

▽亞細亞的秘密は奴隷の自衛手段

外國に滯在して居ると本國に對する批判が一入痛切に耳に感ぜられる。愛國心の發動とでも云はうか、鄕愁の發作とでも云はうか、新聞を見るにつけても Japan のJの字が出て來ると直ぐに視線を其處に注ぎたくなる。Asia のAの字が見えると妙に神經が昂奮する。大隈加藤外交の所謂對支二十一箇條の要求が提出せられ、世界の輿論に波瀾を起さしめた當時、恰度英國に居つたが、其頃 Asiatic trickery とか Asiatic deceitfulness とかいふ文字が屢々現はれたのは、實に云ふべからざる不愉快であつた。抑も歐米人の所謂亞細亞的術策とか、亞細亞的陰謀とか、又は亞細亞的陰險とかいふ文字は何を指すのであらう。亞細亞人に限り陰險で陰謀的で術策的であるとは何うしても受け取り難い。然らば是等は白人の有色人に對する偏見から出たのであらう乎。必ずしもさうとも許り云つて自ら威張り反つても居られまい。現に歐米人中で別して亞細亞人に敬意と同情とを拂つて居る人も、尙ほ此亞細亞的缺陷を指摘して居る。決して惡意的とは受取れない。之れはほんの一例であるが、非常に面白い例證となるので、一寸引用して見たい。米國でストウ孃といふ文筆家が有名な"Uncle Tom's Cabin"といふ小說を書いた事がある。此小說は一女性の手に成つたものであるが、南北戰爭以前亞米利加に行はれて居つた奴隷制度の不法を指摘し、黑奴のトムといふ正直にして忠實、而も死に到つても基督敎的信仰を變へない可憐な人物を主人公

とし、此トムを迫害して遂に死に到らしめた白人連中の凶暴殘忍なる性質と冷血無情なる行動とを描寫し、白人の爲めに一大反省を促した。此小説は非常なるインフルエンスを國民思想の上に及ぼし、遂に奴隷制度の廢止を促進したとさへ傳へられて居る。斯くの如く有色人種に同情したストウ孃と雖も、矢張此小説中に現はれ來る黒奴の行動を描し出す時に、幾多の有色人種的陰險性を書き現はして居る。此小説中に白人宣教師の娘にイーヷと稱する可憐な少女がある。基督教的信仰の血を兩親より承け繼いで、實に慈愛の結晶とも云ふべき言動を表はして居る。又トプシーといふ黒奴（ニーグロ）の少女が同じ家庭に養はれて居る。此少女を躾ける爲めに、家庭の人達が多大の同情を以つのみならず、嚴格なる教育を加へんとして居る。其家に又オフエリアといふ少し年取つた家庭教師の女が居る。隨分親切にトプシーの世話をして居るが、何分トプシーは親の名も知らず、何時生れたかも知らず、神の存在を聽かされず、全く道徳性を麻痺した少女なので、狐鼠々々隙を覗つて盗みをする。感付かれて詰問されても、證據が上らねばなか／＼強情を云ひ張る。遂にオフエリアも癇癪を起して鞭つといふ始末で、其有様は實に悲慘なものである。之に反して可憐なイーヷは、トプシーが父も母も友達も無く、又眞正の愛といふものを他から受けた事も無いのに同情し、眞に彼女の友人として愛するといふ態度で、トプシーが惡い事を僞れば爲る程、嘘を吐けば吐く程益々同情する。教へても餘り解らぬので遂には泣き出すといふ有様である。それでも彼女の同情がトプシーに徹底しない。最後にイーヷが病氣となつて將に死なんとする枕邊にトプシーを招いて、嘘を吐かぬやう、盗みをせぬやう、人を愛し人に愛せられるやう、涙を振つて説く處、實に讀者をして潸然涙を催さしむるものがある。其際にトプシーが始めて他人から受くる眞正の愛を感じ、心機一轉して道に入るといふ一齣がある。全篇を通じて所謂有色人種的陰險を描寫して居る有様は、實に眞に迫つて居る。是等は決して有色人種に對する偏見許りではな

い。何か白人の眼から見て、有色人に此種の共通の缺陷が有る事を認めねばならない。

此頃でも白人が屢々亞細亞的陰險とか陰謀とかいふ言葉を繰返すのは、矢張此小說に現はれたと同樣の意味が無くてはならぬ。英國の有名な植民政策家クローマア卿は「現代埃及（モダンエヂプト）」といふ埃及統治の實歷談を大部の著書にしてゐるが、其土人研究の中には矢張亞細亞的陰險とか陰謀とか術策とに關する記事が充滿して居る。クローマア卿は英國で紳士（ゼントルマン）の模型であるさうだが、其土人に對する統治は必ずしも自身筆にした程、佛陀が衆生を濟度するやうな大慈悲で土人を取扱つたか何うかは如何はしい。矢張英國一流の僞善で神樣のやうな事を云ひながら、隨分土人を非道い目に合せた事もあるとは、佛蘭西人や獨逸人が反對の例證を擧げて記述して居る。

兎に角白人の有色人種に對する殘虐は非常なもので、殊に亞弗利加の黑人に對しては、我慢に堪へない行爲を爲して居る。今に尚スレーヴランドだとか又はスレーヴマアケットとかいふ地名が殘つて居るのでも分る。白人は實に獵犬を用ひ、網を張つて黑人の村落に狩り出しを行ひ、捕へ得たる男女少兒を悉く奴隸として輸出し去つた。親子處を異にし再び相見える事が出來なくなつたのもあり、夫婦も引分けられて西と東とに異なる勞役に使はれたのもある。殊に甚だしきは奴隸を賣買する時に、恰度馬でも取扱ふかの如く、口を鐵鉤で引開け、齲齒が有るか無いかを檢査して價を定める。又奴隸が繁殖しないで困ると云つては、奴隸の男女を無理に一室に押込め、其胤（タネ）を取るといふやうな無法を行つて居る。些か反抗でもすれば踏む蹴る鞭つといふ有樣である。英國の繁榮も奴隸の勞役に由つて與へられ、リバープールは黑奴の頭蓋骨の上に建てられたと云はれた時代もある。固より英國が埃及や印度を統治するには、夫れ程非道くは遣らなかつたらうが、憐に彼等の土人に對する觀念が何處に行つても同一であつて、矢張鐵拳政策を基として居る。そこで虐げられたる亞細亞人や黑奴の唯一の護身術は、陰險と

術策とで無くてはならない。開放的に正々堂々と爭はれないので、秘密の裏に卑劣な策を運らすに到るは當然の事である。白人を通觀すれば其有色人種に對する態度は、オフェリアのトプシーに對する態度にも及ばない。イーヴの如き神に近き同情者は小說家の想像の内にのみ住むもので、實際には無いと云つても宜しい。そこで白人に接する低能なる有色人は、恰度繼子のやうな性格を帶びて來る。其繼子が拈ねくれて居るとか陰險だとか騒いだ處でそれが何だ。畢竟彼等の繼母根性を自白するに過ぎない。亞細亞人許りで無く、虐げられた國民は皆さういふ缺陷を帶びて來る。白人は何處へ行つてもまだ有色人に虐待されて居る處が無いので、我々は所謂〝European Trickery〟を普遍的に說明する材料を有しない。併し彼等とても明かるみで壓迫を蒙れば、慥に陰險にもなり秘密的にもなるに相違ない。ヤンキー風に明放しで傍若無人に大道を濶歩するのは、彼等が順境に居るからである。濠洲產の馬は非常に資性溫良と稱せられて居るが、汽船に積まれ波に搖られて日本に送り屆けられた當座は、非常に悍馬となり癖馬となる。曾て實施學校に繫いであるのを見たが、全然手も付けられない。田舍のガタ馬車に繫いである癖馬と少しも性質に相違がない。畢竟長い旅路に辛い思をし、馴れない人に取扱はれた結果である。是等の馬の性質を和げるのはなか〱容易でない。堪能なる騎兵の將校や馬術家が力を竭くして馬の氣に逆らはぬやうにし、一月も二月も撫愛して後、漸く厩を引出す始末である。して見ると性質の惡い癖馬は、日本許りに居るのでない、洋馬でも取扱が惡いと陰險な癖馬になるのである。畢竟所謂亞細亞的陰險なるものは虐げられたる亞細亞人の自衞手段として生じた性癖である。開放的に活躍し得ない弱者が、秘密の裏に蠢動する狀態を指すに外ならない。

▽五つ紋付の似而非謹厳――赤ネクタイの歐米人

白人が植民地で有色人を虐め散し、有色人が苦しまぎれに少しく狡猾な策を運らすと、それを捉へて亞細

亞的陰險だなどゝは片腹痛い。さればとて歐米人間にイーヴの續出せん事を望み、彼等の態度を緩和して後亞細亞人を暢展せさやうといふ譯には行かぬ。さすれば亞細亞人中に於て特に異彩を放つ日本人などが、自ら奮起して白人に奴隷根性でない事を證明しなければならぬ。開放的に濶歩して、秘密裏に蠕動する陰類共物でないことを了解せしめねばならぬ。由來日本人は卒直質朴剛健等を美德とし、決して腰拔けで陰險で狡猾でない。遠い歴史は論ぜずとして、明治維新以前始めて白人に對した當時の態度は正しくさうであつた。白人は門戸開放とか貿易の自由とか種々の題目を並べて我國に開國を迫つたが、當時の日本人は之を好まなかつた。そこで最も卒直に最も開放的に白人嫌厭の思想を發表し、茲に攘夷論となつて現はれた。單に口舌の上のみで攘夷論を鬪はすのみならず、各藩共に大砲を鑄るやら兵士を訓練するやら、何も此頃のやうに軍備擴張は列國の猜疑を招くなどいふ弱いやうな狡猾のやうな秘密本位の愚見に泥む事なく、どし〳〵攘夷の準備をした。逸り男の薩摩人は生麥村事件をキッカケに鹿兒島灣で攘夷を斷行し、英國軍艦は碇を切り離して逃走するといふ醜體を示した。氣の速い長州人も下關で外國軍艦を砲撃して、聯合艦隊と大戰爭を初めた。是等は世界の大勢に暗い行動であつたとは云へ、日本人の卒直な精神を遺憾なく發露して居る。果せる哉卒直な外交と軍事的行動とは、帝國を亡ぼす事なく却て興隆の基を築いた。白人は恐るべき者をのみ尊敬する性質を有して居る。日本の雄藩が攘夷を斷行して武威を示した事は、却て彼等に日本侮るべからずとの信念を抱かしめた。固より日本を恐れもすまいが、此島國根性の彼等は他の亞細亞人と違つて鳥渡手剛い處がある、滅多に押潰さうとすると可也に面倒だ、此猛獸には白刄を閃めかして仆すよりは、巧く欺き馴した方が世話が無いといふ印象を彼等に與へたに相違ない。倫敦の Japan Society で出たパンフレットに名前は忘れたが、初めて日本に來た英米人の日本印象記なるものが表はれて居る。是等に據ると歐米人に應對した幕府や

各藩の武士に對する各人の印象が略ぼ同一である。彼等は曰く、「日本のサムライは世界の大勢を知らぬ癖に、日本こそは神國である、サムライは神國を代表する第一流の國民である、今は精鋭な武器も、大きな軍艦も有たぬので白人に對して一目は置くが、それとて間違へば決して無碍に彼等に屈從はしないといふやうな共通の觀念を有つてゐる。而して言語應對に非常に謹嚴である。併し乍ら餘程深い自信が有るものゝ如く、何か問違へば佩したる劍に手を掛け、敵を斬殺してそれで申譯が立たなければ例のハラキリを實行するといふ意氣込みが眼光の中に表はれて居る。日本はなかなか侮り難い國であると思はずには居られなかつた云々……」と。是等に觀ても如何に頽廢せる幕末の武士でも、卒直と謹嚴と奴隸的でない決意と態度とを以て居つたかゞ分る。幕府は攘夷を斷行する事は出來なかつたが、攘夷の意氣込は全國に瀰漫して居た。畢竟此攘夷の決心あり而も此攘夷の決心を卒直に開放的に言動に表はしたので、白人は日本に多くの屈辱を加ふる事が出來なかつたのである。攘夷の精神が緊張してゐたので、幾分面目を保つた開港が實行されたのである。畢竟日本人は亞細亞的陰險とは趣を異にした軍事外交方針を斷行するの勇氣があつたので、危い時に此島帝國を維持する事が出來たのである。

然るに明治維新となつて以來、段々態度が變つて來た。洋學を生噛りして腹の据らない半可通連中は、攘夷の決心があつて初めて開國の利益を受けた事實に氣が付かず、白人に對して下から出れば出る程彼等の憐憫を得て、此國の前途を安泰にするを得るかと思つた。伊藤公井上侯等の歐化政策がそれである。强さうな事を云ふ山縣公でも、其頃は矢張此政策に感染れて鹿鳴館などで白人のお笑ひを忝うする爲めに莫迦な假裝踊を踊つたものだ。後に至つて民黨を壓迫した頑固者の三島通庸なども、同じ仲間に入つて西洋人に嘲弄的笑顏を見せて貰へば、それで日本の危急が拯へると思つたものだ。伊藤井上等の拜外思想が强くなればなる程、白人は日本人を輕蔑して來た。開放的に直言直行せず、

秘密裏に術策を弄して、臣妾の如き態度を執るに至る時、對手方が増長して來るのは必然の勢である。英國公使パークスなどは非常な暴威を我霞ヶ關に振つたものだ。少し不滿足な事でも有ると、直ちに外務省に怒鳴り込む。二言目には握り拳を叩いて、愚圖々々すると軍艦を差向けるなど云つたものだ。此際に唯白人の輕蔑し得なかつた者は西郷南洲と副島種臣二人であつたさうだ。此二人は所謂亞細亞的術策を弄して白人の前に虚飾するやうな態度は毛頭無く、何處までも日本風に卒直に剛健に開放的に出た。或時パークスが居留地の問題か何かで外務省に怒鳴り込み、内閣を脅迫して始末に終へなかつた時、南洲が選ばれて彼と折衝する事になつた。西郷は何時もの如く謙遜、謹嚴、卒直の態度で誠意を以て彼に接し、大に我國の理有る所を說いた。流石のパークスも言句が塞り答ふる所を知らず、「確かに御說は承諾したが、併し此問題は佛蘭西と協議して後にお答へしよやう」と云つた。西郷は輕く之を受流し、二人は話頭を轉じて普通の談話に及んだ。偖てパークスが辭し去らうとした時、西郷は一寸と云つてパークスを呼び止め、「我輩は甚だ無學で西洋の事情などは一向解らない。併し英國は確か佛蘭西の屬國ではなかつたかしら」といつた。パークスは大に激昂し、「堂々たる大英國を佛蘭西の屬國とは何事である」と詰責した。西郷は少しも驚かず、「最前からいろいろ條理を盡くしてお話したので、十分御諒解になつた筈である、それにも拘はらず佛蘭西に相談せねと決し兼ねると云はれたので、若しや佛蘭西の屬國ではなからうかと思ひ浮べた丈けである……」と答へた。パークスは之を聞いて呆然啞然として云ふ所を知らず、それから非常に西郷を畏敬する事に成つたさうである。西郷は歐化政策などに感染れず、何處までも田夫野人で押通し、少しも術策を用ひず、少しも粉飾を加へず、生粹の日本人其儘の木地を開放的に露出した。一向秘密的術策を弄せず、表面を糊塗して白人に迎合しやうとしなかつたに係らず、他の頭髮の刈り方を氣にし、ネクタイや夜會服の着け方を氣にする當時の輕薄才子

よりは、十倍も二十倍も白人に重く見られた。元來歐化政策を唱へた伊藤井上山縣などには、根本から西洋の思想に同化し彼等と一つに成らうなどいふ考があつた譯ではない。彼等が表面を粉飾するのは要するに黑奴などが白人に虐められるのが辛いので、嘘を吐くやら術策を用ひるやらして一時を免かれやうとするのと少しも選ばない窮餘の自衛手段である。人間が開放的に是を是とし非を非と言張る元氣が無く、こんな陋劣な手段を以て一時を免かれんとする態度に出ると、自ら精神の緊張を缺き、知らず識らずの間に奴隷根性に成下るものである。今日の霞ヶ關の官僚は此種の空氣の中に育てられ、所謂亞細亞的陰險、亞細亞的秘密の裡に隱れて堂々と是非を諍ふの氣魄を有しない。

外交官の奴隷化は姑く論ぜずとして、かの山縣流の謹嚴と忠君愛國とを以て彼等一門の特有であるかの如く裝ふ官僚連中も、矢張外交官より更に甚だしく所謂亞細亞的陰險に流れ、亞細亞的秘密を能事とし、少しも質朴剛健の氣風を有しないやうに成つて居る。白人の所謂亞細亞的陰險は、虐げられたる弱者の自衛手段に外ならない。今我國の官僚の總本山たる山縣公等は、胸中に燃ゆる許りの誠意を有しないに拘はらず、唯因習的權力と威力とを以て百の官僚に臨み、表面許りの謹嚴で人を抑付けやうとして居る。そこで彼等の羈束の下に生息する官僚には、恰度黑奴や一部の印度人の間に生じたやうな秘密的自衛手段が行はれて來た。其自衛手段が謹嚴を面にし狡猾を腹にし、正廉を說きながら蓄財に志し、忠義を口にしながら賄賂を攫むと云ふやうな非現代的官僚根性の發動と成つたのである。彼等には開放は禁物である、秘密は極意である。開放すべからざる汚物を秘密の胸中に藏み込んで居るのである。今日の實狀を露骨に云ふと、山縣一家の御意に叶ひさへすれば、官僚の古物はどし〳〵貴族院にも樞密院にも入れて貰へる。馬鹿息子が出來れば式部官位に都合して貰へる。畢竟彼等一門は政權に據りて私事を行ひ得る優秀の地位に居るのである。而して人の之を

攻撃するあれば直ぐに其隱れ家を求めて、攻撃する者を目して國體を危くする者だと說き立てる。現に差し迫れる貴族院の改選に對しても、山縣一門の官僚が非常の壓迫を加へ、全然自分等の乾兒か、或は決して山縣一門に反對しないといふ精神的證文を入れた者でなければ當選せしめないといふ方針であるさうだ。こんな具合で山縣一門の官僚が役人議員其他種々緊要の地位を、私的感情に由つて授與するの特權を有して居るので、彼等の前に立つ官僚は如何に胸中に不平が有つても之を開放するとが出來ず、絶對に頭を下げて保護色の下に隱れねばならぬ。彼等の意氣地無い事は白人の前に震へ上る黑奴（ニーガル）の比でない。山縣公と云へば可い事を小田原の大御所と云ふ。官僚仲間では親分株の平田東助の如き男が、例の山縣の妾だか看護婦だか分らない女を尊敬して御前（ゴゼン）樣と云はぬ許りの態度を取る。淸浦とか大浦とかいふ樣な連中も矢張同じ事であらう。直接山縣の玄關に追從の言を並べに行く光榮を有しない低度の官僚共は、平田とか淸浦とかいふ官僚の四天王連の前に阿諛追從する、其第二流官僚の前に第三流官僚が保護色を發揮する。漸々次を追ひて小官僚の末輩まで悉く去勢されて了ふ。彼等が立身出世の要訣は開放的に活躍して國民に信を得るのでない。山縣とか平田とか淸浦とか云ふ頭目の玄關と臺所との間を秘密裏に出魔ズルとが最も大切である。而して彼等の口にする所は忠君愛國である、謹嚴廉直である、品行方正である。彼等は青年を非難しては曰く、現代の青年は氣慨なし、現代の青年は輕薄なり、彼等の風規は頽廢せり、彼等の理想は卑近なりと。然るに斯く無責任に濫罵を逞しうする者共の道德は、抑も何の程度のものであるか。阿諛追從は士道の最も恥づべき事とされて居る。然るに彼等の保身術は阿諛追從に外ならない。謹嚴なるべき官吏が妾宅を設ける。忠君を口に唱へる連中が不正行爲で世の指彈を蒙る。田中光顯渡邊千秋といふやうな順序で、それ〲官僚の御覺え芽出度かつた男が、其地位を惡用して私を營んだといふ非難の下に地位を失ふといふ狀態である。國民思想の統一など烏

諦がましい事を公言する連中が、千金妾を購ひ萬金別莊を買ふ以上に理想も思想も有しないと謂ふが今日の實狀である。抑も道徳は躬行して率ゐ、自分の高尚なる情操から發する芳しき香が天下を薫陶すべき筈のもので、己れに不始末を營みながら謹嚴清廉を唱へた處で何の役にも立たない。內容が充實しないで外面を粉飾しても駄目である。五つ紋の羽織に仙臺平の袴を穿き、終日大御所の前に膝を崩さず据り通し、痺れの切れるのを我慢して「左樣然らば」の謹嚴振りを發揮しながら、其仲間や末輩に不倫の徒や收斂收賄の官吏を出し、我國民の面目を外國にまで失墜するといふ狀態では駄目である。こんな調子だから謠曲を謠ひながら謹嚴振りを發揮して居る輩が、赤ネクタイを着けてオッチヨコチヨイに走り廻る白人に其面皮を蹂躙せられるのである。剛毅木訥なるべき筈の寺內伯が「アウトルック」邊りの鳥渡した記者や、「デーリー・メール」のレポータアなどに揶揄(からか)はれたのも之れが爲めだ。其謹嚴を充實せしめ、其誠意を流露せしめて相對座したならば、決して白人も之を莫迦にする譯に行くまい。パークスに對した西鄕南洲は正しくそれである。官僚が亞細亞的陰險に流れ、亞細亞的秘密を信條とし、少しも直言直行する能はざるに到つた結果は今日の態である。

官僚共の奴隷化はそれまでとして、黨人共の所謂亞細亞的陰險振りは亦一入である。政黨も最初成立の際には隨分民論を代表して、閥族と火花を散らした歷史を有して居る。併し餘りに日本の狀態が官僚萬能に都合好く出來て居るので、政戰は每時政黨の敗け許りである、何としても閥族官僚には頭が上らない。そこで悧口な奴はソロ／＼考へ出した。正面から衝突した所で到底勝てる譯ではなし、少し我慢して彼等と妥協的態度に出て、彼等の同情と援助とを得る事が黨として大を爲す所以であると、自由黨が最初山縣に下り伊藤公と握手し、政友會となつて「妥協」より「妥協以上」になり、更に「情意投合」と成つたのはそれである。今日其總裁たる原敬氏が臆面も無く其奴隷根性を告白し、白人の所謂亞細亞的陰險と術策とを唯一手段とし

て、奇怪にも是々非々などいふ腑甲斐ない題目を並べて居る。是々非々は當然の事であるが、一體何を是とし何を非とするのである乎。融通自在の逃口上を張つて黨の保護色とするのは、政黨の爲めに闘つては巧妙なるものであらうが、天下國家の爲めに計つて之れ程不親切なものは無い。其不親切を極めた誠意の無い卑屈な術策家が大政黨の黨首である。而かも世人からは原敬も追ひ／＼總理大臣としての貫目が具つて來たなど噂されて居る。總理大臣の貫目とは抑も何を要素とするのである乎。如上の保護色を發揮して白人の所謂亞細亞的術策を逞ましうし、自己の政見に關しては堅く亞細亞的秘密を墨守するに在ること乎。それでは日本は黑奴（ニーグロ）の部落と選ばない。英國に虐げられたる印度と選ばない。亞細亞的頽廢の國に亞細亞的術策を逞ましうし得る者が、總理大臣としての貫目ある者とされては言語道斷と云はざるを得ない。

▽對米政策の要諦＝捻ぢ鉢卷の朝太郎は白人を同化す

今日の日本人の物識り程矛盾の行爲を敢てする者は珍らしからう。彼等は大に見榮坊である。未だ日本の國力が充實しない以前から、我こそは一等國の國民なれなど公言して騷ぎ廻つた連中である。彼等は歐米に在りて支那人や印度人や土耳古人などと、手を携へて道路を散歩する事をすら恥とし、私かに白人の側に廻つて他の有色人種を劣等扱ひにしたがる輩である。其癖彼等は白人の中で最も小弱なる國民の有する自負心（プライド）すらも有しやうとしない。支那人土耳古人程の自尊心も無い。黑奴の中の高襟連（ハイカラ）、印度人の中の輕薄兒の爲すやうな行爲を勉強して習得するといふ狀態である。非常に偉らがらんと欲して非常に下等な行爲を仕て居る。先づ其服裝の整へ方から物の言ひ方、歩き方まで白人の眞似を爲やうと努めて居る。是等は自負心（プライド）ある國民には絶無の行動である。亞細亞人の國に限りて此態度が甚だしい。黑奴・印度人・支那人中の歐米感染（かぶれ）の高襟連（ハイカラ）と來ては殆ど本物同樣である。獨逸人は決して英吉利人の眞似をしない。英國人は決して獨逸人に感染（かぶ）

れない。佛蘭西人は植民地に於て一世紀以上も母國との政治關係を絶つても、依然として佛蘭西語を使ひ佛蘭西の風習を持續して居る。モントリオールの佛蘭西人は決してヤンキーの眞似をしないのである。和蘭人白耳義人瑞西人希臘人と雖も、各其小國民たる自負心(プライド)を充實せしめ、印度高襟連(インドへイカラ)や支那高襟連(シナへイカラ)のやうに外國感染れをしない。忽ち本國の自負心を拋つて英國なり米國なりに感染れないのが、卽ち眞に英米獨を學ぶ所以である。我國の高襟物識り達が歐米人を學ぶと稱し直ちに日本人たる自負心(プライド)を拋つて白人の前に保護色を出す事は、白人の眞似ではなく黑奴、印度、埃及、支那の高襟連を學ぶ所以である。六月號の大隈侯の雜誌に新渡戸稻造氏が日本の外交を論じて居るが、其主張は累りからうである。今日英米の前に頭を屈し成る可く彼等の爲めに犧牲を多く拂ふて置く事は、彼等の同情を招いて戰後に國際的順境に立つ所以である。戰後大に列國間に同情を得利益を增進しやうとすれば、今日大に犧牲を拂つて置かなければならぬといふ趣意である。

之を粉飾するに滿面のバタ臭味を以てする事、加藤高明氏の英國感染れと同樣の腑甲斐無さである。犧牲を多く拂へば列國に可愛がつて貰へるなどいふ事は、頗る歐米人を尊重する言葉のやうに見えるが、それこそ白人の所謂亞細亞的陰險である。新渡戸氏も歐米人のバタ臭味を氣取込みながら、實はトプシーの行爲を眞似て居るのである。お生憎樣にイーヴが居ない事が悲慘である。犧牲とは何である乎。犧牲とは言語の示す通り犧牲で無くてはならぬ。歐米人の爲めに犧牲を拂つてやるなどは隨分高慢な言分である。此高慢な言分が高尚なる心理から發して居れば頗る尊むべきであらうが、新渡戸さんの所謂「犧牲」は講和會議の席上で列强に可愛がつて貰はうといふ術策を含むものである。白人の所謂亞細亞的秘密手段である。不純の分子を含む犧牲心である。白人も案外高尚な處が無いではない。眞個に犧牲心を發揮するやうな國民には敬意を表するであらう。併し乍ら敬意と利害問題とは勘定の口座が別である。敬意は敬意で拂ひながら、馬鹿正直に犧牲

心など發揮する國が有つたら、其國を利用し其疲れ目に乘じて之を料理するに憚らないのは、今日の國際的原則である。現に大戰爭に對して最も多大の犧牲を拂つた露西亞は今日何の態(ざま)である乎。財力盡き人力竭き政府は顚覆し國民は饑餓するといふ悲慘な際に、「泣き面に蜂」で獨逸からは遠慮會釋も無く締め上げられる、英米佛からは見放される、之を膺懲せよと敦圉く者も國あれば、亞米利加風に優しい事を云ひながら其疲れたの生血を吸はうとする連中もある。馬鹿正直に犧牲を拂つた國の末路はそれである。況んや新渡戶氏の樣に犧牲を拂ふといふ事が亞細亞的秘密手段であつて、憐憫の情を贏ち得て利益を貪らうといふのが本意で有るとすれば、活き馬の眼を拔く玄人(くろうと)揃ひの歐米人は迚も承諾しない。そんな事は一昨日(をとゝひ)承知で却つて其裏を掻く。こんな卑怯な考は日本國民の自負心を失墜せしめ、自助的精神を枯渇せしむる外何等の效果を齎らさない。

新渡戶氏と一幅對な米國感染れの物識りに金子堅太郞氏がある。此間其演說を洩れ聞いたが恰度新渡戶氏と同じ樣な考を有つて居る。金子子は頻に米國最近の奮發を絮說し、其恐るべきを數へ上げて日本人の反省を促して居る。前半米國人の奮發を敘述する所は我等も異存は無いが、後半日本人の反省を促して居る部分は、全く我々と正反對の方向を取つて居る。米國は恐るべし、米人の自主的信念、自助的精神は取りて以て我も學ぶべし。米國の利益と信ずる所如何なる强國を向ふに廻しても逡巡しない所、それが學ぶべき點である。それに米國は目醒しい活動をし、其面目を一新せんとして居るので甚だ恐ろしい。成る可く對米政策を下手に出て保護色を發揮せねばならぬといふのが金子子の議論である。之れは米國通の金子子に似合ず、米國に學ばんとするのでは無くして米國に屈せんとするのである。否、更に埃及人や印度人の中の最も軟弱なる輩を學んで保護色を發揮するのである。こんな保護色も曾ては有効であつた。日本も巧く保護色を發揮して危殆の間を脫した時代もあつたが、それと同時に國

民精神を墮落せしめた點も甚大である。今日日本が秘密的術策を胸に藏し、亞細亞的屈服を裝ひ、亞細亞的陰險を逞ましうしやうとした所で最早先方が承知しない。既に日露戰爭で捷つた好景氣に、高慢ちきに我は世界の一等國なりなど威張つて來たぢやないか。日本が卑屈に出れば出る程、白人諸國は益々日本の眞意を疑ふ。一九一五年の頃英國でオリヴアスといふ著者が"Ordeal by battle"なる書を著し、緊張を缺きたる英國人を警醒して、五百頁に亙る慷慨の言を陳ね、讀む者をして南宋邊りの名臣の言を想見せしめたが、其中に次の如き面白き言葉がある。

「一定の見識無く確乎たる國是無くして、左顧右聘する國は、外より之を望めば却て遠謀深慮端倪すべからざる術策を抱くものかに解せられ、對手國の情疑心と警戒心とを增すものである。アスクイス首相とグレー外相及び其麾邊の樂天的政治家の外交政策は正しくそれであつた……云々」と。

我々は此言を籍りて以て今日の帝國の外交政策を評する事が出來る。出來心で西伯利出兵など思ひ立ち、それで領土的野心を逞ましうするが如き言動を恣まゝにするかと思へば、列國の命令通りに犧牲的精神を發揮せよなど並べ立てる人も有る。支那侵略を企つるかと思はるゝ如き無鐵砲をやるかと思へば、不干涉主義を公言する。不干涉主義を立て徹すかと思へば、變な壯士を出して內訌を助長すべき金貸し運動を開始する。獨逸と同盟の機會無きに非ずと威張つたかと思へば、日英同盟を衝き放されては河童の陸に上つたのも同前だと泣きを入れる。之が墨哥古か埃及邊の態度なら歐米人も例の亞細亞的陰險か位で笑つて通すであらうが、實力以上に買被ぶられて居る日本ではさうは行かぬ。何れ程深い陰謀を抱いて居るか測り知る可らざるものとして恐れられる。恐れられるのも至極結構だ。恐れられて構はぬ決心で準備がしてあれば、それも一つの國是であるが、其癖可愛がられて見やうと思ふに到つては悲慘である。

米國通を以て任ずる新渡戶金子兩氏の議論を引用

たから、序でに對米政策の要諦を一人の田舍漢を手本に述べて見よう。

先年歐洲からの歸途、紐育から華盛頓を經てシヤアトルに出で、其處からポートランドに行つて兩三日滯在した。居留民の希望に應じてシヤアトルでもポートランドでも講演會を催した。すると一人の田舍漢が如何にも穢い襤褸洋服で、泥靴なりに會見を覓めに來た。聞くと我輩と同縣の福岡縣人で三苫朝太郎と云ふ人ださうな。此人はポートランドよりずつと田舍に入つたインデペンデンスといふ村で麥酒の原料たる忽布（三四）の栽培をやつて居る者であつた。世間何う誤解したのか我輩を捉へて、「貴下のやうなエライ成功者が出たのは實に嬉しい。シヤアトルでの講演を新聞で見て、わざ〳〵インデペンデンスから遊びに來た。田舍ではあるが一日宿りで自分の農園に遊びに來て戴きたい」と云ふのである。様子が振はないに拘はらず、自働車などを乘廻して居る。自働車の御者は白人で却て綺麗な紳士風をして居る位だ、三苫君は頻りに我輩を捉へて御成功々々々と云ふのが可笑しくてならない。聽いて見ると御本人の方が却て成功者である。餘程廣大な地面を得てインデペンデンス村に名を轟かして居るのであつた。尙ほ本人の言ふ所を聽くと、

「外國に出て居ると本國の名士程慕はしい者は無い。そこで日本から島田三郎とか新渡戸稻造とか添田壽一とかいふ知名の人々がお出でになると、毎時も嬉しくて堪らずインデペンデンスから遠く〳〵シヤアトルや桑港まで其講演を拜聽に出掛けます。併し一度も[illegible]を惡くした歸らぬ事はありません。あの人達は揃ひも揃つて偉くうは面な、服裝の事だとか言葉使ひの事とか詰らぬ事を並べて、成る可く白人の眞似をせよと仰言やるが、併し白人などをば幾許眞似をして頭を下げたつて、可愛がつて吳れるものではありません。白人は一體傲く、淺薄でお化粧一重のものであります。隨つて口には綺麗な事を言ふが、其爲る所は成つて居ない。人道だとか正義だとか云ふ口の下から、日本人を虐め上げる事は何うですか。已れ等が力足らず開發の勞に服する[illegible]

來ない時には、無理無體に日本人を誘惑したり歡迎したりして土地を開拓させる。それが段々に開けて來て收穫が多くなり、日本人が繁殖し日本人の生活が樂に成つて來ると、彼等の態度は一變して俄かに嫉妬を燒き出す。移民禁止だとか兒童隔離だとか勝手な事をした上に、土地法案まで通過させて日本人の開墾地を捲き上げやうとする。彼等があゝいふ無禮を働くのは何も日本人の言葉が下手だからでない。ネクタイが歪んで居るからでもない。ワイシャツが汚れて居るからでもない。其點は日本の下級氏程清潔でキチンとして居る者は無い。人間が正直で勉强で品行が好いので段々生存競爭に勝つ。其癖本國政府の威嚴が亞米利加に通らず、大臣達が弱腰に流れるから、彼等が日本の移民に對する嫉妬と日本の政府に對する輕侮とを一緒にしてあゝいふ傍若無人を働く。それ名士達がわざ〱海を渡つて來て言ひ聽かす事は何事だ。此日本人を彼等に同化せよと云ふ。幾許同化しやうとした處で頭の毛が黑く、皮膚の色が黃色では迚も同化は出來ない。元來

白人は日本人を穢多以下にしか思つて居たい。其穢多破戸漢が衣服を飾つたり白人風を氣取つたりすれば益す憎む許りである。彼等の輕侮を受けるのが厭やなら實力を養ふ外はない。彼等は弱い者貧乏な者を虐げるが、强い者及び金持ちには頭が上らない。私も最初白人に使はれて農業をやつたが、隨分口惜しい目にも會つた。鶴の羽根のやうに飾り立てた蟲も殺さぬ立派な奧樣が、口では甘い事を言ひながら勞働者に對しては隨分嚴しい。鍬を乘つて一生懸命に働いて居る者を遣り方が拙いと云つて文句を並べ、口返答でもしやうものなら靴で蹴つたり鞭で毆つたりする事を何とも思はぬ。一寸の蟲にも五分の魂、嗚呼牝毛唐などにこんな目に會つてはと涙が惨み出る事も屢々あつた。口惜しいとて今更歸る譯にも行かず、益す土に齧付いて働くより外は無いと決心し、心に泣き乍ら一本の鋤を賴りに身上を稼ぎ出した。段々仕事も都合好く、今では忽布(ホツプス)の收穫期には千人以上の白人を使用するやうになつた。さう成ると可笑しなもので、初めに私を呼

ぶに「チャーレー」だとか「ビリー」だとか、親の付けない名を勝手に付けて穢多破戸漢扱ひにしたものが、今では何時か「ミストル」ミトマなどゝ云ひ、地方でもゼントルマンとかの中に數へる。婢なども「ミセス」ミトマなんて云ふのだから可笑しい。それでも白人共は決して私共を尊敬しては居ない。矢張皮膚の色が幾つて居るので人間扱をしない。併し金が言はせる壇那様で、初めは頗る莫迦にしたものだが今では大切にして呉れる。女房が子供は背負つて居ると可笑しいと嗤つた奴等が、今は追從半分に子供を背負ふのは便利だと云つて私の農園では日本風のおんぶが大流行だ。日本の風呂は不潔いとか、男女混浴は子供でも良くないと云つて、私達のやる事を輕侮した人達が今日は何うです、私が大きな風呂を立てゝ近所の者を入れてやると、ロハ程廉いものはないと見え、日本の風呂は重寶だ結構だと夫婦子供まで一緒に入りに來る。嚮きの男女混浴が可いの不可いのといふ言草は何處へやら。こんな風でインデペンデンスでは日本人は白人に同化しない。折角遠來の名士や先生達の御說教だが、私共は尻の毛一本でも紅いものを生やして西洋人に同化しては氏神樣に申譯がない。何も國々の風習だから遠慮會釋もない。野蠻だとか何だとか云ふが、仕事をするには向ふ鉢卷を打込まぬと力が入らぬ。初めは彼等も笑ふが後には何とも思はなくなる。それから使つてやる白人に對しては、憚り乍ら粗末な事一つしない。賃錢もちやんと拂へば、義理も人情も有る遣り方をしてやる。病人が出來たからと云つて、白人のやうに規則を楯に叩き離しはせぬ。日本風に規則以外に助けてやる。白人共の中には口では潔白な事を云ひ乍ら不品行をする奴もあるが、此方は一切そんな風に泥まないので、所の者も大に信用する。同化も何も要つたものぢやない。此方で惡い事さへせねば恐るゝものは無い……

成程此男に伴れられてインデペンデンス村の農園を觀に行つた。隨分廣い農園で忽布（ホップス）も熟く出來てゐる、見廻る序でに鐵砲を携へて小鳥を打つて歩くと面白い

やうに獲れる。其處此處に居る白人が叮嚀にお辭儀をする。此方も通じない英語で三苫主人が頗る親切に話して居る。成程先方は此方に同化する傾向が有るが、此方は少しも同化して居ない。散歩を了へて部屋に戻ると、洋館作りではあるが室内の氣分は日本的で、大きなストーヴに大きな木の根株を打込む、旺んに火が燃え出す。宛然田舍の圍爐裡のやうな氣持だ。頓て日本風の交ぜ飯が出來る、味噌汁が出來る、それに近所の白人の主婦さんや娘達がいろ〳〵加勢に來る。實に此一部落では心からの日米親善が行はれて居る。而かも此家の主人は日本の外交官のやうに卑屈的同化政策を執らない。秘密本位の亞細亞的陰險を用ひない。何處までも卒直に生地を洗ひ出して、全く開放的に白人に接して居るのは愉快ではないか。更に三苫君の話が面白い。曰く、

「私は悲しひに字なんか一字も知らないから、却つて白人に土地の契約などをして一度だつて欺された事が無い。手振りと眼様で契約の内容を話し合ひ、此方は文盲だから先方に契約書を作つて貰ふ。最後に捺印をする時に念を押す。此方も首が切れても嘘は吐かぬ代りに、白人が嘘を吐けば命を捨てゝ打殺す覺悟である。Me tell no lie, you tell no lie. Me tell lie, you kill me. You tell lie, me kill you. Is this all right? と無茶苦茶な英語で念を押して、先方が"Yes"と云へば兩方で握手して捺印する。嘘を吐いたら殺す覺悟、殺される覺悟で萬事をやるので欺された例は無い……」と。

一田夫に過ぎないが實に面白い白人觀である。日本の學者先生や米國通先生は此眞理を會得しない。折角寺内伯が武斷宰相として顯はれ、最初は英米各國の畏敬を受ける風があつたが、外務省や學者やの御教授が惡いので段々卑屈な態度を執るに至つた。過日邊りのやうな自信の無い卑怯なinterviewをやり、それで白人の御機嫌が取れるなどゝ思つて居れば、彼等白人は屹度亞細亞的陰險と輕蔑して、益す日本を卑しみ且つ憎むに到るであらう。昔ナポレオンが歐洲に其絶大な權威を逞しうして居つた際に、墺太利の宰相メッテルニ

ッヒを脅かさうとした事がある。或外交問題でメッテルニッヒが固く執つて動かぬのでナポレオンは威丈高になり「强情を張ればお前の國の君主に命じて辭職させる」と怒鳴つた。メッテルニッヒは沈着拂つて「今我國の君主は陛下に頭が上らないから、脅迫されて私を免職するならば致し方が無い。さる代りに私の後任者には私以上の强情なる外相を推薦し、決して無理を徹させません」と決然として言ひ放つた。勢威赫々たる外國の皇帝に對してすら、歐洲列國の外相は此勇氣と意氣込みとを以て莅むのである。開放的態度を以て所信を直言するのは却て彼等の國の體面を重からしむるのである。遉がは歐洲列强、互に國を取り合ひ城を奪ひ合ひして、存亡の巷に膽力を養つて來たのであつて、日本の大臣達に觀るやうな卑怯な腰拔けの態度を表はさない。之れあるが故に其國家を維持し來つたのである。列强相爭奪する現代に於て、狐鼠々々細工ばかりをやり、所謂亞細亞的術策位で國を維持しやうなど〻思ふのは大變な間違である。

▽亞細的術策は徒らに精力を消耗するのみ

最近三ヶ月許り支那の南北を遊歷して凡ゆる階級の人に接觸して見たが、支那に於ける所謂亞細亞的術策の弊害は日本よりも甚だしい。恰度上海に居た頃日本の對支要求が傳はり、日支軍事協約が誇大に吹聽せられて居つたが、新聞紙を見ると實に驚く許り痛烈な文字が並べてある。文天祥と楠正成と屈原とを合せ祀る祭文を讀むより、もつと痛烈なる慷慨の文字であつた。それでこんな事を書いて居る新聞記者が眞箇に何の位憤慨して居るかと思つて面會して見ると、眞に國事を憂ひて居る者は殆ど無い。人々が書くから俺も書く、人々が胸を叩いて慟哭流涕長嘆息をするから、俺も其藝當をやるといふに過ぎない。今にも國が亡びるかと叫びながら、内々十露盤勘定も考へて居る。痛烈な文章を書きながら、晩に成れば卓を圍んで贅澤な支那料理を飽食し、拳をやり酒を嚥み、藝妓を擁し博奕を打つ連中が少くない。大に熱狂して法螺を吹くかと思へば、應酬の禮は又至れり盡くせりで、心にも無い

謙遜の態度を執り、人の議論を聽いて居た振りをして、先生の說敬服の外は無い、頗る私の頑冥を啓いたなど、恰度山縣流の憂國と謹嚴と謙讓を混ぜ合せて大仕掛けにしたやうな事を云ふ。慷慨するのも謙遜するのも悉く皆亞細亞的術策である。僞善である。眞に國を憂へ、眞に現狀を改めやうといふ覺悟が無いから、如何に調子づけて騷いだ所で實質に影響する譯が無い。心にも無き慷慨をした所で、御本人がどれだけ偉くなるか。從つて其種の慷慨家に騷ぎ廻られた所で、其國家はどれだけ改善せらるゝ乎。心にも無き謙遜をした所で、自分と相對する先方の人の價値がどれだけ增す乎。兩者共に實質的價値の增減は無い。畢竟精力の濫費である。固より多い人々の中には幾多の除外例はある。眞に國家民人を憂ひて居る向の人々も尠くない。然し斯かる人々に支那の現狀を質すと、皆我々と同じやうな觀察を自國人に下して、頗る前途を悲觀して居る。

・支那に於ては一切の事が凡て亞細亞的陰險術策を以

て成り、毫も實際的價値を增進する所以の働を爲して居ない。例へば茲に百萬圓で一つの會社が出來るとする。重役が出來、支配人が極まり、監査役も任命される。さうすると直ぐに新聞紙が攻擊を始める、重役がいゝくすねた、支配人が誤魔化した、監査役が經費を濫費したといふ風に、何等の根據も無く騷ぐ。つまり騷ぐ者自らがやるので、彼等も大方やるであらうと考へるのである。根據もなき推量に外ならない。然るにさうして騷ぎ立てゝ攻擊して居ると、果して又其揣摩が妙に適中し、誤魔化して居らぬ事は殆ど絕無である。畢竟會社一つを經營するにも精力の濫費である。百萬圓の會社を確實に盛立てゝ二割の利益を擧げるとすれば、重役も利益を得、株主も滿足する。益々事業を擴張すれば自他共に幸福に成る。然るに口では巧みな事を言ひながら、初めからさういふ精神が無い。百萬圓の資本金は會社が出來る頃には已に七十萬圓に減じ、半年經てば更に十萬圓を食ふ。それでも眼前を糊塗せねばならぬので蛸配當をやる。其の尻が露はれさうなので、一同

の苦心は並大抵ではない。新聞社から攻撃をされると、其記者を買收せねばならぬ。それにも金が要る。さうすると誤魔化しに參與して居ない他の重役がぐずり出す、之を鎭撫する爲めには又不正な金を使ふ、いよ〳〵會社が潰れるとなると、成るだけ他人に罪を嫁せて、自分だけ正しい顏を爲やうといふ爲めに、僞善的口實を設けねばならぬ。夫れは夫れは並大抵の苦心ではない。結句惡錢は身に付かず、一身も立ち行かず、會社も立ち行かず、こんな事なら最初から勉強して事業を經營した方がずつと心配する事も少い。誤魔化しに用ゆる同じ分量の精力(エネルギー)を善用すれば自他共に幸福になる。之が出來ないのは何といふ淺間しい事であらうか。

國家の振はないのも之れと同一である。種々の名義で借款を起す。之を殖産工業の奬勵の爲めに善用すれば、支那のプリミチイヴなる産業狀態はどし〳〵改良され、大に國家の利益となり、政府の收入となり、當局者の名譽となり、地位の安固となるのは見え透いた道理である。而かもそれまで待つ根氣が無く、直ぐ例の亞細亞的陰謀を以て互に狡猾な事をやる。假りに二千萬圓の借款を起せば、五百萬圓は宙に飛んで役人達が私する。殘りの千五百萬圓を眞の生産的方法には用ひず、政治上軍事上の陰謀に使ひ反對黨を壓迫して、自家の私權を張らうとする。それが巧く行かずして國を賣るの惡名を受け、遂に政權を失ひ、身を滅ぼすに到るのが順序である。こんな調子で精力を濫用するので、國力は國内で相殺され少しも對外的能率と成らぬ。外國に對して正當の手段に由り、堂々たる實力で國を維持する事が出來ないので、所謂夷を以て夷を制すなどいふ其日暮しの、所謂亞細亞的術策を事とする他仕方が無い。開放的に大手を振つて世界が歩けぬので、又々秘密に狐鼠々々才覺せねばならぬ。此調子だと國民の自負心(プライド)は益々傷けられ、自助的精神は日々に消耗し、國と國民とを擧げて奴隸的屈服を保護色とするの外に途が立たなくなる。而かも屈服の結果歐米人から可愛がらるゝかと云へば、益々侮蔑を招き、益々其面

目を蹂躙され、利益を絞り取らるゝの待遇を受ける。彼等は屈従を以て他に愛せられん事を希望して居るが、國際間に於て他國に愛せられんと欲すれば、先づ他國に敬意を拂はしめなければ駄目である。我輩の友人杉森南山君が近頃英京に在つて"The principle of the moral empire"なる一書を著し、utilityとprideとの原則を說いて居るが、支那は正しく此原則と正反對を行つて居る。日本も稍々之に近い。官僚より黨人に至るまで、凡て術策（トリック）の上手な譯を目して、處世法の妙を得て居るとか、大臣の資格と重みが有るとか云つて居る。僞りの謹嚴、僞りの慷慨、僞りの忠君愛國、僞りの法螺、それが個人としての能率を増すに如何許り役に立つ乎。世間で使つて見て官僚の古手と政黨の古手程役に立たぬものは無い。官僚は心にも無き謹嚴を裝ひながら責任を遂行する決心は無く、巧みにそを逃避する。政黨の古手は誤魔化しを巧く云つて一時的に人を操る事許り考へて居る、彼等の行ふ事は精力（エナルギー）の濫用であり能率の削減である。之を以て外國に對すると競爭場裡の劣敗者と成るの外は無い。日本人、別して山縣流の官僚一派は忠君や正廉を高調するに拘はらず、收賄などの不正を働く者が彼等の庇護の下に生息する官吏の内から輩出する。然るに弗本位のヤンキーと輕蔑されて居る米國人間に、現に食糧監督官に任ぜられたハーバアト・フーヴアーの如き高潔なる眞箇の愛國家淸廉家が現れて居る。フーヴアー氏は適任者として大統領から依賴されると、三四の會社の重役たる地位を數萬圓の俸給と共に抛ち、政府に豫算が無いので僅か一弗の俸給で糧食動員の要務に膺つて居る。其夫人も夫の心を了解し戰爭の繼續する間に資產を蕩盡する心算で倶に奮鬪する決心を定めたといふ。斯くの如き人々が、我が官僚のお嫌ひなデモクラシーの國に現はれ、愛國宗の日本には滔々として僞忠君僞愛國、それに、成金萬能、術策萬能主義が行はれ、政界官界實業界精神界の凡てが亞細亞的術策の犧牲と成らんとして居るのは慨がはしい。早く精力の濫費を已め、奴隷的術策を廢止し、秘密裏の狐鼠々々を斥けて、開放的に濶步

するやうにならぬと、帝國の前途は暗黑である。開放は暢展の氣を養ふ所以である。秘密はあらゆる美名を冠する道德に黴を生やす所以である。

官廳調査の公開

法學博士　渡邊鐵藏

我國の官廳は各其行政上の必要に基きて年來各種の調査資料統計材料の蒐集、調査報告書の作成統計の編成等を行ひ其の印刷に附せられたるものも尠くない。其内には或特定の調査事項に關する大部の調査書もあり亦當該官廳の平常の政務に關する定期若くは臨時の報告書若くは統計等あり、或ひは又海外の制度施設に關する參考的調査資料等もある。是等の官廳印刷物の中或特定の大問題につきて特に外部より囑託せる委員を交へて調査せるもの或ひは一定の問題につきて繼續的に長時日を費して作成せるもの等の内には頗る重要なる資料として廣く尊重せらるゝものも尠くない。此外各官廳の監督政務に關する報告書統計、參考資料等につきても當該官廳に對して有用なるは勿論他の官廳、地方自治團體、民間等の利用して有益なるものあるのみならず中には學者が參照して研究の資料となし得るものも亦尠くない。固より官廳の調査資料の蒐集報告書の作成は繁雜なる日常の政務の傍に行はるゝものにして且つ多くは短き期間の内に成就せらるゝものなる故其調査の結果は學者が多くの障害なく終日机邊に端座し、時日の移るを厭はずして作成せる研究の結果の如く深遠、周密、系統的なるを得ないことは多くの場合に之を認めねばならぬのであるがしかし一方に於いて

官廳の權力關係の利用による材料の蒐集の容易なること、手足となりて動作すべき補助人員の多きこと、財力の割合に豊富なること等は官廳調査にとりて頗有利なる條件となつて間々頗有益なる調査書の現出を見ることがある。

殊に近年に至つては各省に分布せる英才の手に成れる調査書類に見るべきもの頗る多く、間〻單行の著書として上梓するに足るものもある。是等の内には吾々に貴重なる參考資料、研究資料を與ふるものもあるが又廣く世間に其存在並びに内容を紹介し度く思ふものが數多くある。

然るに頗る遺憾なことは是等の有益なる官廳統計、調査書等は往々にして空しく匡底に秘せられ若くは放置せられて數ヶ月若くは數年に亘る英才の苦心を水泡に期せしむることもあり、或ひは幸にして印刷に附せらるゝも僅に上官の一覽に供するに止まる場合もある。更に或ものは各官廳、一部の學校、特別關係者等に配付せらるゝこともあるが、一般に公刊頒布する如きことは頗る稀である。しかのみならず折角印刷に附した調査書にして學者、言論社界、事業經營者或ひは一般國民にも其内容を紹介、知得せしむることが必要であるのみならずむしろそれが調査者の責務であるとまで感ぜらるゝものが其表紙に「秘」の一字を印して公表を指止められてをることがある。

調査者の折角の勞力を無にしたり、折角印刷に附するも之を秘して外部に知らしめず或ひは單に一部の者以外には配付せざる如きは所謂寶の持腐れ若くは寶を私するものといふべきである。勿論是等の内には當然秘密とするの必要あるもの亦公表を必要とせざるものもあれども、現在の實狀は秘密の範圍甚廣きに過き頒布の範圍狹きに過ぐると思はれる。我々の如く官立の大學に職を奉ずるものは幸にして割合に容易に是等の材料に接することを得るが世間には是等の材料を手にせんとするも能はず若くは其存在をすら知るの機會なくして過ぐる者が多きとゝ信ずる。殊に調査資料の探索に不得意なる民間企業家の如きは間々自家の事業の

指針となすに足るべき既存の官廳調査の恩惠に浴するの機會を失ふことが多いようである。これでは官廳調査の效果の一部は消滅するものといはねばならぬ。

數日前没せられた法學博士工藤重義氏は嘗て國家學會雜誌（大正六年一月號）上に於いて政府の提出案と調査書なる題下に政府の提出案其の他一切の議案類委員會速記錄並ひに各省に於ける調査の印刷物を一般公衆に販賣すべきことを提唱して居られる、余も亦常に此說を持するものであつて斯の如くして始めて正確なる立憲政治思想の普及涵養、正當なる輿論の發生を期待し又官廳調査の有效なる利用を望み得るのである。

無代價であるとは無償配付の長所なる如くであるが之は實は非賣品即ち金錢の支拂によつて之を得ること能はざることを意味するものであつて世人に自由購讀の機會を與へざるの短所ありといはねばならぬ。一般の世人は其必要とする各種の官廳調査書を各官廳に頭を下げて貰ひ步くよりはむしろ相當の代價を出して自由に購讀するの機會を得むことを希望するに相違ない。斯の如く官廳調査を公賣することは世人をして是等の調査書に接近し易からしめ且つ利用し易からしむるのみならず、他面に於いて公費を以つて作成せる印刷物を公人以外の特定の利用者就中其利用によりて利益を享受すべき者に對して無償にて贈與することの不合理を改むることを得る。此點より言ふも相當の代價を以つて販賣し公布の方法を取ると共に多少の收入を圖ることは所謂、一擧兩得の上策であると信ずる。

既に調査書を販賣品とすれば必然是等の目錄の作成せらるゝこととなり、古き調査書を求むる者も容易に之を購入し得ることゝなるであらう。

調査書の販賣が急に實施し難しとなればせめて毎月始めの官報に前月中に作成せられたる各官廳調査の目錄を掲載し特別の必要者には頒布するもの、來廳者には特に閲覽を許すもの等其他適當の分類をして公示するの方法を取ることを希望するのである。

今回の大戰亂勃發後政府は各種の調査會を開設し民間に於いても亦諸方面に於いて種々の調査機關を設置

してゐる。經濟調査といふことは今日我國官民を通しての流行の一つとなつてゐる。彼の政府の經濟調査會、臨時産業調査局、東京交換所の戰時經濟財政調査會、東京商業會議所の時局調査會其他特殊銀行、大會社等も爭つて調査機關の擴張、新設をなして互に後れざることを競つてゐる有樣である。

是等の調査機關の調査せる結果は頗る多方面、大量に達しをるが固より其總ての公表を望むとは出來ぬ殊に私的會社等の調査の公表せられざるは當然のことであるが政府の調査會、調査機關、半官的の調査會、半官的會社の調査機關等の調査結果は成るべく之を印刷し適當なるものは之を世に販賣頒布することを希望するのである。斯の如くして調査の二重三重四重となるを防ぎ得るのみならず適當なる調査機關を有せざるものを利すること尠からずと思ふ。

事實を假造する日本國民

茅原華山

日本國民は今や生死の境に居るのである、自生するか自滅するかの境に居るのである、私は警戒語としていふのではない、時人を鞭撻するが爲めにいふのではない、私が少時日本を離れ、世界より日本國民を客觀した結果としていふのである、卽ち客觀的事實としていふのである。

狂人奔つて不狂人亦奔るといふが、日本國民は全然感情に生きてゐる國民である、感情に生きてゐる國民といふとは暗示に生きてゐる國民といふことである、かの成金なるものは十億二十億の幾百千分の一を産み

得て狂人と爲つたのである、成金でないものまでが成金のやうな氣分に爲つて狂人に從つて奔る、若し假りに日米戰爭があつたとせよ、而して假りに日本が世界の一大産金地であるアラスカを占領したとせよ、日本國民は何んなに有頂天に爲ることであらう、富なくんば國家が維持されない、然れども富を獲れば自己の人格を破壞し併せて一代の人心を毒毒す、日本國民は富なくも不可、富あるも不可といふ國民なのではあるまいか。

日本國民は果して自己を異邦人として最も冷酷なる態度で觀照研究し得られやうか、そして無遠慮に其自己を暴露し得やうか、長を長とし短を短とすといふやうな微溫的な妥協的な態度ではなく、一切の短處、醜處、惡處、弱處を無遠慮に暴露するの大膽と勇氣とがあるであらうか、私は言ふ、斷乎としていふ、これなければ日本國民は救はれないと。

最も感情が昂騰して來た時は最も理智の活動して來る時でなければならない、一國民にして世界に雄視せんとならば、先づ此洗煉がなければならない、白晳人種は言ふまでもなく、支那人も或意味では確に此洗煉を經てゐる人間である、日本國民は然らず、感情が昂騰せるに從つて益す理智と隔離して來る、赤熱して了つて白熱しない、赤熱して了ふといふのは容易に我れを失ふといふことである、白熱するといふのは飽くまで自己を失はない、理性を以て感情を制御して行くといふことである。

戀愛は最も人間が情熱的（パツシヨナル）に爲る一時である、日本の男女は此場合に大抵我れを忘れて了う「我れを忘れる」これが日本國民性の一特色を爲してゐる、菊石も笑窪といふ、惚れた場合は相手の菊石が笑窪に爲るのみならず、短處も長處に、醜處も美處に、惡處も善處に、弱處も强處に爲つて了う、日本では「理も非もない」といふ、實際日本國民は理も非もない國民である、惚れたといへば全く判斷力を失つて了う、日本國民は事實を客觀界に點檢しないで、自己の想像の裡に事實を假造するのではないか、英國人は頭が心に勝ち、愛國

人は心が頭に勝つといふが、日本國民は心が頭に勝つのではないか。

惚れた場合は相手の菊石が笑窪に爲るから、惛んだ場合は相手の笑窪が菊石に爲る、一つの笑窪が俄に其數を增して滿面の菊石に爲る、長處も短處に、美處も醜處に、善處も惡處に、强處も弱處に爲る、理も非もないのである、日本國民は事實を客觀界に點檢しないで、自己の想像の裡に事實を假造するは爭ふべからざる國民性ではないか。

日本國民は事實を點檢しない國民である、そして點檢し得ない國民である、私夫妻が二三度結婚の媒介者として日比谷の大神宮に行つたことがあるが、或若い男女を媒介した場合が模範的日本流であつた、若い男は堅く口を緘して是非を言はない、惚れたとも惚れないとも好いたとも好かないとも言はない、若い女も亦堅く口を緘して是非を言はない、惚れたと言はないのみならず、好いたとも言はない、相手を客觀的存在の事實として決して冷靜に點檢しない、寧ろ專ら羞恥の念に制せられてゐるから、點檢し得ないのである、例の見合ひを遣つたが双方とも橫を向ひて了つて決して見合ひを遣らない、その以前に寫眞の交換を遣つたから、双方共に內處に寫眞を眺めて悅に入つたのであらう、純然たる寫眞結婚である、これは或は少し極端の例であるかも知れないが、日本の結婚は今日でも決して箇性と箇性とが結び附くのではない、男からいへば女でさへあれば可いのである、女からいへば男でさへあれば可いのである、箇性と箇性とが結び附くならば、先づ互相が相手を客觀的實在として研究し點檢して見ねばならない譯だ。

寫眞結婚といへば、日本の女と米國に於ける日本人の間に立派に寫眞で結婚が行はれてゐる、この寫眞結婚は往々互相の間の失望に終り、爲めに幾回か家庭の悲劇を惹き起した、日本國民は噓を吐く國民であることも事實である、有心故造で噓を吐くこともあるが、事實を想像の裡に假造するから其結果は噓を吐いたことに爲る、日本に居た女が米國に居た日本の男に欺か

されたといふこともあるが、欺かされるといふことが既に事實を客觀界に研究しない結果である、欺かされるといつても實は自ら欺かす場合が多い、女の方では所謂仲人口に乘つて米國に居る男を自己の想像の裡に假造して了う、向ふの男も理想の女を自己の想像の裡に假造して了う、女はアメリカを想像の裡に假造し、男を想像の裡に假造し、男の寫眞を懐にして、横濱、神戸を出帆する、碧海靑天夜々の心で、男が立派な偶像になる、男も亦一日千秋で無數の想像を逞しくする、女が何時の間にか天女と化してゐる、其處へ双方が引合はされる、男は女を一目して俺れの女はこんな女ではないといふ、女は男を一目して、若くは偸み見て、私の男は最う少し氣の利いた男だといふ、男は女に失望し女は男に失望するが、實はさうではない、男は自己が想像の裡に假造した女に失望し、女も亦自己が想像の裡に假造した女に失望するのである、互に相手に失望するのではない、自己に失望するのである。

事實を想像の裡に假造する國民は專ら感情センチメンタリズムに生きてゐるといふことである、專らセンチメンタリズムに生きてゐるといふは日本國民には理智インテレクチユアリズムがないといふことである、インテレクチユアリズムがないといふは日本國民には科學がない積極的の經濟生活がない商人に爲つてゐないといふことである。

日本國民に科學がないといふは日本國民には客觀世界がないといふことである、日本國民に客觀世界がないといふは日本國民に彼れがないといふことである、日本國民に彼れがないといふは日本國民には我れがないといふことである、彼れが科學と爲るとすれば、我れが哲學と爲る、科學も哲學もないといことに爲る、世界がない國家がないといふことに爲る、專ら情に生きてゐるから、智もない意もない、智が科學と爲り、意が國家と爲る、智が現實生活と爲り意が理想生活と爲る。

日本國民は最も國家的で且つ愛鄉心が深いといふ、私は言ふ、その愛鄉心なるものは循因因襲であつて、

その國家的であるといふは畜番因襲である、決して日本國民の推究推理された結果たるコンヴィクションから來たのではなく唯因襲である、現代に通用しないものである、不換紙幣であると。

人間は公開的の生活を營むべきものか、將た秘密的の生活を營むべきものか、私は決して一を取つて他を捨つべからずといふ、即ち兩者偏廢すべからずといふのである、然しながら西歐諸國民及び兩米の諸國民は專ら公開的の生活を營んで居るが、日本國民は專ら秘密的の生活を營んでゐるは客觀的事實である、英國のシドニー、ロー氏は其著『英國の統治』に於いて英國の内閣は政黨の委員會であつて又秘密の委員、であると言つてゐる、而して氏は此事實を論じて曰く、英國の内閣が秘密の委員會であることは最も驚くべき現象である、我々は多年耳目に慣らされて來たから其不可思議なるを遺忘して居り、人民に關係する大問題は必ず透過し得ざる暗黒の裡に決せらるべきものとして之を怪しまない、然れども自ら秘密内閣の一員たりしローズベリー卿が嘗て言つたことがある、民主政治の最も善く發達したる英國に於いて、一切が公開に於いて執行せらるゝにも拘らず、獨り最も國民の安危存亡に關する政治が絶對的沈默に附せらるゝは觀光の外人の殊に驚く所であると、日本に於いては最も大切なる問題は當然秘密に附せらるべしとするのみならず、最も大切ならざるものまでも秘密に附せんとす、英國に於いては最も大切なる問題なるが故に最も公開すべしと言ふのである、明に兩極端を代表してゐる、それには理由がある。

私は人間の生命は一つであるが、其作用は一個の原則に支配されてはならない、既に作用といふからにはそが幾多の變化あり、種々相を經し來るは當然である自明の理であるといふものである、日本國民は然らず一を取れば必ず他を排す、一他を併せ容るゝ雅量がない、之も亦日本國民が專ら感情に生きてゐる證據である、人間の生活の内容を論ずれば、眞と美と善とである、眞は科學で美は藝術で善は倫理であることは誰し

も異論のない所であらうが、これだけでは眞、美、善が分裂して歸一する所がない、善が一切を包容し統御せねばならない、善を倫理とすればそは小善である、且つ眞、善、美は科學、美學、倫理學だとすれば、哲學の居處がなくなる、實際現代に於いて哲學が戸惑ひしてゐる、哲學は宇宙觀でもあり人生觀でもある、私は日本國民が眞、美、善を包容して如何に世界の表面に意義ある生活を爲さんかとする根本原則を樹立するが哲學であるといふのであるから、哲學なるものは大善の學であらねばならない。

眞は科學である、哲學は自己の理想である、一は彼れの學で一は我れの學であるとすれば、人間の生活は大別して現實の生活と理想の生活とに分れられる、支那人は最も現實の生活を營んで居るものであるが由來科學がない、白哲人種に至つては科學を侍婢として現實の生活を營んで居るものである、現實の生活は動物の生活である。白哲人種は意識的動物である。

科學は現實生活の侍婢であるといふことは商の侍婢であるといふことである、世界生活は商の生活である世界生活は商に依つて開かれたのである、科學で自然を征服するといふは商で世界を開くといふことである故に白哲人種は商中心の生活を爲して居るのである、世界は富を造るの手段である。

科學は眞である、原因結果の自然法を創造するのである、商は利である、利は數へることである、客觀世界は一切因果てふ機械法に依りて支配せらるゝとするは科學である、客觀世界は一切數量の世界であるとするは商である、故に科學も商も平等觀で無差別觀で、それから胚胎して來る思想は數量的人生觀である、功利主義もプラグマチズムも皆それである。

商は數へることである、科學は數へることから始まる、常に彼れがある、正直に爲らねばならない、商の要は正直である、白哲人種は概して正直である、支那人も或意味では正直である、日本人には商業道徳がないといふが、そは適切にいへば「商業的正直」がない、「商業的打算」がないといふことである。

商を中心とする生活は社會生活である、社會生活は平面に擴大して行くものであるから世界生活である、世界は商の眼から觀れば一の社會である、社會生活は正直を中心とする、正直を中心とするから公開を本色とする、英國は我々の所謂國家ではない『海洋を道路とする世界大のヴエニス』これが英國であつて、而して英人の誇りである、英國は商の都會である、正直を其中心とする、最も國民に大切なる問題なるが故に最も公開せざるべからずとする所以である、社會生活は自治を主とする、自治は民主である、社會政治は卽ち民主政治である、英國には社會があるが國家がないことを記憶せねばならない、英國精神の流れを汲む米國も其根本精神は一つである、社會民主政治である。

日本は無科學の國である、從つて無商の國である、日本國民には自然もなければ世界もない。

日本國民には慥に自然がない、反つて自然に埋沒してゐる、日本國民は所謂內地ならでは生活がし得ない國民である、日本國民は鎖國因襲に支配されてゐるから、外國に在れば忽ち猛烈なるホームシックに罹る、貧乏しても可いから內地に生活したいと憧憬する、米國で發狂したものを送還すれば、富士の山を望見して癒る、橫濱、神戸に上陸すれば『ア、日本だ』と言つて治まるのである、內地といへば本島、四國、九州の一萬八千方里である、日本國民の自然は此限られた自然である、日本國民は決して此自然を征服しないのみならず、更に他の自然を征服する慾求がないのである此一萬八千方里の自然を征服するのではない、此一萬八千方里の自然に併呑され埋沒してゐるのである、科學的に自然を見ないで感情的に情緒的に自然を見るのである、若し梁川星巖といふ詩人が『臨別誰能淚黯然。無情花竹亦纒綿。空景風宿人猶戀。况我淹留二十年』と歌つたことがある、日本國民は今の國土に淹留すること二千五百七十八年である、花竹は無情のものである、富士の山も一目千本の吉野の櫻も決して日本國民と意識的の交渉がある譯ではない、冷眼以て日本國民の盛衰興亡を看るのである、然れども日本國民には日

本の自然は盡く無情の花木も亦纏綿といふことに爲つて、自然が我れに纏綿するのではない、我れが自然に纏綿するのである、そして我れの自然に纏綿するの情緒を彼れに投射して自然も亦我れに纏綿するものと極めて了つて自ら意識しないのである、一萬八千方里の自然に併呑埋沒して居るではないか、日本國民には自然を征服する科學がないといふは偶然ではない。

日本國民には僅に世界がない、日本帝國は自然的にも鎖國である、而して人爲的に鎖國した、徳川氏は其將軍政府を維持せんが爲めに極端なる消極政策を行つた、日本國民を去勢して去脳したのである、徳川氏が日本國民に禍したことは爭ふべからざる事實であるが徳川氏の自滅政策に服從し、嘗て此鎖國の鐵帶を破つて世界に突出しやうとしなかつた國民も亦決して生活力の横溢した國民とは言へぬではないか『久方の光りのどけき春の日にしづ心なく花の散るらん』日本國民は是の如くにして國民の生活力を消滅しつゝありし間に白哲人種は南北兩米を開き南北亞弗利加を開き、濠洲、ニユー、ジーランドを開き、南洋を征服し、印度を征服し、支那を開き、又好まざる日本を開國ずべく餘儀なくしたのである、白哲人種の生活は遍く世界に伸び而して日本國民は所謂内地、本島、四國、九州に縮つて居つた、僅かに世界がないではないか、私が斯う言へば日本人は直きに和寇を引合に出すが、和寇にせよ桃太郎にもせよ、その根柢に經濟的理性があつて世界を家として富を攫むといふのではない、ワットいつて出掛け、財寶を奪掠するや、ワットいつて引上げやうとするのである、白哲人種が全世界に伸びたのと其性質を異にしてゐる。

日本國民には自然がないといふは無科學といふことである、日本國民には世界がないといふは無商――工も農も商の手段と――いふことである、無商であるから無工である無農である、一言にして盡くせば、客觀世界がない彼れがないといふことである。

日本國民にはそれ故、眞がない正直がない、日本國民には嘘の多いことは日本國民自ら之を爭ふ譯には行

くまい、何故嘘が多いか、專ら感情に生きて、事實を想像の裡に假造するからである、最も正直といはるゝ人々も必ず嘘がある、自己を內省して見れば、日本では實際嘘を吐かねば生活が可能ないのである、田所文部次官が會て面白いことを語つて居つた、或時氏が歸宅するや否や、電話が掛かつて來た、今面會したいといふのだ、氏は大分疲勞して居つたから、取次ぎに未だ歸宅しないといへと命じた、疲勞してゐるからといつて斷つては何うも氣の毒だといふが日本國民の人情である、そこで未だ歸宅しないといへと命じたのである、氏の小供は傍でそれを聽いてゐて變な顏をした氏は飛んでもないことを遣つた、實は小供の前で嘘を吐いたのだ、身文教の職に在るものとして申譯がないと懺悔した、後或女學校の卒業式で、訓話の序、客を斷るに留守を使ふものではないといつた所が、保證人が續々遣つて來て、あれだけは取消して吳れろ、留守といつて斷れば斷り可いが、今は斯う云ふ譯でといつて斷るは氣の毒である人情に反くといふのである、日本國民の生活が理智の上に築かんで人情の上に築かれてゐる、嘘で固められて居るに不思議はない、嘘で固めた生活に秘密が多くなるは自然ではないか、人情は理智に飜譯すべきものである、それを人情を人情で行かうとするから嘘に爲る虛僞に爲る、今や日本も人情では行かなくなつた、若し理智の生活を建設する能はずんば僞人情の生活に爲る、其弊や言ふに忍びざることに爲る。

客觀世界があつて主觀の世界があるのである、彼れがあつて我れがあるのである、鎖國因襲に生き積極的經濟生活のなかつた日本國民には主觀の世界がない我れがないのも理の自然である、自然と衝き當つて行かないで自然に併呑埋沒されて了つた、世界に推し出して行かないで世界と隔離して了つた、科學がないと共に哲學がない、日本國民は何んと言つても內容空虛である、空ッポーである。

私は日本國民の愛鄕心なるものは鎖國因襲である、その國家的なるは舊藩因襲であるといつた、日本國民

は現在に於いても全然因襲に生活して居る。維新も既に五十年で、西洋を模倣することも久しいものだが、日本國民の生活の根本は少しも改つてゐない、革風易俗の業は決して成つてゐない、日本には全然自治の社會生活がないではないか、民主の社會がないではないか、我々が理智生活を建設せんとならば、先づ民主の社會を建設せねばならない、然るに民主の社會は知らず安くに在る、多くの例は引かないが、あの電車を昇降する日本國民を見よ、電車の數の少ないといふ理由もあらうが、車の前後から乘客が降りて來る、降りるのを待兼ねて短氣の國民は早く電車に乘らんとあせるではないか、それも順序もなく次第もなく我れ勝ちに乘らんとするではないか、男が先きに降りるのか、女が先きに乘るのか、子供を何うする女を何うする、一切が混亂ではないか、雜鬧ではないか、コンフユージヨンではないか、車の前後から昇降せしめ、前から乘れば後へと詰められる、後から乘れば前へと詰められる、乘客は降りる際に不便であるから、皆入口にシガミ附いて中は眞空であることがある、此日本國民に理智の生活があると考へられるか、理智の生活のない國民に民主の政治があり得やうか。

日本國民は社會的に歩るけない、日本の道路それ自身が社會的に爲つてゐない、大多數の場合、步路もなければ車路もない、世界に於いて最も不完全なる原始的な道路を有する一等國、それに東京の都會でも人間が社會的に歩るけない、左側も右側も步路も車路もない、全くの混亂、全くの雜鬧、全くのコンフユージヨンではないか、其間を自動車がやつて來る、自動車を發明した人間と自動車を商品として買つた人間とを同日にして視ては可けない、日本國民は彼れに寫眞機械があれば我れにもある、彼れに電信電話があれば我れにもある、彼れに自動車があれば我れにもある、それ故に彼れも我れも同じ文明國民であるといふは考へない國民の言ふことである、臺灣の生蕃も鐵砲を有つてゐる。

藝術の問題は姑く置く、人間には理智の生活と情意

の生活とがある、前者は現實の生活で後者は理智の生活である、理智の生活では一切を客觀視する、之を人間の生活でいへば散して萬人に歸する民主の社會である、情意生活は集つて一人に歸する君主の國家である理智で女を視れば、女は皆平等の女である、情意で女を視れば其中一人の女を擇んで以て全體の女を知るのである、女を客觀的に視るは生理學的に視るのである、好惡愛憎はない、それが我情意に入り我主觀に入り來れば、此處に鍾情の生活と爲る、然しながら理智で女を視て而る後或一人に對して鍾情の生活をするとすれば、それは意志を根柢としての鍾情である、單に一時の情緒に驅られた淡い愛情ではない、是の如くに君主の國家は民主の社會の上に建設されて始めて意志の國家たり哲學の國家たり得るのである、社會能く積極的に富を造り、國家能く理想的に富を使はねばならない萬衆兆自ら生とするのでなければ社會は可能ない、確實なる中心を攫み集中點を攫まねば國家は可能ない、民主々義卽平和であるとすれば、民主の社會が公開を主義とするに不思議はない、絕對主義卽ち戰爭であるとすれば、君主の國家が秘密を主義とするに不思議はない、ダニエル、ウエブスターが言つたことがある、「眞面目の戰爭は討論の指導と干涉との下に、戰はれない」と、日本國民は舊藩因襲に生きてゐる、その國家的といふは實は舊藩的なのである、英米諸國では國家が社會に埋沒し、日本では社會が國家に埋沒して了つた、故に日本國民は一切を舊式の戰爭主義國家主義で遣らうとするのであるから、秘密を主とする國民に爲つた、新聞に出てゐる外國の電報を政府の役人は極秘と捺印する、日本人の商賣を遣るのが全く戰爭式である。

鎖國因襲は日本國民をして世界的に生活する能はざらしめ、封建因襲は日本をして積極的に富を造る能はざらしめた、世界を家として國家に歸着す、富を世界に集めて之を國家の理想を實現するが爲めに散ず、之が日本國民の理想生活であらねばならぬ。此意味では日本國民は未だに世界の市民と爲つてゐないではない

か、世界の市民と爲つてゐないから、私の言ふ意味では全く國家の臣民と爲り國家の公御財(オホミタカラ)と爲つてゐないではないか、昔しは農業さへ勸めば國家の公御財となつたが、今では科學の洗煉を受け機械の運用に長ずる工人と爲らねばなるまい。

日本國民は動もすれば輙ち現實に生きないで理想に生きんとする傾向がある、之を僞理想(シユードウ)主義といふのである、理智を基礎としないで直ちに理想に趣かんとするのであるから、それがセンチメンタリズムに墮して了うのである、センチメンタリズムに墮して了うから、一を取れば他を排することになる、理も非もなくなる、味方の遣つたことは理も非もなく擁護する、敵の遣つたことは理も非もなく排擠する、日本の政治は立憲政治でもなく國家政治でもなく社會政治でもなく、國家も地方も盡く政權爭奪である、そして君主々義といへば民主々義を排する、民主々義といへば暗に君主々義を排する、君主の國家は民主の社會がなければ、物質上の基礎がない、民主の社會は君主の國家がなければ、其歸著渇仰する中心を喪ふ、一大君主の國民で一大民主の國民に爲らねばならないのだ。

新渡戸稲造博士が近ごろ公にされた論文に『國家心より國際心へ』といふのがある、私はそれを讀まなんだが、博士が米國で講演された論文集『ゼ、ジャパニース、ネーション』は船中で閲讀した、その日本の致命を論ぜらるゝに方つて、我々の忠義は我々の主人に對する關係を以て終つては爲らない、我々は啻に臣民であるのみならず、市民である、日本の市民たるのみならず、世界社會の市民であると謂はれて居る、所謂國家心より國際心へと行かんとするのである。此處で博士も亦センチメンタリズムに墮せられて居る、何うしても國家を出でゝ世界に入らんとするのである、一を取つて他を排するの傾向あるを免れない、私は日本國民は鎖國因襲、封建因襲から出でゝ、世界的に現實生活を營み、更に國家に歸着せねばならないといふ、博士は世界が理想であるやうに言はれる、世界が理想であるのは米人の理想で、又近ごろ路透電報會社が特に

雜誌で新刊紹介をしたサア、エドワード、グレーの理想である、世界大のヴェニスの商人の理想である、所が博士は商人であるから世界を理想とするのではない世界生活は富を造る商の生活であるといふ明白な意識がないから、世界生活は人道主義だとか平和主義だとかいふので、世界を抽象して了つて世界といふ別な事實——幻影を博士の想像の裡に假造して了つて言ふのである、米人や英人は根本が商人で唯物主義だから世界主義を主張し、博士は根本が商人でないから、僞理想主義から、世界の市民だとか、國家心より國際心へといふのである、一は理智生活の言はせる所で、一はセンチメンタリズムの言はせる所である、形式は一つで内容は全く相異してゐる。

封建因襲に生きてゐる日本國民の最大特徴は戰爭本能である、日本國民は一切を戰爭で決せんとするのである、之を外にすれば戰爭と爲り、之を内にすれば暗闘と爲り、排擠擯斥と爲り、朋黨比周と爲る、人道主義をいふ藝術家位暗闘を甚しく遣るものはない、平和主義をいふ學者教育家位排擠擯斥、朋黨比周を遣るものはない、人道主義は自己の想像の裡に假造したもので、實生活とは一向に關係がない、平和主義も亦自己の想像の裡に假造したもので、實生活とは一向に關係がない、日本國民は知と行とは聯絡のない國民である社會のない日本の講壇で社會學の講義を遣つてゐる先づ哲學的に國家國民の内生活に樹立しないで、平然として獨逸の國家學を講じてゐる、西洋の事實を日本で抽象してゐる、西洋の現實を日本で空論してゐる。

烏合の俊才、無學の學者益す多くして日本國民の思想は益す混亂せんとす、實以て遣り切れないではないか。

秘密なき家庭の幸福

早大教授　安部磯雄

秘密といふ事は大體から云つて甚だ宜しくない。私共一個人としても、願はくは秘密の無い生活を送りたい。又一國に取つて考へても、國際間の關係は昔は秘密にされて居た、寧ろ秘密が當然の事と考へられて居たが、近頃世界に民本主義の思想が盛んになり、外交の秘密に猛烈な反對が揚げられて來た。獨逸でも米國でも佛蘭西邊りでも、少し新しい考、殊に民本主義の思想に傾いて居る所の人は、何うしても將來は外交上の秘密を無くさなければならないと思つて居る。今度の戰爭も數人の外交家が秘密に行つて居た爲めに大事件を惹起したのである。初めから外交の問題を開放主義に行つて居たら、國民も十分に自分の意見を吐く事も出來て、今度のやうな戰爭は起らなかつたに違ひない。將來は外交も公明正大にやつて、秘密を拔きにしたものにならなければならないといふ說も行はれて居る。個人に取りても國家に取りても秘密が可くないならば、私共の家庭に於ても亦秘密の可い筈はない。

秘密といふものを他人に握られる位人間の弱味となるものは無い。秘密を握られる事は卽ち、其人の爲めに生殺與奪の權を握られると同じ結果になる事が少くない。之に反して人の秘密を把むで居る事は非常の强味で、秘密を知られた者は其人に對して頭が上らない。天主教では一週の中或特別な日を定めて、信者が教會の僧侶の前に自分の秘密を告白する慣例がある。それは丁度神の前に出て自分の罪を白狀するやうに一週に一度僧に向つて告白するのである。僧侶は神に向つて其

人の告白した罪の謝しを願ふので、如何にも條理が立つて居つて、其動機なども熟く考へたならば良い考から出て居るのであらう。然しそれが如何いふ影響を及ぼして居るかといふと、天主教の僧侶は一般信者に對して絶大の權力を有つて居る。云ふまでもなく信者達の秘密を握つて居るからである。固より私は信者が自分の秘密を坊さんに打明けるのを非難するのではない。加之宗教上の立場から、懺悔を受けた坊さんは決して其秘密を他人に洩らす事は出來ない、違約をすれば死ぬとなつて居るので、信者も安心して自分の秘密を告白するのである。そんな風で假令他に洩す事は禁ぜられてあつても、兎に角秘密を知つて居るのであるから、坊さんは信者に對して精神上深甚な權利を有して居る。之れが宗教の方面であるから何事も起らないが、宗教以外に在つては、一人が他の秘密を知つて居るとなると恐ろしい弊害が起る。折々權力あり地位の高い人が、自分の部下の例へば秘書官などのやうな者に秘密を知られて居る爲めに、一生比較的詰らぬ地位の人に頭を押へ付けられて居る人がある。厭だと思ひたらも縁の切りやうが無く、時には強請に來られて金錢をせびり取られたりする例は、世間に乏しくないやうである。其點から考へても、人は秘密の無い程幸福な事はない。秘密が無い人なら天下に公明正大に獨立獨行が出來る。であるから斷じて私共の生活には、秘密の無いやうにありたい。

併し方面を變へて。或る場合には秘密を守らねばならぬ事がある。自分の事よりも他人の秘密などを、何うかして知つて、(全體他人の秘密を知るのは可くない。が私共には屢々好奇心から他人の秘密に觸れたり、又は已むなく知らされたりする場合がある。)それを守るといふ事は、惡い所ではなく、寧ろ一つの道徳であると思ふ。或る國の王樣が何か一つの秘密の事柄を知つて居るので、家來が或時それを聽きたいと嘆願した所、王樣が其家來に向つて「お前は秘密を守る事が出來るか」と訊ねた。家來は直ちに「守ります、堅く守る事が出來ます」と答へたら、王樣は「朕もお前

と同様秘密を守る事が出來る。といふ話を私は曾て讀んで、立派な話だと思つた。人の秘密を守るからは。死んでも守り通す位の堅い道德心が必要である。秘密を守らない爲めに、互に感情の行違ひを生じて誤解を生ずる例は澤山ある。昔の歌に

話すなと人に話せば其人は
話すなどゝ話す世の中

といふのがあるが、實に能く人情の機微を穿つたものだと思ふ。此事は秘密だが君だけに話すといふ調子で、それからそれと秘密が話されて他人に洩れて終ふ。苟くも一遍話したら、もう秘密は守られない事になる。之れが世の中の誤解や感情の行き違ひを生ずる基である。であるから守るべき秘密は、必ず嚴く守を心懸けが必要である。然し本來から云へば、私共はそんな必要の無い境遇に居りたいと思ふ。

家庭の事に就ても此規則が當て嵌まる。先づ夫婦の間から申せば、夫婦の間に秘密といふやうな事の有る筈は無い。秘密のある事が兩方に知れたら、夫婦の間に良い感情の起るものぢやない。世の中には夫婦の關係が二人で一人、一心同體といふ理想通りに行かないのが往々ある。之れは夫婦の何れかに秘密が有るからで、秘密が有れば同じ心に成れる筈はない。近頃屢々若い夫婦が打解けたいなどゝいふ不平を聽くが、それなども恐らく互に物事を秘密にしやうとするからであらう。どんな小い事にでも秘密が有つては、感情の融和を見る事は六つかしい。若い細君が例へば紙入を落したりした場合、それと明ら樣に打明ければ可いのに、主人に氣の毒だと云つてコッソリ實家に行つて貰つて來たり、月末の不足を主人に内密にお母さんの所へ持ち込んだりする事は何でもない事のやうに考へて居るが、實は之れが第一面白くないのである。金錢上に秘密が有つては、家庭の内は圓く行かない。夫に相談もせず實家へ行つて補助を得たり、内密で貯金るしたりするのは水臭い。そんな事が若し子供の耳にでも入つたら、教育上少からず惡い結果が及んで來る。財政上の點で秘密が有るのは夫婦の關係を惡くする。收入や

財產は凡て同じやうに知つて居なければならない。又主人は働く人であるから、多少無駄費ひをしても構はないが、唯其使ひ道を細君に明かに話す事が出來るやうにしたい。私の友人には收入を全部投げ出して會計を細君に托し、入用の金を細君から更めて受取る人もある。いろ／＼心配な事が起つた時にも、矢張一緒に家內に知らした方が、知らされた細君の方でも氣持が好い。智慧が無いから十分な助けを爲る事が出來ないとしても、主人は何でも隱さず打明けて吳れるからといふ安心を得る。機會さへあれば四方山の話をして、何でもかでも話し合ふ。細君は亭主の離守に起つた家の內の出來事も話し、亭主は外出中に見聞した事を語り合つたら、兩人の心の打解け合はぬ筈はないと思ふ。

併し玆に一つの例外があるのは、秘密を悉くさらけ出すといふ事は、果して夫婦關係に於て幸福であるか否かといふ事である。夫婦にならぬ前に、互に人間であるから、或は品行上について、何うも他人に話しては可けない事がある。さやうな事は夫婦の約束をする時に話したなら別問題である。又さうするのが當然である。例へば男子ならば自分の身體に他人に話せぬ病氣があるとかいふ場合がそれである。約束する時に話したなら格別であるが、夫婦になつてからは、秘密が可けないからと云つて、結婚前の生活まで曝らけ出すのは何うかと思ふ。寧ろ過去の生活を餘り赤裸々に云ふのは疑問である。「過去は咎めない」と云ふ昔の人の教訓も有るやうに、過去の生活を切り捨てゝ終ふべきであると思ふ。過去を正直に告白して却て相手の幸福を害ふ例も少くない。私の門戸解放は結婚の生涯から將來にかけて初まるので、過去は咎めない。若し其必要があれば、結婚の約束をする當時にすべきが、當然の德義であると思ふ。

以上は夫婦の間の事であるが、親子の間でも秘密が有つては可けないと思ふ。金錢上の事に就いては、殊に少しも秘密にしない方が宜しいと考へる。子供から云へば親が何の位の財産を有し、何の位の收入があるか知つて置いた方が爲めになる。今日の家庭のやうに、

全く親の財産や收入を秘して置くのは、却て子供の爲めに非常に惡い結果を産む。卽ち親の財産を誇大に考へて、澤山有るから少々は費つても構はないといふ風に考へて、遂には邪路に踏迷つたりする場合が往々あるやうである。親が財産狀態を悉皆知らせて、收入が少ければ少い、負債が有れば有るやうに告げたなら、子供の心も引き緊つて、親にさう負擔を掛けては濟まぬといふやうな心にも成る。親も前から財産が有るなら有るやうに話して、斯く〳〵だから何ういふ風に分配しなければならぬと平生云ひ聽かせてあれば、遺言もなくフト死んでも、後に其子供達が分配などについて互に厭やな感じをする事も無からう。又同じ子供でも腕の有る子、弱い子、無智な子とそれ〴〵に應じて分配の仕方を細かく言ひ聽かせて置けば、死後に思ひ殘す事も無くなるであらう。非常に財産が有つて、それを皆子供に分配するのは爲めにならないといふのならば、內幾割は社會全體の爲めに成るやうに處置する事も出來やう。

最後にも一つ私は日本人も、も少し自分の家庭を他人に開放して貰ひたい。も少し門戸開放を廣き意味に解して貰ひたいと思ふ。概して西洋人の家庭は開放主義である。例へば物質的方面でも、家などは親戚の者は勿論、普通の人が來ても、見せなければならない時は、臺所でも風呂場でも開放して見せるといふ風である。外國で生活した時に實驗したが、大概の家は何時でも差支へなく、家の隅まで見せて食事でも便所でも風呂でも家族と一つである。日本にも支那の留學生が澤山居るが、彼等を一人二人預る事がさう手輕に行かない。詰り私共は自分の家庭を打つ開らいて行く考が足りない。幾許か排他的の思想か強く養はれて居るからである。家屋でも板塀や高い土塀に圍まれ、甚だしきは煉瓦の塀を巡らして漆喰で堅め、硝子の破片などを立てゝ見ても不愉快なのがある。人を見たら泥棒と思へといふ考を露骨に表はして居る。知らず識らず封建時代の城の中に閉ぢ込もつて居るといふ考で家に引込つて居るのである。西洋人は開放的で、殊に米國邊

りにはアンナ塀などは皆無と云つて可い位、唯僅かに鐵柵を巡らすのみである。庭園などは外から見えて全く門戸開放である。

形は何うでも可いとして、住宅としても應接間以外臺所などには親しい者でなければ通さない。經濟上の理由にも由らうが、お客が來ても一家族と食事を一緒にする事は極めて稀れで、唯主人と食卓を共にする位である。外國へ行くと子供などは客と一緒に食卓を圍んで賑に食事するのが普通である。一口に云ふと日本人は自分の家の内を誰にも見せる事が非常に厭やなのである。客が有つても細君が出て來ぬやうな家は少くない。畢竟日本では家の内の生活と、外に出た生活とに隔たりが有り過ぎるのである。内に居る着物と外出の着物と異つて居て、平常着で客に接するのが厭やなのである。

元來日本人は決して無愛想な國民ではない。外國人に對しても極く親切であつて、彼等を待てなすに缺けた所はない。が、何うも家庭生活に秘密があつて、門戸開放的になつて居ないから、異分子を容れる事が出來ない。此點大に歐米人に學ぶの必要がある。何の家庭でも異分子を容れなければならぬと云ふのではない。併し何時でも私共の家庭に、親戚や友人は勿論、他人から頼まれゝば見ず知らずの學生を置くといふ事が手輕に出來るやうに生活せねばならない。家庭の内部を異分子に見られては耻かしいといふやうな生活をして居つては面白くない。秘密は何もコソ／＼話しをして居るとか、他人に知らてならぬやうな事許りではない。異分子に見せてはならないといふのが既に秘密である。客があるとキチンと餘所行きの態度を乘り、居ないとダラシの無いやうな生活をする、それが既に秘密なのである。貧乏や粗末な家は毫しも耻しくない。裏も表も無い、造り飾りを抜きにした、臺所でも何所でも他人に立入らせられる、部屋が有れば書生でも見ず知らずの人でも下宿せしめ得るやうな生活こそ門戸開放の家庭である。さういふ所を理想として居たら、私共の家庭には和樂が自ら生じて來る。異分子を容れて

差支へない家庭を造るのが、即ち家庭の幸福を増す所以である。

ロシヤ魂の神秘

片上伸

一

魂の生活は神秘である。いかにありふれた一人の人の生活でも、その營みには、容易に他の思議することをゆるさぬものがある。それは一つの國民の生活に於いても同じである。その生活の複雜多面な營みの契機は、外國の觀察者などの容易に窺ひ知ることをゆるさないものがある。祖國を深く愛した詩人チユッチエフが、ロシヤを歌うた詩の中で、

異種族の傲慢な眼(まな)ざしは
汝の謙遜な赤裸々の中に
隱見しまたはひそかに爍くものを
會得せぬであらう、氣附かぬであらう。

と言つてゐるのも、必ずしも無理ではない。ロシヤは昔から選ばれたる見えざる建築師によつて、彼等自身にも見えざる石を積み重ねて、聖丘の上に建てられた國であるなどとも謂はれてゐる。ロシヤの魂は、果てしない大地の髓に潜んでゐるとも謂はれてゐる。不可思議な東方的の國として、昔から「異種族の傲慢な眼(まな)ざし」に映つて來た國である。傲慢な異種族、即ち西ヨーロッパの前には、ロシヤは奇異なる「東」であり、秘密と野蠻との「東」であつた。ロシヤは今でも尚、エキゾティックな、異常な鋭い新らしさを有つてゐる東方の國として見られがちである。現に、日本の眼もまたかういふ風に見てゐるではないか。エキゾティック

であると見る限り、そこには世界的なるものよりも、尙はるかに多くの地方的な特殊なものを保留してゐると豫想する。而かもその一方で、ロシヤは昔から、何か大いなる世界的の使命を帶びてゐる無二の國であるやうにも謂はれて來た。帝國としてのロシヤが、世界の謎と思はれてゐたやうに、もしくはそれ以上に、ボリシエヰキのロシヤは白日に見る世界の不可思議であるかの如く思はれる。由來ロシヤは、ひとり傲慢な異種族にとつてのみならず、ロシヤ人自身にとつても、容易にその本體を會得しがたい一つのスフインクスであるかの如く見える。とにかく、ロシヤの世界に於ける位地は、さま〴〵の方面から見てまだ甚だしく不確定である。ロシヤはある大いなる世界的な問題の前に立つてゐるらしいが、その問題の何であるかも、今のところ不確定であるといはねばならぬ。ラテン文明やゲルマン文明に代つて、スラヴの文明が將來の世界に光りを與へるか何うか、スラヴの魂の力が世界の內面生活に革命を喚び起こすか何うか。それ等も容易に言ひがたい。何のかくすところなく、己れを世界の白日に曝露してゐる今のロシヤこそ、「汝の謙遜な赤裸々の中に、隱見しまたはひそかに燿くもの」の容易に會得しがたきことを、尙更に感ぜしめる。

二

アルツイバーシエフは、千九百十七年以來の革命のロシヤを、惡い意味での「イワンの馬鹿」であると言つてゐる。實際今のロシヤには、靜ひの場で踊つてゐるやうなところがある。現實を支配する能力の不足は、ロシヤ人自身をすら驚かしめる。個人的利害を忘れねばならぬ時に、利己的な社會階級戰のために一切を忘れ、ロシヤ本國の四分の一以上、フランスの三分の一以上、全ベルギー、全セルビヤ、ルーマニヤの占領せられてゐる中で、無併合無倍償の平和を說いたものは、この「イワンの馬鹿」ではないか。この「イワンの馬鹿」の唱へるところは、或ひは最も重大な且つ必要なことであるかも知れない。事そのものは善いことでもあらう。たゞ、この「イワンの馬鹿」は、時と場

所とをわきまへない。前後左右を顧みない。いつでも、何處でも自分の思ふまゝを直ぐ行はうとする。葬ひの場で踊らうとする。而して、この葬ひの場での踊りの、最も甚だしいものゝ一つは、國命を賭して相爭ふ世界の大戰の中での戰爭の絶對的否定である。絶對の眞理としてのインテルナチョナリーズムの主張である。

戰爭の絶對的否定は、ロシヤ國民の心の髓から湧き上る聲である。葬ひの場での踊りとも見える戰爭の絶對的否定は、ロシヤ國民性の破壞しがたき秘密の曝露である。而してまた、戰爭の否定は、この「イワンの馬鹿」の心の秘密であるといふよりも、寧ろ生理的の秘密である。暴力に對するロシヤ人の反感嫌惡が生理的であるのは、丁度、吾々にとつて人間の肉が味覺の上で反感を起こさせるのと同じことである。人肉を喫ふに堪へないといふことは、利害の打算や前後左右の顧慮からでなく、少くとも吾々人間にとつて、生理的本性に基いてゐる。人肉を喫ふことが絶對に出來ないことはないかも知れぬ。しかし人間にとつて人肉はたとひ喫ふとも味がない。味がないばかりでなくて、强い本能的な嫌惡を感ぜしめられる。人肉の無味を感ずるやうになつたのは、恐らく人間性に起こつた故も後の幾兆であらう。ロシヤ人にとつて、戰ふことは「人肉を喫ふ」ことである。人肉の喫ふに堪へざるが如くに、喫ふ可からざるが如くに、戰ふに堪へず戰ふ可からずと思ふのが、ロシヤ魂の本能的生理的な發露である。

人肉は喫ふ可からず、戰ひは戰ふ可からず、而かも今は最も戰ふ可き時である。戰はねば生きられないかも知れぬ時である。「イワンの馬鹿」の惱みはそこに在る。而して又現代の悲劇的苦惱はそこに在る。現代の眞苦しさはそこから生ずる。「イワンの馬鹿」はこの眞苦しさを、世界の何人にもまさつて最も深く本能的に感じてゐる。葬の場で踊る「イワンの馬鹿」は、自から明らかに意識することの出來ない世界の苦しみを、一人で背負うて狂ひ踊つてゐるのかも知れない。とにかく、そこに「イワンの馬鹿」の魂の人知れぬ惱みがあり、スラヴ民族の魂の秘密がある。

しかし、「イワンの馬鹿」は、自分の國を愛しないのではない。國民的自負、國民的矜恃を有たないのではない。「イワンの馬鹿」には、偉大なる國民的矜恃がある。「イワンの馬鹿」は、深く自分の母國を愛する。「イワンの馬鹿」が母國を愛するのは、その母國の民が、人肉を喰ふことを、何人にもまさつて甚だしく厭ふが故である。内心のインテルナチョナリーズム、戰ひの絕對的否定、平和の絕對的確保、世界各國民の友愛——何人にもまさつて、これ等を必要とし重大とするが故である。「イワンの馬鹿」がロシャを愛するのは、葬ひの場で踊る自分の姿を、同じ母なる廣野から生れた兄弟に於いて見るからである。

十九世紀の中葉に於ける世界の思潮は、ロマンティックな愛國的懷古的精神に色どられた。それがロシャではスラヰャノフィーリストヲとなつて現はれた。スラヰャノフィーリストヲは、スラヴを愛する主張で、いはゞスラヴの國粹讃美である。このスラヰャノフィール、卽ちスラヴ國粹讃美者の一派が、ロシャを讃美したのは、ロシャ國民に地方的一國的精神が少なくて、全人類的、キリスト敎的精神が最も豐かに宿つてゐると信じたからである。スラヴ國粹讃美者の一派の矛盾も、そこに在るやうに謂はれてゐるが、しかしとにかく、ロシャ國民が國民的偏狹の氣風に乏しくて、全人類的超地方的精神を豐富に有してゐる、點を力めてあげたのである。

ドスタエーフスキーも、ロシャ人は全人類的であると信じ、ロシャの魂は世界的であると信じた。人肉を喰ふことを最も嫌ひ怖れたのはトルストイである。トルストイは、自己の肉體の重さと束縛とから脫しようとしたばかりでなく、自己を圍繞する國家的肉體の重さから脫しようとした。これはトルストイにとつては、深い必至の倫理的要求であり、また實に宗敎的要求であつた。彼は人肉を喰ふことを想ひ浮べるばかりでも、總身(さうみ)のよ立つのを感じ、身慄ひをとゞめることが出來なかつた。彼は非凡な强い肉體を有ち、非凡な銳い肉體の感受力を有つてゐた。隨つて彼は人に幾倍して深

く鋭く生理的嫌惡を感じた。生理上の解脱を欲した。いかなるロシヤ人にもまさつて、また隨つていかなる世界の人々にもまさつて、肉體の重さに苦しみ惱んだのはロシヤ人中のロシヤ人であつたトルストイであらう。

ロシアの政治は、昔から外來の異種族の手で行はれて來た。スラヴ民族時代に北方スヰーデンから迎へたワリャークのことは言ふまでもない。近世の政治は、獨裁帝政は、凡てドイツ傳來である。メレジュコーフスキーの言葉で言へば、ドイツのカリケチュアである、侵略主義はロシヤ國民本來の素質から來てゐるものではない。ロシヤ國民本來の素質は、生理的に人肉を喰ふことを嫌惡する。ミリュコーフはダーダネルスの海峽を思ひ切ることが出來なかつた。今でも恐らく思ひ切れずにゐるであらう。しかし、ロシヤ國民の本性から言へば、萬人のミリュコーフよりも一人のトルストイである。ダーダネルスの海峽を思ひ切れないミリュコーフよりも、「暴力を以て惡に抵抗する勿れ」と教へたトルストイが、「イワンの馬鹿」の本性に合致する。

スラヴの心持ちから言へば、世界は即ち普遍一如であり、Mipъ（世界）は即ちMipъ（平和）である。人肉に對する無嗜慾、強烈な反感嫌惡、ここから戰爭の絕對的否定が生じ、ここに「イワンの馬鹿」のロシヤ魂の秘密がある。

三

ロシヤは平野の國である。眼路の行くかぎり、更にまたその限りを越えて、ひれふす波の如く、大和田の海の如く、大地は果しも知らず天に連なる。ロシアにして、初めて限りなく濶き母なる大地のふところを思ふ。母なる國である女性の國である。

ロシアの國原を支配するものは「廣さ」である。「限りなき廣さ」である。「高さ」はいづこにもこれを見出すことが出來ない。野から野へ、丘から丘へ、森から森へと、果てしなく連なり亙つて、そのところ〴〵に人が住む。殆どいづこを限りとも知られない。

「廣さ」によつて支配されるロシヤは、地理的にもア

ナルヒーズムの國である。沒國家的の國である。自分の領土を整へ治めることの出來にくい國である。政治の權威は、いつでも第一に「高さ」である。海原のやうなロシアの國は本來の「高さ」がない。群を拔いて崛起する力がない。即ちアナルヒーズムの國である。「高さ」に倚つて支配する本來性がない。「高さ」を中心として統一するすべがない。「廣さ」はどこまでもたゞ「廣さ」である。アナルヒーズムはあくまでもロシアの本來の魂の姿である。

ロシヤの自由思想家は、國家的であるよりも人道的であつた。ドスタエーフスキーがさうである。バクーニンがさうである。クラパトキンがさうである。而してトルストイの宗敎的アナルヒーズムに於いてその最も明らかな表現を見る。ロシヤのインテリゲンツィヤは、表面は實證論の思想にかぶれてはゐても、心の底では沒國家的であつた。彼等が求める自由と眞とは沒國家的であり、人道的であつた。

トルストイを初め、彼等の凡ては、地上の「高さ」を求めない。地上の權威を求めない。彼等は寧ろ地上の權威を不淨として怖れ斥ける。彼等の求めるものは天來の權威である。彼等の前には、神、而して民衆。神、而して人間、たゞこの二つがある。この二つの間に何等相對的な地上の權威の介在を必要としない。ロシヤの大野原が、遮り礙ふものもなく、直ちに無窮の蒼空を仰ぐが如く、直ちに至上の天の下にひれふし從ふが如く、彼等の心はまた直ちに絕對の神の前にひれふし、その權威に從ふことを欲する。この「絕對の高さ」の外には、彼等は一切の「高さ」を拒絕する。

ロシヤに正敎的君主獨裁政治の發達してゐたのも、國民が「絕對の高さ」の外に、一切の「高さ」を建てることを拒絕したことを意味する。正敎的君主獨裁政治は、ともかくも形の上で「絕對の高さ」の形を取つたことになつてゐた。「絕對の高さ」の外に、一切の「高さ」を認めないロシヤ國民は、ある者はそれを生命のない拔け殼として無視しようとし、ある者はその形に欺かされて安心し滿足してゐた。何れにしてもそれは國

民の内心生活から超越してゐた。國民は自からの内から「高さ」を築き上げようとはしなかつたのである。ロシヤを支配するものは、あくまでも「廣さ」であつた。限りも知らぬ「廣さ」に住んで、求めて已まぬものは「絶對の高さ」の外にはなかつた。

ニコライ、ベルヂャーエフは、ロシヤの求めるものは、自から自由を得ることではなくて、己れを打ち任せ、一切の實際的活動から自由になることであると言つてゐる。また、國家に於ける自由、乃至自由なる國家よりも、寧ろ國家から自由になること、地上のことを整へる煩累から自由になることであると言つてゐる。また、ロシヤは花婿を待ち、夫を待ち、支配者を待つ花嫁であるとも言つてゐる。實際「廣さ」の外に「高さ」の支配力を持たないロシヤは、そして「絶對の高さ」をのみ求めて已まないロシアは、本來自からのものでない何等かの「高さ」によつて、地上の生活の支配を受けねばならなかつたわけである。正教的君主獨裁政治がそれである。「吾等の土地は洪大也、たゞ吾等の土地には秩序なし」と言つて、北方の雄ワリャーグを招請した昔から、政權はいつも外來的であり、もしくはドイツ的であつた。

本來アナルヒーズムの國であるが故に、ロシヤには正教的君主獨裁政治が成り立ち得た。國民が己れ自身の内から「高さ」を築き建てることを拒絶したが故に、外來の「高さ」が來り臨んだ。

現實を支配する能力の不足は、現代の「イワンの馬鹿」のみに見る特徴ではない。アルツィバーシエフは現代のロシア國民の額には、いくら教育があつても、いくら賢くても、すべて「イワンの馬鹿」が宿つてゐると言つた。額に「イワンの馬鹿」を宿してゐるのは、現代のロシア人ばかりではない。ロシア人には昔から「イワンの馬鹿」が、宿つてゐる。

たゞ、「イワンの馬鹿」が、あらゆるものを失ひ、あらゆる不仕合せに逢ひながら、結局最も仕合せになつたといふ。この有名なロシヤの昔話の筋を忘れてはならぬ。吾々の考へて見なくてはならぬのは、この「イ

ワンの馬鹿」が今までも、またこの後も、どういう仕合せを求めて來、求めて行かうとしてゐるかの點である。

四

大地は抱愛の母である。大地の愛は、土が有する神秘な力で、人間の生活のぬくもりはそこから發する。相寄り相集まつて、何ものかの抱愛の中に居らうとする民衆の本能は、自のづから大地への執着となる。現世の暖かい居心地よさは、母なる大地の抱愛にあまへる樂しさである。

おゝ、聖なる母の身に
全身を以てあまへかゝらう、

母なる大地を歌つたソログープの小詩集「生みの土地」一卷は、母のふところに抱かれる安らかさ樂しさ甘さを、思ふかぎり歌うた本能の愛の讃歌である。彼がその序の中で言つてゐるやうに、「生みの土地、それが如何なるものであらうとも、それは自分のである。それが自分に懷かしいのは、それがよいからといふではなく、それが自分の、生みの、特別の、唯一のものだからである。またもしそれが貧しく、暗くとも、そこに生きるのが辛くとも、それか何ぞ！それは自分等の苦しみであり、自分等の悩みである」。實にそれがよいからといふではなく、それが自分の、生みのものだからである。肉身のものだからである。

一つの巢の雛のやうに、暖かく、居心地よく、懷かしく、寄り添はうとする心、同じ大地の母のふところに融けあはうとする心、――この動物的な本能的なぬくもりを求める心が、『生みの土地』の詩人の心であり、同時にまたロシア國民の心である。

ロシャの宗教は、十字架を負ふ宗教ではなくして、服從と稽首と禮拜との宗教である。精神界の勇者の宗教ではなくして、聖者たちの前に、聖像（イコーナ）の前に跪いて十字を切る宗教である。十字架を負うたキリストの宗教といふよりは、寧ろ生神女マリヤの宗教である。大地なる、ぬくもりある、母の宗教である。

母なる大地はロシャである。ロシャは生神女マリヤ

に象徴せられる。產み殖やすことと、ぬくもりある居心地よさと、——肉の力の聖化である。母のふところに懷かれた安らかさ樂しさの至上である。

ロシヤの宗教では、信仰の個性的基礎が可なり弱いやうに見える。祈りと禮拜と、あらゆる場合に集團的である。一つの巢に巢くふ雛は、互ひに離れず寄り添うて、そこに集團のぬくもりと心强さとを得來たる。彼等はその集團から離れることを怖れる。そこから離れてひとり冷たい枝から枝へ飛びわたることを怖れる。內心生活の冷熱と動搖とを凌いで、信仰の個性的基礎を堅めて來ようとはしない。

聖者たちの前に、聖像(イコーナ)の前に跪いて十字は切る。しかし、その聖者たちの言行にならはうとはしない。自から聖者の域に近づかうとするよりも、たゞ聖者の前に禮拜し跪拜する。丁度、自己の內から支配する權威を生み出だすことによつて、自ら支配する力を得ようとはせずに、自己を外來の權威に打ち任せ、一切の負擔をそれに托せうとするのと同じである。

ロシアの宗教には、宗教上の向上心が甚だ乏しいやうである。十字架を負うて行く道は、峻嶮である。集團的禮拜と祈りとの道は、平坦である。ロシヤの大野は波の如くひれふして迹る。宗教もまた、平野的であつて山嶽的でない。大地のぬくもりを離れず、人里(ひとざと)の氣(け)を離れない。母なる大地の匂ひがあり、また獸(けもの)の腐の匂ひがある。異教徒的である。「聖なる母の身に、全身を以てあまへかゝる」宗教である。

五

「神聖なロシヤ」がある。「罪に汚れた、神聖ならざるロシヤ」がある。どちらもロシヤである。メレジュコーフスキーに從へば、「神聖なロシヤ」は過去のロシヤであり、「罪に汚れた、神聖ならざるロシヤ」は未來のロシヤである。しかし、この二つのロシアは、過去に於いても常に存在し、現在に於いても存在する。この二つの兩立はロシヤが異教徒的キリスト教國であることを語るものである。

天に對する愛と地に對する愛、出世間的の愛と世間

に對する愛、神聖なるものと神聖ならざるものとの混交――それが到底區別することの出來ないやうな姿で現はれて來るのが、ロシヤである。善と惡との區別がはつきりしない、神と惡魔との區別が瞬昧である。ロシヤ人の顏の輪廓に切り離したやうな鋭さの少ないやうに、ものゝ境界が截然としてゐない。西ヨーロッパでは惡魔が誘惑する。惡の權化である惡魔が誘惑する。しかし、善の假面を着た惡、卽ち反キリストが誘惑するのはロシヤである。惡魔主義、乃至惡魔主義の文藝は、西ヨーロッパ、殊に天主敎國に榮えた。反キリストは昔から東方ギリシヤ以來正敎の國に出た。純然たる惡魔の誘惑は、正敎のロシヤでは見られない。ロシアでは、反キリストに對する識別が容易に行はれない。あらゆるものを、それが水の形でさへあれば、海綿の如くに受容してしまふ。ロシヤは謂はゆる「軟らかい五體」の有ち主で海綿のやうに抵抗力が弱い。反キリストらしいところのあるボリシエヰキの勢力を得たのもまた、あらゆる最近の事變に反應する社會の抵抗力の弱いのも、輪廓の鋭くない五體の軟らかい、ロシヤだからである。

輪廓の鋭くない、ぶよ〳〵と軟らかい、人のよいロシヤを、私はモスクワの藝術座の舞臺で見た。ドスタエーフスキーの「ステパーンチコヲ村」の中に出て來る休職大佐エゴール・イリーッチがそれである。あの人のよい、骨までも軟かさうな休職大佐を苛めながら、而かも自から苛められつゝあるものゝ如く想像することに、一種の性的刺戟を感ずるやうに見える、かゝり人のフヲマー・オピスキンの無法な意地惡さを見てゐると、この二人は到底別々に引き離しては考へられなくなる。この二人によつて釀し出される、一種の齒痒い重苦しい、何もかもごちや〳〵になつてしまつたやうな、やゝ苛立たしい氣分は、丁度また今のロシヤからも、往々にして受け取らずにゐられない氣分である。ゴーリキーの「幼き頃」を批評したメレジューコーフスキーの論文の中に、

小さなアリヨーシヤにも、何かお婆さんに足ら

ないところのあるのが感ぜられる。どうかすると「お婆さんが何か强いことを言ひ、何か大きな聲で叫べばよいのにといふ氣がする。」けれども、一向何も言はない。しまひまで默つて辛抱してゐる。それで、お婆さんが辛抱してゐればゐるほど、お爺さんはよけいに怒りつぽくなつて、譯が分らなくなつて行く。お婆さんは神聖ではないが、しかし何だか神聖なやうである。お婆さんの主な罪は、罪にあるのではなくて神聖なところに在る。彼の女が神聖であればあるほど、その周圍はます〱罪深いものとなつて行く。

といふ一節がある。お婆さんもロシヤであり、お爺さんもロシヤである。フヲマーもロシヤであり、エゴール・イリーッチもロシヤである。しかし、「一向何も言はない。しまひまで默つてゐる」「大きく、軟ら身でぶよ〱してゐて骨がない」お婆さんの方が、一層多くロシヤ的である。エゴール・イリーッチの方が一層多くロシヤ的である。少くとも、今までのロシヤではさうであつた。

今までのロシヤでは、「神聖」はやゝもすると無性格的善良を意味した。從順であり、奴隷的であるが故に、「永く耐え忍んで來た生みの國」である故に、「神聖」であるかの如く思はれがちであつた。

「スチパーンチコヲ村」の中で、エゴール・イリーッチの邸內に使はれてゐる少年のファラレイは、丁度この無性格的善良そのもののやうである。その意味で、ファラレイは「神聖」であり、「神聖なロシヤ」である。フヲマーが冷やしか半分に。「ファラレイ。返事をしろよ！お前はよい男か？」と言つて尋ねると、ファラレイはいつもの如く泣きじやくりをしながら、「よい男」と答へて、また泣き出してしまふ。

ファラレイは善良である、「神聖」である。しかしこのファラレイの善良、ファラレイの「神聖」は、どことなく不安心を感ぜしめる。エゴール・イリーッチの善良もさうである。お婆さんの神聖もさうである。そこにはお爺さんが出て來て、「よけいに怒りつぽくなつて、

評が分らなくつて行」かずにはゐられないやうなところがある。フルマー・オビスキンが居て、家中にのさばり、人を苛めながら自分で苛められてでもゐるやうに想像して、一種の滿足を感ぜずにはゐられないやうなところがある。それ等の人々が神聖であればあるほどその周圍はます／＼罪深いものとなつて行くやうなところがある。

この不安を己れに感じたファラレイ乃至エゴール・イーリッチの、自己に對する反逆が、即ちロシヤの革命である。

革命は反抗であり、犧牲である。革命をつゞけることは犧牲をつゞけることである。革命はソログープの言ふ如く雷電であつて、雷電は久しく續いてはならない。ファラレイやエゴール・イリーッチは、この雷電に打たれて己れを亡ぼすかも知れない。しかしいかにこの雷電が長く續かうとも、すべてのファラレイ、すべてのエゴール・イリーッチが死にはしない。無性格的善良のファラレイはたとひ死んでしまつても、新らしい全く違つたファラレイが、新らしい別の時代を始めるであらう。ともかくも革命は、ファラレイにとつて、自己の本性の價値の批評である。自己の本性の價値を批評し得る、能力の自覺である。ロシヤの革命は、今尚ファラレイの不安と自己に對する反逆との傳播と混亂と葛藤とを暴露しつゝあるに外ならない。

六

ロシヤ魂は絕對究極を求める。あらゆるものに於いて絕對究極を求める。戰爭の絕對的否定。神聖の絕對的權威の渴仰。而してまた絕對の自由。

しかしながら、歷史の經過の上では、實際の生活の上では、相對的な中途半端なものが一切を支配する。相對的な中途半端なもののしか得られない。隨つて、戰爭の絕對否定は、現に見る如く、國の內外に於ける戰爭の連續となり、ドイツ武力に對する屈從となつた。また、絕對自由の要求は、屢々奴隷的服從となつた。而してまた、神聖な絕對的權威の渴仰は、相對的な、しかしながら絕對的權威の形を取つた反キリストへの

服從となつた。神の國は絶對である。求めるところは即ちこの絶對の神の國であるが故に、相對的な中途半端なものはすべて打ち棄てゝ顧みない。而かも實際の生活は悉く相對的の連續であるから、つまり實際の生活を支配し制統することをしないことになる。即ちそれ等の實際的生活の支配には無頓着で、誰にやらせてもよいことになる。ロシヤ人の生活が、堅實な基礎を歩々に堅めて行くところのないのも、理想と實際との間に甚だしい距離のあるのも、その他いろ／＼の點で生活に矛盾のあるのも、すべてこの根本の魂のさせるわざである。

　ロシヤ魂は絶對的なものを求めて、却つて常に相對的なものゝために隷從せしめられてゐる。而かも自からは、絶對的な究極なものに於いては、自由であると信じて安んじてゐる。信仰の自由、思想の自由、精神の自由をさへ得れば、他の一切の生活は獨裁君主の支配に任してよいと考へた。十九世紀中葉のロシヤの一部の思想家の心にも、やはりこのロシヤ魂が宿つてゐるのを見る。ロシヤ魂の求める國家は神聖な絶對的な權威の支配するものであるから、それの得られない現世では、動物的な、暴壓的な汚れたものでも已むを得ないとする。「神聖なロシヤ」がいつでも「獸的なロシヤ」を半面に有つてゐるのも、一つはさういふところから來てゐる。心の上で絶對の境を描くばかりであつて、それを歩々に實現せうとするのでないから、その絶對の境はいよ／＼實際の生活から離れた、遠い究極のものとなる。その一方で實際の生活は他力に任せて打ち棄てゝ顧みないから、ます／＼自已の要求とは遠い淺ましいものとなる。これが少くとも今までのロシヤの事實である。而してこの事實の一切を暴露したのが革命である。

「イワンの馬鹿」の葬ひの場での踊りは、已れの求める絶對究極のものを、直ちに立ちどころに實現せうとするものである。久しく心に描き求めてゐた絶對究極の境を、直ちに立ちどころに地上に實現せうとするものである。「イワンの馬鹿」は、すべてのロシヤ人の額に

宿つてゐたかも知れない。革命は、その潜んでゐた「イワンの馬鹿」を跳り出さしめた。殆どすべてのロシヤ人が「イワンの馬鹿」になつた。

「イワンの馬鹿」の中でも、この絶對究極を求めてやまないロシヤ魂を、最も明らかに表現してゐるものはボリシエヰキである。その態度には一種の宗敎的氣力がある。少くとも、絶對性、究極性を帶びて、徹底と充實とを期するその態度の上に、一種の情熱的な力がある。彼等は全き人間を包擁し、人間の一切の要求に應じ、その一切の苦惱に答へやうと欲するが如くに見える。また彼等は、その主張するところを以て單に一つの政策としてゞはなく、世界觀人生觀、として提出するものの如くにさへ見える。また彼等は部分であり、部分の中に在ることを欲せずして全であり、唯一無二であらうとするものゝの如くに見える。

七

「イワンの馬鹿」は、何故にあの古いロシヤの童話の終りで、二人の兄弟の誰よりも多くの幸福を得たか、それが不思議であるやうに、ロシヤ魂もまた一つの神秘であるとも言へよう。たゞ葬ひの場で踊る「イワンの馬鹿」は持てあますとも、しかし何人も「イワンの馬鹿」を憎むことは出來まい。この憎むに憎まれないところが、「イワンの馬鹿」の力であり、彼の幸福の秘密の宿るところである。ロシヤ魂もまた、この「イワンの馬鹿」の如くではあるまいか。ロシヤ魂には病ひがあり、惱みがあり、呻きがある。しかし、そこには憎むことの出來ない、混沌に似たる偉大なる何ものかゞある。魂は見ることも觸れることも出來ない。やはりまた、チユツチエフの歌つたやうに、

知識でロシヤは會得されない、
ありふれの尺度では量られない、
ロシヤには特別の姿がある――
ロシヤはたゞ信ずることが出來る。

と言ふ外はないかも知れぬ。

秘密外交より開放外交へ

法學博士　吉野作造

（一）

デモクラシーの傾向の盛んになると共に、内外百般の政務は萬民環視の下に行はれ、些かの秘密の伏在をも許さゞらんとするの今日の時勢に於て、獨り外交の事が軍事と共に特別の例外的取扱を與へられて居るのは、各國に通有の現象である。法制上より之を觀るも、例へば我國の憲法に於て、軍事統率の權と宣戰講和並に條約締結の權が、他の一般政務と區別されて居る事は言ふを俟たない。獨逸のやうな聯邦制の國でも、又は墺匈國のやうな聯合制の國でも、軍事と外交と丈けは之を各邦の權限より引離して中央政府の手に收め、而かも尚且つ他の中央の一般政務とは特別の取扱を與ふる事になつて居る。

何故に外交軍事に限つて特別の取扱を與ふるやの理由の如きは、固より此處に管々しく述ぶるの必要も無からう。唯爰には特に外交については最も機密を尊び、漏洩を怖るるにあるを一言するに止むる。舊式の外交に於ては自國の爲めに洩れ、又對手國に洩れることを怖れたものであるが、公明正大を旨とすべき今日の外交に於ては、此方面に於て漏洩を怖るべき理由は大に減却した。若し漏洩其事の親交に害あることありとすれば、そは利害關係を異にする第三國に漏るゝ場合である。併し之とても徒らに秘密々々と隱し立てをするのが結局得策でもなく、又隱くし終らせることでもない。とは云ふもの丶今日の所外交事務は軍事と同じく、未だ〳〵内政の事務と同一に取扱ひ難き事情あ

る事は、之を認めなければならない。

併しながら特別の理由あつて特別の取扱を與ふるといふ事は、又他の一方に於て特別の弊害を伴ふ怖れがあるといふ事を避くることは出來ない。嚴密なる國民的監督の下に行はるゝやう、制度の上に組織立てられたる内政事務の遂行についてすら、今日多くの國々に於てはいろ〳〵意外なる弊害の發生に苦んで居る。況んや初めより局に當る者の比較的廣き自由裁量の餘地を認めらるゝ軍事外交に於てをや。從つて國によつては軍事に對しては其濫用を戒め、外交に對しては國民的利害を無視する事なからしむる爲め、多少の方法を制度の上に顯はさんとして居るものがある。英國の議會が常備軍の設置に關するの同意を一年限りとして居る制度の如きは其最も極端なものであるが、外交上最も重要なる條約締結の最後の決定權を上院に留保して居る制度の如きは、米國を初め南米大陸の諸國に少くない。支那の臨時約法の如きは更にもつと極端に行つて居る。若し夫れ最近露西亞の過激派などが主張する所謂民主的外交の如きは、在來の外務官吏によつて代表せらるゝ外交は眞の國民其物の外交にあらずと爲すものにして、外交の全權を間接に彼等の所謂平民の手に收めんとするものである。細目の點についてはいろ〳〵議論するの餘地はあるが、兎に角此等の風潮の中に通じて一貫するものは、從來の軍事外交の取扱方には十分滿足する事が出來ないといふ事である。併しながら軍事と外交を凡ての内政事務と、全然同一樣に取扱ふ事が出來ないといふ事も亦明白である。軍事の事は今予輩の直接問題とする所ではない。獨り外交を取つて吟味するに、之を全然議會の討論に上したならば、吾々は却て其弊の多きに堪へないであらう。斯くして外交事務の取扱は多少の弊害があつても、今の所依然舊態の下に置かれなければならない事になつて居る。

(二)

併しながら斯くても時勢の影響は奈何ともする事が出來ないと見えて、近世諸國の外交は制度の拘束に拘

はらず、段々開放的になりつゝあるを看る。又斯くならざるを得ざる因緣もあると考へらるゝ。然らば何が近世諸國の外交に影響して、斯くの如くならざるを得ざらしむるかといふに、其最も著るしきものは矢張り內外一般の政務に通じて盛んになりつゝあるデモクラシーの傾向に外ならない。

　デモクラシーと外交との關係は、之れ亦一個獨立の興味ある研究問題であるけれども、之を詳論するは予輩の今問題とする所ではない。唯玆には次の二つの點を明かにして置きたい。第一はデモクラシーは外交に向つて國民的利害に立脚すべき事を要求する事で、第二はデモクラシーの盛んになるの結果として、國民自身がもはや外交其物に對して無關心なる事を得ないといふ事である。此兩方の要素は自ら內政事務に對する參政權の要求の如く、人民をして外交事務に干與せんと欲するの希望を促すものであるが、唯此希望は內政の場合の如く、制度の上に自由に發表するの機會が與へられて居ない。從つて外交に對する人民の干與なるものが、制度の上の問題としては極て微弱である。けれども若し人民全體の智見が相當に高ければ、其道德的勢力の當局者の施設を牽制するの度合は、亦相當に强きものあるを見るのである。政府の外交方針に對する民間の批難は支那に於ても非常に强い。けれども政府が殆ど之を無視して勝手に振舞つて居るのは、民智總じて未だ甚だ低きが爲めである。此點に於ては我日本も亦支那と相去る事遠くはない。從つて外交事務の處理は比較的今尙秘密裡に裁決せらるゝの狀態にある。けれども歐米の諸國に於ては頗る之と趣を異にし、政府の外交政策に對する道德的牽制力は、制度上の無勢力なるに反比例して意外に强きものがある。其結果外交政策は內政の場合のやうな法規上の拘束からは自由であつても、輿論の實際上の拘束を受くる事頗る大なるものがある。であるから現代此等諸國に於て外交は、君主の個人的欲望を滿足するが爲めになさるゝといふ事はない。十九世紀初頭の歐洲の大亂は或は之を那翁の個人的野心に淵源すと觀るを妨げないかも知れ

ない。廿世紀初頭の今次の大亂の淵源をカイゼルの野望に歸するは、斷じて正しき歴史的見解ではない。又今日の外交は宰相の出來心によつて決せらるゝといふ事も無い。或奇矯なる歴史家は普佛戰爭の原因を以て、那翁三世に對するビスマルクの私怨に歸した。或夏ビスマルクが妻君と共にある溫泉場のホテルの庭に憇んで居つた時に、其前を通り懸つた一人の立派な紳士が、紳士に有るまじき輕蔑の態度を以て、ビスマルク夫人の足の大きいのを笑つた。怪しからん奴だが誰だらうと訪ねて見ると、後に那翁三世となつたルイ・ボナバルトであつた。此時の怨みが後の戰爭の原因だと說くのは、一場の座談としては面白いけれども、現代の外交上の重大な出來事が、單に個人の出來心に左右さるゝと觀る點に於て誤つて居る。國の組織に於て極めて重要な地位に居る人の一言一行が、國の運命を動かす上に極めて重大な關係を有つて居る事は爭はないけれども、今日の外交を以て全然國民の輿論と沒交涉に動くと見るのは大なる誤りである。當局者が國の行動を右に向けんとして右に向くのは、右に向く丈けの素質が國民の中にあるからである。右に向く素質が强く國民の中に潜在する以上、當局者が初め左に向けようとして舵を執つても何時か知らん右に引つ張られて行くといふ結果になる事が珍しくない。故に現代の外交は其時々の短かい時間内の經過について觀れば、時の當局者が此問題について何を考へて居るかを硏究する事が必要であるけれども、永きに亙る全體の外交的經過の判斷には、當該國民の考が何處にあるかを硏究するのが何よりの急務である。支那や日本の外交を論ずるには、寺内首相・後藤外相乃至元老諸公若くは段祺瑞・馮國璋の諸公が、何物を其腦中に畫きつゝあるやを知る事が相當に必要かも知れない。けれども歐米の外交を達觀するに當つては、其國民的思想に多少通ずる所あれば、ロイド・ジョーヂやウイルソンやポアンカレーやの頭腦は已むを得ずんば之を不問に附しても妨げはない。否、彼にあつては此等諸公の思想を知る事が卽ち其國民の思想を知る事になるが、我にあつて

は上記先輩諸公の思想を研究しても、現代國民の思想の那邊にあるかは全く分らない。要するに所謂近代國家を以て居る所の諸國の外交政策の底流をなすものは國民の思想である。國民の思想は之を隱す事が出來ない。是に於て外交に秘密といふ要素が大に減ずる事になる。之れ制度の上に幾多の故障あるに拘はらず、近來の外交が實際上段々開放的に進みつゝある所以である。

右述ぶるが如く今日の外交は差つ當ては個人によつては動かさるゝ。が結局に於ては國民によつて動かさる。個人によつて動かさるゝ部分と國民によつて動かさるゝ部分との釣合は、國によつて一樣では無いけれども、個人的要素の重きを爲す國に於て程外交を包む秘密の雲は深くなる。而して近來の外交は段々個人的要素が薄らいで、國民的要素が深くありつゝあるが故に、昔と今とを比較して見ると、吾々は種々の點に兩者の相違を見出さざるを得ない。昔は君主宰相の運命と國家の消長とは非常に密接なる關係にあつた。兩者の密接なる關係にある事は、固より一概に非難すべき事ではないけれども、例へばシャーレマン大帝の逝去と共に彼の大帝國が四分五裂し、豊臣秀吉が死んだからといつて朝鮮征伐といふ兎も角乾坤一擲の國家的大事件が忽然として中止せらるゝなどは餘り感服した事ではない。明君賢相の輩出して國家を率ゆるは固より望む所であるけれども、國家の全運命を其一身に繫らしるむは、少くとも今日に於ては好ましき事でない。幸にして國民的要素は今日大いに伸張した。一個人の運命の外に立つて國家的大事件が支障なく遂行され得るといふのが現代の特徴である。此今日と昔との相違の點は政治上の暗殺が少くなつたといふ事にも又あらはれて居る。個人的要素が重きをなして居つた時代には、列國の明君賢相を暗殺する事は、國家競爭上の最も有力なる武器であつた。今日に於ても暗殺が多少の損害を與ふる事は云ふ迄もないけれども、之に依つて敵國を根本的に屈服する事は出來ない。何故なれば往時に於ては暗殺は即ち總ての計畫の源泉を絕つ事であ

つたけれども、今日の暗殺は偶々一個の優秀なる實行者を失ふ事であつて、計畫の源泉は國民の思想の中に滾々として盡きざるものあるからである。昨今でも政治的暗殺と云ふ事實は全く無いではない。けれども此の等は支那のやうな今尚個人的要素の重きをなして居る國に行はるゝか、又は伊藤公の暗殺の場合の如く彼を失ふ事に依つて日本の對韓政策を根本的に覆し得べしとする舊式の迷想に出づるかを外にしては、先年希臘王の暗殺、又は遡つて米國大統領マッケンヂーの暗殺の如く無政府主義に出づるものか、又は墺匈國皇儲殿下の暗殺の如く、極端なる民族的反感に基く自暴自棄的行爲に出づるものであつて、全然政治上の積極的目的を遂せんが爲めになされたる例はない。更にもう一つの往時と今日との差の著しい特徴は、各國王室の親族關係の外交上の意義である。昔は英吉利のヘンリー七世が佛蘭西の壓迫に對して、西班牙の助力を籍らんが爲めに、其子の爲めにチャーレス五世の妹を娶つたと云ふやうな政略結婚が盛んに行はれ、支那で有名な彼の王昭君が今日漢宮を出でゝ明日胡虜に嫁したのも、各統治者の親族關係の開拓によつて外交上の目的を遂せんとしたものである。然るに今日に於ては、各國王室間の結婚に附せらるゝ政略的意味は大かに薄くなつたのみならず、又事實斯かる親族關係は最早や國民的外交關係の自然の進行に殆んど何等の影響も及ぼす事も出來ないやうになつた。視よ、英獨兩國皇帝は最も近き從兄弟の間柄ではないか。ウイルヘルム二世の母はジョーヂ五世の父エドワード七世の姉である。露國の廢帝ニコラス二世の如きは英獨兩國皇室と又最も密接な關係にある。露帝の母は丁抹の前の王クリスチアン九世の娘であつて英帝の母の妹である。而して獨帝の祖父ウイルヘルム一世の妹は、露國廢帝の祖父アレキサンダー二世の母であるから、少し遠廻はりではあるが叔父甥の關係にある。此等の關係が今度の戰爭の勃發に際して、殆んど何等の影響を及ぼさなかつた事を考ふれば、蓋し思半ばに過ぐるものがあらう。

斯く云へばとて外交上明君賢相の活動すべき餘地が全く無いと云ふ意味ではない。兎に角直接に外交の局に當つて策を樹て事を司る者は、明君なり又賢相なりである。少くとも制度の上に於ては局に當る明君賢相は、外交事務の處理に就いて相當に廣き行動の自由を與へられて居る。併しながら客觀的に觀て彼等は果して全然自由の行動を執つて居るか。否、事實は自ら之を意識して居ると意識して居ないとの差はあれ、彼等は又實に人民の輿論に左右されて居るのである。故に外交上の永い經過を一個の事實として客觀的に觀察する時に、我々は大體に於て今日の外交は個人的出來心によつて指導せらるゝにあらず、國民的支配の下に動くものであると云ふ事が出來る。一個人の出來心は比較的に變り易い。國民の思想は其大本に於て容易に動搖するものではない。斯くして今日の外交は總べての文明國に通じて、一定の軌道の上に走つて居ると云ふ事が出來る。故に昔の外交の歷史は單に變轉常なき事實の連續的記述に過ぎなかつたが、現代の外交史に至つて、初めて略ぼ一定の理路を辿る一個の學問となるに至つた。斯の如き時代の外交に秘密の要素の著しく減却するに至るは怪むに足らない。

（三）

個人の出來心は變り易くもあり、又隱す事も出來る。從つて秘密を伴ふは免れない。斯くて外交は本當の腹を示さず、巧妙なる辭を以て表面を粉飾するを事とするに至る。所謂外交的辭令の稱ある所以である。之に反して國民的意嚮は短日月の間にさう容易く變るものでもなければ、又よしんば必要があつても、さう何時までも隱して了ふせるものでもない。從つて秘密あるを許さず、又秘密あるを得ない。斯くして巧妙なる辭令を弄ぶ事が外交界に段々流行しなくなる。此點は今日未だ十分徹底しては居ないやうだけれども、兎に角最近の外交界の風潮は虛飾の辭令を避けて、事實を卒直に表明するを尊ぶやうになつて居るではないか。

併し斯くの如きは實は最近の事である。昔は外交と云へばしらじらしい嘘を言ふ事と極つて居つた。或人

はデプロマシーの字義を解して二枚の舌と云ふ意味であると說いた。今日我々俗用の言葉としても、出鱈目を云つて、彼所此所を巧みに操つて歩くものを外交家的などゝ云ふ事もある。併し本當の外交界に於て雪を墨と云ひくるめるやうな風潮は近代に於て實はビスマルクから初まると云つていゝ。成程最近の歷史に於てビスマルク程友を欺き、人を賣つた者はない。けれども彼には宥恕すべき所がある。何故なれば彼が苦肉の計を設けて嘘僞りで獨逸の外交政策を堅めたのは專ら、やつとの事で出來上つた足弱の獨逸新帝國を少しでも安穩に育て上げんと欲したからである。惟ふに彼が獨逸帝國建設の大業を成就するまでには隨分無理をした。之が爲めに彼は一度墺太利と干戈を交へ、轉て又佛蘭西と戰端を開いた。國内には普魯西の統制を快しとせざる獅子身中の蟲も少くない。內外に幾多の弱點を有する新興帝國を守り立てる事は、彼にとつて一通りの苦心ではなかつた。而して彼は出來る丈け敵を少くし、又到底兩立し得ざる佛蘭西を外交的に孤立せしむる爲めに、餘儀なく或は露西亞を賣り、或は墺太利を欺いたのであつた。斯くして彼が大いに歐洲外交界の風氣を混濁したる罪は免るゝ事は出來ないけれども、而かも其衷情に立ち入れば尙一片恕すべき點がないでもなかつた。然るにビスマルク以後の歐洲外交界の當局者は、彼の一面の成功に眩惑して、恐らく彼の本意に非らざる之の一面に爭うて倣つた。斯くして歐洲外交界は、巧妙なる辭令の交換の中に陰險なる黠詐を包み、秘密の中に他國を出し拔かんとするを競ふやうになつた。而して最近に於て此流儀の最も著しい外交家は、前の墺匈國外相エーレンタールである。近代の外交家中彼ほど平氣で、無い事を有ると云ひ、有る事を無いと云ひ得た者はなかつたと云はれて居る。史上で有名な出來事としては、一九〇八年のボスニア・ヘルツエゴヴイナの合併事件を舉ぐることが出來る。同州は元と土耳其に屬し一八七八年の伯林條約に據つて墺匈國が其地の統治權の行施を委任せられて居つた事は人の知る所である。而して條約によつて定められた此關係

に何等かの變更を加へんと欲せば、必ず該條約調印諸國の同意を得なければならない。而してエーレン・タールは我同盟國のみの同意を以てしては不十分なるを思ひ、時恰かも露國外相の來遊せるを幸とし、ダーダネル海峽通航權の獲得に助力すべきを約して以て露國を誘ひ、且つ露國を通して又佛蘭西の內諾をも得んと欲した。然るに彼は斯かる堅い約束ありしにも拘らず、露國外相の維納を去つて未だ巴里に入らざるに先ち、急遽ボスニア・ヘルツエゴヴイナの合併を單獨に宣言して歐洲を驚かした。此事件が今度の戰爭に深い關係を有する事は今之を說かない。唯斯の如き遣り方を以て外交上の成功と自負した人もあり、又時代も有つた事を記憶すれば足るのである。

併しながら所謂ビスマルク式の外交は幸にしてエーレン・タールを以て終りを告げた。彼の死は一九一三年二月十七日であるけれども、前年の春以來眼疾の故を以て其職を退いて居つた。彼の後任ベルヒトールドは彼程歐洲の外交界に重きをなさなかつた。而して彼の退隱後歐洲の外交界に嶄然頭角を表はした者は、英のエドワード・グレー、佛のポアンカレーである。而して一つには此兩公の個人的人格にもより、又一つには時勢當然の風潮にも基くことであらうが、彼等に依つて指導せらるゝ歐洲外交の新局面は、最早や虛飾的辭令を弄ぶ事を許さず、出來る丈け卒直に其所信を披瀝せねばならぬやうな形勢を作つた。之より歐洲の外交は著しく秘密の雲から取り出されて、國民の眼前に開放さるゝ事になつた。固より開放的外交に成り切つたとは云はない。けれども今日の外交界の傾向が往日と全く面目を異にして居ると云ふ事だけは爭ひ難い。而して此傾向がウイルソンが米國の首腦となるに及んで著しく助長せられた事も亦爭ふ可からざる事實である。

(四)

今日の外交が事實上開放的になつたと云ふ事は、必ずしも法制上更に一歩を進めて、外交を輿論の支配の下に置くべしといふ結論を導く譯ではない。外交上の殷

終の決定權を上院に置くと云ふ米國の現制に一歩を進めて、更に下院に此權限を認むべしと云ふ議論は、一部の極端なるデモクラットの間に說かれないではない。此論の是非に就いては自ら別に論ずるの餘地はあるが、併し民智の程度高まり從つて民間輿論の道德的勢力が盛になれば、制度の如何に拘らず、外交を國民的支配の下に置くの目的は達せらるゝ。故に差當つて我々の希望する所は制度の改革よりも民智の開拓である。人或は云ふ、民主的外交は政策をして變轉常なからしむるの怖ありと。併しながら民智の相當の高き國に於ては、外交政策を常なからしむるものは、寧ろ之を個人的支配の下に置く場合であることを知らねばならぬ。

外交が個人的秘密裏より、國民的指導の下に開放せらるゝ事の、政治上の効果に就いては今玆に論ぜない。玆には只秘密外交が漸次開放外交に進む實際上の傾向を記述するに止むるのであるが、此點に就いても一つ注意すべき事は外交其物の解放と共に、外交當局者の解放と云ふ事が、又見逃し難い最近の一新傾向であると云ふ事である。如何に外交其物が解放されても其局に當る者の撰擇の範圍が極めて狹きに限られて居ては、開放外交の實は十分に擧らない。然るに不幸にして從來外當交局者の撰擇の範圍は極めて狹きに限られて居つた。其最も主もなる原因は、今日の外交に伴ふ種々の形式は往昔の宮廷外交の傳習に支配せられて居るの結果である。所謂外交的典例が實際上の外交事務の重要なる一部をなすが故に、第一此等實質的無意義の典例に特に通ずる者でなければ外交官たるを得ざる慣例を作り、第二には社會的榮爵を有し豪奢なる生活に堪ふるやうな貴族富豪でなければ成功しないと云ふやうな風潮を作つた。現に日本でも金の無い者は外交家になれないとか、又爵の無い者には早く爵を與へてやるとか云ふ實例が有るではないか。斯くの如きはもと往昔の宮廷外交の餘弊で有つて、今日之に拘束されて適材を拔擢し得ざるは極めて遺憾の事で有るけれども、各國共通に守る所の典例に背くは、又人情の

能く斷行し得ざる所と見えて、各國何れも此點に一大改革を加へんとする者は無かつた。而して最近に於て此風習に向つて一大鐵槌を加へた者はウィルソンである。何をか一大鐵槌といふ。一九一三年四月無資無產の一新聞記者ウォルター・ハインス・ペーヂを擧げて英國大使に任命した事が之れである。一體英國駐在の大使は、米國外交官中でも金のかゝるを以て聞えた役目である。俸給の外每年數十萬の私財を投じ得る者でなければ此任に就き得ない。任も重いが又金もかゝる。然るにウィルソンは就任の初め此地位を基督敎靑年萬國同盟の幹事モット氏に提供した。モット氏の之を拒むに及んで、彼は轉じてペーヂ氏に白羽の矢を向けた。從來の慣例を知れるペーヂは初め此申出を受けて、人を揶揄ふにも程があると云ふ風に考へた。けれどもウィルソンは適材を適所に置くの趣意に據つて、彼を拔擢したるの意を明かにし、一體一夕の夜會に數萬の金を使ふとか、又入つては綺羅を飾り、出づるに車馬を驅らねばならぬと云ふやうな儀禮が間違つて居る。

人を招待しても誠意さへ通れば茶漬に澤庵の御馳走でも事足るではないかと云ふやうな說明を聞くに及んで、彼も其卓見に服し快く其任を受けたと云ふ事である。ウィルソンが其他各方面の大使公使の選擇に如何なる用意をなせしかは今一々之を承知せざるも、兎に角彼が從來の典例儀式に囚へられず、全然能率本位に人才を拔擢して居る事丈けは明かである。從つて之に據つて外交界の儀式典例が、幾分か舊來に比して單純化されつゝある事は略ぼ想像する事が出來る。昔は外交官と云へば有爵高位の貴公子でなければならないとせられて居つた。今は平民でも外交官たる者少からず有るけれども、尙彼等の多くは他の官吏に比して不當に早く爵位を授けらるゝか、又は少くとも任地に有つて貴族的生活を營まねばならぬと考へて居る。平民が平民の生活を營みつゝ、外交的折衝に與へられたる使命を全うすると云ふ意氣は、今日諸國の外交界に未だ著しく橫溢しては居ないけれども、ウィルソンに依つて初められたる運動は、必ずや漸次其波動を及ぼさず

しては止むまい。

斯くして余輩は外交其物が秘密より開放へ、又外交當局者が貴族的より平民的に進み、總ての國際的交渉が直截簡明なる手續きに依つて取り纏めらるゝ事が、現代の動かすべからざる趨勢なりと認むるものである。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

純潔なる
歴史一貫

日本一の

時事新報を讀め!!

夕刊四頁
朝刊八頁

時事新報は創刊以來獨立不羈にして品位あり信用ある歴史を一貫し日本の代表的新聞として世界に承認せられ特に近來の改良進歩は益々斯界に異彩を放ち其發展驚く可きものあり

過般各新聞の値上げに際し時事新報は夕刊を發行せるが即ち夕刊四頁朝刊八頁として十二頁の大新聞たるは從來に異らずして頗る世間の賞讚を博し益々讀者の激増を見るに至れり

東京 時事新報社 發行・取次所全國各地に在り

(中付の一二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

簡野道明先生名著

增修 故事成語大辭典

有らゆる故事成語は勿論、漢籍を解題し、偉人閨秀を略敍し、國文中の詩句文語梵語を訓釋し、俚諺の出所を明かにし、名勝舊蹟の概要を敍述する等、取材頗る多方面に亘り、解釋懇切、出典正確、檢索容易、出版以來、空前の賞讃と甚大の觀迎とを蒙りたる本書は、既に二十萬部を賣盡して猶、需用日に盛なり。以て何人に、缺く可からざる寶典たるを得るべし

原版本（菊判背皮製）
定價 六圓
小包料 二十四錢

縮刷本（四六判布製）
定價 四圓
小包料 拾六錢

論語解義

簡野先生が半生の蘊蓄を傾倒せられたる新著にして（譯讀）（章旨）（字義）（直解）（考異）（餘義）の六項に分ちて極めて詳細懇切に之を講述せられたるもの。古來、論語の註釋書、汗牛充棟も啻ならずと雖も解釋の詳密にして、異本字句の異同より異説の取捨に至るまで、容易に解明論斷を與へ、讀者をして些の遺憾なからしめし本書の如きはまた他に見るべからさる也。

▲第四版發賣▼
菊判天金全一冊
定價 貳圓七拾錢
小包料 拾六錢

和漢名詩類選評釋

和漢古今の著名なる漢詩一千餘首を精選し、一首毎に正確なる讀方と詳細なる解釋とを施して坊本の誤謬を正し、更に著者の博大精深なる評釋を加ふ。裝幀優美、携帶に便也

▲十二版發賣▼
三六判布裝天金
定價 壹圓九拾錢
小包料 八錢

（中付の三）

東京神田錦町一丁目十番地 株式會社 明治書院
振替東京四九九一番 電話神田二三九八番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

●我國唯一の高級婦人雜誌

定價貳拾五錢
郵稅壹錢五厘

婦人公論

七月號要目

■日傘復活論……伊原青々園
■「鮨で子供を殺す」の愚を廢めよ…高島平三郎
■家庭が學校であれ……山田わか
■「坊やの寢冷え」を防ぐ法……竹内醫學士
■子供本位の家庭を作れ……西山哲治
■有り過ぎても無さ過ぎても困る「汗」…飯田醫學士
■踏切番人の自殺る件……三宅雪嶺

■白い鳥（新長編小說）……田山花袋

長篇連載小說
■王藻の前……岡本綺堂
■嵐の山……長田幹彦

■女教師の死……村松梢風
■東京十二景の七—兩國橋—……山下新太郎
■喰ひものにされる女……伊藤野技
■一狂女の日記……高峰博
■上流の家庭で流行する鶉の飼ひ方……中村孤月
■戀の爲めに放火した十六の娘……澤田撫松
■婦人變態心理……中村古峽

本郷西片町十
中央公論社

●中央公論の姉妹雜誌

秘密を欲する心と告白を欲する心

木村久一



世間を見渡すと、目白の大御所やサーベル首相に由つて代表さるゝ隠蔽秘密主義の人々と、『煉獄』の作者や『煤煙』の著者に由つて代表さるゝ開放露出主義の人々がある。思想上前者はマキアベリの裔にして、後者はルソーの裔とでも云ふべきか。これら隠蔽秘密主義の人々と開放露出主義の人々を對照して、その心理を解剖することは、甚だ面白い題目であらうと思ふが、かくの如きは予の如き、常に書齋裡に蟄居する世間知らずの能くするところでないから、予は『秘密を欲する心と告白を欲する心』と題して、も少し原理的の事を述べやうと思ふ。

（一）

『秘密を欲する心と告白を欲する心』と云ふも、發生の上より云へば、後者の告白を欲する心の方が先であつて、秘密を欲する心の後天的熟慮的なるに反し、告白を欲する心は先天的衝動的である。併しながらこんな抽象的な言葉を用ひただけでは、意味が明瞭でないから、も少し具體的に説明せんに、心理學的に云へば、吾人の觀念は凡て動的なものである。觀念は凡て動的であるとは、觀念は凡て或る形を取つて、外部に表出

せんとする衝動性を帯びて居ると云ふ意味である。而してこゝに云ふ表出とは、表情、言語、動作、手足の運動等、廣き意味の行動となつて外部に表はれることである。吾人の觀念は凡てかゝる意味に於いて、或る行動となつて外部に表はれんとする傾向を有するものである。

物理學の教ふるところに由れば、他の力が作用しないなら、或る物體を或る方向にスタートすれば、その物體は永久に等速度を以て、その方向に運動を繼續するものである。例へば予の持つて居るこの萬年筆を、かくの如く上方に少し押し上ぐれば、この萬年筆は永久に等速度を以て、この方向に運動を繼續する譯である。併しながら實際は、見る如くさうはならない。これは何故かと云へば、地球の引力、空氣の抵抗等、色々な力がこの萬年筆に作用する爲である。丁度これと同じやうに、吾人の觀念は、その觀念のみで他の觀念が働かないなら、凡て或る形を取つて外部に表出するものである。例へば予の居るこの二階から下の芝生を眺めて、彼處に飛び下りて行つたら面白からうと思ふが最後、漱石の小說にある坊ちやんの如く、直ちに此處から飛び下りて行くであらう。又屬僚が大臣閣下の鼻眼鏡を見て、ヤな奴だと思ふが最後、大臣閣下の恐ろしさも念頭に上らず、『ヤな奴だな』と口から迸るであらう。併しながら實際は、矢張さうはならない。それは同時に他の觀念が働いて居るからである。

世にはよく、吾人の心中には、理性とか良心とか意志とか云ふものが座を占めて居つて、『是を是とし、非を非とし』たり、善惡正邪を判斷したり、或る行爲を命じて或る行爲を禁止したりするのであると考へて居る人がある。併しながら吾人は、かゝる意味の意志は決して有たないのである。吾人の名づけて意志行爲と稱するものは、實は凡て或る行動となつて外部に表出せんとする衝動性を有する、數多の顯在的乃至潜在的觀念のインターリレーション、即ち相互關係より生ずるものである。故に吾人の觀念一つ〳〵は、何れも或る形を取つて外部に表出せんとする傾向を有するに拘

らず、實際は凡ての觀念は表出せず、或る觀念のみ或る形を取つて表出するのである。但し這般の機制を十分に說明することは、數頁の紙數を以ては到底不可能であるから、今は深入りしないで、これだけにして置く。

兎に角吾人の觀念は、凡て或る形を取つて外部に表出せんとする衝動性を有するものである。數年前正宗白鳥氏であつたかゞ書いた小說に、或る牧師が睡眠中に、他人には決して話せない耻かしい自分の行爲を、囈語に口走るところがあつたと記憶するが、これは睡眠中は、心中の觀念群が覺醒時と非常に異なる爲に、その相互關係の狂ひから、覺醒時には決して言葉となつて表出することを許されない觀念が、他の觀念に由つて制止せらるゝことなく表出したのである。かくの如く吾人の觀念は、原則として凡て外部に表出せんとするものである。併しながら凡ての觀念に制限なく表出を許すことは、當人に取つて不利益なことがあるから、他の利害觀念打算觀念が働いて、或る觀念の表出を制止するのである。かく說明すれば、告白を欲する心は先天的衝動的であつて、秘密を欲する心は後天的熟慮的である所以が大體明かになつたであらう。

（二）

以上述べた如く、吾人の觀念は凡て外部に表出せんとする衝動性を有するものであるから、その表出が抑壓された場合には、吾人は一種の苦痛を感ずるものである。而してその觀念が强い情調を帶びて居る場合には特にさうである。吾人は自分の思ふことと感ずることを、凡てさらけ出してしまふのが自然である。自分の思ふことと感ずることを、心の中に疊み込んで置くとは一種の苦痛である。かの兼行法師が「思ふこと云はぬは腹ふくるゝ業なり、」と云つたのは、この苦痛を述べたのである。悲しい時は思ふ存分泣くが可い。嬉しい時は思ふ存分喜ぶが可い。西洋では悲しい時に泣かなかつたり、嬉しい時に笑はなかつたりすると、病氣になると云ふが、これは本當である。テニスンの「王女」の中に、次ぎのやうな揷曲がある。

殿は戰死して家に運ばれて來た。
けれども奥方は氣絶もしなければ泣きもしない。
これを見て腰元共はさゝやいた。
『奥樣は泣かなければいけません、でないとお命に關はります、』と。
それで腰元共は聲靜かに殿の爲人を稱へ始めた。
殿は誰にも慕はれる方、
味方としては信實な味方、敵としては天晴な敵と。
奥方はそれでも口も利かなければ身動きもしない。
そこで一人の腰元が席を立つて、
靜かに殿の屍骸に近づき、
覆ふてあつた殿の顔を露出した。
それでも奥方は身動きもしなければ泣きもしない。
遂に今年九十になる乳母が立つて、
今は殿の忘れ形見の可愛いのを奥方の膝に載せた。
すると、奥方は夕立のやうに涙をはら〳〵と、
『坊や、妾はお前の爲に生きて居ます。』

これは中々面白い歌である。奥方は楯に乘つて歸つて來た、昨日に變る夫の姿を見て、わが身も共に消えよとばかり、泣かじ涙も流さじと決心したのである。これを見た腰元共は、これでは奥方の命が危ないと、何とかして奥方を泣かせようとしたのである。『奥樣は泣かなければいけません、でないとお命に關はります。』それで彼等は奥方を泣かせる手段として、先づ殿の爲人を色々と褒め稱へて見た。けれども奥方は口も利かなければ身動きもしない。そこで氣の利いた腰元が、痛ましい殿の死顔でも見せたなら、奥方が泣くかも知れないと、屍骸に近づいて覆ふてあつた殿の顔を露出したのである。ところが奥方はそれでも身動きもしなければ泣きもしない。最後に今年九十になる老乳母が、流石は年の功で心得たものである、今は殿の忘れ形見となつた可愛いのを、そつと奥方の膝に載せてやつた。すると狙つた通り圖に中つて、奥方は俄かに涙をはら〳〵と流し、『坊や、妾はお前の爲に生きて居ます、』と云ふことになつたのである。奥方はこの爲めに、果して命を取り止められたかどうかは分らないが、

少なくともヒステリーになる可能性を、幾分か減ぜられたぐらゐなことはあつたであらう。

リーダーか何かにあつたと思ふ。瑞西の寒村で少年が遊んで居ると、偶然敵國の斥候に出くはした。斥候はこれは困つたと思ひながら、その少年に向つて、お前は俺を見たと云ふことを、誰にも語つてはならんぞ。若し語つたらひどい目に遇はしてやるからと恐喝する。少年は子供のことであるから、斥候に云はれた通り、これを人に語つてはならぬと思ふ。併しどう考ても心配で堪らない。敵國の斥候がこの附近を偵察して行つたのである。何時敵が攻めて來るか分らない。その時は自分や父母兄弟や近所の者がどうなるであらう。併しこれは誰にも語つてはならぬと云はれた。併しながら云はなければ胸の中が苦しくて堪らない。遂に室のドアを締めて、ストーブの口に向つて、「ストーブや、僕さつき敵の斥候を見たよ。」と云ふ。する隣室に居つた者がこれを聞きつけて、さあ大變だと其筋に急告した。其筋でも大に驚いて、直ちに戰闘準備に着手し、機先を制して首尾好く敵を打ち破ることが出來たと。これは心の中にあることを、云はないで居ることは、苦痛であることを示す好例である。

(三)

吾人はよく、彼奴臆面もなくノロケると云ふが、戀して居る者に取つては、ノロケを云はないで居ることは、非常に苦痛なのである。吾人はよくノロケる者にオゴらせるが、戀して居る者に取つては、オゴるぐらゐはお安い事なのである。蓋しノロケは非常な息抜きでなつて、彼等は吾人がノロケを聽いて呉れるが故に、此の息抜きが出來るのであるから、吾人は彼等の爲には非常な恩人なのである。故にオゴるぐらゐは安價なものである。又盜みを働いたり、人を殺したり、火放けをしたりした者も、これを自分一個の心の中に秘して置くことが出來なくて、大抵は同僚か誰かに打ち明けるものださうである。いくら同じ穴の同僚でも、自分の犯罪を打ち明けることは危險な事である。併しながら彼等は危險とか何とかと考へて居られな

い。兎に角これを誰かに語らなければ苦痛で堪らないのである。これを自分一個の心の中に秘して置けば、時には病氣にもなり兼ねない。宗敎はどの宗敎も、凡て懺悔自白を奨めるが、これには深い意味がある。即ち秘密のさらけ出しに由つて、懺悔者に荷下ろしをさせるのである。懺悔は果して凡ての罪障を帳消しにするものかどうかは知らないが、天國とか極樂とか云ふものは、心の主觀的狀態を云ふものなら、懺悔は人の罪業を洗ひ淨めて、天國に導くと云ふも不可なからう。舊敎などの信者が、坊さんに高い懺悔料を拂つて、自分の惡事を自白して安心するのはこの爲である。こゝに吾人は「告白を欲する心」或は「告白せざるを得ざる心」をあり／＼と見ることが出來る。

告白を欲する心或は告白せざるを得ざる心を、極めて巧みに描いてあるのは、ドストエフスキーの「罪と罰」である。手斧を振ふて質屋の强慾老婆を撲殺した主人公は、初めはその犯罪を隱す爲に、色々と苦心をして見るが、秘密を抱いて居る胸は苦しくて堪らず、遂に萬事を自由するに至るのである。かくの如き自白を、謂はゆる良心の呵責にのみ歸するのは正しい見方でない。こゝに告白を欲する心、告白せざるを得ざる心が、强力に働いて居るのである。

英語に「心の荷下ろしをする」と云ふエキスプレッッョンがあるが、甚だ面白い言葉である。嬉しい思ひや悲しい思ひを、思ふ存分に打ちまけたり、心の秘密を打ち明けたりして、胸をせい／＼させることを云ふのであるが、以上述べた通り、嬉しい思ひや悲しい思ひを、思ふ存分に打ちまけたり、心の秘密を打ち明けたりすることは、確かに「心の荷下ろしをする」所以である。

心の秘密を打ち明くれば、たとひその秘密が惡事であつて、これを打ち明けることは自分の不利益であるやうな場合にも、尙ほ一種の快感を感ずる例は、先頃「婦人公論」に連載された、德田秋聲氏の「秘めたる戀」と云ふ小說の中にも現はれて居る。また處女時代に醫學士某と戀に陷ちて、謂はゆる共同生活までした

女主人公は、情夫が洋行した後で、義兄夫婦の切なる勸めを拒み兼ねて、他の男に嫁いで行く。兎角して居る中に情夫は洋行から歸つて來る。而して昔の戀を忘れ兼ねた女主人公は、惡い／＼と思ひながら、度々家を明けて前の情夫と密會する。それを遂に夫に氣取られて、將來の爲もあるから、凡てを正直に打ち明けよと云はれる。そこで女は云はれた通り、一切をありの儘に自白するのであるが、自白を促したものは夫の要求であつたけれども、打ち明けて行く中に、胸がせい／＼して來て、一種の快感を覺える有樣が、この小說の中に巧みに描かれて居る。

米國邊には、一種の宗敎的精神療法が、クリスチャンサイエンスだとか、エマニユエリズムだとか云ふ名を冠して、盛んに流行して居るが、かう云ふ事を書いた本を見ると、その方法の一部は、患者を一種の擬眠狀態に導いて、心の中にある事を、不幸でも不滿でも、他人に話せない秘密でも、やるせない思ひでも、凡てさらけ出させてしまふのである。かくの如き方法が、或る種の患者に安易と健康を與ふることは事實である。蓋し他人に話せない心の秘密や、やるせない思ひが、憂鬱や不健康の原因たることは甚だ多いからである。クリスチャンサイエンスやエマニユエリズムは、吾人の觀念の表出性を利用したものである。

(四)

クリスチャンサイエンスやエマニユエリズムに限らず、謂はゆる精神療法其物も、その根本は矢張吾人の觀念の表出性を利用したものである。併しながら精神療法は、今日に於いてはまだ甚だ不純なる狀態にある。今日精神療法に從事して居る者の多くは、無學にして心理に關する知識を有せず、斯法の領域を過大にし、その効能を誇張して、これを以て有らゆる疾病を治し得るかの如く云ひ振らして居る。併しながら精神療法には精神療法本來の領域がある。如何なる疾病でも治し得る譯ではない。精神療法を以て治し得る疾病の範圍は制限がある。のみならず吾人の精神の機制は、極めてデリケートなものであるから、これを如何がは

しい療法師の手に委ねることは、極めて危險な事である。今日精神療法に從事して居る者の中には、斯法を神祕不可思議と結びつけ、神靈だとか哲學だとかと洞喝して、人々の無智に乘じて利を射て居る者が多い。その結果多くの人は、精神療法其物をも侮蔑の目を以て見るやうになつたが、精神療法には確かな根據があるのである。この點に關しては論ずべき事が色々あるが、それは他日に讓つて、左に手許にある本から、一二の實例を紹介して見やう。これを以て矢張觀念の表出性の理解を助けんが爲である。

故ミュンステルベルヒ博士（ハーヴアード大學心理學教授）の許に、或る日から云ふ内容の手紙が來た。自分は以前或る銀行に雇はれて居つたのであるが、或る日地下室で煙草を喫んで居るところを、上役に見つかつた。その時自分は非常に面目がなくて、その上役の顏を見上げることが出來なかつた。その日は家に歸つてから、その事は餘り考へなかつたが、翌日出勤して、事務上に不明の事があつたので、例の上役に尋ねると、彼は意味ありげに自分の顏を見つめて居る。少なくとも自分にはさう感ぜられた。それで自分は直ぐ下を向いてしまつた。これが自分の苦しみの始めである。その時から自分はこの上役の顏を見上げることが出來なくなつた。ところが不思議な事には二三日立つと、今度は誰の顏をも見上げることが出來なくなり、仕方がなかつた。かくて自分は客の相手が出來なくなつた。併し只居つては食ふに困るから、色々勤め先を更へたが、何處に行つても長く勤まらない。かくて友人も失ひ、生活にも窮し今は流れ〳〵て當地に來て居るが、誠とに困り切つて居る。これを何とかして治す方法がないものだらうか。若し先生の力で治し得るものなら、御返事次第出發する云々。

ミュ博士はこれを見て、そんな遠い所から、態々高い旅費を出してこゝまで來る必要がない。たゞ貴方が銀行の地下室で、煙草を喫んで居るところを見つかつた時、貴方に相當の云ひ分もあつたらう。現に角當時

の有樣を、出來るだけ詳しく書いて送つてよこせ。詳しければ詳しいほど可いと答へてやつた。ミユ博士は患者が、命ぜられた手紙を書く時、當時の光景をあり〳〵と思ひ浮べて、當時云ひ譯したかつた事やその他の思ひを、紙の上に思ふ存分にさらけ出せば、この疾患は治るだらうと考へたのである。患者は間もなく命ぜられた通り、當時の有樣を細々と、長く詳しく書いてよこしたが、彼の疾患はこの爲に、案の通り少なからず減ぜられた。而して更に三四回の手紙の往復に由つて、患者の疾患は全然跡を絕つた。

予はこの點に於いて、心理學者の謂はゆる抑壓觀念と云ふことに就いて、一言しなければならない。矢張ミユ博士の許に診斷を乞ひに來た患者の中に、かう云ふ婦人があつた。彼女は以前或る靑年を戀して居つた。或る晩或る所の舞踏會に招かれて行つて、その靑年を探したが仲々見つからない。不圖喫煙室に入つて見ると、友人等が澤山四方山の話をして居る。而して彼女はその話の中に、自分の戀して居る靑年が、他の婦人と戀仲であると云ふことを耳にした。彼女はこの話を聞いて、胸を貫かれたやうな苦痛を感じた。併しながら友人等に感づかれては耻かしいと思つて、顏色や動作に表はれないやうに、努めてこの苦しい思ひの表出を抑壓した。ところがかくの如く抑壓された經驗は、しば〳〵病的に忘却されることがある。これは面白い心理であるが、こゝには述べて居られない。兎に角この婦人に於いても、この時の不快な經驗が病的に忘却されてしまつた。然るにかくの如く病的に忘却された不快な經驗は、以後謂はゆる潛在觀念となつて潛在的に活動し、當人に奇妙な障礙を與へるものである。この婦人の場合に於いては、その後絕えず强い煙草の香の幻覺に惱まされるやうになつた。生來大嫌ひな煙草の香が、絕えず鼻について遣り切れない。併しながら當人には、どうしてこんな事になつたのか分らない。かくの如く精神の何處かに埋沒して居つて潛在的に活動し、絕えず當人に障礙を與へる觀念を抑壓觀念と云ふ。而してかくの如く抑壓觀念の爲に絕えず惱

まされて居る者をヒステリー患者と云ふ。即ちヒステリーとは抑壓觀念の障礙を云ふのである。かゝる抑壓觀念の障礙は、その現はれ方が種々雜多であつて、殆と無限である。即ちヒステリーの症徴は千變萬化であつて、端倪することが出來ない。

ところが先年この抑壓觀念から起る障礙、即ちヒステリーに關して、驚くべき事が發見された。その發見者は維納の醫師ブロイエルである。それは謂はゆる精神分析法に由つて、その抑壓觀念を探索し、患者をしてその當時の光景をあり／＼と思ひ浮べさせ、抑壓されて居る觀念を殘らずさらけ出させてしまふと、今までの障礙がなくなつてしまふと云ふことである。即ちヒステリーは精神分析法を應用して治すことが出來るのである。例へば今述べたミユ博士の診斷を乞ひに來た婦人は、觀念が抑壓された時の經驗は忘れて居つて、自分はどうして絶えず煙草の香の幻覺に惱まされるのか分らなかつたが、精神分析法を行つて見ると以上述べた樣な歴史が分つたのである。そこでミユ博士はその婦人に、その當時の有樣を詳しく述べて見よと命じたが、婦人が泣きながら當時の苦しい思ひを思ふ存分にさらけ出すと、そのヒステリーは治つてしまつた。

こんな例は無限にあるが、こゝでは畢竟、吾人の觀念は凡て外部に表出せんとする傾向を有するもので、この表出が壓塞されると、吾人の精神は病的になるものであると云ふことが明かになれば十分である。八釜しい姑の下に、辛い思ひを凡て胸の中に疊み込んで居る嫁などに、ヒステリーの多いのはこの爲である。

（五）

既に豫定の頁數に近づいたから、詳しい事は述べて居られないが、兎に角以上述べ來つたところから、吾人に告白を欲する心があつて、この心は先天的衝動的のものであることは、大體明かになつたと信ずる。併しながら吾人の思ふことと感ずることとを、凡てありの儘にさらけ出すことは、しば／＼吾人に不利益損害を齎らすのみであることは云ふまでもない。西洋には「汝の祕密を人に渡すは汝の自由を渡すなり」と云ふ諺が

ある。故に「我が下着が我が秘密を知らばこれを燒き棄てん」とも云ふ。兎に角制限なき開放露出主義は、しば／＼當人に有形無形に不利益損害を與へることは確かである。故に種々の利害觀念打算觀念が働いて、告白を欲する心を制限する。「罪と罰」の主人公が初め自白を敢てしなかつたのもこの爲である。而してこれらの利害觀念打算觀念が、謂はゆる秘密を欲する心となるのである。故に秘密を欲する心は、既に云つたやうに後天的考慮的なものである。

告白を欲する心と秘密を欲する心は、何人もこれを具有するものであるが、尙ほ世には人に由つて、告白を欲する心の過度に強い人と、秘密を欲する心の過度に強い人がある。而して前者は謂はゆる露出主義の人となり、後者は秘密主義の人となるのである。世には自分の不利益にならうが何にならうが、自分の一身上や家內の內情等を、一つも殘らず他人に語らないで居られない人がある。これに反して下らない事までも包み隱して、何の爲に秘密にするのか、秘密の爲に秘密を愛するとより外に思はれない人もある。これはその人その人の、精神の構造如何に由るのである。

生田長江氏は嘗て、「今や作者自身から、これは決して私自身の閲歷をありのまゝに書いたものでないと、態々斷はられない限り、先づ／＼大抵告白小說として通つてしまふやうになつた。淺學にして寡聞なる私は、抑も何處の國のどの時代が、日本の現代に劣らない程の夥しき告白文學を產出し得たかを知らない」と論じたことがあつた。併しながら吾々は必ずしも、謂はゆる告白小說を書く者は、凡て告白を欲する心の强い人だと考へる必要はない。官吏が秘密を守るのも、小說家が告白小說を書くのも、共に境遇の然らしむるところである。官吏の中にも私生活に於いては、隨分露出主義の人もあらうし、告白小說と云ふも、果してどの程度まで告白であるか疑はしい。ルソーでさへ、都合の好い告白ばかりしたと云はれるではないか。併しながら習ひ性となると云ふ事はこゝにも眞であつて、文藝家が露出主義に傾き易く、官僚政治家が秘密

主義の人となり易いと云ふことも確かにある。
併しながらルッーの告白は當時世人を驚倒せしめたものである。かくの如き告白は告白者に非常な勇氣を要する。而して思ひ切つた告白はしばしば時代に對する挑戰である。蓋し吾人が秘密とする事柄は、時代の習慣、時代の道德、時代の思想に由つて規定されるからである。故に大膽なる告白は時代の思想道德習慣に對する偶像破壞である。ルッーの「自白」は「民約論」に劣らず、佛蘭西國民を偶像破壞者に改宗せしめた。謂はゆる佛蘭西革命の準備をした點に於いては、「自白」は決して「民約論」に劣らないのである。併しながらそれは西洋の事、我國今日の盛んなる告白文學は、抑も如何なる事を暗示するか。

表題に適はしくなく、秘密を欲する心を說くことが少ないが、秘密を欲する心に關しては事實說くべき事が多くないのである。

附言　本文中に引用したテニスンの詩の解釋に關し、少々訂正を加へます。書き終つて考へて見るに、奥方が夫の屍骸を見て、わが身も共に消えよとばかり、死を願つて泣くまいとしたと云つたのは、少々無理な解釋で、我ながら汗顏の至りです。これは矢張武士の妻であるから、女々しい涙は見せまいとしたのでせう。尙はテニスンの「王女」には、「女子大學」と題して深江文學士の翻譯があつたことを思ひ出し、この部分を參考して見たが、同文學士の解釋は予のそれとは餘程違つて居る。同文學士は色々な注釋書を參考して譯したと云つて居られるから、英文學者の間ではあんな風に解して居るのであらう。予は注釋書などは參考せず、我流に心理的に解したのである、どちらが正しいかは固より予の知るところでない。

秘密を探ぐる危險と興味

元警視廳捜査係長　山本清吉

「人の秘密を探ぐるのは、頗る興味のあるものではあるが、之に伴ふ危險も亦少なくない」とは、山本君が、警視廳の捜査係長をして居られた時代に私に言はれた言葉である。虎穴に入らずんば虎兒は得られない、活動寫眞のジゴマの様な惡漢の巢窟を捜し當てゝ、御用の一聲と共に逮捕すること

は、成程興味があるには違ひないが、まかり違へば兇漢の毒手に殪れねばならぬ。刑事巡査の任務は、勇ましい男性的の職務ではあるが、飛行將校と同樣、何時職務の爲めに死ぬか知れない危險な仕事である。こうして命がけで働く刑事巡査を指揮して、神出鬼沒の活動を爲さしめる搜査係長の任務も亦重しと言はねばならぬ。山本君は明治二十七年以來司法警察官として各方面に活動し、明治四十四年八月より、大正三年六月まで警視廳の搜査係長として、帝都の刑事搜査を指揮して居られた。君の在官中世間を騷がした殺人事件が隨分あつたが、君の巧妙なる搜査方針で大抵は犯人が擧つて居る。君の搜査方針と言ふのは、先づ犯罪現場を巨細に檢分して、地理的關係から犯人の來た方向の見當をつけ、兇行の手段を見てどう言ふ人格の者が爲した行爲であるかを研究するのである。こうした研究の下に犯人を搜し出すのを『土地鑑』を稱して居る。この外、被害者又は關係者に關連した事柄を取調べて、これから犯人を手繰り出す『敷鑑』と云ふ搜査方法もあれば、犯人の遺留品を證據にして犯人を搜査する方法もある。君は、君が警視廳の搜査係長在職中の事件で、その當時社會の問題となつた不思議の殺人事件を搜査した時の苦心談を述べられたから、私は之を忠實に筆記して玆に紹介する。第一の『月島の深夜の悲鳴』は、兇行現場を調べた結果、犯人の人格を想像して、一點の證據物件なしに搜査をした實例で、第二の『洲崎の黑焦死體』は地理的關係から犯人を手繰り出した實例で、第三の『土中の板裏草履』は遺留品から犯人を搜し當てた實例である。記事に對する責任は筆者たる私が負ふことは言ふまでもない。以下私と言ふのは、山本君のことであることを斷つて置く。(澤田撫松)

月島深夜の悲鳴

一

京橋區月島町東海岸通十一丁目二番地に、亞鉛塀を

廻らしたる、此邊で目につく、二階建ての家があつた。大正元年八月六日午前三時四十分頃、二階六疊の間に女の悲鳴が聞えた。其所には此家の女主人久保田留子と九歳になる長男の林之助とが寢て居た。次の八疊の間の床の中に居た十五歳になる長女喜久子がもの音に目を覺まして、六疊の間へ入らうとすると、暗中に白刄躍つて、喜久子は鮮血を浴びて其所へ倒れた。二階に唯ならぬ音がしたので、階下に寢て居た番頭、書生、女中、抱車夫までが二階へ駈けあがつたが、暗がりで何にも見えない。電氣をつけると、あたりは一面の韓紅、留子と林之助の二人は、床の上に寢たまゝ、顏と言はず背と言はず、めちや／＼に斬られて死んで居た。喜久子は顏面に重傷を負ふて倒れて居た。家中の者は肝を潰して、警察へ駈けつけるやら、醫者を呼びに行くやら大騷ぎをして居る中に月島署から、警部も來た、巡査も來た。私は警部と刑事を伴れて現場に出張した。裁判所からは豫審判事、檢事が出張して、現狀を臨檢した。喜久子を築地病院へ入院さして、犯人の捜査にかかつたが、現場には犯人の手掛りとなるべき遺留品は一つもなく、箪笥手文庫等も開いては居ず、何一點奪はれた物もない。犯人が入つた所を調べて見ると、表玄關脇洋風應接室から西の方の廊下へ行く所の外圍の羽目板が少し外づしてあつたが、此所からは入れる譯がない。西洋館の應接室の窓硝子が押し上げて開いて居た。そして應接室から廊下へ出る扉も開いて居た。應接室にあちこち血潮の指紋があつた。これだけを見て考へると、犯人は最初羽目板を外して入らうとしたが入れないので、應接室の窓を開けて入つたものと思はれるが、不思議なことには、表門は固より表側の亞鉛塀も、横の圍になつて居る板塀も竹垣も孰れにも異狀がない。外部から侵入して逃走したものとすれば、これ等の圍に何等かの痕跡を殘さねばならぬのに、それがないところを見ると、外部から入つたものとも斷定する譯に行かぬ。強て解釋すれば、犯人が宵の中に中庭まで忍び込むで、深夜室内へ侵入しやうとして羽目板を外したが目的が達せられないので、窓硝子を開

たけて入つものと言はれないこともないが、この解釋も當らない點がある。窓硝子の内部の差錠が毀れて居ないのが不思議だ。外から無理に開けたものとすれば差錠に異狀のない筈がない。若し内から内應する者があつて開けたとすると、何故に羽目板を外づしたか其の意味が分らぬ。こう言ふ風に推理して行くと、犯人は内部に在りと斷定を下さねばならぬことになる。當夜久保田の家に居た者がこの兇行を演じ、犯跡を晦ます爲めに、殊更外部より侵入した樣に見せかけたものであると言ふことに私は斷定した。この見地から犯人捜査を開始した。

二

被害者の久保田留子は、京橋區木挽町九丁目土木請負業鹿島組の主人鹿島岩藏の愛妾で、岩藏の死後事業の一部を引繼いで、安樂に生活して居た。こうした關係から、いろ〳〵の臆測が傳はつた。留子は多くの妾の中で一番岩藏に愛されて居たから、他の妾か或は本妻の手で殺害されたのではなからうかと言ふ者もあれば、留子は十五才の娘を持つて居る母親とは思へぬ程若々しいので、岩藏の死後情夫が出來て、痴情の結果こう言ふことになつたのではあるまいかと言ふ者もあつた。又女中の滿江に情夫があつて、二人が世帶を持つ金が欲しい爲めに、滿江が情夫を手引して忍び込ましたのだと言ふと噂も傳はり、それからそれへと噂が噂を産むだが、その中で最も注意を引いたのは抱車夫靑木繁松の行動であつた。繁松が兇行のあつた當夜、何所へ行つて居たのか、久保田の家に居ないで、翌朝人に聞いてやつと歸つて來たのと、女中の滿江に十圓の借金があつたことが嫌疑の種になつて、金が欲しさに斯る兇行を企てたのではなからうかと、繁松は有力な嫌疑者として取調べられて居たが、私は疑つた方に眼を着けて居たので、繁松を檢事局へ送らさなかつた。私はこの犯人を擧げるにはどうしても人格捜査で行かねばならぬと決意して、犯人の人格を研究することにかゝつた。被害者の屍體、現場の模樣等を視察して、家内に紛失したもの一點もなく、簞笥手文庫等に何の

異狀も認めないのに、私は此事件を强盜殺人と鑑定した。どうしてさう言ふ風に見たかと言ふに、總ての殺人は怨恨、痴情、物取、犧牲、迷信の五つの孰れかを原因とし、これ以外の原因で殺人事件は起らない。此事件は五つの中どれに當て塡まるかと言ふに、留子の素行を調べて見ると品行上少しも批難すべき點なく、他人から怨を受ける樣な性質でないとが分つた。殊に岩藏が死んで間がないのであるから、痴情騷ぎなどの起るべき事實がないので、怨恨又は痴情の結果殺されたものとは思はれない。それでは犧牲に基く殺人事件であるかと言ふに、なるほど家は立派な家に住むで居たが、財産と言ふものが無かつた。これでは財産橫領や財産爭ひの犧牲になる樣なことはない。迷信殺は殆ど問題にならぬ。迷信の爲めに親子三人が殺されると言ふ樣なことは想像がつかぬ。かうなると、假令盜まれた物はなくとも、又物取らしい形跡はなくとも、この殺人事件の原因は物取りと言ふことに結論せねばならぬ。

三

果して物取のしわざであつたとすると、犯人はどう言ふ種類の人間であるか、玆で人格硏究が必要になるのである。現場の模樣を見ると、外部から忍び込むだ樣に見せかけて置いた手段は、一寸見ると頗る巧妙であるが、具に觀察すると、其の手段が誠に幼稚で、强盜常習者のした仕事とはどうしても思はれない。久保田の家の間取りと、財物の置き場所とを見ると、家人を殺さずとも財物を得られる狀態であつたから、强盜の常習者であつたなら、一物をも得ずして斯る兇行を演ずる譯はない。殊に蚊帳の內側に多量の血痕が附着して居るところを見ると、蚊帳の外から斬りつけたのでなく、蚊帳の內で殺害したのであるから、愈々以て强盜常習者の行爲とは思はれない。そこでこの犯人は、犯罪に慣れない不良少年が、前後も考もなく、臆病の結果かうした兇行を演じたものであると言ふとに判定して、この判定の下に搜査を開始した。斯くして一日經ち、二日經ち、兇行後三日目になつたがまだ犯人らし

い者も擧つて來ない。刑事は焦せる、世間は騒ぐ、私としては氣が氣でない。かう言ふ犯人の捜査は時機を失すると捜査が困難になるから、何とかして早く犯人を擧げねばならぬと思ふて居ると、四日目の朝になつて耳寄りのことを聞いた。それは久保田の家に居た書生で、豐島駒吉と言ふ少年の素行がよくないと言ふことであつた。私は直ぐその少年の秘密を探ぐることとを刑事に命じた。敏腕な刑事は午后になつて報告をした。その報告に依ると、この少年は茨城縣北相馬郡小絹村字新宿の者で、父は農業を營むで居たが駒吉の幼少の折に病死したので、母親の手で育てられたが、生活困難の爲め明治四十一年の春、母親と二人で東京へ出て駒吉の姉の嫁に行つて居る麻布谷町の椎名と言ふ家へ身を寄せて、生活の道を求めて居ると、世話する者があつてその年の四月久保田の家へ書生に住み込むこととなつたが、懶け者である上に不都合を働いたので明治四十二年十一月に久保田の家を出された。その後の駒吉は、東京灣汽船會社所有房州通ひの通運丸の船員となり、東洋物產會社所有第一金丸の船員となり、橫濱市元濱町木內回漕店員となり、いろ〳〵の方面を渡り歩いた末、久保田へ泣きついて又も書生に住み込むだ。今度は以前と違ふて懶けて居ない、晝間は甲斐々々しく働いて、夜間は三田の英語學校へ通ふて居ると言ふのであつた。そこで果して三田の英語學校へ通ふて居るかどうかを調べて見ると、學籍は置いてあるが、敎室へ顏を出すことは稀れで、大抵は惡友と共にバーを飮み歩いて居ると言ふことが分つた。こゝまで調べがつくと、私の睨むで居た犯人の人格にぴつたりと附合するので、此奴を逃がしてはと思ふたから、兇行當夜の彼が行動を調べると、駒吉は兇行のあつた際、番頭に言ひつけられて月島東海岸通三番地の笠原醫師を迎ひに行つたが、歸つて來ると裏口で手を洗ふて居たと言ふことが分つた。段々探つて見ると、兇行のあつた三日前に薪割用の手斧を研いで居たのを見た者があつたので、その手斧を捜して見たがどうしたのか所在が不明であつた。犯人はてつきり駒吉であると

斷定したが、さて證據がない。これには私も少々困つたけれど、當夜駒吉が着て居た着物をさへ見たら、直ぐ證據が擧がると思ふて着物を搜すと、着物は京橋區月島町通り九丁目七番地の洗濯屋岩田新作方へ洗濯にやつてあつた。調べて見ると果して着物に生々しい血痕がついて居た。夜具にも血がついて居た。彼は兇行を働いた後、何くはぬ顏して寢床の中へ潜り込むで居たものと見える。

四

血痕附着の着物と夜具と言ふ動きの取れぬ證據の擧つた以上は、最早一刻も猶豫は出來ぬから、直ちに駒吉を引致して取調べると、初の中は容易に實を吐かなかつたが、血染の着物を突き附けて訊問すると、包み切れなくなつて逐一罪狀を自白した。彼の自白に依ると、駒吉は主人留子の持つて居る金側の懷中時計と手文庫の中に入れてある金とを盜むつもりで、數日前から手段を考へて居たが、時計も手文庫も、夜寢る時主人は枕元へ置いて寢るのであるから、夜これを盜み出すより外に方法がないので、萬一の時の用意に、薪割用の手斧を磨いで持つて行つた。蚊帳の中へ入つて時計に手を掛けた途端に、留子が寢返りしたのを目を覺したと早合點して手斧で一擊を加へると、もの音に林之助が目を覺したから、林之助にも斬りつけ、電氣を消して逃げやうとすると、出會頭に喜久子に突き當つたから、喜久子の顏へも一刀を浴びせて階下へ飛び下り、寢床の中へ潜り込むで樣子を窺ふて居ると、大變な騷ぎになつた樣であつたから、自分も出て行つて見ると、番頭が醫者を呼むで來いと言ふのを幸に、醫者の家へ行つた歸りに手斧を川の中へ投げ込むで來た。羽目板を外づしたのと、應接の窓硝子を開けて置いたのは、犯人が外部から入つた樣に見せかける爲めに、寢所へ忍び込む前にして置いたのである。私は兇行後僅か四日間で一點の遺留品もない犯人を檢擧したから、ほつと一息をついた。

洲崎の黑焦死體

一

私が官舍で寢て居ると、夜半に電話が掛つて來た。それは明治四十四年十一月十一日の午前二時三十分であつた。深川の洲崎に殺人事件があると言ふのであつたから、早速仕度をして警視廳へ出ると、洲崎署より電話の報告が來て居た。それに依ると、深川の埋立地に一人の男子が黑焦となつて倒れて居ると言ふのであつた。私は直ぐ警部、刑事巡査を引率して現場に出張した。場所は深川の西南に當る海岸で、洲崎遊廓の後の六萬餘坪の埋立地である。此所は道路に面した方に塵芥燒場があつて、要所々々に圍がしてあるので、一般の通行を許さないことになつて居たが、工事は半分以上も出來て居るのであるから、强て通らうとすれば通れないことはなかつた。この埋立地の西の端の海に面した所に工事監督者の事務を執る小屋があつて、其所から半町程離れた所に工事材料の置場があつた。置場の圍の外に割栗石が積むであつて、傍に工事用の砂を貯藏する板圍があつた。此所は晝間土方が食事をしたり休息する所で、其所に黑焦になつた死體が横たはつて居た。それを夜番が發見して洲崎署へ屆出たから、我々が出張することになつたのであつた。北の方を頭にして倒れて居る死體を調べて見たが、全身黑焦となつて居るので、人相も着衣も判別することが出來なかつた。唯二十二三才の男と言ふことの外は何事も分らない。そこで私は刑事を指揮して附近を調べさして見たが、被害者の着物の襟の燒け殘つたのと、ブリキ製の五合入石油罐、五錢の白銅一個、一錢銅貨二個、卷煙草バットの空箱とを得たゞけで、犯人の手掛りとなり相なものに何にも手に入らなかつた。兇行の現場を中心として調査の範圍を廣めると、同じ埋立地內で現場を距ること五六町の、洲崎遊廓大八幡樓の裏手に在る番小屋に異狀のあることを發見した。この番小屋は前日午後五時半頃に、其の日の業務を終つて、入口へ錠をおろして置いたにも係らず、その錠が破壞されて何者か出入した形跡がある。そして入口の前に、錠を破壞する爲めに用ゐたりと思はれる金梃と、黑塗に銀紙

を張つた玩具の竹刀一本とが落ちて居た。この二品が犯罪に關係があるか無いかは分らないが、兎も角捜査の材料にすることにした。然し、これだけの材料では犯人の分らないばかりでなく、被害者の何者であるかさへも分らない。のみならず、此死體は燒き殺したものか、殺してから燒いたものか、或は病死した者を燒いたものかと言ふことも分らぬ。又殺害の上燒いたとしても、現場で殺害したのか、他の場所で殺したのを此所へ持つて來て燒いたのかも分らぬ。他から運むだとすれば、陸上から運むだのか、海上より運搬したのか、これも判然しない。こう言ふ風に考へると、疑問百出して、殆ど捜査の方針が立たなくなる。

二

そこで私は、捜査の範圍を縮小する爲めに、解決のつく問題は片ぱしから解決して行つた。被害者の肛門を見ると、脱糞が固まつたまゝ附いて居た。而かも其の脱糞が長い棒の樣になつて居たから、死體は動かしてなかつたことが分る。現場で殺害したと言ふことの斷定が出來る。脱糞の模樣から考へると絞殺と言ふ事實も推測が出來る。現場に於て絞殺した上、石油罐の中から石油をかけて燒いたものと言ふことまでは推測はついたが、それ以上のことは容易に判斷がつかぬ。この埋立地の工事は、島田組の請負になつて居て、每日二千人位の土方が働いて居るのであるが、こう言ふ社會の常とて同一の人間が引續いて働いて居ることは稀れで、大抵新陳代謝して居る。殊に彼等の住所姓名は親方の所にも分つて居ないし、平常かなり親しくして居る者でも「越後」とか「上州」とか綽名を呼むで居るから、相手の姓名なぞを知つて居ないので、土方を調べやうと思ふても調べる方法がない。調べが困難であるからとて其のまゝにして置く譯に行かないから、此方面に手を入れて見ると、この埋立地へ入込む者は、土方の外に、土方を相手に物を賣る菓子屋、雜貨商、石油商位の者であるが、此處を通ると洲崎遊廓へ行くのに近いから、殊更この間道を通る遊客もある。すると土方の中に惡い奴があつて、此所を通る遊客をつかま

へて、いろ〳〵の難題を持ちかけ、金をゆする奴があると言ふことを聞き込んだ。この被害者もさうした遊客の一人でなからうかと思ふたが、何分にも被害者の身分も職業も分らないので、搜査の方針を立てるのに困難であるから、其の翌日より新聞を利用すると同時に、刑事を八方に派遣して、被害者の何者であるかを知ることに努力した。それから三日目であつた。本所區新小梅町一番地木版業樋田輝美方の職工で小野治助と言ふ二十六才の男が、兇行の發見された前日の午後一時頃主人の家を出た限り歸つて來ないと言ふことが分つた。段々調べて見ると、此男は埼玉縣北埼玉郡の生れで、鄕里で木版の仕事を覺え、十六才の時東京に出て、各所の木版工場を渡り歩いた末、今の主人の所へ仕込むだのであつた。性質は至極溫順な男ではあるが、品行はよくない方で、金を持つと洲崎遊廓へ通ふて居た。十一月十日の午後一時頃主人の家を出た治助は、その晚の六時頃、小梅町の同業者の所から工賃四十錢を貰ふて、何所へか出て行つた限り歸つて來ないと言ふのであつた。果して治助が被害者であるかどうかを知る爲めに、燒け殘りの襟と、被害者のはいて居た紺足袋とを主人の輝美に見せると、治助のものに相違ないと答へたから、漸く被害者だけは判明した。當夜被害者の足取りを考へると、電車で黑江町の終點で下り、埋立地の間道を通つて洲崎遊廓へ行かうとしたものらしい。然し何故に殺害されたかと言ふことがまだ分らぬ。治助に恨を懷いて居る者があつて、此所に待ち伏せをして殺したのか、强盜の仕業か、但しは喧嘩口論の結果こう言ふ慘劇が演ぜられたのか、三ッの中どれに當るか容易に判斷がつかぬ。物取りの仕業か又は途中で面識なき者の間に喧嘩が起つて殺されたものとすれば、何にも被害者を燒き棄て、證據煙滅を圖る必要がない。かゝる殘酷なる手段をとつてまでも、被害者の何者であるかを知れない樣にしたのは、確に怨恨殺に違ひない。被害者に恨を懷いて居た者の仕業と認めるのが相當である。少なくとも加害者は被害者と相識の者であらねばならぬと言ふのが多くの意見で

あつた。然し私の觀察は少し違つて居た、私は何所までも此犯人を强盜殺人と睨むで居た。被害者の素行を調べて見ても、他人から恨みを受ける樣なこともなかつたらしい。埋立地內に於て、土方が遊客を脅迫して金を取つたと言ふ事實も、屢々あつたと聞いて居るので、假令どう言ふ手段をとつたとしても、事件は强盜殺人であると私は信じて居た。

三

私の考が多くの意見と一致しなかつたのと、今一ッは、現場に在つた石油罐、玩具の竹刀、金梃等の出所並に使用者の何者であるかを知る必要があつたのとで、搜査隊を三組に分つて、怨恨殺の方面を探ぐること、强盜殺人として探偵すること、遺留品を證據に關係者を發見することとの三方に活動さした。遺留品を證據に活動した部隊から、石油罐の製造所は直ぐ知れたが、何時何人に賣つたものかを知ることが出來ない。金梃は當日の五時頃まで使用して居た者は分つたが、同人が小屋の入口へ立て掛けて置いたのを何者かゞ使用したので、これも何等要領を得ることが出來なかつた。最後の玩具の竹刀は淺草仲店の某玩具店で、十一月十日に土方風の客に賣つたことがあることだけが分つたと報告して來た。これと同時に、强盜殺人事件として土方人夫の方面を探偵して居た部隊から、十一月十日の午後七時頃、洲崎辨天町二丁目十三番地貸座敷紀文美樓へ一人前五十錢宛の約束で登樓した三人の土方があつて、その土方が翌朝歸つた後で床をあげると、座敷に砂が少なからず零れて居たと言ふことを聞込むで來たと報告して來た。この報告に力を得て、その三人の土方を調べさすと、埋立地內の土方小屋の親方今村の配下で夏頃から働いて居る土方で、三人共名前は分らないが、一人は二十才位で、あとの二人は孰れも三十二三才であると言ふことゝ、二十才位の方は自ら日本一と稱して居たと言ふことが分つた。早速今村の部屋へ行つて日本一と言ふ男が居るかと尋ねると、折よく其所に日本一と自稱して居る藤田操一と富田政吉と言ふ二人の土方が居た。直ぐ引致して取調べると、この日

本一言ふ男は千葉縣の者で、農業が嫌いで家を飛出し、土方となつて放浪して居たが、腕力のあるのが自慢で、常に日本一と自稱して居た。富田政吉は本名を木村春之助と言ひ、淺草の千束町で生れ、幼少の時分に兩親に死別れ、諸所方々を流れ歩いた末土方の群に入つて、よくない事ばかりを働いて居た。性質は土方として溫和な方であつたが、意思が弱いので、惡い仲間に引附けられて、さうした方面に陷ちた男であつた。この二人を有力な嫌疑者として取調べると、なか〳〵强情で實を吐かなかつたが、段々理ぜめで訊問して行くと、とう〳〵自白をした。その自白に依ると、藤田、木村の兩人は、今一人の共犯者たる通稱幕田林太郎事宇田川林太郎と三人、十一月十日の午後六時頃、洲崎辨天町一丁目海岸の露店で酒を飲み、埋立地で通行人から金を取る目的で大八幡樓下の番小屋まで來たが、錠がおりて戸が開かなかつたから、入口の前に在つた金桿で錠を打ち毀し、小屋の中へ入つて通行人の來るのを待つて居ると、治助が其所へやつて來たので、三人は治助を取り卷いて金を强請したが、治助が應じなかつた爲め、藤田が兩手で治助の咽喉を締めて殺害し、懷中から三圓五十錢入の蟇口を强奪した上、死體を土砂置場へ持つて行つて、工事用の丸太と木片とを燃料とし、死體を燒きにかゝつたが、容易に燒けないので、木村は自分の部屋へ五合入りの石油罐を取りに行つて、その石油をかけて燒いたのであつた。斯く犯人が明瞭になつて二人まで逮捕したが、宇田川一人未だ捕縛にならぬから、非常な苦心と努力をして、同年十二月七日の午前十一時洲崎埋立地へ立ち戻つて來たところを逮捕した。

土中の板裏草履

一

世間の人は屠蘇で浮かれて居る明治四十五年の正月二日の朝であつた。私は正月でも公務は休む譯に行かぬから、警視廳へ出て私の机の前へ腰を下すと、千住警察署から報告が來た。東京府下南足立郡三河島村荒

川河岸俗稱鴨場の葦中に、血痕附着のセル地洋服上着一枚、スコッチの鳥打帽子一個、獵銃の引金一個が落ちて居たと言ふ報告であつた。洋服の上着や鳥打帽子が落ちて居ると言ふだけなら、遺失物掛へ其の書面を廻せばよいのであるが、血痕附着と言ふことが附加してあるので搜査係長として棄てゝ置かれないから、直ちに現場を視察すると、同所は荒川に挾まれて、一面に葦が密生して居る。人家からは餘程離れて居るし、田圃へ出る道ではなし、普通の者の通行する所でない。上着や鳥打帽子の落ちて居たと言ふ場所へ行つて見ると、彼方此方血汐の跡がある。上着の血痕と言ひ、葦の葉の血汐の跡と言ひ、確に慘劇が演ぜられたと見て取つたから、尙ほその附近を具に調べると、人間が格鬪した跡らしい葦の横に倒れて居る所の土中に、半足の板裏草履のあるのを發見した。その日はそれで引揚げて、警視廳へ歸つて搜査願の出て居るものを調べると、本鄕區追分町十一番地醫科器械製造業川村綠太郎から、明治四十四年十二月三十一日の日附で、雇人藤井喜代七の搜査願が出て居る。綠太郎を呼び出して喜代七家出の顚末を聞くと、願書提出の前日、綠太郎は喜代七を伴れて、上野公園から日暮里を經て三河島村字町屋附近で獵をやつて居たが、二人同じ場所を荒して居てもつまらないからと言ふので、二人は別れ〳〵になつて、喜代七は荒川河岸の方へ行つた。其の日の夕刻豫め約束して置いた場所で綠太郎が待つて居たが、喜代七は遂に來なかつた。綠太郎は先へ歸つて、後から喜代七が歸へるのを待つて居たが、翌朝になつても歸つて來ないから、綠太郎は數名の店員を伴れて三河島附近を搜査したが知れないので、已むなく搜査願を出したと言ふのであつた。そこで上着と鳥打帽子と引金とを見せると、上着と鳥打帽は正しく喜代七のもので、引金は自分所有の獵銃の引金で、其の日喜代七に貸して置いたものに相違ないと言ふから、被害者は喜代七と言ふことに確定したが、被害者の死體を見ない以上は搜査の方針を定める譯に行かぬゆへ、翌日水上警察と共力して死體搜査にかゝると、同日の正午頃、

兇行の現場を去る八間ばりの荒川の水中より喜代七の死體を引揚げた。死體を調べると、上着を脱し、穿いて居た刺子の足袋をはぎ取られ、前額部と後頭部とに數ヶ所の打撲傷を負ふて居た。主人の供をして行つたのであるから、喜代七は金の用意はして居なかつたが、一圓五六十錢は有つたと思ふ蟇口が紛失して居た。察するところ、喜代七を殺害して右の蟇口を奪ひ取つたものと思はれる。周圍の事情と喜代七の人格から考へて、犯人は喜代七に遺恨のある者の仕業でなくして、全く强盗の仕業であると言ふことに略見當がついた。强盗殺人であるとすると、如何なる人格の者であるか、先づこれから研究してかゝらねばならぬ。そこで現場を中心として、其の近邊一帶の事情を精探すると、この附近は各種の工場が多いので、野天博奕が盛に行はれて居ると言ふことが分つた。これに捜査の糸口を得て、博徒の親分株に就いて繩張の關係を調べると、現場に遠からざる榛山中に在る賭場は博徒船頭粂の繩張で、十二月三十日の午後四時頃まで賭場を開いて居たことが分つた。この上は其の日賭場に集つた人物を調べれば略見當がつくであらうと、此方面の捜査を開始したが、何分出入した人數が多いのと、一々名前などを記憶して居る者がないのとで、それらしい人物を捜し出すことが出來なかつた。

二

捜査がこゝまで進むで來たのであるから、三十日に榛山の賭場へ集つた人物を調べたら必と犯人が出ると思ふのであるが、幾等努力しても此方面の捜査は遂に成功しなかつた。更に方針をかへて、唯一の證據品たる現場に在つた板裏草履で犯人を捜査することにした。こうなると何よりも此草履の製造元と販賣店を調べねばならぬから、刑事を手分けして之を調べさすと、こうした草履を製造する所は、淺草の花川戸、南千住その他幾個所にもあるので、何所の製造場でこしらへて何所の小賣店へ賣つたものであるかを突き留めることが出來ない。私は非常に心配した。捜査をこゝまで進めて來て今一歩と言ふところで見當がつかなくなつ

たのを殘念に思つた。夜の目も寢ずに考へた。板裏草履を手に持つたまゝ、食事もせずにぼんやりして居ると、草履の裏金に釘が二本拔けて居るのが目についた。傍に在つたナイフで此裏金を外して見ると裏金の裏面に、一厘刈の頭髮五本と毛根付の眉毛一本とがあつた。私は思はず『しめた』と叫むだ。それから板裏草履の各製造所から取寄せて置いた草履と此草履とを比ぐて見ると、どこも變つた點はないが、唯裏金の釘の穴の數が違ふ。どれを見ても釘の穴が三ッしかないのに、この裏金には穴が五つある。これだけの事實を發見したので、犯人はもう私の手に入つたも同樣だと思ふた。直ちに刑事を呼むで命令を下した。甲乙の二隊に別けて活動さすことにさした。甲部隊は王子、三河島、千住等の各理髮店を廻つて、十二月の下旬に板裏草履をはいて來た客の有無を取調べさして、乙部隊には穴を五ッあけた裏金を用ゐる板裏草履の製造工場を調べさした。私は兩部隊の報告の來るのを首を長くして待つて居ると、乙部隊の報告があつた。この報告で五ッの穴のある裏金を使用して居る板裏草履の製造所は、府下北豐島郡王子町字王子の△△板裏草履製造所であることゝ、同十一月十日同製造所より三ヶ所の小賣店に販賣したことが分つた。乙部隊の第二の報告が來た。三ヶ所の小賣店を調べたところ、同じく王子町の豐島荒物店が仕入れた五足の中の一足が證據の板裏草履で、これは十一月二十日午後五時頃、年齡三十二三才の、印半纏に股引を穿いた脊の高い土方風の男に賣つたものであることが分つた。乙部隊の活動は成功したのであつた。待たれるのは甲部隊の報告である。

三

そこへ甲部隊からの報告があつた。板裏草履を賣つた荒物屋から一丁目程離れた所に鈴木菊太郎と言ふ理髮店があつて、此理髮店へ十一月二十三日の午後四時頃板裏草履を穿いた客が來たと言ふから、その人相を聞きたゞすと、印半纏に股引を穿いた脊の高い三十二三才の土方風の男で、荒物屋へ板裏草履を買ひに來た人相によく似て居ると言ふのがその報告であつた。こ

れで犯人は王子附近に居る者で、三十二三才の脊の高い土方風の男であると言ふことが分つたから、刑事を榛山へ派遣して王子方面から來る土方を物色さすと、船頭粂の賭場へ出入する者で、暮れの二十九日の勝負で散々負けて、着て居る着物まで卷きあげられた土方があると言ふので、其の人相を聞くと、板裏草履を買ふた土方によく似て居るから、直ちに此者の逮捕を命じた。すると正月の十一日の午後一時頃千住の青物市場の前を歩いて居るのが確に其奴と見て取つたから、直ちに逮捕して取調べると、喜代七の穿いて居た刺子の紺足袋を現に穿いて居たのと、證據の板裏草履を突きつけられたとで、包みきれなくなつて遂に自白した。彼は埼玉縣北埼玉郡利島村の農民で岡田駒吉と言ふ三十一才の男で、明治三十五年十二月第一師團野戰砲兵第十六聯隊に入營して現役中不都合を働いて、軍法會議に於て重禁錮三ヶ月に處せられたのを初として、屢窃盜罪で入獄し、明治四十四年の夏出獄すると直ぐ東京へ入込むで、王子の煉瓦工場の職工となつたが、賭博の資金がなくなると惡事を働いて居た。暮れの二十九日も榛山の賭場で散々失敗して、着て居る着物まで脱がされる樣な始末で、どうすることも出來なかつたので、鴨場で獵をして居た喜代七を殺害して所持金を奪つたと言ふのであつた。駒吉を逮捕したのが一月十一日であつたから、死體を發見してから十日目に犯人を檢擧したのであつた。

玉手箱を開くまで

生方敏郎

鬼　オイオイ、そこへ行くお爺さん。

太郎　私より外にはこの邊りに人もないのに、私を呼ぶのならお爺さんといふのはおかしい。私はまだ三十にもならないのに。モシ、モシ私を呼んだのですか？

鬼　さうだよ、何れお爺さんになる人だからお爺さんと言つてゝ宜いぢやあないか。それとも白骨と呼んで置かうか。どうせ白骨になるのだから。

太郎　冗談をおつしやいまし。こんな若い者を捕へて……

鬼　なに、冗談なものか。だが其れで惡ければ赤ちやんと呼んでやらう。老人は白髮の生えた赤ちやんだからね。

太郎　お呼び止めなすつても御用がないのなら、私はこれで失禮します。忙しい用事のある身體ですから。

鬼　は、ア、用事がある？　どんな用事が？

太郎　それは私の方から聞くことです。この邊りに浦島といふ漁夫の家はないでせうか、さつきから探してゐるのですが、知れないので困つてゐるところです。

鬼　そんな家はないよ。

太郎　無い筈はないのですがな。僅か三年家を空けただけなんですから。

鬼　どうも無いやうだな。そんな名前は聞いたことすら無い。

太郎　さつきから彼方此方で問合はせるけれど解らないので困つてゐます、それ許りでなく、村の樣子と云ひ住む人々と云ひ悉かり變つてゐるので、私は全く夢

を見るやうです。
鬼　それお變りもしようさ。三年と云へば長い月日だもの。その間に蟬だの蜂だの蛇や蛙は數代經つのだ。水苔や草の國には幾多の盛衰興亡があるのだ。陽の熱も幾分か冷めるだらう。月の海は一層凍えることだらう。その三年の間お前さんは一體なにをしてゐたのだ。
太郎　私は三年前の春の麗かな日に鰹釣りに出たのです。
鬼　それぢやあ、どつさり釣れたらう。
太郎　ところが一尾も釣らなかつたのです。
鬼　すると、あべこべに釣られてゐたのだな。鰹つて奴は三千里も旅をする奴だ。失禮ながらお前さんなんぞより少し規模が大きいやうだよ。
太郎　いや、私はそれどころではない。海の底へ行つて來たのです。大きな龜の背中に乘つて、龍宮といふ所へ行つて來ました。
鬼　龍宮の噂は兼て聞いてゐるが未だ見たことはない。それはさぞかし面白い處だらうな。
太郎　それは立派な宮殿樓閣です。橋を見れば瑠璃の橋、牀に昇れば珊瑚の牀、茵に坐れば錦綉の褥、美女が數十人玉の盃を琥珀の盤に上せて持つて出て來て、私のために日々夜々盛んな酒宴が開いて呉れました。そして私はそこの姬君の婿として迎へられて、ついうか〱と三年間遊びすごして終ひました。
鬼　成程好い處だな。然しいくら龍宮でも下男や三助に雇はれて行つたのでは詰まるまいが、花婿として迎られたのなら、嘸かし幸福だつたらう。
太郎　その上私は愛せられたのです。
鬼　誰から？　龍宮のお父さんからか、お母さんからか。
太郎　お父さんやお母さんから愛されてどうするもんですか。勿論少女からです。
鬼　やれやれ、それは惜しいことをした。なぜお前は其處のお父さんに可愛がられなかつたのだい。少女と戀愛などをしたのぢやア土産話にもならないぢやない

か。
太郎　それは何故です。私達の戀は、あの海の水のやうに淸らかで、大陽の炎のやうに熱つかつたのですのに。そして私共の夢は玉のやうに圓かだつたのですのに。
鬼　なにさ、この國では近頃戀愛談は一切禁物なんだ。
太郎　それはまた何故です。戀愛の話を聞くと鼓膜が破れて聾にでもなるのですか？　それなら小さい聲で話せばいゝでせう。
鬼　さうぢやァない。領主樣が戀愛談がお厭ひで在らつしやるのだ。
太郎　それがどんなに純潔であつても？　それがどんなに面白いものであつても？　戀愛に同情が無いのですか？
鬼　まんざら共鳴しないのでもあるまいが、戀愛といふからでもないと思つてゐるのだらう。それに領主樣は恪勤で在らつしやるから。御政道が忙しいのだ。

太郎　では、お父さんに可愛がられた話ならなぜしてもいゝのですか。神聖なのですか。
鬼　それには耳を貸さないでも濟むからさ。時にお前さんが大層大事相に小脇に抱へてゐるものは何んだね。旅行用の葛籠かね。
太郎　いえいえ、これは龍宮の少女が寄こした紀念です。
鬼　あゝ、さうか。お辨當でも入つてゐるのか。
太郎　そんなものぢやァ無いでせう。
鬼　それではお前さんの家への御土產かへ。
太郎　さうでもありません。
鬼　ぢや　何だね。
太郎　なんだか知りませんが紀念だと言つて寄こしました。乾度好いものでせう。けれど見ちやァ不可いと言ひました。
鬼　見ちやァ不可いと言つたか。それでお前さんは未だ今まで見ずに居たのか？
太郎　さうです。私は見ないことを少女に誓ひました。

私達の誓言は此の地の根のやうに動かないのです。

鬼　嘘を吐け。地の根は動くよ。時々地震で動くぢやアないか。その樣にお前達の誓言も動くだらう。だがお前は正直だね。よく其の中を今迄見ないでゐたよ。別に見たいことはないかい。

太郎　是迄そんなに見たいとも思ひませんでした。けれどさう言はれると何んだか見たいやうな氣もします。

鬼　見ちやア不可い。見るなと言はれたものを見ちやア不可い。なんでも其の通りだ。言ふなと命令されたことは言つちやア不可い。するなと命付けられた事はしちやア不可い。食べるなと言はれたものは食べちやア不可い。ほんとうの事だ。

太郎　さうです。私もさう思ひます。

鬼　さうだらう。だから、その箱のなかは何んなことがあつても見なさんなよ。だが何んのために少女はお前にそれを托したのだらう？　兎に角大變な御荷物だね。目方は何の位ゐあるんだね。

太郎　そんなに重くもありません。一日小脇に抱へてゐても憊れる程ではありません。鯛を一枚抱へたくらゐの重さです。

鬼　さうかい。では、中に入つてゐるものは鯛かも知れないね。乾度金の鱗を持つ生きた鯛だらう。

太郎　いや、さうではないでせう。生きた鯛を箱のなかへ容れて置くのは可憐さうですから。そんは可哀さうなことを、あの愛らしい少女がする筈はありません。

鬼　さうかも知れない。龍宮では鯛のしほ燒などはしないだらうな。それから鱸のさしみも食べないだらうな。さうすると友食ひになるから。友食ひは人間許りのすることだ。

太郎　さうです。あすこでは桃だの栗だの其他いろ〳〵兎に角我國では見られない甘い果實を食べてゐます。それから甘い酒を飲んでゐます。

鬼　さうか。では其の箱のなかにあるものは大方柿か栗だらう。海へ行くと陸の詰まらないものが珍らしく

なるんだね。
太郎　まさか、そんなものぢやア無いでせう。あれ程までに私を愛してゐる少女がかたみとして渡したものですから。最つとずつと宜いものでせう。
鬼　さうさな、では眞珠と珊瑚と玳瑁でも入つてゐるかな。海の寶は先づ其の位ゐのものだから。だが眞珠も珊瑚も山から掘出す樣々の玉に比べれば價値は少い。それにしてもその箱に一ぱい入つてゐれば可なりの値打はある。それを私に賣らないか。さうすればその代りに多くの田畑を添へて、立派な家を建てゝやらう。
太郎　私は故郷に家が欲しいのではないのです。どんな立派な家を立てゝ下されても、これから建てる新しい家なんぞ、私に用はありません。私は唯自分の生れた古い家を慕つて歸つて來たのです。例へ柱は傾いてゐても軒は朽ちてゐても、自分の生れた家ならば宜いのです。あなたが建てゝ下さる宮殿樓閣など望みやしません。その位ゐなら寧ろ龍宮に止つてゐました。

それからまた此の中にあるものは眞珠や珊瑚ではないでせう。それにしては餘り目方も輕いやうですから、必ず最つと好いものに違ひありません。
鬼　さうかも知れない。最つと好いものだとするとなんだらう？　お前さんにはそれが解るかい？
太郎　私にも解りません。然し必ず尊いものには違いないと信じてゐます。
鬼　さうか？　さうだらう。さう信じてゐる方が宜い。なんでも物は信じるに限る。少女が眞心の愛をお前に捧げると言つたら、本當にその通りだと信じるがいゝ。譬へ人が海を指して高いと言ひ、山を指して低いと言ふとも其れを信じる方がいゝ。お前は海が歩めると言ふものがあつたら、たとへ溺れるまでも歩いて見るがいゝ。お前は火を踏むことが出來るといふものがあつたら、譬へ爛れるまでも火を踏んで見るがいゝ。何事も信じなさい。信じるところに幸福がある。だから此の箱のなかに有るものも宜いものがあると信じるがいゝ。決して惡いものがあるなどと疑つては不可ない。

それからまた見るなと言はれたこの箱のなかは決して見ない方が宜い。どんな恐しいものが飛び出すかも解らないから。

太郎　恐ろしいものが……なにか恐ろしいものが此の箱のなかゝら出るでせうか？

鬼　いや、疑つては不可い。決して恐しいものなぞ出やしないだらう。お前の言ふ通り確かに珊瑚よりも眞珠よりも一層善いものがあるに違いなからう。

太郎　私は不安になつて來ました。本當にさうでせうね？

鬼　私も斷言はしかねる。然し善いものがあると信じた方がお前さんには幸福だよ。物は疑ぐる程不幸なことはない。大方其のなかにはお前の戀人の肖像畫が這入つてゐるだらう。その瞳は山櫻の花瓣に置く露のやうに燿いてゐるだらう。その肌は越の國の山々を蔽ふ雪のやうに白いだらう。

太郎　それからあの赤い溫かい唇と此の世のあらゆる音樂にも優つて快く響く彼女の言葉を、私は忘れることが出來ません。

鬼　さうだらう。それをお前は再び見たいとは思はないか？　その箱の蓋を開けてさ。

太郎　私は肖像畫に仍らなくとも、いつでも彼女の傍を見ることが出來ます。彼女の微笑と言葉とは常に私の傍を離れないでゐますから。

鬼　それ程お前さんの慕つてゐる少女からなんでお前は別れて來たのだ？　喧嘩でもしたのではないか？

太郎　故鄕が戀しくてたまらなくなつたからです。與謝の海の岸邊を打つ波の音が枕に通つて、夢を驚かせることが幾夜となく續いたのです。仲間の船頭の唄う悲しい節の舟唄が聞えて來るのです。こゝに生れてこゝに育つた時分には、波の音や船頭の唄ふ舟唄などを、さほどに宜いと思つたことはなかつたのです。けれども夫れを彼方に居て聞くと、なんとも言へぬ感じがして自然と涙が湧出るのです。私は一生に一度でもいゝから故鄕の山や田畑や海が見たいと思ひました。歸つ

て來てから村の子供等にまでこんなに嘲弄されるとも知らないで、故郷の人が懷かしく、一生に一度でいゝから故郷の人に逢ひたいと思つたのでした。それが出來なければ龍宮の榮華も空しいもののやうに思はれたのです。實際美しいものづくめ、宜いことづくめの龍宮は、私に取つては不滿足でした。私は其のなかにゐて悲しい舟唄を醉ひ心地になつて聞いたのです。悲しいといふことのない龍宮は私には物足りなかつたのです。私はその悲しさを求めて故郷に歸つたとも言へませう。

鬼　龍宮の少女はお前のために子供を設けなかつたのだらう。子供が出來たならばお前は故郷に歸らうとはしなかつたと思ふ。

太郎　子供の愛に惹かされてゞすか。私は子供の愛に惹かされるまでもなく、何萬人の子供の愛に對するよりも、多くの愛をあの一人の少女に捧げてゐます。愛情に仍つて私が龍宮に鏈がれるものでしたなら、私はいつ迄も其處を去らなかつたに相違ないのです。

鬼　さうだ。お前が龍宮を去つたのは愛着の絆が切れた爲ではない。如何なる愛着の絆を以つてしても、お前をそこに繋ぎ止めることは出來なかつたのだ。けれども子供があればそこに愁ひと苦しみとがある。それがお前を龍宮に惹き止めたであらう。甘いばかりの愛情の絆はそんなに強いものではない。龍宮の少女はよくそれを知つてゐる。だからお前にその玉手箱を托したのだ。

太郎　そんなことは有りません。私があの少女の愛を疑はないやうに、少女もまた私の愛を信じてゐます。また若し私の愛を疑つたとしても、この玉手箱が何んでその證據になりませう。

鬼　お前は知るまい。然し其の箱のなかには全能の鬼が封じられてゐるかも知れん。彼は少女の命令を受けて、お前の行動を監視する爲にそのなかに潛んでゐるかも知れない。子を生まない女は嫉妬深いものだからな。

太郎　その鬼は何んな形をしてゐるでせう？

鬼　それは恐ろしい形をしてゐる。あらゆる鬼のなかで最も恐ろしいのは、人を監視する鬼に相貌だと言はれてゐる。それは山よりも大きくもなれば、箱の隙間から漏れる程小さくもなる。その聲は雷のやうで。その速さは稲妻のやうだ相だ。

太郎　顔は黒いでせうか？　赤いでせうか？

鬼　黒いだらう。いや、赤いかも知れない。

太郎　形は蛇のやうでせうか。私は蛇が一番恐はいのです。

鬼　蛇は三尺の蛇でも六尺の悪魔を怖れさせるものだ。私もその箱のなかの鬼は蛇に似てゐると思ふ。身體が蛇でなければ、毛髪が蛇かもしれない。手足の指が蛇かも知れない。それはお前が寢ると箱のなかゝらわつて村の少女を寄せ付けないやうにするのだ。だから遊びに出るだらう。そしてお前の寢床の廻りを終夜まらお前は夜中に目を開いてはいけない。お前はそれが見たいことはないだらうな。

太郎　いゝえ。見たくないことは有りません。けれども、私は是を開かないやうに約束しました。それにあの少女がそんな恐ろしい悪魔を忍ばせて、私を恐れさせる譯がありません。恐らく此の中には龍宮の寶が入つてゐると思ひます。

鬼　それはどんな寶だらう。龍の腮に玉があるといふ其の玉だらうか？　潮滿つる玉といふのが龍宮にある筈だ。それを手に持つて高く捧げれば、潮は何處までも高く滿々と上げて來るといふ。その玉だらうか？　また龍宮には潮干る玉といふのがある筈だ。それを手に取つて高くかゝげれば、潮は次第に退いて大海原は砂の濱と變るといふ、その玉だらうか？　いやいや、龍宮には最つと尊い寶がある。それは未來の世界を寫した繪卷物である。此の國が興つて彼の國が亡びることも、この山が淵となつて、あの川が岡となることも、その中には描いてある。永く壓服せられてゐた黒い人間が競ひ興つて、傲慢な白い人間を匐ふ蟲のやうに踏潰し、是を指して蔑む時代の繪も描いてある。天の使のやうな小兒が母の膝から矢を放つて、恐ろしい顔をし

て威張つてゐる武士を盡く斃してしまう時代のことも描いてある。また大理石の獅子と青銅の狛とが吼へ廻り百姓を兵隊にして戰はせ屍を山のやうに積上げる時代のこともそのなかに描いてある。また兎が虎と一緒に遊び、蛇が子供の守をし、刀を鑄潰して鍋を作り、槍を曲げて草刈鎌にする時代のことも其のなかには描いてある。然し龍宮には最つと貴い寶がある筈だ。黒い面へ白く書きつけた命の暦がある筈だ。そのなかには總ての鳥の命もあらゆる獸(けもの)や蟲の命も、また人間の命のことも認めてある。誰がいつ生れていつ死ぬといふこと、誰はいつ富貴を得て、いつこれを失ふといふことが盡く書いてある。大空の月が瘠(や)せるやうに、美人の頬の肉がいつ落ちるかといふことが記されてある。また杜若(かきつばた)の花の萎むやうに此の若人の瞳がいつ萎むかといふことまでも記されてあるのだ。

太郎　ちよつと待つて下さい。此の箱のなかにある寶は、それではないかと思はれます。昔から今に至るまで、此の世に人の數は空の星のやうに多くありました。そのなかで殆ど數へるに足りない取立てゝ言ふ程もない若い漁夫のことなども名前位ゐはあるのでせうか？

鬼　ある。名前許りではない。世界の高き、賤しき如何なる種類の人のことも全く漏れなく誌されてゐる。例へばお前さん髪の幾條あるといふことまで細大漏らさず書いてある。

太郎　私がいつ生れたといふことも？

鬼　いつ死ぬといふことも。

太郎　どこに暮したといふことも？

鬼　どこに埋葬されるといふことも。

太郎　少女を戀したといふことも？

鬼　その戀の破れるといふことも。老ひさらばうてお前が白髪の老翁となり、昨日の紅顏は空しく去つて、波の干いた後の砂地に殘る形のやうに肋骨の醜く表はれることまでも、その暦のなかには盡く書いてある。

太郎　私はまだこの通り若いのです。私はこれまで病氣をしたこともありません。私に死期の來るのはいつ

でせう。私は想像も出來ない程遠い未來のことのやうに今迄は思つてゐました。

鬼　それは明日であるかも知れない。また今日であるかも知れない。その箱のなかの暦の外には誰もそれを知つてゐるものがない。

太郎　あゝ、私は堪まらなく見たくなりました。その暦といふのが。

鬼　見ては惡いだらう。お前は夫れを見ると必ず失望する。自分の年取ることや死ぬことが正確に判つたら、なにをする張合もなくなるぢやアないか。そんなものを見るものぢやアない。

太郎　私はもう張合ひもなにもいりません。その手を放して下さい。止めないで下さい。自分の運命が盡く解るまでは、私は安心が出來ないのです。

鬼　安心はそんなに善いものぢやアない。それよりもお前には龍宮の少女の方が大切だらう。この手箱は決して開かないと少女に誓つたのが大切だと思ふなら、それを開いてはならない。彼女の言葉に背いて少女の愛を失つたらどうする。

太郎　愛を失ふなんて、そんな厭なことは起らないでせう。彼女は私を宥して呉れます。どうかその手を放して下さい。唯一行だけでもいゝ、私は何時何日に死ぬといふことだけでも、今知りたい。今…

鬼　あはゝゝゝ手箱を開いたな、俺がこんなに止めたのに。それ見ろ。箱のなかからは白氣が濛々と立つた。それがお前の命だ。命の失せた骸め。それもう頭は白くなつた。顏は皺になつた。手は慄へてゐる。足腰は立たんだらう。然し恨むなよ。俺は初から玉手箱を開くなと止めたのだからな。

世界に於ける秘密の數々

若月保治

▲先達瀧田さんから電話があつて、世界の秘密と開放について何か書けといふことであつた。秘密と開放！何だか非論理な風がする、開放してしまへば秘密ではない、けれども秘密が單に秘密とされて居た丈けでは何も白くしない、變だなと思ひながらも、電話では話が分らないからと思つて、兎に角承諾した。さうして考へて見ると、世界の秘密といつたところで、それはどういふ意味なのか、考へれば考へる程それが漠然として來る。單に世界の秘密といつた丈けでは殆んどとりとめがない。歴史上の秘密、政治上の秘密、外交上の秘密、地理上の秘密、物の秘密、事の秘密、宇宙の秘密、人生の秘密、生命の秘密、かういふ風に考へて來ると際限がない。そして又政治上の秘密や外交上の秘密はなか〳〵に分るものではない、歴史上の秘密や地理上の秘密は餘りに廣く知れ渡つて居て面白かりさうもない、宇宙の秘密、人生の秘密、科學上の秘密、かうしたものは文明の進歩と共に日々それが發見され開放されて秘密ではなくなつてゆく、それを一々項目のやうに擧げたところで可笑しくもない、といふ風に考へて來ると何も書くことはないやうな氣がして來だした。その中にはだん〳〵日限がせまつて來る、俗事は續出する、殆んど手がつかなくなつて來た。

▲私はとう〳〵、自分で斷定してしまつた。あけて悔やまれるのは玉手箱の秘密の相場がきまつてゐるのだ、何でも秘密らしい物や事について手當り次第、見つかり次第に面白さうなことから書いて見やう、要は

面白ければいゝだらうからと、かうしてさてペンを手にして見ると誰しも先づ世界の秘密の一つとして最も先に頭に浮ぶのは、例の埃及の獅身にして人叉動物の頭を有するスフィンクス像であるが、これなどはもう餘りに廣く知られた秘密である。外交文書を賣つた賣らぬで八ヶ間敷かつたドレーフユー事件といふのも知る人には知られ過ぎてゐる、二十年頃に行衛不明になつた畝傍艦の行衛、近くは常陸丸の行衛、小野の小町の人物、かうしたものも面白くない、忽然として戰場に仆れ、どうも身方の彈丸に斃れたのではないかといふ疑から、昨年各國の研究家が集つて墳墓を發掘したといふ北歐の英傑チャールズ十二世の死因研究もまだ其結果が發表されない。今更斯んなことをいぢつて居るでもなからうから、私はもつと手近な新しいことを述べて見ることにする。

▲不思議な井戸　米國測地部の地質學者が近頃發見したフロリダ州セント・ジョン河畔のウエラカと云ふ地の井戸からは、淡水と鹹水と同時に兩方が得られるさうだ。此井戸は最初百六十呎まで堀つて見ると、普通の硫黄水が得られたが、更にそれを三百九呎の深さまで堀ると、今度は非常に鹹い水脈に打つかつた。此處に於て兩方の水を同時に得たい目的で、二本の管を底まで通してポンプで連結して見た。處が果して、最初には淡水が、次のコップには鹹水が得られるといふ不思議な井戸になつてしまつた。そして其理由はまだ秘密の中にあるさうな。

▲嚔を起す木　南亞弗利加に嚔を起す木として知られた植物がある。それを切る時などは勿論、それを植ゑやうとしても、頻りに嚔を起させないでは置かない。だから昆蟲類などは此樹に觸れやうともしない。木の味は恐ろしく苦がい。色は薄茶色で、木理は甚だ細かくて堅いから、比重は水よりも遙に多い。頗る美しい樹で磨をかけると立派なものであつて、長い間水に堪えるが、何故に嚔を起すかはまだ說明されて居ないやうだ。

▲山形の浮島　山形の浮島といふのもまた秘密の一つ

といへば云はれる、池の中の小さい島が、時とするとふわり／＼浮いて流れあるく。それが風の爲でもなければ人間の行爲でもない。東北大學の日下部教授の説明だとして外國雜誌に載つて居る處によると、池の底から葦の根などが浮上つて集つたものに草が生へて頭が重くなるとそれがくるりと引くりかつて、再びその上に草などが生へた。それが池の底の水流の具合などで時々思ひ出したやうに動くのださうだ。

▲**歌ふ貝**　魚類には歌ふものが澤山あるといはれてゐるが、印度の錫蘭島の海岸には、貝類に歌ふ種類があると傳へられて居る。それは一種の貽貝(とがひ)で靜かな天氣の日に、海岸が潮がひくと、長い低い清閑な音聲で歌ふさうである。穏かな夏の夜などに聞くと殊の外に心地のいゝものであるが、別に此貝類に咽喉がある理でもないから二枚の貝殼の操縦によつて、此いゝ音が出るのかともいはれてゐるが、よくは分らない。

▲**鰊の產卵**　嘗て蘇格蘭で捕へられた長さ三十吋の鱈の腹には、一千萬の卵があつたといはれてゐるが、鱈の卵は一腹に四千五百萬からあるさうだ。けれどもそれよりも產卵の多いやうに思はれるのは鰊である。或學者の統計によると、一對の鰊は三年間に一億五千四百萬を產卵し、二十年の間、一對の鰊の卵を悉く立派に發育することが出來るやうにすると、地球の容積に等しい丈けの鰊となる筈ださうである。其處にも自然の不思議な秘密があるといへば云はれる。

▲**秘密の寶庫**　數百年の間、十一億二千萬磅の價格ある金塊や寶石類が米國コラムビア洲ガタビタ湖の底に埋められてゐると傳へられてゐる。此土地は元來富裕なる印度人の種族が居た地方で、原始の印度人等は、神への献け物として、金銀財寶を此湖水の底に投げ込むことを習慣として居たのである。それが爲に米國が發見されて以來、探檢家や旅行者等は、數世紀の間常に、此湖水を乾かして財寶を手に入れやうと企てたが、何れも皆不成功に終つた。其中西班牙人だけは殆んど此捜索事業に成功せんとしたが、中途で堤がつぶれて遂に失敗に歸した。二十世紀の初年になつて、一英國人の

會社は、またしても此事業を計劃し、四年かゝりで大方水を干しかけた處へ、大雨と數多の泉との爲に遂に目的を達することが出來なかつた。けれども其際多少の寶石や裝飾品は泥土の中から捜し出され、兎に角財寶が埋まつてゐること丈けは確められたさうである。而も十五萬圓の支出は到頭償はれるに至らなかつた。そして此秘密の寶庫は猶ほ新なる冒險家を待つて居るさうである。

▲**秘密の指輪**　マドリッドのある十字街にアルムデナ夫人の像といふのがある。其像の首に卷かれて居る鎖には、澤山の金剛石をちりばめた一個の指輪が取りつけてある。泥棒もそれを盜むことを敢てしないのは、其指輪には恐ろしい魔力が備つて居るからだといはれてゐる。――話はかうだ。西班牙皇帝アルフォンソ十二世は、皇后メルセデスに贈らんが爲に一個の指輪を造らせた。皇后はそれを嵌めて居ると一ヶ月の後に死んでしまつた。皇帝は卽ちそれを自分の妹のインファンタに與へた。すると數日の後にはインファンタがまた死んだ。指輪は皇帝に返され、再び皇后の祖母であるクリスチャンに贈られた。彼女は三ヶ月たゝぬ中にまた死んでしまつた。その後皇帝は其指輪を箱に入れた儘で仕舞つて置いた處が、今度は皇帝自らが一年たゝぬ中に死ぬることゝなつた。爾來此指輪はアルムデナの像に懸けられることゝなつたが、それについて佛國の一記者はかういつて居る。西班牙皇帝も氣がきかない。彼は何故に此指輪をカイゼルに贈呈しないのだらう。さうすれば獨逸の皇帝が斃れて、戰爭は止んで、世界は平和になる、そして西班牙皇帝は世界平和の神としての名譽が擔へるにと。

▲**ハンカチーフの秘密**　女が紳士に向つてハンカチーフを贈ると、それはその紳士と結婚したい意志をもつてゐることを表記するのである。だからさういふ意味のない時の贈物であるならば、ハンカチーフよりも履下かカラーなどの方がいゝと一英字雑誌に出てゐる。何故にハンカチーフが斯ういふ意味に用ひられるに至つたのであるかは私には分らない。それが英米の一般

の信仰であるかどうかも私は知らない。

▲耳で新聞を見る　耳では聞くものと思つて居たが、耳で見ることが出來るやうになつたといふから不思議である。それは佛國の科學者ダルプ氏の最近の發明で、盲人が、普通に印刷された本や新聞の頁を讀むことの出來る裝置で、一種の電話の受話機を小さい器械に取つけ、其の器械を勝手に文字の上に動かして色々の文字を識別するのださうである。其原理といふのは極めて合理的なもので、セレニウムといふ金屬は、それが暴露される光の量に從つて、それを通過する電流を强めたり弱めたりする特質をもつてゐる處から、巧に此特質を應用したものである。卽ち發見器といふものを十分に明るく照した頁の上を動かし、其際に電話の受話機が受ける色々の音聲によつて、文字を識別するのであるが、之を實用に供するには僅の練習にて足るとかいはれてゐる。

▲不思議な河　カナダの北アルベルタに世界で最も不思議な河といはれてゐる河がある、河の流れ路も堤も普通の河のやうに明瞭して居るが、其河には水といふものがない。それでは流れて居るのは何かといふと、粥のやうな泥土なのである、それが宛然氷山が流れるやうな風にのろ〳〵と流れてゆく、然も氷山のやうに切れ目があるのでなくて、どこからどこまでもつゞいて河の底まで糖蜜のやうにどろ〳〵として居るのである。

▲インキを作る河　河のことを述べた序に他の不思議な河について二つ三つ記して見たい。アルゼリアの二つの河は、合してインキを製造してゐる、その一つの水は鐵を含み、他の一方は大なる沼地を流れて沒食子酸を含んでゐるからである。日本などでは氷の下を河の水が流れてゐるが、西伯利では其反對に氷の上を河の水が流れて、氷は久しく〳〵溶けない儘に固まつた岩になつてゐるのである。現にレナ河の一支流では、河底をなす土地の下に、九呎の厚を有する純粹の氷の層があるのだ。それにも增して、自然の惡戯の現はれてゐるのは米國ケンタツキーの所謂隱れた河であらう。

どこから流れ出て來るのか分らなければ、何處へつゞくとも分らない一個の洞穴へ流れた儘で、それきり河が消えてしまつてゐる。そして河は漣の動搖もなく流れて、水は靑みがゝつた色をして居るとか。

▲歌を唄ふ井戸　米國テキサス州には秘密な歌を唄ふ井戸といふのがある。それは好天氣の時には琴の音のやうな響を發するのであつて、時とすると其音響が非常に明晰になり、やがてそれが衰へて、だん〳〵遠ざかつてゆくやうな風にきこえて、遂に消えてゆくのである。かういふ變化は數分の間に而も規則正しく起るのであつて、東風が吹く時には、井戸の水は甚だ低くて音響は頗る弱いが、强い西風が吹くと、水は高まりて、音も大きくてはつきりして居る。また北風が吹く前には其音は非常に劇しくなつて、水は殆んど井戸の頂上まで高まり、六十呎位の深さになつて、騷がしい妙な音がきこえるさうである。何故であるかは勿論まだ分つて居ない。

▲三年間延着の列車　汽車が一時間とか半日位延着したといふことはよく耳にすることであるが、三年後れて到着したといふ列車は、全く僞のやうであるが而も事實であるから可笑しい。英國のボーモント行の列車が七十五哩を隔つたポッヴーを發して暫くすると、列車は大暴風雨に遇つて、脫線して三十哩を流された。そして或砂地に投げ上げられたばかりならまだいゝが、その暴風雨の爲に鐵道會社は破産して、機關車も客車も三年の間其儘打やられて居た。そして三年の後にやつと會社が復活して、汽車は修繕されて目的地に到着したといふのである。きいて見ると馬鹿々々しい話である。

▲數の秘密　數の七は波斯人、埃及人、希臘人、羅馬人など、昔の國民は勿論、聖書の中では、秘密の數として取扱はれてゐる、七賢人だの七睡人だの云ふ語は希臘にも支那にもある。そして七といふ數はどちらかといふと善い方の意味に用ひられてゐるが、其反對に十三といふ數は不吉の記號として用ひられてゐる。かういふ數が何故に喜ばれたり忌まれたりするに至つ

が、其秘密は一寸記憶しないが、自分にとつて不思議な秘密をもつて居る數字と思はれるのは『九』であらう。例へば『九』の二倍は一八であるが、其一と八とを加へるとまた『九』になる、『九』の三倍は二七であるが、其二と七を加へてもまた『九』になる。九の十一倍は九九になつて一寸變なやうであるが、その九と九を加へると一八になるから、今一度數字を加合せると矢張九になる。かういふ風にして進めばどこまで行つても同じで、例へば九を四百五十倍すると四〇五〇になるが、數字の四と五とを加へるとまた九になる。九の六千倍でも五四〇〇〇となつて、五と四を加へると結局九になるのである。更にまた五〇七一といふやうな數をとりて、それを逆にし一七〇五を得る、その多い方から少い方を引去ると、三三六六といふ數を得る、此三三六六の數字を加へ合せると、一八となり、一と八と加へると又九になるのであるて、如何なる數についても同じ結果が得られるのである。更に今一つ不思議な秘密が此數には存在してゐる。例へば二五三といふ數をとる、此數字を加へると一〇である。其一〇を二五三から引去ると、殘りは二四三である。此數字を加へるとまた九になるのである。此方法も如何なる數に對しても行はれるからをかしい。數學家は九といふ數の此秘密を巧に說明するやうだが、きいてゐる時には分つてゐても、自分には一寸之を說明することが出來ない。

▲**薔薇の秘密**　暹羅人の作る薔薇には、色の變るものがあるといはれてゐる。どんな風に變るかといふと、暗い處か物蔭に置くと、百合のやうな白色をしてゐるが、それを日向に出すと、だん〳〵に紅色になつて、遂に眞赤な牡丹色になり、再びそれが次第に衰へてまた元の色にかへつて來るさうである。

▲**金剛石判別の秘密**　金剛石の眞僞を判別することは頗る困難であるが、素人でも出來る最良の秘法といはれてゐるのは、金剛石をきれいに乾かして石の表面上に極めて小さい水の滴を載せ、針の先で其滴を取り去らうとして見ると、本物の金剛石だとすると、滴は其儘

時がつてにげるが、僞物であるとすると、滴は針の先が觸はるゝ此に碎けてしまふさうである。更に他の試驗法として擧げられてゐるのは、コップの中に淸水を入れて、其中に金剛石を落すのであつて、本物なれば、石は著しくはつきりした光を發するが、僞物だとすると、時には見分け難いほどの鈍い色に見えるさうである。

▲空中の秘密　有名なる一科學者は、久しい間種々のバクテリアを研究しつゝあつたが、最近に於て、朝の九時と夜の九時とは一日中で、最も空中にバクテリアの多い時間であるといふ面白い意見を發表した。と同時に、彼はまた空中のバクテリアの數は、朝の三時と午后の三時が、如何なる時よりも少ないことを發見したといつてゐる。彼は此說を立てる前に、室外及室內の空氣をとつて、最も注意深い細菌試驗を行ひ、空氣の一立方吋(インチ)中に存在するバクテリアの數を可成に精密な度に測定したのである。そして午前と午后の九時にバクテリアが最も多いといふ意見は、人間の運動から起つて來る結果で、朝の五時から九時頃までは、人は家を出て勤め先に出かけ、夕の五時から九時頃まではまた、それが反對に市街を通つて家に歸るなり、散步や用事に出かけるからだといふのである。彼は實驗の結果によつて朝夕の六時頃から九時頃までは有ゆる種類のバクテリアが次第に增加し、九時から後になるとバクテリアの減少が始まつて、三時といふ時刻には、それが最も少ないことを測定することが出來たのであると。

▲時計を卷く秘訣　普通の人は、時計の發條はゆるむ丈けゆるましてから卷かないと發條に力がなくなるやうに考へてゐるらしいが、發條の秘密は丁度其反對である。卽ち締えず締め切らない、緩め切らない程度に置くが最も良結果を齎らすものらしく、だから從つて正確に時間を合せやうとするには、ねぢの卷き方も確めて正確でなければならぬ。ねぢの卷き方が最良の方法だと云はれてゐるのは、朝夕殆んど同じ時間に、ねぢのまかれ得る半分より少し少ない程度に卷くのであつて、さすれば、時針の動き方も正しく、もちよくもつ

て、一日一回宛卷いたよりも餘程正確ださうである。また時計は雷鳴の時に卷くのは聊か危險が伴ふといはれてゐる。それからまた一週間卷の柱時計でも、正確な時を得やうとするには、一回卷いて打やつて置くよりも、期間を正しくして、二回宛卷くがいゝさうである。

▲かうしてだら〱と書いて居た日には、何時までたつても盡きる時はない。といふのは斯ういふ風な材料ならば、手許に山ほどあるからである。が、考へて見ると、かうしたことは或人には面白くても或人にとつては何の興味もないものである、俗人には面白くとも科學者には少しも可笑しくないといふ風なものである。結局秘密といふものは人によつて興味の程度が異るものであるから、厭かれない中に此邊で切り上げたがよからうと思ふ。それは兎に角に、自分にとつては世の中に人間程秘密の多いものはなく、就中人間の生命の秘密や人間の感情の秘密が一番面白く思はれるのである。けれどもさういふことは今自分の書くべき權利のない方面であるらしいから、一言も說き及ぼさないことにした。

秘密より產れ出る家庭悲劇

—民間探偵S氏との對話—

松崎天民

□

「御不沙汰して居ます。相變らずお忙がしいでせうね。いろんな事件の爲めに……」

色の黑い肥つた新聞記者は、斯う云つて敷島の煙を

吹いた。

「有難う。近頃はそれほどでも有りませんが、何や彼やと取まぎれて、お伺ひも致しません。時に、新聞社の方も、國賓殿下やら何やらで、相變らず御盛大のやうですね」

背の高い瘦せた民間探偵のS氏は、斯う云つて胡麻鹽交りの長い髭を撫でた。

京橋Y町の洋館、三層樓の表通りに面した一室には、六月末の風が涼しく吹き通して居た。

「私の方は年百年中なんですから、何時が忙しいとか、何時が閑散だとか云ふやうな差別はありません。然しあなたの方は、いろんな調査を依賴しに來るにしても、春が多いとか夏が少いとか、そのシュンと云つたやうなものがあるのでせうね」

「犯罪事件の刑事捜索ばかりでは無いのですから、これも一概には云はれませんが、先づ七八月の盛暑は閑散な月として居ますよ」

二人の間には、冷たいコーヒーが出た。

「何うです、最近お取扱になつた事件の中で、ローマンス的の色彩があるやうな、面白い事は有りませんでしたか……。私の材料になるやうな」

「さうですね、世間に隱れた大事件と云ふやうなものは、近頃あまり見受けませんが、あなたの立場から御覧になつたら、相應に問題となりさうな事件を一つ二つ、最近に取扱ひましたよ」

「例に依つて、一切秘密の事で、公開は出來ないでせうが、お差支への無い事件のプロセスだけでも、話してくれませんか」

「承知いたしました。然しまア袴でもお脫ぎになつて、何うです、晩御飯でも食べながら……」

「結構ですね、何時もお邪魔ばかりします」

「何ういたしして、あなたの様な方に聽いていたゞければ、私もお話し申す甲斐がありますよ」

S氏は呼鈴を鳴らした。二十一二の給仕の青年が出て來て、何か命ぜられて出て行つた。

「で、その事件と云ふのは、何んな種類なんですか」

「なアにね、つまらない家庭のいざこざなんですが、いろ〳〵と洗つて見ますと、あなた、飛でも無い秘密が暴露してしまつたんです。私も氣の毒になりましてね、まア何うにか落着はしましたが、世間には何ですよ、案外に秘密と云ふものが伏在して居るものですね」

「さうですとも……。幸福らしく見える家庭にも男にも女にも、必ず何か知ら秘密が伏在して居るものだとは、私の持論なんですが、あなたの手にかゝると、何んな秘密も探偵ノートに書き止められてしまう譯ですね。たとへ善い事でも、亦た惡い事でも……」

「なにね、解決してしまつた事件は、自分でも成るべく忘れてしまうやうに、思ひ出さぬやうにと、心掛けては居るのですが、苦心した事件と云ふものは、なか〳〵忘れられないものでして……。現にこれからお話しやうと思ふ事件なども、事件としては單純なのですが、探偵上には隨分、苦心いたしましたよ」

「さう承ると、早く內容が知りたくなりますね。一體、何んな事件なんでせう」

「一口に云つてしまいますと、夫婦の間の秘密と嫉妬騒ぎなんでして、世間に能くある奴ですよ。はゝゝゝ」

ビールが出た。西洋料理が出た。

□

「えゝと、この三月六日か七日でしたよ。一人の婦人が私の事務所へ來られて、內所で私に逢ひたいと云ふ申込みなのです。部下のKを代りに面會させますと、Sさんに直接お願いたしたい事件だからと云つて、大分興奮して居る樣子だと云ふ注進でしてね……」

「それが當事者の一人と云ふ譯ですね」

「さうです。その部屋で私が面會いたしますと、齡は二十七八、色の白い背のスラリとした婦人で、額の狭い工合から、眼の充血して居るところから、痩せて疳癖（かんぺき）の强さうな風など、ヒステリックの女そのまゝなんです。私がSでございます、御用向は……と云ひますと、その婦人はさめ〳〵と泣いて、さうですね、二

「十分間位は、何も云はなかつたでせう」
「妙な女ですね。それから……」
「何んな御用事か知らないが、何も彼も隠さずに仰有つて下さい。決して秘密は外に漏れないからと云ひますと、婦人は何處までも秘密です、私がこゝへ參りました事も、何うか秘密にお取計ひを願ひますと云つて、その用向なるものを打明けましたがね……」
「成る程、……」
「要するに、自分は某實業家の次男兼次郎の妻で、大森に別家して居る吉野たね子(假名)と云ふ者ですが、結婚してから四年にもなるのに、何うも良人の氣心と自分の感情が、シックリ合致しないで困つて居る。夫婦としては普通の間柄で、見やうに依つては仲の好い若夫婦とも思はれやうが、何うした事か自分の心持は、常に良人の心と離れ〱になつて居るやうで、それが何うも物足りないと云ふのです。就ては甚だお耻かしいお願だが、良人が他に愛する女でも……妾とか嬖奴とか云ふやうな者と、私に秘密で許し合つて居るのではあるまいか。何うかそれを探偵して頂きたいと云ふ申込みなんです」
「思ひ過ぎの嫉妬、人妻としては最も慎まねばならぬ無反省の嫉妬沙汰なんですね」
「さうです。私が煩悶引受所か宗教家かと云ふのですと、説教する文句もありますが、素行探偵の依頼なんですから、婦人を一應慰めて置いて、調査の方は引受けてしまつたんです。餘りクヨ〱なさらぬ方が宜しい、御良人もあなたを嫌つては入つしやらないのでせうと云ひますと、それはさうらしいのですけれど……と、若いヒステリックの婦人には有勝な話なんです」
「その夫人は何ですよ。あなたに良人の素行調査を依頼したゞけで、既に八分通りまでは安心して居ますね。それから……」
「それから部下に命じて、各方面を調査させますし、私も一二度出動しまして、吉野家の過去現在を探偵しますと、いろんな材料が集つて來ましたよ。殊に次男の兼次郎と云ふ人は、慶應の理財科出身でして、今は

認め、相應に、その手腕も認識されて居るらしいのです。素行上には別に怪しい點もなく、先づ若紳士としては申分の無い人物らしいでのす」

「いよ／＼以て夫人の嫉妬的幻想なんですね」

「なァにね、底を割つてしまへば、何も彼も判つてしまう事件なんですが、そこまでには未だいろんな迂餘曲折があるのです。で、第一に家庭調査、第二に兼次郎氏の調査と、だんだん歩を進めまして見ましたが、この吉野家は華族の××家とも姻戚關係がありまして、さう秘密の――血統とか、女に關してとか――有りさうな家では無いのです。それに本人の兼次郎氏が、前にも申すやうに餘り缺點の無い人物と來て居ますからね。探偵の方法を第三段に移す事にしました」

「今度はたね子夫人自身を調査すると云ふ段取ですね。え、さうでせう」

「さうなんです。たね子夫人は同じ實業家の山下（假名）から嫁入つたのですが、結婚してから四年目で、二十七歳と云ふのですから、大家の娘にしては晩婚で×にす。二十四五歳まで未婚でゐたと云ふのが、第一可笑しく思へるではありませんか」

「さうです。新聞の探訪記者にしましても、當然そこに注目するところです」

「私の方でも、今度はたね子夫人の方を、專ら調査させましたが、晩婚の理由としては、たゞこれだけの事が判りました。何でも許嫁のAと云ふB男爵の三男が、洋行中に病死したので、失戀の結果、他の嫁入にも斷り、自分はヒステリックになつて、泣いてばかり居たと、如何にも昔の小說にありさうな報告なんです」

「あなたはそれを、其のまゝ信用しましたか」

「何うしまして、探偵の苦心はこれからなんですよ」

□

冷たい果物が出た。

「然し、かね子夫人が晩婚の理由は、小說的の失戀と云ふ他には、何も判りませんでした。失戀とヒステリーですから、お膳立は揃つて居ますが、餘り當世向きではありませんね」

「そんな女も、有るにはあるでせうが……」

「で、それから十日目の後、夫人の方へは一通の報告書を渡しましたが、反つて兼次郎氏の素行を賞揚したやうな結果になりましたので、夫人も意外に思つたでせうよ。たゞ夫人自身の口では、夫婦仲も世間並のやうに云つて居ましたが、曾て吉野家に女中奉公して居た女を探ね當て、いろ／＼尋ねて見ますと、若夫婦は決して仲が悪いと云ふのではないが、不思議な事には、何だか斯う冷たい夫婦仲で、一つ室で寢ると云ふやうな事も月に一度か二度しか無かつた と云ふ話なんです」

「有力な説明者が現れましたね」

「そこで今度は、夫人の里方の山下家の方を主として調べますと、これも先代が妾を二三人圍つて、腹異いの子を四人ほど生だと云ふ事より他には、さう大した家庭の暗影も無いのです。夫人は勿論、正統の娘さんで、虎の門の女學館にも學び、十六七までは快活な娘さんだと云ふのです。その方が何うして癇癪持の怒りつぽい短氣な我儘者になつたのか、これには何でも曰くがありさうだと云ふ、山下側の調査報告なんです。」

「いよ／＼判らなくなりましたね」

「この探偵には、全く閉口してしまひましたよ。たね子夫人に頼まれた調査報告は、一段落を告げましたけれど、疑問のまゝですてゝ置くのも殘念ですから、私の方では大に突込で、調べるだけは調べて置かうと思ひましてね。今度は兼次郎氏とたね子夫人との二人に一切の探査を集注した譯なんです」

「成る程、……」

「出入の車宿、牛乳屋、米屋、經師屋、庭師などを手に入れて、遣れるだけは遣つて見ましたが、何うしても判らないのです」

「判らないと云ふのは、二人の夫婦仲の何となく冷淡だと云ふ、その一件なんですか」

「さうです」

「經歴から現在へと、周圍から個人へと、投網を斯う引寄せるやうにして、調査してもですか」

「さうです。判らなかつたんです。そこで今度は二人の健康狀態に注目しましてね……」
「それも容易の事ではなかつたでせう」
「いよ〳〵本件探偵の苦心と云ふ段取りになりましたよ。御承知の通り、醫師は何事も秘密に附して、口外しませんし……。でも樣々の手段をめぐらして、二人の病歷を探査した事はしましたが……」
「病氣に罹つた事が有るか無いか。入院した事が有るか何うかと云ふ〻それですね」
「えゝ、結果が明瞭と判りましたのは、つい此の十四五日前の事なんですが、この探偵には隨分、苦心いたしましたよ」
　この時、來訪者があると見えて、給仕は二枚の名刺を持て、入つて來て、出て行つた。
「夫人の嫉妬幻想も、良人の態度が冷淡だと云ふのも何か生理的の缺陷に原因して居たのですね」
「一口に云つてしまへば、實に氣の毒な秘密から生じた悲劇なんですよ。とう〳〵あなた、かね子夫人は離別となつて、この月の上旬頃から行方不明になつたと云ふのです。不思議な事には其の行方搜索を山下家の方から私に依賴されたではありませんか」
「それは何うも妙な廻り合せですね」
「部下のKとWとを、その方へ出張させて居ますが、今明日中には何とか當りが付く段取になつて居るのです。……こゝで何も彼も云つてしまひますが、兼次郎と云ふ人は、若い時にベースボールか何かで、內股の附近に負傷して、それが原因となり、局部が不具になつて居るらしいのです。神經系統には異狀が無いのですから、人並に性慾作用も起るらしいのですが、何うもそれが原因となつて、普通の人のやうにはならぬやうですね」
「氣の毒な話ですね」
「それに、かね子夫人の方も何とか云ひましたつけ。さう〳〵、ひどい子宮狹窄的の病氣でして、之も時々一時的の症狀を起して、身體がどこか思ふやうにならない病氣らしいのです。實に氣の毒な因果同士が、夫

婚になつたものではありませんか」

「それで男が冷淡なのも、夫人のヒステリックな原因も、離婚の理由も、何も彼も解決した事になりましたが、それにしても實に氣の毒な話ですねえ。家庭に潜る秘密など云ふ事も斯うなりますと、實に根ざす所が深い……」

□

「私もいろんな事件を取扱ひまして、多くの家庭悲劇は生殖關係に原因するとまで斷言し得ますが、こんなのは珍しいですよ」

「それで夫人は離縁となり、行く方不明となる。悲觀、厭世、自暴自棄、自殺と云ふ段取りが、目に見えるやうではありませんか」

「その自殺を心配しまして、實は一人を其日から鹽原那須方面へ、一人を豆相の沿海へ出張させて居ますが、多分、そんな事はあるまいと樂觀して居ますよ」

「何か、その材料でもあるのですか。樂觀の……」

「家出の遺書に、當分山の中か海邊へ行つて、一人で靜に暮したいとありましたし、金や着換へも、相應に持つて出たらしい形跡ですから、まさか自殺はすまいと云ふ見込みです」

「新聞の三面にも出ない所を見ますと、警察にも秘密にして、あなたの所へ賴みに來たのですね」

「まア、出來るだけ私の方で捜索して、それでも判らない時には、制規の手續きを履まねばなりませんが、必らず發見して家人へ引渡すだけの自信は持つて居る積なんです」

「それで、桑次郎氏は何うしましたか」

「會社の方へは勤めて居るらしいのですが、此の人も氣の毒な立場でして、何うも怏々として樂しまぬと云ふ風らしいのです」

「新聞社の身の上相談などでも、家庭のいざこざだと云へば、十中の八九は性慾問題だと云ひます。けれども吉野夫妻のやうな生理上の缺陷で、悲劇を醸すやうな例は、さう澤山ありますまい。幸福と云ふ意味もいろ／＼ありますが、そのかね子などは、死でしまつた

方が或は幸福なのかも知れませんね」
　また給仕が入つて來た。今度は二三通の電報と手紙とを氏の前に置いた。
「あ、Kから電報が參りましたよ」
　S氏は斯う云つて、度の强さうな老眼鏡をかけて、その電報を讀み下した。
「アタミキヌ、イトウヘユク、イサイフミ」
　斯う讀み上げたS氏は、尙ほ言葉を續けた。
「國府津、小田原、箱根、湯河原、伊豆山、熱海に居ないだけは判りましたが、更に伊東から吉原、修善寺長岡、大磯、茅ヶ崎、平塚の方を、順次に探索させる手筈です。或は日光、中禪寺、湯本、鹽原の方かも知れませんが、何れにしましてもこゝ三四日の間には、必ず突き止めて御覽に入れますよ」
「私も死で居るとは想像しませんが、さうして連れて歸つて來ても、かね子を待受けて居る幸福があると云ふ譯では無い。本人もさう考へると此の世の中が味氣ないでせうねえ」
「先づ狹窄症を治療して、生涯の出直しをするのですが、私の考へではこの病氣の他に肺か何かの惡疾があるのではないかと思ふのです」
「それには何か據り所がありますか」
「山下家の母方の方に、肺で亡くなつた人が二人ありますし、かね子さんの姉に當る人も、十八か九で死で居るのらしいのです」
「すると、かね子と云ふ女の悲觀は、二重になつて居る譯ですね。いよ〳〵氣の毒な人ではありませんか」
「兎にも角にも、居所を發見した上で、宗敎の力か何かで第一心持から轉換する必要がありますよ。何れにしましても、死ではつまりませんからね」
「その家出の遺書と云ふのがありますか」
「え、有ります。特別で御覽に入れませう」
　S氏は別室へ行つて、一まとめになつた書類はさみを持つて來た。その中から一通の手紙を拔いて、新聞記者の前に差出した。
　その手紙には、短く斯う書いてあつた。

一筆書き殘し申候、無斷にて我儘の所爲は幾重にも御許被下度候、この上は山の中か海邊にでも參り、しばらく人の世と遠ざかりて、いろ〳〵のこと思案仕り度く候、決して御心配相かけ候やうの事、神かけて仕出かし申さず候間、幾重にも御許遊ばされたく候――

「ですからね、自殺はすまいと云ふ見込で、探索して居るのですが、何れ又判りましたら、後日譚を申上げる事にいたしませう」

「何うぞ、四五日しましたら、又伺ふことにしませう。このまゝですと、尻切れトンボで、私も安心して寢られませんから……」

「私の方こそ、……では御免を……」

「長話をしまして、失禮でした」

「さやうなら……」

「さやうなら……」

□

それから五日目の午後、新聞記者はS氏の訪問に接した。氏は失望したやうな面持で、氣色も何だか勝れぬらしい。

「先日は、御馳走になりまして……」

「いえ、ようこそ……」

「隨分、長座をしまして、御迷惑でしたらう」

「いえ、時に彼の事件ですがね」

「さう〳〵、いよ〳〵判りましたか」

「判りましたよ。判るには判りましたがね、いよ〳〵私の見込み通りになりました」

「と、申しますと……、海の伊東か又は山の鹽原にでも居たのを、連れてお歸りになりましたね」

「え連れて歸るには歸りましたが、やはり自殺して居ました。鹽原の須卷の山中で……」

「え、自殺を……。では、あなたの見込とは正反對の結果になつたではありませんか」

「正反對……實はあなたに、生きて居る見込みだと申したのは、死で居やうと思つた反對を申したのですよ。あの遺書だけで察しますと、自殺はしないやうで

すけれど、本人は吉野家を出て、實家へ歸る時から、死ぬる覺悟で居たらしいのです。幸に新聞にも出ませず、三日前に假埋葬したと云ふ遺骸を發掘して、骨にして歸りましたが、やはり夫人は悲觀して自殺したのです。須巻の裏山の楢の枝に細紐をかけて、呼吸絶えて居たのを村の百姓の娘が最初に發見しましたさうです」

「これで何も彼も大團圓ですね」

「兼次郎氏や兩親に宛た遺書は、信玄袋の底の方に有りましたが、宿帳には出たら目の名前を書いてあつたと見え、宿の方では其の住所へ通知狀を出して置いたと云ふ騷ぎなんです」

「死なゝくても宜いのに、可愛相な事をしましたね。兼次郎氏も其の遺書を見ては互に不運に生れた仲だから、離別せずに辛抱すれば宜かつたにと、非常に嘆き悲しんだ事でせう」

「さうあるべきですが、一切の事はもう私の出る幕ではありませんからね。遺骨引渡と共に手を引きましたが、私も最近十年間に、こんな事件を取扱つたのは初めてですよ」

「さうでせう。此の事件丈でも、警察官一流の調査や、新聞の探訪記者的に觀察しますと、家庭の不和だとか、失戀の結果だとか位で、より以上に突込だ自殺の原因は、なかなか判りませんからね。でも、あなたの探偵力が、生理的の缺陷にまで徹底したのは、私達のためにも、好い參考になりましたよ」

「で、私は此の次に起るべき事件として、兼次郎氏の動靜に注意する必要があると思ひましてね。それとなく先方へ注意して置きましたが、この事件などは、抑も結婚當時に於ける健康上の調査を疎略にした事や、一般に血統などを八釜しく云ひながら、他の健康上の問題を不問に附する結果の弊害を最も露骨に示した實例なんですよ」

「私もさう思ひますね。個人と個人との結婚でなくて、家と家との結婚と云ふ弊害を、根本から廓清してしまはなければ、何時まで經つてもこんな事件は絶えま

せんよ。華族か金持か學者が結婚するので、人と人とが結婚しないのですからね、何と云つても日本は駄目ですよ」

「と云つて、野合の夫婦や、新しい何とかの同棲も困りものですが、この問題は根本から、何とかしなければなりませんよ。たとへば結婚の身許調査は、身體檢査の一項を加へることなど、最も重要な事ではないでせうか」

「私も此の事に就ては、多少經驗上の意見もありますが、それは又の日の事に致しませう。何うです今日は幸ひ休日ですから、とり屋へでもお伴を致しませう」

「え、有難うございますが、今日は又別の調査用で、これから大森まで出かけますから…何れ又、その內お目にかゝりませう」

「探偵長自らの出動は、御苦勞ですね。では殘念ですが、何れその內に……」

「今度は愉快な、奇拔な材料を仕込で置きませう」

「樂みに待つて居ませう。では左樣なら」

「左樣なら」

探偵長が歸つた後まで、新聞記者は此の事件の成行に就いて、樣々の想像をめぐらして居た。――

――大正七、七、一、夜――

政界秘史

前田蓮山

一　人間の秘密

■西洋の諺に「純潔と秘密とは、決して片時も兩立し

得ない」と云ふ事がある。然れども人は何處まで自己を公開し得るか。吾輩は全然秘密を持たないと云ふ人を想像することは出來ない。語を換へて言へば、吾輩が其人に就て凡てを知り悉せりと信ずる所の者は一人もないのである。

■又た自己を正しく公開する事は殆んど不可能と言つて宜しい。人間が思想感情を互に交通する方法は甚だ不完全なもので、同情と想像とを加ふるにあらざれば、相手の發表する思想感情は充分に了解されぬものである。例へば詩歌の如きは大なる同情と想像とを以て讀まなければ、何が何やらサッパリ解からぬ事が多い。

■演說でも文章でも、同情と想像とを加へて聽き或は讀まなければ、其の意味を充分に了解する事は出來ない。如何なる雄辯家でも、自分の思想感情をソックリ其のまゝ、聽衆に說明する事は出來まい。如何なる文豪でも、數を數へるやうに、自分の思想感情を書き現はすことは出來まい。イヤ自分は書き表はした積りでも、讀む者は十人は十人ながら、其の受け容れやうが違つて居るのである。

■即ち相手の同情と想像の如何に依りて、自分の解されやうが違つて來る。殊に年齡や教育が甚しく懸隔して居る場合、教育の高さは同樣でも、其の種類が甚だしく異つて居る場合――例へば法學士と醫學士、文學士と工學士の如き――生活の程度境遇が甚だしく異つて居る場合などに於ては、互に非常な誤解をする事がある。

■又た友人上野文學士の心理學實驗に依ると、或話を甲から乙へ、乙から丙へ、丙から丁へと、十人二十人に傳へて居る間には、知らず〳〵元の話とは全く異つたものになつて了ふと云ふことである。此の故に歷史の眞相は容易に覩め難い。

■又た、ショウペンハウエルは自我の本體は生存する意志に外ならないと思つた。之れを眞理なりとすれば、政黨の本體も生存する意志、國家の本體も生存する意志と見ることが出來やう。而して自己の生存を完ふせんと欲すれば、他と戰はなければならぬ。進まざるは

退くなりで、戰はざれば死滅するのである。

■戰ひには秘密の計略を必要とする。故に此の意味から考へても、秘密を持たない人間、秘密を持たない政黨、秘密を持たない國家を想像することは出來ない。吾輩は玆に明治史中の秘密事件を少しばかり披露して見たい。

二　十四年の政變

■明治十四年の政變に就ては、色々の說があつて、大隈側の言ふ所と、薩長側の言ふ所と大に異なつて居る。又た第三者として充分に研究した所を發表したものも見た事がない。一寸した記事は色々の書籍に載つて居るけれども、ホンの表面の事だけに止まるか、或は甚だしく事實を間違つて居るやうに思ふ。

■維新の大事業は皇室中心主義を眞向ふに振りかざして成功したのであつた。されば政治的勢力を張らうと思ふ者は、第一に宮中の御信用を得なければならなかつた。是に於て慧眼なる大久保は岩倉と結托して、双方互に利用し利用せられ、以て牢乎たる勢力を作つたが、岩倉と折合が惡い者は大概失脚したものである。

■岩倉、大久保の勢力に壓せられて、政府に志を得なかつた者は、退いて二派に分かれた。一は武力に訴へて勢を張らんとし、一は民衆の力に依りて志を伸べやうと企てたのである。西鄉、前原、江藤等は前者に屬し、木戶、板垣、後藤、副島等は後者に屬する。副島後藤、板垣等が連署して民選議院の設立を建言したのは、明治七年一月であつたが、木戶は是より半年許り前に、既に政規典則なる一文を草して憲政樹立の必要を說き、之れを要路の大官に寄せた事がある。

■大久保が殺された頃の參議は大久保、大隈、大木、伊藤、寺島、山縣、黑田の七人で、薩州三人、長州二人、肥前二人であつたが、彼等は皆んな大久保の下に慴伏して政府は充分統一して居たけれども、大久保死後に及び、鈍栗の背並べとなり、薩長相對峙して勢力の競爭を始め出した。そこで又た一番弱かつた大隈が飛び出して國會開設を唱へ出したのである。

■或者は大久保死後の政界を、伊藤、大隈の暗鬪時代

と稱し、其れが十四年に至つて破裂したやうに說くけれども、其れは觀察を誤つて居る。大久保死後の參議は大隈、大木、伊藤、寺島、山縣、黑田、西鄕、川村井上、山田の十人で、薩長が各四人づゝ、肥前が二人で、薩長が相對峙して暗鬪を續け、大隈は其の中間に介在して彼等の競爭を利用しつゝ巧みに泳いだのであつた。

■肥前が中央に出て來たのは鳥羽伏見の戰爭が熄んだ後である。大隈の如きは鳥羽伏見の戰爭頃は長崎に居て洋學を修業して居たが、偶々幕府方の敗戰の報が長崎に傳はるや、長崎奉行河津伊豆守が逃亡して了つたので、土佐の佐々木高行が海援隊の壯士を率ゐて奉行役所に乘込み、次で松方助左衞門(正義)、長州から楊井謙三が馳せ付けて長崎の秩序維持に當つた。

■その時に大隈も出かけて行つて、何にかと彼等に助力したので、澤宜嘉が長崎鎭撫總督となつて下つた時に大隈を長崎裁判所參謀に任じ(元年二月)、次で中央政府に出で參與になつたのである。斯の如く肥前藩は倒幕の戰功がないので、如何に大隈が才幹を有しても、政治的勢力が乏しいのである。

■如何さま大隈と伊藤は其の學識手腕に於て相匹敵し、參議としては大隈の方が故參であつたから、世間からは大隈の方が伊藤よりも上のやうに思はれたかも知れぬ。併し大隈などは薩長が天下を相手に戰はうとして、內心頗る危險を感じて居た時に馳せ參じた事と言ひ、又は肥前には西鄕、大久保、木戶と云つたやうな先輩がなかつたので、伊藤よりも早く參議になつたものゝ、大久保死後は勢力に於て伊藤と爭ひ得る程の實力なく、伊藤は薩州に抵抗するために大隈を味方に引き入れて煽て上げたのである。

■所が大隈は第三黨として僅かに地位を保つ位の事では滿足しなかつた。其の左右の同僚を見渡した所、手腕に於て自分と競爭し得る者は僅かに伊藤位のものであるが、自分に維新の勳功と軍隊の後援とを有しない悲しさには、何うしても薩長の諸人に頭が上からず、徒らに左顧右眄して彼等に扱き使はれると云ふのは、實

に馬鹿々々しい話だと云ふ考へが、漸く彼れの胸に沸いて來た。

恰度其處に例の北海道官有物拂下事件なるものが起つた。是れは大儲けの問題であるが、時の拓殖長官黒田は之れを薩州の田代と長州の中野と兩人に拂ひ下げると云ふ事にしたのである。然るに之れを聞いた土佐派の商人岩崎が『薩長の商人許りで利益を壟斷するのは不都合千萬である』と言つて怒つた。そこで岩崎と深い關係を有する大隈は、非常な勢ひで拂下げに反對したのである。黒田が大隈に向つて、『貴公こそ大泥棒ぢや』と袖をまくつて罵倒したのは此の時である。

同時に此の事件は民間の問題となつて大騷ぎとなり、政府部内で大隈一人が反對だと云ふもので、民間有志はヤンヤ〳〵と大隈を囃し立てたのである。斯うなると例の大隈式で忽ち圖に乘つた。此の調子で行けば自分は國民を味方とする事が出來る。薩長の奴等が維新の勳功で誇るならば、自分は第二の維新卽ち國會開設の功を收め、國民を後援として彼等を足下に壓へてやらう。何うせ薩長とは喧嘩分れである。喧嘩分れとなれば大手に大きくやつた方が得だと云ふ了見を出した。

そこで早速矢野文雄に命じて、急拵への憲法を起草せしめ、夜陰私かに有栖川宮に伺候し、一日も早く憲法を制定し國會を開かなければ天下大事に立至らんと說き、明年(十五年)憲法を發布し、明後年國會を召集すべしとの意見書、並に矢野が起草した私擬憲法國會開設要目を獻じて、殿下より之れを陛下に捧呈あらんとを願ひ、且つ暫く之れを秘密に付せられんことを乞ふた。有栖川宮は當時左大臣として、大隈の官有物拂下げ反對に同情せられたと云ふ關係があつたのである。

所が此の憲法制定の事たる、夙に伊藤、井上、大隈の間に謀議せられ、明治十三年の冬には三人打ち揃つて福澤諭吉と會見して、國會開設の準備として福澤の力を借りて一の新聞紙を起さうと云ふ相談などもした事がある。而して此の憲法制定の計畫は三人相誓つて適當の時機まで極秘に附する約束であつた。

■大隈から私擬憲法を受けて一覽せられた有栖川宮は、斯の如き大問題を輕卒に奏上するわけには參らぬと思召され、三條を御召しになつて私かに御相談あらせられた。三條も何とも御答へが出來ない始末で、退いて岩倉に諮つた。岩倉も思案に餘つて伊藤の意見を求めた。伊藤は非常に驚いたのである。

■伊藤は憲法制定の事は自分と井上と大隈と極秘を約して熱心に研究して居た事であるから、大隈にして私擬憲法を左大臣に提出せんとならば、先づ自分等と相談した上の事にしなければならぬと心中大に憤つたが、兎も角、大隈の憲法を見た上で、可否の意見を申し上げやうと答へて別れた。

■そこで岩倉は三條から大隈の私擬憲法なるものを取り寄せて、之れを伊藤に送つた。伊藤は直ちに井上毅と伊東巳代治とを呼んで研究して見た所が、殆んど英國憲法を直譯したやうな、一夜作りのものなので、兩人に其の攻擊文を起草させ、之れを岩倉に提出すると共に「斯の如き意見を有する大隈とは、自分は一日も共に朝に立つ事は出來ぬから、直ちに骸骨を乞ひたい」と云ふ意味の書面を送つた。時に明治十四年七月二日。此の書面は廻り廻はつて今は伊東巳代治の所藏となつて居る。

■軈がて此の事は薩長諸參議に注進せられ、彼等は口を揃へて大隈の背信不義を罵り、私擬憲法の內容と國會開設の時期とに就て絕對に反對した。事茲に至れば自然に現はれ來るものは薩長の融和聯合であらねばならぬ。薩長は直ちに大隈放逐の盟約を結び、之れを岩倉に迫つたのである。

■そこで愈々大隈を放逐して國會開設に對する態度を一決するための準備と、官有物拂下問題の善後策を定むるために、明治十四年七月陛下が東北地方へ御巡幸あらせらるゝに方り、大隈、黑田の兩參議を車駕に供奉せしめて之れを遠ざけ、其の不在中に一先づ官有物拂下の指令を停止し、明治二十三年を以て國會を召集すると云ふ議を纏めた。

■陛下は巡幸七十餘日、十月十一日を以て還幸あらせ

られたが、岩倉右大臣は車駕を千住に御迎へ申上げ、此所にて「御疲勞の儀とは存じ奉れど、今夜奏上すべき事件これあり、右御含み下し置かるゝやう」との意味を奏上し、夫れから車駕の宮城に入るや、即時内閣會議を開いて大隈免官の勅裁を請ふた。

■然るに陛下は「篤と旨を諭して辭表を提呈せしめよ」と御諚あり、次に官有物拂下指令取消の件、明治二十三年を以て國會を召集することを宣明するの件を附議し、滿場異議なく直ちに御裁可を得て、電光石火と事は運んだ。

■陛下は「大隈も歸つた許りで疲勞して居るだらうから、交渉は明日にしてやれ」との御言葉があつたと漏れ承つて居るが、薩長は即時大隈に辭議を勸告するに決し、伊藤が自ら進んで勸告の任に當らうと望んだ。然るに西郷從道が「伊藤さん、私も同道しませう、決して御迷惑になる事はありませんよ」と言つて呵々と笑つたさうであるが、何う云ふ意味か未だに解かつた者がない。

■或は伊藤の身邊を危險と考へた爲めか、或は大隈が言を左右にして勸告に應じない場合を氣使つたのであるか、或は伊藤と大隈とは前々から秘密な關係があるから、立會つて置く必要があると思つた爲めか、其の邊は吾輩も判斷に苦しむ。

■そこで伊藤と西郷と馬車を驅つて大隈を訪問したが、大隈は旅の疲れでモウ就寢して居た。兩人は門番を叩き起して面會を求め、陛下の御内命に依りて辭職を勸告する旨を述べた。陛下の御内命と云ふ一言には有繋の大隈も返す言葉なく、何事も言はずに直ぐ承諾したものである。

■是より先き、他の諸參議は御前を退いて麻布市兵衛町の御用邸に集まり、杯の滿を引きながら伊藤等の歸るを待つた。而して一方に於て東京鎭臺司令官野津道貫は命令一下出兵の準備を整へ、警視總監樺山資紀は自ら多數の警部巡査を引率して、御用邸の周圍を警衛するなど實に物々しき有樣であつた。

■其處に伊藤と西郷が歸つて來て、大隈との會見顛末

を報告したので、一同ホット胸撫でおろし、更に祝杯を擧げると云ふ騷ぎ、其れから官員錄を持ち出して大隈の與黨と認むる者に一々朱線を附し、書記に命じて徹零免職の辭令を書かしたものである。住宅が三田附近にあつた爲めに慶應義塾出身者と誤まられて、何の關係もない者までが免職の辭令を受取つたと云ふ話もある。

■東京鎭臺に出兵の準備をさせたなどは、今日から考へると其の理由を解するに苦しむ位であるけれども、當時は西南戰爭の經驗が尙ほ新たなる頃で、且つ十三年三月に國會期成同盟會が出來て、八萬七千の大衆が連署して國會開設の願望書を至尊に捧呈すると云ふ運動などもあつた時であるから、民間の政客が大隈を擁して暴動を始むるかも知れぬ位に考へたものと見へる。

■斯くて翌十二日明治二十三年を以て國會を開くと云ふ大詔渙發せられ、玆に明治七年以來囂々を極めた問題が一段落を告げた。

三　保安條令

■保安條令の騷ぎは有名な話で、誰れでも知つて居るだらうが、政府部内の有樣は詳しく知らぬ者が多いだらう。明治二十年八月下旬頃から三大事件即ち地租輕減、言論集會の自由、外交策の輓回を政府に建白せんとする運動が四方に起り、十一月十五日、三府三十五縣北海道の總代三百四十一人が東京に大懇親會を開いてから、運動は日增しに猛烈を加へ、壯士の地方から入京する者殆んど數を知らずと云ふ有樣で、彼等の爲めに處々に屯營所を設けた位であつた。

■そして各地總代は委員を擧げて連日元老院議官や內閣大臣を歷訪したが一向要領を得ず、十二月廿六日を期して最後の大臣訪問を爲さんとし、星亨と片岡健吉とが死を決して伊藤に面會すべく時刻の來るを待つて居る最中に、突如官報號外を以て保安條令が發布せられ、二百七十餘名の政客が皇城外に退去を命ぜられたのである。

■所が是れは全く政府が警視廳の報告に誤まられた結

果で、暴徒は火を各所に放つて大臣を襲ふ計畫であるとか、大臣官邸の門前に地雷火を埋めたとか、實に血迷つた報告が山のやうに集まつたもので、其れに時の警視總監が福島事件で酷吏の名を得た位の三島だから堪らぬ。

■條令實施の日、三島は巡査の非番召集を行ひ、名を忘年會に託して府下の各警察署員を芝公園彌生社に招ぎ、充分に酒を飲ませてから急に令を下し、一齊に出動せしめたので實に凄まじい勢。請願運動の首領後藤象二郎の出身地たる土佐の者と來ては、何も知らぬ鰹節商、紙商、大工、左官、車夫馬丁に至るまで、手當り次第に退去を命ずると云ふ有様、在獄者にして退去の命を受けた者があると云ふに至つては全く狂人の沙汰で、數日前に上京した許りの十四歳の一少年が退去の命を受けて、其の何故なるかを知らず、呆然として泣いて居たと云ふ話もあつた。

■其れから一方に於ては憲兵本部は諸隊を分ちて各所に配置し、赤坂皇居の四面は近衛兵二大隊を以て警衛し、大藏省には二小隊、砲兵工廠には一小隊、陸海軍火藥庫、兵器貯藏所等にも夫々兵を備へ、又た各地の師團にも秘密訓令を發して出師準備を爲さしめたと言ふに至つては愈々呆れざるを得ない。

■伊藤は是より先き一ヶ月餘琉球及び朝鮮近海を巡視し、歸つて見ると警視廳の報告が右の通りだから保安條令發布に同意したのであるが、警視廳の報告に聊か疑ひを生じた時はモウ遲かつた。警視廳は既に片岡健吉等數名が退去命令に應ぜぬと言つて之れを縛り上げたと云ふ騷動。

■伊藤は伊東巳代治に向つて「一寸おかしいぞ」と言つて居たが、片岡等を捕縛したと云ふ報を聞くに及び、是れは餘りに亂暴だ。退去命令は廿四時間と定められて居るのだから、其の期限を經過しなければ拘引するわけには行かぬ筈。早く三島に命令して放免するやうに取り計らはねばならぬと云ふので、伊東巳代治が警視廳に駈け付けると、三島は『今更そんな弱い音を吹いて何うする』と言つて伊東に食つてかゝる。

■伊東も威猛高になつて『弱いのは君達ではないか、僅か三百人や五百人の壯士が集まつたと言つて、此の騷ぎは何事だ』と詰ると、三島は赫となつて『然らば自分は唯今限り辭職する』と言ふ。伊東は『宜しい、辭職なら此方から勸告したい所だ』とやり返して引上げて來ると、直ぐに山縣内務大臣の許に三島の辭表が出た。

■伊藤は『是れは又た困つた問題が起つた。巳代治が餘り過激な事を言ふからだ』と案じて居ると、乘馬の蹄の音高く、伊藤の玄關に乘り付けた者がある。其れは山縣内相だつた。山縣は手にピストルを持つて居ると云ふ物騷千萬な姿。而して山縣は玄關先に馬を立てた儘で『三島が辭表を出しおつた。自ら此の騷ぎを仕出來して置きながら、今更辭職とは何ぢや。辭職するなら爲て見るが宜しい。吾輩にも覺悟がある』と言つて、其のまゝ警視廳差して駈け付けやうとする。

■山縣は三島に怒つて居るのか、伊藤に當て付けて居るのか判からぬ。梅子夫人などは靑くなつて心配し、巳代治に早くピストルを取れと目くばせするので、巳代治が早速の機智『山縣さん、あなたは立派なピストルを御求めになりましたね、一寸拜見……』と言つたら、山縣も何氣なくピストルを渡した。巳代治はソット彈丸を拔き取つて袂に入れ『是れは立派な品で……』と山縣に返した。

■そして梅子夫人などが、まア〳〵と言つて山縣を座敷に招じ、其の内に黑田もやつて來て、三島が全體粗忽極まると小言を食はせて辭表を撤回させたと云ふ次第。今から考へれば實に隔世の感がある。

四　伊藤、大隈、板垣會見

■伊藤が大隈と板垣に政權を讓る時の事は、世間に知れぬ話が澤山ある。其の中で伊藤、大隈、板垣の會見顚末を筆記したものが伊藤公爵家にある筈であるが、吾輩は某家で其の草稿を見る事が出來たから、大要だけ記して置からう。

■會見は明治三十一年六月廿五日午後八時から始まつた。梅雨がシト〳〵と降つて居た日であつた。伊藤は

先づ當時の經濟事情、國際關係等内外の形勢甚だ重大なる所以を說き『斯の如き場合に於て、政府と衆議院と衝突して國務を澁滯せしむること、一日長ければ一日國家の損である。

■『帝國議會は必ずしも國家萬般の政務を網羅するわけではないけれども、兎も角國務を進行するには議會を平穩に通過すると云ふことが必要である。故に自分は過般來同憂の士を叫合せんとの企てを起したけれども、之には種々の事情があつて、其の斷行を見合はす事になつた。

■『然るに幸にも兩伯は今般積年の行懸りを捨てゝ相合同し、衆議院に多數を制する地歩を占められたが、實は今日に於て國務の澁滯を來たすものは衆議院の關係だけであるから、今後の事は舉げて之れを兩伯に一任したならば、國務は圓滿に進行するであらうと考へ、今日陛下に兩伯を推薦した次第である。

■『是れ一に國家人民を憂ふるの一念より出でたものであつて、毫末も他意あるあらざることを諒承ありたい。或は自分に對して留任を勸告する者もあるけれども、自分は議會に一兵一卒を有せず、來るべき議會は又々解散を斷行するより外に策はないのである。斯う云ふ事では宸に上は陛下に對し、下は國民に對して相濟まぬ義と考へるに依つて、今夕兩伯の來臨を煩はした次第である。願くば自分の微衷を諒とせられて御奮發あらんことを望む』と述べた。

■すると大隈は『御精神のある所は充分に之れを了解した。抑も岩倉、木戶、大久保の諸先輩を援け、日本開明の種を蒔かれたのは閣下である。殊に憲法制定に關する閣下の功勞は實に偉大なもので、今後憲法運用上に就ても、一に閣下に囑望して居た次第であるが、今や突然にも辭表を捧呈せられたと云ふのは、實に驚いた事である。併し既に閣下が此の如き果斷の處置に出でられた以上は、止むを得ず其の善後策に就て考慮するの外はない』と答へた。

■次で板垣は『閣下が吾等兩人を推薦せられたと云ふのは、實に意外千萬である。自由黨と進歩黨と合同し

たと言つても、自分は一度大隈伯と宴席に於て會見した許りで、政務上に就ては未だ何等の意見も交換しては居らぬ。有り體に申せば、形こそ一大政黨が出來たとは云へ、其の內容は實に薄弱なものである。故に自分は御引受けするだけの自信を持つて居ないが、若し大隈伯にして引受けらるゝならば、自由黨を擧げて伯に委ねても宜しいと考へる」と言つた。

■更に大隈は「自分は常に薩長諸君との調和融合を希望して居る。廿一年に黑田內閣に入閣した時も、一向ら調和を望んだのであるが、當時板垣伯の如きも亦た調和を試みられたと聞いて居る。世人動もすれば薩長を專橫と罵るけれども、薩長が今日まで國家に盡した功績は非常なものである。

■「功績の忘れ易く、過失の誇張さるゝのは人情の習ひであるが、公平に考ふれば一國の政治には必ず中心勢力が存在しなければならぬと云ふことは言ふまでもなく、今日まで國家の安定を保つたのは全く薩長の力である。然るに時勢の推移は吾々が推薦に與かると云ふ結果になつたが、今日吾々が入閣したからとて、果して圓滿に國務を進行し得るか何うか、甚だ惑はざるを得ない」と言つた。

■次に板垣「自分が曩に內務大臣となつた時も、政務は自分の意思に任かせぬ事が多かつた。今日と雖も薩長の勢力は政黨の比ではない。決して之れを無視する事は出來ないのである」

■次に伊藤「世人は薩長藩閥と稱するけれども、今日にては唯だ名ばかりで其の實は無い。且つ又た薩長など云ふものは立憲治下の政黨と日を同ふして論ずる事は出來ないものである」

■次に大隈「閣下の御說一々御尤もである。此の上は尙ほ板垣伯とも熟話を遂げて善後の策を講ずる事とし、然る上で陛下の御思召をも伺ひ、若し大命の降下あらば不敏ながら國家のために盡力する考へである」

■次に板垣「自分は決して其の器ではない」其れから大隈と板垣とは伊藤の面前で明二十六日午前十時を期し大隈の方から板垣を訪問して熟議しやうと約し、餘

談として大隈は陛下の御信任及び官僚の思惑に就いて懸念の様子で伊藤の意中を探つた。

■之れに對して伊藤『自分は今般勳位顯爵までも奉還したいと思つて居る位で、全く死んだも同樣、赤裸々の身となつたのである。然れば自分には何等の權謀野心なく、專心一意兩伯の成功を祈るの外、決して他意はないと云ふ事を誓ふ。兩伯は今回の事を突然だの意外だのと言はれるけれども、之れは自分の辭表捧呈前に御相談しなかつた事に就ての御不審であらう。

■『併しながら自分の進退去就は自分一個の決心に依りて行ふの外なく、後繼內閣の事に就ては、決して自分等の私議すべき事柄でない。自分の辭表は多分聽許の恩命に浴すべく、自分の希望通り兩伯が大命を拜せられて、內閣を組織せられたならば、誠心誠意、國政料理の任に當り、穩健着實の思想を以て、漸次功績を擧ぐべく努力せられたい。

■『然る上は陛下に置かせられても、屹度兩伯を御信任遊ばさるゝに相違ないと恐察する。又た官吏に對しては地位の安固を以て第一要件としなければならぬ。此の點にさへ御注意あるに於ては、官吏の反抗などは毫も意とするに足るまい。官廳の事務は頗る繁雜多端で、長く其の事務に慣れなければ容易に功を擧げる事は出來ないものである。此の點は特に御注意あらんことを望む。

■『又た憲法に就て一言御注意を促して置きたい。大臣は天皇に對して責任を負ふべきものなれども、天皇は衆議院に多數を制する政黨首領に內閣を組織せしめらるゝ場合もあるべく、又た少數黨の首領に之れを命ぜらるゝ事もあるべく、極言すれば衆議院に一人の與黨をも有せざる人材を御召になる場合もあらう。吾が憲法は衆議院に多數を制する政黨が必ず內閣を組織すると云ふ英國の制度とは異つて居るのである。』

■大隈は之れに對し一々御尤もと同意し、尙ほ伊藤は外交關係の現狀及び內閣の急務とするものに就て懇切なる注意を與へ『兩伯が爾今心を一にして國家の重きに任ぜらるゝ上は、自分は大に安心であるから、速か

に決心ありたく、偏に御成功を祈る」と述べ、午後十一時二十分を以て會見を終つた。

五　伊藤の樞府入り

■伊藤公が政友會總裁を辭して、樞密院議長になつた事情は、世間には詳はしい所が傳はつて居ない。從つて種々の臆測が行はれて居る有樣であるが、詳はしく言へばなか／＼長くなるから、其の一節だけを披露する事にしやう。尤ゝ是れは吾輩が一度某雜誌に書たい事がある。

■政略が含まれて居たかに就ては、吾輩にも意見があるが、其れを論ずればズット前からの行きさつを話さなければ判からないから、其れは拔きに致して、伊藤公を樞密院に入れると云ふ發案者は伊東巳代治であつたと吾輩は確かな所から聞いて居る。

■巳代治は一日山縣を訪問して、伊藤を樞密院議長に任ずるの優詔が降下するやう御盡力を仰ぎたいと懇請した。すると山縣は一寸意外な顏をして、其れは伊藤の意思かと尋ねた。巳代治は『イヤ是れは伊藤が毫も知らぬ事であるが、唯だ自分の一存で御願ひする次第である」

■すると山縣『伊藤が若し優詔を御受けしなかつたら何うする？」

■巳代治『否々其の點は決して御懸念に及ばぬ。自分が命にかけて伊藤に承諾させる」

■是に於て山縣は破顏一笑して、其れは吾輩も衷心から贊成である。好い事を考へて呉れたと巳代治に謝し、其れから桂（時の首相）、田中（時の宮相）とも協議を遂げ、山縣は御前に伏して伊藤に對する優詔の降下を願つた。陛下は山縣の奏上を聞し召されて、少しく氣色を變へさせられ『其れは伊藤と協議の結果であるか」と御尋ねになつたと漏れ承はる。

■山縣は『決して左樣の事は御座りません、唯だ小臣の一存で御願ひ致すので御座ります」と申上げると、陛下は『伊藤はなか／＼理屈を言ふ男である。政友會を創立する時に朕に言つた事もあるが、今更ら樞密院議長たることを承諾するであらうか、卿は伊藤が必ず

承諾すると云ふ確信を持つて居るか』と御諚があつたさうである。

■是に於て山縣は言句に詰まつた。夫れは山縣自身も巳代治に反問した所で、實を言へば山縣にも確信はなかつた。山縣は段々陛下から問ひ詰められた結果、到頭巳代治が斯々申しますと云ふ事を奏上しなければならなくなつた。

■すると陛下は以の外と云ふやうな御氣色で、然らば早速巳代治を召せと仰せられた。山縣は恐懼措く所を知らず、冷汗背を濕しながら御前を退き、早速田中宮相の名で電話で巳代治を呼び寄せた。

■巳代治は何事ならんと宮相室に行つて見ると、其處には山縣、德大寺、田中などが額を集めて事態容易ならざる有樣。譯を聞いて巳代治もギヨツトしたが、今は免がるゝに道なく、度胸を定めて御前に伺候すると、陛下はイトモ御嚴かに『卿は伊藤と協議を遂げたか』と御尋ねになつた。

■巳代治は『決して伊藤と協議したわけでは御座りません、君國のために伊藤を樞密院議長に任ずるのが、最も適當と考へましたからして、陛下が伊藤を御召し出し下さるやう願つた次第で御座ります。不肖ながら君國のために伊藤の樞密院議長たる事が適當と信じまする以上は、假令伊藤が如何樣に申しませうとも、此の巳代治、命にかけまして伊藤を說伏する覺悟で御座ります』と申上げた所が、陛下は然うかと仰せられて微笑を御洩らしになつたと聞いて居る。

■舊い事、新らしい事、色々話しもあるけれども、紙數の都合もあるだらうと思ふから、先づ是れで打ち止めと致さう。

秘密に包まれたる疑獄の解剖

澤田撫松

明治大正年間に行はれた疑獄事件の中で、秘密に包まれたる、神秘的の事件を解剖して、犯罪の眞相は容易に分らない事と、刑事々案を裁斷することの、如何に困難であるかと言ふことを、玆に紹介しやうと思ふ。

疑問の男三郎

一

明治三十九年の春、櫻吹雪のする日であつた。私は司法省の監獄局長から、長さ三寸幅二寸五分位の、厚紙の切符の樣なものを貰ふた。これは東京の各監獄を視察する許可證である。一ヶ月程前に、願書を差し出して置いたのが、漸く許可になつたのであつた。私はこの許可證を持つて、直ぐ東京監獄へ視察に出かけた。藤澤典獄は、私がこうした方面の研究をして居ることをよく知つて居たから、逸見一部長を呼むで、私を案内さしてくれた。普通視察に來る者には、未決監の視察は許さないのであるが、司法省の許可證があるので、私には未決獄も見せてくれた。二階の監房を見て行くと、一番奥の方の、右側の監房の前で一部長は立ち止まつた。私も其所に足を止めると、扉の中間に、天地二寸程わざと板が入れてない所がある。其所から、一部長が中を覗き込むで、

「紙も筆も居いたどう」

後向きになつて、机の上で、筆を走らして居た青年は、一部長の聲を聞いてこちらを振り向くと、直ぐ扉

の傍へやつて來た。そして件の二寸程あいた間から、此方を眺めて、

『戴きました、いろ〳〵御手數をかけました』

元氣のよい挨拶をして居た。飛白の綿入に、白地の浴衣を重ね、黑い唐縮緬の兵兒帶を締めた青年は、寧齋殺し、藥屋殺し、臀肉斬りの犯人として、當時世間を騷がした野口男三郎であつた。私はいつか男三郎に就いて纏まつたものを書いて見やうと思ふて居たから、未決監内の男三郎を見る爲めに、態々監獄視察に來たのであつた。その時、男三郎が書いて居たものは、『獄中の告白』と題する、自傳體の告白文であつた。色の淺黑い、眉の濃い、鼻筋の通つた、凛とした顏つきの男三郎は、毎日、日出から日沒まで、筆を走らして告白文の脫稿を急いで居た。見たところ惡人らしい相貌を備へて居ないこの青年が、義兄を殺し、友人を殺し、可憐の少年を殺したかと思ふと、何だか、探偵小說の主人公をまのあたり見る樣な心持がした。私は、男三郎の居る獨房の構造と、男三郎の使用して居る机、紙、筆、硯などを見て居ると、男三郎は、胡散くさい眼をして私を眺めて居た。窓から櫻の花がチラ〳〵と散つて來た。机の上にも、男三郎の肩にも、花瓣があつた。一部長に促されて、其所を左へ曲へて階下へ降ると、既決囚の居る監房へ行く廊下へ出た。暗い道を歩いて、既決監房へ入つたが、男三郎の監内生活を見るのが、その時の私の目的であつたから、既決監の方はよい加減にして監獄を出た。それから數日を經て、神田錦町の事務所に花井博士を訪ねると、私が監獄視察に行つた時、男三郎が書いて居た『獄中の告白』が博士の手元へ來て居た。それを讀むで見ると、文章は餘りうまくはないが、こうした人間がこうした境遇に立つた時の心持がよく現れて居たから、私はそれを借りて歸つて繰返へして讀むだ。曾惠に對する熱烈なる愛情と愛兒君子を思ふ慈愛とが紙上に溢れて居た。告白文には、外國語學校の卒業證書を僞造したこと、都築富五郎を殺害したことだけは認めて居るが、臀肉切取事件と寧齋殺害事件とは極力否認して居る。男三

郎の文章と、『獄中の告白』の內容の一斑を知る爲めに、玆にその一節を紹介する。

『…ッ私が家を出てより後も、一層曾惠、君子の身が案じられ、宅の傍へ行つて君子の恙なきや、曾惠が產蓐の回復は如何にと夜も眠らず、或夜の如きは、君子の泣聲に身を斬らるゝ心地して、步を返へすを得ず、又君子の聲の聞えざる夜は、若しや病氣に罹りしに非ずやと案じ煩ひ、夜もすがら眠られず、殊に忘れんとしても忘れざるは、雪降る或夜のことでありました。濕り勝ちなる私の胸は、昨日より降しりきる雪にとぢこめられ、鬱々として君子の身の案じられ（當時私は野口家から離緣され淙橋町大字角筈一番地伊澤雄司氏方に在り）、亂れ心に誘はれ、雪を蹈むで門を出づれば、空は混沌として世は淋しく、電車の音さへ絕え、一種悽愴の氣にうたれ、朔風は雪を卷いて面を打つ中を、たどり〳〵て番町宅の門前に至れば、恰も曾惠は、君子のむづかるを慰撫せんと、ガラ〳〵を打ち振り、聲に力なく節も哀れに、青葉繁れる櫻井のと、楠公訣別の唱歌を唱ひ居たり、その哀れなる聲は軒打つ雪と相和して、愈々哀れを增し、私の鼓膜を打ちし刹那、胸は騷ぎ、想は亂れ、萬感一時に胸を衝いて、悲哀を越えて渾身の熱血沸きかへり、殆ど氣も狂はんばかりでありました』

この『獄中の告白』の全文は、菊版にして二百五十ページ程のものであつた。私がこれを花井博士から借りて來たことを國木田獨步君が聞いて、何とかして出版することの出來る樣に盡力してくれと言ふて來た。花井博士に相談すると、公にして惡い個所を抹殺して、責任を君が負ふのなら差支なからうと言はれたから、官廳の秘機に涉るもの、私人の秘密に關するものその他公にすべからざる點を悉く抹消して、獨步君の經營して居た獨步社から出版した。編者は私で、花井博士が校閱者で、法學博士岡田朝太郎、法學博士小河滋次郎、文學士戶張竹風の三君が序文を書いてくれた。戶張竹風君の序文の一節に、次の文句があつた。

「……惟ふに、演劇小說等に見れば、殺人强盜等の重罪を犯せるもの、さまでの惡人とは見えずして、却つて、觀る人をして涙を搾らしむるもの多し。與兵衞も同情すべき若者なり、權三も氣の毒な男なり、忠兵衞も惡黨とは見えず、梅川ならでも女の惚れさうな男なり。男三郎の爲人は、未だ五里霧中に彷徨せり、彼は依然として一個の謎のみ。此謎を解くの秘鍵は未だ與へられざるなり。然れども、若し、男三郎をして、近松翁在世の時にあらしめば、巢林子が靈筆は、彼をば治兵衞權三以下の色男とはなさゞりしなるべく、浪花の芝居は、幾萬の子女が涙に、小屋も浮きしなるべし……」

この『獄中の告白』の賣れたことは非常なもので、初版の五千部は一ケ月と經たぬ中に賣切れとなり、再版の三千部も一部も殘らず賣れたから、更に三版を出さうとして居る時に獨歩社が解散することになつた爲め、それきり絕版になつた。その當時、

「あゝ世は夢か幻か　獄屋に獨り思ひ寢の
夢よりさめて眺むれば　あたり靜に夜は更けて」

と言ふ俗謠が流行したが、これは男三郎が「獄中の告白」の續編として書いた『あゝ夢』と言ふ小說體自傳の中に書いてあつた歌に、誰かゞ手を入れたのであつた。こうした文才のある紅顏の青年が、妙齡花の如き美人會惠に焦れて、恐るべき殺人の罪を犯したと言ふのであるから、男三郎の公判が開かれると、傍聽席には每も傍聽人が溢れて居た。男三郎の殺人事件は眞か僞か、秘密に包まれたるこの疑獄を解剖するには、男三郎が殺人罪の被告として法廷に運ばれたる顚末から述べねばならぬ。

二

東京地方裁判所豫審判事石井豐太郎氏に依つて作製されたる『豫審終結決定書』に基いて、男三郎の罪狀を擧げると、男三郎は大阪市西區新町南通三丁目十三番地武林祐橘氏の次男で、大阪桃山中學の秀才であつた。同窓の學友又木亭三と言ふ青年と男三郎とは兄弟の樣に仲よくして居たので。友達は彼等二人のことを

森の兄弟と言ふて居た。武林の二木と、又木の一木とを合して三ッの木で森と言ふ字になるからである。仲のよい二人は勉强するのも遊ぶのも二人離れたことがなかつた。こうした關係から、男三郎は亨三の母親の菊子に信用されて、亨三が東京へ遊學に來る時、男三郎も菊子に學資を出して貰ふて、亨三と一緒に東京へ來た。それは明治三十四年の四月で、何所へ行つても櫻の咲いて居る時であつた。二人が落ち着いた所は麹町區紀尾井町の石川千代松氏方で、野口寧齋の家の傍であつたから、男三郎と曾惠と顔を合はす機會が屢々あつた。多情多感の青年と、深窓に育つた處女とは、木の芽の出る、人の心の浮き立つ、春の雰圍氣に包まれて、誘ふたとも、誘はれたともなく、二人は甘い戀を語る仲となつた。まもなく野口一家は、麹町區下二番町五十六番地へ移轉したので、男三郎はいろ／＼の口實を設けて野口の家へ出入した。そして眞面目な勉强づきの、前途有望な青年に見せかけて居たから、曾惠の母親の榮子までが信用する様になつた。こうなると、男三郎も野口家を訪問するに一々口實を設ける必要もなくなつて、殆ど毎日の様に野口の家を訪づれて居た。その時分、男三郎は外國語學校の露語科に籍を置て居たが、曾惠に接近する様になつてからは學校へ行かなんだ。それでも野口家に對しては學校へ通ふて居る様に見せかけて居た、野口家では病人の寧齋と榮子と曾惠と女中が一人居るだけで、病人の外は皆女ばかりであつたので、男三郎の様な篤學な青年を同居さして置いたら、何かの力になつてよからうと榮子が言ひ出した。尤も榮子がこう言ふことを言ふ様にしむけたのは、曾惠の働きであることは言ふまでもない。こうして男三郎は野口家に起居する様になつてからも、榮子や寧齋に忠實に仕へて居たので、榮子には益々信用されたが、寧齋だけは男三郎の同居を悦ばなかつた。男三郎は寧齋が自分に打ち解けないのを早くも見て取つて、一層寧齋の歡心を買ふことに努め、寧齋の病氣が、人にいやがられる癩病であることを承知しながら、他人とは思へない程懇切に介抱してやつたので、

流石の事齋も我を折つて、男三郎の親切を感謝して居た。明治三十五年三月十二日、二七不動の縁日の晩であつた。男三郎は縁日の歸りに櫻の鉢植を買ふて來て、事齋の枕元へ持つて行くと、事齋は大變悦むで、男三郎に墨を磨らして詩を書いた。達者な者であれば出かけて行つて花も見られるが、病人はそれが出來ない、それを憫むで花を持つて來てくれる人がある、それが眼福であると言ふ意味の詩であつた。その時、事齋は男三郎に唐本を見せた、それを讀むと、或所に博學の儒者があつて、多くの門人を持つて居たが、癩病に罹つた爲め門人が四散した。あとに殘された唯一人の門人が、南方三千里靈藥ありと言ふ夢を見て、旅立をして三日目に一塊の肉を持つて歸つた。その肉を師に薦めると癩病が立ちどころに癒えたと書いてあつた。男三郎は身うちの寒さを感じた。

三

男三郎は毎日圖書館に通ふて、癩病に關する書籍を手當り次第に讀むで居た。上野の櫻が盛りであつた三月二十七日の晩、圖書館から歸ると山王臺へ登つて考へ込むで居た。暫くすると田町の方へ降りて、辨慶橋から淸水谷公園へ出て、麹町の通りへ曲らうとする時、寫眞屋の前のところに十才位の男の子が歩て居るのが目に入ると、突然飛びかゝつて、柔道の手で子供の脇腹へ當身を當てる、子供はグッタリとなつた。子供を抱えた男三郎は、筋向の路次へ入つて兩足の間に子供を挾むで、ナイフで臀肉を切取ると人の來る氣配がしたので、切取つた肉をハンケチに包むで駈け出した。自分の部屋へ戻つて來ると、ハンケチに包むだ肉を更に紙に包むで、本箱の抽斗の中へ入れて錠をおろして置いた。その翌日、件の肉と炭とを書籍と一緒に風呂敷に包むで、いつもの通り學校へ行く様な顔して家を出て、新橋ぎはの三銀で焜爐と土鍋とを買ひ求め、木挽町の釣船屋から船を借つて、濱離宮から一丁目程離れた沖へ漕ぎ出し、釣をして居る様に見せかけ臀肉を二時間程煮つめてハンケチで滓を漉すと、五勺程のソップが取れた。それを牛乳の壜に入れて持つて歸る途

中、赤坂一ッ木交番所の傍の鳥屋で鷄肉ソップ一合を買ふて歸つた。それは其の日の午後三時頃であつた。男三郎は臀肉のソップを鷄肉のソップの中へ混ぜてその中へ支那の香料『五香』を入れ、飲みよい樣にして寧齋に薦めると、寧齋はだまつて飲むだ。曾惠にも飲まさうとしたが、曾惠は少し飲むで見ていやだと言ふて飲まなかつた。殘りの半分は翌日寧齋が又飲むだ。臀肉を切取られた被害者は、麹町區下二番町五十九番地中島新吾の一子河合莊亮と言ふ十一歳の少年であつた。

四

明治三十六年六月になつて、外國語學校の卒業期が近づいて來た。野口家へ僞つて居た男三郎は其の場をつくらふべき術がないのに困つて居た。噓が知れたら曾惠に愛想をつかされるであらうと、思案に餘つた男三郎は遂に外國語學校の卒業證書を僞造した。贋物の卒業證書を寧齋に見せると、寧齋も漸く安心して、早く職業に就くことを勸めて居た。貨殖の念に厚い寧齋は、男三郎の徒食して居るのを悦ばないので、男三郎も寧齋の傍に居るのが辛く、假病を使ふて神奈川縣三浦郡三崎町六、三輪卓爾方へ轉地した。男三郎が三浦三崎へ行つた後で、曾惠の身に事件が起つた。それは曾惠に許婚の夫があつたので、愈々結婚式を擧げると言ふ話が進むで來たのであつた。その時曾惠は姙娠して居たから、結婚の話を苦にして、男三郎に身の振り方を相談すると、尋常の手段で目的の達せられないことを知つて居た男三郎は、曾惠を伴れて長野縣埴科郡坂城村宮原生吉方へ駈落した。野口家では曾惠が居なくなつたので大騷ぎをした擧句、漸く居所が分つたから迎ひにやると、二人は夫婦になることが出來ねば死でしまうと言ひ張つた。この勢に辟易した野口家では已を得ず二人の結婚を許した。然しそれは無條件でなかつた。寧齋は男三郎の人格に疑ひを懷いて居たから、男三郎を野口家の相續人とすることを避けて、少しばかりの財産を分けて曾惠と二人分家をさした。そして財産の名義も曾惠の名にして置いて、男三郎には財産上何等の權利も與えぬことにした。尙ほその上に、結婚す

れば直ぐ露語の通譯官となつて從軍するか、それが出來ねば相當の職業に就くことが條件となつて居た。この條件を拒めば曾惠と結婚することが出來ないから、不承不承野口家の申出でを容れたが、寧齋のこの處置に男三郎は尠なからず不滿を懷いた。それ以來男三郎の態度が一變して、これまでの樣に從順でなくなつた。寧齋と男三郎との間に屢々衝突が起つて、その年の十二月下旬に、男三郎の方から離緣話を持ち出さねばならぬ行掛になつた。何事にも注意深い寧齋は、男三郎から離緣を希望する旨の證書を取つて置いた。野口家を去つた男三郎は豐多摩郡淀橋町大字角筈一番地伊澤雄司方に身を寄せて、野口家の樣子を窺ふて居た。『獄中の告白』から拔萃した男三郎の文章は此當時のことを書いた一節である。男三郎も一時の感情に驅られて、野口家を出ては見たが、曾惠を思ふ心、君子を思ふ情は愈々深く、別れて居る苦痛が堪えられなくので寧齋の實弟文學士島文次郎氏に縋つて復歸の運動をしたが、寧齋が頑として聞き入れない爲めに、復歸の望みが絶えた。戀に熱狂して居た男三郎は、曾惠と君子の外世の中に何物をも認めることが出來なかつた。懷しい妻や可愛い我が子と同棲することの出來ない悲慘な境遇に落ちたのも寧齋の爲めである。野口家に復歸することの出來ないのも寧齋のあるからだと思ふと、寧齋に對する憎惡の念が胸の中に沸きかへるのを覺えた。戀の爲めに惱み、悶え、苦しむだ男三郎は、惡魔となつて目的を達しやうとした。明治三十八年五月十一日の夜、一陣の凄風は薄倖詩人の家を襲ふた。戀の爲めに天地何物も認めない男三郎は野口家に忍び込むだのである。曾惠、君子、榮子の寢て居る七疊半の間を通つて、次の八疊の間に入ると、其所に寧齋が寢て居た。氣取られることを恐れて居た男三郎は、八疊の間の次の四疊半の室へ入つて暫らく樣子を窺ふて居たが、誰も眼を覺さない樣であつたから、寢て居る寧齋の上へ馬乘りになつて絞め殺した。

五

寧齋の死は翌日親戚知友間に知らされて、新聞は一

代の詩宗の訃音を傳へ、事齋を知る者も知らざる者もその不幸短命を悼まない者はなかつたが、積年の惡疾茲に至つたものとして、死因に就て疑ふ者は一人もなかつた。葬儀の濟むまで毎夜門前で人知れず夜伽をして居たのは男三郎であつた。葬儀が濟むと間もなく相續問題が起つて、男三郎復歸が親戚間の議題となつた。幾多の波瀾曲折はあつたが、結局男三郎が露語を活用して社會的相當の地位を得たならば復歸を許してもよいと言ふことに決した。男三郎にして眞に外國語學校の露語科を卒業して居たならば、問題は直に解決したのであるが、戀の爲めに學業を半途で擲つた男三郎は露語を以て社會に立つべき資格がない。目的の爲めに手段を選ばない男三郎は、露語通譯官を拜命したと僞つて暫らく東京を去ることにして、親戚を瞞著しやうとした。然しこれを實行するには旅費の用意をせねばならぬ、男三郎は金策にかゝつたが、何れの方面にも信用を失墜して居た男三郎は、如何に奔走しても金の工面が出來ないところから、友人の一人たる麴町區麴町四丁目八番地小西藥店事都築富五郎を欺いて金を奪ふことを企てた。富五郎は聾であるから話は總て筆談であつた。今度戰地から金塊を持つて歸つた人があつて、秘密に賣りたいと言ふて居る。尤も價は法外に安い、買ふて置けば儲かること受合だと、棚から牡丹餅の樣な話をした。富五郎は乘り氣になつて、麴町銀行から三百五十圓の預金を取出し、之を折鞄の中へ入れて、五月二十四日午后六時頃、金塊の賣主が居ると云ふ府下豐多摩郡代々幡村へ男三郎に伴れられて行つた。青山六丁目で電車を下り、代々木の方へ歩いて行くと、德大寺邸の裏手の徑路へ出た。時刻は午后の九時を過ぎて居たから、二人の外に人通りはない。月は雲に隱れて足元は暗く、遠くに梟の啼くのが聞えた。この時、突如男三郎は富五郎の咽喉を締めると、富五郎は何の抵抗もせずに脆くも息が絕えた。男三郎は其の場に落ちてあつた荒繩を富五郎の首に卷きつけ、大きな栗の木の下へ横にして置いた。栗の木の枝へ繩を掛けて縊死したのが、繩が切れて落ちた樣に見せかけ

て置いたと言ふのである。以上の事柄は警視廳の留置所で陳べた男三郎の自白を基礎として作られた豫審終結決定書の内容である。前後の連絡が調ふて、まるで小說を讀む樣であるが、これが悉く事實であるかどうかは頗る疑問である。官文書僞造罪の證據として僞造の外國語學校卒業證があるのと、都築富五郎の所持して居た折鞄が男三郎の部屋に在つたゞけで、その他には一點の證據となるべきものがない。臀肉切りにしても寧齋殺しにしても、證據と言ふものは一つもない。唯自白のみでこうした豫審終結決定書が出來たのである。

六

法廷に立つた男三郎は、官文書僞造と、都築富五郎殺しだけは認めたが、臀肉切取事件と寧齋殺害事件とは極力否認した。果して男三郎が犯人でないとなると、眞の犯人は何者であるか、又男三郎は何故に犯さゞる罪を自白したのか、こうした疑問は容易に解けぬ、疑獄の秘密は全く不可解のものとなつた。この間の消息を語るものは男三郎の『獄中の告白』と、花井博士の辯論である。『獄中の告白』に依ると、男三郎が警視廳の留置所で拘禁されて居た當時、曾惠も亦寧齋殺しの嫌疑者として警視廳の留置所に拘禁された。このことを知つた男三郎は、何とかして曾惠を救はねばならぬと、獨りで煩悶して居た。その樣子を見て取つた同房の歌代佐平太と言ふ不可解の人物が、殊更曾惠の苦しむで居る有樣を語つて、之を救ふのは男三郎が自白するより外に道のないことを說いたので、曾惠を救いたい一心から一時心にもない自白をしたと言ふのである。この時の男三郎の心持は、花井博士の辯論に盡されて居る。その一節に曰く、

『月は冷に、風聲は死す、警視廳裡鐵窓の夢、如何に被告を苦しめたでしやう、威容近づくべからざる警官前に在り、態度戰慄すべき偵吏後に在り、怪疑の囚人又房を同うして眠り、怒るが如く、罵るが如く、慰むが如く、勞はるが如く、一意專心、被告の自白を要求しつゝあり、薄志の人、戀狂の徒、其の

意を迎へて戀人を救ひ、以て曾惠の嫌疑を解かんことを覺悟するは、誠に事理己むを得ざる次第ではありますまいか』

言葉は簡短であるが、男三郎當時の胸中を洞察した辯論である。この怪しき同房者歌代佐平太は德富蘆花君を伯父だと言ふて居たので、男三郎は蘆花君の所へ實否を問合すと、次の如き返事が來た。

『二十一日附の御葉書拜見、小生の知人には歌代佐平太なる人無之候、又其御仁の名を耳にしたる事も無之候、

御葉書に接したるをたよりに、一筆書き添ふる事を御許し被下度候、

小生も上帝の前には、貴下と同じき罪人に候、從つて貴下の御身上をに關して、傷心の感不尠候、貴下願はくば小生の一言に耳を傾けよ、貴下も、孔子も、基督も、矢張り同じき人の子なり、而かも貴下は確に大なる罪を犯したり、願はくば自家の知られよ、罪に服されよ、腹の底より殘りなく自白せられよ、天の父の前に懺悔せられよ、貴下の手に依りて死したる人々の靈の前に罪を謝せられよ、而して法の定むる所に依つて此に向はれよ、肉に死して靈に生きられよ、肉の生命は百年に滿たず、靈の死活は永遠の問題也、基督と共に、十字架に繋がれし盜賊の一人は、十字架上に罪を悔いて基督と共に樂園の人となるを得たり、人間の犯せる罪にして、眞實悔ひて神の前に許されざるの罪なし、再言す、願はくば、自家の罪を知られよ、自白せられよ、而して心殘りなく死刑に向はれよ、是永遠に生くるの道也、貴下の妻子は、貴下の懺悔の死に因つて確に人間として世に立つを得可し、

肉は死す、靈は亡びず、貴下の眞人間となり得るの機會は今を措いて再び來らず、兄弟よ、人になりて死に就かれよ、切に祈る。

十二月二十七日朝　　德富健次郎

野口男三郎樣

花井博士は、辯論の最後に於て、蘆花君の此手紙を引用して熱誠を籠めた忠告をした。私は速記術でノートに書きとめて置いたから、茲に載せる。

「本辯護人は、終に臨むで、裁判官及び檢事諸公の面前に於て、被告に向ひ敢て一言の忠告を與へようと思ふ。天下は廣く萬物は多し、然りと雖も、今や被告に對し、同情を寄する者、四千萬の同胞中一人もないのである。父母兄弟の親と雖も、知巳朋友の信と雖も、恬然として顧みる所なし、四面楚歌の孤囚眞に憫むべきの限りである、古の聖人は罪を惡んで人を憎ずと宣ふ、我等一片の俠、其の請ひを容れて辯護を諾せし所以のもの、汝知るや知らずや、被告は世間唯一の同情者として深く我等に感謝せねばなるまい、辯護人の辯論はこれで終るのである、男三郎君よ、君自ら良心に問ひ、身に覺えある罪なれば潔く事の顚末を自由すべし、今の時、決して遲くはないのである、懺悔は總ての罪惡を亡し、而して神は汝を救ふてくださるのである、語に曰く、朝に道を聞いて夕に死するも可なりと、君願はくは道に死せよ、肉に死して靈に生きよは德富健次郎氏の忠告にして、君は曩日僕に郵送したではないか、未知未見の德富氏が、わざ〳〵書を寄せて懇に忠告してくる所以は、畢竟何である、死しての後までも君を罪人にするに忍びないからである、君は近時、聖書を愛讀して居るさうである、聖書を讀みて神の意に背くは、虛言を弄して我等を欺くよりも更に大罪である、過あらば悔ひ改め、一時も早く、本然の善に立歸りなさい、僕は敢て裁判官檢事諸公の面前に於て切々偲々の忠告をする」

花井博士の最後の辯論の終つた時、男三郎は手拭を顏に當てて聲を放つて泣いた。

七

男三郎の自白が、こうした心理狀態の下に陳べられたものとすると、自白の價値に動搖を來たすのは否む譯に行かない。殊に、男三郎が未決監に入つてから、場所も同じ麴町の二番町に、河合莊亮と同年輩の少年

が、同一手段で臀肉を切り取られて死で居た事件があつたのは、自白の價値に益々動揺を與へたところへ、男三郎が築地附近の海上で臀肉を煮てソップを作つたと言ふ、明治三十五年三月二十九日の同時刻は、退潮であつてその附近は船が動かないと言ふことが氣象臺の證明で分り、貸船屋の主人小林正紀が、其の日男三郎に船を貸した覺なしと法廷で證言し、幾多の反對證據が現れたので、まるで支那の小説を讀む樣な臀肉切取り一條の興味ある自白は全く價値なきものとなつた。それでは寧齋殺しの方はどうかと言ふに男三郎を犯人なりとする唯一の證據となつて居る東京帝國大學醫科大學の片山(國嘉)松島(不二)兩醫學博士の手で作られた寧齋屍體解剖の鑑定書を見るに、

「屍體は死後四十九日を經たるものにして、時恰も初夏の候に當り、腐敗頗る顯著なると、化學的檢査の結果消極なるとに依り、鑑定命令の事項に對し一々斷案を下すに由なし」

と前提し、(一)屍體の前胸と下部左右兩側の筋肉層に約手掌大の溢血あり、之は鈍體の他爲的作用に依るものと推測す、(二)右屍體の死因は腦溢にあらず、窒息死なるや否や不明なり、(三)屍體の死因は中毒なりと認むることを得ず」

となつて居る。これに依ると死因は全く不明である。從つて他殺なりとの證據とするには頗る不充分である。鈍體の他爲的作用に依る手掌大の溢血ありと言ふのが、稍疑を起す材料とはなるが、これとても生前どれ程前に出來たものか明になつて居ない爲めに、直に他殺なりと斷ずる材料とはならぬ。男三郎の自白に依ると、寧齋を絞殺した時間が夜の十一時と言ふことになつて居るが、野口家には夜間安眠しない幼兒の君子があり、年齢の加減と當時の心配とで夜もおち〳〵眠らない榮子と言ふ老人がある上に、曾惠は毎夜十二時前には眠らない習慣であるから、此時間に於て家人に氣取られずに寧齋を殺害することは、天魔鬼神なら知らぬこと、人間業としては全く不可能な狀態にあつた。事件をこう言ふ風に觀察して行くと、臀肉事件と

事齋殺しとは、果して男三郎が犯人であるかどうかは頗る疑はしいことになる。清水檢事が論告に三時間を費し、花井博士の辯論二日に亘つたのは、如何に不可解の疑獄であるかを語つて居る。この疑獄を裁判したのは、明治の大岡越前守と唱はれた明判官今村恭太郎君であつた。明治三十九年五月十六日言渡された判決に依ると、臀肉事件に對しては、

「……右被告の調書は、豫審にて被告に對し接見禁止命令ありたるに拘はらず、被告は警視廳留置所の雜居房に他囚と共に二十餘日拘禁され居る間の陳述に係り、其の言ふ所信を措き難ければ、之に依り其の殺害の事實を認むるに足らず……」

と證據不充分を理由として無罪の判決を下し、事齋殺害事件に對しては、

「……右調書は、前掲被告の豫審調書と同樣に、被告が警視廳留置所の雜居房に拘禁中に爲せる陳述にして、其の言ふ所は、或は毒殺なりと言ひ、又は絞殺なりと言ひ、紐を用ゐたりと稱し、又は手拭を使用したりと言ひ、殊に高橋より野口榮子宛の手紙の事は他の被告人より聞きたりと陳述し、且つ一太郎（事齋の本名）の死體の胸邊には血の塊が出來て居た趣ですが、それは私が絞殺の際乘つたのですと陳べ、豫審中被告の知り得べからざる事項、鑑定に依り現れたる結果まで知了し、之が陳述を爲すは頗る奇怪にして、如斯陳述は信を置き難ければ、之に依り其の殺害の事實を認むるを得ず（中略）屍體に就き死因を判別する能はず、被告の豫審調書信を措く能はざる以上は、間接の證據に依り被告が一太郎を殺害したりとの事實を認むることを得ず」

とこれ亦無罪の判決があつた。官文書僞造事件と都築富五郎殺害事件とは、男三郎が初めより之を認めて居たのと、花井博士も此二點は絕對に辯護をしなかつたので、孰れも有罪と決定し、數罪俱發重きに從ひ死刑の判決があつた、男三郎としては、極力否認して居た事齋殺しと臀肉切りとは無罪となつて、最初より認めて居た官文書僞造事件と都築富五郎殺害事件とで有罪

となつたのであるから、無論滿足をして刑に服するであらうと思ふて居たら、意外にも同月二十一日控訴の申立をした。男三郎が控訴をした理由は、官文書僞造は犯したが、三個の殺人犯は孰れも犯して居ない。然し一審で全部を否認したならば、自分の言ふ事を何人も信じてくれまい、その結果義兄殺しの罪でも背負ふ樣なことがあつては、死んでも死なれないから、一審で都築富五郎殺しだけを認めて置いたのであるが、實際は富五郎を殺した覺えがないと言ふのである。成程、富五郎の一族には精神病たがあつて、富五郎の伯母も實姉も自殺したのであるから、富五郎自殺と言ふことは、多少疑へば疑ふ餘地がないではないが現に富五郎の持つて居た折鞄が男三郎の部屋に在つたのと、自白が事實に附合して居るのとで、男三郎の控訴には同情する者がなかつた。花井博士が控訴の辯護を拒絕したのと、小林檢事正からも控訴があつたのとで、男三郎は間もなく控訴を取り下げた。戀の爲めに大罪を犯したる多情多感の男三郎は、未解決の疑問を殘して

絞首臺上の露と消えた

不可解の殺人

一

北國の冬の空は、どんよりと鼠色に曇つて、雪の降る日が多かつた。大正三年十二月三十日の夜が明けると、この一日二日雪が止むで居たので、人の步く道だけは消えて居たが積つた雪は堅くなつて居た。新潟縣中蒲原郡横越村横越八千六百十七番地に住むで居る百性の細山孝次郎の家へ、警部や巡査や刑事がどや〳〵と入つて行く後から村の者もついて行つた。母屋より少し東南の方へ離れ所に在る小屋の中に皆集つた。小屋は入つて直ぐ左の方に肥料置場があつてその隣が厩で右の方に六尺平方の土間がある。土間の隣が藁置場で、その前に古筵が七枚重ねてある。その奥が養蠶具置場で板敷になつて居る。古筵の前に臼が二個あつて一個は立つて居たが、一個は横に倒れて居た。倒れた臼の前に粉米と糖があつた。粉米と糖の前に唐箕が置

いてあつた。六尺平方の土間の西の隅に、搗臼があつて、その前に足駄が一足一個は表向いて一個は裏向いてゐた。その前に杵の落ちた痕跡が半月形についてあつた。東の隅に在る肥桶の前に夥しい血痕があつて、南の隅にも二ヶ所血痕があつた。厩の入口の左の方にも血痕があつて右の方に血塗になつた男が仰むけに倒れて居た。警察醫が被害者の疵を調べると、頭部に六創右顎に一創、左脊部に皮下溢血二創あつて絶命して居た。死で居た男は此家の主人の細山孝次郎であつたが何故に殺されたか、何者に殺されたかさつぱり分らぬ。田舍のことであるから、充分なことは出來なかつたが、それでも刑事や巡査が兇行の現場から其の周圍を具に調べたが、外から人の入つた形跡がない。雪はあつたが、人の歩く道は消えて居たから、巧みに逃げたとすれば、雪に足跡を印せずに逃げられないこともないから、絶對に犯人は外部から入つたものでないとは斷言は出來ないが、その當時搜査に從事した刑事の報告には犯人は外部から入つたものでないと言ふことになつて居た。犯人が外から入つたものでないとすれば嫌疑が家内の者にかゝるのは自然のなり行きである細山の家は被害者の孝次郎と、妻のまさ、（明治五年三月生）長男要太郎（明治二十七年一月生）次男幸太（明治三十一年八月生）養母みた（嘉永二年五月生）の五人暮しである。疑ひがかゝるとなると五人の中の者でなければならぬが、孰れも親たり、子たり、妻たる者であるから、骨肉の親が犯人であるとはどうしても思はれない。刑事は家内に犯人ありと斷定したが、直に家族に手を下すことに躊躇した。けれども外に嫌疑者と目すべき者がないから、長男の要太郎を取調べて見たが、少しも犯罪の糸口を見出すことが出來なかつた。この要太郎と言ふ青年は、村中の評判者で、品行に於ても、學問に於ても、人物に於ても、村の青年で要太郎に及ぶ者は一人もなかつた。要太郎は小學校を卒業したゞけではあるが、東京からいろ〳〵の講義錄を取寄せて獨習して居たので、中學卒業程度の學力はあつた。こうした心掛の青年であつたから、楢越忠

誠會と言ふ青年會を起し、要太郎自ら會長となつて、毎夜六時半から八時半まで、村の成年三十餘名を集めて中學程度の普通學を互に自習して居た。要太郎の弟の幸太もこの忠誠會の會員となつて、兄弟二人とも創立以來一晩も缺席したことがなかつた。殊に兇行のあつた前晩も、要太郎、幸太の兩人が平常の如く忠誠會で勉强して居たと言ふ事實は、同會員佐藤留次郎の證言と横越警察署警部藤岡理作の復命書に依つて證明されて居る。翌朝實父を殺さうとたくらむで居る人間が、その前夜勉强して居るなぞと言ふことはあり相にも思へぬことであるから、要太郎を父殺しの犯人と見ることが出來なかつた。

二

養母みたは根が他人のことであるし、財産上のことで孝次郎と折合がよくなかつたと言ふ事實があつたので、みたを嫌疑者として調べた。それと同時に、孝次郎の妻のまさ、次男幸太の兩人をも訊問した。警察署に於ける訊問は嚴重であつたから、幸太の口から意外な事實が漏れた。父孝次郎は養子の身分でありながら、茶屋酒を飲むばかりか、平常僻けてばかり居るから、こう言ふ人間が居ては細山家の爲めにならぬ、今の中に殺してしまうた方で家の爲めであると言ふことを兇行のあつた前日、茶の間で養母みたが發言した。すると妻のまさも、長男の要太郎も養母の意見に同意したので、幸太も亦之に贊成して、翌日父が小屋へ入つて來るところを、幸太が杵で父の頭を打ち、要太郎は父が首に卷いて居た首卷で父の首を絞めて殺した。その時夥しい血が流れたから、まさが糠をまいて竹箒で掃除したと言ふ自白があつた。扨てこそと言ふので刑事が活動して周圍の事情を取調べると、前の年の作が惡かつた爲め、肥料代その他の費用に金が要つて、孝次郎は百五十圓の借金をした。其當時養母に百五十圓の借金をしたと言ふことを話して置いたが、みたはどう聞き違ひをして居たのか、百の字を聞き漏して五十圓の借金があると聞いて居た。五十圓の借金でさへも、隨分文句があつて、自分の連合の五郎太が生て居

た時分は、人に金を貸したことはあつても、人から金を借りたことがなかつた。孝次郎の代になつてから借金をこしらへるとは實に心外だと明けても、暮れても、借金のことばかり言ふて居た。兇行の數日前に、借金は五十圓でよく、百五十圓であると言ふことが分つて、みたと孝次郎との間に悶着が起つた。その時孝次郎は、そんなに金が欲しければ俺を殺すがよい、俺を殺せば三百圓の金が入ると捨鉢なことを言ふた。當時孝次郎は三百圓の養老保險に入つて居たのであつた。又こう言ふこともあつた、要太郎は子供の時から皮膚病に罹つて居たので、醫者にかけてくれと屢々兩親や祖母に賴むのであつたが、生命に別條のある病氣でないから、金のかゝることはよせと言ふて醫者にかけてくれなかつた。要太郎はそれを不滿に思ふて、祖母の預金を無斷で引出し、內證で治療をして居たのが發覺して、大變叱責されたことがあつた。こうした事情の下に一家の者があつたとすると、幸太の自白の如くに、親子相談の上幸次郎を殺害したことが事實らしく思はれるので、みた、まさの兩人をも嚴しく訊問したが、二人は何所までも知らぬと言ひ張つて居た。ところが、幸太の自白のあつたことを要太郎に告げて、更に要太郎の自白を求めると、要太郎は父を殺したのは自分に相違ないと自白をした。然しその自白は幸太の自白と全然異なるものであつた。要太郎の自白は、

『私は大正三年十二月二十八日の夕方、新潟市へ參りまして、遊廓を步いて居りますと、水谷屋と申す遊女屋の表で、若い女が登樓してくれと言ひましたが、其の時は錢も持たず時刻も遲くありましたので、その日はそのまゝ歸宅いたしましたが、その女のことが、どうしても忘れられませんゆへ、何とかして金を持つて行かうと思ふて居りましたが、私には金の工面が出來ませんので、小屋に在る米を盜むで金にしやうと思ふて、三十日の朝、小屋へ入りますと、運惡く其所へ父がまいりましたから、私は夢中で其所に在つた杵で父を擲り殺しました』

と言ふのであつた。こうなると幸太の自白が眞實か、

要太郎の自白が眞實か分らなくなつた。幸太の自白に依ると一家四人の者が悉く犯人となるのであるし要太郞の自白に依ると、犯人は要太郎一人と言ふことになる。刑事も迷ひ、檢事も疑ひ、裁判官も判斷に苦しむだのであるが、結局新潟地方裁判所ではみた、まさ、要太郎、幸太の四人共謀の上幸次郎を殺害したものしとて、一家四人悉く死刑に處する旨の判決を言ひ渡した。

三

四人の被告人は、この裁判に服せず、法學博士大場茂馬君を辯護人として東京控訴院に控訴した。此事件が東京控訴院刑事四部菰淵裁判長の部に移つて公判が開かれると、要太郎も幸太も自白を否認した。幸太は自分が一家四人共謀で父を殺した樣に自白したのは、當時父が非業の死を遂げたので氣が顚倒して居たところへ刑事から嚴しい訊問を受けたので、心にもない自白をしたのであると言ひ、要太郎は、祖母、母、弟の三人が父を殺した犯人として擧げられたと聞いて、自分一人が犧牲になれば他の者は助かるであらうと、父を殺したのは自分であると自白をしたが、全く身に覺えのない事柄であると、どこまでも自白を否認するのであつた。係り檢事たる小林登志吉氏は、希代の疑獄の眞相を探る爲めに、特に公判の延期を求め、各方面から證據となるべきものを集めると同時に、被告を知れる村民その他關係の警察官等に就いて極力調査の步を進め、非常な苦心をした結果、みた、まさ、幸太の三被告に對して無罪の論告をした。幸太の自白を信ずれば一家四人が犯人となり、要太郎の自由を信ずれば犯人は要太郎一人となる譯である。二個の異なる自白がありとすれば、孰れか一方が嘘でなければならぬ。自白の信用出來ないのはこうした實例があるからである。自白を以て獄を斷ずる危險は誠に寒心すべきものである。小林檢事は全部無罪とする英斷には出なかつたが、四人を殺すか一人を殺すかと言ふ分岐點に立つて、一人を殺して三人を助ける論告をしたのは、法律上の議論は別として、人道の上から確に正しいやり方があつたと思ふ。檢事としてはこれ以上の事は出來ま

い、イヤこれだけの事をやる檢事も餘り多くあるまい。菰淵裁判長の下したる判決も、小林檢事論告の通り、みた、まさ、幸太の三名を證據不充分として無罪と爲し、要太郎一人に對して死刑を言渡した。豫審までは親を殺したことは認めて居た要太郎が、公判になつてから極力否認して居るのと、要太郎の人格が親を殺し相に思えないのとで、辯護人たる大場博士は上告して飽まで、要太郎の無罪を主張したが、大審院は上告理由なしとして棄却した爲めに、要太郎の死刑は遂に確定するに至つた。横越村では模範青年として村の若い者が尊敬して居た要太郎が、こともあらうに親殺しの罪で死刑の判決を受けたと聞いて、世の中は暗闇だと言ふて騒いで居た。村中の失望と、細山家一族の悲歎が見るに忍びないので、大場博士は要太郎の爲めに司法大臣へ歎願書を出したが、その甲斐もなく、大正六年十二月八日午前十時五十八分、東京監獄に於て要太郎は親殺しの大罪を犯した犯人として死刑を執行された。死刑執行十八分前に、要太郎は次の如き遺書を書き殘した。

『私は、今冤罪に依りて刑に處せられんとします、然し、神は必ず我心の公明なる事を知り給ふ事と信じます、此の期に及むで何にも言遺す事はありません、私の靈魂なき死骸は、何の宗教に依りて葬るとも差支ありません、今や、私は神の大なる恩惠に依りて天國に赴かんとする所です、決して御歎きなさらぬ樣願ひます。

大正六年十二月八日午前十時四十分

細山要太郎

家内御一同樣』

要太郎の絶命に依つて、此事件に關する總ての問題が消えた、何事も皆終りを告げた。人間の裁判は終つて、これ以上のことは人間の智識で知ることが出來ないことになつた。要太郎が果して親を殺したかどうかと言ふことは、要太郎自身と神の外は何者も知る者はない。私は此事件に對し解決を與へる責任を持たぬ、裁判と言ふものは、人間の爲す裁判と言ふものは、斯

くして萬事を解決するものであると言ふことを紹介すればよいのである。

死刑が無罪に

一

向島に櫻が咲いて、東京中の人間が花見で騒いで居る、大正四年三月三十日の午前八時頃、東京地方裁判所豫審判事川上定次郎氏が書記坪内春夫氏を伴れ、二人引きの俥で本所區柳島元町二百三十五番地の紙箱製造業岡本八十八方へ臨檢に赴いた。此家は押上通りの廣道に沿ふて建てた二階建の四軒長家の右から、二軒目の家で、二箱の六階の間に二つの寢床が敷いてあつて、東の方の寢床には主人の八十八がシャツ一枚で頭を割られて死で居た。西の方の寢床には八十八の妻のまつ、長女きい、二女とみの三人が鮮血に塗れて、蟲の息で跪て居た。四邊を見ると、西側壁に沿て置かれてある簞笥の二段目の抽斗が半分開いて居たが、別段衣類を出した模樣もなく、その前に折鞄が開けてあつて、中から二三枚書類が出て居た。犯人の入つた所を調べて見たが、何所も彼も皆戸が締つて居て、侵入したらしい個所がない。唯勝手口の戸締がしてなかつたから、犯人は此所から出入したらしいが、戸は開いて居なかつた。臨檢が終ると、直に其の場で假豫審を開いて、犯人搜査の方針を議したが、怨恨殺か强盜殺人か一寸見當がつかぬ。八十八は絶命して居るから死人に口無しで分る筈なく、重傷を負ふた三人は危篤の容態であるから、犯人の人相なぞを知る便りにならず、家の内外を搜したが、證據となりさうな物は何もない。警視廳は刑事を八方に飛ばして、多くの嫌疑者を調べて見たが、犯人らしいものは擧らない。こう言ふ狀態が幾日も續いて居る中に、三人の重傷者は孰れも皆死でしもうた。全快したら何事か聞けるであらうと思ふて居た望みの綱も切れ果てた。向島の櫻も散りて葉櫻となつた五月十九日に、警視廳へ一人の嫌疑者が擧つた。其の男は廣島縣の生れで、高等小學三年を終ると、十五才の十月に大阪へ出て、尾川藤助と言ふ紙

箱製造業者の家へ奉公して、其所で二十二才になつた。奉公中貯金した八十圓の金を資本にして、實兄の熊太郎と共同で紙箱製造業を營むで居たが、兄弟喧嘩をして別れてしまい、暫らく獨立で紙箱屋をやつて居たが、思はしくないので大正三年三月七日上京して、本所區小泉町の護謨商小泉濟三郎方へ住み込んで、大正四年の二月十四日まで雇はれて居たのであるが、店の金十圓程遣ひ込んだ爲に暇を出されたから、本所區中の御竹町河岸四十三番地菊地貞二方に同居して、自轉車附屬品の仲買の樣なことをして生活をして居た。此男が兇行のあつた三日前に、八十八の家へ賣掛代金の殘額七圓を取りに行つたと言ふ事實があつた爲めに、嫌疑者として取調べることになつたのである。訊問は頗る嚴重であつたらしい、平三郎は八十八一家四人の者を殺したのは自分に相違ないと自白した。自白の內容は次の如くである。

「私は三月二十七日に、岡本の家へ勘定を取りに行きましたら、二階へあがつてくれと申しましたから二階へあがりますと、八十八は簞笥の抽斗から金を出して私に渡しました、こうして未だ晦日にもならぬのに心よく勘定を拂ふてくれる位であるから、かなり金を持つて居るであらうと思ひまして、ふと惡心を起しました。それは、本所區小梅町二百七十四番地片岡軍四郎の次女芳江と申します二十二歲の女と夫婦約束をいたしまして、早く世帶を持ちたいと思ふて居りました際でありましたから、岡本の家へ忍び込むで金を盜むことを決心いたしました。泥棒に入るには萬一の用心に兇器を持つて行く必要があると思ひましたので二十九日の午后四時頃、淺草區新谷町の露店で薪割斧一挺を十五錢で買ひ求め、之を風呂敷に包むで芳江の家に行きましたが、人に見られては惡いと思ひましたから、その包を裏口の芥箱の中へ隱して、夜の更けるのを同家で待つて居りますと、時計が十二時を打ちましたので、同家を出て岡本の家まで行きますと、もう寐たと見えまして家の內はひつそりとして、何の音もいたしませぬ

から、斧を包むで來た風呂敷で面を覆ひまして斧を腰に挿し、板塀を傳ふて疵に這ひあがり、天窓より降りやうといたしましたが危険でありましたから、物乾場の方へ廻りまして、雨戸を開けやうといたしますと、三枚の中の左の、端の雨戸が開きましたので其所から忍び入りましたが、恐しくて金を搜すことが出來ませんゆへ、家人を殺して置いて金を盜もうと決心しました、右の手に斧を持つて岡本の頭を擲りますと、その音で女房が目を覺ましたから、これも又斧で擲りつけました、もう其の時は私も夢中でありましたゆへ、二人の子供を擲りつけたの微に覺えて居りますが、はつきりは記憶して居りません、それから金を盜まうと思ふて簞笥の抽斗や折鞄を調べて見ましたが見えませんので、枕元に在つた折り疊みの紙入がありましたから中を見ますと、五圓紙幣が二枚と五十錢二十錢の銀貨取りまぜ四圓餘りありました、此金を懷中に入れて階下に降り、勝手元の戸を開けて外に出ましたが、手について居た血には氣がつきませんでした、途中で血を拭つた樣に記憶して居ります、午前五時頃に菊地方に歸りましたが、斧を捨てることを忘れて居りましたから、菊地の家の横手に在る川の中へ投げ込み、家の中に入つて二階へ上り、二階に汲むであつたバケツの水で指について居た血痕を洗ひ落しました」

これは警視廳で陳べた自白であるが、檢事廷に於ても豫審廷に於ても、其の自白を認めて居た。愈々公判となつて、東京地方裁判所刑事二部立石謙輔君の審問を受けることになると、これまで認めて居た自白を全然否認した。自分は露店で薪割斧を買ふたこともなければ、岡本の家へ忍び込むだこともなく、岡本一家の者を殺したなどゝ言ふことは毛頭ないと、自白の根柢から覆へした。被告の自白以外に有形の證據のない事件で、而かも殺人の重大事件であるから、唯一の證據たる自白を否認されて、裁判の進行に尠なからざる障礙を來した。裁判官も檢事も辯護人も秘密に包まれたる此疑獄事件の眞相を握るべく非常な努力をした。公判

は五度まで開かれて、檢事の論告も、辯護人の辯論も各々最善を盡された。判決は有罪か無罪か、社會は多大の注意を以て結果を待つて居ると、大正四年十月十五日判決が下つて、橋本平三郎は强盗殺人の罪に依り死刑に處する旨の言渡があつた。平三郎は寃罪の爲めに死刑になるのかと落膽するのを、辯護人が慰めて直に控訴の手續きをした。事件は東京控訴院刑事二部西川(一男)裁判長の手に移されて、檢事は小幡豊治君が立會ふことになつた。小幡君は今警視廳の保安部長に轉じて、私娼問題や自働車自轉車の取締などで盛に活動して居るが、控訴院檢事局に居た時代も、名檢事として知られて居た人であるから、此事件を擔當すると、一審判決の不備なる點を見出し、一審の公判で訊問しなかつた證人參考人を盛に取調べ、一方氣象臺へ兇行のあつた大正四年三月二十九日の天候を聞合すなぞ、あらゆる方面の調査をした氣象臺からは同日に雨天であつたと言ふ報告が來たので、小幡檢事は此事件に益々力を入れた。平三郎の自白に依ると、兇行の當日雪駄をはいて家を出で、同日午後四時頃、淺草區新谷町の露店で薪割斧を買ふて、之を以て岡本の家へ忍び込むだと言ふことになつて居る。雨天の日に雪駄をはいて出る筈なく、雨天に露店のある筈もないから、警視廳、檢事廷、豫審廷で陳べて來た平三郎の自由の嘘であると言ふことが分つた。尚ほ念の爲めに新谷町へ露店を出す者を一々調べて見たが、同所で斧や庖丁などを賣る櫻井長五郎と言ふた物商が、同日斧を賣つたことなく、殊に其の日は雨天で露店は一軒も出て居なかつたと言ふ證言をしたので、自白の價値なきことが一層明瞭になつた。そればかりでなく被害者の屍體を鑑定した帝國大學醫科大學敎授石川哲郎氏は、被害者の傷は悉く六角形の鈍體で擲られたものであつて、薪割用の斧を以て斬つた傷に非ずと證言をして居るし、兇行のあつた當時、犯罪搜査の指揮をして、嫌疑者二百七十餘名の取調をした警視廳の石森警部は、法廷に於て、

「橋本平三郎は最初嫌疑者として警視廳で取調べを

したのでありますが、犯人と認むべき證據がありませんから直に釋放しました、それを月島署の方で檢擧して警視廳へ送つて來ましたから、私は極力反對しましたが、他の係の者が本人が自白して居るから犯人に相違ないと言ふて檢事局に廻したのです」と言ふ證言をしたので、平三郎の寃罪であると言ふことは最早疑ふ餘地がない、こうして反對證據が悉く備つたから、大正五年六月二十六日の公判廷に於て、小幡檢事は二時に亘つて被告の爲めに無罪の論告をした。西川裁判長は卽決を以て無罪判決を言渡すと、平三郎は感極まつて檢事の前へひれ伏して泣いた。辯護人吉田新太郎、細谷久六の兩辯護士を始め、義俠的に參加した磯部四郎、大井靜雄、芹澤孝太郎の三辯護士も辯護をする必要がなくなつたので、裁判官と檢事とに最敬禮をして退廷した。晴天白日の身となつた平三郎は芳江と結婚して、自轉車の附屬品を賣つて世帶を張つて居る。

秘密に包まれたる疑獄の解剖を試みたが、敢て裁判の當否を論ずるのではない。唯自白を證據として裁判することの危險なこと、犯罪の眞相を知ることの困難なことを紹介すれば私の責任は濟むのである。終に臨むで一言して置きたいことは、罪、死刑に當る事件の審理を今一層鄭重にして欲しいことだ。最近の調べにして居ないが、明治三十三年から三十八年まで六ヶ年間に、一審の裁判で死刑を言渡された事件百十八件の成行を調べて見たら控訴上告で死刑を取消されたのが八十七件あつて、結局死刑を執行されたのが三十一件しかなかつた。百十八件の中八十七件と言ふ數は決して少ない數でない。畢竟控訴上告をしたからよい樣なもの丶、若し控訴上告をしなかつたら、無辜寃枉に泣き、國家良民を殺戮するの不祥事を見るのであつた。世の學者、宗教家文士、經世家は、死せる書物の詮索よりも、こう言ふ生きた人生問題に目を着けて貰ひたいものだ。

秘密の樂み・秘密の苦み

拜啓時下益々御淸榮奉賀候陳者來る七月十五日を以て發刊致し候弊誌臨時增刊『秘密と開放』號に閨秀諸家の「秘密の樂み・秘密の苦み」なる感想文蒐錄いたし度候に就き炎暑堪へ難き折柄寔に恐縮には候へども、秘密の有する蠱惑的なる樂しみとそれに伴ふ毒汁の如き苦しみに對する貴下の御所感返信紙又は原稿紙（四百字詰）三四枚にて御洩し下され候はゞ有難き幸と存じ候尙編輯の都合も御座候まゝ遲くも五日迄に御寄稿の程伏して御願申上候敬具

七月二日

右の如き問に對して左の答を寄せられたる閨秀十數氏に向つて深き謝意を表す（編者しるす）

○　生田花世

「女には秘密が多い」とはよく申す事ですが、男の人に主に對社會的な事業上の秘密と開放とが多いのに較べると、女が胸に蓄へる秘密は主に感情上の事で、そして戀愛などに伴ふ本能的なものであるだけ、根强いのかも知れません。

『どうぞ、これは秘密にして頂戴ね……』

『ええ、きつと……』

『本當にお願ひですから……』

『大丈夫ですわ。私、そんなにお饒舌りぢやありませんもの』

かう云つた形式で結ばれる娘同志の秘密話は本當は秘密でも何でもない事で、すぐその翌日か翌々日位に、當の自身から解放されて了つて、無邪氣な笑となつて了ひます。

私自身の經驗を考へると、こんなに秘密を樂しんだり苦しんだり又打開けたりする味を本能的に覺えたのは、十三四歲からだつたと思ひます。思へばそれは…

らしい感情の發達に伴ふ自然の心理狀態で、其頃から、初戀らしいものを育てたやうに思ひます。そして其後、感情が濃厚になり、復雜になるに從つて、さうした秘密が無意識にも、意識的にも蔓つて行つたやうであります。

秘密が胸にあると始終異常な快感と不安との錯雜した感覺が、何かの機會には全身に起ります。そして火あそびが面白いやうに、今にもすつかり發見されて了ひさうな恐怖が何とも云へず刺戟的で生活が緊張して來るのであります。「秘密を樂しむ女」とか云ふ飜譯の小說を、五六年前讀んだ事があります。秘密から來る心理的、生理的な刺戟を樂しむために、戀人もないのに、戀人を架空的に拵へて、秘密の一室に媾曳に出掛ける貴夫人の事を書いたもののやうに思ひます。

今、私は意識的には餘程秘密のない生活をして居ります。無意識には多少あるに相違ありません。今から考へると幼稚な文章でしたが、私は自分の「戀愛順應」といふ書物の中の感想にかう書いた事があります。「然らば今私には秘密と云ふものがあるであらうか。否、私はこの生活の第一步をあげる時、まづ私の行爲の基點には私の秘密に對して用捨なく挑戰をする覺悟を置いた。私は私の曖昧をゆるさず、私の心の不徹底に生きることをゆるさぬ決心を据えた。私は私の記錄帳の最初の一二年に於ては私に生ずる多くの秘密をその在りのまゝに投げ出す羞恥に苦しんだ。私はそのために幾度ゝ泣いたのであつた（中略）それで私は私の經て來た實證に卽してたしかに私の思索を云ふ事が出來る。それはすべての秘密はそれを秘密とすればする程大きい秘密となるとともに、徐々に眞實とは遠ざかつて行く。それを秘密としなければ、徐々に秘密は眞實な光の中によみがへるものではなからうかと（下略）

秘密が生活に絡はつてゐると、自然に妥協的になつて、退嬰的になつて、統一が失くなつて、殊に小說でも書かうとする者に取つては眞實に觸れたものは書けないやうになるのではなからうかと私は思つてゐるのであります。

秘密の與へる快感に暗さが伴ふのに反して秘密を打捨てる時には明るい積極的な快感が全身に湧いてまゐります。然し其の生活の價値は、隱さうとするよりも、打破つて出ようとする勇氣にあるであらうと考へます。

○ 西川松子

秘密の樂しみも秘密の苦しみも時と場合とに依つて開放しなければならぬ事がないでもありませんが夫れを何等の故なくして徒らに他人の前にさらけ出す程私は厚顏な且つ無思慮な人となりたくありません。思ふにかゝる題材を特に私達婦人に向つて提供せられた中央公論社同人方の主旨は私たちに向つて真向から而かも真面目に此題材を提供せられたのではなく曰はゞ此題材を通じて愚かな婦人の心奥を探らむとせらるゝ一種の皮肉ではありますまいか、私はかく思ふ時此題材に對し尠からざる恐怖を感ずるのであります。

○ 山田たづ子

秘密と云ふことに依つて、受ける其芳烈な花の香に醉ふやうな蠱惑的な快感と、其斷崖に立てるが如き不安に依つて受ける刺衝とは、人間の快樂の中でも最も刺戟的な且濃厚な快樂であると思ひます。非常なあくどい快樂を求めようとすればそれは最早單なる快感でなく、非常な不安と苦痛を伴つた快感でなければならないのです。例へば戀愛に就いて見ましても、其相手が傍目も觸らずに一生懸命に自分を愛して呉れてゐる時よりも、其相手の心に隙のある時の方が——嫉妬の對象のある時の方がより多く相手に濃厚な愛情を感じます。假令其相手に價値を認めずとも、其嫉妬の對象のあるだけの理由に依つて、それに惹き着けられて斷ち難い愛着を感じるものです。それは其嫉妬の對象に對する爭鬪と、相手の心をどうかして自分に惹き寄せようとする努力とに心が緊張するからであります。で、此立場を反對にして云ふと、相手に嫉妬させることは

相手の自分に對する執着を増さしめることに成るのです。これは戀愛に於ける一種の技巧として、又自己の感情の滿足から、多くの男女の間に故意に行はれてゐることです。併しこれはモルヒネの注射と同じで、利き過ぎれば取返しの着かないことになりませう。少し話が傍道に反れましたが、最も濃厚な快樂はそれに痛みが伴ふ快樂でなければ、卽ち刺戟的でなければならないと云ふことが云ひたかつたのでありました。で、人間の生活の上で最も刺戟的なものは戀愛を除けば（勿論戀愛の中には秘密と云ふことも爭鬪と云ふことも含まれては居りますが、）此秘密と云ふことゝ、爭鬪との二つであらうと思ひます。普通戀愛と云はれてゐる生活が、公衆に認められた結婚生活よりもより濃厚な快樂を伴ふのは秘密と云ふ此刺戟があるからであらうと思はれます。

此秘密と云ふことには前にも言ひましたやうに非常な不安や苦痛の伴ふものですが、其苦痛は單なる苦痛ではなくして、其快樂をより濃厚にせしめるための苦痛に他なりません。世の陰謀家だの、犯罪者の心理に立至つて見たならば、彼等は只單に功利的な立場から陰謀を企てたり、又犯罪を行ふたりするのではなく、此秘密と云ふ刺戟的な快樂を求めて居るのではないかと思ひます。其陰謀に依つて又犯罪によつて功利的な目的を達するためのみならば、そんな不安な陰謀や犯罪に依らずとも、他にもつと安全な方法で利益を得ることが幾許も出來るだらうと思はれます。それにも拘らず陰謀を企てたり、犯罪を行つたりするのは、彼等には其秘密と云ふことに依つて起る不安其物が、卽ち濃厚な快樂に成るのであらうと思はれます。彼等は先天的にさう云ふ刺戟を好む性癖を持つてゐるのであらうと思はれます。

總ての快樂か反道義的であるやうに、此秘密と云ふことも最も反道義的なものであります。が、豐艶な毒草の花が蠱惑的であるやうに、此秘密と云ふことも矢張芳烈な香で人間の心を醉はしめて止みません。

私が今此秘密と云ふことの經驗に就いて一番興味を

以て思ひ出しますには、それは私の未だ六つか七つ位のことでした。或日のこと、私は子僧に隨いて月末の書附を配りに行きました。そして、或家に行つた時、ふと子僧の隙を見濟まして其處に前から置いてあつた他の店の書附を一通手早く帶の間に仕舞ひ込みました。それが魚屋のであつたか、酒屋のであつたか字の讀めない私には分りませんでした。が、それが小僧にも誰にも知られなかつたのを思ふと、其小さな犯罪人は思はずほつとしてどき〳〵する胸を押へました。そして何喰はぬ顔で小僧の後に隨いて、そつとそれを手のひらに揉みくちやにして泥滞へ捨てました。勿論此時の此私の行爲に何等の功利的な目的の附隨してゐないのは云ふ迄もありません。只單なる秘密と云ふ興味に過ぎません。が、其時の無數のメスを心臟に打込むやうな刺戟的な興味は未だに私の記憶に殘つてゐるのでありました。

○

小寺菊子

女の秘密として最も大きく、そして問題になるのは貞操上の秘密であるが、ある女は秘密を好み、ある女は秘密に觸れ得ない。

秘密を好む女は常に多くの秘密を自分に持つてゐる。彼女は一生秘密なしには生きられないやうである。明らさまな、誰でもするあたりまへな公然とした生活だけでは何やら物足りなくて、淋しくて、つまらなくて堪らない。それで始終人知れぬ秘密の樂しみに自分だけ醉つてゐる。その秘密が罪惡であるだけ、苦痛も一層激しいのであるから、彼女はそのやる瀬ない憂鬱の痛苦に惱みとほす。然かもその怖ろしい苦惱に責め苛まれつゝ、さうして悶えつゝも、決してその苦境から脱れようとはしない。否、却て、反對にその上その上とその種の秘密を重ねて、再び這ひ上れない蟬地獄に滑り落ちてゆくやうに、暗い秘密の底に沈んで行く。さうして彼女は常に暗い陰影に鎖された、どことなく淋しげな陰險な慘目な女である。感情にのみ脆くて、自制力の足りないからいふ人を私は誠に弱い氣

の毒な女であると思ふ。

又ある者は自分の秘密をそれほど苦痛と感じないらしい。それほどその秘密な樂しみの方にのみ心を惹かれて、割合平氣な顏をして通してゐる。秘密の罪惡を持つてゐる自分を、彼女はちつとも反省しようとはしないのだ。良心が痲痺してゐるとでも云ふのであらう。私はこれには甚しく憎惡と侮蔑を感ずる。

又ある別の者になると、極わづかばかりの秘密をも大變に大きく考へて、人一倍神經的にその秘密に對して苦勞をしてゐる。彼女は自分の秘密行爲をあまりに重大視しすぎて、自分から多くの苦痛を求めてゐるが、それはほんとうに正直な心の純な證據であらうと思ふ。かういふ人は「秘密」の齎らす樂しみよりも、それに伴ふ痛苦の分量の大きさに堪へ得られないのである。

かういふことはどの道一人一人の性格によることであるが、惡いと知りつゝ秘密そのものに興味を持つて進んで行くやうな人は精神的に何か缺けたものを持つてゐる荒んだ女であらう。そんな重苦しい、心配な、そして憂鬱な、血も肉も絞り取られるやうな、自ら責め苛まれるやうな陰慘な暗い秘密などが夢にもなくて、常に明るいほがらかな透徹した心持でゐられることを、私は女としてほんとに幸福だと思ふ。

○ 林 千歳

秘密——既にこの文字からして、大抵の人々の好奇的本能を一寸でもそゝらずには居ない一種誘惑的魅力がたつぷり潜(ひそ)んで居ると思ひます。事によつて——輕重、善惡、複雜さと單純さとの——差はあつても引くるめて嚴密な意味から考へると、決して秘密を、または秘密らしい事を有たなかつたといふ人は先づないと申してよいかと存じます。種類によつて苦しみの可成伴ふことはありませうが、然し一體にあらゆる秘密といふ事に獨占的、好奇的滿足の底には必つと樂しさ甘つたるさが流れ含んで居るに相違ないやうに思はれます。複雜に重い大きな密事を抱いて居る人がある場合

其の秘密によつて來る苦しみは、恐らく鬼のやうな苦味でありませうけれど、其の苦味も濃ければ濃い丈け魅惑的な甘さも强い筈ではないかと思はれます。

要するに秘密は苦惱と悅樂との闘ひだと思ひます。常に、秘密を包む人の爲には魅惑的悅樂は苦惱を欺しなだめて、先へ先へ、深く深く暗い夜のやうな經路を追ひ進んで行くことでせう。

藝術界に——現實にも——偶々見出す世の常ならぬ强い戀などには、醉樂と苦惱の頂點でのたうち狂笑してゐるやうな人々のあるのを知ります。重い大きな複雜な秘密といふ影畫の實象は或は斯うした骸骨の踊のやうなものかも知れないと私丈けは思つて居ります。

（六月五日）

○

茅原ふじ

御出題は聊かその趣意を解するに苦しみますが、自然は完成するまでは秘密を守ります、若し蕾が秘密であるとすればそは花として公開するまでの道行を踏んでゐるのであります、私達が詩歌を作るのでも料理をするのでもこれで可いと思ふまでは人に示さない、公開せんが爲めの秘密であつて秘密の爲めの秘密ではありません、此意味では秘密は卽ち道行プローセスをいふのであります、そして人間の樂しみは完成した時ではない畫龍に點睛するまでの道行の苦しみであります、眞の秘密なるものは公開の外に在るのではない自然の秘密、生命の秘密は皆公開されてゐるもので人間に理解されないから秘密なのであります、故に私は公開が卽ち秘密である、そしてその秘密は彼れに在るのではなく我れに在るであるといひたいのです、若しそれ秘密が有する蠱惑的なる樂しみとそれに伴ふ毒汁の如き苦しみといふやうなことに御答へするは別に其人があらうと存じます。

○

小野美智子

財布が空つぽになれば、俄に零落れた氣持になつてふさぎ込みますくせに、おさつの二三枚も余分に入つ

てゐれば――尤も近頃迷惑のあの小紙幣では話になりませんが――大さう餘裕のある氣分になれる單純な私です。子供が風を引いた、夫婦間で爭つた、と云つては早速小說に書きますやうな私です。秘密といふものは持つてゐることの出來ない性分で、從つてそれに伴ふ蠱惑的なる樂しみとか毒汁の如き苦しみとか云つた氣持は經驗いたしません。從つて感想を申上げる資格もございません。それでは私がどこまで底拔けの明けつぱなしかとお訊きになりますと少々困りますが、これはさうした惡魔的の氣分を含んだ意味合のものでなく、世間普通の、平々凡々の女性のおそらくはすべてが抱いてゐる筈の「可哀さうな秘密」たとへば人形の家のノラが抱いて來たあれですね、あれに似た賴りなさ、やるせなさ、苦しさならば隨分ございますが、これは男性がもつとよく女性を理解し、容認してくれるほどになりましたら、からりと明るく晴れやかになります種類のものでございます、まことにつまらないお答へでお役にも立ちますまいけれど、とりあへず右まで。

○　坪内まち

The pleasure and torture of having secrets is a hard question to answer. I, for instance, have many secrets but they are all pleasant ones. It is only the secrets one wants to die with them that can be bad enough to torture. "A secret is not worth while unless it hurts as most secerts are love affairs," they say. Of course you will find others such as murder and thief, but mostly love. I and my husband are always looking around to find out each other's secrets and when we do find them we have a good laugh. A pleasant secret when found out is as good as a theatre-show.

Mrs. Madge Tsubouchi

○　山田わか

「秘密の樂み、秘密の苦み」これは迷ふて居る弱者のみが持つものだと思ひます。正しき道を濶歩してゐる强者にも場合ひによつては

「秘密」と云ふ事はありませう。たとへば、周圍の頑迷固陋が自身の貴い生命を侵蝕して來さうな場合ひには其れを保護するために隨分秘密が必要になりませう。けれども、これは秘かに眞理の光りに浴する爽な無持ちを味ひこそすれ、苦しむと云ふ事はないと思ひます。

もし、又、周圍が、則ち、夫なり親なりが充分自分を理解し同情してゐる場合ひに或る誘惑が自分の心をひつぱろうとする。この時に、平生正しきに附かうと心がけてゐる人ならば、其の誘惑は夫又は親にも敵であると同時に自分にも敵でありますから、其の被誘惑者は親又は夫並びに自分のために其のひつぱられる心と戰ひます。ひつぱられやうとする心とひつぱられまいとする心との戰場なる肉體がずたずたに荒らされて倒れる迄、否、倒れてからも息のある間は戰ひを續けやうとします。そんなになる迄爭ひが續くであらうとも思ひませんが。

とにかく、正しい感情を持ち、正しい道を歩まうとする人には、秘密は時にはあるかも知れませんが、秘密の苦しみと云ふやうなものはないと思ひます。

或る人は、文學は腐敗物の上に生じた青苔のやうなものだと申しましたが、この青苔に滿足してゐるやうな病的な人には、秘密の有する蠱惑的なる樂しみやそれに伴ふ毒汁の如き苦しみがありませうが、宇宙の大氣に生き、紺碧の空に聳ゆる樫の雄大を喜ぶ人間にはそう云ふ苦しみはないと思ひます。

○　岩野英枝

折かくのおたづねに對して誠に失禮ですけれど、幾度も考へて見ましたが、私には秘密と云ふ名のつく樂しみも苦しみも持ちません、そしてそれらの經驗も亦ありませんからどうぞ惡しからず。以上御答へまで

○　西川文子

家庭に於て婦人としての秘密、それは恐らく金錢問題と男女問題とに外ならぬでしやう、家には財産あり、

家庭には異分子の多く錯雜せる上流家庭に於てはもとより二つともに、可成多くの秘密のある事でしやう。人格も家財もなき下等社會にも動物的の情事と、其の日〲の生活に就ての遣繰算段に可成の秘密は伏在する事でしやう、併しこれは原始的、野蠻的の何等自覺なき衝動的のもので、個人の頭腦が單純な丈けに、秘でに就ての苦樂を玩味する程の餘裕や情緒は皆目無い密しやう。

單純で賢明で人格ある智識階級の堅實なる中流家庭には秘密を容れる餘地がありません。勿論男も女も一人前になる迄には、別々の世界で別々に育つたのですから、しかも尤も樂しみあり、變化に富み、色彩も濃厚な青春時を。相識り同棲するに至つてから、語り合ひ、探ぐり合ひ或程度迄知り盡す事は出來ても悉く未知以前を知る事は出來ません。で、新家庭に於ては誰れしも何處の家庭にも多少の秘密が無いとは云はれません。又同棲するに至つても一日や一月や乃至一年二年で互に同化するものではありません。同化しないからとて、折があつたら分れやう、歸らうと云ふ考があつてでは決してなうても、日の淺いものに親しむよりは、深いものに親しむのが自然の理であるやうに。かの花嫁の實家はかうだあゝだと事毎に思ひ出し、或は云ひ出して、婚家の人々に不快の念を與へるやうに、淡い秘密の灯を絶えず抱いてゐるものではありますまいか。實家を賞讃するつもりではないが深い浸み込んでゐるから、念頭に浮ぶやうに、强ち憧れてゐると云ふのでもなく、未練に絶えぬと云ふ程でもなくても、それが唯一の樂しみ慰藉となつてゐるのではないでしやうか。それは如何に樂しい事でも、秘密を要しない樂しみには苦しみが無い丈け深みがない執着が無い、樂しいと自覺する事さへ出來ないが、それほどでない事も秘してゐる事自身に非常な興味等がある。愉快がともなふ。

併し秘密は秘密で終りまで存在するものでない、暗より暗に葬り去らるゝか、公にするか、無にするか有にするか、遂には解決をつけなければ止まぬものであ

る。秘密の要求が現實の幸福より、より深く且つ果し得らるる場合には秘密は秘密でなく漸次に形を現はして來る、位置を轉じて來る。其の過渡時代こそ蠱惑的なる樂しみを感受し、合せてまだ公然現實になつては困憊しなければならぬと云ふ所から、毒汁の如き苦しみも覺える時なのです。それとも一朝成功(?)して秘密が所謂秘密でなくなつた時、ぱつと明るみへ出してみれば秘密であつた以前の幻はとみに消え失せて了ふ。却つて以前の公然が今は秘密として床しく偲はるると云つた樣なものです。それにはかの『海の夫人』はよい例です。

女主人公エリーダは年久しく戀々として居た嘗ての意中の人が海から歸つて來て、强烈に誘はれるので、とう〳〵夫の許可を得て、夫の手から海の人へ渡されやうとする瞬間に夫人の自覺せる自由意思は、海の人が自己の意中に育くんで來た理想の人とは大分違ふのを意識し又もとの夫に我から歸るのです。その後の夫人は何等の不安も秘密もなくいと安らかに夫の懐に憩ふ事が出來たでしやう。

所謂秘密が成功すれば別の世界が開展されるので、自然古い家庭には秘密は既に存在してゐない筈です。

秘密にはそく〳〵と身をそゝるやうに、云ひ知らぬ深い快樂がある、恐怖の度にともなうて、其の强ければ强い丈け深い。それほどの引力で引かれてゐる神秘な働きは不言不語の中にも相手をして感得せしむるものか、一方からは引戻さう〳〵と云ふ强い努力の牽引力が又深い愛の泉を掘當てゝ清い清水を湧出さすものです。よく家庭には秘密は禁物だと云ひますが、一種の淸涼劑ではありますまいか、秘密の無くなつた海の夫人エリーダは果して全く幸福であるかどうか。その夫も。燈火をかき消す樣に一度忽然として消え去つた秘密はまたと萠出づるものではない。

秘密にともなう苦樂は、世の苦樂の代表的のもので恐らくこれほど强烈なものはありますまい。彼の心中はその極致を具體化したものです。

○　杉浦翠子

もし自分の心に人に告ぐべくもあらぬ憚りごとが出來たとすれば、それは永久に、『獨り』自分の心の裡に堅く封じこめて置くべきだと思ひます。

「言にいでゝいはゞゆゝしみ山川のたぎつ心をせきあへにけり(萬葉集)」

「立ちてゐるたどきも知らに我が心天つ空なり土は踏めども(同)」

などを一例として見ましてもかゝる感情を抱いた場合みな苦しさうであります。

相互間に結託された秘密はとかく呪はれがちになります。さなくばいつか秘密といふ事實に裏切りされる場合が多うございます。或男と或女が秘密をして居りました。ところが男は自分とその女との關係を仕組んで、小說にして書きました。その小說は大層よく賣れました。かうなると秘密は勿論のこと、二人の間の眞情なども全く冒瀆されてしまつたわけで、忌はしいことだと思ひます。

もし二人の間で秘密を護ろうとするならば、その時より潔く死を覺悟してかゝらねばなりません。

「我が背子がその名のらじとたまきはる命は棄てつ忘れ給ふな(萬葉集)」

この位の雄々しい心がけを持たねば噓だと思ひます。

○　津田敏子

御尋ね下さいました件につきましては全く御答へする資格がないので御座います。生れつき開けつ放しの私は、よく夫からも、「奥行がない」「開けつ放しは淺薄に見へていけない」と云ふ樣な事を云はれる事も御座いますが、どうも何事に寄らず一人で胸に持つてゐる事は却つて寂しい樣に思はれまして、いまだに秘密の味を知らずに過して居ります。

○　岡本かの子

「秘密の樂しみ、秘密の苦しみ」に對し感想お問ひ合

せに相成り候へども實は私事目下思想上の大廻轉機に際し居候爲かゝる問題に就き忌憚なき感想述べがたく不悪御承引下され度候。

○

上山浦路

祖先の家柄が旗本でございましたので、幼少の時分からの躾が非常に厳しく、どんな小さな嘘でも厳重に處罰せられて育ちましたので、又其上、生來が氣の利かないのつぺらぼうでありましたので、幸か不幸か、自分の胸に秘密をはぐゝむ機會は毛頭もございませんでした。全く私は秘密を持つといふ事がどんな氣持のするものであるか、絶體に無經驗なのでございます。苦いものか甘いものか一向に存じません。曾て私の家に寄遇してお出になつた或る御婦人が、或る機會で——私とは反對に——秘密を打明ける場合の苦痛をのべてから仰しやりました。「秘密を設けないで正直に物事を打明ける事は、一本路を通るやうで何所にも脱路や隠れ場所がないといふ觀念が絶えず私を脅迫します……」

成程そう伺つて見れば、秘密をたつぷり胸にお持ちになるお方の御心情も、朧氣ながら推察が出來ないものでもありません。そしてその脱路や隠れ場所が澤山設けられた、トンネルや、エレベーターや、龕燈返しで、屋根裏から地下室まで四通八達になつてゐる秘密の城廓の支配者であるといふ、人知れぬ誇にも多少同感が出來るのです。然しそれは只ほんの推察や同感に過ぎません。私は幼少の時から、極端に申せば正直病、若しくは開つ放し病とでも名づけたい程の性癖がございまして、其御婦人とはまるで正反對に、どれ程不利益な事が生ずる場合に際しても、一切の物事を開つ放しにしなければ、自分の行手に壁が突立つやうな脅迫觀念に襲はれるのであります。そして仕馴れて見れば此の吹曝しの開つ放しの方が結局無上の天下だと思つて居ります。

とは申すものゝそれは極大體の事で、實際の世渡りには、秘密の中にも開放があり、開放の中にも秘密があらうかと存じます。大きな秘密、小さな秘密、開放

のやうな秘密があり、秘密のやうな開放があらうかと思ひます。生涯を通じた開放を以て小さな〳〵秘密を護る場合もありませう……兎に角我々の階級の者に「秘密」に關する秘密を語れと仰しやる事は丁度それは、そのねべやを開放しろとでも仰しやる程度の、御無理な御注文ではございませんでせうか、呵々
御質問に對して一言。

○　竹内鶴

現實を超越した樣な心地に、呆然と御空の星に深い思ひを寄せて居た時、秘密と云ふ目に見え無い大きな手が、静と來て自分を撫でゝ静と又去つて行つた、是れに觸れた者が不幸なのか、觸れない者が幸なのかは深い深い疑問として、其時静と殘された人間世界の戀と云ふ謎の、切實な樂しみと其に供なふ永遠の苦痛とは、眞實に其立場に成つて味はつた當局者自身でなければ、不可解なものなのである。

醒めたる戀逝きたる戀、お前は既う永遠に私の處へは歸つて來ない、もう此後は何樣事が有らうとも再びお前には逢はれない、又逢はふとも思はない、お前は眞實に美しいけれど夢の樣で、樂しいけれど水の上の泡の樣だ、只餘こるのは深い深い矢疵の惱と長い痛恨の聲ばかりである。

永い間私の前に現はれたお前は、其時々に依つて色々に粉裝が違つて居た、父母に逝かれ兄を失ひ姉を失つた孤兒の樣な憐な姿の時もあつたし、又白銀の弓の光目映く七絃の琴の音に魂も逝くばかりの輝に滿ちたアポローの神の姿を偲ばせる折も、櫻翳して青海波を舞ひつゝ切實な歌詠まむが爲に戀したと云ふ、藤原時代の貴公子を思はせる姿の時も、矢叫び劍飛び交ふ生活の戰場に惡戰苦闘の勇士が、向ふ疵に血塗血染の姿となつて猶余勇を鼓舞しつゝ、優しき手の優しき慰めを待つ如き姿の折も有つたのだ。

何の姿も何の姿も私を魅するのには十分であつた、孤兒の樣な姿の時には自分の身を振り返へつて見る遑もない程の、同情心と義俠心とに驅られて、凍えた手を握り萎びた心を暖い胸に沿みさせて、勞る思ひに浸つて居たし、七絃の琴の音色に自分の情調の琴線を共鳴させ、又白銀の弓の目映き光に只々渇仰の思ひを凝らした末に、日廻りの花と姿を換へた乙女の銀弓公子に對する樣な戀も、又魂逝く思ひ出の一つとは成つて居る。

戀の美しき憧憬は未だ中々に盡き樣とはしない、美しき若人の氣高き額に黒髮を波打たせ、豊なる頬に若き血潮を漲らしながら、水干の袖を飜へす度に背に翳した櫻の花の優しき袖風に煽られて、物云ひたげに翩々と思ふ人と共に舞ふかと見ゆる懐しき戀も、亦樂しき夢の忍び草ではある。

クレオパトラに於けるアントニーは何樣に可愛ゆい男で有つたのだらふ、口説さへ云ひ得なかつた卒直な男は、只驀直に女王の心の燒點を捕へ得たのであつた。戀に於ける勝利者は對者の心の的の只眞中を、キコピットの征矢に射貫したなら、後は如何でも好い問題なのでは有るまいか、クレオパトラが埃及の國産を傾けての享樂的生活も、最終の地中海上の海戰に女王の船の後のみを追ひて、總てを廢却し盡した末に彼の華かな生活から脱れ出て、死と云ふ大きな壁に行き詰まつて始めて解決さした、と同じ肉を爛し骨を刻み込む樣な戀もした。

嗚呼、秘密の影から生れ出た可憐しい戀よ、お前の姿は眞實に忘れられない、お前の美しいに醉ひ優さしい腕に抱擁かれて、甘い甘い密の樣な囁に小さな魂を戰かした昨日迄を、忘れ樣として何うして忘れられるものか、私は永遠に戀の讃美者で有り度く、憧憬者で居たいが決して既う當局者には成り度ないと思つて居る。

夏のナイルの河中に船を浮べても猶燒くが如き埃及の炎熱の苦しみに、自然を咀ひつゝ悶えて居たクレオパトラの足の裏を、靜と撫でゝ通つた彼女の手に有る鳥の羽根の感觸にも似通つた、自烈つ度樣な瞬間の樂しい氣分こそ、永遠の命を刻む毒汁にも等しい痛苦の生ずる源なので有るまいか。

○

若山喜志子

私共人間の日常生活裡に於て、秘密といふものの程不可思議な惑溺の力を經驗させるものはなくまたそれでゐながら、昨日の秘密が必ずしも今日の秘密ではないといふのも面白いではないか。

私は思ふ、秘密といふ一劃の世界は、最も詩的な幻影界ではないだらうかと、して、その力のかげにかくれて作爲されたところの藝術品などには、よく人を感動させるに足る立派なものが生み出されると云ふ。

若し「神秘」といふ大形な言葉がゆるされるならば、私たちの經驗し、また經驗するところの秘密にもさう

した有難い言葉を以つて會得させたいと思ふ。

子供の時分に、やつとこさのおもひで手に入れた砂糖壺の中から二さじ三さじの砂糖を盜んで弟妹どもに口止めをした事に始まつたその種の秘密は、年を追ふに隨つて數が增して來てゐるけれど、幼少のころからあまり不自由といふものを知らずに成長して來たためか、心に陰影を投げるといふほどの秘密そのものに遭過したことがないのをあきたらずも思ふ、尤もさうした事に遇ふのが人間の幸福か不幸福かは知らないけれど、聖言にも『惡に抗する勿れ』といふのがある。

秘密といふものを飽くまで嚴守し得るといふは、余程意志の堅固な人でなくてはできないことだらうと思ふ、一度それが破綻するといふ憂き目を見ることを思ふと實際戰慄するものを。

けれど、前に述べたやうに、不思議な世界はその述密が有つてゐる。實に苦しい寂しい惑溺の中に浸つてゐながらも、どこか擽たいやうな一種の遊戲的氣分が漲つてゐる、それは、ただにこの秘密のみがゆるされて有つ特權ではなからうか。

しかしまた思ふ、今假に、玆に一人の純潔な處女といふ名のもとに生活してゐる女子があるとする、その人は實は、すでに處女ではなく、しかも子供まで人しれず生むでゐる人でありながら、それを一切秘密にして立派な處女であるといふ名のもとに生きてゐなければならないとしたら、その人の心の生活は果してどんなものであらうか？

實際恐ろしいことだ！生命がけの仕事だ、さうして種の秘密を最後まで嚴守し終せる自信を有つて生きてゆくとしたら、その人は非常に强い人と私は云いたい。

「こんなことはまア貴女だからお話しますが決して他言して下さるな、ネ、いいですか、」と念を押されて、耳にするその人の秘密なるものの滑稽さ加減と云つたら、それこそどこか身體が擽つたい樣である、すでにそれらは秘密といふものの世界から一歩逃れて來てゐる、眞實、深刻な秘密は嚴かな力だ、力そのものだとしみじみ思ふ。

普通の秘密は、時間と共に消滅する、でなければ暴露に依つて消滅する、彼の魂をむしばみ、生命を損傷するまで迫つて止まない執拗な秘密の惡腹よ、神秘なその力よ！惑溺の世界よ！

中央公論[秘密と開放號]創作

（藝術的新探偵小説）

■二人の藝術家の話……谷崎潤一郎

■指紋……佐藤春夫

■開化の殺人……芥川龍之介

■刑事の家……里見弴

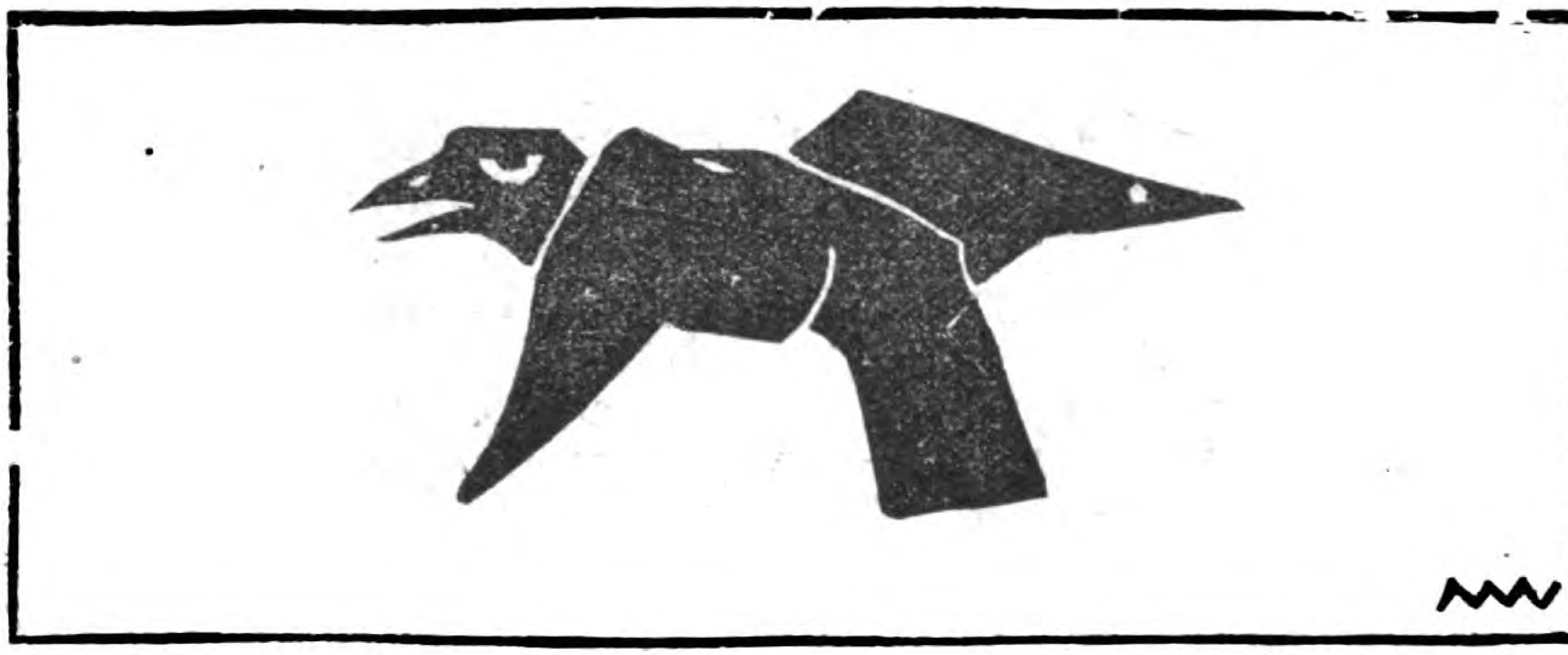
（秘密を取扱へる戯曲と小説）

■肉店……中村吉藏

■別筵……久米正雄

■Nの水死……田山花袋

■叔母さん……正宗白鳥



二人の藝術家の話

谷崎潤一郎

此の小說は、もと「金と銀」と云ふ標題で、「黑潮」の五六月號へ連載する積りで居たところ不幸同誌が六月から廢刊になつたので、今回中央公論へ全部一と纏めにして載せる事にした此のうちの最初の三十ペエヂばかり、卽ち第二章までは、一旦黑潮の五月號で發表したものではあるが、その後多少手を入れた箇所もあるし、且は讀者の便宜の爲めに、重複を厭はずもう一遍此處に掲載する。全篇の四分の一ほどの部分であるから、前に讀んだ事のある人も成るべくなら最初から讀み直して貰ひたい。(作者しるす)

第一章

動坂の終點まで行く筈であつた青野は、根津の停留場へ來ると、なぜか慌てゝ車掌臺の方から電車を飛び降りてしまつた。その時ちやうど彼と擦れ違ひに運轉手臺の方から乘り込んだらしい一人の男があつた。さつぱりしたボオラルのインバネスを着て、白つぽい鳥打帽子を被つて居るその後影が、車内の吊り革にぶら下つて居るのを、青野は往來から遠く見送つてほつと胸を撫でおろした。

「たしかに今村に違ひない。好い鹽梅だつた。もう少しでふん掴まるところだつた。」

彼はほんたうに虎口を脱したやうな氣がした。去年の夏假裝會をやるのだと云つて、今村の外套と薩摩上布とを借り出した上、其の晩すぐに質に入れて姿を晦ましてしまつてから、青野は今村に掴まりさへすれば、必ず擲りつけられるものと覺悟して居た。電車の中だらうが大道のまん中だらうが、見附け次第赤恥を掻かせてやると、揚言して居る今村の噂も彼は内々聞き込んで居た。新聞には度び度び惡名を曝され、友人からは擯斥されて、恥を恥とも思はなくなつて居る青野でも、擲られる事だけはさすがに恐ろしかつたのである。

だが、あれから一年立つた今日、今村はもうあの夏外套の事などは忘れてしまつたかの如く、また新しいインバネスを拵へて得々として着て歩いて居る。その樣子が、いかにも金に不自由のない、物を盗まれても平氣な境遇に居る事を證據立てゝ居るやうなので、青野はいくらか安心もすれば羨ましくも感ぜられた。あんな立派な外套を纏つて居たら、己に會つてもまさか擲る譯には行かないだらう、などゝも思つた。去年の外套は質屋で五圓にしか取らなかつたが、今年の奴なら十圓は大丈夫だらうといふやうなさもしい考さへ、胸に浮べずには居られなかつた。

「いや、今村は己に氣が付かなかつた筈はない。己が急いで前の方から降りようとした時、彼奴はちらりと己の顏に横眼を使つて、わざと反對の方角から乘つたやうだつた。事に依つたら、もう今村は己なんかを相手にしない積りなのか知ら?」

さうだとすると、擲られるよりは餘計辱屈であるやうな氣がして、青野はひとりでに顏が赤くなるの

を覺えた。戶外を步く度每に始終こんな心配をするくらゐなら、いつそ早く取つ摑まつて、一遍に擲られてしまつた方が、却つてせいせいするだらうとも考へられた。

「なんだ馬鹿々々しい！逃げるには及ばなかつたぢやないか。擲りたければ擲らしてやりやあよかつたんだ。」

彼は路傍の人に聞えるほどの高い聲でかう獨語を云つた。自分と云ふ人間が、まるで他人のやうに賤しく、醜く、滑稽に見えて仕方がなかつた。自分が今村の地位に在つて、自分のやうな男を友達に持ち往來のまん中で打んなぐつてやつたら、さぞ痛快を極めるだらうと、つまらない想像に耽つたりした。

實際、青野のやうに自分で自分の惡い性分を充分に知り拔いて、散々愛憎を盡かして居ながらも、その性分を遂に改めることが出來ず、生涯それに引き摺られて生きて行かなければならない人間は、かうして自分を嘲けることが、たつた一つの自分を許す逃げ道であつた。さうしなければ彼は到底自分の體の置場がなかつた。彼は自分でも、自分のやうな卑しい人間と一緒に步くのが溜らなく厭であつた。折々は自分の惡い性分を自分の外へ放り出して、嘆いたり、憐れんだり、おかしがつたりしてやりたかつた。そんな風にすれば、せめて一時は自分の品性が高まるやうに感ぜられた。

「世の中の凡べての者が今村と同じく自分を捨てゝしまつたら、自分は果して安穩に生きて行けるだらうか、それでなくても喰ふに困つて居るのに、さうなつたら自分はどうする了見だらうか。」――

「さうなつたら」どころではない、もう大分さうなつて來て居るのである。少くともたつた一人の親友の大川を除いてしまつたら、現在の青野を救つてくれさうな篤志家は一人も居ない。舊友と云ふ舊友は

みんな今村の味方になつて、彼の横つ面に拳骨の一つや二つを喰らはせかねない連中ばかりである。まだしもふん縛られて警察へ突き出されないのが、仕合はせなくらゐである。此の場合、もしあの大川にまでも捨てられるやうな事があつたら、さうして其れでもまだ生きようとするなら、否でも應でも盗賊になるか乞食になるより外はなからう。……

根津の通りを田端の方へぼんやりと歩いて行く青野の頭には、こんな考へが際限もなく組んづ解れつした。彼は時々、はつと我に復つた如く立ち止まつて、初夏の往來を眺め廻した。きれいに晴れ渡つた朝の青空や、新綠の上野の森や、鮮かな日光を受けて目の醒めるやうに明るく照つて居る屋根や地面や、そんな景色が彼には特別に美しく見えた。かうして此處に佇んだまゝ、いつまでも此の景色に見入つて居られたら、どんなに幸福だか知れないとも思つた。ふと、五六年前、彼がまだ今日のやうに落ちぶれない時分、フランスから歸朝する際に暫く足をとゞめて居た中央印度のガンヂス河の流域の風光が、蜃氣樓の如く彼の眼の前に浮かんだ。ベナレスや、ラホールや、アムリツアルの町々の夢の、都のやうな不思議な色彩、寶石の結晶したやうな殿堂や寺院の建築、其處に住んで居る市民や行者の、お伽噺の人間じみた奇妙な服裝、——それ等の物が朧ろげになつた記憶の底から、嘗て目擊した實在の世界とも、彼自身の空想の產物とも分らない程自由に精細に、燦然と彼の瞳を射るのであつた。今もあの大陸のあの地方へ行けば、此の六月の青空の下に、あれ等の光景がまざまざと展開して居ると云ふ事實が、青野には何だか本當とは信ぜられなかつた。あの素晴らしい、まるで刺繡の繪のやうな國土へ足を踏み入れた時代の彼と、こんなにまでお羽打ち枯らして根津の通りを辿つて居る彼との間には、何處をどう捜し

ても全く何等の連絡もないのであつた。

彼は仰向きに首を反らせて、遠い故郷を慕ふやうな眼つきで、つくづくと空の色を視つめてから、またすた〳〵と歩き出した。大川の家へ行つて、牛肉か洋食か、何か知ら脂つこい、滋養分を含んで居さうな食物に有りつく積りで、わざと晝飯を喰はずに出て來たせゐか、いつの間にか非常な空腹を覺えて居た。大川に會つたら先づ第一に、「あゝ腹が減つた。」と云ふやうな鹽梅式に酒々落々と切り出してやらう。すると大川が「よし」と云つて早速ロースを一斤か、或ひは一斤半ぐらゐ註文する。水こんろの鐵鍋の上で、どろどろのセピア色に煮つまつた肉の塊を、暖かい飯と一緒に舌へ載せながら、はつはつと馬のやうな息を吹き吹き、口の中がくちや〳〵になるほど嚙みしめたらどんなにうまいだらう、さうして、氣が重くなるほど胃袋へ一杯に物が詰まつて、下腹がむつくりとゴム鞠のやうに膨れて來たら。どんなに生きがひのある心地がするだらう。……さう想つて見るだけでも、青野の鼻先には、芳ばしい牛鍋の匂がぷーんと襲つて來るのであつた。彼は一層足を早めながら、動坂を右へ曲つて、閑靜な郊外の町へ這入つて行つた。

其の邊には、一體にかなめの生垣を繞らした、氣樂さうな、小綺麗な住宅が竝んで居た。茶の湯の宗匠でも住まひさうな、庵室めいた風雅な普請だの、市内の豪商の別邸でゞもありさうな、廣々とした庭を圍んだ、奥床しい板塀の構へなどが、ところ〳〵に入り交つて、油のやうに光つて居る綠樹の新芽と其の鮮かさを爭ふやうに、新築の木の香を漂はせて居た。さう云ふ家々の一つ一つが孰れも牛鍋の匂と等しく、青野の慾望を刺戟せずには置かなかつた。自分も一度は、こんなのんびりした家の内に暮らし

て見たい。かう云ふ邸宅の主となつて、少しの屈托もない、餘裕のある生活を營んで見たい。此處に住んで居る紳士たちは、みんな今村の着て居たやうな夏外套を持つて居るだらう。牛肉なんぞは厭になるほど喰ひ飽きて居るだらう。中には又、淑女畫報に出て來るやうな、花やかなハイカラな妻君を持つて居る奴も居るだらう。無論相當の資産があつて、身の周りの小遣ひにも月に百圓や二百圓は水のやうに流すのだらう。靑野が此れから訪ねて行かうとする大川も、たしかに幸福な彼等の中の一人である。いや大川ばかりか、靑野と同期に美術學校を卒業した同窓の中には、大川に劣らない境遇に出世したものが既に二三人は居るのである。靑野にしたつて、順當に行きさへすれば、決してそれだけの地位を得られない筈はなかつた。卒業當時の評判から云へば、誰を措いても彼が眞先に立身しさうな形勢であつた。その形勢に狂ひを生じさせた罪は云ふまでもなく、靑野自身にある。みんな自分の心がけが惡いのである。我ながら呆れ返るほど淺ましい、社會の公人として立つて行くべき資格のない、忌まはしい天性の背德病のお蔭である。

　田端の山の上の、大川の邸の煉瓦塀が眼に這入ると、靑野は急に恐ろしい所へ來たやうな氣がして、一歩々々に足が竦み慟悸が昂まつた。いかに大川が自分に對して常に寛大で、親切であるとは云へ、自分は今、どの面下げて彼の門を叩くことが出來るだらう。それも單純な訪問だけならばまだしもであるが、例に依つて金の無心に行くのである。何の面目あつて、どんな顏つきをして、それを云ひ出すことが出來るだらう。冗談らしく笑つて賴むのには、あんまり今迄に彼を欺し過ぎて居る。さうかと云つて泣いて拜むほどしらじらしい人間にもなり切れない。ゆふべの手紙で、ほゞ大川は承知して居るやうな

ものを、それでも機嫌よく貸してくれるやうな事は、默つて居ても先方から札の束を投げ出してくれるやうな事は、萬が一にもありさうではない。なんぼお人好しの、お坊つちやんの大川でも、きつと不愉快を隱し得ないで、一應は出し澁るやうな態度を示すだらう。その不愉快を突き破つて、無理にも金を借りて來るのは、相手が大川であるだけに、餘計靑野は心に濟まなかつた。今村の外套を盜むよりも、もつと罪の深い、殘酷な惡事であるとしか思はれなかつた。

「雄辯は銀、沈默は金と云ふ諺がある。それをもぢつて能才は銀、天才は金と云つたところで、誰が異議を唱へるだらう。少くとも藝術家としての素質に於いて、君と僕とは金と銀との相違がある。銀があつて始めて金の貴さが分るやうに、僕には君のえらさがよく分つて居る。僕は飽く迄も君を尊敬する。……」

嘗て靑野にかう云ふ手紙を寄せた大川は、未だに其の時の氣持ちを失はずに居るのである。靑野の人格のゼロである事が立證せられた今日でも、依然として大川は彼の藝術的天分を畏敬して居る。靑野のえらさは自分でなければ分らないと云ふやうな、一種の誇さへも抱いて居る。去年の秋の展覽會に出品された靑野の大作が、故意か偶然か、あらゆる藝術家や鑑賞家に依つて默殺されてしまつた際にも、大川だけは「寧ろ嫉妬を感ずる。」と云つたくらゐに、心の底から傾倒して、賞讃の言葉を惜しまなかつた。審査員を始めとして、凡べての先輩や友人が、彼の平素の背德を憎むの餘り、あれだけの作物に一言の批評も、一片の同情も與へてくれなかつた時に、かう云つてくれた虛心坦懷な大川の氣象が、靑野には淚の出るほど有難かつた。腸まで腐つてしまつた自分の根性に比較して、大川の品性の純潔さが、それ

こそ「嫉妬を感ずる」くらゐに氣高く見えた。大川だけは自分を捨てないで居てくれる。自分もせめて此れからは、彼に捨てられるやうな不義理な眞似をしまいと、靑野は固く胸に誓つた。にも拘らず、その後彼は大川に對してどれだけ義理を守つたらう、義理を守つたどころか、却つて相手の好意に附け込んで、有りつたけの破廉恥な行爲を重ねたではないか。二三日で返すからと云つて、内地ではめつたに買ふことの出來ない中世紀の印度の宗敎畫や、文藝復興期の名畫の複製を借りて來て、有耶無耶の間に五十圓で古本屋へ賣り拂つたり、それを大川に發見されて頭を搔いてゴマカシたり、さう云ふ惡事はあれから既に幾度となく繰り返して居る。もしも外套を盜んだゞけで、今村に擲られる理由があるとすれば、彼は大川からいつ何時絕交狀を送られても、文句の云へないハメになつて居る。まして大川は、美術學校時代の彼の舊友のうちで、技術から云つても傾向から云つても、將來彼と角逐し競爭すべき唯一の對抗者であつて、彼の零落を心ひそかに祈つて居る隨一人であらねばならなかつた。靑野と同じロマンティテックの世界に憧れ、同じ境地に美の幻影を求めて居るらしい大川が、人一倍靑野の天分を嫉視したり、その逆境に痛快を感じたりするのは、極めて自然な事であつた。彼に對して、表面は誰よりも親切を裝ひ、寛大に振る舞つて居る大川の胸中に、蔽ふべからざる嫉妬の情の燃え狂つて居ることは、他人は知らず、靑野にはハッキリと看取することが出來た。大川が自分を過度に庇護してくれるのは、自分に對して溫情のある結果ではなく、その嫉妬を自ら欺かんが爲めであるとさへ、邪推し得る場合もあつた。我が儘な性質の一面に、恐ろしく神經過敏な道德を持つて居る彼は、なまじひに嫉妬に惱まされて居る爲めに、猶更相手の貧窮を救はずには居られなくなつて居るらしかつた。卑怯であるとは氣が付

いて居ながら、青野は仕様ことなしに其の弱點に斬り込んで、かけられるだけの迷惑をかけた。勿論大川を困らせるのが主眼ではなく、金を借りるのが目的ではあつたけれど、少くとも或る意味に於いて自分が强者となり得る相手を、そのパトロンに見出したことは、擦れつ枯らしの彼に取つて、全然愉快でないことはなかつた。彼は自分の意地の惡い性分を呪ひながらも、大川に濟まない濟まないと思ひながらも、やゝともすれば得意の情を色に現したり、口吻に洩らしたりした。それが大川には又たまらなく不愉快なやうであつた。自分の弱點をさらけ出すと共に、相手の弱點をも發き出して、その上金を捲き上げて行く青野のやり方を、彼はどれ程憎んだか知れなかつた。落魄した舊友を惠んで、高潔な義俠的精神を發揮したやうに己惚れて居た彼は、いつの間にか自分が哀れむべき僞善者であつて、相手に試されて居る事を發見したのである。外の人になら氣持よく依頼に應ずる場合でも、相手が青野である時に限つて、友情だの誠意だのと云ふものが、お互ひの胸に微塵も湧き上つて來ない。思ひやりの深い、德義に厚い人間であつた筈の自分は、その實他人の才能を嫉妬する偏狹な男で、相手が其れに附け込んで居る光景が、其處にまざまざと曝露される。さうなつても彼はやつぱり、曝露されたまゝに任せて、青野を見限つてしまふ氣になれなかつた。それほど大川は負け惜しみの强い、同時に正直な性分でもあつた。青野に對する嫉妬の情がたとへ一分でも存する間は、自分の藝術が青野を追ひ越さない內は、青野を捨てる譯には行かないと、堅く決心して居るやうであつた。さうして其の決心が堅ければ堅いだけ、反對に嫉妬の火の手はますます盛んに燃え上るらしかつた。青野が社會から葬られて、生活難に喘ぎながら天井裏のやうな二階で描いて居る近頃の製作を見る度每に、めきめきと新境地を開拓して行く豊かな天

分に脅やかされて、彼はいよいよ青野を自分の强敵であると悟らずには居られなかつた。あんなに落ち振れ切つて居ても、いつかは再び世間に認められて、自分の聲價を凌ぐやうになるであらう。たとへ其れが自分と青野との死後に生ずる出來事であつても、妬ましさに變りのある筈はない。かう云ふ考へが、絕えず大川の頭に巢を喰つて居る樣子は、靑野にありありと讀めるのであつた。大川の抱いて居る嫉妬は、眞の藝術家が必ず感じなければならない、貴い、尊敬に値ひする嫉妬である事は、彼も充分に知つて居た。それだのに彼はむごくも其の感情を利用して、飽く迄も大川に厄介をかけようとするのである。自分の惡德に比べれば、大川の僞善の方がどれ程いたましく、どれ程殊勝であるか分らないと云ふ氣がむらむらと起つて來るにつれて、靑野はかうして大川の家を訪ねて行く自分の體が恨めしかつた。

「さうだ、せめて今日だけは快く牛肉の御馳走になつて、金の話なんぞしないで歸るとしよう。ゆふべの手紙の用件はやめにしたと云つて安心させてやらう。よしんば食ふに困つて日乾しになつても、大川にあんな思ひをさせるよりは增しかも知れない。……」

彼は一旦くゞりかけた門の前を通り過ぎて、その邊を二三度往つたり來たりした。かう云ふ折にいつでも襲はれる一種の胸騷ぎの底から、忘れかゝつて居た空腹の感覺が、再び激しく胃袋をきゆうきゆうと絞るやうであつた。牛肉を喰はせて貰ふことが、金を惠まれるのと同じ程度に、目下の彼には緊急な用件となつて居た。

第二章

書生に導かれて大川の書齋のドーアを明けた時、青野は金の問題を斷念することに腹をきめて、輕々とした心持ちで室內へ足を運んだ。

「あゝ君々、ゆふべの用件はもう濟んでしまつたから今はたゞぶらりと遊びに來たんだ。何しろ恐ろしく腹が減つてるんだから、牛肉を奢づてくれたまへ。此の頃の僕は豆腐と味噌汁で命を繫いで居るんだぜ。」

大川が出て來たら、早速かう云つてからからと笑つて見せる積りで、內々その言葉をくちずさんで居た彼は、三十分ばかり其處に獨りで待たされて居た。暫くの間彼は室の中央の紫檀の机に頰杖をついて高臺の緣に臨んで居る東向きの窓の彼方の、海のやうにひらけた郊外の田圃を眺めて居た。正午に近い太陽を一面に浴びて居る平原の、ところどころに點在して居る森だの人家だのが、眞白な窓掛けのレース越しに、遠くの方でピカピカと光つて居る。こつでりとペンキ塗りにしたやうな藍色の空へ、何處からともなく午砲の音が放たれると、見る見るうちに遙かな野末へ反響が瀰漫して、小いさな、どんが地平線の四方八方から、ゴム鞠を彈ませるやうに微かに無數にとゞろいて居る。と、千住や三河島邊の工場の汽笛が、俄かに伏兵の起つた如く聲を揃へて嘯き始めた。

「たゞ今先生は仕事をやりかけて居らつしやいますので、失禮でございますが御飯を召し上りながら、もう少々お待ち下さいますやうに。」

やがて書生が這入つて來て、かう云ひながら机の上に食事の用意を整へるのを、青野は面をふくらせながら見守つて居た。あんなに戀ひ憧れて居た牛肉のあてが外れて、其處に並べられたものは錦手の大

きな丼と、細根大根に赤生姜をあしらつた漬物の小皿とに過ぎなかつたのである。天どんとも、五もくとも、鰻飯とも想像される其の入れ物を、彼は恨めしさうに横眼で睨んで、せめて鰻であつてくれゝばいゝなどゝ思つたりした。が、さう思つたのは僅かの間で、書生が居なくなつてから丼の傍へ寄つて見ると、蓋を明けるまでもなく、下から紙屑のやうにはみ出して居るころもに依つて、中味の天どんである事が直ぐに分つた。

「ちよツ、天ぷらかア」

彼は覺えずこんな獨語を口走つた。何だか妙に涙の出るほど忌ま忌ましかつた。

「仕事をして居る」と云ふ書生の言葉から察すると、大川は朝から閉ぢ籠つて何か畫いて居るのだらう。秋の展覽會に出品すべき製作の準備にそろそろ取りかゝつて居ると云ふ噂が、二三日前の新聞にも出て居たやうであるから、或ひは手をつけ始めたのかも知れない。自分の仕事を人に見られるのが大嫌ひな大川は、青野に對しては、特に一層祕密主義を守つて、容易にアトリエへ這入らせなかつた程であるから、從來とても場合に依れば一時間や三十分は待たされる例があつた。けれども今日の青野には、かうして長く待たされるのが何となく尋常な事でないやうに感ぜられた。

「またづうづうしく金の無心にやつて來たんだね。實際君は始末に困る。もうとても僕の手には負へないから、今度だけは勘辨してくれ給へ。どうか成るべくなら待つて居るうちに考へ直して、僕に會はずに歸つてくれ給へ。」

と云ふやうな謎を遠廻しにかけられて居るのではあるまいかとも邪推された。青野の眼には、大川の

恐ろしく不機嫌な、昨夜の手紙を讀んだ時から其の問題を苦に病み續けて居る臆病な顔つきが、もうはつきりと見えるやうな心地がした。「今日こそはどうかして靑野の奴に愚弄されまい。金を貸してやらないでも己は常に彼奴から馬鹿にされた結果になつて居る。それを今度は何とかして巧みに切り拔ける方法はないか知らん。」と、頻りに頭を惱ましながら仕事もろくに手につかないで、徒らに胸糞を惡くしたり、業を煮やしたりして居る樣子を考へると、靑野は氣の毒でたまらなくもあり痛快なやうでもあつた。或る善良な、罪咎もない一人の人間が、自分のねぢくれた根性のために斯くまで不愉快を催して居る事實が、彼にはしみじみ、情なくつて、誰と云ふ相手もなしに腹が立つた。

「大川君、どうか許してくれ給へ、君も胸糞が惡いだらうが、僕だつて隨分胸糞が惡いんだ。」

と、彼は心の底で呟いて見た。不思議な事には、その胸糞の惡い氣分がだんだん强まるに從つて、金の無心を斷念しようと云ふ以前の深い覺悟は、いつの間にやらすつかり鈍つてしまつて居た。どうせこんなに胸糞が惡い以上は、やつぱり無心をした方がいゝのだと云ふ、奇妙な結論に彼は到達した。さうして程なく、

「やあ失敬、大變待たせたね。」

と云ひながら、强ひて平靜を裝ひつゝ書齋へ出て來た大川の姿に接した時、彼はたとへ狂言にもせよそんな覺悟を發表する勇氣を持たなかつた。無理に落ち着から落ち着からと努力して居た大川は、靑野と向き合つた一刹那に、到底我慢し切れないほど胸糞が惡かつたらしく、がつと苦い唾吐を呑んで、唇をにちやにちややらせて、多少獸が敵に面した時のやうな眼つきをした。此れ迄にもこんな場合には幾

分かさう云ふ表情を示しはしたが、今日のやうに昂奮した、險惡な相は見せたことがない。青野は殆んど、照れ隱しに笑ふ眞似さへ出來なかつた。金の話はやめよう。」などゝウッカリ云はうものなら、それが却つて不自然に聞えて、ますます相手を怒らせはしないかと危ぶまれるくらゐ、その顏は一途に緊張し切つて、名狀し難い不安と懊惱とを漲らせて居る。

「暫く御無沙汰しちまつて、何とも申し譯がない。……僕はかうしてのめのめと君に會ひに來られる義理ぢやないんだけれど、殊にゆふべの手紙のやうなお賴みをするなんて、そんな厚かましい事が出來る譯はないんだけれど、……」

青野はかう云ひ出すより仕方がなかつた。それが一番此の場の光景に對して自然であり適切であつた。彼の胸中に殘つて居た微かな痛快の心持ちは、こんな工合に語り續けて居るうちに何等の痕跡も留めず消え失せて、たゞ眞暗な、卑屈な、破廉恥な根性ばかりが、我ながら重苦しいほどの執拗さを以て、頭の中へ一杯に塞がつて來るのを覺えた。その重苦しさに堪へかねて、動悸が一時にどきどきと激しくなつた。今喰つたばかりの蝦の天ぷらの噯が、咽喉からムカムカと込み上げて來るのまでが、ますます彼の胸糞を惡くさせ、彼の氣分を自暴自棄に導いて行つた。

「今度と云ふ今度は、僕も少し考へた事があつて、もう一遍だけ、是非君に救つて貰はうと思つて、來にくいところを押して出て來たやうな譯なんだ。……」

大川は机の向う側に据わつて、人差指と中指との間に挾んだ兩切りの西洋煙草を、煙突の如く眞直ぐに立てゝ、その先から立ちのぼる線香の煙のやうな細い縷を、ぢつと一心に視詰めて居た。昂奮して居

る爲めに手先がぶるぶると戰いて、微かな顫へがシガレットの尖端の灰にまでも、——刻一刻と塔のやうに堆く積つて、あはや崩れさうになりつゝある灰にまでも傳はつて居る。

「……ねえ、どうだらう君、聽いて貰ふ譯には行かないだらうか。事情は昨日の手紙に書いた通りなんだが、……」

「そりやあ、此れ迄君の要求に對して一遍も斷つたことのない僕だから、特に今度に限つて、賴みを聽かないと云ふのも變なものだし、……」

と、大川は漸く口を切つた。

「だからまあ、聽いて上げない事もなからう。殊にゆふべの手紙で見ると、今度の金はいつもの金とは意味が違ふ。君を救ふためではなくつて、君の藝術を救ふ爲めに貸さなければならない金のやうだ。成る程あゝ云ふ風に云はれて見ると、僕にはたしかに斷りづらい。實際君はウマイところを狙つて來て居る。」

かう云つた時、始めて彼の唇の周圍にほんのりと笑ひが浮かんだ。尤も、眉をしかめるよりは更に相手を不愉快にする笑ひ方ではあるが。——青野はせん方なしに俯向いてしまつた。

「君も隨分僕に對しては、僕から金を絞り取る爲めには、いろいろの政略を弄して居る。目下の君は、繪を畫くための資本がないので、僕から金を借り倒すことを職業とし、且その職業に一生懸命になつた餘り、興味を感じて居るやうにさへ見える。ま、こんな事を云ふと君は怒るかも知れないが、今日は何も彼も正直に話してしまはうと思ふんだ。」

緒を繰り出すやうにぐづぐづとしやべつて居た彼の句調は、急に此處から活氣を帶びて、彼は半身を乘り出しながら、斷乎として相手の眼の中を覗き込んだ。

「今度の借金は君の藝術の爲めだと云ふ。それはまさか嘘ではあるまい。君がなんぼ嘘つきの破廉恥漢でも、君の唯一の誇るべき財産である藝術までもだしに使つて、僕を欺さうとするのではないだらう。一旦社會から放逐されてしまつた君が、もう一度世間へ花を咲かす爲めに、或はもつと高い目的で君の眞の藝術を永遠に此の世へ遺さんが爲めに、萬難を排して大作に取りかゝらうと云ふ。その企ては友人の僕として義理にも助けなければなるまい。その爲めに繪具を買つたり、部屋を借りたり、モデルを雇つたりするのだから、費用を都合してくれろと云ふ君の賴みを、若しも斷はつたりしたら僕はきつと卑怯な奴だと、少くも君には思はれるだらう。今度に限つて君の無心をはねつけたら、必ず僕が君の藝術を嫉妬して居る結果だと云ふやうに、見下されるだらう。」

「ふん、……何も僕は、さうまで君を邪推する必要はない。僕がいかに墮落し切つた、恩知らずの人間でも、君の此れ迄の親切に對しては、心から感謝して居るくらゐなのだから、……」

「いや君、先も云つた通り、今日は正直に話をしよう。君に正直を望むのは、てんで無理な註文かも知れないが、僕の言葉を誤魔化さずに聞き取るくらゐの、誠意だけは持つて貰はう。」

かさにかゝつて斯う浴びせかけた大川の眼玉は狂人のやうに血走つて、顏は眞靑になつて居る。靑野にはどうして彼が此れほど迄に憤激して居るのか、その理由が分らなかつた。

「君が僕の親切を心から感謝して居る？　そりや君にしたつて、全然感謝して居ないことはないだらう。

が、よもや僕を親切だとは思つて居なからう。僕も亦、近頃の自分が君に對して親切だとは、夢にも思つて居ないのだ。僕はたしかに君の推察通り、君の才能を嫉んで居る。嫉んで居ればこそ、その弱點を露はすのが嫌さに、かうして君の面倒を見て居る。たしかに其れに違ひないのだ。――けれども僕は最初から君に對して今のやうな嫉妬を感じては居なかつた。最初は僕も、外の友人に對すると同じやうに君に對しても親切だつた。純然たる好意から、暖かい友情から、君の窮境を氣の毒にも思ひ、出來るだけの援助も與へて居た。君の爲めに可なり亂暴な詐欺にかけられて、損害を受けた時でも、僕は君を哀れにこそ思へ腹を立てはしなかつた。君も知つての通り、僕は性來お坊つちやんで、お人好しで、氣の弱い人間だから、自分の行爲の善惡に對しては潔癖の方だけれども、他人には隨分寛大だつた。今でも君以外の人に對しては、かうまで狹量に腹を立てたり、癇癪を起したりする事はめつたにない。ところが僕は君と附き合ひ出してから、始めて僕自身の胸の奥にも卑しい根性の潛んで居る事を發見したのだ僕は自分で氣がつかない間に、いつかとらもなく君の態度に挑發されて、嫉妬の感情を意識するやうになつたのだ。「君の行爲は親切ではない。それは嫉妬と云ふものだ。」と、君は僕に敎へてくれた。明らかにさうは云はないまでも、何となくさう云ふ意味の口吻を洩らした。さうして君が君の墮落し切つた品性を、露骨に僕の前へさらけ出すに從つて、僕もだんだん其れに對抗して、君と一緒に醜く淺ましくなつて行つた。君に云はせれば、それは思ふ壺かも知れないが、僕には實に不愉快で溜らない。僕は深刻に君のペテンにかかつたやうな氣がしてならない。」

「ペテンと云ふのはあまりひどいよ。」

と、青野が云つた。

「成る程そりやあ僕の態度が君の疾妬を挑發するやうな結果になつたかも知れない。けれども僕が最初から其れを意識して、計劃を立てゝやつたやうに取らなくつてもいゝぢやないか。第一そんや眞似をして僕に何の利益があるのだい。君の世話になつて居る僕が、君に疾妬を起させれば却つて損になるぢやないか。」

果して大川が云つた通り、こんな場合に青野はウカウカと相手に釣り込まれて、正直になるやうな人間ではなかつた。自分が此の家を訪れたのは、金を借りるのが目的であつた事を、彼は何處までも忘れなかつた。正直に怒つて居る積りでも、自然と間に合はせの嘘が口をついて出た。

「つまらぬ議論なんかやめにして、早く貸すなら貸さないか。」——若し青野の腹の中を、正直に發表するとすれば、かう云ふより外にないであらう。

「君はまだ嘘をついて居るんだね。斷つて置くが僕は君に金を貸さないと云つて居やあしないんだよ。金が欲しければ貸してやる。貸してやるから嘘を云ふのは止し給へと云ふんだ。さ、安心の爲めに先へ渡して置いてやらう。」

豫め用意して置いたものか、大川は懐から二百圓の札の束を出して、スポンと机の上をハタいた。さうして犬に物を投げるやうに、其れを青野の胸先に置いた。

「さ、いゝだらう。かうすれば君に文句はないんだらう。僕は今日はいつもと違つて、ひどく癇癪が起つて居るんだから、少しは君も胸襟を開いて、正直になつてくれ給へ。僕は此の金を貸すんぢやあない。

此の金で君の正直を買ふんだ。」
「どうも、さう君のやうに腹を立てられちやあ實際弱るなあ、僕は嘘をつくまいとは思つて居るんだけれど、知らず識らず嘘をついてしまふんだよ。僕のはもう、嘘つきが曼性になつて居るんだから、此の病氣はどうしたつて直りつこはない。……」
こんな事をしやべつて居るうちに、突然、青野の胸には自己に對する反感と憎惡とが湧いて來た。何か、まづい物を喰ひ過ぎた時のやうな、重々しい、倦怠と悲痛とが半々に交つたやうな、遣る瀬のない氣分が體中に充ち亙つた。考へて見ると、自分にたつた一人の友人であつた大川さへも、もう今日では友人でなくなつて居る。彼はたゞ、彼自身の疾妬を蔽はんが爲めに、敵に糧を送りつゝある人間に過ぎない。此方に其れだけの不都合があるとは云へ、金を惠まれる代りには、自分は常に此の男から有らん限りの侮辱と輕蔑とを浴びせかけられる。親の口からも云はれないやうな、裁判官でも敢てしないやうな暴慢な、無禮な言語を自分は彼から甘んじて聞かされて居る。彼はいつの間に、自分に對してそんな權力を持つやうになつたのだらう。全體誰に許されて其の權力を行使して居るのだらう。――さうして彼は、自分に金を惠みながら、其れを友愛の結果だとは認めず、自分も彼を恩に着ようとはして居ない。どうして此のやうな苦しい關係に、二人は立たされてしまつたのだらう。同じ藝術の道に志して居ながら、二人はたゞ金の貸し借りの問題でのみ接觸し、いがみ合つて居る。自分も大川も、藝術上の問題に就いて、此れ程激しく此れ程昂奮して物を云ひ合つたことはない。金の事がなかつたら、二人はとうに絶交して居たに極まつて居る。――自分は其れでもいゝとして、大川を其處まで引き摺り込んだのは、

みんな自分の罪ではないか。自分が金の問題を斷念しさへすればいゝのぢやないか。自分はこんな嫌な氣持ちを味はつて迄も、やつぱり金が欲しいのかしら? 自分はなぜ、此處にある札の束を突返さうとしないのだらう。……

「でも何でも、己は此の金を借りるより外仕樣がないな。どうせ己は、此の世の中では背德漢に生れついたのだ。生きて居る間は散々惡い行ひをして、其の代り立派な藝術を後世へ遺しさへすればいゝのだ。それが己の運命なのだから已むを得ない。」

さう思ひながら、青野はホッと溜息を洩らして、恐る恐る札の束へ手をかけて、机の上からこそこそと膝の上へ持つて行つた。

「僕が君に正直にしろと云ふのは、何も善人になれと云ふ意味ではない。惡人なら惡人でいゝから、腹の中に包まずに打ち明けてくれろと云ふ事なんだ。僕も今迄は疾疚を隱して親切を裝つて居た、それをきれいに告白した以上、君の方でも、一體どう云ふ積りで僕に附き合つて居るのだか、態度を明瞭にして貰ひたい。君と僕との腐れ緣は、此の後とてもいつ迄續くか分らないのだから、金の問題が起る度毎に、かう云ふ不愉快な思ひをするのではやり切れない。だから今後は、惡人なら惡人、善人なら善人でお互ひにもう少し徹底した態度を取つたら、少しは二人の關係が氣持ちのいゝ物になるだらうと思ふんだ。同じく金の貸し借りをするにしても、もつと圓滑に、もつと愉快に話が出來るだらうと思ふんだ。……ねえ君、さうぢやないか、僕は今日の機會に、君と其の相談をして置きたいのだ。」

「けれども君、僕が正直に腹の中を打ち明けたところで、決して圓滑になりやしないんだよ。」

青野は氣味の惡い苦笑ひをして、投げ出すやうに云つた。

「正直に腹の中を打ち明けて、お互ひに愉快を感ずるのは、善人同士の交際だけだよ。僕の腹の中は、まるで醱酵した五味溜のやうなもので、掻き廻すば掻き廻せほど餘計惡臭を放すに過ぎない。その惡臭には僕自身でさへ堪へきれないくらゐなんだから、君のやうな善人にはとても鼻持ちがならないもんぢやない。僕のやうに腹の底の汚い男が、どうして藝術家として生れて來たんだか、自分でも其れを不思議にして居るくらゐなんだ。僕の不正直は性質でもあるが、一つは他人に其の惡臭を嗅がせない爲めの禮儀でもあるんだ。……」

「いや、どんなに臭くつてもいゝ、臭さがハッキリと分つて居れば、僕の方にも其れを豫防する方法はあるが、なまじ隱されて居る爲めに、いつの間にか此方にも傳染するやうになつてしまふ。——たとへば君の腹の中は、僕の疾妬を利用して、僕から金を借りようと企らんで居るのだとする。たゞ其の爲めに僕と附き合つて居るのだとする。君の態度がさうと極まれば、僕の方でも此れからは疾妬を露骨に現はして、君と接觸する事が出來る。尤も僕はかう云つたところで、嫉妬の爲めに君を見殺しにするやうな、卑屈な眞似は斷じてしない。僕はむしろ、君に利用されるのを快しとして、君のさもしい根性を憐れみながら、懐の許す限りはいくらでも利用されてやらう。さうして正々堂々と、作物の上で君の藝術に競爭しよう。君は利用する、僕は利用される。たゞ其れだけの關係で二人は交際する。君と僕とは友人でも何でもなく、金の問題で結びつけられて居るに止まる。さう極まりさへすれば、テキパキとして氣持ちがいゝ。僕は僕の良心の滿足を購ふ爲めに金を出すので、友人としての義務からではない。さう

覺悟して居れば、いくら君に欺されたつて腹の立つ譯はないのだ。……ねえ君、それで差支へはないだらう。」

「どうも僕としては心苦しいが、……しかと心苦しいなんて事を、眞顔で云へる人間ではないのだからそれぢや仰せに從つて君を當分利用させて貰はう。」

「よろしい、利用し給へ。」

大川は腕を組んで、體に反りを打たせて、ことさらに豪快な調子で云つたが、血色は一層靑ざめて居た。

「……それでもう話は濟んだ。君も金を受け取つたら、別に用はないだらう。今日は此れで歸つてくれ給へ。僕はいそがしいんだから。」

「大變お邪魔をして濟まなかつた。それぢや歸ることにするが、……最後にもう一つ、僕の正直な腹の中を云はせてくれ給へ。」

「よし、聞かう」

と云ふ代りに、大川は默つて領いて、反噬するやうな瞳を輝やかしながら、煙草の灰を性急に灰皿へ叩き落した。

「僕は兎に角、——こんに事を改まつて云ふのはおかしいが、——兎に角君に感謝する。君の僕を助けてくれる動機が何であるにもせよ、僕は其のお蔭で藝術に專心になることが出來る。成らう事なら、僕は眞面目な人間に生れ變つて、友人として君と交際をしたいのだけれど、それが出來ないのは如何にも

苦しい。僕が苦しいことだけは、どうか君も推量してくれ給へ。さうして、此處に居る此の僕と云ふ人間、――卑しい、さもしい、意氣地のない人間は、ほんたうの僕ではなくつて、僕の藝術が眞實の僕だと云ふ事を認めてくれ給へ。」

話して居る間に、靑野は幾度か懷ろに入れた二百圓を、返してしまはうかと思つた。「何がそんなに苦しいのだ。苦しければ其の金を返したらいゝぢやないか。生れ變つて來る程の面倒を見ないでも、其の金を懷から吐き出してしまひさへすれば、眞面目な男になれるぢやないか。」と、彼の良心は彼を叱つたが、それでもどうしても、彼は其の金を放す心にはなれなかつた。

「そりや君だつて、苦しくない事はないだらうさ。實際僕も、君のやうな天分を持つて居る藝術家が、眞面目な人格者であつてくれたら、友達としてどんなに賴みになつたらうと、それを殘念に思つて居るけれど今更そんな事を云つたつて仕樣がない。君の五味溜のやうに腐つた腹の中に、一箇の寶石が交つて居ることは僕も認めて居る。認めて居ればこそ僕は嫉妬を感じて居るのだ。……」

かう云ひかけた時、大川は自分の眼にも、靑野の眼にも、淚が潤みかゝつて居るのを感じた。二人は申し合はせたやうに、あはてゝ顏を背けてしまつた。

「……しかし君が人間として生きて居る間は、どうしても僕は君を尊敬する氣にはなれない。君の天才は、君の死後でなければ認められないのだ。君が死んだら、恐らく僕ばかりでなく、多くの人が君を尊敬するやうになるだらう。」

ふと、大川の頭の中には、或る厭な事が連想された。自分も靑野も此の世から死んでしまつた後、靑

野の天才が普く認められると同時に、その天才を嫉妬し、敵視した、或る凡庸な、通俗な、一人の畫家として自分の名前が世に傳はつたらどうであらう。「大川と云ふまづい繪かきが居た。さうして其奴が、こんな下手な繪をかきながら、青野の天才と競爭する氣で、そりそり金なんどを惡んでやつて居たのださうだ。」と云ふやうな噂が千載に殘つて、凡庸作家の好い標本として嘲笑されたらどうであらう。

「生きて居る間は、君も藝術の事ばかり考へて居られないやうに、僕にしたつて名譽心もあれば功名心もある。だから僕は飽く迄も君を嫉妬する。僕より先に君が立派な製作を成し遂げれば、それを不快に感ぜずには居られない。そんな事がないやうにと、祈らずには居られない。經濟上の援助は與へるが、藝術の上ではお互ひに敵だと云ふ事を、僕はこゝで男らしく宣言して置く。どうか其れを覺えて居てくれたまへ。」

「有り難う、僕はその宣言に對してもお禮を云ふ。——僕は勿論、自分の藝術に關してシッカリした信念を持つて居る。けれども斯うまで世間から疎外され迫害されると、たまには自分の力を疑はずには居られなくなる。いくら自信のある製作を發表しても、一向世間が認めてくれないのは、必ずしも僕の背徳に對する反感からではなく、僕の藝術に其れだけの價値がないのか知らと、云ふやうな僻みも起る。その僻みや疑ひを除去してくれるのは君の嫉妬だ。君に嫉妬され敵視されて居る間は大丈夫だと、さう思つて僕はいつも自分を慰みもすれば勵ましもして居る。かう云ふと皮肉のやうに聞えるだらうけれど、決してその積りではないのだから、惡く取らないでくれ給へ。凡べての人が僕を振り捨てゝ顧みようとしないのに、僕だけが僕の天分を認めて居てくれる事は、僕に取つてどれ程の恩惠だか分らないの

だから。」

年中嘘ばかりついて居る青野は、たまに正直な告白をするのが、我ながら極まりが惡くて居たゝまらないやうであつた。彼は處女の如く頰を紅くした。

＊　＊　＊　＊　＊

「先生、今のお客樣は靑野さんでせう？」

榮子はアトリエの隅の長倚子に腰をかけて、半分脫ぎかけたスリッパを、白足袋を穿いた蝶のやうなきやしやな足の先で弄びながら、書齋から戾つて來る大川に言葉をかけた。十八九の、體中がぜんまいのやうにしなしなと撓ひさうな、非常に滑かな背恰好の女である。相應に丈も高く、肉附きも豐かであるが、若し試みに胴中を持つて抱き上げでもしたら、水底から掬ひ上げられた藻草のやうな鹽梅に、べつたり濡れて垂れ下るかと思はれるほど、その手足はなまめかしく柔かに見える。鏝で縮らせたらしい髮の毛の二つに分れた裾が、面長の兩頰に鬖々と波を打つて、その房々した波間から、流れに咽ぶ嚴のやうに露はれて居る耳朶には、日本の女に珍しい土耳古石の靑い耳環が、殿堂の檐を飾る風鐸の如くちらちらと搖いて居る。

「どうなすつたの、何か靑野さんと喧嘩でもなすつたの？大さう顏色がお惡いやうぢやありませんか。ねえ、ねえ先生つてば！」

彼女の元氣な、甲高い聲は、森閑とした眞晝のアトリエの四壁に谺して、二つにも三つにも聞えた

やうであつた。それでも大川はまだむつつりと鬱ぎ込んで、返辭もせずに室内を往つたり來たりして居る。彼女は、デスクの上に置いてある印度製の煙草の箱の、白檀の木の蓋をカタンカタンとはしたなく鳴らしながら、中から卷煙草を取つて、唇でスッパスパッ音を立てつゝ吸ひ始めた。さうしてぢつと不思議さうに、大川の歩き廻るのを眼で追ひかけて居た。

大川がさうやつて居たのは五分ぐらゐの間であつたらう。——彼の運動を追つて居る弟子の眼は「アラおかしいな。」といふやうに無邪氣に見開かれて居たが、だんだん陰險な暗い表情を浮かべて來て、遂には容貌全體がまるきり以前とは別人のやうに幽鬱に變つて行つた。尤も其れは、大川の氣分がたゞ何となく彼女に傳染しただけであつて、外に深い原因があるのではなく、弟子が眞面目になる時は、いつもかう云ふ狡猾らしい、薄氣味の惡い、慘憺たる人相になるのである。彼女が洋畫のモデルとして絶好の代物である所以は、その無盡藏な嬌態を具備する體の曲線にも依るけれど、花やかなうちに一種の毒と憂ひとを含んだ、明るいやうで複雜な陰影に富む目鼻立ちにも依る事が多い。どうかすると其の輪廓は恐ろしく多角形に見えながら、而も寶石のやうに屈曲した光を反射して、ぎらぎらとした美しさが全體に漲つたりする。一つ一つに檢査すれば缺點だらけの顏であるのに、其れが彼女の獨特の美を標準にすれば、動かすべからざる完全な物のやうにも感ぜられ、遂には其の靑黑い、擦硝子に似た冷めたさを持つた、奇妙に澄んだ皮膚の色までが、ぢつと見詰めて居ると、何か異常に艶々しい、濃い繪具から受けるやうな刺戟を放つて迫つて來る。彼女は自分でも其れをよく知つて居るせゐか、平生お白粉と云ふものをつけたことがなく、ばさばさとした生地のまゝなのを誇りとして居る。さうして、家庭が貧しい

爲めもあらうが、例の自慢の耳環の外には體の何處にも装飾を施さず、服裝なども寧ろ薄汚いくらゐ古びた垢染みた物を着込んで居る。——

「ねえ、先生、靑野さんが又無心に來たのぢやなくて?」

彼女はいつの間にかソォファに行儀わるく臥ころんで、天井に煙草の輪を吹いて居た。

「そんな事はどうだつていゝ。今日は少し此れから出かけなけりやならない所があるんだから、遊んで居ないで歸つてくれ給へ。」

大川は立ち止まつて、突慳貪な句調で云つた。——「此の女も靑野によく似て居る。靑野に天才があるやうに此の女にも美しい肉體がある。さうして品性の下劣さにかけては、兩方ともいゝ勝負だ。」——さう思ひながら、彼はじろじろと彼女の姿を眺めて居る。

「あたしね、歸らうと思つたんだけれど、少し先生に話があるから待つて居たの。」

「何だい、また金の事かい?」

「さうぢやないわよ。靑野さんのことだわよ。靑野さんが、此の間手紙をよこして、又此の頃に製作を始めるから是非もう一遍モデルになつてくれろといふの。」

「それで君はどうしたんだ。」

「無論すぐに返辭を出して斷つちまつたわ。」

「なぜだ、なぜ斷つたんだ。行つてやるがいゝぢやないか。」

かう云つた時、大川の眉間のあたりが急にどす黑くなつて、瞳は物に怯えたやうな光を湛へたが、忽

に又早足で漫歩し出たので、女は其れに氣がつかなかつた。
「だつて此の頃、あの人は貧乏して困つて居るんでせう。さうして方々のお友達を欺して歩るいて、手が付けられない人間になつたつて云ふぢやありませんか。」
「青野がそんな人間に墮落したのは、君にも罪があるんぢやないか。」
「そりや、青野さんが惡いんだわ。あたしはどうせ前から墮落して居る人間なんだから、そんな女に係り合はなければいゝのに、深入りをしたのか惡いんだわ。わたしの方では、お金にさへなればどんな事でもするんですから。」
「だから今度だつて、お金になるんだから行つてやるがいゝぢやないか。」
「なるかどうだか分りやしなわ。そんなに貧乏して居るのに。」
「いや大丈夫だ。今度は金を持つて居る。」
「え？　それぢや先生は青野さんに貸しておやりになつたんですね。ちよいと。今いくらぐらゐ持つて居るでせう。」
甘い汁が吸へると云はんばかりに、榮子は飛びつくやうな調子で云つた。
「それを敎へたら、青野は君に一文も殘らず浚はれて行つてしまふんだらう。兎に角僕が保證するから行つてやるがいゝ。僕の方へは毎日午前中だけでいゝのだから、午後になれば君の體は遊んで居るのぢやないか。靑野はきつと君をモデルに使つて、今度の大作を仕上げようと云ふのだらう。」
「靑野さんの繪なんぞ、今ぢや誰も相手にしやしないから、モデルに賴まれたつて何だか張り合ひがあ

りやしない。」

彼女の言葉は大川の耳へ這入らなかつたやうであつた。彼は其れ程深く思案に耽けりながら、充血した眼を自分の爪先に注いで、腕を組んでやゝ前のめりに、ばたりばたりとまだ部屋の中を歩いて居た。

——いよいよ己はほんたうに青野と競爭しなければならない。己のやうな善良な人間が、どうして青野のやうな道德上の不具者と、藝術の上で同じ傾向を辿らなければならなくなつたのだらう。己の頭と彼奴の頭とに、同じ夢の世界が存在し、同じ美の幻影が浮ぶのはどう云ふ譯だらう。たとへば此處に居る此の女子にしたつてさうだ。此の女が〇〇座のオペラ部の下葉の女優として、舞臺で踊つて居た時分に、いち早くも眼につけたのは己だつた。いや少くとも己の積りで居た。すると青野もいつの間にか此の女に眼をつけて居て、早速己に先鞭をつけてモデルに賴んでしまつた。不思議なことには、己と青野より外に、此の墮落した、無恥な、厚顔な、氣違ひじみた馬鹿な女の持つて居る奇怪な美しさを認めた者が一人もない。さうして、もうあの頃から四五年も過ぎた今になつて、やつと今度は己が此奴を搜して、モデルに雇つたかと思ふと、又青野の奴が狙つて居る。己が此の際彼奴の邪魔をして、此の女を獨占するのに雜作はないが、己は何處までもそんな卑劣な行動は取らない。もうかうなつたら己は飽く迄彼奴に對抗して、此の女の肉體の中から、孰方がほんたうの美を摑み出すか、孰方が力ある藝術を作り出すか、執念深く競爭してやらう。さうだ、さうしてやらう。——

「ねい君、僕が靑野に代つて賴む。是非靑野の所へ行つてやれ。君が行かないと僕が困る。」

大川は俯向いて居た首を擡げて、決然たる語氣で云つた。

「青野が金を拂はなかつたら、僕があとで拂つてやる。」
「えゝいゝわ。さうして下されば行きませう。」
「だが、僕が君をモデルにして居る事を、青野はまだ知らないのだらうな。」
「えゝ知りますまいとも。」
さう云ったまゝ、彼女は大川の見幕にあつけに取られて、ぽかんと口を開いて居た。
「よし、そんなら其れを絕對に青野に知らせないでくれ給へ。いゝかい、きつと賴んだぜ。少し譯があるのだから。」
かう繰り返して念を押しつゝ、彼は呪はしい眼つきで女の顏を睨みつめた。

第三章

青野は今、はつきりと、現實よりもはつきりと、その幻を自分の眼の前に視詰めて居た。——何處の國の、何處の都とも分らないが、兎に角そこは殷賑な、莊嚴な市街の中央でなければならない。その市街が殷賑であると云ふことは、部屋の右手に引き絞られた、金線銀線が瀧のやうに流れ落ちて居る錦繡の帷の向うの、露台の彼方に霞んで居る遠景を望めば直ちに頷かれる。其處には、人間の住む地球からは曾て見ることの出來ないやうな、さながら深山の湖にも似た穩かやな瑠璃色の空が、一抹の、金色の鱗雲を微かに浮べて居る下に、此の都の町々が渺茫と連なつて居るのである。何と云ふ神々しい、何と云ふ豪華な町の景色であらう、青野はさう思つて、うつとりと瞳を凝らさずには居られなかつ

た。

まことに其の市街の立派さと清淨さとは、その上を蔽うて居る青空の永劫の美しさにも劣らないほどである。青野の眼には遠景のところどころに聳えて居る殿堂の圓い屋根や、突兀たる尖塔や、澎湃として波濤のやうに打ち續く大理石の Colonnade や石階までも、手に取るやうにありありと感ぜられる。さうして其れ等の町々の壁や甍が、今しも和やかな夕日を受けて、靜かに冷やかに、螺鈿のやうに青白く輝いて居るさまは、死に瀕して居る貴い女王の頰の色を想ひ出させるほど、崇高に森嚴に見える。

が、青野の視線は又、それ等の透き徹るやうな明るさを持つ遠景を後ろに控へた、うす暗い前景の部屋の中に、寧ろより多く頻繁に熱心に注がれる。幽鬱な、洞穴の中のやうな重苦しい空氣を湛へて居る室内は、暗くはあるが其れはこんもりとした六月の綠蔭のやうな、或ひは眞黑な天鵝絨のやうな、不思議に滑かな、深い深い底光りを含んだ玲瓏とした暗さである。いや其の暗さは、まるで人間の瞳のやうだと云つた方が、却つて適切であるかも知れない。闇を漂はせて居る室内の物象が、ちやうど美しい女のぱつちりと瞬つた涼しい眸の裡にある、黑眼の表面に映つて居る世界のやうに、微妙な鮮やかさを持つて歷々と迫つて居る。たとへば床の上に敷かれた波斯風の毛氈にもせよ、部屋の左手に直立して居る圓柱の、乳白色の石に刻まれた bas-relief の蛇の裝飾にもせよ、青貝を鏤めた卓の上の、靑銅の水盤に咲きこぼれてる睡蓮の花にもせよ、その下に銀色の尾をひろげて漫歩して居る一羽の白孔雀にもせよ、それ等の物が、黑目がちの瞳の中に紅い影や白い影のゆらめく如くちらついて居るのが、青野には明瞭に看取される。どうかすると、部屋の正面の寢台の側に据ゑてある七寶の香爐から、葡萄の蔓の細模樣

を施した帳を這ひつゝ舞ひ昇る淡い煙の匂までも、ほのぼのと彼の嗅覺を襲つて來て、――それはアラビヤの沒薬であらうか、印度の肉桂であらうか、或ひはまたスミルナの薔薇の精でもあらうか、――芳ばしい古酒を湛へた杯のやうに、青野の魂を物狂はしい陶醉の境へ導かずには措かないのである。

そのなまめかしい怪しい薫香が、やさしい戀のさゝやきの如く彼の鼻先を擽ると同時に、青野はふと“Bien loin d'ici”と云ふボオドレエルの詩の文句を想ひ浮べながら、部屋の中央の寢台のあたりに長い長い凝視を向けた。天井に吊るされてある、水晶、眞珠、瑪瑙の瓔珞の珠に包まれた天蓋から、法衣を纏うた背の高い魔女の立ち姿のやうに、下へ行くほど段々に巨大な襞をひろげつゝどつしりと垂れて居る暗緑色の繻珍の帷が、一層その周圍を暗くして居る寢台の奧には、ものうげに四肢を投げ出した一人の女が、仰向きに臥しまろんで居るのである。もし此の室内全體を人間の瞳にたとへるとすれば、朦朧とした帳の蔭に五體をうねらせて居る其の女の、身邊から放たれる夢のやうな耀映こそは、――藻をくゞる海蛇の閃めきのやうな、黒髪の束に埋るゝ寶石のやうな、果敢なくも眩い光彩こそは、まさしく中心の瞳孔でなければならない。此の部屋の四壁を飾つて居る彫刻も刺繍も螺鈿も睡蓮も、白孔雀の銀の翼も、露台の向うにはるばると展開して居る都の町々も、たゞ此の女の神秘なる媚態を讃美する爲めに現れた虹に過ぎないかのやうである。

「あゝ、彼女はとうとう此處に居たのか。」

青野は何となく、さう思はずには居られなかつた。古い有り難い御厨子の中の黄金佛を拜むやうに、眼を細くして睫毛の先をふるはせながら、ぢつと彼女を見守つて居る彼の視神經は、彼女の肉體が恰も龕

壁の奧にまたゝく火影の如き物體から成り立つて居て、皮膚の面にサフイア色の光の綾を微動させて居るのを感じた。それ等の光は、螢の化身かと疑はれる迄に數箇のエメラルドを嵌め込んだ彼女の頭髮からも、美しい腫物のやうに彼女の手頸に吹き出て居る紅玉の腕環からも、彼女の胸に結ぼれて居る、大理石の階に置く夜露のやうなダイヤモンドの頸飾りからも、彼女の兩の踝に龍の蹄の如くかゞやいて居る金環からも、さうして最後に、纖細な彼女の胴と腰との周りに絡まつて居る、狹霧のやうに薄い、銀河のやうに淡い輕羅からも、一面にぎらぎらと放射して、月の暈輪に似た明るさを投げて居るのである。が、それよりも猶不思議なのは、それ等の無數の裝飾の下に生きて蠢めいて居る彼女の肉と肌とである。其處には「肉」と呼び「肌」と呼ばれる人間的な賤しさを超越した、幽靈じみた悽じさと妖精じみた艶かしさとの織り交つた、燐の炎のやうな冷たい美しさが燃えて居るらしい。……

しかし、蓐の上に力なく横はつて居る彼女の手足には、やるせない倦怠の情が溢れ、その眸には飽くことを知らぬ淫蕩の慾が漲り、その唇には意地の惡い嘲笑が匂つて居るやうにも見える。やゝともすれば、夕闇にしぼむ白百合の花にも似た、やさしい、馨しい溜息さへも、香の煙を搖がせつゝ彼女の胸から吐き出されるのが、靑野の耳に聞えて來るやうな氣持ちがする。

――その幻を、靑野はいつ迄もいつ迄も視詰めた。彼はもう、モデル臺の上に横臥して居る榮子の裸體を先から一心に眺めつゝある自分の身をも忘れて居た。彼の魂は、遠く深く、榮子の肉體を通り拔けてその奧にひろがつて居る漂渺とした空想の世界に分け入つて居るのであつた。カンヷスの上に動いて行く彼の繪筆は、榮子を描いて居るのではなく、たゞ眼の前に浮かび出た幻の姿を寫して行くのみで

ある。

自分が今、書いて居る此の女は、いつの世の何處の都に住んで居た誰であらう。どうして彼女は、かうまであり〳〵と、かうまで屢々自分の魂を訪れるのであらう。——さう思つた時、青野の空想は急に破れて、彼は夢からさめたやうにはつとして我に復つた。——榮子が不意に、むく〳〵と足をもがいて起き上らうとしたからである。

「おい、どうしたんだ、もう少し辛抱してくれないか。」

青野は哀願するやうな調子で云つた。

「あゝあ」

と、殊更大儀さうな欠をして、焦れつたさうに首を揺す振りながら、榮子は不承無精にもとの姿勢に歸つたが、その眼は猛獸が餌を漁る如く、何故かぢいつと陰鬱に青野の態度を窺つて居る。

「此れだ、此の顏なんだ。此の顏が彼女の幻を己の心に送るのだ。」

青野は今更のやうに斯う嘆息して、再び榮子の表情の中に惹き入れられて行つた。……

大川から惠まれた金の一部で、六月の末に引き移つた此の家の書室は、先に住んで居た天井裏にくらべれば遙かに増しではあるけれど、たゞ徒らに廣いばかりで、勿論書室と名づけられるほどの設備も裝飾もあるのではない。目白の停車場に近い郊外の、田圃と雜木林との間に建てられた一軒家で、がらんとした物置きのやうな書室の外には玄關も居間も臺所もない其の家屋は、以前、小石川に住んで居たBと云ふ彫刻家が、毎日其處へ通ふ爲めに拵へた、ほつ立て小屋も同樣な仕事場に過ぎないのである。去

年の暮れにBが洋行に出かけて以來、貸家の札を貼られたまゝ借り手もなくて久しく荒れ果てゝ居たのを、青野は大川を保證人に立てゝ漸くBの家族から借り受ける事が出來た。それはちやうど今から二箇月ばかり前で、以來青野は此の一室に朝夕を送つて居る。――その生活がいかに亂雜で、いかに不潔であるかと云ふ事は、邊の樣子を一と目見たなら、誰にも推量が出來るであらうほどに、部屋の中は夥しく取り散らされて、場末の古道具屋の店先のやうに、埃まびれの襤褸じみた家具が、敷物もない床板の上に處嫌はず放り出されて居る。何年となくこびり着いた垢が黑光りに光つて、ところどころの破れ目から綿だの藁だのが飛び出して居る緞子帳りの、その癖樣式だけは馬鹿に立派な、フリンヂの附いた古い肱掛倚子。ワニスが剝げて、板が割れて反り返つて、一本の脚がぐらぐらになつて居る圓テエブル。その上に載せられた、此れも同じく樣式だけは複雜な、三人の女神の群像が手に蠟燭を高く捧げた、いづれ昔は何處かの公使館の夜會の席にでも輝いたものであらうが、今では電燈の設備のない此の畫室に夜な夜なラムプの代用を務めて居る燭臺。Bが通つて居た頃の置き土産らしい、鳥の糞のやうに粘土が點々と附着した洗面臺と瀨戶引きの水瓶、土壜、缺け茶碗、喰ひ荒らしたトマトやサラダや飯粒の殘つて居る二三枚の西洋皿、淺草邊のむさくるしい洋食屋から盜んで來たやうな曲木の腰かけ。もうそれだけでも穴分吐き溜めのやうであるのに、一方の隅には前住者が此の家を引き拂ふ時に取り外したストーブの、煙突の殘骸らしい煤だらけな太いトタンの管が、材木の如く二三本倚せかけてある傍に、裏表へデッサンを書き撒らした大版の紙が、ちやうど煙突と同じやうに圓く卷かれて立てゝあつて、その橫には又、現住者が夜の寢具に使ふかと見えるいろいろの物品、――牛海苔のやうにつくねてある古

蚊帳や、その蚊帳の色とあまり違はないほど汚れ切つた、風呂敷のやうに薄つぺらで皺くちやな掛け布團や、頭の形が黒くまざまざと凹んで居る、タオルでくるんだ括り枕や、それ等の物が大掃除の跡の路上の如く堆くなつて居る。もし此の部屋に何等か裝飾の役目を勤めて居る品があるとすれば、それは片側の棚の上の、チーズやツオセエヂの罐詰と一緒に並べてあるペパアミントとブランデーとの壜であらう。仕事のあひまに、どうかすると一杯二杯を傾けたがる酒好きの粂子の爲めに置いてあるので、まさか裝飾品のつもりではないだらうけれど、あまり周圍の色彩が貧しいせゐか、その二つのガラスの入れ物だけが、巨大なエメラルドとトパアズとのやうに、青く黄色くきらきらと吐き溜めの中に光つて居る。

けれども、此れ等の壜の外に、また此の部屋には一つの偉大な裝飾が、――粂子と云ふ素晴らしいものがあることを忘れてはならない。東側の壁に沿うて据ゑられた、夜になると主人の寢臺に應用されるラック塗りの柳の長椅子の上に、北側の窓の方を枕にして横はつて居る彼女の姿態は、青野が幻に見ると云ふ妖女の怪しい美しさにまで、ともすれば引き上げられて見えるのである。おまけに今日は先から多量の酒を呷つて居る爲めでもあらう、酔を發した全身の皮膚が礬沙引きの絹のやうに汗ばんだ色澤を帶びて、折々さも睡たげに、どんよりと濁つた眼を潰りかける其の容貌には、持ち前の憂鬱と邪惡と羸憊とが、一種の鬼氣をさへ含んで、蕩けるやうに流れて居る。若しあのペパアミントやブランデーの壜を青玉や黄玉にたとへるとすれば、彼女のさうした美しさを眠れる豹にたとへたとしても、恐らく誇張にはならないであらう。――少くとも青野だけは、誇張どころかまだまだ比喩が足りないくらゐに感じて居るに違ひなからう。

青野が毎日、榮子の肉體と、その奥に潛む幻とに凝視を集めつゝ、製作に耽り始めてから知らず識らず七十日の日子が過ぎて、季節は八月の半ばになつて居た。さうしておそくも今月の月末までに、その作品は完成される筈なのである。彼は時々、仕事の間にこんな事を考へずには居られなかつた。――たとへ自分は生れついての背德漢であるにもせよ、かうして創作に熱中して居る時の自分だけは、そんな卑しい人間でないことを、どうか世間の人に、それが駄目ならばせめて神樣に認めて貰ひたい。自分はいつも社會へ出ては惡い行ひやさもしい行ひをする。だが其れは決して自分の本當の願ひではない。自分には世間の善人どもに數等勝つたいゝ物がある。彼等の夢にも知らない、とても理解の出來ない、貴い高い境地がある。此の世の中の凡べての物にも換へ難いほどの價値を持つた、藝術の天地がある。自分には何だか、その天地こそ永遠の存在であつて、此の世の中は假の幻影であるやうな氣がしてならない。さうだとすれば、此の世の中で惡人と呼ばれながらも、藝術の國へ這入つて行く事の出來る己は、世間の奴等よりずつと幸福でずつと偉大ではないか。――それは今度に限つたことではなく、いつも製作に從事する時は、こんな考へが青野の胸に湧くのである。此の世の中では忌まはしい不具者として繼兒扱ひにされる代り、藝術と云ふ優しい母は一層彼を不憫がつて、その暖かい懷ろに彼を抱き上げ、彼を慰め、慈愛に溢れた接吻を與へてくれる。「お前は世間からどんなに排斥され、どんなに嘲弄されても、決して失望したり落膽したりしてはならない。お前の素質は私がよく知つて居る。さうして、外の人にはめつたに見せてやらない美しい國を、お前にだけは內證で見せて上げる。だからお前は自分の運命を呪つたり悲しんだりしないがいゝ。お前はほんたうに可愛い兒だ。」かう云つて勵ましてくれる彼女

の囁きが、何處からともなく靑野の心に傳はつて來る。その慰みと囁きとがあればこそ、自分は此の不愉快な、矛盾だらけ苦惱だらけな世の中に、自殺もしないで生きて行かれるのだと、云ふやうな心地もする。詐欺、橫領、馱法螺、おべつか、夜逃げ、蹈み倒し、——さう云ふ惡事の數々を列で捺したやうに繰り返しつゝ、あらゆる人間から輕蔑と嫌疑とに充ちた視線を向けられ、白晝の大道を公然と步くことが出來ないほどの、肩身の狹い情ない境遇に落ちてしまつた今日でも、此の一室に閉ぢ籠つて刷毛を握つて居る時だけは、世間の奴等が一緖になつて手を叩いて嘲笑ふのを、あべこべに憫笑してやりたいやうな勇氣を感ずる。見つけ次第に自分を擲ると稱してムカツ腹を立てゝ居る今村の顏つきや、常に自分を破廉恥漢扱ひにして道德家ぶつて居る大川の樣子を想ひ出しても、そんなものはいつの間にか自分を壓迫する權威を失つて、遙かな下界の蟲けらのやうに小いさくなつて居る。

が、靑野は此の頃、さながら世界を征服した王者のやうな誇りと喜びとで張り切つた胸の奧に、不思議な不安と恐怖とが根を蔓らせて行くのを感じた。——ひよつとしたら、自分は此の繪を書き上げると同時に死ぬのではあるまいか。此の繪の爲めに、自分は最後の精力を消耗しつゝあるのではなからうか。自分は藝術の神に愛せられた餘り、此の世の人間が見てはならない貴い美しい國を見た。さうして其の國の秘密を人間の世に發かうとして居る。自分は其の爲めに神罰を蒙つて死ぬのではなからうか。——さう云ふ豫覺が、彼の仕事が段々完成期に近づくに隨つて、次第に强く深く彼の頭を支配し始めた。彼はまた、斯うも思つた。——事に依ると己は誰かに嫉妬されて殺されるのではないだらうか。自分の今度の製作が發表されたら、例に依つて多くの批評家からは默殺されるにしても、少くとも二三

の眞の藝術家は己の天分に恐れを抱き、嫉妬を感じはしないだらうか。己ばかりが美の女神から特別の愛撫と啓示とを受けて居るのを、彼等は默つて見て居る事が出來るだらうか。己の生きて居る事が、己の藝術のある事が、彼等の爲めに生存の脅威であるとしたら、彼等は己を殺したく思はないだらうか。萬一にもそんな場合があるとすると、己を殺しに來る者は、彼等のうちで最も己を敵視して居る大川でなければならない。……靑野はそれを突飛な推測であるとばかりは思はなかつた。あのお坊つちやんの好人物の、彼のパトロンである大川が、ひそかに彼を殺しに來ると云ふ想像を、一概に笑ふべき杞憂であるとは考へなかつた。どうかすると、それが餘りにハッキリと、必然起るべき事件の如く眼前に迫つて來て、彼は名狀しがたい昂奮と恐怖とに驅り立てられた。

「馬鹿な！　己は氣が違つたのぢやないか知らん。」

かう腹の底で自分を叱りながら、ふいと仕事を中止して、慌しく部屋の内を步き廻つたりする事があつた。

さう云ふさまざまな懊惱や、憂惧や、慢心や、歡喜の間から、日一日と彼の作品は仕上げられて行つた。嬉しい時も恐ろしい時も、靑野はすべて命がけであつた。こんなに恐ろしかつたり、こんなに嬉しかつたりするだけでも、靑野の壽命は續きさうもなかつた。彼はたゞ、仕事が完成しないうちに死にさへしなければいゝがと思つた。さうして、半日の勞作が濟んで、長い夏の日が暮れかゝると「いゝ鹽梅に、まあ今日も無事だつた。」と云ふやうにホッと溜息をつきながら、がつかりした體を肘掛倚子に凭れさせた。けれどもそれで、彼の一日の用事が全部終つた譯ではない。夜になつてから、彼にはもう一つ

の命がけの仕事が待つて居るのである。

最初に其れを唆かしたのは榮子であつた。榮子が自分を誘惑したのだと、靑野自身は考へて居る。多分彼女は始めから其れを目的にして、靑野のモデルになつたのであらう。自墮落で放埒で我が儘で手の着けられない彼女が、面倒臭いモデルの役なんぞを、一と通りの報酬で承知する譯はないのである。時には何處で聞き嚙つて來るものか、後期印象派がどうだのラファエル前派がどうだのと、生意氣に繪の批評などをするけれど、もとより藝術に理解や同情のある女でもない。四五年前に、半歳ばかり〇〇座のオペラの女優を勤めて居た關係から、今でも折々公園あたりの小芝居の舞台へ、踊り子に雇はれる事があるので、自分の姿が油繪になつて展覽會に出品されたら、少しは廣告になるだらうと云ふずるい了見もないではないが、靑野のやうな評判の惡い、不人氣な繪かきに畫かれても、さつぱり廣告の効能のないことは此の前モデルになつた時からよく分つて居る筈である。それよりも彼女は靑野を誘惑して金を絞り取るのが面白いのである。彼女は以前の經驗に依つて、自分の肉體が靑野に對して、どれ程强い魅力を有し、どれ程むごい暴威を振ひ得るかを知つて居る。彼女が知れる限りの男のうちで、靑野ほど彼女の肉體を崇拜し、憧憬して居る者はない。二三年前に、暫く二人で共同生活を營んで居た時分、榮子は殆んど靑野と云ふ人間が、自分の誘惑に對して無抵抗に征服されて行くのを見た。その頃の彼女は、旣に可なりの擦れつ枯らしではあつたけれど、まだ漸く十六七の少女に過ぎなかつたのに、洋行歸りの美術家だと云ふ三十近い髯ムシャの男を、まるでおもちやの人形の如く自在に取り扱ひ翻弄し得るのが我ながら愉快でたまらなかつた。彼女の前に出て來る靑野は、自分自身の意志と云ふものの全くない、

是非善惡の分別すらも失つた、彼女の爲めならば何處までゞも止めどなく墮落して行く痴呆であるとしか思はれなかつた。それでなくても犯罪性の傾向のある青野が、彼女の歡心を買はんが爲めに無理な工面をして次ぎから次ぎへと惡事を働いて行く樣子は、折紙つきの不良少女である榮子の眼にも恐ろしい程であつた。しまひには彼女の方が薄氣味惡くなつて、好い加減にして逃げ出さうと思ひながら、一年ばかりは一緒にずるずると引き擦られて行つた。いたづら好きな彼女の性質では、青野が何處までも墮落して行く面白さを、見物せずに居られないやうな氣がした。自分の誘惑が小氣味よく成功して、男がだんだん馬鹿になつて行く光景を目擊する事は、反對に彼女に對して一つの不思議な誘惑であつた。その誘惑に堪へ切れないで、彼女は殆んど、猫が鼠の屍骸を口に咬へて振り廻すやうに、それ程亂暴に慈悲も容赦もなく青野の心身を掻き捲つた。さうされるのが青野にはまた、息も絕え絕えに魂の消え入るほどの歡樂であるらしかつた。

「お前は己をつくづく馬鹿な人間だと思ふだらう。女に對して己のやうに馬鹿になる男を、お前は今迄に見たことがないだらう。――己のは此れは病なんだ。己のやうな、かう云ふ奇妙な性慾を持つて居る男を、西洋では Masochist と云ふんだ。」

と、彼は折々顏をしかめて極まり惡さうに辯解しつゝ、さてその次ぎの瞬間には、直ぐ其の馬鹿をさらけ出して見せた。社會の公人として立つて行く資格のない青野は、眞の戀愛をも味ふことの出來ない人間であつた。彼は友人との交際に於いて金錢以外の情誼を認めないやうに、男女の關係を肉慾以外に理解することが出來なかつた。その點で彼は彼女とよく一致した。

「彼奴は己を墮落させた積りで居るかも知れないが、その實己が彼奴を墮落させて居るのぢやないか。」

青野はさう思つたくらゐであつた。

一年足らずの同棲の間に、榮子が彼に拂はせた犧牲の額は、どれほどに達して居たゞらう。地位だの名譽だの、信用だのは、どうせ榮子との關係がなくても早晩失墜すべき運命に立つて居た青野であるから、そんなものは勘定に入れないとして、單に物品と金錢とだけでも、彼女が女優としての收入に幾倍して居たか分らない。その當時、同じ俳優仲間の青年を情人に持つて居た彼女は、無闇に金ばかりを欲しがつて居た。洋服だの指輪だの腕時計だのを買つて貰ふ傍から傍から、みんな何處かへ注ぎ込んでなくしてしまふらしかつた。さうして結局、倒さに振つてハタいても一文の錢もなくなるまで、執念深く青野を追究した揚句、情人と一緒にふいと姿を隱してしまつた。

青野は其のあとで、せいせいして好い氣持ちであつた。脂つこい物を喰ひ過ぎた爲めに胃腸を惡くしたやうな、がつかりした心地がするだけで、彼女との緣が切れたのを別段惜しくも悲しくも感じなかつた。さうかと云つて彼女の事をきれいに忘れた譯でもなく、その肉體が持つて居た魅力は、長く青野の腦裡を支配して、絕えずいろいろの空想を生んだ。多くのマゾヒストがさうであるやうに、彼も亦、現實の女性に飽き足らないで幻像を憙び慕ふ人間であつた。青野はむしろ、彼女が居なくなつてからほんたうによく彼女の美を眺める事が出來た。彼の幻の中に現れて來る榮子は、嘗て青野の眼の前に居た彼女のやうに卑しい所や淺ましい所や穢しい所が少しもなかつた。その時の彼女は「藝術」のやうに完全であつた。――自分の頭の中に住んで居る幻の彼女が眞實の榮子であつて、此の世に生きて居る彼女は、本

物の樂子を惡くした擬ひ物ではないだらうか。――そんな風にさへ彼は思つた。人間として生れて來た彼女は、無耻な、愚かな、慾張りな、貧しい娘に過ぎないけれど、空想の世界に輝いて居る彼女は、永遠の生命を持つた妖艶な「女性」の實體のやうに感ぜられた。いつか青野は、自分の憧れる美の對象を彼女の幻に見出して居た。――もしさう云つて惡ければ、彼女の幻が其の對象にぴつたりと當て嵌まつて居た。さうして、彼の腦裡で理想化された樂子の容貌、姿勢、輪廓が、燦然たる光明を放つて彼の瞳を射る毎に、青野は强い藝術的感激の湧き上るのを禁じ得なかつた。

彼女と別れてから一年立ち、二年立つに隨つて、その幻はいよいよ明かに青野の心に描き出された。彼女の姿を中心として、其處には次第に素晴らしい藝術の國が築き上げられ、美しい夢の都が領土をひろげて行つた。それは恰も、自然界の草木が春になるとひとりでに芽を吹き花を咲かせるやうなもので、青野自身でもどうする事も出來なかつた。彼はたゞ、自分の頭の中にも、自然界に劣らない、其れよりも遙かに優つた、かう云ふ美しい世界があると云ふ事を人々に示したかつた。自然界の眞實の外に、もう一つの秘れた眞實のある事を、彼の持つて居る技巧の力で此の世に傳へたい欲求に驅られた。――さうして今年の夏になつて、漸く大川の庇護の下に其の欲求を實現する機會を得たのである。

青野は其の繪に何と云ふ題を附けていゝか分らなかつた。其處に現れて居る風俗や建築や、幻の女や、それ等の持つて居る奇怪な美しさは、此の世の中に比類を求めることが出來ない。けれども若し、嘗て地球上に榮えた事のある國土のうちから、又その國土に住んで居た神や惡魔や人間のうちから、强ひて匹儔を求めるとしたら、其れは青野が常に憧れて居る印度古代の傳說の世界であつた。昔、釋迦牟尼佛

が祇園精舍に法輪を轉じつゝあつた摩掲陀の國、阿難尊者を邪淫の闇へ陷れた惡行に依つて、經文の中に其の名をとゞめて居る妖女マアタンギイの住んで居た國、――――その世界こそ、彼の幻に最も近いものであつた。數年前、歐羅巴から歸朝する際に其れ等の傳說の跡を訪れた靑野は、未だにあの地方の空の色や、廢墟や、森林や、外道の神祠や、市街の有樣を想ひ浮べる度每に、それが現代の中央印度の景色ではなくて、マアタンギイの生きて居る摩掲陀の國であるやうに感ぜられた。少くとも彼女と彼女の住む世界とは、彼の頭の中に花を咲かせ實を結んだ。不思議にも彼は、邪念と獸性との光に燃ゆる榮子の眸に想到する時、いつも彼女をマアタンギイに擬して居た。さう云ふ譯で、靑野は彼女をモデルにして書かうとする今度の繪の題を、「マアタンギイの閨」と呼んで見た。勿論構圖の中に現れて來るものは、全然彼の夢を以て織り成された空想の所產であつて、必ずしも印度古代の風俗や傳說に準據したのではないにもせよ、靑野は其の畫題に何等の不調和をも矛循をも見出さなかつた。靑野に取つては、マアタンギイの名と榮子の肉體とは、もはや傳說中のものでもなく實在の人間の姿でもなく、彼の胸臆の聖壇に祭られてある神の名であり肉體であつた。

しかし、靑野が今度の製作に關して其れ程眞劍になつて居るのを、それを榮子がどうして理解するだらう。彼女はたゞ自制力のない、彼女自身にも劣ったほどに道念の乏しい、弱者としての靑野を知つて居るばかりである。さうして弱者想應に取り扱つてやればいゝと思つて居るたけである。此の頃は大川と云ふ保護者に泣きついて、少しは金を持つて居るやうだし、モデルに賴まれたのを幸ひに、又ぞろ此の馬鹿な男を手玉に取つて、甘い汁を吸へるだけ吸つてやらう。彼奴が澁面をつくりながら、呪ひの言葉

吐きかけながら、時には足を踏まれた犬のやうにひいひいと泣き聲を發しながら、次第次第に此方の網に引つかゝつて、揚句の果ては女王の爪先に接吻する奴隷の如く打ちひしがれてしまふ樣子を、もう一遍見物してやらう。――さう思つて、面白半分と慾得づくとで、彼の畫室へ雇れたと云ふよりも侵入して來たのである。彼女の腹の中は青野にもよく分つて居た。が、分つて居たと云ふだけで、此の美しい侵入者――新しいマアタンギイの誘惑に打ち克つ術のない事も、始めから知れ切つて居た。

青野は自分の胸の中に、崇高な藝術上の欲求と、醜怪な性慾の衝動との相鬩ぐのを見た。此の二つの物の孰れか一つを捨てなければならないとすれば、――さうして、藝術に生きる者のみが眞に永遠の生命を得られるのだとすれば、――誰しも後者を捨てゝ前者に就きたいと願ふのが當然である。殊に青野は、多くの人に比べて遙かに意志の弱い人間であるだけ、此の世に生きて居ても害があつて益のない背德病者であるだけ、耻かしい情ない變態性慾の笞の下に惱まされ通して居るだけ、その願望は一層切實に一層熱烈であらねばならなかつた。けれども彼の願望が切實であり熱烈であればあるほど、二つの物がいよいよ激しく軋めき合つて、彼の苦痛と煩悶とを二重にも三重にもするやうな結果を來たすに過ぎなかつた。

「己はお前をモデルにする爲めに呼んだのぢやないか。そんな眞似はよしてくれ、もう勘忍してくれ。己は腦貧血を起して卒倒しさうだ。もう明日から繪を書くことが出來なくなりさうだ。」

かう云つて彼は彼女に手を合はせて頼むこともあつた。ところが彼の奇妙な性癖と心理作用とを飽く迄も呑み込んで居る榮子は、さう云ふ場合に彼を陷れる急所を、ちやんと心得て居た。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿、お馬鹿さん！　何を云ふんだい生意氣に！　お前はあたしの奴隷ぢやないか。何でもあたしの云ふなり放題になつて居ればいゝんだよ。」

と、腕白な子供のやうな惡體をつきながら、毒々しい眼と唇とに、「嫣然」と云ふ活字の形そのまゝのやうにぎらぎらした笑ひを堪へて、勝ち誇つた態度で上から壓迫してかゝれば、青野はむしろさうされる事を祈つて居たかの如く、直ぐに恍惚として前後を忘却してしまふのである。

「そら御覽、生意氣な事を云つたつてやつぱり此の通りぢやないか。意氣地なし！　意氣地なしやい！　あたしは何處までもお前を誘惑してやる。繪が畫けなくなつたつてそんな事は構やしない。それとも勘忍して貰ひたければお足をお出し。お足をおくれつたらよゥ！……」

かう云ふ風にして彼女は毎日青野から二圓三圓五圓ぐらゐづゝ卷き上げて行つた。仕事の最中でも厭になると勝手にモデル臺を降りて來て、酒を飮ませるか金を摑ませるかしなければ、容易に動かうともしなかつた。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿やい！」

何かの度にかう云つて嘲り笑ふ彼女の聲は、青野の耳にこびり着いてしまつて居る。彼は實際、自分を此の上もない馬鹿だと思つた。なぜ己はこんなにまで自制力がないんだらう。なぜ藝術に專念になれないだらう。栄子のやうな無知な女に、金錢の勘定と色慾の事より外何物も念頭にない卑しい娘に、かうまでの侮辱を受けて、何が面白いのだらう。己は肝腎な藝術の事を忘れてしまつたのか？　あの素晴らしい、何とも云へない莊嚴な藝術の事を考へて見ろ！　どうだ？　素晴らしいもんぢやないか、莊嚴

なもんぢやないか。お前はあんないゝ物を、淺ましい一時の欲情と取り換へッこして濟むと思ふのか？

——かう云つて、彼は腹の中で繰り返して見たが、結局すべての反省は徒勞に歸してしまふのであつた。彼が幻の中の桀子を憧憬し讃美すると同時に、現實の彼女と自分自身とを擯斥し憎惡せずには居られなかつた。

——どうして人間と云ふものは、こんなにいろいろの苦しみを受けたり、矛盾した感情を味はつたりしなければならないのだらう。……だが、どうも不完全な此の世に生れて來た以上は、人間だつて不完全なものにきまつて居るのだ。まして己なんかは、その中でも一番出來の惡い、不完全な代物なんだ。人間が自分の意志を理想通りに實行できるくらゐなら、最初から人間なんぞに生れて來やしないんだ。

——

しまひに彼はさう考へるやうになつた。もうどうしても逃れられない人間の宿命であるとあきらめて、せめてさう云ふ苦しみの中に生きがひのある自分を見出さうと努めた。夏もだんだん深くなつて、八月中旬の酷烈な暑熱が、ペンキ塗りの南京鄙（なんきんじたみ）の薄つぺらな板で圍つた畫室の四壁を、焙爐のやうに火照らせて居る中で、青野は折々襲つて來る眩暈の發作と鬪ひながら、晝は藝術に夜は惡魔に、かはるがはる其の魂と肉體とを捧げた。さうして毎晩、酒に醉ひしれた彼女が最終の郊外電車で歸つて行つてから、がつかりした重い手足を屍骸の如く蚊帳の中へ運んだ。何を考へる能力も根氣もなく空洞のやうに疲れ切つた彼の頭の底には、云ひやうのない悔恨の情と桀子に對する反感とが、ぼんやり澱んで居るだけであつた。

しかし明くる日の午後になつて、再び意氣揚々と彼の畫室へ這入つて來る彼女は、一夜のうちに毒々しさやあくどさを洗ひ落して、いつも獲り立ての魚のやうに潑溂とした新鮮さを持つて居た。その樣子を見ると、疲れて居た青野の頭はづきづきと痛み出して、前日の疲勞の結果が俄かに體の節々へ疼き出すのを覺えた。やゝともすると、彼は畫架に向つて衝ッ立つたまゝ、急に眼の前が晦くなつて何も見えなくなるやうな氣がした。

第四章

或る朝、突然、寐坊の彼がまだ蒲團の中にもぐつて居た午前十時頃、めつたに客が訪れた事のない青野のアトリエの扉を、こつこつと叩く者があつた。榮子が來たにしてはいつもより時刻が少し早過ぎる。誰だらう? 借金取りぢやないか知らん? さう思ひながら、到る所に債鬼を控へて居る青野は、寢た振りをしてぢつと樣子を窺つて居た。

「青野君、まだ寢て居るのか? 僕だ、大川だ。」

青野は其の聲を聞くや否や、慌てゝ蒲團を頭から被つて、まだ呼びつゞけて居る大川の聲を二三遍聞き流した。――今時分、何だつて大川がやつて來たんだらう、一遍も己の所へ訪ねて來たことのない男が、何の用事で出かけて來たんだらう。己の方から訪ねて行く用はあつても、向うから來る用なんぞはない筈である。もしかすると、大川は己の繪を見に來たのぢやないか知らん? 此の家には畫室より外の部屋のない事を知つて居て、何かの用件にかこつけて、製作の模樣を內々探りに來たのではあるまい

か？――

「青野君、ちよいと起きてくれ給へ。僕だよ、大川だよ、少し君に頼みたい事があつて來たんだ。」

青野は忌ま忌ましさうに寢臺から飛び降りて、どしんどしんと床板に足音を立てゝ、入り口の扉の孔に鍵をさし込んだ。

「まだ寢て居たんで錠がおりて居るんだ。今あけるから待つてくれ給へ。」

「いや、明けないでもいゝ。此處で話をしよう。」

と、大川は表に立つたまゝ、扉に口を寄せながら、

「……君、此の家はアトリエ一と間しかないんだらう。僕が此の戸の中へ這入れば、自然と君の製作を見るやうな事になりはしないか？」

かう云つた彼の言葉は、いつも青野に金を借す時のやうな、反抗的なイライラした調子ではなく、いかにも相手に誤解されるのを恐れるやうな、むしろ大川の柔和で小心な性質をよく露はした、思ひやりの深さうな優しい聲であつた。青野は自分の恩人に詰まらない嫌疑をかけたのを耻ぢないでは居られなかつた。

「まあいゝぢやないか、這入り給へな。まさか其處で立ち話をする譯にも行かないから。」

と、青野は氣の毒さうに云つた。すると相手はいよいよ極まりが惡いらしく、ひそひそと囁くやうに、

「だけど、這入る前に君に頼んで置きたいんだ。僕は君の繪を見ても差支へないだらうか。――實は別段用事がある譯ないぢやんだけれど、僕は今日、君の繪を見せて貰はうと思つてやつて來たんだ。……」

青野ははつと思つた。同時に、今迄やさしさうに聞えて居た大川の語氣が、何だか急に陰險な作り聲のやうに感ぜられた。扉の外に、昂奮した眼を光らせて息を彈ませて居る相手の顏がありありと見えた。――藝術の上では敵同士であると、つひ此の間立派に已に宣言して置きながら、あの剛情な、神經質な男が、節を屈してこんなことを云ひに來るなんて、敵に降參したも同然ぢやないか。そんなに己の畫く物が氣になるのか知ら？　そんなに己が恐ろしいのか知ら？　それにしても、自分のアトリエへは己を一歩も入れない癖に、なんぼ不斷から金の世話をして居るからつて、よくそんな勝手な事を頼みに來られたもんだ。いつそ斷つて歸してしまはうか知ら？――が、青野はふと、近々にまた五十圓ばかり借りに行かなければならない事を思ひ出した。いつぞや借りた二百圓の半分以上は榮子の爲めに誤魔化されたので、もう四五日も立てば、二進も三進も行かなくなるに極まつて居る。此の際大川の御機嫌を取つて置かないと、どんなところで讐を取られるか分らない。それよりは快く頼みを聽いてやつて、工合がよささうだつたら此の場で直ぐに切り出してやらう。

「見たければ見せてもいゝがね、僕もあんまり自分の仕事を見られるのが好きな方ぢやないんだよ。」

青野はわざと勿體をつけながら不承無情に扉を明けた。

入口の前の石段の左右には二三本のポプラアが植わつて、その蔭に紫陽花の花が咲いて居る、朝からそよとの風も吹かない、日中の暑熱が想ひやられるやうなかつきりと晴れた炎天から、鋭い光線が燃えるやうに赤土の地面へ直射する明るさの中に、大川は洒落としたリンネルの服に白靴を穿いて、コーヒーの樹のステッキを肩に擔ぎながら、兩手で扉へ凭れるやうにして立つて居た。何となく門口で救ひを

求める人々のやうな、例になくそどそどした哀れつぽい様子があつた。

「……そりやあさうだらうとも。僕だつて自分の畫室へは決して人を入れさせやしないからね。……」

かう云つて、彼はまだ鴫居際にもぢもぢしながら、色白の、品のいゝ瓜實顔をまともに青野の方へ向けた。熱さの爲めか耻かしさの爲めか上氣した頰が櫻色に帶びて、三十一二の歳ごろとは思へない、妙に坊つちやんじみた愛らしさが見える。

「……だから事に依つたら君に斷られるだらうと思つて居たんだ。どうせ君の繪が出來上れば見られるのだから、仕事の最中に邪魔に來なくつてもいゝ譯だけれど、僕は先達或る所で、ふと、氣がゝりな事を耳に挾んだのだ。と云ふのは、君と僕とが偶然同じ題材のものを畫いて居るらしい。而も同じモデルを使つて、……」

「同じモデル？　それぢや君は榮子を使つて居るのかい。」

青野は滿身に水を浴びたやうな氣がした。萬事に秘密主義を守つて居る大川が、モデルの名前を人に漏らさなかつたのに不思議はないとしても、それにしても彼は欺かれたやうな氣持を禁ずる事が出來なかつた。あの女がどんな事を大川にしやべつたゞらう。自分があの女に飜弄されて馬鹿を盡くした行爲の數々は、みんな知られてしまつたらうか。「繪をかく爲め」と稱して借りて來た金の使ひ途まで、すつかり曝露してしまつたゞらうか、もしあの女が、大川とモデル以上の關係を結んで居るのだとしたら、……いやたとへ關係はなくつても、自分の性慾の秘密を握られてしまつたとしたら、自分はもう、金の問題ばかりでなく、女の事に關しても全然大川に頭が上らない。それを考へると耻かしいやら腹立た

しいやらで穴へでも這入りたいやうな心持がする。

「その事について、誤解を防ぐために一應辯解をする必要があるが、……」

と、大川は度胸をきめたらしく、ポケットから悠々と銀の煙草入を出して、兩切りのスリー、キャッスルに火を點じて、地面へ捨てたマッチの棒の燃え上るのを視つめながら、落ち着いた、騒がない態度で云つた。未だに入口に直立して居る彼の細長い兩脚の、すつきりとした白のヅボンが日に照らされて、正しい折目の直線を境界に鮮明なる影日向を作つて居る。

「……僕は決して君の仕事の妨害をする爲めに、若しくは強ひて君と競爭をする爲めに、あの女を使つて居る譯ではない。實を云ふと、今度は君よりも僕の方が先にあの女を雇つたんだ。君が榮子の所へ頼みに行つたのは、僕よりも二週間ばかり後だつたんだ。」

「それを君はどうして知つて居る? 榮子が君にしやべつたんだらう。」

云ひながら青野は、包みきれない不安の色を隱さうとして、二三日湯へ這入らない汚れた手の先で、蓬々として雲脂だらけな髮毛をごりごりと掻いた。

「まあさうなんだ。……打ち明けた話をすると、榮子は君に頼まれた時、斷つてしまふと云つて居たんだ。けれども其れでは僕の氣持ちが濟まないしするから、是非承知をするやうに散々說きすゝめて、漸く君の所へ來させたのだ。かう云つても僕は君に恩を着せる積りではないが、少くとも僕に何等の疚しい點がない事だけは認めてくれるだらう。或ひは君は、そんならさうと何故知らせなかつたかと云ふかも知れない。しかし僕が自分の書く物の題材だのモデルだのに就いて、平生から絶對に秘密主義であ

る事は君だつても知つて居るだらう。だから今度にしたつて、弟子であるが爲めにモデルを秘して居た譯ではない。」

「そりやあさうだらう。其の點は僕にもよく分つて居る。君があの女に口添へをしてくれたのだとは知らなかつた。いろいろ有り難う。」

　かう云つて青野は、不愉快らしくふさぎ込んだ顏を伏せて、かすかなお辭儀をした。本氣で感謝して居るのだか皮肉を云つて居るのだか自分でもよく分らなかつた。

「それからまた、かう云ふ誤解もあるかも知れない。――僕があの女と關係して居るのではないかと云ふやうな、……」

　大川はちよいと言葉を途切らせて、相手の表情に反應の表れるのを見ようとした。が、青野はやつぱり俯向いたまゝ、何の手答へもなく默つて居る。

「もし少しでも、君にそんな疑をかけられて居るやうだつたら僕は飽く迄も辯解する必要がある。」

「いや、そんな辯解はしないでもいゝ。」

　今度は青野が赧い顏をして首を擡げた。

「……萬一君があの女と關係があるにしたつて、僕には其れを咎める權利はないのだから。」

　かう云つた彼は決して嫌味の積りではなかつた。勿論關係があるよりはないがいゝに極まつて居る。けれど、たとへあつたとしたところで、彼は別段それに嫉妬を感じるのではない。眞の戀愛を味はつたことのない彼は、戀愛から來る嫉妬の感情をも經驗したことはないのである。彼の恐るゝところは、自

分が道德上の不具者であるのみか、性慾の上でも一種の畸形兒であると云ふ大事な秘密が、外聞の惡い、此の上もなく不面目な忌まはしい秘密が、大川の手に握られはせぬかと云ふ心配だけである。

「けれども君に疑はれて居ると居ないとは、僕に取つては重大な問題なのだから、……」

と、大川が少し改まつた句調で云つた。

「……僕は此の間君に金を貸した時、藝術の上ではお互ひに敵同士だと思つてくれろと、君に宣告したゞらう。僕は飽く迄も君の天分を嫉視する。君の製作が成るべく失敗に終ることを祈るとさへ云つたらう。あの時のあの言葉の意味は、何處までも藝術の上での嫉妬であつて、決して卑屈な動機から出たものではないと云ふ事を、是非とも君に了解して貰はなければならない。僕が榮子と關係があつて、その爲めに君を嫉妬して居ながら、陋劣な感情を藝術に托して發表したやうに邪推される事を、僕は何よりも恐れるのだ。勿論モデルに賴んだくらゐだから、僕も榮子の美は認めて居る。君と一緒に始めて彼の女のダンスを見た時から、君と同時に僕は彼の女の肉體が持つて居る不思議な美しさは認めて居る。けれども幸か不幸か僕はあのやうな無智な女を戀ひする氣にはなれないのだ。或ひは君とあの女との過去の關係を知らなかつたら、今度のやうな場合に、玩具にして見ようと云ふくらゐな好奇心は起したかも知れないけれど、彼奴と一度でも關係したが最後、どんな引係り合ひになつてどんな目に會はされるか、どれほどの犧牲を拂はされるか、君の前例を見て居る僕にはよく分つて居る。あゝ云ふ札附きの不良少女に係り合ひをつけるほど、僕が大膽な人間でない事は、君も大凡そ察してくれるだらう。僕はたゞ、あの女の慾張りを利用して、普通のモデルの二倍も三倍もの金を拂つて、御機嫌を取りながら使つ

て居るだけの事なのだ。……ねえ君、君はよもや其の點について僕を疑つては居ないだらうね。」

「疑つては居ない。それに、先も云ふ通り疑つたところで仕樣がないのだから、……」

青野は煮え切らない口振りで云ひながら、にやにやと譯の分らない笑ひ方をした。――さうして、腹の奧で、まだ何か知ら別な事を氣にかけて居るらしい。

「仕樣がないのだからでは僕が困るんだ。僕の潔白を信じて貰ひたいのだ。」

「そりや信じて居る。……だが僕だつてあの女を戀ひして居ると云ふのではないんだ。僕は誰にも隱して居るんだけれど、……尤も君には、いつだかちよいと話した覺えがあるやうな氣がするけれど、生れつきマゾヒズムの傾向があるもんだから、それを彼の女が君にしやべりはしないかと思つて、それが何だか心配なんだよ。僕は隨分あの女と馬鹿な、下らない眞似をしたんだよ。僕は實際その點でも常識を外れて居るんだよ。道德上の不具者と云はれるより其の方が極まりが惡いくらゐなんだから、若しも君があの女から聞いた事があつたとしても、どうか僕に聞かないと云つて安心させてくれ給へ。さうして榮子の話はもう止めにしてくれ給へ。」

青野はこんな事を云ふ積りではなかつたのに、何か、船へでも乘せられてずんずん沖の方へ進んで行くやうな心持ちで、つひうかうかとしやべり出してしまつた。――いよいよにやにやと變な笑ひやうをして頰ッぺたを火のやうに火照らせて、――

「あゝ止めにしよう。」

大川は面喰つて眼をぱちぱちやらせて居たが、暫く過ぎて、間の拔けた時分に慰めるやうな聲で云つ

た。

「その話は止めにして、君の問題に歸らう。それで君は、僕と同じ題材を擇んだのだとすると、やつぱりマアタンギイを畫いて居るのかね。」

「さうなんだ、僕は君と同じモデルで同じ題材を扱つて居ると云ふ事を知つてからも、無論最初の計劃を變更しはしなかつた。却つて何處までも君と競爭してやらうと決心したくらゐだつた。現に昨日まで、樂子は毎朝僕の畫室へ通つて、午後から君の方へ廻つて居たんだ。――しかし、あの女から時々君の製作の樣子を聞くに隨つて、僕はだんだん脅やかされずには居られなくなつた。君と僕とが、偶然同じやうなものを狙つたのはもう此れで三度目だ。去年の展覽會の時も、それから二三年前の時も、二人のあの作品が一つ會場へ陳列された時、僕はどんなに君に對して嫉妬を感じ敵意を抱いたらう。いや恐らく僕は、自分の作品が君の傍に列べてなかつたら、さうして君と僕とが同じ學校の同期生でなかつたら、きつと君を崇拜する氣になつただらう。正直を云へば、今でも僕は君を嫉妬する資格はないかも知れないのだ。崇拜するのが寧ろ當然かも分らないのだ。仕合はせにも今迄は不人望の爲めに君の物は默殺されて、僕の方ばかりが評判になつたけれど、今度のやうな大作が出品されて、而も其れが立派な出來榮えであるとしたら、いくら世間が君の平生を憎んで居ても、もう默殺する事は出來ないにきまつて居る。萬一また、社會が飽く迄も君の不道德を追究して、惡罵を浴びせたり迫害を加へたりするとしても、さうして例の如く僕の評判が好かつたとしても、その爲めに僕の嫉妬と不安とは一向減殺されはしない。――僕は最初、今度の製作に就いては可なりの自信を持つて居る積りだつた。今度こそ君に拮抗して

やらうと云ふ意氣込みだつた。君が持つて居るだけの力は、奮發すれば僕にだつてない事はない、さう思つて自分を幾度勵ましたか知れなかつた。だが、君と全然同じ題材の、おまけにモデルまでも同じ作品が、會場に並んで掛けられた時の光景を想像すると、僕はさながら强迫觀念に襲はれたやうな心地がする。君と僕との間にはまだまだ遠い距離がある。それを見ないやうに見ないやうにと思つても、どうしても見ずには居られない。……」

さう云つて、大川は苦しさうな息を噴いて、帽子を脫いて額の脂汗を拭つた。また此の間のやうに知らず識らず眼が血走つて來て顏色が眞靑になつて居る。煙草を飮み過ぎたのか、それとも胃撥張を起して居るのか、長い話の途中で折々犬が欠びをするやうに力張りながら口腔を開いて、げえげえとへどを吐くやうな切ない咳をする。

「……僕は、道德家と云ふ譯ではないけれど、自分の行爲の善惡に就いては普通の人よりも潔癖の方だし、それに、正直で臆病だから他人には親切のやうに見えるし、多くの人からは善人だと思はれて居る。世間に對して君とはまるで反對な德望を持つて居る。……」

と、彼は言葉を續けた。

「……けれども僕だつても道德家であるよりは藝術家でありたいのだ。たとへ君のやうな人間になつても、いゝ藝術が作れるならば作つて見たいのだ。僕は少くとも、道德上の神經は銳敏だが藝術上の感覺は遲鈍だとは思はれたくない。僕の作品が、君のよりも遙かに劣つた僕の作品が、君の物と列べられて同じ會場へ出品される事が分つた時、僕に少しでも藝術的良心があるならば、どうして平氣で仕事を續け

て居られるだらう。もしも容貌の醜い女が、臆面もなく美人の前へ出て、而もこてこてと厚化粧をして私の方があなたよりも器量が上ですと云つて威張つたとしたら、その女は馬鹿に違ひない。無神經に違ひない。僕の場合はちやうど其れと同じ事だ。僕は友達の間でお坊つちやんと云はれ、お人好しと云はれて居る。どうかすると自分でも、さう云はれるのを得意に感じて居る。だが藝術の上で迄も、お坊つちやんやお人好しにはなりたくない。假りに、僕が自分の劣つた器量を公衆の面前へ曝して、れいれいしく君と競爭するとしたら、少くとも物の分つた人たちは腹の中でどう考へるだらう。僕は藝術家として、此れほどの屈辱はないと思ふ。それに、君と僕とは此の頃妙な關係になつて居る。世間の人は僕が君を拾ひ上げて、金錢上の援助をして居るのをうすうす知つて居る。それだけに僕の屈辱は一層強くなる。僕は自分をそんなにまで厚かましい恥知らずの人間にはさせたくないのだ。」

　話を聞いて居る青野は、いつの間にか相手の爲めに高い所へ持ち上げられて居た。大川の彼を畏れ、憚り、信ずる言葉が、彼のだらけた魂を引き緊めて、遙かな天空へ翺翔させるやうであつた。それほど大川の告白には眞實が溢れ、熱情が籠つて居た。こんなにまで雄辯な激勵の文句があらうか、こんなにまで有り難い諂諛の辭があらうか、――――青野は何だか醉つたやうな氣持ちがした。

「君がそれ程僕を認めてくれるのは忝いが、……」

　と、青野は夢から覺めたやうに、ぼんやりとした顏つきで云つた。――――何と云つて大川を慰めたらばいゝであらう、見え透くやうな謙遜の言葉をならべたら却つて大川は腹を立てやしないか?

「……君にしたつて今度は一生懸命なんだらう。君が今度の製作に對して、どれ程眞劍になつて居る

かと云ふ事は、かうしてわざわざ僕の所へやつて來たのでも分つて居る。さうだとすれば君の畫く物が果して僕のに劣つて居るのかどうか分りやしないぢやないか。君は此のごろ僕の神經衰弱が移つたんだよ。あんまり仕事に夢中になつて少し昂奮して居るんだよ。だもんだから、そんな事が心配になるんだ。……」

「或ひはさうかも知れない。しかし、誰でも僕のやうな立ち場に置かれゝば昂奮もするし神經衰弱にもなるだらう。――僕は兎に角、君の繪を見せて貰はないうちは、仕事を續けることが出來なくなつたのだ。君、お願ひだ、頼むから繪を見せてくれ。」

息切れがして倒れさうになつた人間が、一杯の水を求めるやうな、激しい、忙しい調子で大川が云つた。

「敵同士だと宣言して置きながら、こんな事を頼みに來るのは、恥辱だと云ふ事も僕は知つて居る。しかし公衆の前で受ける恥辱に比べればまだまだ僕は我慢が出來る。藝術家が、自分より勝れた天分を持つ人の前に、男らしく頭を下げるのに極まりの惡い事なんぞはない譯だ。……僕がこんな事を云へば、反對に君はますます得意になるに極まつて居る。さう思ふと僕の嫉妬は募りこそすれ、決して弱められはしないが、忍び難い所を忍んでかうして君に頼みに來たのだ。全體君と僕とは、平素の性質が黑と白のやうに違つて居るのに、藝術の上ではどうしてかうまで傾向が似寄つて居るのだらう。どうしてかういつもいつも、二人の畫く物が衝突したり暗合したりするのだらう。二人は到底兩立する事が出來ないやうにさへ考へられる。さうして結局才能の劣つた方が滅びなければならないのだとすると、勝利は天才を持つ人間の上に輝くのだとすると、僕は恐ろしくなつてぢつとしては居られないやうな氣がする。」

から大川が云つた時、眼に見えぬ暗い影が二人の頭上に蔽ひ被さつたやうであつた。二人は申し合はせたかの如く口を噤んで、妙にトゲトゲしい眼つきでお互ひの顏の中を見た。

「……よろしい、君がそれほどに云ふなら見せて上げても差支へない。……」

と、少し過ぎてから、靑野が沈鬱な聲を出した。

「けれど君、餘計な事だけれど、君は僕の繪を見たあとでどうしようと云ふのかね。」

「僕の繪と見くらべるのだ。若し僕の繪がとても君のに及ばないと悟つたら、出品を見合はせようと思つて居る。」

「それぢや君が僕の繪を見たあとでも出品を中止しないやうだつたら、君の作品には非常な自信があると認めていゝんだね。」

靑野は意地惡さうに脣を歪めて云つた。

「君、僕の卑怯を笑つてくれ給へ。僕は君の出來榮えを見た樣子で、君と競爭しようと云ふのだ。自分の畫いた物が、君の物に比べてさう恥かしくないと云ふ事が分つたら、或ひは自信が出るだらうかと祈つて居るんだ。――けれども僕には、見ない先から大概結果が分つて居るやうな氣持ちがする。自信と云ふ物は人の作品を見せられてから起るやうなものぢやないだらう。僕にほんたうの自信があるくらゐなら、始めから君の所へなんぞ來やしないのだ。」

「さうして若し、君が出品を中止しなければならない場合になつたとする。さうなつたら君はどうするのだ。まさか永久に僕との競爭を斷念するのぢやないんだらう。」

「無論の事だ。僕は自分を發憤させる爲めに君の繪を見せて貰ふのだ。『此の馬鹿野郎』と云つて君に頭を擲つて貰ふのだ。今年駄目ならば來年迄に僕は必ずあの繪を畫き直す。何度でも自信のつく迄畫き直す。さうして飽く迄も君と競爭する。」

「まあ待ち給へ。それなら斯うしようぢやないか。――繪を見てからの相談をしてもいゝが、模樣に依つたら、來年君の繪が出來上るまで、僕も出品を見合はせるとしよう。……」

「えー!」

と云つて相手が驚いて居る隙に、青野は何と思つたか、急に氣味の惡い、いつも金の無心をする時のやうな、下司張つた薄笑ひを浮べながら、

「いや、何も君に對する友情の爲めに云ふのぢやないんだ。僕は友情なんぞのある男ぢやないんだから、さう思はれると却つて工合が惡いんだよ。實を云ふと僕はもう、例に依つて金が一文もなくなつて居る。だから來年まで出品を見合はせる代り、……」

こんな事をもぐもぐとしやべり出した青野の顏を、大川がふいと氣が附いて覗いて見ると、いつの間にか狡猾な表情がハッキリと浮かんで居る。不斷ならば癇癪がむらむらと起つて來るところだのに、其れを何とも感じないだけ大川は自分の事で胸が一杯になつて居た。

「……さう云ふと變なやうだが、つまり僕の繪を君に買つて貰へばいゝんだ。買つて貰へば永久に出品なんぞされなくつたつて構はないんだ。どうせ僕の物なんか、褒めてくれるのは君ばかりで、展覧會へ出したつて誰も批評をしてくれやしないし、賣らうと云つても買手なんか一人だつてありやしないん

だ。僕は外の人と違つて、展覧會へ出品されたのを名譽だとも有り難いとも感じた事はないんだよ。それよりか金の方が餘つぽど有り難いくらゐなんだよ。」
「金が欲しいなら何とか都合して上げる。だが金の事と繪の事とは別問題だ。」
と、大川はきつぱり云つた。
「僕から金を貸す代りに、君の出品を來年まで延ばすなんて、そんな眞似をされちや僕が不愉快だ。君は是非とも今年出品するがいゝ。」
「それぢややつぱりさうするとしよう。――だけれど君、ほんたうに金の方は何とかしてくれるだらうか。百圓……か、五十圓ぐらゐでもまあ暫くは凌げるんだ。」
うまく行つた、と青野は腹の中で思つた。金さへ貸して貰へれば外の事はどうでもいゝ。私の繪が見たければ、さあさあいくらでも御覽下さい。……さうして己はまた、當分榮子を相手にして面白い夢が見られる。……
「馬鹿、馬鹿、馬鹿やい! お前はあたしの奴隷ぢやないか。」
かう云つて唇を剝き出して嘲り笑ふ彼女の姿が、ちやうど門口に咲いて居る紫陽花のやうに、きらびやかに彼の空想に浮かんだ。

第五章

ばたり、ばたり、と大川は八疊の書齋の四角な紫檀の机の周圍を、檻に入れられた獸のやうに往つた

り來たりして居る。腕を組んで、項を垂れて、ぢつと足もとから二三尺先を睨んで彼る彼の瞳は、今にも氣が違ひさうに、折々險惡な光を漲らせる。今朝、目白の青野の家を出てから、何處を通つて何時ごろ田端へ歸つて來たのだか、自分でもまるきり覺えがない。恐らく彼は、目白から此處まで、暴風に浚はれて一トッ飛びに撥ね飛ばされて來てしまつたんだらう。……

彼はもう、畫室へ這入つて自分の繪に面する勇氣もない。頭の中にはたゞ、先青野に見せられた「マアタンギイの閨」の畫幅が、素晴らしい色彩に充ちた大空の虹のやうに、とても自分には手のとどかない虹のやうに、懸つて居るばかりである。その虹をぢつと視詰めて居ると、太陽の如く赫燿たる光線を放射して、彼の眼を奪ひ、膽を奪ひ、果ては魂をも奪つてしまふ。彼は氣が遠くなつて、次第にがつかりして、それから陰鬱な、眞暗な谷底へ深く深く落ち込んで行く。

「青野君、君は天才だ。恐ろしい天才だ。僕が君と競爭するなんて滑稽至極だ。」

から云つて敵にひれ伏した時の、あの瞬間の自分の驚愕に充ちたる氣持ちや、絶望的な態度や、諂語のやうな言葉の節々がありありと思ひ出される。若しも神樣が二人の樣子を陰で見て居たとしたら、自分はどんなに神樣から笑はれたらう、憐れまれたらう、氣の毒がられたらう。……いや、神樣はいつも天才の味方をする。自分の事なんぞてんで考へてゐくれなかつたらう。

若しも自分が、藝術家として神から見放されて居るのだとすれば、自分はもう此の世に生きて行く必要はない。自分には青野と違つて、親讓りの財産もあり、地位もあり、名譽もある。藝術を捨てゝも世間を渡つて行きたければ安樂に渡つて行ける。だが、そんな風にして生涯を送ることに何の價値があら

う。何の意義があらう。自分は凡庸の徒かも知れないが、まだそれ程に凡庸にはなり切れない。自分だつて、藝術を外にして永劫に生きる道のない事を知つて居る。永劫に生きる事が出來ないとすれば、……出來ないとすれば、……己は死んでしまつた方が增しだ。……

大川は絕壁の緣へ來たやうにぴたりと立ち止まつた。午後二時ごろの、密閉された部屋の中は息が詰まるほど暑苦しい。今此の室内で、自分が首を縊つて死んでしまつたら世間は何と思ふだらう。――

大川は懷から右の手を出して、喉の動脈を輕く抑へて見た。それから又よろよろと步き出した。

……さうだ、藝術に望みがないときまつたら己はいつそ死んだ方が增しだ。あの、畫室にある己の繪をずたずたに引き裂いて、靑野の天才を天下に推稱する遺言狀を書いて、此の部屋で首を縊るか、毒藥を仰いで死んでやらう。さうしたら己の名は靑野に依つて千歲に傳はるだらう。これほど藝術に執着し、これほど天才を憧憬して居る、己の壯烈な意志と氣魄とだけはせめて此の世に遺るだらう。兎にも角にも靑野と無益な競爭をして世間の物笑ひになるよりはいくら增しだら分らない。……さうだ、自殺するのが一番いゝ。

しかし已はほんたうに死ねるだらうか、ほんたうに、藝術に關する煩悶の爲めに死ねるだらうか。……それともたかが一枚の繪の爲めに自殺する事が出來るとしたら、己は氣が違つて居るのだらうか。……いや、氣が違つて居るのでも構はない。氣が違ふほど眞面目な苦悶をして居るのだから發狂するのは當り前だ。發狂出來れば有り難いくらゐだ。發狂に依つて己の藝術的良心の銳敏な事がいよいよますます證據立てられるんだ。軍人が名譽の戰死を遂げると同樣に、己は名譽の發狂をするんだ。……こんなに

一生懸命ならよもや死ねないことはあるまい。死ねる、死ねる、たしかに死ねる。己はもう疾つくに發狂して居る！

だが、大丈夫死ねるとして、己はもう一遍考へて見る必要がある。自殺するより外に、果して何等の方法もないだらうか。己は絶對に神樣に見放されて居るのだらうか。いくら修養しても、何年立つても、己は青野のやうな天才にはなれないだらうか。

どうも己は、自分の才能に對して未だに多少の未練がある。己には全然天才がないとは信じられない。現に己が斯うして苦んで居るのは天才のある證據かも知れない。此處で失望して命を棄てるか、勇氣を鼓して難關を突破するかが、天才と凡庸との別れ目かも知れない。己は神樣に見放されたのでなく、試されて居るのかも分らない。さうだとするとウッカリ自殺したら大變だ。蝱蜂取らずだ。やつぱり何とかして生きて行く方がいゝだらうか。……

考へれば考へるほど分らなくなる。生きられるものならば生きて居たいけれど、とても此のまゝでは生きて行かれさうもない。生きるには生きるだけの活路を見出さなければならない。活路を見出すか否かに依つて、己が天才になれるかどうかゞ決するのだ。……さうだ、勇氣がなくつちや駄目だ。無闇に氣を落さないで、もう一遍よく、シッカリと考へ直して見よう。……全體己は最初から勇氣を缺いて居たのぢやなかつたんだ。己の勇氣を沮喪させ、己をこんなに迄絶望の淵に沈めた者は青野なんだ。いや、青野と云ふよりは寧ろ青野に對する己自身の恐怖と嫉妬の爲めなんだ。青野と己とが、たとへ同じく藝術に志して居たにもせよ、時代を異にするとか、傾向を異にするとかしたならば、己は此れほどの打擊

を受けやしなかつたんだ。彼奴と己とは、まるで一つ魂から出た二人の人間のやうに、藝術の上で必ず同じ軌道を辿つて居る。彼奴が畫かうとする題材を己もきつと畫くやうになる。己が漸く捜し出して來たモデルを彼奴もいつの間にか眼をつけて居る。さうして出來上つたものを比べると、己は極まつて彼奴に負かされて居る。己は何だか、自分が靑野の影法師ではないかと云ふやうな氣がして來る。實際、若し此處に、全然同一な美を表現しようとする二人の藝術家が居るとしたら、二人のうちの孰れか一人は存在の必要がない事になる。藝術と云ふものが自己の存在を主張するものである以上、二人は互ひに他の一人を排擠し合はなければならない。――さう氣が付いた瞬間から、己は自分を僻み出したのだ。さうして靑野が殆んど己を眼中に措かないで、晏如として製作を續けて居るのを見れば見るほど、己はいよいよ彼奴に威嚇され、彼奴を嫉妬するやうになつたのだ。彼奴が金なら己は銀た、彼奴が天才で己は凡才だと、いつからともなく思ひ込まされてしまつたのだ。

成る程彼奴は天才には違ひない。今のところでは何と云つたつて己は彼奴に敵ひツこはない。しかし人間には早熟の者と晩成の者とがある。己は今年まだ三十一だのに、已に天才の素質がないと、誰が斷言する事が出來る？　天才だか天才でないかは、一生かゝつて努力して見た後でなければ分る筈はないぢやないか。己が靑野に劣つて居るのは、素質に於いて劣つて居るのではなく、成長が遲いだけなのだ。その證據には、己は常に靑野と同じ方向に進んで行つて居る。己の素質も硏けば金になるかも知れないんだ。

そんなら己はなぜ自信を失墜したのか？　なぜ勇氣を沮喪させたのか？　さうしてなぜ、靑野に脅か

されるのか?――己に天才の素質があると云ふ事さへ明かになつたならば、己の青野に對する不安は全く除去されてしまふだらうか?――いや、恐らくさうは行かないだらう。さうなつてもやつぱり己は青野を呪はずには居られないだらう。藝術の上で己と同じ傾向の軌道を走りつゝある限り、いつ迄立つても己は彼奴に脅かされるに極まつて居る。その軌道を己が一尺進む間に、彼奴は三尺も四尺も進む。先へ歩いて行く爲めに、彼奴は自分がその軌道の發見者だと己惚れて居る。己もまた何だか彼奴の跡ばかり喰着いて行くやうな氣がして居る。己の彼奴に對する敵意は、單純な嫉妬ばかりではなく、自己と全然同型の藝術家が、もう一人此の世の中に居ると云ふ不安な自覺から來て居るのだ。己の住んで居る想像の世界に彼奴も住んで居る。己の創作しようとする物を彼奴も創作する。彼奴の畫いた繪を見ると、己は自分の魂がいつか一度は到達しようと焦つて居るところの鄕土を見出す。畢竟己の感ずる脅威は、自分の離魂體に惱まされたヰリアム、ヰルソンの感じた脅威と同じものなんだ。己のやうな位置に置かれて、誰が打擊を受けずに居られるだらう、誰が平氣で居られるだらう。己の勇氣が沮喪するのも、己の才能の成長が鈍いのも、みんな其れが原因なのだ。青野さへ居なかつたら、己の素質はめきめきと發達して、もう今頃は立派な金になつて居たかも知れないんだ。……

　青野に云はせれば己が青野に似て居ると云ふだらう。けれども己に云はせれば青野が己に似て居るのだ。少くとも己は青野に似て居ると云はれて、自分の今迄進んで來た軌道の方向を變換する譯には行かない。己の藝術は已み難い中心の欲求から出たものだと己は主張する。そんなに容易く變換されるやうな、贋物の藝術ぢやないと己は固く信じる。さうでなかつたら己は始めつから青野と競爭する資格もな

し、素質も養もあつたものぢやないんだ。だが、己が自分の藝術の個性を主張するとすれば青野も同樣に主張するだらう。己が變更出來なければ青野だつて出來ないだらう。さうしたら己の受ける不安と壓迫とはいつ迄立つても取り除かれる時機は來ない。己は相變らず落膽し、失望し、脅かされる。……

それでも生きて行かなければならないとしたら、己は全體どうしたらいゝんだ。何處に己をフエエタルな運命から救ひ出す活路があるのだ。己も存在する。さうして青野も存在する。……何處に妥協の道があるんだ。いくら考へても結局道がないとすれば、己はやつぱり死なゝければならないのか？ 青野の天才にとうとう負かされた事になるのか？ 泣いても笑つても己は神樣に見放されたのか？……

妥協の道は斷じて有り得ない！ 己が飽く迄も生きて、發達して、天才の境地に伸びて行くには、青野が此の世から居なくならなければ駄目なのだ。彼が存在する限り己の前途は眞暗闇だ。己はどうしても自殺しなければならない。……それとも自殺しまいとすれば、青野を生かして置く譯には行かない。……

「さうだ、己は青野を殺すより外にない。」

大川は覺えず口へ出して微かに云つた。それから急いで違ひ棚の前へ行つて、其處に立てかけてある小ひさな鏡に自分の顏を映して見た。人間がこんな考へを起す時はどんな表情をして居るだらうかと思ひながら。

……青野が死ぬか、自分が死ぬか、二つの場合より外にない。己が死ねば青野の藝術が成長する。青野が死ねば己の藝術が救はれる。青野を殺すのは不道徳だとしても自分の藝術を殺す方がより不道徳ぢ

やないだらうか。己は他人に忠實である前に自分自身に忠實でありたい。己の藝術が救はれゝば己は永劫に生きることが出來る。人間の持つて居るものゝうちで永劫に生きんとする意志が最も高く貴いとすれば、その意志を貫く爲めには如何なる性犧をも忍んでいゝのだ。それを忍ぶだけの熱情と勇氣とがあつてこそ、己は始めて天才になれるのだ。さうなつたら神樣だつても己を見放しはしないだらう。己の犯罪がいかに眞劍な、いかに莊嚴な動機に依つて行はれたかと云ふ事は、人間には分らないでも神樣は認めてくれるだらう。昔から嘗て一人でも、己ほど莊嚴な動機から人を殺した者があるか。それほど自分の藝術に忠實だつた者があるか。己はその動機だけでも立派に天才の資格がある。……さうだ、天才の資格がなくつて、どうして藝術の爲めに人を殺す事なんぞが出來るもんか。己が天才だからこそこんな考が起つたんだ。己が靑野を殺すのは獨り天才にのみ許された特權を行使するんだ？銀は金を殺す事に依つて自分を金にする事が出來る。靑野さへ居なくなれば、靑野を愛して居た美の神はきつと己を愛してくれる。さうだ、さうだ、己の活路は此處にあるんだ。己は神から與へられた試驗の答案に及第したんだ。その答案に從つて斷然として決行しなければ天才の權利を自ら放棄したも同然だ。躊躇する必要が何處にある！肉體が肉體を殺すんぢやない、魂が魂を殺すんだ。此の世の利慾の鬪ひでなく永遠をめあての鬪ひだ。……よし、もう分つた！

　大川は歡喜のあまり、彈かれたやうに部屋の中でどしん〱と一つ飛び上つた。母親から褒美を貰つた子供のやうな嬉しさがこみ上げて來て體中がぞくぞくした。「己は救はれた、己は勝つた。」と、續けざまに口の內で叫んだ。……

うまくやりさへすれば誰も己を疑ふ者はない。己は小膽な人物として、德義に厚く友情に富む人間として世間に通つて居る。現に己は靑野に對して庇護を加へいろいろの面倒を見てやつて居るぢやないか。己の友人は皆それを知つて居る。さうして義俠的精神の發露だと認めて居る。世間の凡くらどもは己の藝術が靑野に劣つて居るとは信じない。己が靑野を嫉妬して居ようとは夢にも知らない。二人の間の消息に多少でも通じて居る者は唯あの桀子があるばかりだ。しかしあんな女に藝術上の葛藤なんかゞ分つて溜るもんか。己があの女に關係でもして居れば戀愛から來た嫉妬の結果だと疑はれない事もないが、己は仕合はせにもあの女に手を附けなかつた。彼奴の方では何とかして物にしようと誘惑したにも拘はらず、己は其の手に乘らなかつた。却つて靑野の爲めに周旋して彼奴をモデルに賴んでやつたくらゐだつた。己は誰からも如何なる點からも己の犯罪を嗅ぎつけられる弱所を持たない。すべて此れ等の好都合は、天が己に幸福を授けようとして居る證據だ。

要するに誰にも見られないやうに、痕跡を殘さないやうに、巧妙に秘密に遂行しさへすれば己は一生涯安全なのだ。靑野は今、たつた獨りで郊外の淋しい一軒家に住んで居る。己を除いて彼には一人の交友もない。彼の家に出入する者は桀子だけである。彼女は毎日午後から彼の畫室へ行つて、夕方には、或ひは晩くも夜の十二時迄には歸つてしまふ。……すると、機會は充分にある。夜の十二時から明くる日の朝までの間、……その間に己は仕事をすればいゝんだ。

こゝで昂奮してはならないと、大川は思つた。出來るだけ頭腦を冷靜に、科學者の頭のやうに透き徹らせて、根氣よく、細々と髮の毛一と筋どの證據をも殘さないだけの綿密な計劃を立てなければならな

い。「落ち着いて、飽く迄も落ち着いて、」と、彼は腹の中で繰り返しながら、その落ち着き振りを他人に示しでもするやうに、につこりと笑つて見た。笑つて見たら、ひどく自分がえらくなつたやうな氣がした。それから彼は、卷煙草の先に五分ばかり溜つて居る灰を、注意深く灰皿の上まで持つて行つて、ぽたりと落した。――つまらない事だが、非常に沈着になつたやうに感ぜられる。――それから、片手を頭の下へやつて仰向けに寢ころんだまゝ、ぢつと天井を視詰め始めた。

「嚴密な意味に於いて、人間の一擧一動は必ず此の世に何等かの痕跡を留めるものだらうか。」

先づ問題は此處から發足する。若しこゝに、極めて細心な、思慮に富んだ人間があつて、豫め何等の痕跡をも留めないやうに行動しようとしたならば、それは實際成功するだらうか。たとへば己は今此の部屋で數本の煙草を吸つた。それは此の灰皿の上にある灰や、吸ひ殼や、室内に澱んで居る煙を見れば直ぐに分る。ところで己が此の灰皿の灰をきれいに拭き去り、マッチの燃え殘りと吸ひ殼とを室外へ捨て、煙を表へ發散させてしまつたら、己が煙草を吸つたことは誰にも分らずに濟むだらうか。若しシャアロック、ホルムスのやうな、或はオーギュスト、デュパンのやうな名探偵が居て、己が煙草を吸つたか吸はないかを嚴重に吟味するとしたら、そのくらゐな事で彼等は欺かれるだらうか。――第一己は灰皿の灰を何で拭ふか、拭つた雜巾なり紙片なりをどう處置するか。その雜巾や紙片をなくする爲に燒いてしまふとすれば、また其處に灰が生ずる。今度はその灰を火鉢へあけて外の灰と一緒に交ぜてゴチャゴチャにしてしまふ。さうすれば灰の方は大概片が付く譯だ。大きには吸ひ殼を何處へ捨てたらいゝか。此の窓から往來へ投げ捨てれば直ぐに拾はれる。己の吸つて居る煙草はスリー、キャッスルだから、殊

に容易に見附け出される。己は吸ひ殻マッチの燃え殘りとを袂へ入れて、遠くの方へ散歩に行つて、上野の山の叢（くさむら）の中か銀座通りの敷石の上にでも、捨てゝ來るとする。いや、そんな事をするよりか雜巾と一纏めにして燒いてしまつた方がいゝ。それで直接の證據は悉く堙滅することになる。己が今日、此の室内でスリー、キャッスルを吸つた痕跡はもう殘つては居ない。以上の行動が絶對に秘密に運ばれさへすれば、どんな名探偵だつて、己に事實を白狀させることはむづかしいだらう。或ひは探偵はかう云つて己を問ひ詰めるかも知れない。「お前は平生喫煙の習慣があるのに、數時間この室内に閉ぢ籠つて居ながら、その間に煙草を一本も吸はなかつたと云ふ筈はない。たしかに吸つたものだと認める。」――が、さう云はれたつて驚くことはない。己は直ちに云ひ拔けてやる。――「さうです。仰つしやる通り僕は喫煙の習慣がありました。けれども此の頃餘り煙草を飮み過ぎて頭を惡くしたので、成るべく節制して居たのです。彼（あ）の場合一本も吸はなかつたと云つて、何も不思議はありません。」かう云つてやつたらどうだらう。「それでもお前は吸つたに違ひない。」と云へるだらうか。「僕が自分で吸はないと云つて居るのに、あなたがたは何を證據にそんな事を云ふのですか。」と、己が斷乎として抗辯すれば、彼等はいかにヤキモキしたつてグウの音も出ないだらう。

　コナン、ドイルは其の小說の中に、探偵の資格として三つの要素を擧げて居る。第一は觀察(Observation)である。第二は智識(Knowledge)である。第三は歸納法(Induction)である。此の三つの力が充分に發達して居れば、必ず犯罪の原因を嗅ぎ出す事が出來るのださうである。だが、己が今想像したやうな煙草の事件に對して、その觀察なり智識なり歸納法なりを、何處に應用する餘地があるか。どんな立

派な能力を備へて居たところで、其の對象となる行爲の痕跡が殘つて居なければ駄目ぢやないか。それでも煙草の場合には、嚴格に云ふと未だ絕對に痕跡が殘らないとは云へないかも知れないが、假りに己が今、起き上つて違ひ棚の前に行つて、立てかけてある鏡に顏を映して見て、それから再び元の通りに寢ころんだとする。其處へ探偵が這入つて來て、己がたつた今何をしたかを探らうとする。――どうだ、その場合に探偵は己が鏡を見たことを觀破するだらうか。恐らく彼が神でない限りは、それが分つて溜るもんぢやない。始めからぢつとして寢ころんで居たのと、中途でちよいと立ち上つて鏡を見て來たのと、二つの狀態には何等の相違も有り得ない。一旦違ひ棚の前へ行つて、再び以前の姿勢に復した己の行爲は、絕對に痕跡を留めて居ないのだ。勿論己には、顏を映したばかりで、手に觸れた譯ではないのだから、鏡の上にも證據が殘る筈はないのだ。……

己の行爲を知つて居る者は、たゞ神があるばかりだ。神は、己の頭の中に潜んで居る思想をさへ觀破するのだから、彼に對して己は何物をも隱し立てする譯には行かない。ところで若し、その唯一の恐るべき神が、己の味方をして居るとしたらどうだ。神が己の天才に愛でゝ、殺人の行爲を許してくれたとしたらどうだ。神を除けば己は世の中の凡べての人を欺く事が出來る。誰の眼にも觸れないやうに巧みに仕事をやり遂げられる。要するに人を殺すと云ふ事は、煙草を吸つたり、鏡を見たりするのと同じく或る一つの行爲なのだ。後の二つの行爲が痕跡を留めずに實行出來るものなら、人殺しだつて其の通りに出來ないといふ理屈はない。其れが失敗するとすれば、結局己の注意が行き屆かなかつたと云ふ事に歸着する。だから己は決して昂奮してはならない。飽く迄も沈着に、さうして冷靜に、――頭腦を物凄

いほど冴え冴えと透き徹らせるのが肝腎だ。……
「そこで實際の計劃としてどう云ふ風にしたらいゝか。いよいよ己は具體的の考案を運らす順序になつた。」
　大川はムックリと身を起して、また部屋の中を往つたり來たりして居る。

第六章

　九月三日の午前零時三十分、――陰曆に從へば其れは闇夜の筈である。――其の日の其の時刻が、大川の心の壁にかゝつて居る暦のペエヂに、豫め眞黒く印を打たれた。さうして彼は毎日毎日、ぢつと其の印を視詰めつゝ、一枚々々ペエヂの剝がれて行くのを待つた。

が、彼は徒らに手を拱いて待つのではない。恰も印の上にまだ七枚のペエヂが殘つて居る時、ちやうど其れが行はる可き日の一週間前から、彼はかねての計劃に基いて豫定の準備行動に移つた。

　彼が展覽會に出品する筈の作物は、殆んど九分通り出來上つて居たので、九月に這入つてからは筆子も來なくなつて居た。にも拘らず、彼は午前中相變らずアトリヱに立て籠つて、熱心な瞳をカンヴスに注ぎながら、――カンヴスの表面にも、いつの間にかマアタンギィの姿は消えてなくなつて、ただ眞黒な暦の印が擴がつて居るやうである。――餘念もなく刷毛を動かして居る。勿論彼は其の繪に對して何等の未練があるのではない。何とか彼とかいぢくり廻して居れば、少しは出來榮えがよくなるだらうなどゝ己惚れて居るのでもない。寧ろずたずたに引裂いてしまひたいくらゐなものである。しかし、例の事

を決行した場合に、自分が此の繪を堂々と出品して居なかつたら、却つて世間から嫌疑を受ける。それを思ふばかりに彼は平然と、仕事に熱中して居るやうに見せかけて居る。——其れは準備行動の第一であつた。第二に彼は夕飯を濟ませると必ず獨りで散歩に出かけて、十時か十時半ごろ迄にはぶらりと戻つて來る。さうして再び畫室へ閉ぢ籠つて、夜中の二時過ぎでなければ寢室へ行かなかつた。

彼の家は、母屋と畫室と二た棟に別れて居た。母屋の方は平屋造りの茶がゝつた普請で、其處には彼の兩親と幼い妹とが住んで居る。まだ獨身で居た大川は、三度の食事をたべに行く外は、大概アトリエで日を暮らすのが常であつて、その爲めに畫室だの寢室だの書生部屋だのが、畫室の横に附いて居た。で、彼は夜の散歩から歸つて來ると、眞つ直ぐに畫室へ這入つてしまふ事もあるし、一旦母屋の兩親の許へ立ち寄つてからにする事もある。立ち寄らないで行く折には、土産物を買つて來て置いて、きつと明くる日の朝飯の時に、「ゆふべ銀座へ行つたから、此れを買つて來てやつたんだのに、十一時ごろに歸つて來たらもうみんな寢て居るんだもの。ほんたうに内の者は早寢だなあ。」などゝ無邪氣さうに云つて、母や妹にその土産物を出してやる。此れ等の事を大川は極めて注意深く、わざとらしくないやうにやつて見せた。

畫室の方の書生部屋には書生が一人住んで居る。彼は夕方の六時から神田の夜學校へ佛蘭西語を習ひに行つて、十時には歸宅するが、散歩に出かけた大川の戻る迄は、睡い眼を擦り擦り起きて居る。大川は普通彼よりおくれて歸つて來て、畫室に通つてから一杯の紅茶を入れさせた後、直ちに彼を寢かせてしまふ。大川の實驗に依ると、それきり書生は明くる日の朝まで、——少くとも夜中の二時三時ごろ

まで、大川の起きて居る間には、――決して眼を覺まさない事がたしかめられた。從つて大川が夜の十一時以後、アトリエで何をして居るのか、家族の内に誰も知る者はないのである。「内の先生は毎晩夜中まで調べ物をして居るのだらう。」――書生は多分さう思つて居るらしい。殊にさう思はせる爲めに、彼は書生が紅茶を入れて來る時、いつも書物を繰りひろげて居るやうにした。それも好い加減な書物ではなく、"Chinese Porcelain"と云ふ大型の厚い本を机一杯に開いて、其の横には又、支那陶器全書だの、"Céramique de l'Asie centrale"だのと云ふ奴を堆く積み重ねて、いかにも東洋古代の工藝品の研究に沒頭して居るらしく見せた。たまには古道具屋から靑磁の花瓶だの七寶の香爐だのを買つて來て、れいれいしく書籍の傍に据ゑて置いたりした。

「己は此れから七日の後に、人を殺すのだと思つてはいけない。凡べてが自然に、平日のやうに運ばれなければならない。」

大川は腹の中でさう考へて居た。――彼は自分が、陶器の研究に夜を更かすのだと云ふ事を一層明かにする爲め、書生に向つて斯う云はうかとも思つた。

「一としきり止めて居たんだが、己は此頃また燒き物の道樂を始めた。凝り出すとどうも際限のないもんだなあ。」

かう獨語のやうに云つて、「陶器の趣味」に關する二三の會話を、書生を相手に交換して置かうかとも思つた。が、平生の彼としては、用のない時には餘り書生に話をしかけないのが通例であるから、其れさへも不自然に過ぎるやうに感ぜられて止めてしまつた。

かうして彼は七日の間、朝の製作と、晩方の散歩と、夜更けてからの研究と、此の三つを規則的に繰り返す事を努めた。從來とても午前中は彼の仕事の時間であり、夕方からは屢々散歩に出かけるのが習慣であり、深夜の讀書も、瀬戸物道樂も、今に始まつた譯ではなかつた。母や妹に土産を買つて來てやるのも、家族に對して愛情の深い彼としては、格別珍しい行爲ではなかつた。かうして何事も、當り前過ぎるほど當り前に、彼の注文通りに運ばれつゝあるらしかつた。

「もう大丈夫だ。己は誰からも眼を付けられては居ない。內の者は己が毎晩のやうに、夜おそくまでたつた獨りで畫室に居る事を信じて居る。――彼等にさう思ひ込ませる事が、實は何よりも肝要だつたのだ。」

彼は心私かに斯う呟いて、自分の用意周到なのを祝福した。萬一彼が、散歩から戾つて書生を寢に就かせた後に、再びこつそりと畫室を拔け出して、二三時間の間何處かへ姿を消したとしても、誰が其の事に氣が付くであらう。それでなくても大川の家族の者は、許可を經ないで畫室のドオアへ手を觸れる者はない筈である。彼等はたとへ晝間でも成るべく其の近所へ寄らないやうにして居るのに、況んや夜中の十二時過ぎになつてから、誰がアトリヱの內部を窺ふ者があらう。――其の日の其の時刻は、恐らく大川の爲めに、絕對の秘密を準備してくれるであらう。

七日の日數が一つづゝ減つて行く間、大川は腹の底にシッカリとした成算を抱いて、身も心も輕々として居た。夜な夜なコーヒーの樹のステッキを打振りつゝ散歩に出て行く折の氣持ちは、到底恐ろしい目論見を眼前に控へた人のやうではなかつた。第一日の夜には、銀座通りをうろついて、資性堂の新鮮

なブレイン、ソオダを飲んだ。冷めたい、爽快な、胸の透き徹るやうな液體の舌を刺す工合が、其の晩もいつもと同じやうに美味であつた。それからカフエエ、ヂエナへ寄つて、妹の爲めにシユウクリームを買つて歸つた。二日目の夜には淺草へ行つて、オペレットと活動寫眞とを見たあとで、ちん屋バアの洋食をしたゝか喰つた。どうして自分は斯うも平氣で居られるのだらう。人の命を奪ふと云ふ大事件が、なぜ自分を少しは平生と違つた者にさせないのだらう。自分の神經は犯罪に對して、常に斯くまで無感覺だつたのか知らん? 自分はその實靑野などよりも、よつぽど上手な惡黨なのか知らん?――大川は我ながら不思議なくらゐであつた。自分は此れ迄、自墮落な美術家氣質の仲間のうちでは一番紳士的であり、善人であつた筈だのに、其れが突然人を殺さうと云ふ考を起して、而も斯くの如く冷靜に振る舞つてゐる。するとやつぱり、氣が違つてしまつたのだらうか。少しも昂奮して居ないやうで、實は昂奮し過ぎた結果頭が馬鹿になつたのだらうか。兎にも角にもこんな場合に此れだけ落ち着いて居られるのは決して普通の狀態ではない。自分はたしかにどうかして居る。或ひは自分の天才的素質が、萠芽を吹き出したからかもしれない。自分はいつの間にか偉大なる天才になつて居て、腦の組織が、がらりと一變してしまつたのかも分らない。――さうだとすれば何と云ふ愉快な出來事だらう! かう思ひながら、大川は依然として沈着に平氣に行動し續けて居た。天才になつたのだらうが、氣違ひになつたのだらうが、進む所まで進むより外に仕方がなかつた。そこで、三日目の夜には動坂下から池の端へ出て、觀月橋を渡つて、精養軒のアイスクリームを食つた。つめたい物を食ふ度毎に、頭がいよいよ冴え返つてすがすがしい氣分になるのが妙に喜ばしかつた。その晩は精養軒を出ると廣小路の夜店を冷やかして、ダリヤの

鉢を提げて歸つた。四日目には駒込から本郷通りの古本屋を漁つて歩いたが、歸るのにはまだ時間が早いし、此れから行かうと云ふところもないので、ふと、森川町の友人のKを尋ねて見ようかと思つた。自分の素振りが、いかに平生と異らないかを誰かに見せて置く爲めには、それも必要であるかも知れない。彼はさう氣が付いてKの住宅の方へ二三町歩き出した間に、又考が一變した。

「やつぱり尋ねない方がいゝ。」

彼は低い聲で、斯う獨語を云つた。

「――普通、己はかう云ふ時にKを尋ねるだらうか。毎年展覽會の製作にかゝつて居る間は、成るたけ繪の友達と顏を合はせないやうにするのが、己の習慣ではなかつたか。己は今、まるで何事もないやうに平氣で居る。ちつとも不斷とは變つて居ない。しかし、それをわざわざ友達に見せに行くのは何事かがある證據ではないか。變つて居ないと云ひながら、旣に變つて居るのではないか。事を行つてしまふまでは、必要のない限り、己は出來るだけ人に會はない方がいゝ。會へばどうしても自然を裝はうとして不自然を曝露する。多くの用心深い犯罪者は、さう云ふ風にして炯眼な探偵に尻尾を摑まへられるのだ。だから己は、內の書生に對してさへ言葉を愼んで居たのぢやないか。」

――こんな事ではとても駄目だ。ウッカリして居ると直ぐに行動を誤まるやうでは、いつかは人に秘密を嗅づかれてしまふ。もつともつと己は頭をよくしなければいけない。――さう思つて、大川は固く自分の心を警めた。實際、誰からも睨まれて居ないやうでも、いつ如何なる場合に自分で嫌疑の種を蒔くかも知れなかつた。考へて見ると、巢子が此の頃彼の畫室へ來なくなつたと云ふことは、大川の爲め

に此上もない幸福であつた。

五日目も六日目も無事に濟んで行つた。さうしていよいよ七日目の九月三日が來たのである。

その日も一週間以來の好天氣が續いた。炎天の空は深海の水のやうに眞青で、大地には殘暑の苦熱が嚴しかつた。大川は朝眼を覺ますと、寢室の窓を開いて、裏庭に咲いて居る花壇の花をうつとりと眺めやつた。此の一と夏の間、倦む色もなく咲き通して居た百日草と蝦夷菊の花が、煙草の吸ひ殼のやうに萎れてくちやくちやになつて、臙脂色に褪せてしまつた傍に、新鮮な葉鷄頭と日向葵りの花とが水で洗つた如く美しく冴えて居る。五六本のカンナの莖からは、きのふ咲いて居た黄色の花が悉く散つて、今朝は中央の一本に眞紅の花が唯一つ開いて居る。——その紅い色を大川はぢつと視詰めた。ちやうど此の花のやうに見事に綺麗に、無邪氣にやつて除けようと思ひながら。

それから午前の製作、それから午後の散歩、——散歩には今日は日比谷公園を擇んだ。其處の噴水の汀にある藤棚の下には、アーク燈の光に照らされて、月夜のやうな鮮やかな葉の影が、涼しい風に搖られながら、網の目の如く細かにそよそよと戰いで居た。ぼんやりとベンチに憩うて居る彼の前を、いろいろの市民の群れがぞろぞろと賑やかな足音を立てながら流れ過ぎた。花やかに、しんみりと睦じさうに寄り添うて行く若い夫婦づれ、阿娜つぽい縮緬浴衣をだらりんと着流して、夜の妖精のやうにしめやかな、なまめかしい足どりで植ゑ込み木々の繁みに見え隱れする藝者の一と組、低い鼻聲でロオレライを歌ひつゝ行く中學生、鷺のやうな眞白な服裝に黄金の頸飾を附けた西洋婦人、——それ等が廻り燈籠の如く大川の眼は映つては消えた。松本樓の露臺には灯が燦かく眩く溢れて、建物全體が寶石で作つた

巨大な蜂の巣のやうにぎらぎらと輝いて居た。さうして其の間も、青銅の鳥の嘴から、アーク燈の球を目がけて虹の雨を降りそゝぐ噴水の飛沫は、絶えず潺湲として忍び音に泣き咽んで居た。こんな事でもなければめつた此の公園を訪れる折のない大川は、何だか其の景色がひどく詩的であるかのやうに感ぜられて、甘いやさしいセンチメンタルな氣分にさへ誘ひ込まれた。動いて居る人間も、またゝく灯影も、水の響きも木の葉のそよぎも、あらゆる物が夢の如くに美しい、音樂のやうな晩だと思つた。

八時半ごろに日比谷から電車に乗つて神田の神保町で降りた。此の間今川小路の古本屋に出て居たミュンステルベルヒの支那美術史を、なくならないうちに買つて置かうと思つたのである。其の店の主人や番頭は前からの顔馴染なので、大川は彼等を相手に十五分ばかり美術書類の話をした。何んでも彼は物識りらしい口吻で、東洋美術史に關するフェノロサとシャヴンヌとミュンステルベルヒとの比較論等をしやべつたやうに覺えて居る。それからとある小間物屋で妹の土産に二三本のリボンを買つて、田端へ歸つたのはきつちり十時半であつた。

母屋の方では、もう家族の者は雨戸を締めて寢ようとして居た。

「おい、もう道子は寢ちまつたのかい。こんないゝリボンを買つて來てやつたのになあ。」

かう云ひながら其處へ大川が這入つて來て、蚊帳の中でまだ眼をあいて居る妹の枕もとへ、土産の品を並べて見せた。

「あら、まあ綺麗なリボンだこと。ほんたうに兄さん有り難うよ。あたし今度の日曜に江の嶋へ行く時に、此のリボンを附けて行くわ。洋服を着てお下げに結つて、――」

と、妹の道子は枕に頬擦りをして嬉しさうに笑み崩れた。買ひ立ての三つのリボンは、まるでアルヘイ糖の菓子のやうに艶やかにケバケバしく光つて居つた。

「江の嶋へ誰と行くの？」

「お父さまとお母さまに連れて行つて頂くの。ねえ兄さん、兄さんも一緒にいらつしやらない？」

「兄さんはね、展覧會の繪の方のお仕事があるから行かれませんとさ。江の嶋へ行つたら、今度はお前が兄さんにお土產を買つて來て上げなければいけませんよ。」

から云つて、母も兄妹の會話に交つた。

「今夜も此れから二時過ぎまで畫室で勉强をしなければならない。」――さういふ意味の事を、大川はせめて一と言、母の耳へ入れて置きたくてならなかつた。それを我慢するのは可なりの忍耐が必要であつた。母を相手に二た三言話をした後、

「それぢやお休みなさいまし。」

と云ひ捨てゝ、彼は急いで自分の畫室へ戾つてから、始めてほつと溜息をついた。

彼が這入つてから二三分立つた時分に、書生が紅茶の盆を持つて、例の如く睡い眼を擦りつゝ畫室のドーアを明けた。さうして、茶碗に茶を注ぎながら、今しも主人が机の上で繙いて居る美術史の挿繪を珍しさうに覗いて居た。その間はほんの一分か二分に過ぎなかつたけれど、ぢつと默り込んで居る大川には、其れが非常に長いやうに感ぜられた。何か一と言云はなければ變だと云ふ氣持ちがした。

「どうだ、いゝ本を見附けて來たらう。……」

から、彼が覺えず話しかけたのは、書生が既に茶をつぎ終つて、一禮しながら部屋を退かうとした時間である。その時まで我慢して居た大川は、遂に我慢がし切れなくなつた。

「はあ」

と云つたが、いつも濟まし込んで居る主人の顏に機嫌の好い微笑が浮かんだので、書生は妙に嬉しかつたものらしい。

「先生、その寫眞は何でございますか。」

「此れか、此れは支那の洛陽の龍門にある石窟寺の佛像だ。六世紀の北魏時代のものなんだが、もう此の時分に犍陀羅式の彫刻が支那に這入り込んで居るんだな。どうだ、面白いだらう。」

「はあ、面白うございますな。――先生は此のごろ、東洋の古い美術をお調べになつて居らつしやるんですか。」

「うん、毎晩二時ごろまで調べて居る。」

「はあ、」

と、書生が張り合ひのない聲で云つた。さうして、急にまた睡いことを想ひ出したらしく、暫くパッが惡さうにもぢもぢして居たが、やがて思ひ切つたやうに「お休みなさい。」と云つて、こそこそと書室を出て行つた。

「とうとう己は餘計な眞似をしてしまつた。しやべらないでもいゝ事をしやべつちまつた。毎晩二時ごろまで調べ物をする。――そんな事を、己は何の爲めにわざわざ書生に斷つたんだ。彼奴はぼんやりだ

から構はないやうなもの、、氣の利いた奴なら直ぐと變に思ふぢやないか。」

折角今日まですらすらと巧妙に運んで來たのに、最後に一つ失策をやつた。此れさへなければ己の準備行動は完璧だつたのだ。此れですつかりケチを附けた。と、云ふやうな氣がする。まさか其の爲めに犯罪が曝露する恐れはないまでも、圓滿に、玉のやうに滑かだつたものを、ちよいとの彈みで滑かでなくしたのが、彼は殘念で堪らなかつた。

「だが、一旦瑕が附いたものはもう仕樣がない。此れから先を注意するばかりだ。出來るだけ滑かに、こだはりなく、而も大膽に確實に、――」

さう自分の胸に云ひ聽かせて、大川はのつそりと椅子から立つた。書生が部屋を出て行つてから半時間の後、ちやうど十一時三十分の時である。

二三日前から、深夜に人知れず揃へて置いた衣服だの鬘だの附け髯だのが、一と纏めにして片隅の支那鞄に入れてあつた。それ等はみんな二三年前に着馴れたり、假裝會の變裝に使つたりしたものばかりで、今度新しく買ひ集めたのでないと云ふ事が、大川の得意の一つであつた。たとへば此の鬘や、附け髯や、衣服の切れ地の一片が、兇行の現場に落ちて居たところで、誰が其の所有者を嗅ぎ出す事が出來るだらう。衣服は黒い綾羅紗の脊廣服で、地質や色合ひが極く平凡な、有りふれた型に仕立てられて居る。嘗て大川がアメリカから歸朝する際、船の中の食堂服としてタキシード代りに拵へたのだが、その後彼はめつたに着て出た事はなかつた。上衣の裏に縫ひつけてあつたアメリカ人の裁縫師の名を切り取つてしまつた以上、もう此の服は東京市中の何處の服屋に問ひ質しても、出所の分らう筈はない。鬘と

附け髯とは、先年の同窓會に素人芝居の喜劇をやつて、某理學博士に扮した時の記念品である。それは友人の或る男が、今はもう潰れてしまつた新劇團の俳優から借りて來たまゝ、長らく借りつ放しになつて居た物で、大川自身にすら出所が分らないくらゐである。大川はたゞ、その鬘と髯とを着けると顔の感じが一變して、分別くさい、陰鬱な、學者風の人相になることを知つて居る。帽子は、此れも同じくアメリカから買つて來た茶の中折の、商標の附いて居る裏地の切れを剝がして置いた。

かうして、年ごろ三十前後の、やゝ長い髪を綺麗に分けた、濃い八字髯を生やした見馴れない一人の紳士が、大川の邸の裏門の坂を、すたすたと降りて行つた時、母屋でも書生部屋でも皆いゝ心持ちに寢入つて居た。彼は坂の中途から振り返つて自分の畫室の窓を見た。其處には、肉色のカアテンに電燈の明りが赤く映つて、中には主人が机に凭れながら、今日も相變らず東洋美術の研究に夜を更かして居るやうであつた。

動坂を上つて、白山上の四つ辻に出ると、兩側に並んだ化粧品や雜貨店のショウ、キンドウの前には、涼みの客が灯を慕ひ寄る蟲のやうに連なつて、往來はまだ宵の口ほどに賑はつて居た。二階の軒に岐阜提灯を吊るしたとあるビーア、ホールの奧からは、調子の外れた蓄音器の長唄が騷々しく聞えて居た。其處まで歩いて來た大川は、俥を呼んで飯田町のステエションへ走らせた。水道橋を渡つて右の方へ、郊外線路の土手の蔭になる淋しい横丁へ曲つた時、彼は始めて自分の體も魂も眞暗な夜の闇に包まれたやうな氣持ちがした。

俥を乘り捨てゝから、停車場の周圍をぐるりと一と巡りして一二分の時を過した後、今度はタキシー

で目白驛の附近まで一氣に飛ばせる。――すべて、豫め計劃して置いた通りにやつた。自働車が郊外の町はづれの、鐵道の上にかゝつて居る橋を越えると、其處で大川は「よし！」と云ひながら、自分で扉をあけて威勢よく地に飛び降りた。さすがに田圃が近いだけあつて、秋らしい風が冷え冷えと吹き渡つて、線路に沿うた堤防の草葉の繁みに蟲がちいちいと啼いて居る。遙かな橋の下の、停車場の灯がぼんやりと曇つて居る外は、眞暗な海にでも面して居るやうに黒い闇が果てしもなく擴がつて居る。

「よし、それぢや此處で歸つてくれ。」

さう云つて急ぎ足に、ばたばたと歩み去る大川の後ろ姿が、自働車の明りの帶の中に五六間照らされて、やがて夜の幕に吸ひ込まれて行つた。

ぶうぶうと睡さうな音を立てて、だんだんに遠のいて行くタキシイの響きを聞き流しながら、七八丁進むと兩側にはもう一軒の家もなかつた。月のない、死んだやうに靜かな空は、今日の晝間と同じやうに美しく晴れ渡つて、星が一面に散らばつて居る。さうして、大川の氣のせゐか知らぬが、行く手の森の陰に立つて居る青野のアトリエの眞上の天には、それ等の星が一層夥しく無數に群がつて居て、チラチラ、キラキラと一齊に輝き瞬いて居るかの如く見える。彼はこんなにまで多くの星が、空の一局部にこれ程澤山に集まつて、強く朗らかに光つて居るのを、まだ一遍も眺めた事がないやうに感ぜられた。ちやうど煙突から煙がひろがるやうに、星が、青野のアトリエの屋根の上へ最も濃密に集まつて、そこから四方へ次第にうすく撒き散らされて居るのである。それは殆んど、アトリエが後光を背負つて居ると云つてもいゝくらゐな眩ゆさである。

「どうだ、あれを見ろ。あのアトリエの上の空を見ろ。天才の住む家にはあの通りの奇蹟があるのだ。
――」

から云ふ囁きが、ふいと彼の耳元に聞えて、大川は少し脅かされたやうになつた。

「あの素晴らしい天才を、お前は今卑怯にも殺しに行かうとして居る。その秘密は、誰も知らない積りでも空の星がちやんと見て居る。あの通りアトリエの上にキラキラと眼瞬きをして、夜通し番兵の役を勤めて居る。あれは青野と云ふ天才の魂が、人間の世の物ではなくて、星の世界から降りて來た證據なのだ。」

――だが、それがどうしたと云ふんだ、と、大川は思つた。彼奴が天才であつたにしろ、己が彼奴を殺してしまへば、あの大空の星どもは、今度は己の畫室の上で瞬くだらう。己のアトリエからきつと後光がさすだらう。己は必ずさうさせて見せる。いや、事に依るともう今夜あたりは、田端の己の家の上にも、無數の星が寄り集まつて、己の歸りを待つて居るかも知れないのだ。……

彼は氣を取り直して、盗賊のやうにでなく、寧ろ何かの檢査に臨む官吏のやうに、威張つた歩き方で森の下路を潜り抜けた。

畫室の正面の石段へ片足をかけた時、彼はポケットから皮の手袋を出して兩手に嵌めた。それから變裝の鬘を脱ぎ、附け髯を取つて、表の扉を輕くコトコト叩きながら、

「青野君、青野君」

と、底力のある、命令するやうな調子で二三度呼んだ。が、青野は熟睡して居ると見えて、返辭をす

るらしいけはひもない。北側の窓の方へ廻つて、ガラスにぺつたりと額を着けながら、室内を覗き込むと、中は戸外と同じやうに眞暗である。窓の障子には何の締まりもしてないらしく、枠に手を掛ければするすると押し上げられる。其處から大川は身を飜して室内へ闖入して行つた。

彼は、第一に先づ、腰の周りを手さぐりして、ヅボン吊りの外にもう一つ締めて來た柔かい切れ地のバンドを解いた。――最初の彼の計劃は、知ら知らしく青野に面會して、此の間のやうに自分の苦しい衷情を訴へた後、隙を狙つてバンドを相手の頸部へ卷き付ける積りであつた。しかし、かうして容易に忍び込むことが出來た以上は、わざわざ彼を呼び起す迄もなかつた。……

「さうだ、飽く迄も秘密が大事だ。隱せるものならば死んで行く青野に迄も隱した方が安全だ。己は自分の犯罪を、誰に知られるよりも青野に知られるのが一番厭だつたのだ。青野は死んでも彼奴の魂は生きて居る。其の魂は永遠に己の惡事を知つて居る。それが何よりも不愉快だつたのだ。それだのに彼奴は、すつかり油斷をして窓の戸締まりもしないで寢て居る。お蔭で己は彼奴がすやすやと寢て居るところを一と息に殺す事が出來る。己は何と云ふ幸運兒だらう。己の目的は此れで完全に貫徹するのだ。」

その時、こんな考へが電光のやうに大川の腦裡を閃いて過ぎた。突嗟の間に彼は計劃を變更して、――萬一中途で、青野が眼を覺ましても大丈夫なやうに、――再び覆を被つて髯を附けた。

眞暗な中で此れだけの身仕度を濟ましてから、彼はマッチを擦つて濃い室内の闇を照らした。と、小いさな炎がゆらゆらと燃えて、自分の顔の附け髯の先がぼうつと明るくなつたかと思ふと、マッチは直ぐに消えてしまつた。又もう一本マッチを擦る。今度は大分長い間、棒が燃え盡きるまで火が保つて居

る。けれども微かな其の光はたゞ空洞のやうな暗黒を照し出すばかりである。彼は三本目のマッチを擦しながら、そろそろと自分の足もとに圓を描いて見た。埃だらけな床板の上に、敷島の吸ひ殻や、蠟の垂れた跡や、ぼろや紙屑やが散らばつた中に蠟燭の燃え殘りが二三本落ちて居る。そのうちの一番長いのを拾ひ取つて、明りを移すと、部屋の隅々が急に物凄い岩窟のやうに、朦朧と浮かび上つて、其處にしよんぼりと佇んで居る背のひよろ長い大川の影が、五六本の非常に巨大な柱になつて四方の壁や天井へ折れ曲つて居る。とたんに彼は「あつ」と聲を立てんばかりに愕然として、突きあたりの闇にたゞよふ女の顔に恐る恐る視線を向けた。それはカンヷスの面に畫かれたマアタンギイの姿であつたが、どうした加減か樣子が寢ころんで笑つて居るやうに、或る一刹那の間だけ大川には思はれたのである。か弱い蠟燭の灯先がわなわなと顫へながら、ぱつと燃え上る油煙のかげに、彼女の容貌はあかあかと虚空に映つて、その兩頰には生き生きとした血が通ひ、涼しい眸の睫毛の端がほのかに戰いて居るやうにさへ感ぜられる。自分が青野を追ひ越す迄は、二度と再び其の繪を見まいと胸に誓つて居た大川は、奥深い殿堂の神秘の扉が忽然彼の眼の前に開けて、燦爛とした黄金の光が瞳を刺すやうな心地がした。「この繪こそ眞箇の天才の手に成つた不死の藝術だ。」かう云ふ聲が何處からともなく、霹靂の如く大川の耳朶を撲つた。その一瞬間、彼は大地へ身をひれ伏して、已み難い讃嘆と驚異の情が嵐の如く自分の胸裡を吹き通すのを、眼を塞いで遣り過さうかとさへ思つた。しかし、其の爲めに彼の決心が鈍るやうな事はなかつた。脅かされゝば脅かされるほど、彼の覺悟はいよいよ強くなるばかりであつた。

青野の寢臺は、恰も其の繪の反對の側の壁に沿うて据ゑられて居た。寢臺と云つても古ぼけたソファ

の上に蒲團を敷いたゞけのもので、それに日本の萠黄の蚊帳が吊つてあつた。蠟燭を傍のデスクに立てて、暫く寢息を窺つて居た大川の左の手の中には、例のバンドがぐるぐると掌に卷き着いて、しつかりと握り緊められて居た。やがて彼は徐ろに、寢て居る男の頭から胸の邊まで蚊帳を捲くつた。……それでも靑野はまだぐつすりと睡つて居る。ぽかんと口を明いたまゝ、垢だらけな襟頸を枕に載せて仰向けに寢て居る顏の、鼻毛の伸びた、肉の薄い、穢い鼻の孔からすやすやと洩れる呼吸が、側に立つて居る大川の呼吸と同じリズムで、靜かに、安らかに響いて居る。掻い卷きの裾がめくれ上つて、寢像の惡い瘦せた股の肉の露出して居るのが、何だかもう、屍骸になつてしまつたやうに傷々しく哀れである。……

大川ははつとして手を休めた。バンドが靑野の頸筋をやつと一と廻りしかけた時である。不意に彼の唇が嚔を嚙むやうに緩く蠢いて、眼瞼がぱたぱたと蛾が飛ぶやうに動いたかと思つた。が、次ぎの瞬間に大川は渾身の力を籠めて、一氣に絞め付けようとすると、いきなり猛獸の吼へるやうな呻りを發して、寢臺から猫の如く狂ひ立つた素早い物が、バンドを逆にぐいと扱いた。

「君だ、君だ、やつぱり君が殺しに來たんだ！　大川君！」

その呻り聲は怒號すると同時に泣いて居た。もう大川の頭には冷靜も沈着も分別もなかつた。たゞ狂暴な殘忍さが支配するばかりであつた。彼は寢臺に飛び上つて相手の體に跨りながら、葡萄酒のコロツプを拔くが如くに、首を宙へ吊るし上げつゝ、バンドを激しく揺す振つた積りであつた。けれども靑野は揺す振られながら起き上つて、矢庭に敵の左の手頸に嚙み着いたまゝ離れなかつた。二人はさうして

寝臺から滑り落ちて、觀世縒(くわんぜより)のやうに絡みついて、床板をぐるぐると轉げて行つた。そのうちに偶然、大川の右の手はストオブの煙突の傍にあつた大きな鐵の火箸を摑んだ。……

その時まで盛んに抵抗して居た青野は、幾度か喉を絞められて危く息が止まりさうになつた。もうとても駄目だ、もうとても助からない、とうとう己は殺されるんだ！　彼の心を續けざまに斯う叫んだ。と、敵の手足へ懸命に武者振りついて居た彼は、突然横なぐりに大地へ叩きつけられて鋭く突き倒されたかと思ふと、何か磐石のやうな重い物が、ぐわん！と頭を痺(しび)らせたやうな氣持ちがした。つゞいて又ぐわん！と痺れた。ぐわらぐわらと山が崩れて來るやうな大音響が聞えた。顔の下にある床板が船底の如く奈落へめり込んで、彼の體は首へ錘(おもり)を附けられたやうに縱に倒まに沈んで行くらしかつた。それと一緒に眼だの鼻だの口だのから泥だか鉛だか分らない物が侵入して來て、腦の中を一杯に塞いだやうであつた。彼は次第に氣が遠くなつた。……蠅叩きで一と打ちに打たれた蠅のやうに、或ひは人間が紙屑になつたやうに、彼の死骸は醜く硬張(こはば)つたまゝ動かなかつた。……

* * * *

その晩の眞夜中の二時過ぎであつた。巣鴨の精神病院の角にある交番の前を、黒い背廣に茶の中折を被つた、八字髯を生やした一人の紳士が、駒込神明町の方へ悠々と歩いて行つた。巡査が後から呼び止めて誰何すると、彼は緩やかに戻つて來て、上衣の内隱(うちかく)しから一枚の名刺を出した。「東京帝國大學教授、法學博士、松村敏雄」と、名刺には刷つてあつた。

「小石川原町の〇〇博士の家へ碁を打ちに行つて、つひ遲くなつてしまひました。自分は此れから駒込の宅へ歸るところです。」

彼は澱みのない辯舌でかう答へた。

「はあさうですか、そんならよろしうございます。」

と、慇懃に巡査が云つた。

かうして大川は誰に見咎められる恐れもなく、田端の畫室のドーアの中へ自分の姿を滑すことが出來た。彼が持つて居た名刺は、かう云ふ場合の用意の爲めに、自分で活字を買つて來て好い加減な名前を刷つた物であつた。

第七章

靑野の家に變事があつたことは、明くる日の朝朱子に依つて發見された。それでなくても五味溜めのやうに荒れすさんで居た部屋の中は、一層亂脈に引搔き廻されて、椅子だの寢台だの机だのが滅茶々々に覆されて居る間に、靑野の體は仰向けになつたまゝ、ちやうど煙突の一本が倒れて居るやうにして倒れて居た。――が、其れはまだ完全な屍骸にはなつて居なかつた。明け方に息を吹き返した靑野は、凡べての記憶力を喪失して恐ろしい白痴になつたゞけであつた。

「ちよいと、お前さんどうしたんだよ。自殺でもしそくなつたのかい。」

かう云ひながら傍へ寄つて、額を撫でゝやる朱子の顏を、下からヂロヂロと不審さうに見上げて居る

青野の瞳には、純然たる痴呆狂の表情が露はれて居た。その唇は折々かすかに顫へるばかりで、何等の音をも發しなかつた。

現場へ臨檢した刑事は、何處かに證據を捜し出さうと試みたけれど、犯人の痕跡らしいものは一つも殘つて居なかつた。第一其處には、賊がたしかに戸外から侵入したと斷定し得る手がゝりさへも見當らない。勿論盗み去られるやうな物品もなく、側の「マアタンギイの闇」の繪だけが、大方格鬪の彈みか何かに、泥まみれに踏み躙られてずたずたに引き裂かれて居た。さうして其の繪を引き裂いた庖丁も、被害者の頭を撲つた鐵の火箸も、始めから此のアトリヱにあつた物で、毫も加害者を手繰り出す端緒にはならなかつた。嫌疑を蒙つて警察へ拘引された弟子は、半日も立たないうちに釋放された。大川も證人として、簡單に一應の取調べを受けた。結局犯人はどうしても發見されないので、青野の精神狀態の恢復を待つより仕方がなかつた。

暫くの間、事件は若い美術家仲間の噂の種になつて居た。「彼奴は度び度び詐欺を働いて、大分友達をひどい目に會はせて居るから、誰かに恨まれて復讐されたのだらう。」と云ふ說もあつた。「いやさうぢやない。社會の同情を買ふつもりで、狂言自殺をし損つたのだ。」と云ふ者もあつた。「あんまり弟子に夢中になつて發狂したのぢやないか知らん。」と云ふ人もあつた。いづれにしても、青野がさうなるのは當然の運命のやうに人々は思つた。

彼の痴呆狀態は日を追うてますます顯著になるばかりで、到底恢復の望みのない事が、醫師の診斷に依つて確められた。彼の唯一の保護者であつた大川は、彼を巣鴨の腦病院へ入院させて、時々自分でも

見舞ひに行つてやつたりした。

「青野君、君には僕が、此の大川が分らないのかね。君は自分の過去を忘れてしまつたのかね。君はえらい藝術家だつたのだ。非凡な天才だつたのだ。」

かう云つて狂人の眼を覗き込む時の大川の顔には、いつも青褪めた、痙攣のやうな笑ひが引吊つて居た。さうして、異様に落ち窪んだ、暗い、陰鬱な、仕掛けの壊れた機械のやうに眼窩の奥に嵌まつて居る痴人の瞳には、木星のやうな謎が意味深く光つて居た。――

「……さうです。私は天才です。私の魂は今でも立派に藝術の國土に遊んで居ます。私の魂は未だに活潑に働いて居ます。私はたゞ、内部の魂を外部の肉體へ傳達する神經を絶たれたゞけなんです。肉體と靈魂との聯絡を切られたゞけなんです。それを此の世の人たちは白痴と名づけて居るのです。あなたは多分、白痴と云ふ者がどんな幸福な境地であるかも御存知ないでせう。」

…………………………………………………………

實際、青野の腦髓は決して死んでは居なかつた。彼の魂は此の世との關係を失つてから、始めて彼が憧れて居た藝術の世界へ高く高く舞ひ上つて、其處に永遠の美の姿を見た。彼の瞳は、人間の世の色彩が映らない代りに、その色彩の源泉となる眞實の光明に射られた。嘗て此の世に生活して居た時分に、折り折り彼の頭の中を掠めて過ぎたさまざまの幻は、今こそ美の國土に住んで居るほんたうの實在であつた。「己の魂がまだ肉體に結び着いて居た頃に、己は屢々此れ等の實在を空想したり夢みたりした。」――――彼はさう云ふ風に思つた。彼はたしかに自分の故郷へ歸つたのに違ひなかつた。

それ等の多くの幻の中でも、最も頻繁に彼の腦裡を訪れたことのある妖艶な彼女、――あの美しい榮子の姿は、想像の世界に現れた時よりも更に完全に、更に莊嚴に、さながら美の國の女王の如き威儀を作つて、マアタンギイの閨よりも遙かに怪奇な、嵬麗な宮殿の玉座の椅子に腰かけて居た。彼女は、自分の足下に跪いて白衣の裾に接吻をする青野の項を撫でゝやりながら、朝な夕なに優しい慰藉の言葉をかけた。

「お前は定めし、今迄にも度び度び私を見た事があるだらう。お前が浮世に生きて居た時分に、お前を迷はした榮子と云ふ女も、お前の空想に浮かび出たマアタンギイも、みんな私の影像なのだ。私はお前の美に憧れる心を賞でゝ、眞實の國から假そめの國へ、大空の月が其の光を溪川へ落すやうに、自分の姿を幻にして見せてやつたのだ。眞實が影像に優つて居るだけ、それだけ私も彼の女たちに優つて居る。假りの幻の榮子をさへもあれ程熱心に崇拜したお前は、今こそ安らかに私の宮殿に仕へるがいゝ。人間の世に附き纏ふ悔恨も懊惱も、此の國には長へに跡を絕つて居るのだ。」

……白痴の青野のとげとげしく窶れた頰には、どうかすると、感謝に充ちたやうな涙が、夜露のやうにひつそりと結ぼれて居る事があつた。

秋の展覽會に出品された大川の作物は、素晴らしい傑作として新聞に雜誌に紹介された。專門の大家や美術記者の批評の外に、大川自身の物語つた苦心談までがれいれいしく掲載されたりした。「マアタンギイの閨」と云ふ言葉は、まるで芝居の外題のやうに人々の口の端に上つた。

その嘖々たる好評は社會の耳目を惑はしたばかりでなく、大川自身の良心をも欺くに充分であつた。彼にはいつしか、青野といふ人間が其れ程えらくはなかつたやうに思はれて來た。今になつて見れば、

自分が彼を恐れたのは、全く自分の買ひ被りに過ぎなかつた。自分の素質は、寸毫も彼に劣つて居ない事は明かであつた。けれども若し、あの時青野の藝術の生命を奪はなかつたら、自分はいつ迄も强迫觀念を打ち拂ふ事が出來なかつたかも知れない。その意味に於いて、靑野を殺してしまつたのはやはり自分の成効であつた。――勿論靑野の肉體はまだ生きて居る。だが、白痴の肉體が何にならう。彼奴は殺されたに違ひないのだ。――自分はウマイ事をした。自分はやつぱり、あのお蔭で天才になれたのだ。さう云ふ考へが起ると共に、大川の胸にはだんだん確乎たる自信と勇氣とが湧き上つた。さうして、明くる年の夏、再び彼が展覽會に出品すべく畫き上げた「マアタンギイの閨」の出來榮えは、去年の靑野の繪に比べて、優るとも劣つては居なかつた。もう大川は、疑ひもなく靑野を凌駕した。靑野を慈んで居た藝術の神は、今や大川に恩寵を垂れてくれるやうであつた。銀はたしかに金になつた。

モデルになつた榮子の評判は、大川の繪の噂よりも又一層喧しかつた。再び女優生活に戻つた彼女が、やがて公園の歌劇の舞臺に現れた時は、もう以前のやうな下藥の踊子ではかなつた。彼女の虹のやうに纖麗な姿態や、鳳凰のやうに眩ゆい衣裳に惹き寄せられて、滿都の靑年は先を爭つて其の劇場へ殺到した。凡べての觀客は、毒々しい愛嬌の漲つた肉體の魅力に誤魔化されて、彼女の技藝の拙劣さや、出鱈目な踊り振りを指摘する者は一人もなかつた。

だが、フットライトの光の中を飛び狂つて居る彼女が、永遠の國の女王の形を模造した、不完全な影に過ぎないのだと云ふ事を、白痴の靑野より外に、誰が知つて居る者があらう。

(完、大正七年七月作)



指紋

――私の不幸な友人の一生に就ての怪奇な探偵的物語――

佐藤春夫

R・Nは私の少年時代からの唯一の親友であつた。彼が二十の時に、その愛する藝術上の見聞を博めるために洋行をしてからも、數年間は折にふれて、パリから、フロオレンスから、ロンドンから、いろいろの面白い手紙を(それは私が今まで見た日本字で書かれた文章のうちの最も天才的なものの一つである)くれることを忘れなかつたが、彼がロンドンへ行つてから二年目、洋行してから六年目、一九〇七年八月十一日といふ日附のはがきを最後にして、それまでにだんだん文句の短くなつて行つた音信が、ぱつたり絶えてしまつた。それでも、私は成可く缺かさないやうに心がけて私からの手紙は出して居たのである。私の手紙は多分見て居たのであらう、發信者である私の手へ舞ひもどるやうなことは一度もなかつたから。併し、返事は一つも見られなかつた。私は私の唯一の親友の生活をかうして暫く見失つて居た。それを知りたいにも、その母を洋行前に無くして後の彼に

は、身寄りといふやうなものは一人もなかつた。さうして私にさへ手紙をくれないほどなのだから、日本に居る他の誰にも手紙を書いて居やうとは考へられなかつた。私は彼が異郷で戀愛にでも熱中して居るのかとも想像した。それならば何れそのうちに便りもあらうと思つて居たのに、それも空頼みであつた。私はとうとう「去る者は日に疎し」と思はざるを得なかつた。ところがそれから四年目である一九一一年に七月十一日のロンドンのスタンプ（彼自身は日附も何もして居なかつた）のあるはがきで彼は、思ひ出したやうに私に宛てて歸朝する旨だけを手短かに書いて寄こした。その後カイロから、シンガポオルから、香港から、上海から文句は何もない繪はがきをくれて、彼がロンドンから歸朝する旨を知らせてからやつと一年半ばかりを經た一九一二年もずつと暮になつてから、彼は思ひかけない私を訪ねて、ひよつくり私の玄關へ現れた。私は彼を一目見た瞬間に、「あ、健康を害して居るな」と思つた。彼は全く精力を消耗し盡した人のやうに見えた。さうしてそれは決して旅の疲れなどとばかりは言へない程度のものであつた。彼はどう見ても三十位の人とは見えなかつた。さうしてその一種異樣なふけ方は、老人のやうでもあるし、又、壯者のやうでもあつた。表情が非常に鈍くなつて、ただ目の光だけが寶玉のやうに光輝燦爛として居るのであつた。さう言つただけでは、他の人には彼のその時の容子は未だはつきりとは想像出來ないであらうが、唯あまり愉快な容貌でなかつたらう位には推察してもらへるであらう。私は今はそれ位で滿足して置かう。

十幾年振りかで會ひながら、彼は私に向つて決して樂しさうに話しかけやうともしないのであつた。私は我々が未だ少年であつた時に、彼がいかにブリッアントな座談者であつたかを回想しながら、人間

というものがかうも變るゝのであらうかと疑つた。彼はたゞいかにも物憂げな調子で私の話しかけるのに答へた。健康を害して居るのではないかと私が尋ねた時にも、(正直に言ふと私は少し想像を逞しうしてSyphilisではないかとも思つたのだ)彼はたゞ「いゝや」と一語いつたきりであつた。併し私は彼に就て私に關する友情を疑うのはよくないことはよくわかる。兎にも角にも、彼は日本へ來ると最先きに私を訪ねてくれたのだから。解らないことはそればかりではない。その時彼は「東京に住むつもりだ」と言つて置きながら、二三日すると彼は不意に長崎へ行くと言ひ出した。私は最初はそれを「たゞちよつと長崎へ行く」といふ意味に解釋した。長崎は彼の故郷であつたから。併し、彼は長崎で住むのだと言ひ直した時に、私は何故となく彼の言うことが解らない氣持ちがした、彼は長崎の生れであつたけれども、幼少の頃から東京で育つた。それに彼は長崎には彼の不愉快な絶交になつて居る親戚が居るといふので、以前からひどく長崎の土地までを憎んで居たからである。

彼はあたふたと長崎へ出發した。私は彼が長崎に着いたといふ報知だけは得た。けれども私は彼に手紙を書くわけには行かなかつた。といふのは彼が出發の時の約束を無視して、私に彼の宿所を教へてくれなかつたからである。

十年前の打解けた親友は、今では私には謎になつて現れて來た。さうして若し彼がそれきり私の目の前に現れて來なかつたならば、私が最後に彼に會つた時の彼の印象から考へて、私もスピリチュアリストの仲間入りをして、私は私の最も親しい友達の幽靈と——しかもそれをそれとは氣づかずに、數日間一緒に暮したのだと考へたかも知れない。實際その時も私には何だかそんな氣持ちもしないではなかつ

た。けれどもそれから半年ばかりの後に、私は再び私の「謎の親友」が、突然にも長崎から歸つて私の家へ來たのを迎へた。

その時には、彼は前よりはいくらか元氣がよかつた。さうして彼は、再び考へをかへて東京へ住むとに決心したこと、私に彼と一緒に生活する意志があるかどうか――即ち、その時には既に妻を持つて居た私の家庭へ彼が寄寓したいと言ふのであつた。

「さうすれば、私は君達の厄介になる代りに家を一つ建てて上げたいのだが……」

彼はさう言つて、それに對して即座の返事を與へかねて居る私に、私の顏をぢつと見つめながら、歎願する人の口調で、併しゆつくりと、低い聲で言ひ足した。

「ね……私をかくまつてくれ給へ。」

「私をかくまつてくれ」？この言葉を、私が初めて彼から聞いた時、私は非常な大事を豫想せざるを得なかつた。と同時に、若しやB・Nは氣が違つたのではあるまいかといふ考へが、突然胸に浮んだ。けれども、彼の說明を聞いて居るうちに、私の心配と疑問とは、幸にも少しづつ氷解されるやうに思へた。

彼は大要次のやうな事を英語で話し出した――多分私以外の人にあまり聞かれたくなかつたからであらう。それともそんな風な話をするには、英語の方が適當だと考へたのであつたかも知れない。實際、その時はさうでなかつたにしても、彼はそんな風な藝術的感覺を、以前はよく實生活の上に活用させて居たものだから。私としては、今ここでも彼の話を、彼の話したとほりのやうな英語で書けたならば、

さぞ趣があるに相違ないと思ふのだが、私には到底それは出來ない。いや、いかなるその語學の大家でも出來ないであらう。といふのは彼のその時話した英語は、單純で明晰で、それで居て非常に洗錬したリズムをもつた文字ばかりをわざわざ擇んだかと思へるやうな美妙な言葉であつたから。——それで、彼は言つた。

「何時であつたか、私が未だ君に對して手紙を書くだけの根氣を持つて居た當時に、私は多分君に Thomas de Quincey の"Opium Eater"を推賞したやうに思ふ。それともそんなことはなかつたかね？その前後のことだ。私は或る日ロンドンのイイストエンドで、一人の男に出會つた。その男はもとマドロスであつたといふので、今でも——その時でも、同じやうにマドロスの風をして居た。私はその男と居酒屋で向ひ合つた。二人は互に親愛を示し合ひながら醉ぱらつた。醉ぱらへば醉つぱらうだけ一層親愛の度を加へ合つた、全く見ず知らずの人であつたけれども。今思へば、私はあまり多分の好奇心を持つて居すぎた……私の一生は多分、「人間はあまり澤山の好奇心とあまり少しの意志とを持つてはいけない」といふモオラルになることだらう。それはそれとして、私はその男に向つて、「私はこれから後とても何時でもお前と遊び度い」とそんなことも言つた。最後に「今夜はお前の最も面白いと思ふところへ私を連れて行け」とそんなことも言つた。それでその男が私を連れて行つたところは、何處であつたと思ふ？それは阿片窟だつたのだ……。私はそこへ入りびたりになつた。君は勿論阿片の醉心地といふものを知るまい——阿片の醉心地といふものは、一口に言へば、藝術そのものの Ecstasy だ。五體のすべてを以て聞く美しい Extravagance だ。噫！少くとも、その頃ではさうであつたのに！」

彼はさう言つて深い吐息をした。さうして暫くは何か物思ひに耽るやうに、いかにも重苦しい憂鬱の表情を示しながら、何かを底に湛えた深淵のやうに沈默した。それがいかにも意味深げであつた。その理由で私はその時の沈默を忘れずに居たが、それは、餘程後になつて思ひ合されることがあつた。

暫くして彼は言つづけた——

「私に、三四年のうちに阿片丁幾の四千滴に相當する量を一日のうちに用ひねば居られなくなつた。私には君に向つて手紙一行、はがき一枚書くだけの根氣もなくなつた。併し、私には、いい事か惡い事か、未だ藝術上の野心も殘つて居た。さうして流石に阿片にばかり溺れて滿足して居れるほど、デカダンにはなつて居なかつた。私はせめてはその阿片の量をへらさうと努力した。けれどもそれも殆んど無駄であつた。私が日本へ歸らうと決心したのは、その時である。そこには阿片獄などといふものはない。私は早く其處へ歸つて健全な生涯に歸らう。私はさう思ひ立つた。佐藤君、私はその時魔睡の夢のなかでありありと君の姿をよく見たものだ‥‥

「私は一日一日と延びて居る私の決心を、敢然として實行することにした。さうしていよいよ歸朝の途に登る——正しい生涯に近づかうといふ前日、私はその夜、今夜こそこれが最後だと思ひながら、幾百度歩んだかわからない道——さうして普通の人は多分一生に一度も歩かないであらう細い道を辿つて、天國への入口よりももつと狹い扉をくぐつた。その地下室にはその夜も、マドロスのゼエムス（あの男は確かさういふ名であつた）が、私の來るのを當てにして金ももたずに、其處に居るのであつた。私は彼に「もう明日からは私を當てにしては來るな」とさう言つた。ゼエムスはその理由を尋ねたから、私は

歸國する旨を、正直に答へた。ゼエムスはお前の國には、こんな天國（阿片窟のことである）がなくつて可哀想だと言つた。私は彼には答へなかつた。併しゼエムスはちようど惡魔はかうもするであらうと思ふやうに私の耳もとで、その嗄れたぜえぜえ言ふ聲でうわ言のやうに囁きつづけるのであつた――旦那のやうになつてはもう駄目ですぜ、とてもこの魔薬はやまりません。もしどうしてもお歸りなら、せめては港々へお寄りなさい。ところは皆私が教へて上げます、港々の阿片窟のあるところを。いや、旦那などのやうな金持にはそんなものは無駄だ。それよりも手とり早く、港へ下りたら、「一番不意氣な着物を着た先生」（多分ポリスマンを指すのであらう）に、幾らかを握らせて――それは多ければ多いほどいい――さて空を指しながら「彼處はどこだね？」と聞いてごらんなさい。空を指して見せるんですよ。それが合圖だから。忘れてはいけません。いや、大丈夫、他のことは忘れても、情婦の顏を見忘れても、阿片の事に就てなら何でも、一生忘れる氣づかひはないのだから。旦那は今、そんなことは一切忘れるつもりで居るだらうが。それで若し其處が見つかつたらば、――きつと見つかるから――その家の奴にさう仰言い。「目の窪の三つある髑髏」が教へたと。さう言ひながら、彼はシャツの胸を押し開いて、肩のところの丸味を利用して入れ黑した眼窩の三つある髑髏をつき出して見せた。ゼエムスは尙も惡魔のギタアルのやうな聲で語りつゞけやうとした。私はあまりうるさかつたから、金をたたきつけてやつた。……私は其の後、船の中での幻に、極く平靜な月光の海上を進んで行く惡魔その物の船の高いマストに、眼窩の三つある骸骨のゼエムスが、ぶらさがつて働いて居るのを見たことがあつた……。

「私は船に乗る時に、錠劑になつて居る阿片をわざと三千粒ばかりだけ手に入れて置いた。それは私に

は十五日分にしか當らない。私はそれを船のなかでこつそりと極く少しづつ用ひて、だんだんと量を減しながら用ひて、君と再び會ふ時にはもうオピアムイイタアではなくなつて居やうと心に誓うたからである。それを果して實行したかどうかを咎めるな。私は最初は、あの時ゼエムスが言つた言葉が本當だらうか、それともうわ言か、或は金をせびるための出たらめか、それを確めるためだと私自身に言ひわけをしながら、さうして實際さういふ疑問を解きたい好奇心から、又告白しなければならないが、私の阿片はもう殆んどなくなつても居たから、私はカイロへ着いた時に上陸すると、思ひ切つてゼエムスの言つたとほりのことをして見た。ところがゼエムスの話したのは皆本當であつた。私は日のことも何も忘れて其處の阿片窟で睡つて居た。私は船の出帆に乘り遲れた。私はコンスタンチノオプルでも惡い日を費した。シンガポオルでも、香港でも、上海でも。その間でも私はだんだん量を減して行くやうに努力した。私は決してオピアムイイタアとして日本へ歸るまいといふ決心を翻さなかつた、私の道徳的な自覺からも、日本に阿片窟のないことの私自身にとつての不便を思ふことによつても。

「ところが上海に居る時である。私は其處の阿片窟の支那人から、「若し日本へ歸つたら、長崎M・B町十九番地の劉といふ支那人の家へ出入してやれ」と、さう一言云はれた。言うまでもなく其處にも阿片窟があつたのだ！」

ここまで語つて來た彼は、不意に何か言葉がものに突きあたつたやうに、驚いて口を噤んだ。私はただ彼の言葉にうつとりと聞きとれて居た。といふのは、彼の語り出す事柄が、それほど暗黒な事實でありながら、彼の言葉を通してそれを聞く時、現實的な力はすつかり消える代りに、何か童話風の詩を讀

ひやうな空想と感興とを、私に與へたから。さうしてそれから――彼自身の謎を私に解いても行つたから。

けれども今になつて思へば、それは彼の生涯をもつて物語つた怪奇な物語としては、ほんの發端に過ぎなかつたのである。

彼は根氣が無くなつて居るどころではない、寧ろ狂的に見えるやうな熱心と感興とを持ちつづけて居るらしく、他のすべてのことを忘れて居るらしく、家の設計を企て初めた。その間、彼は私にさへ一言も口を利かない日がつづいた。その設計を見た時に、これほど精細なさうして明確な、しかも不思議な間取りの圖を見て、專門家は我々の前で驚いた。家は半年ばかりの間に南向の丘の上へ建てられた。(それが卽ち今日私の住んで居るこの家である。大きくはないけれども、チャミングで、その上實に住心地がいい。これはあの當時外國から私にくれた彼の澤山の手紙と一緒に、正しく彼のこの世に殘して行つた藝術品の一つである)「阿片を用ゐることは絕對にやめる。しかしそれは卽座に出來得るものではない。私は少しづゝ量を減じて十五ヶ月の間には、きつと絕對にやめる」さういふ彼の堅い言質を信用して、私の家は彼のために彼一人の阿片窟になつた。さうして私自身も今では「阿片を喫ふ人」をかくまつて居るといふ秘密を持たねばならなかつた。私はそれが洩れることのないやうにと思つて女中さへ使ふことが出來なくなつた。R・Nはその點では私以上に用心深かつた。彼は七間ある家のうちの二室を彼自身のものにして使用した。そのうちの一室は家根裏であつた。さうして其處こそ、彼の秘密を恣にする

場所である。彼がどういふ風にして、それをして居るか、私は決してそれを見やうとはしなかつた。私はそんなものを見るのが怖ろしかつたのだ。若し一目でも見るやうなことから、知らず知らずにその方に近よつて、自分自身もオピアムイイタアにならないとも限らない、私にはさういふ誘惑に對する脆い性質があつたから。こんなわけで私は阿片に就ては何の知識もない――R・Nの口から聞いた事以外には。併し乍ら、私は阿片の夢がどんなに不快にR・Nを襲ひつつあつたかといふことだけは、ここで述べることが出來る。私は夜中に、或は白晝に三階になつて居る家根裏の一室から、その床と二階の天井とを透して、さうして家ぢう全體に、むしろ私の世界全體にまで擴がりながら、彼の呻き聲が、眠つて居る、或は書物を見て居る私にまで聞えて來た。それは丁度死を面前に見て居る病人――寧ろ病獸のやうな物凄さで、私を驚かせ、苦しませ、歎じさせ、心配させ、又正直に言へば腹立たせもして、それがあまり長くつづく時には、私自身さへもその聲に合せて呻り出しさうになつた。事實、さうしたことも屢々あつた。或る日のごときは、どうしていいか解らなくなつた私をして、とうとうこの靑髭部屋（ブルウベアズルウム）へ驅け込ませたほど物凄く、呻きつづけ、叫びたてるのを聞かねばならなかつた。私はその時には彼に對する心配と自分自身の腹立ちとを兩方等分に同時に感じながら、思はずあの狹い急な家根裏への梯子を飛び上つた。併し、あまりの不氣味さにしばらく其處に突立つた上、決心をしてその部屋へ入らうとした。小さな扉には固い錠があつた。私は合鍵をとり出した――ひよつとすると、今、R・Nが死にかかつて居るのではないかと思つたから。私は扉を三分ほど隙けて、先づ一とほり内部を窺うた。その時は白晝であつたから、晝の小窓から差し込む夕の日が、このうす暗い部屋のなかへ帶になつて流れ込ん

で、それの一端が、寝椅子に打倒れたまま身動きもせずに居る彼の横顔をまともに照して居た。その南の小窓はちようど獄窓にそつくりであつた。その上にR・Nのいかなる觀念からであつたか、獄窓と全く同じやうな嚴重な鐵格子さへ嵌められて居た。それ故、部屋に晴れがましいやうに當つて居る日影にも鐵格子の影が縞になつて投影して居た。その小さな日向には、彼の愛育して居た若い小猫が、平氣ですやすやと眠つて居た。それが私には憎いやうでもあつた。私は思ひ切つてつかつかと部屋に侵入してR・Nを呼びかけた。彼は、呻き乍ら「何だ」と問ひ返した。そんな狀態に居ながら普通の狀態の人のやうに會話するのが、その時私には最も不氣味に感ぜられた。私は手をかけて彼を揺り起した。彼は私のその動作で初めて目を開けたが、私をいかにも不思議らしく、見知らぬ人のやうに見上げ見下ろして居たが、

「おゝ、佐藤君！」

不意にさう言つて、彼は寝椅子の上によろけながら跪座しながら、私の體を抱くやうにして、彼はさめざめと泣くのであつた。可哀さうに、かうして私の友達は頭が腐つて、狂氣しかけて居るのだ、さうに違いない、と私はその時さう感じた。さうして私もついセンチメンタルになつて涙がこぼれさうになつた。

けれども、これらは彼の極く惡い狀態に居る時であつて、そんな狀態は一週に二度か、多くて三度位しかなかつた――呻り叫ぶやうなことは。さうして幸にも、彼の阿片の量は少しづつは減じて行きつつあるやうであつた。平靜な日も(それが何の加減であるかを私は知らない)十日に一度位はないではなか

つた。その日には、彼はあの童話風の空想と壯麗とを無制限に含んだ彼の見聞談や、或は實に奇妙な事柄の上に奇妙に組立てられた——それで居て明断に私を同感させるやうな奇論を私に聞かせて私を蠱惑させた。實際、彼の意見は事毎に不思議であつた。しかも彼自身にとつては、それは極く平凡な普通な見解としか思つては居ないらしかつた。一例を言へば、活動寫眞に就てである。彼は活動寫眞を藝術の最も新らしい立派な一樣式だ、さうして科學が藝術に向つて直接寄與した唯一のものであると斷言した。それはヴアルガアなグロテスクな、また、フアンタスチイクな美だ。それに就て、彼はなかなかと私にその理由を說明して聞かせた。それは何等の間違つた點のない立論で、且つ一篇の散文詩のやうな議論として私をよろこばせた。(私はせめてはそれだけでもここへ書いて見たい。しかしこの原稿の紙數や〆切りやの關係から、必要な道草も喰つて居られないことを遺憾とする。併し、何時か好機を得て彼が私に聞かせたうちの私を敬服させた事柄を、彼の代りに私が書き列ねるであらうことを約束する。)彼はさういふ議論だけではなく、實際に於ても活動寫眞を異常に愛好して居た。子供がさうする以上に愛好して居た。活動寫眞は阿片の夢のなかの極く平凡なものに似て居る。私はオピアムイイタアとしての初期には、あれ位のものをよく見たものである。それが私にとつてなつかしくもあり、悲しくもある——と彼はそんな事も言つた。さうして一ケ月に精々一度位、彼が外出出來るやうな日には、必ず私や私の妻を淺草へ誘ふのであつた。私の妻はこの半狂人と一緒に町を歩くことを、否、一緒に住んで居ることをもひどく好ましく思つて居ないらしかつた。その上それを言ふことを私にも遠慮をして居た。それが私にもよく解る。又無理のないことでもある。それ故、彼が外出しやうと言ひ出す時に、たとひそれがど

れほど私にとつて多忙な日であつても、私は何時でも彼を連れて外出するのであつた。それが私のこの友達への義務でもあり、又私の妻への義務でもあつた。

或る日であつた。私はまたしても淺草の活動寫眞へ彼のお供をしなければならないことになつた。私は彼の擇ぶままに、D館の「女賊ロザリオ」といふ寫眞を見ることにした。氣がついて見ると、その日は日曜だつたものだから、我々は電車のなかでも、D館のなかでも滿員の人込に苦しめられた。「女賊ロザリオ」といふのは、見た人もあるかも知れないが、米國のグリンフラグ會社の傑作ださうで、表題のやうな女賊を頭にした盜賊達の出て來る探偵物で、筋はあまり目さきの變つたものではなかつたが、畫面のとり方にはなかなか繪畫的な、それで居て清新なところがあつた。それから女賊になる某といふ女優は、なかなかチャミングであつた。殊に男裝のやうな乘馬服で出て來るところが就中よかつた。R・Nはフキルムのとつつきから——あの綠の旗がひらひらと風に飜へるグリインフラグ會社のマアクを見るときから、即にもう白晝の幻を樂しむ人のやうに、場所も、時間も、傍に私の居ることも、大勢の群集に挾まれて居ることさへ忘れたらしく、恍惚と見入つて居るのであつた。そのいかにも狂人らしい喜び方の表情が、寧ろ私を悲しくした——この時ばかりではなく、毎時もこんな機會にはさうであるが。畫面はずんずんと轉展して行つた。ちようど、女賊ロザリオがその子分の運轉手ジョンソンといふ男と、或る酒場の片隅で何かのたくらみを耳打ちするところであつた——畫面は彼等の表情を見せるために大映(おほうつ)しになつた。初めはロザリオの顏だけしか見えない。ロザリオは見かけはいかにも可憐で高貴で若い貴婦人のやうな顏を、強い光の逆光線で、我々の眼の前へ大きく現した。さうしてにつと皓齒を見せて笑

ふ。ロザリオの命令を承知したヂョンソンが、大きく頷き乍ら、その凄い顔をひょいと見物の方へふり向けた、

「ユー！」

彼は突然こんな低いけれども鋭い叫びと一緒に、むづと私の片腕をつかまれて驚いた。

「おい、君どうしたのだ」

私は思はず動悸を高めて、私の腕を捉へて居るR・Nをうす暗がりのなかに凝視した。こんな人込みに揉まれて、R・Nは、春先きでもありてつきり發狂したと思ひながら、R・Nは、併し、

「いや何でもない、何でもない。」

さう言ひながら、私の二の腕を離すと直ぐその手で彼の額の汗を拭うた、別段暑い筈はないのに。併し私は彼のその二度目の聲が案外落着いて居るので少しは安心もした。私はもう歸らうと言つたけれども、彼は返事さへしようとはしなかつた。彼は再び熱心に、けれども以前のやうにうつとりと見恍れるのではなく、眼を鋭く光らせながら眺めつづける様子だつた。……ロザリオの盗賊團は、日常決して手袋をその手から外すことがなかつた。けれども運轉手ジョンソンの手袋は何時の間には擦り切れて居た。それを、その職業のために指の感覺が幾分鈍つて居るジョンソンは少しも氣づかなかつた。さうして或る犯罪の場所へ、うつかり指紋を殘して來た。その指紋が再び大映しで顯微鏡下の或る黴菌か何かのやうに不氣味なほど擴大されて見物の目の前へ現れた。

「よし！さあもう歸らう」

R・Nは、再びこんなことを叫びながら、私の腕をとらへると、それをぐつと壓へ、犇き合つて居る見物を押し分けて、私を外へ連れ出さうとした。

「嗟、R・Nはとうとう本當に氣が違つた。」私は心のなかで、さう呟きながら、彼のするとほりになつて外へ出た。最初、私は彼が私をどうかするつもりだらうと考へたのだ。が、別段そんな樣子もない。外へ出て白晝のなかで見ると、R・Nはその疲れ切つた顏の上に何だか薄笑ひをさへ帶びて居るのである。彼は默々として、あれきり一語も言はずに私と列んで歩いた。列んで電車へ乘つた。それから彼が再び口を利いたのは、私が須田町で彼に乘り換へを促した時であつた。彼は私が立上つても、やはり座つたままで、「私は丸善まで行く積りだ」とさう言ふのである。私はこの狂人をどうするわけにも行かなかつた。さうして私も彼に從つて丸善まで行かなければならなかつた。丸善の前まで來るのを待兼ねて彼は立上つた。眞先きに電車を下りた。丸善のあのU字形の階段を、彼は驅け出さんばかり性急に上つて行つた。

「フランス語か英語かで書かれたもので、指紋の研究のオオソリチイになる書物はないか」彼は、店員に向つてさう尋ねた。さうして店員が、英語にもあるにはあるが、獨逸語ならば更にいいのがあると答へた。R・Nは、それならばといふので英語でも獨逸語でもそれに關するものならば皆買はうと言つた。さうして可なり大部な書物も二三冊あるにも拘はらず、R・Nは未だそれだけでも滿足出來ないと見え、その他のそれに關する研究書目をすつかり調べさせて、それらのすべても悉く大急ぎで取寄せるやうにと依賴した。その外に獨逸語の研究に必要な書物を、文法書やら辭書やら、それに店にあつた例

の指紋の書物の七八冊をも加へて、殆んど積上げて二三尺もある程の買ひ物をした。そのうちの英語で書、九一冊だけは彼のポケットへ納めて、あとは出來るだけ早くとどけるやうにと言ひながら、彼は私のアドレスと私の名前とを書き殘した。この時ばかりではなく、何か名告りをしなければならぬやうな場合には、彼は大てい私の名を告げて居たやうである。亞米利加ロザアンゼルスで發行される週刊の活動雜誌も私の名宛てで、彼のところへとどいて居たから。こんなわけで、若しこの文章が自然、丸善の店員諸氏の誰かの目に入るやうな機會があつたならば、序に言つて置きますが、あの時、奇妙なちよつと讀む人の少ない書物をあれほどどつさり買込んだ、奇特な研究家で且つ奇特な購買者は、實に私ではなかつたのである。それ以來丸善では今でも私あてに雜誌「學燈」を送つてくれて居るから、ちよつと此處へそれを書いて置く）その不思議な熱心な指紋の研究者は、改めて言ふまでもなくR・Nである。彼は丸善の店を出るや否や、電車のなかからそのポケットのなかの一冊を耽讀し出して居た。

その二三ヶ月の間、私のこの不幸な狂氣の友人は、何の爲めであるか、再び家の設計にとりかかつた時の――否それよりも幾層倍かの狂氣の熱中をもつて、指紋の研究に沒頭して居た。就中、最も私を驚かせた事は、彼が獨逸語の書物を讀むために、獨逸語をわざわざ研究し初めた一事である。しかもその結果は實に超自然的であることを知つて、私は更に更に一驚を喫しなければならなかつた。いかに英と佛の二國語をマスタアして居るとは言へ、この狂氣のR・Nは二十日足らずで、自由にその獨逸語で書かれた書物を充分に讀みこなしたからである。好んで誇張して言へば、語學的才能の全くない私は、あの使徒行傳のなかの奇蹟――主が昇天して後、四方に傳道した彼の弟子達がその地に到るや否や、直ち

に異邦の言葉を解し話し得たといふ奇蹟を、まのあたりに見るやうにさへ思つた。それ等の彼の讀書の間を、彼の非常に愛して居た猫は、ぢつと彼の書物の前に坐つて、彼の主人と一緒にその書物を眺めて居るのを私は屢々見た。私は妻にも言ひつけて、決してこの不幸な友人の心に逆はないやうに、その上にも注意せよと告げた。

或る日、突然、この指紋研究家は長崎へ行かうと、厄介なことを言ひ出した——今度は阿片を吸ひにではない、是非とも君にも行つて貰はなければならない、とさう言ふのである。もう秋の初めになりかかつて居た。私はN展覧會へ出品するかも知れない心組で描きかけた、私の畫を捨ててでも、やはりこの狂氣の友人に同行しなければ氣が濟まない。氣候の關係であらうか、否、それよりも指紋研究に凝り固つて以來、不思議と阿片を用ゐたり、呻つたりしなくなつた彼は、その頃ではよほど活氣づいては居たけれども。私は同行した。R・Nは例の通り汽車のなかでも、重苦しく押し默つて、その代りには、彼は彼自身の指でもつて、絶えず彼自身の眼前の空間へ文字を書いて居るのだつた。始め私はそれを唐草模樣かとも思つた。しかし氣をつけて見ると、それはザザザザザとその同じ文字を幾度でも、幾度でも書いて居るのだつた。それが幾時間かつづくとそのうちその單語がだんだん文句に變つたやうだ。道連れはありながら話相手もない徒然な汽車のなかで、私はそんなものをでも觀察して居るより外に仕方がないのであつた。始めその文句は一向解らなかつた——何しろ非常に早く空間に書かれる文字なのだから、然もその上にそれが熟練されない私の語學だから。けれどもそれは少しは讀めるやうになつた。それは私の觀察を誇ることには決してならないであらう。寧ろそれ等の文字がどれほど繰返し繰返しされた

かといふ事實を示すだけだ。空間の文字は幾百哩かの間を次のやうに走つた――Provided that there were never two finger patterns quite similar in the world ....後はどうしても解らない。「世の中に全く同一の指紋が決して二つないとすれば....」やれやれ、まだ指紋のことだ。一體R・Nは何を考へて居るといふのだらう？そのうち彼の氣分が私自身にまで乘り移つた。私は口のなかで言ふ、それが口について私を困らせた。廣島を過ぎたころには、私はそれをつひ口に出して言つた――Provided that there were two finger patterns quite similar in the world ....するとR・Nは耳敏くそれを聽とつたが、別だん、驚いた樣子などはなく卽座に日本語で答へた――

「さうとも、それが問題の中心さ。私の見たのが夢でさへなければ。」

私はR・Nの意志のまゝに、決して途中下車などをせずに、門司へ來てもそこの連絡船を待合すほんの二三時間を休んだきりで、眞直ぐに長崎まで彼について行かねばならかつた。我々は東京を出てから三日目(？)の朝に、長崎の停車場へ下りた。彼は私にあたりを見まわす餘裕さへも與へやうとはしないで、大股に歩き出した。丸善の二階へ登つた時ほどの早足であつた。停車場を出ると目の前へ眞一文字に開いて居る海岸に沿うた片側町の大通りを、眞一文字に南の方へである。さうして五六町（か或はそれ以上）も歩いた頃、彼は尙も眞直ぐに歩みかけて居た足を、少し引き返しながら「こちらへ曲らう、その方がいい」と獨言のやうに、又私に相談するやうに言ひながら東の山手の方へ直角に曲つた。その

路は巾三間位の堀割に沿うて居た。さうして目の前には高い山が目に爽やかに聳へて、その中腹には寺の山門のやうなものも見えた。太陽はその山から少し高いところに昇つて居た。船の汽笛が聞えて來る。學校通ひらしい子供がちらほらと見えるその道を、又二町も行くと、今度は古い比較的丸く反れた石橋――それには四角な石の欄干もついて居た。その橋を渡る時に、後をふりかへると、高い黑く聳へた教會堂の塔の窓がらすが一枚目を眩しく反射して居たことと、それからその橋の下を覗くと未だ青い到底食ふことは出來ないやうな蜜柑が、ちようど今そこへ投げ込まれたやうに印象深く水水しく、折からの上潮に漂うて居るのとを私は見た。もう一度南の方へ曲つた我々は、砥石のやうな自然石をでこぼこに疊んだ細い不規則にくねつた道を歩いた。小鳥を軒につるして居る家が右側にあつた。道は少しつづ勾配になつた。だんだん急勾配になつた。それは長崎の古い市街らしく、小さな家ばかりで穢いけれども趣のある町であつた。勾配を昇りつめた時に、私は腰を延しながら、立とまつてポケットから出した煙草へ火をつけた。家と家との間から港の海とそれを包んだ岬の一角とが、三尺ほど見えた。さすがに少しは疲勞したのであらう、R・Nも其處では私と一緒に立ちとまつた。けれども私より先にまた歩き出した。石疊のある道は山の中腹を半圓形に曲つて山の東の側面へ出ると、太陽が眞上から我々の顏にあたつた。兩側の家は最も今までのうちで汚く、兩側にそれらの家があつても道は市街のなかとは考へられないほど野蠻な傾斜で滑るやうに落ちて行く。工場の鐵板をたたく音が港らしい氣分をもつて町全體にひびき、睡眠不足の私の頭にかんかんひびいた。道は全く平になつた。R・Nは何か私に言ひかけたけれども、今度は私の方で口を利くのが厭やになつた。小さな支那料理の軒が殆んど軒並に、五六軒

置きに見られるところへ來た。R・Nは少し自信がないらしく左へまがつたが、五六町行くと又左へ曲つた。さうしてすぐ右に折れた。其の道は今までのそれと同様にやはり石甃のある、併し今までのそれよりはもつと狹くつて精々一間位の露路であつた。その露地が三四町一直線に、道といふより深い渠溝の感じをもつてつづいて居た。それからはよく覺えられなかつたが――我の不注意と、それ以上にその道筋の複雜とに依つて――我々はやがて一軒の家の前に立つた。「ふん、空家になつた」とさう言ひながらR・Nはその空家の隣りである家へ這入つて居つた。そこはバアであつた。今起きたばかりの樣子で、顔にそばかすのある三十女が、やつと掃除の塵の納りかかつた部屋に立つた居た。その女は外國人である。けれども私には何國人であるかは解らない。但し、英語で茶を言ひつけたR・Nの言葉に從つて、我々に紅茶を用意した。茶をもつて來た女にむかつて、R・Nは何か簡單な、しかも私には解らない言葉を言つた。女も同じやうに私に解らないことを言つた――何れも英語ではあつたけれども。多分私の直覺は二人はあまり上品でない冗談でも言ひ合つたらしかつた。女はそれを言ひながら我々の傍の椅子へ腰かけた。さうして兩肘をついて二重になつて居る顎を固めた兩手の拳の上へ乘せた。R・Nはそれを見ながら、ポケットからシガレットケエスを出して、それを彼の女の前へ、その木の卓の上へカルタを打つ人のやうな手つきで投げ出した。さうしながらR・Nは喋り出した。女が答へる。それから女の方が餘計に喋り出す。私には大抵はよく解らない、早口でもあるし、俗語ばかりのやうでもあるから。併し乍ら、いくらか解るところもないではない――例へば、「隣の空家はあれは貸家であらうか。」「然うです。けれどもあんな家をかりてどうなさるの。」「私はお前さんと同じ店を開いて競爭しようと思う……

東に角、貸家か？」「貸家は貸家です、併し、借りる人もなければ、借りたつて住めるものではない」「何故？そんなに荒廢して居るのか」「否、併しあそこは荒れて居る以上だ。あの家は化物が出るのです！」「化物！そんな馬鹿なことを私は信じない」「あの家では夜中に天井から血の滴るのを見た人もある。その滴る一滴一滴の音だけならば、彼處に住んだすべての人が、五家族――少くとも二十人の人が皆一様に聞いたといふ。私はそれを彼等自身の口から直接に聞いた。彼等は皆一週間以上を越えて住むやうなことは決してなかつた。今では隣人で、この家に就て知らぬ人は何人もない……」「この今の家主は誰だ、何町の誰だ？」「家主は知らない、けれども日本人の床屋、この裏の橋を渡つて眞直ぐ行つたところの日本人の床屋へ行けば解るだらう」「……」何か言ひながらR・Nは立上つた。さうしてポケットから五十錢銀貨をとり出したR・Nは、それを木の卓の上へ投げた。それがぴんと一つ跳ね上つて床の上へころげ落ちる。彼はその代りにもう一つの五十錢銀貨をとり出した。女は愛嬌笑をしてそれを二つ拾つて居る。R・Nは傍に居た私の存在をも忘れて居たらしく、一人すたすたと店を出ると、「ふむ、血が滴る？血が滴る？」とさうひとり言を呟きながら、その店と先刻の空家（これが多分以前の阿片窟ではないか知ら）との間の、巾四尺程な、やつと人間の一人が通れるほどの露路へ入つた。露地を出た。其處はすぐ堀割で、あの空家やバアの裏壁との間に一間か九尺か位の空地を殘して居る。露地の出口と殆んど一直線に、同じく巾四尺ほどの木の粗末な橋が二間ほどのその堀割を向側に渡して居る。その出口と橋との間の空地へ來ると、R・Nは不意に其處へ佇立した。其處へ突立つたまま、何か考へて居る。

「そんなところへ突立つてどうしたのだ？」

「ふむ、此處かも知れない、ふむ。」彼はさう言つた。併しそれは私に向つてではない、彼自身のひとり言なのだ。それから、小汚いバアを出てから、今初めて私に氣づいたらしく、私に向つては次のやうな事を言つた。

「君。ここを覺えて置いてくれ給へ！」

さう言つた彼は、彼自身の立つて居る場所を、彼自身の靴の下を指差した。それから二三歩後ずさりして、彼の蝙蝠傘の尖で、地上へ地面を愛撫するやうにそつと×の印をした。さて橋の方へ歩き出した――「土は汝の上に輕かれ」と呟きながら（それは外國で人を弔ふ言葉なのだ）もうこの男のすることは、解らぬことだらけだつたけれども、就中、この一年間ばかりの前後を通じてこの時のこのしぐさが、私には最も不可解であつた。それには何か深い意味がありさうに、其時私は考へた。が、すぐそれを打消した、どうせ氣違ひのすることだから、其上に私自身に關して言へば、私は不眠不休の旅行の爲めにとうとうよほどの神經衰弱になつてしまつたから。こんな日が若し十日もつづかれたら、私自身もR・Nと同じやうになるに相違ない。

R・Nは直ぐその「日本人の床屋」を見出した。彼は私に通辯せよと言つて、さうして、「あの堀の向ふのお化けの出る家は君が差配をして居るのか。それならば、私はそんな噂などには一向無頓着だから、それを借りるかも知れない。面倒だがちよつとなかを見せてくれ、」とさうその床屋へ私を通じて申込んだ。不愛想な床屋の不愛想な女房は、我々に我々が今通つて來たとほりの道を案内して、五つ六つある鍵をぢやらんぢやらん言はせながら前に立つて歩いた。さうして、再び狹い木の橋を渡り、×の印のあ

つたところを通ると、あの空屋の裏口を開けて、我々を先づ這入らせ、彼の女はその扉のところに、我々の物好きをうるさがるやうな顔附きで立つて居た。うすくらがりの家のなかは、かび臭かつた。どこかでこほろぎがないて居た。今我々が這入つて來た扉からの光線をたよりに、R・Nは、一つの窓を開けた。光り輝いた太陽の光が愉しさうに部屋のなかへ、ぢかに流れ込んだ。私は、以前、私の家のR・Nの家根裏部屋を覗いた時のことを思ひ出した。さうして早く家へ歸つて、或は家へ歸らなくとも一度ぐつすり眠りたい慾望で一杯になつて來た。R・Nは我々の思惑には一切無頓着で熱心にあたりを見まわして居る。家は表は古い煉瓦造りで内部は大部分木造になつて居る。大部分は、否、殆んどすべてが古煉瓦を疊んだ土間である。

「君、このうちをよく覺えて置いてくれ給へ。君をわざわざ此處まで連れて來たのは、この家を見せたかつたからだ。」

R・Nは私の耳もとでさう囁いた。「見給へ、天井（指さして）は古い。その割合に床（見下して）はごく新らしい。この家は四年前に手入れをした筈だ。――ちようど私が君の家へかくまつて貰ひに行つたころにね。」言ひつづけながら、彼は私を家の或る一隅へ、今は臺所になつて居るところへつれて行つた。「ね、以前はここに入口があつたのだつた――窖の入口が。だから見給へ（彼は彼の蝙蝠傘の尖でその床を、とんとんとたたいて見せた、さう二尺ほど距つた他の部分も。その二つをたたき較べた）どうだ。このとほりだ、少し注意すれば音が違ふのに氣がつく筈だ。」正直に言うと私にはその違ひはよく解らなかつた。彼は直ぐ私のその心を見拔いたらしく、「君にはまだよくわからぬやうだが、」さう言ひながら流し元

のところまで歩んだ。その流しといふのは二方は家の壁を利用し、他の直角な二方はやはり古煉瓦を積み上げて、その上に木の板を幾板か張り合せたものだつた。その流しは新らしく(卽ちR・Nに遡れば四年前に)出來たものと見えて、板の張り方などは極くぞんざいだつた。且つ新らしい板は住む人がなくて水を流されない爲めに、板と板との間にすき間が出來て居た。R・Nは目敏くもそれを見て置いたと見える。何をするかと思ふと、彼は絹糸(?)で出來て居る彼の手袋の片方をとり出してそれを嚙み解ぐした。手袋は縷々と解けて卽座に一間以上の糸になつた。どうするのかと尙も見て居ると、彼は彼の時計へついて居た小さな金メダルを外し出した。それが外れると、例の糸の一端へこの金メダルをさげて、それを流しの板と板との間から落し込んだ。金メダルの重さに引かれて、今までは流しの上にほぐし重ねられて居る糸は、だんだん下の方へ呑まれた行つた。彼はいかにもその卽座の考へに滿足したらしく、私の顏を見ながら會心の笑を洩すのであつた。實際その時は私も思はず叫んだ。

「成程！ずい分深い」

その時、ちようど今までは扉のところから何處かへ行つて居たものと考へられる例の床屋の女房は、

「未だ、お出でになりますか。」

さう、多少訝しさうに、又多少腹立しさうな大聲で、扉からなかを覗き込んで叫んだ。その聲が、妙に家のなかへ陰慘に反響した。R・Nは未だ先刻の笑ひを浮べたままで、私に囁いた。「あの女に金を一圓ばかりやれ。それから一二分間、いい加減なことを言つて斷つて居てくれ。私も直ぐ出て行く。」

私は彼の言うとほりにした。女は辭退しながらその金を受けとつた。R・Nも直ぐ出て來た。女は我

々に對してあまり無愛嬌だつたと氣がついたらしく、私には聞きなれない長崎地方の方言で、やはりあんな家は借りなかつた方がいい事、その家に起る怪事――それは物好きな人達が試みにその家にとまる時には決して何の變事もないのに、いざ人が住んだとなるや否や、直ちに噂の通りの怪事――夜の九時頃から二時頃までは毎夜必ず天井から血の滴る音がすること、…などを訥辯な口で話すのであつた。R・Nは今更のやうに非常な注意と陰氣な表情とでその話を傾聽して居るさまが、目立つて私にも看取出來た。我々は直ぐ床屋の女房とは別れた。その時、R・Nは言つた。

「おい、あまり急いで糸を上げたので、金メダルは糸から切れて、窖のなかへ落ちてしまつたよ。どうしたらいいだらう。」

「そんなに惜しいものかい。」

「いやメダルは何でもない。だがあんなものを落して置いては危險だ。」

「何が。」

彼は私の問ひには答へやうとはしなかつた。さうして辻待をして居た人力車を手を上げて呼んだ。車夫はR・Nを見ると、'*where?*'と變な英語で尋ねた。(それは無理もない事であつた。もともと外國人風の顏立なところへ、永らく洋行して居たのでR・Nは、日本人より外國人に近かつた、その風采に於て。)R・Nは「スティション」といふ。我々の車は東京の日本橋の裏通りの或部分や、下谷の何處だかによく似たやうな町を通つて居た…あまり疲れて居たので私は車の上で居眠りをして居たと見える。車の梶棒が下りたので私は始めて目が覺めた。我々はもうスティションへ來て居た。R・Nが車夫に'*where?*'と聞

かれた時、「スティション」と答へたのを、私は彼がその附近へ宿をとることだとばかり信じて居た。ところがさうではないらしく、「三時十五分にも滊車がある」などと云つて居るのを見て、驚いた。

「ねえ君、一晩ぐらゐは何處かへとまらうぢやないか。私にすれば折角來たのだから少しは見物もしたい。それに第一非常に疲れ切つて居る。今も車の上で眠つた位だ。」

「それはさうだらう。だが眠るのは、博多か門司か廣島か大阪か京都かにしやう。いや一層のこと東京へ行つてゆつくり眠らう――成るべく長崎から遠ければ遠いだけいい。實は長崎は私にとつて本當に厭やな記憶があるのだから。どうぞ勘辨してくれ。」R・Nはそんな事を言う。それから彼はポケットを捜しながら、「さうだ、忘れるところだつた――僕も大分疲れて居る――これを出さなけや」見ると、彼は豫め用意して居たものと見える、二通の外國行きの手紙を持つて居た。

「この手紙こそ僕の運定めだからな。」

私には今更のことだが、何のことだか解らないことばかりだ。この暴君のやうな、氣違ひのやうな、又非常に多忙な探偵のやうでもあるこの友達のおかげで、私はとうとう長崎も見ず、眠る間もなく、――食事は朝も晝も停車場の食堂で食つたが――三時十五分の滊車に乘らねばならなかつた。滊車へ乘ると頭は一層混亂する。來る時汽車のなかで覺えた例の奇妙な文句が、汽車に揺られて居ると何時の間にか、車輪の音と調子を合せて思ひ出されて、それが口について私を苦しめ出した――*Provided that there were never two finger patterns quite similar in the world.... Provided that there were never two finger patterns quite similar in the world....*（以下何百遍でも）

珍らしくも突然私の部屋へ入つて來た彼を見ると、手に開けたまゝで二つに折つた雜誌か何かを持つて居る。それは或る日の灯ともしごろだつた。彼はその手にしたものを、私の目の前へつきつけながら、何時にない活氣を帶びて言つた。「これを見給へ！これを！」實をいふと、その頃には既に彼に對しては心配や不安を通り過して、寧ろ彼の一擧一動に好奇心を動かし初めて居た私は、彼の言うまゝにそれを手にとつて見た。そこには十五六行ばかり、赤いインキでアンダアラインした場所がある。インキの色は新らしくごく鮮かで、その英文は譯して見ると大體次のやうな意味だ——

ウキリアム・ウキルスン、その人はグリンフラグ會社の專屬俳優として、「XYZ」を初舞臺として、「女賊ロザリオ」「汽車泥棒」其外の映畫に現れて、端役ではあつたとは言へ、江湖の活動寫眞愛好家に依りてその深刻なる藝風を認められ、それに依つて多大なる將來を囑目され居たるウキリアム・ウキルスンは、十月二十七日突然行方不明となつた。その原因は全く知るべくもないとは言へ、彼は元來英國風の姓名を名乘るにも不拘、獨逸人らしき風貌を具備して居る點より判斷して、時節柄多分獨探なりしものが、それの發覺の心配のために、この怪しむべき擧動に出でたるものなるべしと評判されて居る。何は兎もあれ、我々は活動寫眞愛好者の立場よりして、この有望なる少壯俳優を、突然我々の眼界から見失うたことを最も惜しむものである。

その間、私の眼の走るところをぢつと凝視して居たR・Nは、私が讀み終つたのを見るや否や、言つた。

「おい、そのウヰリアム・ウヰルスンといふのは、そら「女賊ロザリオ」のなかで運轉手ジヨンソンになつた男だぜ。……まあ、私の部屋へ來なさい。君は私を狂人だと思つて居るやうだが、或は本當にさうかも知れないが、私は今日こそ君に對して、私が君の家にかくまつて貰つて居た本當の理由を告白するつもりなんだから。」

彼の部屋へ誘はれた私は、彼の机の前で彼と相對して腰をかけた。彼はしばらく、ほんの二三分默つて考へ込んで居たが、それは今から私に告げやうとする事柄の順序を考へて居たのだらう。彼の不意に立上つて、先づその混亂した部屋の片隅のトランクの上にあつた彼の手袋を拾ひ上げた。さうして、その双の手袋をばたばたと打合して塵を拂ふと、何のつもりだかそれを兩方の手にはめた。(今のさつきも、彼は私が狂人だと思つて居ることを狂人らしい敏感で看破して、私に不平を言つたけれども、實際彼のすることとは、この通りに一つ一つ狂人らしいものである。)手袋をはめると、彼は再び机の方へ歸つて來た。さて錠を下して居る机の抽斗を手袋のはまつた幾分不器用な手つきで開けると、中から大事さうに一つの金色の時計をとり出した。手袋のはまつた手でそれの龍頭を押して、兩蓋の時計の、文字板のある方の蓋を開いた。さうしてから、初めて氣がついたらしく、私にその机の上にある燭臺へ灯をともすやうにと賴んだ。私は言はれたとほりにした。部屋のなかは電燈の光と燭臺からの光とで、手のまわりのすべての物の影が二つづつになつた。R・Nは手にもつて居た時計を、その蠟燭の光のすぐ前にかざした。

「どうだ、君。この蓋のうらに見える指紋が見えるかい。」 成程、R・Nからさう言はれて見ると、そこには我々が硝子や鏡や陶器や或は金屬の光滑な表面から、偶然にも屢々見出すであらうやうな指紋が、

一つではあるが、極めて鮮やかに、纖細に、印せられて居るのであつた。それは勿論人間自身の手の油で偶然描き出されたものである。私は一見してそれ丈けのことを認めると、私の手を差し出してそれを自分の手にとつて見やうとした。併し、「その時計へはそのどんな部分へも決して他の指紋を殘すやうなことがあつてはならないから、若しこれを見たいなら私のやうに手袋をはめるがいい」とR・Nは言ふ。私は面倒だから手をひつ込めると、彼はまた不機嫌に「手にとつて見よ」と言ふ。私は彼から手袋を片手づつ借り受けて、そんなことをしてまでその時計の指紋を見つめなければならなかつた。私がしばらくそれを見入つて居ると、彼は言つた。

「よく見給へ。それがウヰリアム・ウヰルスンの指紋だよ。少くとも女賊ロザリオの手下の運轉手ジョンソンがマホガニィの机の角へ殘して行つた指紋だよ。何故つて、それはあのフヰルムに表はれる指紋と全く同一なものなのだ。」

「それやさうかも知れないね。が併し」と私はこの狂氣の友人の妄想を憫れみながら、寧ろ努るやうに言つた。「が、併し、私はあの時の大映しの指紋を見覺えては置かなかつた。指紋などといふものはいかに大映しになつたつて覺え込まれるわけのものではない。尤も複雜な世界地圖を幻に見て、その通りを記憶して置くやうなものだからね。」

彼は大きく頷いた。「君の言ふことは一々尤もだ」と、私の少々皮肉なつもりの言ひ分を彼は眞正面から正直に同感しながら、ひとり言のやうに、「ふむ、これはやはりここから說明し出してはいけない。」彼は立上つた。さうして部屋のなかを、くるくる歩きまわつた。さうしてやうやう話し初めた、やはりく

るくる歩きながらである。

彼は語り出した。「君、君は長崎に阿片窟があることは——あつたことは知つて居たね。否、知つて居たどころではない、ついこの間君と一緒にその家のあとへ行つて見たのだつけ。私は少し頭がわるくなつて居る。が、決して氣が違つて居るのではない。(自分で氣違ひではないといふ氣違ひほど困つたものはない、と私は思つた) 私は外國から歸つてすぐ、その阿片窟へ行つた。私はどうしても阿片なしでは生きて居られなかつたから。私は君にかくれてそこで半年住んだ。私は外國人らしく振舞つた。阿片窟の支那人へ高い金を出して其處へ住込んで、阿片を喫つた。その時の氣持ではもう一生を棒にふつてもいいから、阿片に惑溺する覺悟だつた。それを私は半年で歸つて來た。それには深い理由があるのである。君、僕を恕してくれるだらうね。私は未だ君にさへ秘密にして居ることがあつたのだ。私は長崎でひよつとすると人殺しをしたかも知れんと、思つて東京へ逃げて來た。さうして君にかくまつて貰つて居た。が安心し給へ。私は決して殺人者ではなかつたのだよ。殺人者は彼奴だ。てつきり彼奴だ——ウヰリアム・ウヰルスンだ。あの活動俳優のジヨンソン——ではない、ウヰリアム・ウヰルスンだ。」彼は小休みなく苛々するやうに歩きまはつて居る。言うことがひとり言のやうになる。時々、私を思ひ出すと見えて、君とか佐藤君とか呼びかけるが、全く話し方は一人言の調子なのだつた。さうして大體次のやうなことを話しつづけた「或る晩のことである、私は何時ものとほり阿片に耽つて居た。さうしてうつらうつらと魔睡の夢を見つめて居た。その夜自分の夢に現れたのは、一面の湖水を前景にして——その湖水は實に度々私の夢に現れたものだが、それは非常に靜かで、最も碧く、海よりももつと曠漠として

居た。だが私はそれが湖水だといふことをよく知つて居る。といふのは、その海のやうに曠漠とした平靜な水面の對岸に、やはりそれと同じやうに巨大な建築物が見えるからだ。それは自然の風景を十二倍した位の巨大さだ。その晩の風景は今も言うとほり、湖水を前景にして自然を十二倍した巨大さで或る古城が現れた。その古城の未だ後には回々教の殿堂だと見えるドオムが、やはり少くとも自然を十二倍した位に、古城の凹凸のぎざぎざや銃眼のある城壁に半分隠されて重り合つて居る。城壁の後に回々教の殿堂といふ對照は理智的に考へるといかにも飛びはなれた組合せではあるが、夢のなかではそれが最も合理的なリズムで調和されて居た。さうだ、それに明るい月光が照して居た——私は水さへ見ればきつと月を見た。月さへ見ればきつと水を見た。銀のやうに廣漠な水面の夢なのだ。さうして銀のやうな光が降つて居る。その水面から時々ライラックの芽が出て、ずんずん成長して見て居るうちに大木になつて花が咲いた。白い花だつた。白い花だつたところを見るとライラックではないのかも知れない。梨の花かも知れない。それが、その一本の木と同じやうに生育し花を開くところの無數の木によつて、一夜の夢のうちに深い大きい森林になつた。花ざかりの森林である。然もその森林はやはり水面にあるものと見える。水面がどうかした機みでごく靜かに大きく揺れる時には、同じやうに、この水の上に浮んで居る花ざかりの大森林も、底氣味惡く、船暈に似たやうな不快を私に感じさせて、ゆらゆらと動揺した。そんな都雅な、又、より以上に馬鹿げた、けれども壯嚴な風景だの、或は天に冲するやうな巨大な機械——それには金屬性のさまざまな形が、「混雜の整頓」といひたいやうな、譬へば Albrecht Durer の構圖の或るもののやうな趣に、ぎつしりつめこまれて居る巨大な機械——金屬の多様多形の破片から成り

立つて居て、ごく靜かに齒車から齒車を渡つて、だんだん波及して、大仕掛にのろのろと運行する奇妙な建築物、そんなものが阿片に醉つて居る私のよく見る夢で、それ等のものが或る期間を置いて間歇的に交々現れては、私を脅しながら樂しませ、苦しめながら醉はせるのであつた。が、私は今阿片の夢のさまざまに就て君に說明する筈ではなかつたのだつた。若し、君にしてそれを知りたいならばDe Quinceyを讀む方が早道だつた。……それでその夜のは自然を少くとも十二倍大に擴大したほどのロマンチックな風景だつた。古城とドオムと銀を流した曠茫たる水面とが現れたのだ。そのドオムを月の光が滑り落ちて居た。よく見ると前景である一面の湖水の上には長い橋があつて、その橋の上を無數の騎兵が進軍して居るのが、遠く見えるのだつた。この騎兵は後で考へて見ると英國の龍騎兵の盛裝したものに似て居たやうに思ふ——英國で戴冠式の時、私はそれを見たのだが。一帶の光景の心持が、この騎兵が現れ出してから急に變つて來た。非常に騷々しい賑やかな感じがし出したのだ。譬へば世界中をあらゆるもの音だけが一杯に占領したと假定して、然も私は全くの聾なので、その物音を耳では聽くことが出來ない。その代り五覺の外のもの、或は聽覺ではなく觸覺か何かで空氣の混亂を通して感知するやうな具合なのだ。その時である。私の夢のなかへ不意に武裝をした騎士(私はよく古代のものを夢に見た)が現れて、それが城壁を、どういふ風にだかはつきりとは解らないが、兎に角、城壁の內部をずんずん透して湖水に面して現れて來た。それと同時に、氣がついて見ると、あの碧い、古畫に描かれた聖母の衣服の色のやうに碧い湖水には、生きて眠つて居るのだか死んで居るのだか、何れにせよ、全く身動きもせずに橫はつて居る一人の人間が、澱んだ水面に、水の表面に、恰も陸に上げてある船のやうにぽつくりと

浮んで居るのである。片一方の壁を透して出て來た騎士は手に長い槍を持つて居た。その穗光が月光できらきら煌めいた。騎士も、陸上の船のやうに全部浮上つて居る男も、他の風景と同じく、非常に大きい。その水にぽつくりと浮んだ男と、兜をつけた騎士との、少くとも長さ一間以上もある横顏は、鮮やかな月の光を浴びて、私の眼の下へはつきりと浮び出して居る。突然、騎士の槍が非常に長く突き出された。何か爆發する音がすると一緒に、水の面に浮上つて居た男の脇腹から、血が滾々と溢れ出て、聖母の衣服のやうに碧かつた水の面一面へ、滲み渡ると湖水は一面に眞赤になつた……人の呻り叫ぶ聲が山彥しながら、私の耳へ遠くひびいて來た。かたかたかたと早足で階段を上るか或は下りるかする足音がする。私は大きな聲で呻りながら、私の外にも呻る人があるのに氣がついて、それと一緒に呻りながら、ひよいと眼が覺めた。併し！見れば眼を瞬つた私の前には、夢のなかで見たと、殆んどそつくりで、ただ形だけは全く縮小されて、一人の人間が呻きながら倒れて居る――夢のなかで見たと殆んどそつくりに――ただ形だけは全く自然大にまで縮小されて、水面の代りに床板の上で、彼の頭のずつと上にぼやけて光つて居る燭臺の、その燭臺の皿の地下へ落す黑い圓形の大きな投影の下で、呻きながら倒れて居た。彼の枕もとには、豆ランプ――それで阿片へ火をつけるのだが――が、この燭臺そのものの投影のなかで、僅に方一尺ばかりをほんのり赤くして、彼の男の額と鼻面とを眞ともに光らせて居た。片肘で自分自身の重い體を釣り上げるやうに支へ起した私は、私のぼんやりした信用し難い眼の六尺ほど前の方でこんな狀態に居る一人の人間を、別に大した感激はなしに見下して居た。ただ現實と夢幻との切り離し難いこの混同を怪しんだ。それも極く微かな私の判斷力ででもある。私は板で出來てその上

へ藁布團を置いた寢臺の上に居たし、呻いたり血を出したりして居る男の方はぢかに床の上に居るのだ。私は未だ半信半疑であつた。私は宙にぼやけて光つて居る燭臺をもつと下へおろして、今のやうに燭臺それ自身の物影ではなく、その光のなかでよくそれを見やうと、その宙にある燭臺へ手を伸ばさうとして、ひよいと瞳を上げると、今まではただ宙に浮いて居ると思つた燭臺は宙に浮いて居るのではなく、誰か人の手で持たれて居るのだ。私は手を見て初めて其處に居る人の顏を見上げた。その男は多分、今、物音に驚いてここへ驅け下りて來たのであらうこの阿片窟のおやぢなのだつた。よく氣がついて見ると、私の片肘は、私が自分の體を支へて居るのではない方の片肘はこの支那人の、力強い手で釣り上げられて居る。彼は直ぐ私の顏の前へ肉迫して突立つて居た。私はそれをやつと今始めて見出した。部屋がそれ程に暗かつたのではない。私がぼんやりして物を直覺する、普通の自然的な順序といふものを間違つたらしい。私が彼の顏を見上げた時、彼は冷やかに私を見下して、宙に浮いて居るものと私には思へた彼の手にある燭臺を動して、血を床板に滲ませてぐつたりなつて居る男を、光線のなかで私に示した。支那人はその呻き盡してもう何も叫ばない男を、突きながら――足の尖で突きながら、私の顏をにらまへた。いや、ひよつとすると私をにらまへて置いてから、その男を蹴つたのだ。いや、一度倒れて居る男の肩を足の爪先きで突いて見て、それから改めて蹴つたのだ。倒れて居る男は、其の男は汚い身なりの外國人だつたと思ふ。それとも立派なモォニングを着て居たか知ら――私はそれを忘れた。夢の方がよく覺えて居る。夢のなかでは水色の得體の知れない着物だつた。その後の夢でもさうであつた。一たいだと、この阿片窟は何時も十人や六七人は居る筈であつた。その前夜か、或は前々夜の

如きは、その窖のなかは魔睡して居る男で一杯だつた。それにその夜だけが、私とその男と二人きりだつた。何でも船の都合か何かで、船乗りは皆、ほとんどこの港には居なかつたに相違ない。阿片窟のおやぢの支那人は——其奴は四十八九歳位のあばたのあばた大きな顔を持つた男だつたが——私を殺人者だと言つた。私は、さう言はれて私の夢のことを思ひ出すと、若しや、自分は夢のなかで夢遊病者がするやうに、實際、夢中で彼を刺し殺したかとも考へざるを得なかつた。少くとも私には私自身ではないと證據立てる何物をも持たなかつた。私は支那人に對つて言つた——自分は死んで居る男とは全く無關係な男であること、それ故その男を殺すべき理由のないこと、けれども夢中で或は殺さないとも限らないこと、君とてもこんな秘密な商賣をして居る以上この不可解な私の、或は何人かの殺人を公然の事實にするわけには行かないであらうこと、それ故自分はこんな機會でこの場所にかかり合ひになつた關係上、君——その支那人に金を千圓やることを。私はそれ等のことを相談した。彼は寧ろ喜んで居る様子だつた。私は外國のこんな場所へ出入する無賴漢達がするやうに、靴下と足の裏の土着かずの間に隠して保存して居た現金を、その場で彼に手渡しした。さうして死骸をとり片着けることを承諾させた。さうして置いて、私はこの厭はしいものから、私の顔をそむけて、體を寢返りさせた。顔を壁の方へむけた。私の寢臺は壁に直ぐくつついて居た。壁はほの白く、私の豆ランプの火はそのほの白い壁に對しては赤黑かつた。私はもう一度眠らうと思つて、眠つて今の不愉快な現實の現象を、せめては何かもつと超自然なものにしやう——どんな不愉快なものでも超自然になれば美だから——と、あせつたけれども、流石に私もあまりとび離れた自然そのものを見たことと、阿片も何の力もなく、いかに燻らして見てももう

再びは夢に入ることが出來なかつた。若し私が本當に狂人だとすれば、私は言うが、多分その時に氣が違つたのだらう。私の神經はちようど黑水晶の結晶の林立のやうな形をして居た。と、不意に私は私の耳にチクタク、チクタク、チクタクといふ音を聞き出した。はて、と思つてそれに聞き入ると、それは正しく私が偶然耳を當てて居た壁を傳うて聽かれる音である。私はその見當を見定めやうと、本能的にその方へ目を向けると、目のとどいたところに一個の時計が見えるのである。それは壁のなかである。私は實際その時壁を通して物を見たのである。ありありと、白晝に眼前二尺のところにある現實よりももつとありありとそれを見た。三十分ばかり見つづけた。さうしてそれは遂に見えなくなつた。チクタク、チクタク、チクタクは何時までも聽かれた。突然遠くの方から汽笛の音が空間を突裂いてひびいた。それは多分、もう朝なので、夜明けなので、造船所の笛の音だらう。私は起上つた。最も元氣よく起き上つた。あの支那人を起して、この壁を破らせてその時計を拾はうと、決心したからである。私は立つて歩み出さうとした。危くあの死骸につまづく所であつた。支那人の奴は承諾をして置きながら、直ぐに始末すると承諾しながら、未だそのままにして居たのであつた。私はその血に塗れた死骸と一間置きで夜を明したのだつた。今思ふと怖ろしい。けれどもその時はただ支那人の違約だけがひどく腹立しかつた。私はあの支那人が眠つて居る扉を蹴つた。たたいた。さうして「おい又五百圓やるぞ」と吐鳴つた。支那人は直ぐ彼の妻の部屋から出て起きて來た。私は言つた――お前が若し私にあの部屋の壁を破らせるなら、今直ぐ破らせるならば五百圓やらうと。彼奴は眼をこすりながら、私に蹤いて來た。私は寢臺へ下りると、その私の寢臺のある壁を指して言つた――「ここだ。それからもし中から時計が一個出

たらば、きつと出るに相違ないが、それは俺が貰ふぞ」―支那人はそんな事はどうでもいいやうに、小さく頷いて承知した。我々は、私の眠つて居た寢臺をとり外した。見ると私の寢臺でかくれて居た壁の下の方に、これ位の(彼は拇指と人差指とで輪をつくつて見せて)穴が二十も三十も、蜂の巣のやうに穿たれて居た。私は驚いた。支那人は一向驚かなかつた。私は其處を破つた。薄つぺらな板で出來て居たから。すると、私は更に驚いた、驚いて叫んだ。併し支那人は決して驚かない。彼は、支那人は私に說明をした――それらの穴は、土のなかの大きなものも壁の上の小さなものも、この部屋に空氣を入れるために、設けられたものである、と。成程、私をそれほど驚かした直徑三尺もあるその穴からは、私の手にもつて居る豆ランプへも、私の顏へも風が感じられた。もう一足踏み込まうと、ふと足もとを見ると、あつた！私が先刻ありありと見た通りの時計があつた。それがその時計だ。指紋のある時計だ。私は支那人の命ずるとほりに、死骸の足をもつた。さうだ確かに足だつた、支那人は自分で頭の方を持つたのだから。君、人間の體といふものは死んだ方が倍々重くなるものだよ。我々はその死骸を運び込んだ。あの壁を破つた奥へ、時計の出たところへ、風通しの穴のなかへだ。支那人はその死骸を足をもつて一間ほど、曳き摺つて來た。その足を穴の入口で待つて居る私に渡した。我々は自分の背中を穴の上部の土に壓へつけられながら、二疋の蟻のやうにそれを運び込んだ。兩手で死骸の兩足を持ち上げて、私は後ずざりして這つた。支那人は先づ自分の手を放した。死骸の頭がどしんと地に落ちて地響きした。支那人は反撥する重苦しい低い聲で「よし」と言つた。私は私の手を放した。死骸は土の上へ置かれたが、徑三尺ほどの穴は、大きな死骸で殆んど閉塞されて居るのを私は見出した。私はその死骸の上をのさば

り這うと、死骸と體を重り合せ、死骸の顔と自分自身の顔とを殆んど擦り合さんばかりにして——私は死人と接吻せんばかりにして、やうやうその穴を出て來た。支那人は片手に赤皮の靴をさげて、窖から上つて行くところだつた。その靴は多分あの死骸の靴なのだ。私は死骸の素足を握つたことを覺えて居るから。部屋の床(ゆか)の上には、巨人(私の夢に現はれたほどの)の指で撫ぜとつたインキの滴のあとのやうに、羽毛で掃いたやうな血のあとが、死骸のあつた場所から穴の方へかすれて居るのを私は見た。私はもう一度、あの穴の入口に立つてなかを覗いて見た。どういふ理由でそんなことをしたのだか私にも解らない。見ると、穴の彼方からは仄白い夜明の光が、かすかに一すじ死骸の體の上から顔を這ひ傳ひながら、この地下の窖へ忍び寄つて居た。その夜のさまざまな光景が、實際と殆んど全く同じ具合にその後の私の阿片の夢にきつと現はれた。その一夜の記憶は、阿片に依つて作用の鈍つて居る私の頭からも、決して消えない。そればかりか、その夜はただ一つの妙な昂奮であつたものが、後になつて初めて異常な怖ろしさに變つて來た。時が經過すればするだけその怖ろしさは加はつた。然も阿片の夢のなかでは、正しく私自身がその殺人者になつて現れて來た。私は穴のなかで、自分の殺した死骸の上をのさばり這うて死骸と私自身の體とを重り合せ、死骸の鼻と自分自身の鼻とを擦り合せ、私の唇は死骸の氷のやうな唇にさわり、私は死骸を抱いて動物的の恐怖と、人間的の悔悟とで私は何時までも何時までも泣いた、泣き叫んだ。私の叫ぶのを聞いて、支那人が驅け下りて來る。私は捕へられたものの悲しさで一層に泣き叫んだ。と、目を見開くと、それは支那人ではない。私の最も親切な友達だつた。おゝ、佐藤君だ。君自身だつた。私はあまりに異常な私自身の夢と、この温かな現世の友情との、あまりのかけ

離れ方に、さうしてそんな二つがほんの僅に一瞬間の變り目から來るために、私はその變り目に氣がつくと思はずも涙が流れ出たのだ。佐藤君、私は幾度か君にとり縋つて泣いたらう。私はまたただ私の阿片の夢ばかりではなく、長崎の阿片窟でも、私自身は無意識ではあつたとは言へ實際にあの死骸であつた男を殺した者は私自身ではなかつたかと思ふやうになり出した。私は夢中で殺した。それ故私は夢中で懺悔するのではなからうか、私はさうも思つた。さうして懺悔の涙をもつて君にとり縋るやうにもなつた。さう思ひ初めると、私が私の潜在意識と第六官とで發見したと信じて居るあの犯罪者と、證據物件である時計とは、犯罪者は私自身であり、時計は私自身のものではないかと疑はれた。事實に於て、私もやはり金の時計を持つて居た。それはどうかした機會で無くなつた（それはどうしてであるか忘れた。私はそんな些細な面白くないことは昔から直ぐ忘れる。阿片を用ゐるやうになつてからは殊にひどい。それは人にやつたのか、落したのか、賣つたのか、盗まれたのだかのどれかだ。）私は一ころ時計の蓋のうらの指紋と自分自身の指紋とを、一つ一つ較べ合して見るために、私の氣分のいい日を全く殆んど費した。時計の蓋のうらにあるものはたしかに私のものとは違つて居た。さうして私の眼は時計に印せられた指紋を、それの一つ一つの渦の卷き方を、擴大鏡で眺め暮して居るうちに、全く悉く記憶してしまつたほどである。私の視神經そのものへその指紋が壓されたやうなものであつた。。私は、その時計の指紋と私自身の十の指紋との外に、佐藤君、君達夫婦の指紋も覺えて居た筈だ――それは重に拇指と人差指とだが――君達はよく私のキネママガジンの口繪である光澤紙の表と裏とへ君達の指紋を殘して居たから。私はよく物を忘れるが、覺えて置かうとしたこと、或は一たん覺えたことならば決して忘れ

るといふことはない。忘れて居るやうでも、必要に應じてありありと最も明確に記憶のなかで突嗟に再現することが出來る。——重に視力に就ていふのだが。それが私の最も奇異な能力だといふことを、私はある時に發見した。「女賊ロザリオ」といふ活動寫眞を見た時だ。然うさうその時は、非常な人ごみのなかに、私の隣席に、右側の隣りに君が居た。佐藤君、君は物覺えのいい人だ。だからあの時のことをよく思ひ出して見給へ、私があの時どんなに愕いたかを。大映しになつた男の——あの運轉手 ジョンソンの頭が、女賊ロザリオの巨きな笑顔の横で、ひよいと我々の方へふり向いた瞬間であつた。私はその男、目の前の畫のなかの逆光線を浴びた男の顔は、あの私の夢のなかの月光を浴びた騎士の顔に寸分違はないことを直覺的に見た。そればかりか、それは上海の阿片窟で度々見た顔だつたことさへ、一時に思ひ出された。その時にはそれほど私の氣分が晴やかだつたから。併し、私はその時私のその直覺をすぐ馬鹿馬鹿しく思つた。私が單にちようどあの時の夢ほどの大さの人間の顔を見た瞬間、私は私の夢を映畫のなかへ投げ込んだだけだと思ひなほして自分自身を打消した。それからこの様子だと、自分は今に何を見ても阿片の夢のやうに怪異に見へ出し、若しかすればあの自分自身が殺人者である夢が、何もない空間へでも、阿片を用ゐない時の私の眼に見え出しはしないかといふ心配が閃めいた。映畫は普通の大きさになつた。併し、それが一體さう思はれ出してからは、夢のなかの槍を持つた騎士であるといふ氣持は多少減じたけれども、上海の阿片窟で二年半か三年か或は三年半か以前によく見た男に相違ないといふ氣持がしてならなくなつた。さうしてその男の上海のあの阿片窟の戸口へ歩いて來た時の様子が實に明瞭に私の眼に浮び初めたのである。その時であつた——再び大映しになつて指紋が現れたのは、

私はそれを一瞥するや、それはフキルムから幕の上へ映寫されたのではなく、私自身の眼底に豫め刻みつけられて居たあの金時計の蓋の裏にある指紋の印象が、何かの作用でその幕の上に、これだけに擴大して映し出されたのではないかと疑はれたほど、それほど同一なものであつた。ただそれらの相違といふのは、前者は自然大の小ささで且つ金時計の蓋のうらにあることと、後者は貴族のライブラリィのマホガニィの机の上にあつて且つ畫に現はれる世界全體の形が自然物の十倍或は十五倍大であることだけであつた。指紋そのものの模様に到つては、その最も複雑な自然の*Miniature*(微細畫)の輪廓に到つてはそれこそ千分の一分一厘も相違しては居なかつた。私はそれを確信した。それの確實な證據は今後で直ぐ君にも見せるが、今はまあ僕を信用し給へ。それで、

一タイ世ノ中ニ全然同一ナ——イヤ、相等シイ模様ノ指紋ヲ持ッタ指ガ二本以上アルデアラウカ?

かういふ問題が、それが私にとつての重大な問題になつて來た。そこに十六册だけ指紋に關する書物がある。それは私がその問題の解答を確實にするために私が讀んだものであるが、そのどの頁に、「全然相等しい模樣の指紋があるであらう、」と書かれた行があるか。どの書物にもそんな報告と研究とは一つもない。けれども「自然の神秘は人間の研究や報告で盡きるものではない」といふならば、それほど神秘な自然が、魔睡して居る男の潜在意識を通し殺人の事實を見せ、殺人者を直覺させないといふ理由がどこにあらうか。全然相等しい指紋だつて二つも三つもあるかも知れないと、言ひ張るならば、私はただあの活動寫眞に出て來た男が正にあの時の殺人者に相違ないのだ、と言ひ張るであらう。が問題の要點はそんな漠然たるものではない。私はたしかにあの男が、「女賊ロザリオ」のなかの運轉手ジョンソン——

即ち俳優ウヰリアム・ウヰルスンが、その犯罪者に相違ないといふことを、私自身でごく冷靜に客觀的に認め得るやうになつて、若しかするとあの殺人者が自分自身ではないかといふ怖ろしい自分自身に對する嫌疑を自分自身に晴らして、その上にあの厭はしい惡夢から逃れたい、といふのが私の目的である。私はそれを認め居てもつと輕快な心持を抱くやうになりたい。私は學者的の熱心をもつて指紋に關する書物を耽讀し初めた理由はそれであつた。最も妙なことには、そのうち何時しか、私は長崎の阿片窟に於ける私の見た——といふよりも寧ろ關係した殺人事件といふものは、そもそもそれの全部が夢ではないかと思はれ出した。事實にあつた通りのことをあまり度々夢で見る、そのために事實そのものまでが夢に感じられ出した、といふ私の心理が君に同感出來るだらうか。いや、そんな事は君の同感するとしないとには拘はらない、私の經驗した事實だから。果は、長崎のM・B町に、私の生れ故郷であるところの長崎に阿片窟があつたといふことさへも、私の夢ではないかと、私には思はれて來た。併し、それと同時に一方では、確にそれ等の全部は疑ふべくもない事實だと信じても居た。さうしてそれらのすべてを夢だとする心持は、自分の關與した厭はしい事どもから逃避しやうとする淺ましい卑屈な心の所爲だとして、自分の一方の心を責めるのであつた。その事實を事實だと認めようとする方の私が、君を長崎へ連れて行つた。私自身がそれを認めると同時に、第三者である君にも、長崎に阿片窟があつたことだけでも、せめてはそれの跡でも君に見て貰ひたかつたからだ。私は或は代は變つて居ても、やはり何か其處にはそんな場所が今でもあるかとも考へたから、其處は今は幽靈屋敷になつて居た——天井から血が滴るのだ。天井から血が滴るのだ。それは實際あることかも知れない。その血が滴つて、聖母

の衣服よりも碧い水の面を眞赤にするのだ。私はそれをよく知つて居る……床板へなすりつけてあつたのだ。それから私達は、その男を土中の穴へ、窖の風穴へ運び込んだのだ。私は、あの時――君と長崎へ行つた時、最も狹い露地から小さい橋へ出る間で私が突立つたところ、×の印を畫いたところ、あの下あたりにその男が――ウヰリアム・ウヰルスンに殺された男が埋められて居るのだ。

「君は先づ以下のことを承認しなければならない。それでなければ、私は話しつづけるわけには行かない――

(1)世ノ中ニハ全ク相等シイ形ヲ具ヘタ二ツ以上ノ指紋ハ絶對ニナイ事。

(2)上海ノ阿片窟ニ出入シタコトノアル男ガ、長崎の阿片窟ヲ知ツテ居リ、ソレニモ出入リスルコトノアリ得ベキコト。例ヘバ私自身ノゴトキガソレダ。

(3)長崎デ殺人ヲシタ人間ガ、亞米利加デ活動寫眞ノ俳優ニナルコトノアリ得ベキコト。但シ、ソノ殺人ハ世間ニ知レナイモノデアル。

(3)は少しロマンチック過ぎて君には承認し兼ねるかも知れない。しかしそんなことは絶對にあり得べからざることだとは、何人も宣言出來ないであらう。況んや、それは事實なのであるから。兎に角、私は最初にいろいろと研究もし、考へもした上で以上の三つの事を自分自身で承認した。さうして私は私の直覺や潜在意識といふやうなものをも假りに信用した上で、私は長崎から、二通の手紙を出した。一通は佐藤君、君の名前と所とを借りた。それはロザアンゼルスのグリインフラグ會社へ宛てたものだ（私は内心、この狂氣の友人が私の名前などを濫用して、無暗なことをしてくれたのでなければよいが、とそ

の時考へた）それからもう一通は、同會社の專屬俳優のウヰリアム・ウヰルスンに宛てたものだ。私はその男は同會社の專屬ではないかも知れないが、同會社のフヰルムに表はれる以上、何か關係があるだらうと思つたからだ。その文句は次のやうなものであつた。

日本長崎に於ける阿片窟は嚴重なる同地警察署のために發見せらるると同時に、同所に於ての貴君の殺人事件は、貴君の同所土窟附近に遺失しありたる金時計の指紋と、貴君がフヰルム「女賊ロザリオ」に於て世界に示されたる指紋との全く偶然なる符合は機敏なる日本警察の注意を喚起したるものゝ如し。貴君にして若し身に覺あることならば、卽座に貴君自身を守るにあらざれば、貴君は非常なる危險を冒すことゝなるべし

上海阿片窟に於ける
貴君の親愛なる一友人より

ここまで來て、私はさつきの今日私の手にとどいたキネマヽガジンの消息欄を見せる筈だつた。私はうれしさのあまりそれを君に早く見せすぎた。一體あの二通の手紙は長崎の停車場で投函したのだ。あゝ君はそれを見て居たね。我々が長崎へ行つたのはあれは十月四日である。それは重要なことだ。普通ならばロザアンゼルスまで郵便は二十日位でとどく筈だ。けれども戰爭以來、郵便が甚だ不規則だ――活動寫眞の雜誌が時々非常に延着して私を待遠しがらせるほどだ。で私はその私の手紙をウヰリアム・ウヰルスンが何時見たかは大抵解る。」

さう言ひながら、何時の間には私の傍の机の前に來て腰を下して居たR・Nは、机の最も大きな抽斗か

ら、何か寫眞でも這入つて居るらしい郵便物をとり出した。さうしてそれを私に渡した。

「さあ、それはグリインフラグ會社の出した郵便物だ、やつと十日ほど前に、君の妻君から受けとつた。若しあるならば、映畫の目錄といふやうなものを送つてくれるやうにと、私は君の名でその會社へ申し込んだのだ。私はそんなものを欲しいよりも、その會社から來るものの日附けが見たかつたから。それは十一月の十六日に出して居る。すると私が出した手紙は少くもそれより以前にその會社へ着いたのだ。それと同時に投函したウヰリアム・ウヰルスンへのものもきつと十一月十六日頃に着いたと思つて差支へない。彼の手には直ぐ入つたかどうかはわからないが十一月二十四日——彼が行方不明になつた日までには、私の手紙はきつと彼の目に這入つたものと見做してよからう。彼は私の手紙を見てから行方不明になつたのだ。それからちよつとそれを借し給へ。その映畫目錄はただ何でもいい、手紙の着した日を知る方便に送つて貰つたのだつたが、その目錄が計らずも又用立つた。ウヰリアム・ウヰルスンの初めて映畫に現はれるやうになつたのは「X・Y・Z」といふ活動寫眞だつたらう。雜誌の記事にさうあつたから。その「X・Y・Z」は一九一四年に出來た寫眞だ——その目錄に依れば。さうすればウヰリアム・ウヰルスンは一九一四年以前には活動寫眞の俳優ではなかつたのだ。それはさうでなければならない。でも彼は一九一二年の夏に——たしかさうだね、長崎から僕の歸つたのは——一九一二年の夏、彼は長崎で殺人をしたのだから。活動寫眞の俳優は長崎や上海でうろうろしては居ないから。君はまだウヰリアム・ウヰルスンが殺人者だとは決定しないと言ふだらう。さうだとも、私だつて、これだけの事實に若し私自身の潜在意識と直覺能力との信用がなかつたなら、次の二つの疑問には必ず逢著する筈

だ。それは私だつて考へては居る。

(1)若シ、ウヰリアム・ウヰルスンガ私ノ手紙ヲ見タコトノ爲メニ行方ヲ晦マシタノデナイトシタ場合。

(2)「女賊ロザリオ」ノナカニ現ハレル、マホガニイ机ノ一角ノ上ノ指紋ガ、運轉手ジヨンソン――卽チウヰリアム・ウヰルスン自身ノモノデハナク、他ノ何人カノモノデアルカモ知レナイ事。

以上の二つである。私を信用しない人は、その二つの場合を想像するであらう。或は私が、あの指紋のある金時計を壁のなかで拾つたといふ事實でさへ、或は、私の見たものはことごとく私の魔睡の夢で、私の理窟は氣違ひの獨斷だといふかも知れない。實際私だつて時々はさう自分自身でも思ふ位なのだ。だがここが肝要なところだ。「世の中に全く形の相等しい指紋を持つた指が二本以上あり得るか？」ここにある十六冊の書物の――指紋といふものは必ず一つ一つ相異るものであるが故に、證據として重大なる理由を持つといふ根底から書かれたこれらのすべての書物の、何の頁何の行にそんなことが書かれてあるか。世の中に全く相等しい指紋がどうしても二つ以上はない以上、どんな懷疑者でも自分自身の眼を疑つて、それを刳り拔かうとでも思はない以上、最後の最後に唯一つ次のことだけはどうしても信じなければならないのだ――

(1)コノ時計ノ蓋ノ内部ノ指紋ト、「女賊ロザリオ」ノフヰルムニ現ハレル指紋トハ全ク形が相等シイ事

或は私を少しは信用しやうといふ人は

(2)私が殺サレテ居ル人間ノ傍カラ拾ツタコノ時計ノ蓋ノ内部ノ指紋ト、「女賊ロザリオ」ノフヰルムニ現ハレタル指紋トハ全ク形ガ相等シイ事

卽ち、

世ノ中ニ全ク形ノ相等シイ指紋ヲ持ツ指ガ二本以上アリ得ナイ以上ハ、最後ノ(1)ノ場合モ(2)ノ場合モソレラ二ツノ指紋ハ一本ノ同一ノ指ニ依ツテ印セラレタモノナル事。

さて、今の(2)以上に、だんだん私を信ずる度が多くなれば、最も多くなつて、——その頂上では私自身が私自身を信用する最大限度の時と同じやうに、遂には「ウヰリアム・ウヰルスンが長崎の阿片窟の殺人者に相違ない」といふところまで私に一致するであらう。」

荒唐無稽な話から、迷宮を行つたり來りするやうな論理めいたことまで長々と語つて私を悩ませた私の友人は、やがて彼の机の抽斗を三たび開けながら、太い卷尺のやうなものをとり出した。それは活動寫眞のフヰルムであつた。「これを私は買つて來た」と言ひながら、彼は徐ろにそれを展げつつ、私を呼んで、私がさつき消して置いた燭臺から遠くにある電燈の光でそれを透して見せた。それは正しく「女賊ロザリオ」のフヰルムの一尺ばかりに相違なかつた。ロココ風に飾られた或る貴族の一室へ、探偵が三人這入つて來て、そのマホガニイの机の上の上にふと何ものかを見出して、一人の探偵がそれを指す——畫面が大映しになる。見ると机の一角に一つの指紋が現れて居る。彼はその指紋のところは殊に大切らしく、古いネクタイの片かなにかの繻子ですれないやうに卷いて居た。彼は再びその布をその部分へ卷きフヰルム全體をも卷き納めた。さうしてそれを私に手渡ししながら、自信に滿ちた調子で言つた。

「さあ、證據はこれと、それにあの私の手袋の上に君が置いて居るあの時計の蓋の裏とだ。君は今直ち

にそれらの二つのものにある指紋の全く同一であることを認めなくともよい。成可く丁寧に間違ひなく認めてもらひ度い。私のところには擴大鏡もある。私の家根裏にはフヰルムを映す目的で私が工夫した幻燈もある。ただそのフヰルムを失はないやうに、又その時計の蓋のうらから指紋を消さないやうに――ことにそれは最も注意してくれ給へ」

私はあの晩のR・Nの熱心と、それから少々くどかつたけれども終りの方にあつての話振に、何となく厳粛のやうなものを感じて、試みに時計の蓋の内部にある指紋と、「女賊ロザリオ」の畫面である指紋とを試みに一眼見較べて見た。實際！それは寸分も違はない。それ以来、私は擴大鏡でも見た。フヰルムを幻燈にうつしても較べて見た。私は決してそれを疑ふわけには行かない。それが全然同一なるのであることは、私の眼にはどうしても疑へない。既に三年間以上さうである。

大正〇年〇月〇〇日である。私は郷里へ歸省するために、和歌浦から夜、汽船に乘つた。私は汽船のなかのつれづれに、ふと船室にあつた一枚の新聞をとり上げた。それは當日の新聞ではなく三四日前の古新聞であつた。三面をあけて見ると、一葉の圖が挿入されて居るので、それが目についた。私はその圖を見て居るうちに、得いて氣がついた。それは曾て、私が見た場所だからである。それこそあの長崎

のM・B町のもと阿片窟があつたといふ附近の平面圖で、併て、曾てR・Nが×の印をしたところには、その圖にも矢張り×の印がついて居る。私は思はず、この暗合に慄然とした。さうしてその記事に目を走らせた。長崎の「幽靈屋敷」といふ題に、「愈々出でて愈々怪」と小見出しして居た。若し私が何も知らなかつたならば、さぞ新聞記者の月並な文句をつまらなく思つて、そんな記事は多分見なかつたであらう。けれども私はその時は見た、見なければならなかつた。私は目を走らせた――長崎M・B町といへば支那人を初め生活程度の極めて低き外人等の雜居地なるが、同町十九番地に一個の空家あり。煉瓦の洋風建物なるが、その家は數年前一人の支那人夫婦が居住して以來、住む人なく、偶ま借家するものあるも、大抵五日或は十日、永くとも半月とは居つくものなく、居住者の話なりとて噂によれば、その家には、宵の八九時より夜半の一二時に到る數時間は、天井とも何處ともつかず滴々として血潮の滴るが如き音陰氣にひびき、或る者は天井より滴り落ちて床に一面にひろがる血を見たりなどと、物凄き噂專らにて、血氣の若者達は試みにその空家に宿泊する者もあり、ここに不思議なるは、その家はかかる試膽者達の宿泊に際しては決して何の變事もなく、變事なきを見とどけて同借家を借り受けたる者と雖もいよいよ居住する場合には必ず、噂の如き滴りの音を聞く由にて、三四年來は一切その家に住む人もなき故、家主にてもその家を取毀さんものと兩三日前人を雇ひて取毀しを初めしに、不思議なることにはその家の床の下に廣さ十疊ばかりの地下室あり、何者が何の爲めに設備せしものなるやは知るを得ず。人人氣味惡るきことに思ひつつも、下り行きて見たるに、居住者達が血の滴ると思ひしは、多分臺所の流しもとよりこぼれし水が同地下室に滴りてひびくものらしく、それは流しもとの板の裏なる水漏の跡に

よつて推察されたり。幽靈屋敷の正體とはこんなものなり、それにして何のための地下室ならんなど語り合ひ居るうち、人夫の一人が同地下室の一隅より涼しき風の吹き込むこにと氣づき、その方に歩みよりたるに、其處には一道の穴あり。その穴は何處に通ずるかとその一人は、もぐり行きたるに僅か二三步行くうち叫び聲を上げて這出でたり。人人その理由を尋ぬれども、件の男は口も利けずただ穴のなかを指すのみ。漸く口を開きて、彼處には一個の白骨橫はれりと言ひ出したるにぞ、大騷ぎとなり、果は警官の出張を求めて取調べしに、確に一個の四肢頭蓋等の諸骨を完全に具備したるものにして、骨格の常人より偉大なる點より見て、多分支那人或は外國人なるべしと推測せらる。尙も殘る隅なく同地下室を捜索するうち、流し元の下より一個金色燦爛たる新鑄一錢銅貨大のメダルを發見したり。同メダルは口方七匁五分ほどある純金にして、その表面にはラテン語を以て「生命は短し、藝術は長し」の句を刻みあり。海外某大學文學科の紀念賞牌にして、珍らしきものなること判明したるが、市中にかかる人知れぬ地下室のあるさへ審しきことなるに、黃金の賞牌といひ、更に白骨といひ、然もその白骨は道路の眞下十數尺のところに發見されたるに到つては、この幽靈屋敷は、愈々出でて愈々怪といふの外なく、土地柄とは言ひ、何さま十八世紀風の物語に見るが如き出來事といふべし。何れこれには何か深き仔細あることとなるべく、同市警察に於ては一切秘密のうちに着々探偵の步を進めつつありと言へば、一切は遠からず曝露せらるるなるべし。大正の今日尙この怪事あり、事實は小說よりも奇とはかかる比のことなり。」田舍の新聞らしく(それは福岡の新聞であつた。)長々と報道して居るのであつた。

　私は一層愕いた。恐らくこの記事を見た何人のうちでも、私こそその最も愕いた人であらう。曾ては狂人の妄想の一部分と聞いて居たことが、それは兎にかくある部分まで事實だつたのだ。彼が「私自身

でそこへ運んだ」と語つたところからは、外國人だつたと言つたが、それは事實外國人の白骨が發見されたのだ。私の目の前には揺れて居る船室の天井一杯に、あの「女賊ロザリオ」のフヰルムのなかの指紋と金時計の蓋のうらの指紋とが、二つ全く同じ形に列んで、目に浮んで來た。R・Nの言つた事を、私はどこからどこまで信じればよいのであらう。丸い船の窓からは月夜の海が見えて、それがR・Nの語つた幻像的ないろいろの光景を、私に暗示した。だんだんを信ずる度が多くなれば、最も多くなつた頂上では、彼自身が彼自身を信用する最大限度の時と同じやうに、遂には「ウヰリアム・ウヰルスンが長崎の阿片窟の殺人者に相違ない」といふところまで彼に一致するであらう。……

私はその新聞を、福岡の新聞を持つて歸つた。さうしてR・N――前年とうとう死んだR・Nの、あの不可解な蒐集物、赤いアンダアラインをしたキネママガシン、グリインフラグ會社のカタログ、彼が透視して探し出したといふ金の時計、「女賊ロザリオ」のフヰルムの一部分――それ等の物を納めた箱のなかへその新聞をも納めて置いた。

私は未だ、今日でも、これを書きつつある今日でも、あのフヰルムのなかの指紋と、時計の蓋のなかの指紋と、その二つがどこがどう違つて居るかを、まだどうしても發見出來ない。……

指紋をぢつと見つめて居ると、そこには別に一個の世界がある。……私の妻は、私があまり指紋のことばかり言ひすぎるので、心配して私自身も狂人になりかゝつたものと思つて居るらしい。「氣違ひは傳染するものでせうか」と精神病の研究をして居る私の友人Kにそんなことをたづねたさうだ。しかし私は決して狂人ではない。これは私の妻にも、讀者にも言ふ。實を言へばR・Nだつて狂人ではなかつたのだと、私は近頃思ふようになつた。

開化の殺人

芥川龍之介

本多子爵閣下、並に夫人、

予は予が最期に際し、既往三年來、常に予が胸底に蟠れる、呪ふ可き秘密を告白し、以て卿等の前に予が醜惡なる心事を曝露せんとす。卿等にして若しこの遺書を讀むの後、猶卿等の故人たる予の記憶に對し、一片憐憫の情を動す事ありとせんか、そは素より予にとりて、望外の大幸なり。されど又予を目して、萬死の狂徒と做し、當に屍に鞭打つて後已む可しとするも、予に於ては毫も遺憾とする所なし。唯、予が告白せんとする事實の、余りに意想外なるの故を以て、妄に予を誣ふるに、神經病患者の名を藉る事勿れ。予は最近數ヶ月に亘りて、不眠症の爲に苦しみつつありと雖も、予が意識は明白にして、且極めて鋭敏なり。若し卿等にして、予が二十年來の相識たるを想起せんか。(予は敢て友人とは稱せざる可し)請ふ、予が精神的健康を疑ふ事勿れ。然らずんば、予が一生の汚辱を披瀝せんとするこの遺書の如きも、結局無用の故紙たると、何の

選ぶ所か是あらん。

閣下、並に夫人、予は過去に於て殺人罪を犯したると共に、將來に於ても亦同一罪惡を犯さんとしたる卑む可き危險人物なり。しかもその犯罪が卿等に最も親近なる人物に對して、企畫せられたるのみならず、又企畫せられんとしたりと云ふに至りては、卿等にとりて正に意外中の意外たる可し。予は是に於て、予が警告を再するの、必要なる所以を感ぜざる能はず。予は全然正氣にして、予が告白は徹頭徹尾事實なり。卿等幸にそを信ぜよ。而して予が生涯の唯一の紀念たる、この數枚の遺書をして、空しく狂人の囈語たらしむる事勿れ。

予はこれ以上予の健全を喋々すべき餘裕なし。予が生存すべき僅少なる時間は、直下に予を驅りて、予が殺人の動機と實行とを敍し、更に進んで予が殺人後の奇怪なる心境に言及せしめずんば、已まざらんとす。されど、嗚呼されど予は硯に呵し紙に臨んで、猶惶々として自ら安からざるもののあるを覺ゆ。惟ふに予が過去を點檢し記載するは、予にとりて再過去の生活を營むと、畢竟何の差違かあらん。予は殺人の計畫を再し、その實行を再し、更に最近一年間の恐る可き苦悶を再せざる可らず。是果して善く予の堪へ得可き所なりや否や。予は今にして、予が數年來失却したる我耶蘇基督に祈る。願くば予に力を與へ給へ。

予は少時より予が從妹たる今の本多子爵夫人(三人稱を以て、呼ぶ事を許せ)往年の甘露寺明子を愛したり。予の記憶に溯りて、予が明子と偕にしたる幸福なる時間を列記せんか。そは恐らく卿等が卒讀の煩に堪へざる所ならん。されど予はその例證として、今日も猶予が胸底に歷々たる一場の光景を語らざる

を得ず。予は當時十六才の少年にして、明子は未十才の少女なりき。五月某日予等は明子が家の芝生なる藤棚の下に嬉戯せしが、明子は予に對して、雙脚にて善く久しく立つを得るやと問ひぬ。而して予が否と答ふるや、彼女は左手を垂れて左の趾（あしゆび）を握り、右手を擧げて均衡を保ちつつ、雙脚にて立つ事、是を久うしたりき。紫の藤は芳香を放ちつつ、春日の光を揺りて垂れ、明子は凝然として幼き顔に遊蜂の影を仰ぎつつ、彫塑の如く佇めり。予はこの畫の如き數分の彼女を、今に至つて忘るる能はず。私に自ら省みて、予が心既に深く彼女を愛せるに驚きしも、實にその藤棚の下に於て然りしなり。爾來予の明子に對する愛は、益々烈しきを加へ、念々に彼女を想ひて、殆學を廢するに至りしも、予の小心なる、遂に一語の予が衷心を吐露す可きものを出さず。陰晴定りなき感情の悲天の下に、或は泣き、或は笑ひて、茫々數年の歳月を閲せしが、予の二十一歳に達するや、予が父は突然予に命じて、遠く家業たる醫學を英京龍動に學ばしめぬ。予は訣別に際して、明子に語るに予が愛を以てせんとせしも、嚴肅なる予等が家庭は、斯る機會を與ふるに吝なりしと共に、儒教主義の教育を受けたる予も、亦桑間濮上の譏を惧れたるを以て、無限の離愁を抱きつつ、孤笈飄然として英京に去れり。

英吉利留學の三年間、予がハイド・パアクの芝生に立ちて、如何に故園の紫藤花下なる明子を懷ひしか。或は又予がパルマルの街頭を歩して、如何に天涯の遊子たる予自身を憫みしか、そは茲に絮說するの要なかる可し。予は唯、龍動に在るの日、予が所謂薔薇色の未來の中に、來る可き予等の結婚生活を夢想し、以て僅に悶々の情を排せしを語れば足る。然り而して予の英吉利より歸朝するや、予は明子の既に嫁して第×銀行頭取滿村恭平の妻となりしを知りぬ。予は卽座に自殺を決心したれども、予が性來の

怯儒と、留學中歸依したる基督敎の信仰とは、不幸にして予が手を痲痺せしめしを如何。卿等にして若し當時の予が、如何に傷心したるかを知らんとせば、予が歸朝後旬日にして、再英京に去らんとし、爲に予が父の激怒を招きたるの一事を想起せよ。當時の予が心境を以てすれば、實に明子なきの日本は、故國に似て故國にあらず。この故國ならざる故國に止つて、徒に精神的廢殘者たるの生涯を送らんよりは、寧チャイルド・ハロルドの一卷を抱いて、遠く萬里の孤客となり、骨を異域の土に埋むるの遙に慰む可きものあるを信ぜしなり。されど予が身邊の事情は遂に予をして渡英の計畫を抛棄せしめ、加之予が父の病院内に、一個新歸朝のドクトルとして、多數患者の診療に忙殺さる可き退屈なる椅子に倚らしめ了りぬ。

是に於て予は予の失戀の慰藉を神に求めたり。當時築地に在住したる英國宣敎師ヘンリイ・タウンゼンド氏は、この間に於ける予の忘れ難き友人にして、予の明子に對する愛が、幾多の惡戰苦鬪の後、漸次熱烈にしてしかも静平なる肉親的感情に變化したるは、一に同氏が予の爲に釋義したる聖書の數章の結果なりき。予は屢、同氏と神を論じ、神の愛を論じ、更に人間の愛を論じたるの後、半夜行人稀なる築地居留地を歩して、獨り予が家に歸りしを記憶す。若し卿等にして予が兒女の情あるを哂はずんば、予は居留地の空なる半輪の月を仰ぎて、私に從妹明子の幸福を神に祈り、感極つて歔欷せしを語るも善し。

予が愛の新なる轉向を得しは、所謂「あきらめ」の心理を以て、説明す可きものなりや否や、予は之を詳にする勇氣と餘裕とに乏しけれど、予がこの肉親的愛情によりて、始めて予が心の創痍を癒し得た

るの一事は疑ふ可らず。是を以て歸朝以來、明子夫妻の消息を耳にするを蛇蝎の如く恐れたる予は、今や予がこの肉親的愛情に依賴して、進んで彼等に接近せん事を希望したり。こは予にして若し彼等に幸福なる夫妻を見出さんか、予の慰安の益大にして、念頭些の苦悶なきに至る可しと、早計にも信じたるが故のみ。

予はこの信念に動かされし結果、遂に明治十一年八月三日兩國橋畔の大煙火に際し、知人の紹介を機會として、折から校書十數輩と共に柳橋萬八の水樓に在りし、明子の夫滿村恭平と、始めて一夕の歡を倶にしたり。歡か、歡か、予はその苦と云ふの、遙に勝れるの所以を思はざる能はず。予は日記に書して曰「予は明子にして、かの滿村某の如き、濫淫の賤貨に妻たるを思へば、殆一肚皮の憤怨何の處に向つてか吐かんとするを知らず。神は予に明子を見る事、妹の如くなる可きを敎へ給へり。然り而して予が妹を、斯る禽獸の手に委せしめ給ひしは、何ぞや。予は最早、この殘酷にして奸黠なる神の惡戲に堪ふる能はず。誰か善くその妻と妹とを强人の爲に凌辱せられ、しかも猶天を仰いで神の御名を稱ふ可きものあらむ。予は今度斷じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼の手より救助す可し。」

予はこの遺書を認むるに臨み、再當時の呪ふ可き光景の、眼前に彷彿するを禁ずる能はず。かの蒼然たる水靄と、かの萬點の紅燈と、而してかの隊々相銜んで、盡くる所を知らざる畫舫の列と――嗚呼、予は終生その夜、その半空に仰ぎたる煙火の明滅を記憶すると共に、右に大妓を擁し、左に雛妓を従へ、猥褻聞くに堪へざるの俚歌を高吟しつつ、傲然として涼棚の上に酣醉したる、かの肥大豚の如き滿

村恭平をも記憶す可し。否、否、彼の黒絽の羽織に抱明姜の三つ紋ありしさへ、今に至つて予は忘却する能はざるなり。予は信ず。予が彼を殺害せんとするの意志を抱きしは、實にこの水樓煙火を見しの夕に始る事を。又信ず。予が殺人の動機なるものは、その發生の當初より、斷じて單なる嫉妬の情あらずして、事不義を懲し不正を除かんとする道德的憤激に存せし事を。

爾來予は心を潛めて、滿村恭平の行狀に注目し、その果して予が一夕の觀察に悖らざる痴漢なりや否やを檢査したり。幸にして予が知人中、新聞記者を業とするもの、啻に二三子に止らざりしを以て、彼が淫虐無道の行跡の如きも、その予が視聽に入らざるものは絕無なりしと云ふも妨げざる可し。予が先輩にして且知人たる成島柳北先生より、彼が西京祇園の妓樓に、雛妓の未春を懷かざるものを梳櫳して、以て死に到らしめしを仄聞せしも、實に此間の事に屬す。しかもこの無賴の夫にして、夙に溫良貞淑の稱ある夫人明子を遇するや、奴婢と一般なりと云ふに至つては、誰か善く彼を目して、人間の疫癘と做さざるを得んや。既に彼を存するの風を頽し俗を濫る所以なるを知り、彼を除くの老を扶け幼を憐む所以なるを知る、是に於て予が殺害の意志たりしものは、徐に殺害の計畫を案出し來れり。

然れども若し是に止らんか、予は恐らく予が殺人の計畫を實行するに、猶幾多の逡巡なきを得ざりしならん。幸か、抑又不幸か、運命はこの危險なる時期に際して、予を予が年少の友たる本多子爵と、一夜墨上の旗亭柏屋に會せしめ、以て酒間その口より一場の哀話を語らしめたり。予はこの時に至つて、始めて本多子爵と明子とが、既に許嫁の約ありしにも關らず、彼、滿村恭平が黃金の威に壓せられて、遂に破約の已む無きに至りしを知りぬ。予が心、豈憤を加へざらんや。かの酒燈一穗、畫樓簾裡に黯淡

たるの處、本多子爵と予とが杯を含んで、滿村を痛罵せし當時を思へば、予は今に至つて自ら肉動くの感なきを得ず。されど同時に又、當夜人力車に乘じて、柏屋より歸るの途、本多子爵と明子との舊契を思ひて、一種名狀す可らざる悲哀を感ぜしも、予は猶明に記憶する所なり。請ふ。再び予が日記を引用するを許せ。「予は今夕本多子爵と會してより、愈旬日の間に滿村恭平を殺害す可しと決心したり。子爵の口吻より察するに、獨り彼と明子とは、獨り許嫁の約ありしのみならず、又實に相愛の情を抱きたるものゝ如し。（予は今日にして、子爵の獨身生活の理由を發見し得たるを覺ゆ）若し予にして滿村を殺害せんか、子爵と明子とが伉儷を完うせんは、必しも難事にあらず。偶明子の滿村に嫁して、未一兒を擧げざるは、恰も天意亦予が計畫を扶くるに似たるの觀あり。予はかの獸心の巨紳を殺害するの結果、予の親愛なる子爵と明子とが、早晩幸福なる生活に入らんとするを思ひ、自ら口邊の微笑を禁ずる事能はず。」

今や予が殺人の計畫は、一轉して殺人の實行に移らんとす。予は幾度か周密なる思慮に思慮を重ねたるの後、漸くにして滿村を殺害す可き適當なる場所と手段とを選定したり。その何處にして何なりしかは、敢て詳細なる叙述を試みるの要なかる可し。卿等にして猶明治十二年六月十二日、獨逸皇孫殿下が、新富座に於て日本劇を見給ひしの夜、彼、滿村恭平が同戲場よりその自邸に歸らんとするの途次、馬車中に於て突如病死したる事實を記憶せんか、予は新富座に於て滿村の血色宜しからざる由を說き、これに所持の丸藥の服用を勸誘したる、一個壯年のドクトルありしを語れば足る。嗚呼、卿等請ふ、そのドクトルの面を想像せよ。彼は壘々たる紅球燈の光を浴びて、新富座の木戶口に佇みつつ、霖雨の中に奔

馳し去る滿村の馬車を目送するや、昨日の憤怨、今日の歡喜、均しく胸中に蝟集し來り、笑聲嗚咽共に唇頭に溢れんとして、殆處の何處たる、時の何時たるを忘却したりき。しかもその彼が且泣き且笑ひつつ、蕭雨を犯し泥濘を踏んで、狂せる如く歸途に就きしの時、彼の呟いて止めざりしものは、明子の名なりしをも忘るる事勿れ。——「予は終夜眠らずして、予が書齋を徘徊したり。歡喜か、悲哀か、予はそを明にする能はず。唯、或云ひ難き强烈なる感情は、予の全身を支配して、一霎時たりと雖も、予をして安座せざらしむるを如何。予が卓上には三鞭酒あり。予がマンテルピイスには薔薇の花あり。予は殆、天使と惡魔とを左右にして、奇怪なる饗宴を開きしが如くなりき……。」

予は爾來數ヶ月の如く、幸福なる日子を閲せし事あらず。滿村の死因は警察醫によりて、予の豫想と寸分の相違もなく、腦出血の病名を與へられ、即刻地下六尺の暗黒に、腐肉を蟲蛆の食としたるが如し。既に然り、誰か又予を目して、殺人犯の嫌疑ありと做すものあらん。しかも仄聞する所によれば、明子はその良人の死に依りて、始めて蘇色ありと云ふにあらずや。予は滿面の喜色を以て予の患者を診察し、閑あれば即本多子爵と共に、好んで劇を新富座に見たり。是全く予にとりては、予が最後の勝利を博せし、光榮ある戰場として、屢その花瓦斯とその毛氈とを眺めんとする、不思議なる欲望を感ぜしが爲のみ。

然れどもこは眞に、數ヶ月の間なりき。この幸福なる數ヶ月の經過すると共に、予は漸次予が生涯中最も憎む可き誘惑と闘ふ可き運命に接近しぬ。その闘の如何に酷烈を極めたるか、如何に步々予を死地に驅逐したるか。予は到底玆に叙說するの勇氣なし。否、この遺書を認めつつある現在さへも、予は猶

この水蛇（ハイドラ）の如き誘惑と、死を以て闘はざる可らず。斯等にして若し、予が煩悶の跡を見んと欲せば、請ふ、以下に抄録せんとする予が日記を一瞥せよ。

「十月×日、明子、子なきの故を以て満村家を去る由、予は近日本多子爵と共に、六年ぶりにて彼女と會見す可し。歸朝以來、始予は彼女を見るの己の爲に忍びず、後は彼女を見るの彼女の爲に忍びすして、遂に荏苒今日に及べり。明子の明眸、猶六年以前の如くなる可きや否や。

「十月×日、予は今日本多子爵を訪れて、始めて明子の家に赴かんとしぬ。然るに豈計らんや、子爵は予に先立ちて、既に彼女を見る事兩三度なりと云はんには、子爵の予を疎外する、何ぞ斯くの如く甚しきや。予は甚しく不快を感じたるを以て、辭を患者の診察に託し、匆惶として子爵の家を辭したり。子爵は恐らく予の去りし後、單身明子を訪れしならんか。

「十一月×日、予は本多子爵と共に、明子を訪ひぬ。明子は容色の幾分を減却したれども、猶紫藤花下に立ちし當年の少女を髣髴するは未必しも難事にあらず。嗚呼予は既に明子を見たり。而して予が胸中、反つて止む可らざる悲哀を感ずるは何ぞ。予はその理由を知らざるに苦む。

「十二月×日、子爵は明子と結婚する意志あるものの如し。斯くして予が明子の夫を殺害したる目的は、始めて完成の域に達するを得ん。されど——されど、予は予が再明子を失ひつつあるが如き、異様なる苦痛を免るる事能はず。

「三月×日、子爵と明子との結婚式は、今年年末を期して、擧行せらるべしと云ふ。予はその一日も速ならん事を祈る。現状に於ては、予は永久にこの止み難き苦痛を脱離する能はざる可し。

「六月十二日　予は獨り新富座に赴けり。去年今月今日、予が手に仆れたる犧牲を思へば、予は觀劇も自ら會心の微笑を禁ぜざりき。されど同座よりの歸途、予がふと予の殺人の動機に想到するや、予は殆歡想を失ひたるかの感に打たれたり。嗚呼、予は誰の爲に滿村恭平を殺せしか。本多子爵の爲か、明子の爲か、抑も又予自身の爲か。とは予も亦答ふる能はざるを如何。

「七月×日　予は子爵と明子と共に、初夜馬車を驅つて、隅田川の流燈會を見物せり。馬車の窓より洩るる外光に、明子の明眸の更に美しかりしは、殆予をして傍に子爵あるを忘れしめぬ。されどそは予が語らんとする所にあらず。予は馬車中子爵の胃痛を訴ふるや、手をポツケツトに捜りて、丸藥の函を得たり。而してその「かの丸藥」なるに一驚したり。予は何が故に今宵この丸藥を携へたるか。偶然か、予は切にその偶然ならん事を庶幾ふ。されどそは必しも偶然にはあらざりしものの如し。

「八月×日　予は子爵と明子と共に、予が家に晩餐を共にしたり。しかも予は終始、予がポツケツトの底なるかの丸藥を忘るる事能はず。予の心は、殆予自身にとりても、不可解なる怪物を藏するに似たり。

「十一月×日　子爵は遂に明子と結婚式を擧げたり。予は予自身に對して、名狀し難き憤怒を感ぜざるを得ず。その憤怒たるや、恰も一度脫走せし兵士が、自己の怯懦に對して感ずる羞恥の情に似たるが如し。

「十二月×日　予は子爵の請に應じて、之をその病床に見たり。明子亦傍にありて、夜來發熱甚しと云ふ。予は診察の後、その感冒に過ぎざるを云ひて、直に家に歸り、子爵の爲に自ら調劑す。その間約二

時間、「かの丸藥」の函は終始予に恐る可き誘惑を持續したり。

「十二月×日　予は昨夜子爵を殺害せる惡夢に脅されたり。終日胸中の不快を排し難し。

「二月×日　予は今にして始めて知る。予が子爵を殺害せざらんが爲には、予自身を殺害せざる可らざるを。されど明子は如何。」

子爵閣下、並に夫人。これは予が日記の大略なり。大略なりと雖も、予が連日連夜の苦悶は、卿等必ずや善く了解せん。予は本多子爵を殺さざらんが爲には、予自身を殺さざる可らず。されど予にして若し予自身を救はんが爲に、本多子爵を殺さんか、予は予が滿村恭平を屠りし理由を如何の地にか求む可けん。若し又彼を毒殺したる理由にして、予の自覺せざる利己主義に伏在したるものと做さんか、予の人格、予の良心、予の道德、予の主張は、すべて地を掃つて消滅す可し。是素より予の善く忍び得る所にあらず。予は寧、予自身を殺すの、遙に予が精神的破産に勝れるを信ずるものなり。故に予は予が人格を樹立せんが爲に、今宵「かの丸藥」の函によりて、嘗て予が手に僵れたる犧牲と、同一運命を擔はんとす。

子爵閣下、並に夫人、予は如上の理由の下に、卿等がこの遺書を手にするの時、既に屍體となりて、予が寢臺に横はらん。唯、死に際して、縷々予が呪ふ可き半生の秘密を告白したるは、又以て卿等の爲に聊自ら潔せんと欲するが爲のみ。卿等にして若し憎む可くんば、即ち憎み、憐む可くんば、即ち憐め。予は――自ら憎み、憐める予は、悦んで卿等の憎惡と憐憫とを甘受す可し。さらば予は筆を擱いて、予が馬車を命じ、直に新富座に赴かん。而して半日の觀劇を終りたるの後、予は「かの丸藥」の幾

粒を口に啣みて、再予が馬車に投ぜん。節物は素より異れども、紛々たる細雨は、予をして幸に黄梅雨の天を彷彿せしむ。斯くして予はかの肥大豕に似たる滿村恭平の如く、車窓の外に往來する燈火の光を見、車蓋の上に蕭々たる夜雨の音を聞きつつ、新富座を去る事甚遠からずして、必予が最期の息を呼吸す可し。卿等亦明日の新聞を繙くの時、恐らくは予が遺書を得るに先立つて、ドクトル北畠義一郎が腦出血病を以て、觀劇の歸途、馬車内に頓死せしの一項を讀まんか。終に臨んで予は切に卿等が幸福と健在とを祈る。卿等が常に忠實なる僕、北畠義一郎拜。

追白、この遺書の書かれた當時は、まだ爵位の制が定められてゐなかつた。玆に子爵と云ふのは、本多家の後年の稱に從ふのである。



刑事の家

里見弴

今年もみんなで一緒に避暑しよう、と云ふことになつた。その前の年は、ほかの連中は來るもの歸るもの、折々に顔が變つたが、私と相川とは、おつ通しに四十六七日も鹿野山に籠つてゐた。寢れ果てたあの山の上の村で、東京灣を一目に見晴らす代りに、西日をまともに喰らうあの宿屋の一と月半は、なま容易しい辛抱ではない、などゝ連中に冷笑かされた。然し兎に角、それで味をしめた連中は、この夏を送る土地の詮衡にかゝつた。赤城山、沼津、元箱根、輕井澤、あすこゝと迷つた末が却つて平凡に、鎌倉ときまつた。その海に近い砂丘の麓には、うちの別莊があつた。別莊と云ふと聞えがいゝが、藤澤から籠を仕立てさせて行かなければならなかつたと云ふ古い時代に、好奇なうちのおやぢが建てたもので、一間の廊下を折り廻した萱葺の母屋と、その後一家を擧げて移り住むことになつた時分に建てました八疊二タ間とだが、一時留守番を置かなかつた頃

には、泥棒だか乞食だかの住家になつてゐたこともあつて、もううちのものは何年にも行つたことがなく、荒れ放題になつてゐた。仕舞には、あれでは不用心で困ると警察からヤカマしく云つて來た。けれども、今と違つて、長谷にしろ、光明寺にしろ、小町にしろ、どこへ出るにしても家一軒ないやうなところを七八町も行かなければならなかつた滑川の川口では、いかにも不便で、中々留守番人だつて居着きはしなかつた。それを云つてうちでは返事をすると、ではこちらで番人は世話をしてやるからと云ふので、はいつたのが、これが刑事巡査だつた。成程それ故のご親切かい、とうちでは大笑ひをした。

座敷のなかで相撲をとらうと、硝子障子をぶち破らうと、ちつとも痛々しいことのない、この廢屋同然な別莊の話を私が持ち出した時に、二十前後と云ふ年頃の連中は、誰一人手を拍つて贊成しないものはなかつた。その代りには自炊だよ。自炊、いゝとも。錠をこぢあけて、乞食が使つてゐるかも知れないが、食器なんぞは一揃あつちに藏つてある筈だ。それもよし／＼、と話は忽ちきまつた。そこで私は、二三日うちに行くから、建ましの座敷二タ間だけをあけて置いてくれと、かの刑事巡査に宛て端書を出した。

七月末近い或る日、朝涼のうちにと七時何分と云ふ汽車を選むで、車寄せから二十段ほどの石階になつてゐた以前の新橋驛に落ち合つたのは、先發の岩田に相川に私、あとから來る筈になつてゐる楠本や田島は朝の散歩がてら見送に來てゐた。

「すつかり仕度をして置くから、成可く早く來いよ」

「行くよ。監督として僕がゐなけれやァ、どうにもおさまるまいもの」

「新入りには、當分、飯のあと片づけを擔任させることにしようぢやないか、ねえ」

「あと片づけはいゝが、一體だれが飯やおかずを拵えるんだい」

「相川。この人は去年も鹿野山で女房役だ」

「泥舘の丸煮で悩まされはしたが、丸七はあれでも宿屋だぜ。こんだは山賊の住家のあとを襲ふんだつて云ふぢやァないか。とてもその丸煮にだつてありつけさうはない」

「おかずは俺に中々自信があるんだが、飯となると……」

「苦手かい」

「まァ兎に角、あんまり馬鹿はしなさんなよ。留守番が探偵だつて云ふから、一言一行手に取るやうにおかみへ聞えるわけだ」

「その代りあけッ放しで出かけても、泥棒の用心はいゝや」

車窓のうちそとでこんな冗口をきゝあつてゐるうちに汽車は動きだした。停車場までの俥の上では、睫が潤ふほどに深くとざしてゐた霧も、品川の海の上にホノ〳〵と裾を引いて晴れて行くなかに、眞鍮の金盥のやうな太陽が、苦熱の午を豫言しながら、脅かすやうに天心にノシ上りつゝあつた。右手が高い煉瓦塀になつた薄暗い横濱の停車場にとまつてゐる頃には、扇、麥藁帽、半巾などが盛に人々の胸のあたりに動き始めた。

荷物だけ俥に積んで、私たちは砂埃の道を松原について一の鳥居の方へ向つた。水浴の仕度を手拭のさきに結んだのをぶら〳〵振り廻したりしながら、濱へ出かけて行く若い避暑客のうちには、もう黑々と焦けてゐる人が多かつた。肉づきのいゝ胸を張つて、海水帽の奧に晴やかな笑顏を傾けながら行く娘もあつた。さう云ふ人々から、連れの友達に目を移すと、まるで病人のやうに靑白く見えた。何か肩身が狹いやうで、自分たちも一日も早く色上げをしなければ……と云ふやうな氣持で、自と心が勇んだ。

海岸通りを踏み切つて、もう少し行つてから右手へ、雜草の生ひ茂つた小道へ切れ込むと、小松林の上に、ドス黑くなつた萱葺屋根の頭が覗いてゐた。六ツの早春から七ツの秋まで一年半以上もそこで育つた、懷しい家を望むと、私は何んだか胸が迫つて來た。

玄關には行かずに、いかにもうちのおやぢの好みとして適はしい、例の一間の椽先に立つて、私が、「ごめんなさい」と聲をかけた。

「はい」

鈍く濁つた音聲で答へたきり、この暑さにピッタリたて切つた障子のなかでは、ゴソ〳〵と何か身づくろひでもする容子で、暫く待たせてから出て來たのは、若い私たちの目にも直ぐ臨月と氣づかれるほど大きな腹をした四十近い上さんだつた。そんな大きな腹でも釣り合ふほど、顏でも手足でも大ぶりに出來た、器量のよくない女だつた。

「わたしが和田の四男です。先達葉書を差上げて置きましたが……」

「はい、相憎やどは一寸出かけましたが、さア、どうぞまア……」

その時、聲を聞きつけて、臺所の方からパタ〳〵驅けだして來たのは、九つと六つくらゐになる女の子だつた。姉の子はペッタリ廊下に手をついてお辭儀をしたが、妹の子は母親の背にくつついて、上は目づかひにヂロ〳〵こつちを見てゐた。

「さ、千代ちやん、お辭儀はどうしたの」と上さんが肩ごしに手を引つ張ると、益々へバリ着いて、顏をかくして了つた。姉娘とは大違ひに、これはクリ〳〵とした、誠に可愛らしい子だつた。

草深い道に俥が通らなくなつて了つたとみえへて、俥夫は肩の上に行李など載せて、口小言を云ひ云ひはいつて來た。上さんは、私たちがとめるのも聽かずに、姉娘にも手傳はせて、荷物を座敷の方に運んでくれたりした。

床の間には書籍、違棚には罐詰瓶詰などの食料品、押入れには二つにわつためいめいの行李をおさめるなどして、荷物の整理もついた。母屋の臺所を留守番人と兼用に使ふのはまづい、と言ふので、建ましの時につけた玄關の沓ぬぎを私たちの臺所ときめた。いゝ按配に戸棚の錠もこぢてはなかつたので、うちから持つて來た鍵であけてみると、埃だらけながら食器や寢具も出て來た。それらの仕末もしてから、大船で買ひ込んで來た辨當で晝飯をすますと、汗流し旁々、つい砂山一つむかうの濱邊へ、うちから裸體になつて、早速水浴に出かけた。

「實は、面倒臭い時には、上さんに煮たきを賴まうと思つてゐたんだが、あれぢやア駄目だね」

「時に妻みもごれり、ぢやアね」

途々私たちは、かう話しながら、足のうらを焦くやうな砂の上に、濱草の生えた所をよつて歩いた。丘を登ると、微温く汐臭い海の風が吹いてゐた。海濱院前から長谷の方の海には、胡麻を撒いたやうに浴客の姿が見下ろされた。耳に鳴る風のあいまには、大勢の人聲が連續音になつて微かに聞えて來た。長い濱に捲く波の音は、眞晝の焦くやうな日の下に、ドヽヽドヽヽッと懶げに引き摺つてゐる。六つから私を抱き孚むでくれた馴染の深い海だ。飛ぶやうに丘を駈り下りた隋勢をそのまゝ、小指の先で唾を兩耳に支ひながら、懐しい海のふところへ、——波のなかへ、イキナリ頭からのめり込む……。子供を扱ふ父親の手荒さで、波は、久し振りの私の體を、ヨイショと一つはづみを打たせてから輕々と抱き上げてくれた。私は聲をあげて歡んだ。もう全身汐に濡れて、滑かに光り、柔かに冷される氣持、……私は夢中でまた來る波のなかへ潜り込んで行つた。

有繋に勞れ切つて四時頃に歸つて來た。井戸ばたで、淡水で體を洗つてから、タオルを腰卷にして座敷へ來ると、岩田が紙裂縒に耳のなかの汐水を吸はせながら、低聲で、

「刑事先生歸つてるよ。もういゝ加減な爺さんだぜ」と云つた。

やがて私は着物を着て、うちで用意してくれた手土産を持つて、廊下つゞきの母屋へ出かけて行つた。

この時分もう大分芝居や小説に中毒してゐた私には、探偵と云へば、人はよくなからうとも、どつちみち道樂商賣のことで、解りのいゝ、どこか小粋なところのある人間のやうに思はれてゐた。何かの口繪が挿繪で見たのが、あたまに染みついてゐたものか、深く摘んだ魚茶の中折帽を眞深に被つて、結城か

何んかの袷の裾を、手を長く締めた博多紺獻上の帶に七三にからげ、甲斐絹のバッチ、白足袋の突ッ掛草履で、忍びがへしのついた黒板塀を背にして、少し上は目づかひに、ヂッとかう佇んでゐる色白な、敏捷ッこさうな男――さう云ふのが探偵らしい探偵のやうに思はれてゐた。ところが、留守番の芝田刑事に遇つてみると、まづ、――鎌倉の土地で云つてみれば、別莊地の周旋をして下駄をはくとか、百姓をおだてゝ三百代言めいた掛合に行くとか、そんなことにばかり身を入れてゐて、商賣の荒物の方は女房まかせにしてゐるとでも云つた風な、狡猾な田舍爺をそのまゝだつた。なか禿の胡麻鹽頭を五厘刈にして、酒焦のした骨高い胸をはだけたまゝ、ゆかたの膝をわつた間で、紅の多い石板刷の中元團扇をクルッ／＼廻しながら、視線をあちこちへ迯らせて、決して私の方をヂット見ることをしずに、「どうも今年はまたヒドいお暑さで」と云つて、そのことがさも可笑しいことのやうに、エヘヽヽと笑つたりした。明かに、どう云ふ話題がこの若い書生さんの氣に入るものか、直ぐには見當をつけかねて、ソロ／＼探り足に近寄つて來ると云ふ風だつた。

「まだ拜顔の榮は得ませんが、御親父樣は御健勝で？アヽさやうで。矢張り唯今でも何んですか、日鐵の方へ？アヽ成程。私どもの親戚のもので、四五年前まで上野の驛に勤めて居つたのがございまして、以前からお名前だけは何んでした、ヘエ、ヘッヘヽヽ」

そこに血色の惡いイヂケたやうな姉娘が、番茶をなみ／＼とついだ茶碗を目八分に捧げて、ソロリソロリ摺り足をしながら出て來た。と、妹の子が續いて驅け出して來て、

「ほう／＼、あぶない／＼」

と囃し立てながら、姉の戰々兢々とした容子をさも／＼小馬鹿にしたやうな顔つきで、あたりを跳ね廻つたり、指のさきでチヨイ／＼腋の下をつッ突く眞似をしたりした。姉は然し、「およしよ」とも言はずに、茶碗のなかに波立つ液體から少しでも目をはなさずに、眞面目くさつて、益々體を堅くした。

「あの通りです」と、老探偵は、殆ど「好色な」と云つてもいゝほど、とろけ出しさうな顔つきをして、跳ね廻る妹の子を、貪るやうに目で追ひ廻してゐた。

「ソラ、けんのん／＼。こぼした、あぶない」

調子に乘つて巫山戲かゝつてゐるうちに、故意(わざ)とか、拍子か、妹の指さきが姉の肘にさはつたので、少しばかりの茶が疊の上にこぼれた。

「いやよ、千代ちやん！」

姉は口惜しさを噛み殺して、嘆願するやうな恨めしげな目をあげた。

「馬鹿！氣をつけないか」

子供の巫山戲るのを見てトロ／＼してゐたので、子煩惱なおやぢとばかり思はれた芝田が、思ひもかけず、その時だしぬけにケハシい目つきをして怒鳴つた。更に驚いたことには、その、怒られたのは、罪も報ゐもない姉娘だつた。一聲でその子が、雷(かみなり)に擊たれたやうに、茶碗を捧げたなりにヘト／＼と座つて了つたのにひきかへて、妹の方は平氣の平左で、

「おッかちやん、ねえちやんがお茶をこぼしたよ」と叫んで、袖なしの裾を頭からくるッと被ぶると、

「ヤア、大變々々。雜布々々」などとまだ巫山戲ながら、パタ／＼臺所の方へ驅けて行つて了つた。

「何をぼんやりしてるんだ。早く拭かないと、すつかりしみ込んぢまうぢやァないか」から嚴しくきめつけて置いて、私の方を見向くと、芝田は急に突拍子もなく、「アハヽヽヽ」と笑つた。私はイヤな氣がした。

隔ての板戸をピッタリとたてゝ、やがて私が新座敷の方に歸つて來た時には、友達は二人とも見えなかつた。暫くすると裏の井戸ばたの方から、相川の聲で、「千代ちやん／＼」と呼んでゐるのが聞えた。

「なんだ、相川のやつ、もう千代ちやんだなんてやつてるぜ。早いやつだな……」

思ひがけず、間近かで、岩田の聲がかう云つた。見ると、夕日を逃げて、東側の縁側に寢轉がつて、新聞か何んか見てゐるのだつた。

「うん、やつてるね」

「女房役の先生、そろ／＼女中がわりに手なづけやうと云ふ下心だらう」

「まさか」

「一體どつちが千代ちやんなんだい。いつの間に名前なんぞ覺えるんだか、全くあいつは早いな」

「ちいちやい可愛い顔をした方だ」

「矢ッ張りね」

「だが、あいつァ後世恐るべしだよ。何んとかお千代とでも云はれる毒婦になりさうな傾向があるね」

「これもまた早いね」と岩田は笑ひだして、「どうしてだい、そりやァ」

私が今の母屋の出來ごとを話してゐる所に、相川は跣で、バケッを下げて庭へ廻つて來た。

「オイ〱」と岩田が笑ひながら聲をかけた。「折角千代ちやんを手なづけても、ありや、君、毒婦だとさ」

「毒婦?」と、相川は仰山に吃驚したやうな顏をしたが、「イヤ毒婦でも結構。すつかりもうお友達になつちまつた。利口な、いゝ子だよ」

「ソラ、もうこの通り相川はたらされて了つた。だからこわいと云ふんだ」

私はもう一度さつきの話を初めからしなほして、二人に聞かせた。それについて、めい〱偶感を述べた。青年らしい倫理批評にならないわけはなかつた。結局、聽者は老探偵だつた。姉娘が同情の焦點になつたことは云ふまでもないが、問題の「千代ちやん」については、相川が餘り辯護の位置に立つので、勢ひ私は、峻烈に論告する檢事の役廻りになつた。

「そりやア、無考な親の偏頗な愛によつてスポイルされたと云ふ點では、勿論同情するさ。だけど、ありやアどうもあんまり質（たち）がよくないよ。今に馴れて遠慮がなくなつて來てみたまへ、きつとたまらないぜ。まア、あんまりこつちの部屋には寄せつけないことだね」

誰よりも子好きな私が、こんなことを主張しなければならないハメに立つた。

翌る朝になつてみると、留守番人夫婦と子供のほかに、もう一人みうちの者だか、同居人だかゞゐることが解つた。

二十二三になる青ンぶくれの若者で、口のきゝやう、動作、どうしても少したらない人間らしく見え

た。海水帽よりはいくらか編みの堅い、よく魚屋が被つてゐる鍔の廣いやつをあみだに被つて、手拭をはいだ袖なしの紐を胸高に結び、下は三尺一つで、冷飯草履を突ッ掛けて、朝早く、――と云つても七時半頃から出て行つた。私たちが、第一日のもの珍らしさに、いつになく早起きをして、パンと紅茶で朝飯をやつてゐるつい鼻のさきを通るにも、挨拶一つしず、私たちの視線にもめげずに、散歩にでも出るやうにブラ／＼歩いて行つた。

「何んだい、あいつは、一體」

昨日芝田刑事が、この同居人について一言も云ひ及ばなかつたことゝ、今ひとを小馬鹿にしたやうに、挨拶一つしずにブラ／＼出て行つた男の容子とで、誇りを傷けられて、私が悄々しげにかう云つた。芝田が留守番人である以上、うちのおやぢは主人でなければならない。随つてうちの家族も主人の分前を有つてゐる筈だ。例へば、それを父母と八人のきようだいに等分したとすれば、少くも私は十分の一だけ主人でなければならない筈だ。それを彼等は、あんまり主人に對する禮を知らなすぎる、――と云つた氣持だつた。

「昔の御用聞、今の密偵と云ふやつかも知れないぜ」と岩田がニヤ／＼しながら云つた。

「探偵が探偵なら、密偵も密偵だ」

「あれはね」と、腸胃の弱い相川が、一片のパンを永くかゝつて咀嚼しながら、「あれはお上さんの妹、ぢやアない弟でね、緒と臭橙と傘と柿とを暮の市に持つて行つて、親代々のかさッかきと呼び賣りをして失敗した有名な先生だよ」と、中々なまやさしい學問では故事出處の知れさうもない、へんてこな洒落

を云つた。

午前、勉強時間、と云ふ規定に從つて、岩田と私とは机の前に座つた。相川はそとに出て行つたが、物置で古いこわれかゝつた籐の寢椅子を見つけ出して、井戸ばたでジャア〱水をかけて綺麗にしたのを、やがて緣側へ持ち込んで來た。

「俺は一つ哲學的瞑想に耽ることにしやう」

などゝ獨りごちながら、その上に樂々と横になつた。あたりがシインとして、急に波の音が靜かなリズムを刻んだ。その音で、私は正確に波の高さを知ることが出來た。今日も海は繁昌しさうだ。思ふうちに、いつか私は、東京から讀みかけの、モウド譯のレザレクションのなかに惹き込まれて行つた……。

「コンチヤ、井上でござい、何んぞ御用は」

庭先の緣側へ來て、小僧はもう圖々しく腰をかけてゐた。

「オイ、お上さん」岩田はかう相川へ聲をかけながら、見るといつのまにか、もういゝ心持に寢入つてゐた。

「オヤ〱、すつかり瞑想に耽つちまつたぜ」

「かう云ふお上さんぢやア、世帶は張つていけないね」

「この人がお上さんなんですか」と小僧がいきなり頓狂な聲を出した。それで相川が目をあいた。少し蒼白くなるだけで、決して寢脂を浮かせたり、涎をたらしたり、いかにも寢起きらしく小穢らしくならないのが、神經質で、克明で、いつもゆかたの下にキチンと襦袢の襟を重ねてゐるやうに愼み深い彼の

心持を、寝たまにも忽にしないと云ふ風な感じだつた。
「さうだ、この人がうちの女房だから、御用はいつでもこの人に訊んだよ」
「お上さんが、朝ッぱらから晝寢なんぞするんですか」
相川は椅子から起き上ると、突然、
「その當座、女房あさから眠たがり、と云ふのはなかつたつけかね」
「巫山戯ちやアいけない。一體、君のはどの當座だい」
「着任早々で事務繁多を極めるこの當座さ。ええと、井上だね、君は。ええ、砂糖、鹽、味噌、醤油、味淋、エトセテラ、ハマヤラワ、何んでもいゝから、ありッたけ持つて來たまい。あゝ忙しい〳〵」

だん〳〵私たちの自炊生活も調つて行つた。玄關の二疊に米櫃が据はつた時には、「これでグッと舞臺が引き締まつたね」などゝ眺めつくしてゐた。鍋でたく飯も呼吸が嚥み込めて來た。フヲイパンは驚くに足らないとしても、おろし金や客用の割箸まで備はつてゐるには、あとから來た連中も舌を捲いた。と云つても、書生流儀はヒドいもので、或時むし燒豚を拵えやうとて、大きいなり水から煮てゐると、やがてブクリ〳〵浮いて來るものがあつた。見るとそれが蛆だ。有繫に捨てやうと云ふ說が多かつたが、その時には小川と云ふ高等學校の生徒が來てゐて、自分の方の獨逸語の敎師に、五十近い今日まで獨身で間借りの自炊生活を續けてゐる哲學者があつて、その人などは牛肉を買つてから態々三日も四日も置いて、蛆をわかせてから食ふ。その方が消化がいゝのださうだ、と話したので、連中も思ひ切つて

哲學者になつて了つたこともあつた。

「料理番の方は、兎に角仕事が積極的だがね、どうもあと始末と云ふやつは……」など、云つて、誰しもその「消極的」な仕事は逃げやうとした。結局相川がボツ〳〵ともの靜かに皿洗ひなどやつてゐた。

「相川さん、お手傳しませうか」

どうかすると姉娘が、オツ〳〵と、却つて賴むやうな目つきをして寄つて來た。母親がだん〳〵動けなくなるにつれて、この十にもならない子が、一家中の食事からすゝぎ洗濯ふき掃除まで、殆ど一人でやつてゐて、一日體に暇のないなかからかうした心づくしをみせるのは、よく〳〵優しい言葉に飢えてゐるのだつた。

「えゝ、ありがたう、手傳つて頂戴」

「相川が女と話をする時には、聲がまるつきり普段と違つて了つて、妙に甲高く、顫動音になつて、それで言葉の調子は馬鹿にまたゆつくりと、ネト〳〵粘りだすのは不思議だ」と楠本が評したその「不思議な」調子で、相川が優しく、貴婦人に對するやうな禮讓をもつて答へる。娘がイソ〳〵と流もとに近よる。と、

「お市、お前またチヨコマカして、お皿でもこはすといけないから、およしなさいよ」

もの靜かに云はうとしても、姙婦の苛立しさを包み切れない聲で、たて切つた障子のなかゝら母親がかう云つた。

「ハイ」

お市はトタンの洗ひ桶へかけた手をソッと引ッ込ませて、伏し目になつた。

「なアに大丈夫ですよ。こんな皿の一枚や二枚、どうせ和田のうちのもんですもの。何んなら一枚わつてお目にかけませうか」

から、上さんにも、また座敷の連中にも聞えるやうに、これは普段馬鹿口でも利く時の調子で、大聲に、磊落に冗談を云つた相川の目は、然しうるんでゐた。

「オホヽヽヽ、まア、ご冗談……」

「そんな餘興をお目にかけるにやア及ばないよ」

この、上さんと私の聲とは鉢合せをした。お市は、けれども、ふいと臺所の方へ行つて了つた。

そのうち、みんな地金の寢坊が出て來た。一度起きて雨戸をあけてから、また床の上に轉がつて、蚊帳の裾をあほる朝風を樂しんだ。

「お上さん、でけたての半平(はんぺん)はいりませんか」

青ンぶくれの若者の聲だ。「でけたて」で、思はずみんなブッとふき出して了つた。

「さうさね、二つほど置いといておくれな」

上さんの聲が暢げ(のんき)に答へた。「長さん、半平はいゝが、お前さん今日も休む氣かい」

「もう廻つちまつたんですよ」

「だからさ、私の云ふのは、お午(ひる)ッからのことさ」

長吉は、低聲になつて何かブツ〳〵云つてゐた。彼は夏場だけ魚屋の棒手ふりを稼ぐ氣で、三崎から來てゐる、こゝの主人のみよりの者だつた。

「お前さん、それぢやア、脚氣がありやアしないのかい」

上さんの聲が暫くしてからまたかう云つた。

「あるね、慥かにあるね、あのふくれ方ぢやア」

楠本は、仰ぬけに寢轉がつて、裸つた胸の痤瘡を爪探りながら云つた。

「老探偵、ゆうべもあけたらしいぜ」

岩田は腹んばいになつて、煙草を吹してゐた。私も口を出して、

「この頃はまるでうちにゐつかないね」

「ご別莊がたが入り込みますと、どうしても事故が多くなりますんで、エツへヽヽヽ」

と、楠本は上手に芝田の假聲を使つた。私たちの來たてには、よくうちでゴロ〳〵してゐた。完全に何一つしずに、食つては寢〳〵してゐる容子だつた。

「あのおやぢ、相川以上の哲學的瞑想家だよ。尤も、シヤロツクホルムスだつて、この若さぢやアさうのべつに驅け廻つちやアゐられまいからな」

そんなことを云つてゐると、或る晩なんと思つてか、(恐らくそのゴロ〳〵してゐることにも倦み勞れたのだらうが)私たちの座敷の方へやつて來たことがあつた。

「お職掌柄、種々こわいことや面白いことがあるでせうね」とその時私は水を向けてみた。

「なに、こわいこたアありません。さうかつて別に面白いこともありませんな。まアなに稼業にしろ、その道にはいつてみりやア、つまり辛いが第一でせうかな。貴方がた書生時代と云ふやつが、一番面白い時でさアね。それにみなさん、これにおいとひのない、結構この上なしのご身分でいらつしやるから……」

一日に一度は必ずつくるかと思はれるほど馴れ切つた手つきで、親指と食指の輪をチラリと見せると、その手で直ぐに盆の窪をペタリと叩いて、例によつてへらへら笑ひをした。

こつちも夜食を消化す氣で、よつてたかつて話を釣り出して、笑ふ算段をした。けれども、職務の秘密を守るのか、まるつきり自慢になるやうな手柄話がないのか、これと云ふ獲ものもなかつた。汽車などに乗つてゐると、こつちでは見知りのない男が、ペコペコ頭を下げて「旦那、今日はまだ惡戯してやしませんから、どうぞお見逭しを……」などゝ云つて、次の驛へ來るとさつさと下りて行くのがある、これが箱師と云ふやつだが、そんなものに一々かまつちやゐられない、と云ふのを一番いい心持さうに話してゐた。

「それぢやア貴方は、掏摸係りとでも云ふのですか」岩田は眞面目くさつて訊いた。

「イヤ、そんな、掏摸係りなんてものはありやアしません」と、大分氣色を惡くして、「刑事と云はれるからにやア、竊盜だらうが、殺傷だらうが、强盜、强姦、乃至また何んですな、破獄囚ですとか、そりやアもう一切がつさい扱へなけりやア、一人前とは云はれないでせう」

「强盜なんて隨分ケンノンですね」

「なアに、貴方、向ふが弱味のある人間ですもの、假令食つてかゝつて來たつて知れてまさア」

「でも、刄ものを持つてゐられちやアかなゐますまい」
「なアに、貴方、それだつて……」
「飛び道具ぢやア仕方がないでせう」
老刑事は默つて了つた。この不良少年めら、甘やかしてやれば増長しやがつて、年かさのものを小馬鹿にしやがる、――さう云ふ心持で、一座をヂロリと睨め廻すと、「ヤア、どうもとんだおさまたげを致しました」と云つて、さつさと歸つて行つて了つたことがある。
「なんでもあの、楠本が飛道具を食はせたあの翌日あたりから、めつたにうちによりつかなくなつたんだぜ」
「あゝ、丁度この頃は闇だ、楠本、氣をつけないと、……一番ヒドく睨まれたのは君だつたよ」
「晦日に月の出る里も、闇があるから、覺えてゐろ、か。……起きやうか」
「起きて、でけたての半平でも食ふか」

晩には、みんなゾロゾロつれだつて、長谷の町へ買ひだしやら散歩やらに出た。或る店には、娘としては少しふけすぎた位の年結構の、ほんの少しばかり斜視になつた蓮葉らしい娘がゐた。カチユウシヤ、マスロヷも「少し斜視」だとなつてゐる所から、その娘には、私が「マスロヷ」と云ふ字名をつけてゐた。或る晩そのマスロヷが店さきに腰かけてゐるところへ私たちが通りかゝつた。あとで相川の話る所によると、彼女は多分ビールであるらしい色合の液體を盛つたコップを持つてゐたが、私たちを見て

と、そばの柱の周りを、こつちの歩みにつれて目立たないほどソロリ〳〵と廻しながら、遂に隠し終ふせたのだと云ふ。

「ほんとうか」

「いかにマスロヴでも、吾輩の眼力(がんりき)はくらませない。まさに、いま浄玻璃(じやうはり)の鏡にかけたる如くだね」

「ふうん、ほんとうだとすれば、そいつア……」

「どうだつて云ふんだい。驚いたつてえのか」

「話せるつて云ふのか」

「呆れたつて云ふのか」

「イヤ、待つてくれ、非常に面白い」

全くその話は妙に私の好奇心を唆つた。牢舎でヴオツカをあほらうとも、それは兎に角紙の上の女だ。このマスロヴは生きてゐる……。また他の店には「野末派」と呼ばれる娘がゐた。この名稱は、丁度その頃朝日新聞に連載されてゐた藤村の「春」から來てゐた。――私たちの夜の散歩には、さう云ふ店で買物をしたり、翌朝屆けて貰ふものを注文したりする一分か二分に、重大な希望と失望とが懸つてもゐた。

權五郎社のそばには、同じ學校で、中學にはいつたばかりの兄弟が來てゐた。或る晩そこによつて遊んでゐるうちに、ふと泥棒の話になつた。

「オヽ、さう云へば先達僕ンとこに泥棒がはいつてね」と、午前中は大西博士の哲學史と首ッ引きをしてゐる無口な小川が話しだした。話せば、話術はうまかつた。普段が眞面目なだけに、年下の友達は勿論、私たちも中途まではうま〳〵と乗せられて了つた。それは別段珍しくもないつくり話だつた。

「……どうも可怪しいから、思はず、「鼠かしら」つて獨語を云つたんだよ、僕がさ。馬鹿だね、默つてソウッと行つて見りやアよかつたんだがね。するとね、君、チユウ〳〵つて鳴くんだ。あゝ矢ッ張り鼠だつたかと思つて、安心して少しウト〳〵としたかと思ふと、またね、ゴソ〳〵、暫くおいては、ゴソ〳〵だらう？今度は前より少し音が大きいんだ。はてな、猫かしら、つて云ふとね、暫くしてニヤアニヤアと二聲ばかり鳴くのさ……」

で、だん〳〵音が大きくなる。犬かしら、と云ふとワン〳〵吠える。牛かしら、と云ふとモウ、モウと唸る。こいつ泥棒、ふとい奴と飛び起きて行くと、もうおもてを逃げて行く。直ぐ追ひかけて、（小川のうちは柏木だつたから）發電所の裏の溝川へ追ひつめると、泥棒はこゝに進退谷まつて、川へザブンと飛び込む。そばに駈け寄つて見ると、頭から溝泥だらけになつて了つたので、人間のやうでもあり、棒杭のやうでもある。見分けかねて、思はず、「こりあ杙かしら」と獨語つと、泥棒が、「クヒ〳〵」——と云ふのが下げだつた。

「いやだア」と弟の子が叫んだ。「なんだか變だ〳〵と思つてゐたら……」

「さうしたら泥棒がヘン〳〵つて云ふだらうぜ」

私たちはさんざ笑つて、歸りには、夜光蟲が波がしらを蒼白く見せてゐる海岸づたひに歸つて來た。

長吉は脚氣が重つて床に着くやうになつた。

「長公、チヨがつく、チヨンないの、チヨニかアけて、チヨニぶくろ、チヨッチヤカ〳〵。やアい、長公はチヨニぶくろぢやアない、チヨニぶくれだ。だからほんとにぶくれちまつたらう、やアい」

お千代が枕もとを跳ね廻りながら、こんなことを云つて囃したてゝゐた。

「なんだい、千代ちやんだつて、チヨがつくぢやアないか」と長吉は、まる〳〵小供相手と云ふ心持ばかりでもないらしく、いゝ年をして言葉相手になつてゐた。「千代ちやん、チヨがつく、チヨンないの、だ。チヨニかアけて、チヨニぶくれ。やアい、お前だつてチヨニぶくれぢやアないか」

「よしておくれよ、みつともない」

八月ももう末近くなつても、今だに容子のない姙婦は、永い間の暑さでクサ〳〵してゐるらしく、ことごとにトゲ〳〵しい聲をたてゝゐた。姉のお市なぞはコツパイだつた。お千代は、母親が餘りガミ〳〵云ふと、さつさとそばを離れて、私たちの部屋の方へ顔を出した。

「にいちやん……」

一時は連中の、なかでも楠本の寵愛を一身に集めて、東京から來た菓子なども直ぐお裾わけをして貰つてゐたお千代も、今ではもう少し飽きられかけて來た。

「何んと云つても、可愛らしいやつが可愛いがられる、當り前の話ぢやないか」と云つてゐた楠本までが、「千代公のやつ、執拗いからいやさ。何んだか、今からから脂ツこいやうな感じがするね。全くあいつア、毒婦型の女だよ。今に長谷のマスロヷどころのものぢやアなくなるぜ」などゝ、大分說が變つて來た。そんな風だつたから、誰れも故意と相手にならずに、知らん顔をしてゐた。

「にいイちやん……」

「膝のところへ來て、ひとの顔色を見ながら、ニヤアオと鳴く猫の感じだね」と楠本がその比喩の適切さに自ら滿足して、ツルゲネエフの散文詩集から私の方へ目を移した。

「今、にいちやんたちは、みんなご勉強だから、またあとでおいでね」と、私がさも〳〵五月蠅さう

に奢かせまいとして、出來るだけ言葉をゆつくり云つた。

「千代ちやん〳〵」

からう云ふ時には、いくら火のつくやうに母親が呼びたてゝも、何んの甲斐もなかつた。聾いやうに、知らあん顔をして、板戸の隙から覗き込んだ首を、强情に、いつまでも引つ込めなかつた。その强情さに、うつかり興味をもつて了うと、まだゐるかしらんと思つて、時々そつちを見向きたくなる。そして視線が合ふと、お千代は可愛い靨を見せてニッコリ笑ふ。こん畜生と思つて踏んばつてみても、私のやうな子好きは、いつのまにかもうこつちでも笑顏で應へてゐる。

「にいちやん……」

「なんだい」

「あそばない？」

「オイ、相川、ちよいと哲學的瞑想から覺めてくれよ。どうも、雲の絶間姫にあつちやアかなはない。もう半頁でいゝきりになるんだから、ちよつとのま相手になつてやつてくれよ、たのむ」

一心得た」

相川は威勢よく身を起して、「千代ちやん、お庭で遊ばふ」

二人して出て行つたと思ふと、程なく相川は一人になつてボンヤリ歸つて來る。

「どうしたい」

「もうお友達よりお母ちやんの方がよくなつちやた」

「踏み藻たね」と岩田は、ギリシヤ、ロオマ建築史の頁から目を離さずに、冷やかにかう呟いた。

「ゆうべの騷ぎは何んだつたらう」
「シャロックホルムスが、馬鹿に激昂した調子で永いことなんか喋つてたぜ」
「送つて來たらしい人達が歸るときに、頻りとお大事に〳〵つて云つてたね……」
「そりやアお上さんに云つてたんだらう」
「ぢやア、お産があつたんぢやアないか」
「そんな容子でもないよ。芝田のやつ、またこの前のやうに、醉ッぱらつて來た位のことなんだらう」
「さア……。それにしちやア少し騷ぎがエラかつたな。でけたての半平まで、例の重い足どりで、ドタン〳〵歩き廻つてたぜ」
「一つ俺が探偵してやらう、――毒婦を密偵に使つて」
こんな話のうちに朝めしがすむと、いつになく楠本があと片づけに廻つて、要りもしない水を裏の井戸まで汲みに行つたり、一間の緣先に忍びよつてうちの容子に耳を傾けたりした。――芝田刑事の聲で、「馬鹿にしてやがる」とか、「つまらねえ」とか呟きながら、時々ウン〳〵唸つてゐる聲が聞えて來た。
「どうも、喧嘩でもして、なぐられて來たらしい形跡があるね」などゝ、一寸來てコッ〳〵と耳語いては、楠本はまたどこかへ出て行つた。不思議に、あのお千代が、今日は鳴りを靜めてゐた。
午後になつてから、たうとう楠本は、門柱のかげでおしッこをしてゐるお千代の後姿を、ふと窓のそとに見つけた。
「待つてくれ。何か菓子はないか、菓子は」
慌て戸棚を引つかき廻して、サフレーを三つ四つ紙に包むと、そッと庭の方から廻つて行つた。

二十分ほどすると、楠本は亢奮したやうな赤い顔をして歸つて來た。連中は、――そんなことにあまり興味を感じない小川まで、何か大變な報告を聞き得ることゝ豫想して、成功して來たらしい楠本探偵を取り卷いた。

「どうした〳〵」

聞かれると、急に楠本はワッと云つて笑ひ轉げて了つた。赤くなつてゐたのは、息をとめて可笑しさをこらへて來たのだつた。

事實は馬鹿々々しいことだつた。ゆうべ晩く、芝田刑事は巡邏中に强盜犯人に出遇つた。さうして犯人は逃げ、刑事は臀を二三寸切られた、と云ふだけのことだつた。けれども、それが共同生活に附帶する義務でもあるかのやうに、みんな聲をあげてドッと笑ひだした。

「臀だぜ、オイ、臀肉を切り取られたんだぜ」

と楠本は、笑ひに息も絕え〳〵になりながらも、あるだけの可笑しさをいやが上にも可笑しくして、遂には笑ひ死なうと決心した人のやうだつた。

「眞向傷は御加增とも相成るべきだが、臀を切られるとは、ハテサテ、武士の風上にも置けぬやつぢやわい」

相川がまた、眞面目くさつてこんなことを云ふので、私たちの笑ひはもう一度その勢を盛り返へさなければならなかつた。

それから四五日經つた或る晩、例の通りみんな揃つて長谷へ出かけることになつた。いつも一人殘ら

ず出かける時の例として、「一寸出かけますからお願ひします」とか、「あけッぱなしで出ますからお氣をおつけ下さい」とか聲をかける。その晩も縁さきから聲をかけると、障子のうちでおやぢが不精ッたらしく、

「ハイ、どうぞごゆつくり」と答へてゐた。

連中はまたいつもの他愛のない冗口を利き合ひながら、ブラ〳〵出かけた。ところが、一町も行かないうちに、私は、急に腹が痛くなつて來た。その朝から二度ほど下痢をしてゐたので、こいつはいけないと思つて、一緒に歸つてくれると云ふ小川の親切も斷つて、そこから一人で引き返して來た。そして、あけッぱなしの縁側から直ぐに厠へ飛び込んだが、出て來てからもまだ痛むので、私はそのまゝヂッと疊の上に轉がつてゐた。

……ふッと氣がつくと、母屋の一間の縁側と玄關との境の板戸が、ガタ〳〵鳴つて、それから砂のたまつた敷居の溝をヂャリ〳〵と戸が引きあけられた。思はず私は息を引いた。兎に角留守番一家のものだ。その誰にもせよ、若しこつちの部屋にはいつて來たら、そして私のゐることを知つたなら、それがどんなに止むを得ない用事であつたとしても、少なくも間の惡い思ひはしなければならない。——私は、その人の面目をどうかして助けたいと思つた。後から考へれば、大きな欠をするとか、本を音讀してゐるふりでもすればよかつたのだが、突嗟の場合、とてもそんな智慧は出なかつた。このまゝ、蠅を振られて蛞蝓のやうに、自分の體が消えてなくなることを希ふばかりで、小さくなつて息を殺してゐるよりほかはなかつた。

暫く沈默が續いた。私は自分の耳を疑ひ始めた。……先達、前の晩の炊事を自分でして、翌日また晝飯

の用意しやうと、米櫃の蓋を取つた時に、朝はパンだから誰も米に手をつける筈はないのに、ゲッソリ減つてゐるやうに思はれたことがある。可怪しいな、とは思つたが、多分自分の思ひ違ひだらうと、勿論誰にも話しはしなかつたが、あの時の一寸した疑がどこか心の隅に消え殘つてゐたのだらう。その疑心が今この暗鬼となつて生じたのだ。あゝ、隨分俺と云ふ人間もさもしい人間だ、と思つた。それでも、蛇のやうな「疑」は、まだピク〳〵と死に切れずにゐたのだ。何故なら、私は自分を卑しいさもしいと思ひきめながらも、ちつともそこに自責の感情は伴はずに、寧ろ、それとは正反對と云つてもよい感情がほのかに匂つてゐた。——と云ふのは、私がどれほどさもしい心の人間であるかゞ、今こゝで正確に證明されることの方が、その疑が疑ではなくなつて、恐ろしい事實となつて現はれるよりは、どの位ましであるかも知れないと云ふやうな、道義的な感じで心があたゝめられてゐたのだ。ごくぼんやりとではあるが、その心持は慥かにあつた。してみれば、私は、矢つ張り、自分の方を餘計に信用して、留守番一家のものを、まだ〳〵怪しいと睨んでゐるのだ。オヤ、これは一體どうしたと云ふのだ。ひとを疑ふと云ふことは、惡いことか？善いことか？ひとを罪惡から救いたいと希ふことは、惡いことか？善いことか？あゝ、すつかりこんがらかつて了つた。どうでもいゝ。兎に角、どつちかと云へば、自分の空耳であつてくれた方がいゝ。ひとの、面皮を失つた顔を見なければならない心は、その失つた當人の心よりも、もつと辛い、イヤなものだ……。

が、その時また、今度は隣りの二疊から、カタコトと、忍び〳〵に何かものを置きかへるやうな音がした。私の心は冷たくなつて行つた。たうとう、ザラ〳〵ザクッと、米をしやくい込む音が來た。升の代りに、そこには、リプトン紅茶のあき鑵が擲り込んであるのだ。それで、ブリキのために、普通より音は

高められてゐた。サアー、次には松籟のやうな、米をあける音が來た。この二つの音が幾度か繰り返へされた。仕舞ひには、鑵が米櫃の底に觸れて、ガリ〳〵と鳴るまで……。

たまらなくなつて、私はそつと立ち上つた。フラ〳〵と庭へ下りて、跣のまゝ前の砂丘の方へ逭れた。一足ごとに、踝まで、微温かいサラ〳〵した砂のなかに埋れた。拂つても〳〵取り縋る手があるやうに、丘の斜面に、ズルリ〳〵足があとすべりをした。いつのまにか私は、何故ともなく泣き出しさうになつてゐた。同時にまた一方には、これも何故となく、冷酷になれ〳〵、事實の眞相を窮めろ、何をお前は恐れるのだ、恐れなければならないものが、どこにあるか、そこまで窮めろ、——と勵まし耳語くものがあつた……。

遂に丘の頂に達した。私は肚を据えた。

よし、誰だ、盗みをしたのは?

私は、「窮める」までもなく、それが誰であるか知つてるやうな氣がした。然し、他のものは、「知つてるやうな氣がした」などいふ曖昧を決して許さなかつた……。

「芝田か。イヤ、あれはまだ、拔足さし足が出來るほどに臀の傷が癒つてゐない。

上さんか。イヤ、あれはもうこの頃では、まるで寢たつきりになつてゐる。

長吉か。イヤ、あれは象のやうな足どりで歩くよりほかに歩きやうがない。……だがもう大概でよからう。待て〳〵もう少しだ。震えるな。弱蟲!

ぢやアお千代か。さうぢやアないと思ふ。

何故その「思ふ」をつける。さうなのか、さうでないのか!

さうでない。あれは、いつでも、どんなに晩くつても七時半か、せいぜい八時までしか起きてゐない。吾々が長谷へ出かけやうと云ひ出した時には、もう八時過ぎてゐた。

よし。それでは、殘るのは一人だ。お市だな、いよいよお市だな、米を盜んだのは！

さうだ、盜んだのはお市だ。間違ひなく十にも足らないあの子だ。あの子の、肥厚性鼻粘膜炎らしい鼻息を僅かに聞いたもの。さうだ、盜んだのは、正しくお市だ。けれども、待つてくれ、盜みをさせたものは知らないぞ。

それは、芝田がうしろから指嗾してゐたとでも云ふ意味か。

何んだか知ない。もう澤山だ。

しつかりしろしろ。もう少しのところだ。

五月蠅い！一體貴様はなんだ。そんなことが窮められるか。あの子に盜みをさせたのが、誰かの指嗾によるものか、兩親の育て方か、または、「自然」のしわざか、そんなことは誰にだつて云へやアしないんだ！

フン、白ア切るな、知つてるくせに！

なに？知つてる？

「オイ、なんだ、和田ぢやアないか」

海岸を廻つて歸つて來た連中が、ドヤドヤとそこに近よつて來つた。私は救はれたやうな氣がした。

米のなくなるに氣がついてゐたのは、私ばかりではなかつた。一番餘計に飯たきの役を引き受けてゐ

た楠本が、たうとうたまりかねて、初めそれを岩田に話した。そして續いて一同の前に問題として提出されたのは、あの恐ろしい晩から一週間ほど經つてからだつた。

私たちは、夕凪に少しの風をも求めて、前の砂丘の上に、一列になつて腰を上ろしてゐた。

「また名探偵楠本氏を煩はすかね」

「今度は毒婦も役に立ちさうもない」

「兎に角、でけたての半平でないことだけは慥かだ」

「あいつは近頃、悪くすると、脚氣に自分の命を盗まれて了ひさうな容子だぜ」

「おやぢゃ臀肉事件以來閉塞してゐるし……」

私は、磔にされてゐる足もとから、チヨロ〳〵と、焔の舌が舐め寄つて來るやうな心持にされてゐた。

「いくら毒婦でも、これは千代公ぢやアない」

「オイ！」

それまで一言も口をきかなかつた私は、亢奮の極に達して、思はず怒鳴りつけるやうに叫んだ。「みんな、知つてるくせに！誰が盗むんだのか知つてるくせに！」

友達は吃驚して私を見た。それから、決定的な返事を受け取ることを恐れるやうに、低く呟いた。

「誰だい、それぢやア」

私の唇が動かうとして瞬間に、

「分つてるぢやアないか、そりや杙さ。クヒ〳〵つて云つてらアね」と、相川が眞面目くさつて云つた。

——七年七月十日——



戯曲

肉店（一幕物）

中村吉藏

登場人物

肉店の主人　笠原千太
その女房　お吉
小僧　平吉
女髪結　おくら
羅宇屋の老爺　畑三治

場所

東京市外の場末

時

現代

○

牛豚肉販賣屋の店先、一尺程の高さの玻璃戸棚の中に、赤い肉片の陳べたのを見せた賣臺が、店の前側の大部分を圍つてゐる、その横手には部厚の肉切の大俎が据え附けられて、秤量や挽肉の機械などもそこらに置いてある、牛や豚の太腿の、骨附のまゝの毒々しい大きな肉塊が天井の釣からぶら下り、氷嚢用のふわ〳〵した豚の膀胱も五つ六つ繋いである、庭の片隅には、青ペンキの塗色の褪せた一間程の氷室が作り附けてある、中庭の土間には二三脚の床几、壁際の網棚の横は座敷への通路の板の間になつてゐる。

（舞臺は側面から、この肉店の中庭の土間を見るやうに作られなければならぬ）

千太（四十才過ぎた、でつぷり太つた體に、白い被服を引かけた、頭髪の少し薄くなつた男子、ギラギラ光る肉切庖丁で、肉を切りながら、折々背後の座敷の方を見返るやうにして）「お吉……又そこで何をゴト〳〵させてるんだね……早く來て挽肉を拵へてくれなけや時刻が遲れて、又お得意様のお叱言だ、さつさと來て片附けてくんな、頼むぜ」（叱るやうに賺すやうに云ひ〳〵、刄物持つ手首を忙しく動かしつゞける、一方で十七八才の小僧の平吉は切々と竹皮包を拵へてゐる）……お吉……お吉……何をしてるんだい？返答もせんで？聞えないのかい？」

（今度は聲が少し荒つぽくなる）

お吉（奧の方から）「は！……一寸と待つとくんなさい……今直ぐに行きますわ……」

千太（焦々して柱時計を見ながら）「何をしてるんだい？もう疾に五時を廻つてらアな、早く來て手傳つてくんなといふに……先刻から何をゴト〳〵させてるんだね？」

お吉（奧の方から）「今一寸と着替をしてるんだからね……直に行きますよ」

千太「着替をしてる？今頃又何處ぞへ出かけやうて云ふんかい？（庖丁の手を止めて、苦い顏色で奧の方を見入つて）この忙しい最中に馬鹿だなア、今日は出る事アならんよ、世帶持が、然う尻輕娘のやう

にふら〳〵出歩いてちや堪らねへぜ」(と唾を吐く)

小僧平吉「親方、まだ後六軒分足りませんよ、二軒は豚が半斤づゝだから間違へちやいけません、昨日のやうに突返へされて、おまけに腐らさせちややり切れませんからな」

千太「よし、よし、分つてるよ」(と領きながら又庖丁を動かし始めて)、お吉、戯談ぢやアねへぜ、今日は他所へ出る事アならんからな……そいつアいけねへよ、己が然う〳〵甘く見られちや適はねへやな……昨夜なんか十二時過になつて歸りやがつて、何處で何んな眞似をしてるか知れたもんぢやアねへ、(眉を顰めながら次第に昂奮の體で)斯う見えても己も萬更、底拔のお人よしぢやアねへ、イヤ、お人よしにやもう懲々したよ、何時迄も默つてすつ込んでる己と思つたらそれこそ的が違ふからな、眞實に見損なつちや後悔するぞ」(手先がブル〳〵顫えて來る)

お吉(丸髷に結つて、色の白い、眼の涼しい、二十七八才の、肉附の善い、丸顔の女、ちよい〳〵着に帶も新しいのに仕替へて出て來る)「汝さん、昨夜の事をまだそんなに氣にしてるんですか?、その爲の證人に、あのおくらさんがわざ〳〵附いて來てくれたんぢやないの?、例時のやうに天祖樣へお詣りに行くと、鳥居際でついおくらさんに出會せちやつたんで、誘はれちや忌だとも云へず、活動小屋へ入つた丈の事つたもの、それ位の事で疑られたりなんかしちやア、私はつく〴〵情無くなつて來るわ……(云ひ〳〵俎の方へ寄つて來て袖を少し捲り上げて)さア、挽肉をして了ひませう、一斤だつたのね?」

平吉「えゝ、二軒へ配るんだからね」

千太(ヂロ〳〵見て)「何うしたんだい?着替をして、鼻の頭へお白粉なんか塗りこくつて?……今日は何處へも行く事アならんよ、天祖樣へお詣りする〳〵つて、一體その天祖樣が何方の方角にあるか知

れたものぢやねへからな、へゝン」(と鼻頭で笑ふ)

お吉 (挽肉器械を操りながら、口元で微笑して)「汝さんも時々、妙な事を云出すのね……私がお金拂ひの悪い得意先へなんか掛賣は止した方が善い、此度今に大損をかけられるからつて云つても、何ァに大丈夫だ、その中、都合さへ附いたら皆、奇麗に勘定して下さるに極つてる、人を信用せぬのは悪い事だなんて、叱言を食はしてる癖に、私が一寸と遲く歸つた位で、信用してくれないのは、可笑しいぢやァないかね、」

千太 (苦笑しながら)「己ア、前の嬶で手を燒いたからな、女房つて奴ァあんまり信用すると、とんだ間違ひが起ると思つてるんだよ」

お吉 (一寸と默つて、男の顔色を見てゐたが)「……然う汝さんのやうに、牛の角も鹿の角も一つ口に云つ了つちや可愛さうだわ……私は何も物數寄に天祖樣へ百日參りを始めた譯ぢやないのよ、私もいろんな不幸な目を見た揚句に、汝さんと斯うして世帶を持つてこの商賣をやり出してから、日に増し繁昌して行くのが嬉くつて、この上とも神信心が大切だし、加之いかに商賣とは云へ、牛だの、豚だの、生物の生命を取つて身過ぎ、世過ぎをさせて貰ふんだから、四ッ足の罰の當らんやうに、よくお願ひして置かなけやね、若し萬が一、畸形の兒でも産んだりしちや忌な事つたと、それも一つは神經に惱んで思ひ立つた事だものね、それも此れも皆汝さんの爲めよかれといふ一心ですよ、……それを何の彼のと痛くもない腹を探ぐられちや全くやり切れませんよ」(と太息を吐いて)……ァ、平吉量目は何うだね?」

平吉 (挽肉を秤量にかけてへ)「恰度善うがさァ、おかみさんも此頃は目分量が旨くなつたね」

お吉「汝も大分お世辭が旨くなつたよホゝゝゝ」

千太 (ポツ〱膏肉を切りながら)「そりや分つてる……汝が萬更實意の無い女たァ思つちやゐねへ、以

前の旦那や‥‥御亭主と一緒だつた時分の事ァ何うだか分らねへが、己と夫婦になつてからは、眞黒になつて善く稼いでくれるし、己の手助にもなつてくれてらァ、先の嬶めは、おひきづりで、からもうだらしがなかつた上に、とう〳〵己の面へまで泥を塗りやがつて、逐天しやがつたんだからな、アン畜生の事を思やァ汝の方が何れ位難有ていか知れやしねへ‥‥二本棒だと笑ふ奴も居るだらうが、何ァに笑はれたつて構はねへ、己ァ眞實に心から然う思つてるんだぜ、だから汝もそれを察してくれねへぢやいけねへ、‥‥神信心はする事つた、そりや善い心掛に相違ねへから、天祖様へお詣りするならお詣りするで、朝とか晩とか、ちやんと時刻を定めて行く事にしねへ、この頃のやうに見堺なく、ひよいひよい飛出してくれるんぢや己も前の嬶めで覺えがあるから、つい疑ぐらんでも善い事まで疑ぐる氣も出やうてもんだ、それに昨夜の今日でもあるしな」

お吉（周章てた眼色で）「‥‥そりや然うだけれども、私に限つてそんな馬鹿な事があるもんかね‥‥まさか私が前のおかみさんのやうな大それた眞似もしやしまいし‥‥イヤ、それが善い手本だから、私はもう一生懸命、そんな事のないやうにと思つて、神信心もしてるんだよ、そこは汝さんにもよく察して貰ひたいね」

千太（チッと女房の顔を見ながら）「二度目の嬶にまでそんな目に逢はされちや、此方が堪らないからな‥‥誰に聞いて見ても、一體女つて奴ァ兎角、一時逃れの嘘を吐いたり隠し立てをしたりする癖があるつて云ふからな、アン畜生はそ奴が人一倍甚かつたんだ、あれが抑も間違の始まりだて、‥‥お吉、汝丈は、頼むからそんな眞似はしてくれるなよ、お互にて奴が一番面白くねへ事だからな」

お吉（口篭りつゝ）「そんな‥‥そんな眞似を私がするもんかね‥‥何んにも後暗い事がありやァしな

し、隱し立てをするつて、それ程の惡い事を私はしてる覺えはないからね」

千太「惡い事をされてちや勘辨がなるもんかい？それこそ神樣ア見通しだ、隱してる事なんか、皆ばれずにや置かねへからな」

お吉（早口に）「そりや然うだろうね……でも汝さんと夫婦になる時に、私の昔の事は皆打明けて云つて了つたんぢやヤないかね、……私はもう他に何んにも隱しちやゐないからね」（云ひ〳〵肉を挽いてゐる）

平吉（柱時計を見ながら、焦々した調子で）「おかみさん何卒早くしておくんなさいよ……ア、今日も又お得意樣で叱られる番かなア……」

お吉「汝が例時道草を喰つてるんぢやアないかね？十軒や十五軒のお得意廻りに然う時間がかゝりやしない筈だよ」

平吉（嘲笑の顏色）「おかみさんぢやアあるまいし、己なんざ然う油を賣つてる先もないからね」

お吉（むつとした調子で）「私が何時、油を賣つて歩いてたかい？小僧の癖に生意氣な事をお云でないよ」

千太（加勢するやうに）「平吉、默つてろ、小僧の癖に、御主人に口答へするつて法はねへぞ……だがお吉、今日はもう他へ出ねへが善いぜ、家に居ろ、よ、然うしろ」

お吉（そつと柱時計を横目で眺めながら、焦立つ樣子で）「……でも一寸の間……眞の十分間、ね、善いでせう、お詣りさへ濟ませたら直ぐに歸つて來ますわ、……そしたら明日からは、もう朝詣りする事に定めませう、ね……今日丈一寸と行かせて貰つたら、私もそれで氣が濟むんだからね……もう〳〵何んにも心にかゝる事は無くなるんだからね……眞實に何んにも濟んで了ふんだからね」（心の落着かぬ樣子を押隱さうと力めてゐる）

千太（聞咎めて）「何が濟んで了ふんだい？奧齒に物の夾まつたやうな事を云ふぢやアねへか？一體何うし

たつてえんだい？」(とキッと見詰める)

お吉「イヤ、昨夜あんなに叱られちやつたから今朝はつい出そびれて了つたんでせう、それで今から一寸とお詣りしたら、私の氣が濟むといふんですよ、胸の閊が下りますからね、ね善いでせう？」

千太(首を掉つて)「いけねへ、いけねへ……今日は出さんぞ」(と烈しく庖丁を動かしてゐる)

お吉(少し甘へるやうに)「だつて汝さんそりやアあんまり無理ぢやないの？」

千太(突慳貪な調子)「何が無理だい？……あのおくら婆め、日頃正直を看板にしてやがつても、高が髪結ひだ、内職に賣女の取持位やつてるか知れたもんぢやねへ、そ奴が證人に立つも馬鹿々々しいや、的になるもんかい？(次第に蒼白い顔色になつて)オイ、お吉、昨夜貴様は一體、何處へ行きやがつたんだい、白狀して了へッ？」

お吉(吃驚した眼色で、男の顔を見てゐたが)「ホヽヽ……汝さん又それを云出したのかね？活動小屋へ入つてたんだといふにね……眞實に汝さんの執こいのにも呆れちまひますよ」

千太「白を切つてるよ酷い目に逢はせてやるぞ(とヂロ／＼睨んで)姦婦つて奴は、皆な八つ裂きにしたり、車裂きにしたり、炮烙燒にまでしたつて事だ、それが當り前だ、己も今度こそ、この肉切庖丁で切り刻んでやるから、然う思へ……よく見てをけ、斯うして一寸刻み、五分刻みにしてやらねへぢや腹が癒えねへ……不義いたづらをした牝牛めは、この腿の肉をズダ／＼に切り刻んでやるんだぞ」(庖丁が激しく俎の上で鳴る)

お吉(呆れた顔色で)「まア汝さん、戯談云つて人を脅かすもんぢやアないよ、……誰が不義いたづらなんか大それた事をするもんかね、私はそんな女ぢやアないよ、汝さんにそんな女だと思はれる程なら寧そ死んだ方が増しだ……そんな眞似が出來る私なら斯

うした苦勞なんかしやしない……（太息を吐き／＼）ア、忌な苦勞の種なんか痣でも抜くやうに根こそぎ取つちまつたら、后は眞實にのう／＼した氣持で二人で暮される事つたろうね、……然うしませう、然う出來るんだものね、明日からは然う出來るんだから……さア、この挽肉を量つて見ておくれ、私は一寸と臺所で夕御飯の支度するからね」（と、柱時計を一寸と見て、アタフタした樣子で座敷の方へ駈込む）

平吉（挽肉を竹皮包にしながら）「おかみさんの挽肉は筋と筋とが、そのまゝ繋がり合つてらア……何んだつてあんなにそわ／＼してゐるんだろう」

千太（しきりと庖丁を揮つて、骨から肉を切離しながら、聞咎めて）「誰がそわ／＼してるてえんだい？」

平吉「イヤ……今日の挽肉はよく挽けてないつて云ふんです」

千太（獨語する如く）「彼奴め、不義いたづらが出來る程なら、苦勞なんかしねへつて云ひやがつたな……何んだか譯の分らねへ云草ぢやねへか？……彼奴に限つてまさか前の嬶のやうな不埒な眞似をする氣遣ひもなかろうが……そんな氣遣ひもなかろうが、でも何んだか、チョと奥歯に物の夾まつたやうな事を云ひやがつたぞ……己の頭が何うかしてゐるのかも知れねへが……」

平吉「親方、もう后三包みで、十五軒分そつくり揃ふからね、早くして貰ひませうか？」

千太「ウム、分つてゐるよ……、然う氣短かに促き立てねへでも分つてらア」

平吉「親方の肉の切り方も、今日のはチッと不揃ひだね、馬鹿に大きいのと、馬鹿に小さいのとある、お得意先にや隨分やかましい家があるから、私が叱られますよ」

千太（吐き出すやうに）「叱られたつて仕樣がねへ……己ア今それ處ぢやねへや……切り樣が大きからうが

小さかろうが、肉の味が異りやせんから、それ位の事ア我慢して貰はなければならねへさ」

平吉「だつて商賣が大切ぢやありませんか？」

千太「商賣どころぢやねへ、己ア今、商賣よりもつと大切な事を考へてるんだ（云ひ／＼小耳を立てゝ）お吉‥‥お吉‥‥（一段、聲高く）オイお吉つて云ふに、つんぼだな、聞えんのかい？」

平吉（も高い調子で）「おかみさーん、親方が呼んでますよ」

千太「‥‥何しやがつたんだろう‥‥お吉‥‥お吉、オイ、お吉つて云ふに（返答が無いので）‥‥何處かへ出やがつたんぢやねへかな」、不安さうに、庖丁を手にしたまゝ、大急ぎで座敷の方へ入つて行く）

平吉「困つちまふなア‥‥段々時間が遅れらア‥‥よし、己が切つてやろう」（俎上で肉を切り始める）

千太（奥の方で怒鳴る聲）「お吉‥‥お吉‥‥お吉‥‥畜生、裏口から逃出しやがつたな‥‥ア、簞笥の抽出が一つ空明になつてらア、畜生（顔色蒼ざめて、周章しく駈け出して來て）畜生、とう／＼逃げ出しやがつた‥‥裏口から逃出しやがつた、晴衣裳を容れてあつた簞笥の抽出が一つ空明になつてらア‥‥汝れッ、何處へ行きやがつたろう？‥‥フン捕まへてやろう」（とウロ／＼する）

平吉「おかみさんが裏口から出て行つたつてね‥‥何アに、天祖様へお詣りでせう、そんなに泡ア喰つて騒ぐ事アありませんよ」

千太「然うだろうか？少し落着いて考へながら）‥‥でも抽出しが一つ空になつてる、慥か彼奴の一枚看板が入つてたんだぜ‥‥又情夫でも拵へやがつて‥‥アン畜生のやうに逐天したのかも知れん‥‥若し然うだつたら‥‥然うだつたら汝れッ、先刻牛肉を刻む序に、一寸刻みに、刻んでやるんだつたに」（鼻息を吐いてゐる）

平吉（慰め賺かすやうに）「何アに親方、そんな氣遣ひ

はありませんよ、周章てゝ騒ぐのは見つともないでさア、……今にひよつこりおかみさんは歸つて來ますよ、親方は何うも氣が早いから困つちまひまさア」

千太（憤怒と失望と錯り合つた表情で考へ込んでゐたのが、焦々した口調で）「出る事アならんと、あれ丈云つたのに、そつと裏口から出て行くなんて、不埒な奴だ……矢ッ張二度と歸つちや來ねへ氣だろう……衣服まで……晴着まで持出してやがるんだから」

平吉「だつて逃出す氣なら、あんなに親方に斷はつて行きやしませんよ、私がこの肉を配達する序に、天祖樣まで走つて行つて見て來ませう」

千太（起上つて）「己れが后を追駈けてやる……見附かつたら汝ッ、髮を引ずつてゞも連れて歸つてやるから」

平吉「まアお待ちなさい、眞實に天祖樣へお詣りに行つたのかも知れませんよ、それを手荒な眞似をしちや外聞が惡いぢやありませんか？ね、親方、私が一走り行つて見て來ませう」

千太（少し落着いて）「ぢやア天祖樣から、あのおくら婆の家の方まで、よく氣を附けて見て來てくれ、早くしろ……早く、……大急ぎでな」

平吉「エ、ぢや行つて來ます……オ、、氷を一貫目の注文があつたつけ」（氷室の戸を、明けて持出した氷塊を秤量にかけ、それと竹皮包の肉とを岡持に入れて走つて出て行く）

千太（亢奮の顏色で）「太い阿魔だ……女つて女は何奴だつて此奴だつて油斷も隙もなりやしねへな……先の牝豚めは、何處かへうまく高飛びしやがつたが、今度の牝牛め、逃すもんか、警察へ願つてゞも引上げてやるぞ……淫亂な牝豚め、牝牛め、皮から肉から、骨の髓までも寸斷々々にしてやらねへぢやこの胸の蟲が治まらねへ……大俎の上で、頭を切落して、臓腑を引抜いて……斯うなりや人間の牝も、牛も豚も差別はありやアしねへからな」

三治（頭の後部に薄い白髪が殘り、深く禿げ上つて皺を刻んだ前額のてら〳〵光る六十歳あまりの、瘦せた、脊の低い老爺、よれ〳〵の、汚く垢づいた單衣を着て、繩のやうな帶を締めたのが、釜形の、底の拔けた古帽を店先で脫いで、ぬつと入つて來る）「今日は……親方、何をぼんやり考へ込んで、獨語を云つてるんだね、親方……顏色が惡いぢやねへかね？」

千太「牝豚め……牝牛め、今に見てやがれ」

三治「親方、何を然りプリ〳〵怒つてるんだい？汝さんでも人並に腹の立つ事があるかと思やア可笑い位なもんだよ、アヽして瑞々した、美しくておまけに年の若いおかみさんは持つてるしさ、店は店で繁昌するしさ、お金も今にグン〳〵溜まつて來やうてもんだ、福德の三年目つて、眞實に何んていふ結構な星の下で產れた人だらうて、界隈で皆噂してるんだからね、然う云やア此處のおかみさんと今、あそこの曲り角の質屋の前で逢つたよ、何處の別嬪さんかと思つて、立留まつて見てゐると、莞爾々々笑つて挨拶するんだから、面喰つてよく見りやア此處のおかみさんさ、眞實にまア何んて、愛嬌の善い、惚れ〳〵させる女だらう、アヽいふ女樂が自由になる親方は、果報者だなア、少つとあやかりてい、イヒ、ヽヽヽ」（と妙な癖のある笑ひ方をする）

千太（始めて、正面に此方を見て）「エ、汝さんが質屋の前で家の嬶に逢つたていふのかい？誰か連れでもあつたかい？一人だつたかい？」（焦き込んで聞き〳〵近寄つて來る）

三治「イヒヽヽ、お連れがあつたよ、牡犬とな」

千太「牡犬と？……ど……ど……どこの牡犬だい？何誰だい？云つて聞かせてくれ、賴む」

三治「イヤ、何處の牡犬だつたか、つい首の札は見なかつたが、飴色の、毛並の善い、胴の長い、大きな洋犬でな、首ン處に眞鍮の輪が嵌つてたよ、あんな

牡にかゝつちや敵はねへ、矢ッ張、家のポチのやうに、家の中に繫いどくに限るな」

千太（ムキになつて）「戲談處ぢやねへ、何處の何誰と一緒に步いてたんか、それを云つて聞かせてくれ？それとも汝さんの見知らねへ男子と連れ合つてたんか？それを云つてくれ」

三治「イヒヽヽ、親方、眼色まで變へてるぢやねへか？汝さんも隨分氣の廻る男子だね、こゝのおかみさんが、まさか、汝さんの樣な働きのある御亭主を袖にしてまで、情夫狂もやりやしまいし、然う嫉きなさんなよ、可愛さうに、おかみさんが瘦せらア」

千太（ホッと吐息しながら）「だつて汝は今、牡犬と一緒だつたと云つたぢやアねへか？人をからかつたのかい？」

三治「イヒヽ、牡犬が居るにや居たよ、おかみさんに蹤いて步いてたよ」

千太「牡犬つて、人間の事ぢやアねへのかい？男子ぢやアねへのかい？」

三治「男子の四ッ足さ、牡犬さ……畜生の事だよ」

千太（鼻から息を吐いて）「……それから家の嬶は何方の方角へ行つた、汝は見なかつたのかい？」

三治「イヒヽ、己も善い女房つぷりだと思つてな、暫らく立留まつて後姿を見送つてたけが、あの狹い道を車力が來やがつて、權呑を食はせやがるんで、吃驚して飛び退いたんさ、何處へ行くつて御亭主の汝さんに斷りもしねへで、おかみさんは出かけたんかね？」

千太「……己の知らん間に、出て行きやがつたんだ」

三治「ホウ、然うかね、……矢ッ張牝つて奴 油斷も隙もならねへもんだね、家のポチ奴も繫いであるのに、何處の間にか鎖を嚙み切つちや脫出し〳〵しやがる、人間でも畜生でも、牝と來ちや皆此方等に苦勞をかけやがつて仕樣がねへなア……時に親方、又例のコマ切りを五錢が程、ポチの御馳走に分けてや

つおくんなさい、負けといて貰ひませうぜ、……奴方を善くな」(と白銅をそこへ投出す)

千太(面倒臭さうに)「コマ切りを五錢……この頃は肉の價が上つたから、ボッチリしきやねへよ」

三治「そこを大負けに負けといて貰ふんだね、ボチの御馳走だからね、彼奴め、臭を嗅いだ許りで、もう鼻をヒコ〳〵させて大喜び、舌なめずりしやがつてな、そして己の手掌ア嘗める、膝ア嘗める、頬ぺたまでペロ〳〵嘗めやがる、可愛いもんだな、アヽなりや人間も畜生も分隔はありやしねへ、イヤ己のやうなその日稼ぎの、喰ふや喰はずの羅宇屋風情ぢや、横着な人間は相手にしやがらねへ、皆、いゝ加減干瓢のひね物のやうな婆の癖にしやがつて三度も四度も置去りを喰はしやがるんだから、もう〳〵女切れにや懲々した、人間よりや畜生の方が何れ丈恩を知つてるか知れやしねへ、今ぢやボチ奴が私の子供だ、彼奴が私の娘分だからなイヒヽヽ」

千太(憫げに、コマ切りを拵へながら)「汝の云ふ通りかも知れねへ……人間よりや畜生の方がまだ恩を知つてるかも知れねへ……」

三治(乘氣になつて)「知れねへぢやアねへ、眞實にそれに違ひねへんだよ、その證據にや見なせへ、第一、同じ飼糧を宛飼つてやつても、畜生の方が潰しが利く丈でも難有いぢやアねいか? 現に親方の店の商賣にしても然うだ、牝牛や牝豚を肉に潰して、一斤幾何の賣値で儲けさせて貰つてるんだからね、處が一方の牝と來ちやからもうお金がかゝる許りで、潰し肉の切賣も出來ねへからな、尤も白首にでも叩賣りや兎も角もだがな、イヒヽヽヽ」

千太(血走つた眼色で)「でも己や不埒を働く女なんかもう容赦アしねへ、畜生だ、……イヤ、畜生にも劣つた奴だ(ゴシ〳〵筋骨を切り刻んで)斯うしてやるぞ、筋も骨もバラ〳〵に離してやるぞ、汝れッ、肉醬にしてやらねへぢや男子の面ア立たねへから然う

思ひやがれ……己だつてそれ程踏付けにされて、默つてすつ込んでる骨無し野郎ぢやアねへ、これでも滿洲で露助の五人や六人はぶつた斬つて來た男子だぞ」

三治「親方、然う夢中になつて骨許切つてちや刄が折れやしねへかい？コマ切りは善いが、骨切りはいくら犬の御馳走でも少と勘辨して貰ひていな」

千太「何アに、刄なんかこぼれたつて構ふもんかい、男子が然う／＼面へ泥を塗られちや生命位投げ出すのは何んでもねへやな」（と牛骨を叩き切る）

（平吉、急ぎ足に走歸つて、店先へ飛込む）

三治「ヤア、色男子の平公、泡を食つて何うしたつてえんだひ？」

平吉（尻目にかけて、額の汗を拭き／＼）「親方見えませんよ……天祖様にも、おくら婆さんの家にも、おかみさんは居ませんよ、暗いな、火を點けやう」（店の瓦斯へ點火する）

千太「何アに、居ねへ？」（と、見る／＼眉が神經的にピリ／＼攣つる、手は動かなくなる）

三治「誰がゐねへんだね？」（と二人の顔を覗いて見る）

平吉「おくら婆さんも居ねへんでさア、戸が締め切つて留守でさアね」

千太「畜生ッ……矢つ張、逃げ出しやがつたんだろう……交番へ屆けて出てフン縛つてやらう」（と立かゝる）

三治「親方、コマ切りを貰つて行かうぢやねへか？ポチの奴お腹を空かして待つてるからな、白銅一つでもお客様アお客様だアな、打捨つといちや酷いよ」

平吉「だが親方、まア焦く事アありませんよ、おくら婆さんが居ねへんだから、事によるとこりやおかみさんと一緒に、何處かへ行つたものかも知れませんぜ……そしてね、私が歸り途に、あの曖昧な小料理屋の朝日亭の前を通つてゐますと、婢が呼び留めて

ロースを百匁大急ぎで持つて來てくれつて、注文しましたよ、裏の座敷にお客が來てたやうですが、何んだかおくら婆さんの聲に似たやうな話聲がしてゐました、若しかすると……（と耳の傍へ口を寄せて囁き）ね、親方然うかも知れませんぜ」

千太（頷いて）「ウム……ぢやア然うかも知れん……汝大急ぎでロースを持つて行つて、そつと樣子を探つて來な、愈々然うだつたら己が行かア……今度こそ逃がしやせんぞ、……相手は何處の何奴だらう？」

（睨むやうな眼色をする）

三治「エ、今度のおかみさんにも又蟲が附たのかい、アヽ……だから己は女つて名の附く奴ア相手にしねへんだ」

平吉（怒鳴るやうに）「家のおかみさんの事ぢやアねへ、他の話だい、オイ、この色狂ひの犬狂ひ、下らん事を云ひ觸らして行くと、ポチにやるコマ切りもまう賣つちやゝらんから然う思へ、……親方、肉を切つておくんなさい、朝日亭へ持つて行つて來ますから」

千太（コマ切りを捨置いて、庖丁を肉に加へながら）「よく氣を附けて樣子を見て來な……太膽な奴め……・づう／＼しい奴め……女つて奴ア男子を何處迄間抜けだと思つてやがるんだらう」

三治「イヒヽヽ、處で親方、男子つて奴が又、女にかゝつちや皆少々宛、間抜ッ面になるやうにちやんと出來上つてるから仕樣がねへもんさ、太閤樣だつて淀君の前ぢや、よだれくりの三太郎だつたつて、講釋師が云つてらアな、そこへ持つて來て、こゝの親方なんざ同し男子の中でも甘い／＼カリン糖の親玉だつて、近隣でも專ら評判してゐる位だものな、イヤ、親方、然つちやいけねへぜ、己ア全く正直な處を云つてるんだ、一體昔から女つて奴の爲めに身を持崩したり、生命まで果したりした男子が何千、何萬人あるか、閻魔さんの帳面にも載せ切れめへよ、それでゐ

て野郎、まだ少とも目が醒めねへと來てるから情ねへやな、親方、柔術の手ぢやアねへが己が一つ、汝さんに活を入れて上げらア、遺趣戻しや百戻しつてな、汝さんも眞實の男子なら、こゝらで思切つて仇討をやるんだ、女の奴にウント酷い目を見せてやるんだ、此處に天井から逆さにぶら下つてゐる牝牛の耻ッ曝しな屍體を見なせへな、男子の顏へ泥を塗りくさつた女郎なんか、千枚張の面の皮アからヒン剝いて、手足を縛つて斯うして逆さにぶら下げてやるんだ、こうした淺ましい、忌々しい、耻ッ曝らしなざまを見せてやつたら、いかに圖々しいが本性の女どもでも、身慄ひ位はして少しは何んとか思當るだらうし、いかにのろまが附き物の男子だつて、一寸とい、だじ〳〵と來て愛相を盡かすだらうぢやねへか、罪のねえ牝牛がこんな目に逢つてるのに人間の皮を着た牝豚めは、何んな好きな眞似をしても生しや〳〵して、お天道樣に面を曝して歩いてやがるんだから世間は全く厭にならアな」

平吉「よく〳〵喋舌る老爺だな、稼業の羅苧掃除の笛見たいに、草臥もせんでピー〳〵鳴りくさる、さア、このコマ切りを持つてサッサと早く歸つちまひな、汝はポチの奴と一つ皿で物を食つて、一つ蒲團で寢るて云ふぢやアねへか？眞實かい、氣狂爺？」

三治「鼻ッ垂れ小僧、馬鹿な事ア云ふない……一つ蒲團でなんか寢るもんかい……馬鹿な事を云ふな」（と額を赤くしてゐる）

千太「平吉、さアこのロースを持つて早く行つて來な、善いかい、氣を附けてよく樣子を見屆けて來るんだぜ……若し然うだつたら直ぐ飛んで歸れッ、いゝかい」

平吉「エヽ……ぢやア行つて來ます（肉を竹皮包にしながら）氣狂老爺さん早く歸つてポチを抱いてやんな、淋しがつて待つてるよ、ワン〳〵チン〳〵云つてなハヽヽヽ」（とからかつて、走つて出る）

三治（コマ切りを自分で竹の皮へ包みながら）「鼻垂小僧め、馬鹿な事を云ひやがる……小僧の癖に老人をからかひやがる……己ア人間に見離されたから、畜生を可愛がつてやるんだ、なア親方、眞實に然うだからな」

千太（ぐつたり床几へ腰を卸して）「ウム、老爺さんの方が、いろんな氣を揉まん丈でも善かりさうだ……（忽ち呻くやうに）畜生ッ！……何うしやがつたんだらう……眞實に然うだつたら思切り酷い目に逢はせてやる……仇打だ……全く仇討だ」

三治「親方、お邪魔したね……まア汝さんもせい〳〵氣を附けなせへよ、あんまり甘く見られちや尻に敷かれ通しだからな、己だつて覺えがあらアな、それも一度や二度ぢやねへんだ、眞實に惡い事ア云やしねへ、惡い事ア云やしねへ、左樣なら……ポチの奴め、嘸待つてやがるだらうイヒヽヽ」（病的な笑聲を殘して退場）

（千太は瓦斯の燈の青白く光る下で、氣抜したやうに、ぐツたり床几に腰を卸して、腕叉をしたまゝヂッと一所を睨み据えてゐる、奥の座敷の方で膳をがたつかせる音、咳拂ひの聲が聞える、キッと聞耳を引立てたが急に起上る）

千太「お吉か？……誰だ？」

お吉（奥の方から）「私ですよ……御飯の支度が晩くなつちやつて濟みません、さア入らつしやいな」

千太「何時歸つたんだい？」（と奥に向つて怒鳴るやうな癇癪聲）

お吉（辯解するやうに）「何時つて？つい一寸と近隣の八百屋へ買物に行つて來たんですもの……序に天祖樣へもお詣りしましたの」

千太（興奮した口調で）「此方へ來い……店へ出て來いッ」

お吉「何んですよ、まア大きな聲をして（と店の方へ出て來る）

千太（顔を見ると、突慳貪な調子も稍鈍つて）「何處へ

行つたんだい？……出る事アならんてあれ丈云つたのに、何時の間にか脱けだしやがつて……一體何處へ行つたんだい？隱さずに云ッちまへッ」

お吉（莞爾々々笑つて見せて）「八百屋へ行つて序に天祖樣へお詣りしましたつて云ふにね……汝さんの云つての事に忤つたのは惡かつたけれど、私何うしても氣が濟まないから、默つて裏口から出て、大急ぎで行つて來たんです……もうこれからこんな事は決してしやしませんからね、でもお庇で胸がスッカリ落着ましたのよ……何んだか出るにも出られず、家に居るにも居られず、氣がもしやくしやしてたんですが、これで漸つと治りが附きました、もう明日からはのう〳〵して稼らせますわ、思切り、商賣に身を入れてね、お金を儲けて、赤兒を產んで、夫婦仲善くね……お天道樣が私等二人の爲めに照つてゐて下さるやうな心持で暮らしませうね、貴方？」

千太（難かしい顔色で、女房を見詰めながら）「胡魔化したつて駄目だ……例時そんな手に乘るやうな己だと思つてたら見損ひだぞ」

お吉（怯々しながら）「まア、この人は何を云つてるんだね……私が何を胡魔化したつて云ふの？……眞實に貴方は機嫌買ひだから困つ了ふわ」

千太「まだ胡魔化さうと思つてるのかい？馬鹿め」（と眼が鋭く光つて來る）

お吉「何うしたつて云ふの？私、譯が分らないわ」

千太「嘘を吐いたつて駄目だ、何も彼も云つちまへ……白狀しちまへッ？」

お吉（吃驚した眼付で）「何を白狀するの？……私、何んにも惡い事アしてないわ、白狀する事なんかした覺はありませんわ、……それとも誰か貴方へ焚付けた者があるんですか？何か云はれると貴方はうつかり乘るんだから、あんまりお人よしですよ」

千太（口をもが〴〵させて）「馬……馬……馬鹿めッ、貴樣こそ己をお人よしだと思つてやがるから、善い

加減な嘘を吐いて云ひくるめようとするんだ、今夜はそんな古手に乗りやしねへぞ、眞直に云つちまへッ」

お吉（輕く鼻頭で笑つて）「眞直にも何んにも、別に云ふ事なんかありやアしません、お詣りして來た丈ですもの」

千太「剛突張め（と一段聲荒く怒鳴付けて）己が何んにも知らんと思つてやがるのかい？あの抽出の衣服は何うした？貴様の一張羅が無くなつてらア、ありや何うした、何處へ持つてたんだ？さア云へッ、云はんか？」

お吉（ギヨッとした樣子で）「エ……衣服？……ア、あれはあの……一寸おくらさんに貸してやつたんです」

千太（血走つた眼付で）「何の爲めに貸したんだ？……何故己に默つて内證で持出したんだ……天祖樣へお詣りするつて、又おくら婆アの許へ行きやがつたんだな……それから何處へ寄つた？さア云へ……云はんか？……云はんと汝ッ、これだぞ」（と、急遽に俎上の牛切庖丁を片手に取上げて、お吉の胸元に突き附ける）

お吉「アッ……まア汝さん、亂暴な事を」（と吃驚して飛退かうとする、千太の一方の手は、お吉の襟元を摑んで、身動きもさせない）

千太「何も彼も己ア知つてるぞ、おくら婆アの手引であの朝日亭の裏座敷で男子と會つてやがつたな（憎惡の色が見る〱面上に漲つて來る）その男子は何者だ、さアその野郎の名を吐せッ……吐せつて云ふに……吐さんと汝ッ、殺してやるぞ」（と刄の先を慄はせてゐる）

お吉（度胸を見せるやうにワザと落着いて、口元には凄い笑を浮べ）「そんなに邪推なんかされちや堪りませんよ……小指許も後ろ暗い事なんかしちやゐないんですからね、貴方も人を見損つちやいけませんよ、……一體誰がそんな事を云ひました、證人でもあり

ますか」

千太「惡い事をして知れねへと思つてるんかい？あの平吉が何も彼も見て來たんだ、貴樣の後から蹤いて行つて見て來たんだ」

お吉「エ、平吉が？……（急に輕蔑するやうな口調で）フン、あの小僧ならそれ位な出たら目は云ひませうよ、彼奴は何んですもの……汝さんの留守に私にいろんな事を……忌らしい事を云ひかけるんですもの、小僧の癖しやがつて……あんな奴の云ふ事を眞に受けるんが間違つてゐますよ」

千太（困惑の樣子で）「何に？あの小僧が……己の留守に……眞實か？それは」

お吉「眞實にも嘘にも……私はてんで相手にもならないから貴方にも默つてたんですが、二人の仲に水を差すやうな事を云つてるのなら、今夜にでも追出しておやんなさい、忌な奴たらありやしない……私はそれ處ぢやアないんですよ、汝さんといふ人を一生連れ添ふ亭主だと思へばこそ、何んな辛い目に逢つても默つて、何も彼も私の身一つに引受けてるんですもの……それを察しちやくれないで、あんまり……あんまり、汝さんは……」（云ひ〳〵おろ〳〵聲になつて、果は堪らず泣厄りする）

千太（不思、手を離して）「眞實に汝がそれ程己の事を思つてるのなら何も隠立てなんかする事アねへ……平吉がそんな不埒な奴なら……イヤ、萬更彼奴が嘘許り吐く奴とも思へねへが……（頭の中が渦を卷いてるやうな、混亂した表情で）……イヤ、女つて奴こそ的にやならねへからな、……オイ、お吉、何も彼も云つちまつたら善いんだ、第一、あの持出した衣服は何處へやつたんだ？それを云へ？……それから聞かう」

お吉（涙を拭き〳〵して）「……あれはおくらさんに貸して上げたんです……一寸と融通してくれつて頼まれたもんですから……何んなら明日にでも取返して

來ます」

千太「何の爲めの融通だ？何故己に默つて貸したんだ？……簞笥の抽出に何が入つてるか位ゐ己ら知つてるぞ、何故、內證で持出したんだい？その譯が云へねへ事アあるまい」

お吉「それは後で分ります……取返して來たら善いぢやアありませんか？」

千太（又も顏面が緊張して來る）「後で分る程なら、今云へねへ事アねへ筈だ、平吉が嘘を吐くと許や云へねへ……（何か頭の中で閃いたやうに）フーン、彼奴の云ふのは嘘ぢやねへ、汝は何んだろう、その相手の野郎と逃げやうと思つて、一張羅の衣服を先へ持出したんだろう？然うだろう？歸つて來たのも、又他の物をそつと運びだす算段だろう、それに違ひねへ、然うだろう、さア白狀しちまへッ」

お吉「まア、とんでもない疑ひをかけて汝さん、人を虐めるんだね……私にそんな眞似が出來る程なら、こんな苦しい思ひはしませんよ、汝さんがそんなありもせん事を根掘、葉掘、疑ぐる人だから、私だつてその爲めに、どれ程辛い目に逢つてるか知れやしないよ……（捨鉢な調子で）ア、ア、こんな事なら寧そ死んぢまつた方が優しだ……」

千太（鼻であしらつて）「フーン、何の爲めにそんなに苦しい思ひをするんだい？……その野郎めと駈落したいからだろう（女房の顏を射るやうに見据えて）……吐かせつて云ふに……眞直に吐せつて云ふに……汝ッ、何處までもしらを切つてりや、寸斷／＼に刻んでやるぞ（ぶら下つた牛の太腿を指して）……あんなに、逆さ吊しにしてやるぞ」

お吉（情なさゝうに）「何んなにされたつて、私は身に覺えのない事を云へる筈がないんだもの……指頭から先も、私に白狀するの何のつて、惡い事をした覺はさら／＼ないんだもの……無實の罪を着せて殺して氣の濟むものなら殺して貰ひませうよ」

千太（切齒して）「空元氣で脅かしてるんぢやねへ‥‥汝ッ、殺してくれつて云やア殺してやるぞ、‥‥こんな剛情な阿魔たア思はなかつたが、それ程の度胸が無けや、男子と逢引なんか出來やしまい」

お吉（冷かに笑つて）「私がそんな女に見えますかね？汝さんも思つた程たよりにならない人ね」

千太「己がたよりにならねへと思つて、それで男子を拵へやがつたんだろう、‥‥然うだろう、それに違ひねへ」（興奮になつて、まくし立てる）

お吉「何んとでもお云ひよ‥‥ア、頭がうづ痒くなつた（頭髮に手を當てゝ）オヤ、櫛を何うしたか知ら‥‥何處へ落したか知ら」（と、そこらを見廻はす）

千太「櫛位ゐ落ちるだろう、汝れッ、それで逢引した事を白狀したも同しだ」（云ひさま、激しい勢で胸倉を掴む）

お吉（興奮して）「何んとなと勝手に思ふが善いよ」

千太「この不貞ぐされめ、斯うしてやるぞ」（右手の刄を閃めかせて一突、突く）

お吉「アッ‥‥」（と絶叫して倒れる）

千太「汝れッ、唯殺したんぢや腹が癒えねへ‥‥逆さに吊してやらねへぢや‥‥此方へ來やがれ」（狂せる如く、足を引ずつて、氷室の中へ入る）

（舞臺暫時空虛、小僧の平吉がのつそり歸つて來る）

平吉「親方‥‥親方‥‥（座敷の方を覗いて見て）親方‥‥居ねえやうだな、ハテ何處へ行つたんだろう、おかみさんも歸つちやゐねえし、店をガラ明にして隨分無用心だなア‥‥瓦斯の燈がイヤにバチ〳〵鳴つてやがる、何んだか薄氣味が惡い、‥‥ア、誰かせい〳〵息をしてゐるやうだ、何處だろう（四邊をキヨト〳〵見廻はして）コソ泥棒でも入つてやがるんぢやねへかな（又しても氣になるやうに座敷の中を覗いて見ながら）誰だ？‥‥誰だ？‥‥誰もゐねへ、變だぞ‥‥親方ア一體何處へ行つたんだろう？‥‥」（土間の床几へ腰を卸して、不安さうな顏色

で考へ込でゐる)

(氷室の扉が突然明いて、暗い中から千太がぬつと出て來る、手には血の附いて牛切庖丁が光つて、白い被服にも處々赤い染が附いてゐる、瓦斯燈の反映で、顏色が幽靈のやうに蒼白である。唇が慄え、手足も戰慄いてゐる)

平吉(吃驚して、床几から跳び上つたが)「オヽ‥‥親方か‥‥」(聲が漸つと口から出る)

千太(口も利かず、よろ〳〵した足取で、庖丁を俎の上へ投げ出し、ぐつたりしたやうに、そこの床几の上へ腰を落して、せい〳〵肩で息をしてゐる)

平吉「親方‥‥ど‥‥ど‥‥何うしました?」

千太(默り込んで、些とも口を利かない、眼がキヨト〳〵光つてゐる)

平吉「親方‥‥か‥‥顏色が惡い‥‥何うしました?御氣分でも?」

千太(唯微かに首を振つてゐる)

平吉「チ‥‥チ‥‥血が附いてゐます‥‥手にも、被服にも‥‥牛の血ですか?」

千太「ウム‥‥」(と頷いて見せる)

平吉「氷室の中の、牛肉から血が滴れましたか?‥‥可笑な事つた」(と小首を傾げる)

千太「水を一杯‥‥水を一杯飲ませてくれ」(漸く聲が出る)

平吉「ヘエ‥‥」(水道栓を開けて、コップに水を滿たせて持つて來る)「何うしました?親方、顏色が大變よくありませんぜ、眞靑でさア‥‥先刻氷室の扉が明いて暗い中から親方が突如に出て來た時やア私は吃驚して、腰を脱かしさうでした、‥‥眞實に、薄氣味が惡いつちやなかつたです」

千太(一息に飲干して)「も一つ‥‥も一つ、飲ませてくれ」

平吉「ヘエ‥‥(更に一杯を持運んで)親方、何うしたんです‥‥急に冷氣に當つて眩暈でもして來たんですか?」

千太（又一息に飲干して、輕く息を吐きながら）「ウム……眩暈がしたんだろう……」

平吉（怪訝さうに）「何うしてそんなに牛の血なんかゞ附いたんでせう？……親方が何處か自分で負傷でもしたんぢやありませんか？」

千太「何アに、負傷なんかしねへ……でも一寸と手を洗つてやろう」（よろめきながら、水道栓の處へ行つて、石鹼で手を洗ふ）

平吉（小首を捻りながら）「妙だなア……變だなア……」

千太（床几へ腰を卸して）「何を獨語を云つてやがるんだい？」

平吉「イヤ、今夜は何んだか變ですよ……ね、親方、私が今、朝日亭へロースを持つて行つてそつと裏へ廻つて座敷の様子を立聞してますとね、おくら婆アさんの話聲と、も一人、男子の聲とはするけれど、おかみさんはゐないらしいんです……二人でおかみさんの噂をしてた位ですからね、慥かに居ないんです、そして家へも歸つちや來ないんでせう、眞實におかみさんは何うしたんでせうね、何うも譯が分らねへ？」

千太「彼奴の噂をしてた？……何んな事を云つたんだい、そしてその男子つていふのは何んな奴だつたい？」（焦々して聞く）

平吉「中を覗いて見る譯にや行かないから何んな男子だか善くは分らないが、何んでも土方か破戸漢かつて風の、ぞんざいな荒つぽい言葉附の奴でしたよ、そしておかみさんの惡たいを吐いてね、何んだか酷く怨んでるやうな様子でしたよ、おくら婆さんがしきりに宥めてゐましたつけ」

千太「何んだ？（慄え聲で）おかみさんの惡たいを吐いてた？……何んな惡たいを吐いてたんだい？」

平吉（千太の顏を見て）「ピ……吃驚しますよ、そんな聲を出されちや……親方の眼色は何んだか變だ、寒

氣でもするんですか？體が慄えてるぢやアありませんか？」

千太（强ひて空元氣を附けて）「何アに、何んでもねへ……何んでもねへ……何んな惡たいを吐いてたのか？それを聞かせい」

平吉「何アに、別に何んでもありませんよ……氣にする程の事ぢやないんでさア」

千太（上ずつた調子で）「何んな事を云つてやがつたんか？……それを云へつて云ふんだ？」

平吉「善かア分りませんけれど、おかみさんが薄情だとか何んだとか云つてました、（千太の顏色を見い〳〵しながら）……それをおくら婆アさんが、お吉さんは……おかみさんは、もうこゝらで自分の身を堅めて、一生の運定めをする氣でゐるんだから、汝さんも眞實にあの人の爲めを思ふのなら、サツパリ思切つて一人で九州へ行くが善い、イヤもう手切まで濟ませてから愚痴をこぼすのは見つともないとか、何んだとか、そんな事をくど〳〵云つてゐるましたよ」

千太（疑つたり、悶へたりしながら）「エ……身を堅めて、一生の運定めするつて？……あの家の嬶アが：：お吉が然うだつて云ふのかい？」

平吉「まア然うらしいんです……それにおかみさんが何處へ行つたのか、今まで歸つて來ないのも譯が分りませんな」

千太（頭が痛むやうに、兩手で押へて）「平吉、貴樣の云ふ事ア眞實か？」

吉平「私が嘘なんか吐くもんですか？……聞いて來た通りを喋舌つてるんです、……おかみさんはそりやア親方思ひですからな、眞實に、私なんかまでチヨイ〳〵親方ののろけを聞かされるんですからな」

千太（急速に、平吉の胸倉を取つて）「貴樣ア彼奴を：：お吉を口説いた事があるのか？……彼奴の袖を引張つて、揮ねつけられた事があるのか？さアそれを

云へ……眞直に云へッ」
平吉（周章てながら）「馬……馬……馬鹿な事を……親方、誰がそんな馬鹿な眞似をするもんですか？……一體何奴がそんな失敬な事を云ひましたか？」
千太「お吉から聞いたんだ」（と力を入れて締め付ける」
平吉「ア、苦しい……親方、止して頂戴……止して頂戴……口が……口が利けません……」
千太（手を緩めて）「隱しやがつても駄目だい、……吐せつて云ふに、……默つてると酷い目に逢はせてやるぞ」
平吉（尻込しながら）「戯……戯談云つちや困ります、おかみさんは跋が惡くなると善い加減な出たら目を云ふ人ですから……腹は善いんだが、あれ許ッかりはおかみさんの惡い癖ですからね……」
千太「何に、出たら目を云ふ……彼奴が出たら目を…………そりや然うだらう……それに違ひねへ……畜生、己を騙しやがるからこんな事になつた、……天罰が當つたと思ひやがれ」
平吉（恐る／＼千太の顔を覗いて）「親方、何うしたんだね……熱でも出たんぢやねへかね？」
千太（吊り下つた牝牛の太腿を見上げて、狂的に冷笑して）「ハヽヽ、不埒な牝牛め……善いざまだ」
おくら「今晩は」（と、聲をかけて、店先から入つて來る、五十才前後の、小い丸髷に結つた、髮の艶々した、氣の若さうな女、ほろ酔加減の、眼縁が赤い）
「親方、お吉さんは？」
（千太ギロリと見て、默つてゐる）
おくら「お吉さんは何うしました？親方……昨夜は遲くなつちやつて、何うも濟まなかつたね」
（千太はまだ返答をせぬ、おくらの顔を睨み付けるやうに見詰めてゐる」
おくら「オヤ、お吉さんはまだ歸つてませんか？……まア、何うしたつてんでせう？」

平吉「汝さんには、家のおかみさんの行つた先は分つてないのかね？」

おくら「もう疾の昔に歸つてる筈だものね、ハテ不思議だ……私はお吉さんの櫛が落ちてたのを拾つたから、届け旁々樣子を見に寄つたのだよ」

千太（唇を慄はせて、突如に）「おくら、その櫛は何處で拾つたい？汝は彼奴と何處かの野郎と逢引する手引をしやがつたな？昨夜のも然うに違ひねへ、何も彼も云つちまひな、云はねと汝れッ、酷い目に逢はせてやるぞ」（血色凄ましく、庖丁片手に身構する）

おくら「まア、親方、脅かしちや忌だよ、……何も私が逢引の手引なんかするもんかね、これでも汝さん等二人の仲人役ぢやアないか？その仲人が何うしてそんな馬鹿な眞似が出來るもんかね、髮結はしてゐても、さうした卑しい人間ぢやアないつて事は、世間の皆樣が御承知の筈だ、あんまり酷い事を云ひなさんなよ」

千太（急き込んで）「その櫛は何處に落ちてたんだ？それから聞かう」

おくら「まア〱落着いて聞いて貰ひませう、ね、親方……私は實は何んだか氣がゝりで、樣子を見に寄つたんだが、お吉さんがまだ歸つてないといふのは何うも變だものね、……歸るのが極が惡くつて、ひよんな氣を出したのでもあるまいね……十九や廿才の娘ぢやアなし、まさかそんな事もあるまいが……」

千太「その櫛は何うしたんだ？……それを云へつて云ふんだ？婆の癖に酒なんか喰ひやがつて、一體汝のその、尤らしい面が氣に喰わねへ」

平吉（宥めて）「親方、親方、まア大きな聲を出さないで落着いて聞いたら善いぢやアねへかね？」

おくら「眞實に、落着いて聞いて貰はなけや私も口が利けません……今夜の酒は千太さん、汝さんに奢つて貰つても善い筈の祝酒なんだよ、今夜からお吉さんは高枕で寝られるんだものね、汝さんにもお目出

度い事だ、お神酒位ゐ上げたつて善い」

千太「何に……何が目出度いんだ？……何を云つてやがるんだ？」

おくら「ね、親方、汝さんの前だが、お吉さんは氣の善い人だけれど唯つた一つ、惡い癖でね、隱さいでも善い事を御亭主の汝さんに隱さうとする、私アあれが忌ひでね、構ふ事アないから何も彼も打明けてお了ひと、やかましく云ふんだけれども、一つは之も人々の性分だし、それにお吉さんも從來、妾奉公してちや虐められる、出來合つた男子は置去りを喰はす、さん〴〵苦勞して來た上に、親方が又些と嫉き方が酷いもんだから、ホヽヽ、怒つちやいけませんよ、そりやア汝さんも先のおかみさんで手を燒いてるから無理もないわね、……人の善い親方だけれど一度騙されると、ひがむのが人情だものね」

千太（不安さに堪へざるものゝやうに）「そ……それで何うしたてんだね？何んな事を隱してたんだね？」

おくら「實はね、一旦お吉さんに置去りを喰はした先の男子のあの龜公の奴め、この四五日前に悶々しく、舞ひ戻りやがつて、九州の炭坑の方とかへ、お吉さんを引張つて行かうて蟲の善い事を云出したんですよ、呆れッちまふぢやアないかね……お吉さんは何處迄も汝さんに隱してゝくれと頼むんだけれど、もう斯うなつちや、云つて了つた方が善い、その方が眞實に汝さん方二人の行末の爲めにもなる事つたからね……一體昨夜、私は皆、汝さんに打明けやうて云つたのを、お吉さんが何うしても默つてゝくれッて、强つてのお頼みだから、濟まない、濟まないとは思ひながら、つい善い加減な事を云つてましたの、そりや堪辨して貰ひますよ」

千太（苦悶の表情）「……その、先の亭主が何うしたんだ？……昨夜は逢引してたのか？」

おくら「まアゆつくりお聞きな、何を隱さう、昨夜はお吉さんと、その龜公の奴と、私の家へ落合つて、

納得の行くやうな話をさせにかゝつたのだが相手がいろんな言がゝりを附けるので、出す筋はないんだが、面倒臭いから寧そ手切金で綺麗サッパリ手を切ろうて事に、漸つと鳧を附けたんですよ、男子つて隨分身勝手ぢやアないかね、鮑公め、自分が落目になるとお吉さんを置去り同樣にして、北海道とか樺太とかへ高飛びしやがつた癖に、今度は又九州へ下る序の行がけの駄賃にお吉さんをあべこべに強請ろうてんだものね」

平吉「エ、ぢやア先の亭主の鮑公とかいふ奴めが強請にやつて來やがつたのか？まア驚いた奴だね」

千太（慄々聲で）「それが眞實なら、始めから打明けられねへ事アねへ筈だ……櫛まで落して來るたア何うしたんだ？……矢ッ張、體を自由にされたに違ひねへ、それに違ひねへ」

おくら「汝さん、然う早く氣を廻すから困るぢやないかね？　假にも私が汝さん等夫婦の仲人役で、何うしてそんな怪しからん眞似をさせるものかね、お吉さんも今ぢや身慄ひする程厭がつてる男子だもの……この櫛は私があそこの家の縁側に落ちてたのを拾つて來たんですよ、何んでもありやしない……それよりかお吉さんは、汝さんのやうな働きのある人の連れ合になつたのを何んなに喜んでるか知れやしませんよ、もう死んでも生きても千太さんと一緒だ、これが私の一生の運定めだつて、御亭主のおのろけを手放しに聞かせる位だもの、せい／＼可愛がつておやんなさいよ」

千太（悶々するやうに胸先を抑へて）「エ……眞實か？　それは？　おくらさん、眞實にそんな事を云つてたのか？」

おくら（笑ひ顏で）「眞實の、嘘のつて、平素の素振りでも汝さんにやちやんと分つてゐさうなもんぢやアないかね？……　鮑公の畜生め、女は弱いものだと高を括つてお吉さんを脅しにかゝつて、此所の店先へ

据り込むつて云ふから、何アに、些とも構やアしない、然うさせた方が却つて善いつて、私は云つてたんだけれど、お吉さんは、イヤこんな事で一時でも千太さんの氣を惡くさせるのが辛くて堪らないから、あの人には何んにも知らせ度ない、他の事で少し位叱られるのは構はないから、こんな忌な事丈は、卯の毛も勘附かれないやうにし度つて云つてる程の、汝さん思ひなんですよ、あんまり遠慮の仕方が妙ですけれど、その心持を汲んで見りや可愛いぢやありませんか？千太さん、眞實に大切にして上げないぢやア罰が當りますよ」

千太（全身をガタ〳〵慄はせながら）「……眞實か？……
……眞實にそんな氣持でゐてくれたのか？……ア、胸が痛い……胸先を裂かれるやうだ……おくらさん、汝の云ふ事は眞實か？」

おくら「眞實にも何んにも……私は嘘と賭博は昔から忌ひだからね……汝さん、苦しさうだね、何うしたんだね？眞實に顏色が善くない、死で病人のやうだ」

平吉「親方、何うしたんです？おかみさんも今に歸つて來ますよ、心配する事アありません」

おくら「もう心配する事なんか些つともありやアしないよ、……もう斯うなつちやお吉さんの歸つて來る前に、何も彼も私から云つちまひませう、ね、然うした方が善かろう、だが後であの人を叱らないやうにしておくんなさい、それは私が頼んで置きますよ、善いかね、昨夜漸つとその手切談が附いたので、飴公の畜生、今夜の七時の汽車で發つと云ふから、その刻限までに渡す筈の、手切金の三十圓つてものを汝さんに知らさないで、自分の衣服を持出して質屋で調へて來たつて云ふんですよ、女が生命から二番目の大切な衣服を曲げてまで、汝さんには默つて、心配かけまいといふんですよ、いぢらしいぢやアないかね、そしてあそこの小料理の朝日亭へその金を持つて行つて、私の立會で飴公の奴にそれを渡して

さ、手切の證文と引替にすると、まア一杯と鶴公がさす杯をお吉さん受けもしないで、サッサと歸つたんですが……それにしても何處へ道寄したんでせうね、可笑な事だ」

千太（破れたやうな慄え聲で）「エ……おやア衣服を質入して……それで手切金を……何故一口云つてくれねんだい、何うして默つてゐたんだい……ア、己は八ッ裂にされるやうだ……逆さに吊られるやうだ（胸を掻きむしるやうに苦みながら）……お吉、たつた一口、何故己に知らせてくれねへんだい？……たつた一口何故然うと云つてくれねへんだい？」

平吉「親方、おかみさんは怒られるかと思つて、歸つて來ないのかも知れませんね、そこらを、も一度探して來ませうか？」

おくら（少し心配さうに）「心當りがありや探して見て貰ひたいね……默つてたのはお吉さんが惡いけれど、何も彼も自分一人で引受けて汝さんに心配かけまいとしたんだから、決して叱つておくなさんなよ、ね、眞實に可愛いおやアないかね？もうこれでお吉さんの胸もせい〳〵したらうから、明日からは汝さん方二人の仲に何んにも心配な事はありやしない、眞實に幸福な御夫婦だからね、いゝかね、叱つちやいけません、頼みますよ」

千太（とろんとした眼で空虚を見詰めて）「然う云へば思ひ當らア、……明日からはお天道樣が二人の上に許り射すつて云つたけ……自分一人で默つて苦勞するつて云つたけ……お吉……濟まなかつたな……濟まなかつたな……」

おくら（慰めるやうに）「濟むも濟まんも、汝さんが氣持を惡くしないで打解けてさへおくれなら、あの人も何んなに喜ぶか知れやしないからね、死ぬも生きるも汝さんと一緒だつて、手放しでのろけてる位の御亭主思ひだからね、汝さん、いゝかね、歸つて來ても何んにも小言を云はないでね、いゝかね？」

千太（譫言のやうに）「……死ぬも生きるも一緒だつて……酷い男子だと怨んでやうな……怨むのが尤だ：……エ、このまゝおや死ねねへ……汝をも一度生かして詫まつてから死に度い」

平吉（薄氣味惡さうに）「親方……親方……妙な事を云つてるね、熱でも出たのか知ら？」

おくら「お吉さんが歸らんので、心配してるんだらう……何アに、心配する事はない、今に歸つて來ますよ、何なら私も行つて探して來やう……オヽ、忘れかけた、朝日亭から氷を二貫目持つて來てくれつて、言傳を頼まれてたけ、小僧さん、汝さん序に持つて行つて上げておくれな……」

平吉「朝日亭へ……二貫目……よし、持つて行つた、序にも一度、おかみさんを探して見やう、愈々分らなけや交番所だ（云ひ〳〵、氷室の方へ行きかけて、足を滑らす）ヤ……血が……血がこゝらにも流れてらア」

おくら「エ……何うしたつて……血が？牛の血でも氣味が惡いね」

千太（狂氣の如く起上つて、氷室の扉口に立塞がり）「此處は誰にも明けさせねへぞ、死恥まで曝させちや己ア濟まねへ」（血を吐くやうな聲）

平吉（吃驚して）「親方、何うしたんだね？……譫言を云つてらア」（とおくらの方を見返る）

おくら「親方、何うしたつての？そんなに心配せんでもお吉さんは今に歸つて來ますよ……（平吉の顔を見て）少し變だ、人が善過るんだよ」

千太（呻くやうに）「許してくれ……お吉……許してくれ……お吉……汝一人冥途へはやらねへよ」（と、突然、氷室へ跳り込む）

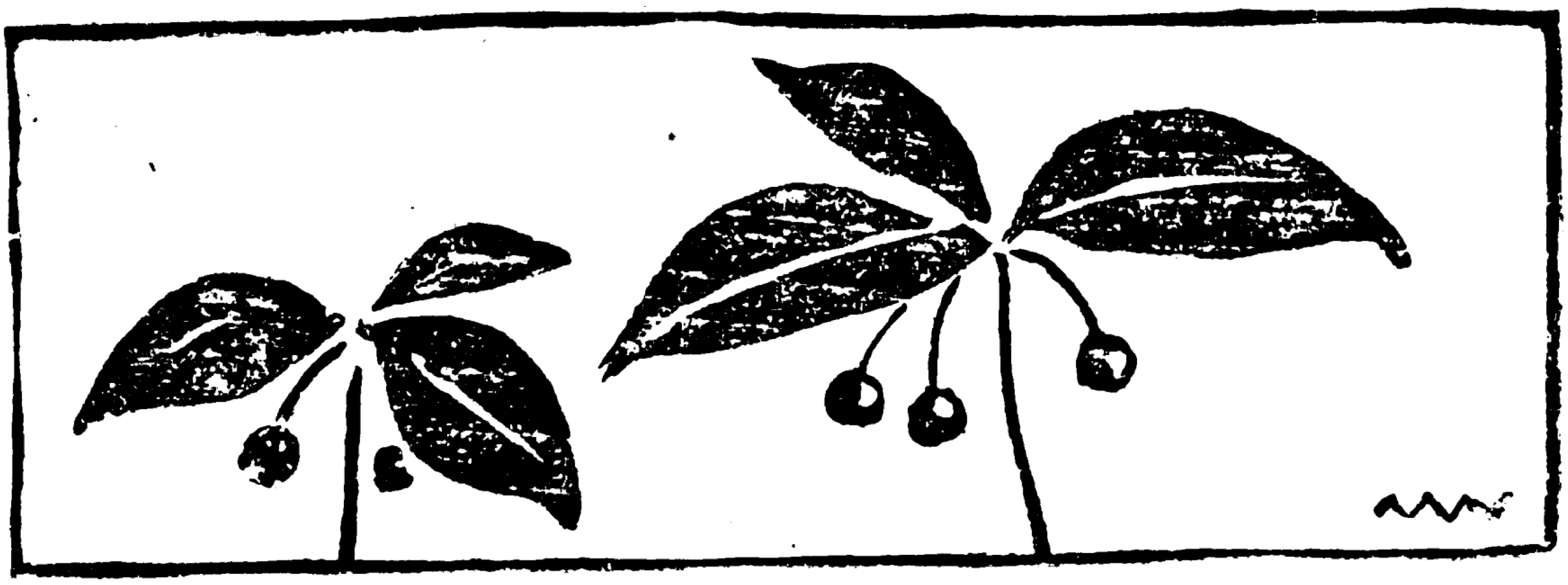
平吉（呆れ顔で）「一體、コリや何うしたつてんだろう？」

おくら「何も些と變だよ？氣が變になつたのかな？」

（二人は不安さうに顔見合せて、暫く沈默して氷室の方を見詰めてゐる……忽ち氷室の中で叫聲が聞える）

平吉「エッ……何……何……何うしたんだろう？（と恐る〳〵氷室の扉を明けて、内部を覗いて見て）ア、二つ屍骸が……」（叫びさま、氣絶して倒れる、おくらも其處へ凝立する、瓦斯の燈がパチ〳〵鳴る）

（カーテン）



別筵（悲喜劇一幕）

久米正雄

人物

西野　粂子。ある實業家の未亡人。四十三四歲。
同　絹子。その令孃。十九歲。
同　健吉。その令息。十三歲。
佐竹信一。絹子の約婚者。二十八歲。
杉村俊夫。家庭教師。二十七歲。

舞臺

西野家の客間。和洋折衷の立派な部室である。中央に大きな卓子。その周圍に椅子數個。ソーファ、ビユッフエ、ピアノなど、富裕なる實業家の家庭にふさはしい家具や、裝飾品が据えられてある。正面の壁には、今は亡き主人西野健太郎氏の肖像が揭げられてある。
時はある晚春の夕方から夜にかけて。――幕あくと令孃絹子、何となく落着かない態度で、卓上の花瓶などを飾り直してゐる。そこへ戸を開けて當家の家庭教師、杉村俊夫が入つて來る。彼はL字の襟章のついた、大學の制服を着てゐる。

杉村　あ、御免なさい。――あなたお一人ですか。

絹子　あら、いらつしやい。――わたし一人よ。

杉村　お母さまはどちらにおいでなのです。

絹子　今お風呂を召していらつしやるのよ。

杉村　健吉さんもお見えにならないやうですね。おゐでになるなら、今の中に佛蘭西語の復習をして置かうかと思ひますが。――

絹子　居りませんか。先刻確かに歸つたやうでしたがね。では又すぐ表ての方へ飛び出したんでせう。あの子もほんとに惡戯好きで、困つて了ひますわねえ。

杉村（意味のある笑ひを送つて）併しそれが僕たちには、丁度都合がよくはありませんかしら。

絹子（鳥渡媚態を作つて）それもさうですわねえ。

杉村　絹子さん。それぢや丁度いゝ機會ですから、今の中に相談を定めて置かうぢやありませんか。今夜佐竹の前で、吾々は一體どう云ふ態度を取つたらいゝか。――

絹子　さうですね。ほんとにどうしませう。

杉村　一體佐竹君は何時に此處へ來るんです。

絹子　六時頃おいでになる筈なのよ。お母さまのお考へで、彼方へお發ちになる前の晩、皆で夕飯でも食べたいから、六時頃いらしつしやいつて約束してあるんですから。

杉村　そして其席へ僕も招んで下すつたのですね。

絹子　えゝさうなの。

杉村　奧樣も鳥渡御皮肉ですね。萬事御承知で居乍ら、僕と佐竹と貴方とを一緒の食卓につかせるなんて。僕は何だか妙な氣がします。

絹子　だつて貴方をお呼びしなければ、却つて妙になるでせう。――貴方はあの人の御親友なんですもの。

杉村　而して其實は大變な裏切り者なんですからね。僕はこれでも昔ショオの弟子入りをして、良心なん

て厄介物は出來るだけ失くさう失くさうと心懸けたものですが、今だに心の底に膠り付いてゐる道念が、ちくり〳〵胸を刺すんで困ります。何しろ佐竹君と僕とは、中學時代からの友人なんですからね。それに此處へかうして家庭教師として上れるやうに、世話をして呉れた其の當人なんですからねえ。一體なら僕はあの男に、只管感謝してゐなければならないのです。假りにも貴方とこんな事をするのは、道德上絕對に許されない事なのです。しかも誰かさんの恐ろしい力は、僕にこんな事を敢てさせました。

絹子　どうも濟みません。

杉村　何しろ僕にその罪を犯させなければ、死んでしまふなんて强迫する人がゐるんですからねえ。而して其一念で、とう〳〵お母樣まで變節させて了つた人がゐるんですからねえ。

絹子　あら、それは噓よ。お母さまだつて前から、貴方の方がお氣に入りだつたのよ。只前には佐竹さんが、餘り御熱心だつたものですから、私もお母さまも只同情して、つい承知して了つただけなのよ。だから其後に佐竹さんの人格や才能が、だん〳〵私たちに解つて來れば、誰だつてあんな人厭になつて來るのは當り前ですわ。私だつてもと〳〵あの人が、さう好きと云ふのではなかつたのですもの。

杉村　でも僕のやうな侵入者が其間に入つて來なければ、こんな事にはならなかつたでせう。

絹子　それはさうでせうけれど、もうこんなに成つて了つたのですから、どうにも仕方がありませんわ。

杉村　凡ては運命ですね。此場合少くとも運命だと一口に片を付けて了ふ方が、僕らには都合がいゝやうです。運命の力にはどうしても逆ふ事が出來ぬと云ふのが、かう云ふ場合の唯一の逃口上ですからね。實際僕はかう云ふ關係になるのを、恐れながらも庶つてゐました。少しは佐竹君に濟まぬとは思つて、

爭つてはみましたが、決してそれに全力を盡した譯ではありませんでした。私はかう云ふ結果になるのを、とうから待ち設けてゐたのです。あなたを見たあの瞬間から既に。——

絹子　私もさうでしたわ。貴方が初めて佐竹さんに連れられて來て、私に紹介されたあの時から。——

杉村　あの時佐竹は、貴方を僕に見せびらかすやうに、得々としてゐましたねえ。あの時分は佐竹の全盛期でした。高商は優等で卒業する。すぐに××銀行に入る。貴方との話が定まる。まだ戀にもつかない文科大學なんぞに、悶悶々々してゐる僕から見ると、世間的にも羨しくて堪りませんでしたよ。殊に貴方に紹介された時なぞは、僕は明に或る嫉妬をさへ感じました。僕は果して此人のやうに、美しい人を自分のものにする事が出來るかどうかと考へると、漫ろに無情をさへ感じました。——併し今はみんなそれが過去の夢ですねえ。僕はもう誰も羨みません。僕ほどに幸福な男は、世の中にさへ無いと思つてゐます。

絹子　私も自分ほど幸福な女は、外にないと思つて居りますわ。

杉村　僕はもう佐竹の事なんぞ考へない事にしました。彼奴の事なんぞ考へてびく／＼してゐては、到底此の世の中でこんな幸福は得られませんからね。

絹子　でもあの人と私との問題は、どうして解決を付けたらいゝでせう。あの方が上海へ行つて了はない中に、どうにかしなければいけないでせうねえ。

杉村　いや、併しそれも運命が一人でに解決をつけて呉れてるぢやありませんか。僕は貴方とかうなつた時、佐竹の問題が圓滿に行つて呉れゝばいゝがと、それぱかりを苦に病んで居りました。僕は殆んど佐竹が、死んでゞも呉れゝばいゝと考へた位です。

絹子　まあ貴方も！私もさう考へたことがあるのよ。而して餘りの恐ろしさに、それから先を考へる事を

よしましたわ。

杉村　ところが今度の彼の上海(シャンハイ)行(ゆき)は、僕たちに取つては願つたり叶つたりぢやありませんか。まるで運命の神が、僕たち二人を祝福して呉れてるやうなものです。もう邪魔物は遠く離れて了ふし、離れゝば疎(うと)くなるに定(きま)つて居るし、其中には此方に都合のいゝ口實も見つかるでせうし、何もかも好都合過ぎる位好都合ぢやありませんか。――僕は此間佐竹から、今度上海の支店詰を内命されたが、行つたものかどうかと相談をしかけられた時、内心もう〆めたと思ひましたよ。而して出來るだけ邪意なしに、それとなく贊成してやりました。僕も隨分惡黨になりましたね。吾乍らあきれ返つて了ふ位です。もとはほんとに善良だつたのですけれど。

絹子　みんな私から起つたのだと仰有るのね。ようムんすとも、いくらでも罪は負ひますわ。――だけどほんとにどうしたものでせう。私たちの關係は全然知らさずに、あの方を上海へ立たして了ひませうか、それとも又茲で打あけて、改めて許して貰ひませうか。

杉村　一體あの男は、幾らかでも僕らの關係を疑つてるでせうか。少しは氣付いてゐるでせうか。

絹子　私には氣付いてゐる樣子も見えませんがね。

杉村　鈍感子ですからね。併し油斷はなりません。今夜だつて充分注意しないと、上海への出發を延ばすなんて云ひ出し兼ねませんからね。

絹子　ぢや今夜は何も云はずに、あの人を上海へやつて了ひませうか。私も精々別れるのが悲しい樣子か何かして、うまく此の場は切りぬけますわ。

杉村　佐竹の奴も可哀想には可哀想だが、茲で事實の眞相でも知らせると、僕たちに都合が惡いばかりでなく、彼のためにも不幸ですよ。秘密はあくまでも秘密にして、彼には何も知らぬものゝ幸福を與へてやるのです。――今夜はあく迄默つてゐなければな

りません。默つてそしらぬ顔をしてゐるのです。

絹子　でも、お母様はどう云ふお心算なのかしら。ひよつとするとお母様は、今夜萬事を解決して了ふお積りではムいますまいか。

杉村　さうかも知れませんね。併しさうだとしたら、今から僕らがお願ひして、飽くまで秘密主義を取るやうにしなくちや不可ませんね。秘密主義は決して惡い方法ぢやありません。秘密を開放して、却つて不幸な結果を招ぐこともありますからね。吾々は何も佐竹君に、氣持を惡くさせて上海へ發たせる必要はないのです。知らぬが佛で發つて貰つた方が、お互に充分幸福なんですからね。

絹子　さうね。それが宜しうムいますわね、――あらお母様がお風呂から上つていらした様子よ。此方へいらつしやるでせうから、もう少し離れてゐて下さいな。

杉村　お母様はもう萬事御承知なのでせう。

絹子　ですけれど何だか、私が氣まりが惡いのですもの。

杉村　そんなら少し離れてゐませうね。

（二人は適宜の間隔を置いて、さりげない様子をしてゐる。母親の兼子入り來る。）

杉村　奥さん。お言葉に甘へて御邪魔に上りました。

兼子　いらつしやい。よく來て下さいました。今日は佐竹さんの送別會でもしやうと思つて、それでお呼したのですよ。

杉村　佐竹君が今日來ることは、只今絹子さんから伺つて知りましたが、吾々をかうして一堂に集めて、奥樣は一體どうなさる御心算なんです。

兼子　實は私に少々考へがありましてね。

杉村　どんなお考へがおありになるんですか。

兼子　私は今夜佐竹さんに、貴方がたの事をすつかり打明けて、絹子の事は思ひ切つて貰はうと思つたのです。どうせ絹子は貴方に心を打明けて了つたので

すし、佐竹さんへ嫁くのはもう厭だと云ふのですから、是が非でも一度はあの人にお斷りを云はなくちやならぬ時期が來るのです。だから今の中に、はつきり事の成行を云つて了つて、きつぱりと思ひ切つて上海へ行つて頂く方が、私の方の氣もすむし、佐竹さんも得心が行くだらうと思ふのです。

杉村　ですけれど奥さん。それは少し殘酷ですよ。佐竹君は何も知らずに、平和に、又歸つて來る日を樂しみに、希望に滿ちて上海へ行かうと思ひ立つてゐるのですから、こゝでその平地に波瀾を起して、彼の心を騷がせるのは、却つて彼に取つても不幸ですよ。此際吾々はどこ迄も秘密主義を守つて、飽く迄何も知らせずに、あの男を向うへやつて了つた方が一番なんです。それは決して私たちの厄介排ひばかりでなく、彼の男の幸福なんですからね。運命の神樣がうまく私共と、彼との間に解決をつけて呉れたのです。ですから默つてあの男を發たせて了はうぢやありませんか。——それは奥さんとしては色々な義務もあり、あの人に對する責任もあるでせうが、此の場はまるで知らぬふりをなすつて下さい。而して吾々にも飽く迄何でもない風をさせて下さい。奥さんはたゞ、默つて見物してゐてさへ下さればそれでいゝのです。

兼子　貴方がさう迄仰有るのなら、それも一理はありますから、さうしても宜しうムいます。私は何も此の子の幸福なやうに、解決してやり度いだけなのですからね。では佐竹さんに今日打明ける事は、よしませう。而して何も知らさずに、此場は愉快に出發させてあげませう。

杉村　それが此の場合、一番送別の意に適ふものだと考へます。

兼子　さうなると今日の送別會は、見やうに依つては面白うムいますのね。佐竹さんにはお氣の毒ですけれど。

杉村　まあ奥さんは暫らく、親權者とか何とか云ふ責任なんぞ忘れて、何も知らぬ人のやうに、人生の喜劇を見てゐて下さい。私たちがそこでどんな演出をするか。而してその結果がどんな事になるか、もう一時間と經たぬ中に解るのです。

兼子　絹子、おまへにそんな事が出來るかえ。

絹子　でもやむを得なければやつて見ますわ。

杉村　さうです。虚僞をするのもどうせ今夜きりなのですから、思ひ切つてやつて頂かなくてはなりません。出來るだけ悲しげな別れの言葉と、出來るだけ長い歎息（ためいき）と、場合によつては出來るだけ大粒な空涙（そらなみだ）を用意して下されば、いゝのです。

（女中入り來る。）

女中　奥樣。佐竹さんがお見えになりましてムいます。

兼子　あゝさうかい。——ぢや直ぐ此方へお通し。それからもう食事の用意は出來てるだらうね。

女中　はい。出來て居ります。

兼子　そんなら急いで健吉も呼んで來てお呉れ、一緒に御飯をたべるのだから。

女中　はい。畏りました。

（女中去る。佐竹信一入り來る。）

佐竹　今日はわざ〳〵お招きにあづかりまして、難有う存じます。

兼子　よくいらつしやいました。御招待するつて程の御馳走もないんで、さう仰有られると却つて恐縮しますわ

（此の間に女中入り來り、次の會話の進行中に食卓を作る。）

佐竹　絹子さん。暫くお目にかゝりませんでしたね。

絹子　ほんとに暫くね。どうしていらつしやらなかつたの。

佐竹　つい色々な事で、忙しかつたものですからね。

絹子　きつと御金儲の方がお忙しいので、私どもの方などは忘れておしまひになつたのだらうつて、いつ

も母や杉村さんとお噂をして居りましたのよ。

佐竹　貴方がたを忘れるほど、お金儲けが出來ればいゝんですがね。

杉村　忘れられると大變だから、儲からない方がいいね。

佐竹　やあ杉村君。君にも暫らくだつたね。僕は一昨日君の所へ暇乞に寄つたが、君は生憎留守だつたので、多分こゝでお目にかゝる機會もあるだらうと、別に改めてお暇乞もしなかつた。失禮は勘辨して呉れ給へ。

杉村　君もさぞ忙しかつたらうから、僕も遠慮して行かなかつた。何しろ今度は御榮轉といふ譯で、御芽出度う。お祝ひが後になつて失敬だが。——

佐竹　いや、榮轉とは名ばかりで、何しろ體のいゝ左遷なんだからなあ。同じ謫所の月を見るのでも、倫敦か紐育あたりだともう少しは見榮えがするが、上海ぢや甚だつまらないからねえ。併し外國へと願つた所が、なか〱やらしては呉れないのだ。それにさう長い間外國にゐるのは厭だし、上海ならすぐ歸つても來られるので、やつと行く氣になつたのさ。

杉村　何しろ、日本に思ひ殘すものがあるからねえ。

佐竹　まさか。さうでもないけれど。

杉村　併し一二年行つて來るのはいゝさ。何しろまだお互ひに若いんだから。

（健吉入り來る。）

健吉　お母さん只今。——やあ御馳走が出來てゐるんだね。そんなら早く歸つて來ればよかつた。

葉子　こんなに遲くまでどこで遊んでゐるのです。折角杉村さんがいらしつて下すつても、復習が出來ないぢやないか。

健吉　だつて杉村さんは、私になんぞお浚ひをするより、姉さんとお話をする方が好きなんだもの。

杉村　はゝあ、健吉さんは妬いてゐますね。併し僕を妬くのは間違ひですよ。妬くのなら佐竹君をお妬き

なさい。佐竹君の方が僕なんぞより、よつぽど姉さんとお話をするのが好きですからね。それに姉さんも佐竹さんとお話するのが非常に好きなんだから、その中にすつかり姉さんを奪られて了ひますよ。

絹子　杉村さん、よくつてよ。

健吉（佐竹の方へ寄つて。）佐竹さんはいゝ人だから、そんな事はないやねえ。

佐竹　えゝえゝ、ありませんとも。

健吉　佐竹さん。君はほんとうに僕の姉さんが好きかい。

佐竹　さあ、どうですかね。貴方にはどう見えます。

健吉　佐竹さんは姉さんが好きだけれど、姉さんは先生の方が好きらしいよ。

絹子　お母さま、私ね、佐竹さんとあんなお約束がしてあるものですから、佐竹さんの前へ出ると、何となく固くなるやうな氣がするのよ。而して杉村さんの前だと、只のお友達だと思ふものだからか、幾らか、自由にお話が出來るのよ。それで健吉さんまでが、きつとあんな事を云ふのだわね。

杉村　戀は尊敬から初まる。佐竹君に比べては、つまり僕なぞは貴方に存在も認められないのですね。

佐竹　いや、僕は敬遠されてゐるのかも知れない。

絹子　あら、さう見えて？

杉村　それが敬遠なら、僕なぞは永久的に敬遠されてゐたいものだね。

佐竹　文字通りに敬遠されては堪らないさ。此位の敬遠だから我慢して居られるのだらうよ。

杉村　なんだ、結局そんなことを聞かされるのか。尤も今日は君のお蔭で御馳走になるのだが。――

健吉　もう御馳走を食べやうよ。

兼子　さあそれでは皆さん。つまらないものですが召上つて下さい。佐竹さん、貴方は主賓ですから此處へいらつしやい。絹子、おまへは佐竹さんの傍へ座つて、お別れの盃にお酒を注いでおあげ。

健吉　それぢやあ僕は佐竹さんの此方側に座らあ。
（皆な食卓を圍む。）

兼子　（盃を擧げて、）それでは御無事で行つていらつしやるように。

佐竹　難有うムいます。

絹子　佐竹さん。どの位貴方向うにいらつしやるお積り。

佐竹　さうですな。長くて二年ですな。僕も卅前には歸つて來たいと思つてゐます。

杉村　卅なら婚期が遲いと云ふ譯ではないからね。

佐竹　さうだ。早い位だよ。併し僕が卅になると、絹子さんはお幾つになりますかな。

兼子　絹子だつて二十一ですよ。

杉村　では絹子さんだつて、婚期が遲れるほどでもない。併しどうです。二年の間が待ち切れますか。待ち切れなくて上海まで出掛けるやうな事にはなりませんかな。

絹子　知らなくつてよ。

佐竹　ほんとうに僕が歸つて來るまで、貴方も待つてゐて下さいますか。

絹子　えゝ、私は大丈夫な積りですけれど。

佐竹　僕が危ないと云ふのですか。

絹子　えゝ。

佐竹　一つ勇を鼓して、支那美人でも連れて歸つて來ませうかな。そしたら貴方がたはどんな顏をするだらう。それを鳥渡見たい氣もしますね。

杉村　まさかにそんな事はあるまいけれど、君の今の話とは反對に、其間に絹子さんが誰かと結婚でもしてゐたら、君はどんな顏をするだらうね。

佐竹　さあ、どんな顏をするだらう。

杉村　君は落膽して自殺でもしやしないだらうか。

佐竹　さあ、どうとも云へないね。其場になつて見なければ。

杉村　絹子さん、どうです。一つ佐竹君を棄てゝ見て

は。

兼子　御冗談仰有るものぢやありませんよ。

絹子　厭よ。そんな事、探がしてみたりするものですか。

杉村　さうですか。それは失敬致しました。

佐竹（間。ふと調子をかへて）杉村君。君も愈々今年は卒業だね。

杉村　あゝ、どうにかかうにか、今年は卒業出來さうだ。併し君たちの方と違つて、佛文科なんぞは仕方がないよ。出たつて丸つきり口がないんだから。

佐竹　君は出たらどうするつもりだね。

杉村　丸つきりアテがないんだよ。

佐竹　併し其中には細君を迎へて、家庭を作らなければなるまい。

杉村　そんなことは考へられないよ。

佐竹　君にはどんな細君が一番いゝだらうな。——絹子さんのやうなのは嫌ひかい。

杉村　さうさな。勿論嫌ひではないが、さう好きでない。

絹子　お母さま、杉村さんの奥さんには、どんな人がいゝでせうね。是れから少し見付けて上げたらどう。

兼子　杉村さんのやうな方には、滅多に御世話出來ませんよ。大抵のものが氣に入らないだらうから。

杉村　まさかさうでもありませんよ。思ひの外氣に入つてゐる人が、そこらに無いとも限りません。

絹子　あら、さう。ほんとうにおありになるんなら、私にそつと仰有いよ。誰方(どなた)？え、何處の方(かた)？

杉村　さうですね。ぢや思ひ切つていひませうか。活動寫眞に出て來る、エラ・ホールと云ふ女優です。

健吉　杉村さんは此間僕と不二舘行つた時ね、エラ・ホールつて人が出たら、姉さんに似てるつてさう云つたよ。

佐竹　さう云へばほんとに何處か、似てゐる所がある

やうですね。顔の可愛くシャクレてる處が、一番よく似てゐるのぢやないでせうか。

絹子　あら、隨分だわ。

杉村　絹子さんなんぞに比較されちや、吾がエラ・ホォルが泣きますよ。

絹子　どうせさうでせうよ。けれど貴方になんぞ何と思はれたつて、私何んもでないからいゝわ。

杉村　さうでせうとも。附いてゐる人がありますからね。併し眞向からさう猛烈にやられると、思はずたぢ〳〵とならざるを得ませんね。

壽子（會話を中斷するやうに）佐竹さん。貴方もう少しいかゞ、どうぞたんと召し上れな。

佐竹　難有うムいます。何だか今日はお別れのせいか、毎ものやうに澤山頂けません。

杉村　君も思ひの外センチメンタルだね。

佐竹　別離と云ふやうなものは、僕のやうな無骨者にも、一種の感慨を覺へさせるよ。

杉村　では序に、絹子さんにピアノでも奏いて貰つたらどうだらう。

絹子　わたし今日は奏けないわ。

佐竹　いや、さう云はずに、どうか僕のために、一度だけ奏いて下さい。僕はもう今夜きり、貴方にお目にかゝれないかも知れないのですから。

壽子　絹子、あゝ仰有るのだから、お別れに何か奏いてお聞かせよ。

絹子　ぢやちよつとだけ。（ピアノの前に坐る。）何を奏きませう。

佐竹　何でも、貴方の好きなものを。

絹子　何でもつて、私には解らないわ。

杉村　それぢや僕が選んであげませう。少し月並かも知れないが、ベエトオフエンの月光曲はどうでせうね。絹子さん、是非あれを奏いて上げなさい。

絹子　少し六ケ敷いけれど、ぢやあれを彈きませうか。

(絹子靜かに彈奏する。皆々傾聽する。)

健吉　あら、佐竹さんは泣いてゐるね。

佐竹　馬鹿云つちやいけません。

(絹子ひたとピアノをやめて、食卓へ戻る。)

杉村　どうしたのです。

絹子　何んだか思ふやうに彈けないの。

杉村　別れの晩ですからねえ。

絹子　私も何だか、ほんとうに悲しいやうな、情けないやうな氣になつたの。佐竹さん、どうぞ御免なさい。中途でやめたりして。

杉村　絹子さんも大分センチメンタルになりましたね。

佐竹　音樂は人の心を淨化すると云ふからね。――いや、其位で澤山です。私も充分滿足しました。

健吉　今の曲は毎も姉さんが、杉村さんと二人でよく彈くのに似てゐるなあ。

佐竹　健吉君の耳はよつぽどいゝと見えますえ。將來天才の音樂家が出來上るかも知れませんよ。

健吉　僕は音樂家になんぞなりはしないよ。

佐竹　それぢや何になるんです。

健吉　何になるか、ほんとうは解らないんだ。

佐竹　何になつてもようムいますが、僕のやうな下らない會社員になるのはおよしなさい。凡ての希望をすてゝ、外國の支店詰なんぞ命ぜられる事がありますからね。(立上つて)ぢや皆さん、左樣なら、色々御馳走にあづかりました。

兼子　まだいゝぢやありませんか。

佐竹　いつ迄ゐても際限ありませんし、何だか不意に悲しくなつて來ましたから、失禮ですが此邊でお暇致します。――絹子さん、それぢや御壯健で御暮し下さい。而して時々は御手紙でも下さい。僕は出來るだけ早く歸つて來ます。

絹子　左樣なら、貴方もお丈夫で。――

佐竹　杉村君、左樣なら、留守中よろしくお賴します。

杉村　宜しい。あとの事は心配しないで、早く行つて早く歸つて來給へ。ぢや左樣なら。
佐竹　健吉君左樣なら。僕が歸つて來るまでに、大きくなつてゐ給へよ。
健吉　あゝ、左樣なら。——
（佐竹一揖して出て行く。皆々見送る。やがて玄關先でもう一度挨拶を繰り返す聲がして、佐竹は行つて了つた樣子である。杉村と絹子、再び入り來る。）
杉村　兎に角、これで今日は濟みましたね。
絹子　まさか悟らなかつたでせうね。
杉村　健吉君にはびく／＼させられましたね。幸ひ彼奴が鈍感だつたからよかつたものゝ、僕らなら直ぐ感づいて了ひますよ。
絹子　併し私は何だか餘り可哀想で、平氣でピアノなぞを彈く氣にはなれませんでしたわ。だつて貴方つたら平氣の平左で、私たちの美しい紀念がついてる月光曲なぞを、彈けつて仰有るんですもの。貴方はほんとに罪な人ね。

杉村　何も罪な事はありやしませんよ。あの男はそれで滿足して行くし、僕らもこれで重荷が下りたやうな氣ですからね。
（兼子入り來る。）
杉村　あ、奥さん。どうです。無事に行つたでせう。
兼子　何だか少し可哀想だつたが、何事もなく濟んで、私も幾らか安心しました。
杉村　全く秘密と云ふものも、無暗やたらに開放する必要はないものですよ。
兼子　さうですね。
（女中急いで入り來る。）
女中　あの佐竹樣がまたお戻りになりまして、云ひ忘れた事があるから、もう一度皆さまにお目にかゝり度いと仰有います。
兼子　あゝさう。それぢや遠慮なくお通り下さいつて。
（女中去る。）
兼子　何を云ひ忘れたんでせう。

杉村　もう一度絹子さんの顔でも見度くなつたのぢやありませんかしら。

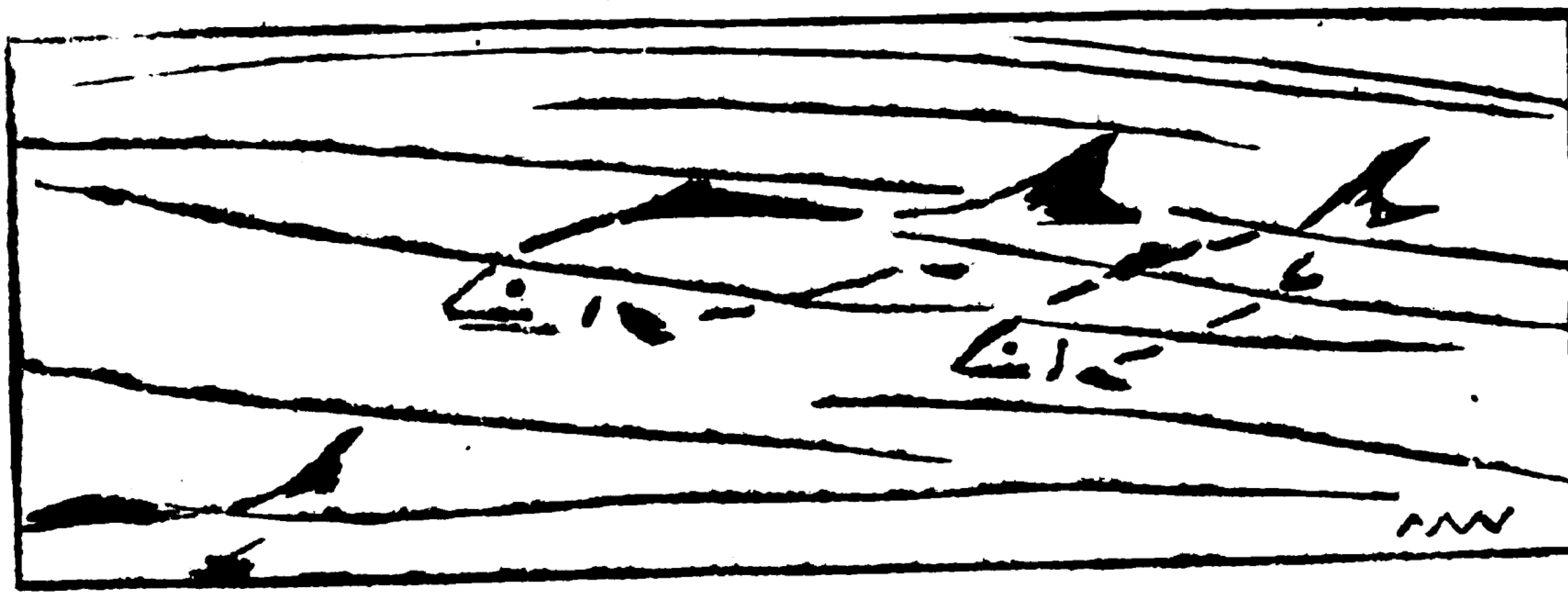
絹子　まさか。――

（佐竹入り來る。）

佐竹　又戻つて參りました。永久に默つてゐやうと思ひましたが、矢つ張り云つた方がいゝやうですから、たつた二三言私に云はして下さい。――奥さん、絹子さん、杉村君。私は貴方がたの事は、もうすつかり知つてゐるのですよ。ずつと前から、一ケ月ほど前から知つてゐるのです。かう申し上げると、どうして知つてゐるかと貴方がたはお訊きになるかも知れませんが、それは私がふとした事で、絹子さんの留守中に、絹子さんの日記を見て知つたのです。それを或ひは貴方がたは、卑劣だと云つて咎めるかも知れませんが、さう云ふ小さな不德は、人間らしい過失として許さるべきです。私は貴方がたの不德に對して私のその不德が小さいからと辯護する氣はありません。私はたゞ「愛する人」の正當防衛として、與へられたサスピションの故に許して貰ふのです。私がその日記を見ないでゐたらどうでせう。私は今日どんな滑稽な役割を演じなければならなかつたでせう。併し事實を知つてゐたお蔭には、全然知らぬふりをしてゐ乍ら、貴方がたの陋策の上に出て、冷然と見下すことも出來ました。私はそれを此の日記を竊み見た、小さな卑劣に感謝します――さてかうぶち撒けて了へば、序でにもうすつかり云つて了ひませう。實は私の上海行は、貴方がたの關係を知つたから、貴方がたの爲に身をひいて上げるのが一番だと思つて、必死に思ひついた私の窮策でした。私としては人知れぬ苦闘をして、やうやくその犧牲的の精神にまで到達したのです。どうかそこだけは買つてやつて下さい。――では左樣なら、申上げ度い事と云ふのは之だけです。

（皆々啞然としてゐる中に、佐竹は悠々と出て行く。）

幕。



Nの水死

田山花袋

一

博士Kが重い病を得て床に就いたのはもう五六ヶ月も前であつた。一時いくらかよくなつて庭などを散歩するやうになつたが、それもほんの僅かの間で、今では何うすることも出来なくなつた。あらゆる大醫も皆々匙を投げた。食ふものも少しも咽喉に通らなかつた。大きな立派な邸宅も、數奇を盡した瀟洒な庭も、仲間の博士達に羨まれる富貴も、世間で誰も知らないものもないかれの功業も名譽も、死に面しては何の役にも立たなかつた。一尋常人と同じやうにしてかれも死んで行かなければならなかつた。

博士の妻の治子は、もう四十を越してゐたが、それでもまだ其の美しい面影は何處かに殘つて、總領の娘の今年十九になるのと一緒に町などを歩くと、姉妹ではないかと疑はれる位であつた。それに平生派手づくりで、髪などを亂したことはない上に、小柄で、痩削であるのが年よりも一層若

く美しく見せた。

博士の家庭は、ついぞこれまで世間の口の端に上るやうなことはなかつた。總領の娘、あとは男の兒が二人、平和で、圓滿で、嬉々とした聲は常にあたりに滿ちた。母親と娘と睦しさうに琴を合せてゐる氣勢なども、ひろい邸の庭の垣を通して路行く人達の足をとゞめた。

夫婦の仲の好いのも、友人間に評判であつた。「惚れ合つた中と言ふものも、後には餘り役に立たなくなるものだが、K夫婦ばかりは不思議に仲が好いよ。あんなのはめづらしい」などと誰も彼も言つた。博士は堅かつたかれ等の家庭には、決して他から女が人知れず入つて來るといふやうなことはなかつた。博士は堅かつた。博士は一意その學問と研究とに熱中した。

しかし、博士は何方かと言へば、沈默勝にしてゐる方であつた。友人と話をする時にも、極めて口數の少い方で、見やうによつては、何か隱された煩悶が胸の中に深くたゝまれてあるのではないかと思はれた。五十を越した頃から、急に頭髮も白くなり、顏の皺も段々深く刻まれて行くのが眼に附いた。

二

急に惡夢に襲はれたやうにして病床の博士は聲を擧げた。

「N君、N君！」

暫くうとうととしたと思ふと、「僕がわるかつたのだ。僕がわるかつたのだ！」

から手で拂ひ退けるやうにして、

「N君、N君！」

傍に侍してゐた治子は、
「もし、もし、何うかなさいましたか」
かう言つて呼覺ますと、
「ウム……」
と言つて、博士はぽつかり眼を明いた。そして無氣味さうに四邊を見渡した。瘦せて骨立つた體には眼が鋭く光つた。
「あゝお前がそこにゐたのか。」間を置いて、「何か言つたか」
「何だか、大變に苦しさうでしたから……。何か夢でも御覺になつたんですか」
「ウム」
「Nさんの名を呼んでゐらしつた。Nさんの夢でも御覧になつたんですか」
「Nが來た！」
かう言つて、其處に治子が坐つてゐるのを見るに堪へないやうにして、そのまゝ向うを向いて了つた。

ある時は長い間博士は治子を捉えて昔の話をした。勿論、それは今よりは少し前で、「俺も今度く駄目かも知れない」などと言ふ頃であつたが、これまでついぞそんな話をしたことがないにも拘らず、またさういふ話が出る時には、いつも中途から別の話にして了ふのが常であつたにも拘らず、その時は種々と詳しく其時分の話をした。「あの時分は、まだ若かつたなア。」などとも言つた。いろいろ思ひ出して來

ると悲しくなつて來るといふやうに、後には博士の眼には涙が光つた。

「俺も樂な一生ではなかつた！」

悵然として、

「それは世間的には、俺もいろいろな事をして來た。國のためにもこれでも盡したつもりだ。俺の一生は徒爾ではなかつた。Nのやる爲事も俺が代つてしてやつた」

「さうですとも……」

「お前も泣いたつけな……あの時——」

かう博士は言つて、その遠い昔の悲しいシインを思ひ出すやうにした。

一時間ほどして岸に漂著したNの死屍、蒼白い肌、尖つた鼻、絣の浴衣がぴたと體にからみ着いてゐたさまを、今でもかれ等は歷々と眼に浮べることが出來た。若い美しい治子は身も世もないやうにその死屍に取り縋つて泣いた。かれはその傍に立つて暗い顏をしてじつとその死屍を見詰めた。

弓弦を引いたやうなあの美しい流岸、靜に打寄せて來る波、靡くやうに綠が拖いてゐる松林、そこには眞紅のなでし子が到るところに咲いてゐて、それを治子は採つてよく髮に挿した。少しくぼんだところには、綺麗な淸水が湧き出してゐて、そこには村の娘達が桶を天秤で擔つて、夕暮などに大勢やつて來てそれを汲んだ。博士とNと治子とはよくそのあたりに立つて、もえあがるやうな夏の夕暮の雲を仰いだ。

その雲の美しかつたことは、今でも博士の眼に歷々と見えた。治子の父親は、矢張昔の學者であつた

が、そこに小さな別莊を持つてゐて、夏は娘を伴れてよくそこに出かけて行つた。治子と結婚した後も、その別莊は矢張男が持つてゐたけれども、博士はついぞそこに行かうとはしなかつた。治子が行かうと言つても、『いやな記憶のあるところだから』と言つてかれは竟にその勸めに應じなかつた。二十年ほど前にその別莊は遂に賣られた。

『Nは好い男だッた』

『さうですね。若くつて、氣の毒でしたね。……今、ゐれば、もう餘程いろんなことをなすつてゐらしつたでせうに……』

『氣の毒だッた！』

博士は顏を暗くした。

餘りNの話をすることが多くなつたので、治子は、

『此頃は何うしてかNさんのことばかりおつしやいますね。』

『でも、親友だッたんだから』

『それは、さうですけとも、餘り亡くなつた人のことなんかお思ひにならない方が好う御座んすよ』

『でも、思ひ出されて來るんだから、何うも爲方がない』

から言つたが、すぐ言葉をついで、『昨夕もいろいろとNのことを思つた』

『氣味がわるいから、もうおよしになる方が好う御座いますよ。』

『治。』

急に改つたので、

「え？」

「お前は俺とかうして一生を送つて仕合せだッたかな」

「え、仕合せでした……」

「僕等の一生は幸福だつたかな」

「幸福でした」

「さうかな、お前は幸福だつたかな？」

じつと考へて、口を歪めて、

「俺は辛かつた」

「さやうでせうとも……男にはいろいろ女の知らないことが御座いませうから」

「…………」

何か言はうとしたが、よして、

「Nと一緒に一生を送つた方がお前には仕合せであつたに相違ない」

「そんなことはありません」

「いや、さうだ……さうに違ひない。」

「何うしてそんなことを仰有るんですの？」

「あの時、お前の泣いた顔は、未だにはつきりと眼について見える。」

『だつて、そんなことを仰有つたツて、しやうがありやしません。Nさんはお亡くなりになつたんですもの。……もう、そんなことを考へるのはおよしなさいまし。餘り考へると、體に觸りますから』

から治子はやさしくとめた。それにも拘らず博士は猶深くその時のことを思ふやうに見えた。

三

此頃は治子にも不思議にその遠い昔のことが頻りに思ひ出された。つひぞ今までこんなことはなかつた。それはNが溺死した時には、身も世もないやうにかの女は泣いた。殆どこの世も何もないやうに泣いた。つとめて押へても押へても何うしても涙が出て來た。それも道理(ことはり)であつた。結婚の約束こそしてなかつたけれども、かの女とNとの間には、戀愛狀態に近い空氣がいくらか出來てゐて、そこにその夏三人して行つたのも、Nと二人だけでは親達も許さないし、世間もうるさいので、それで、Nの親友のKが一緒に行くことになつたのである。かれ等は暑中休暇の一月を靜かにのんきにそこで暮すつもりであつた。

その頃の治子は美しかつた。青春十九歲、女子敎育の未だ今日のやうに盛んな頃ではなかつたけれども、父親が學者であつただけに、かの女は早くからお茶の水に入つて、當時の娘達に比べては、學問もあり、氣分も開け、色彩も濃やかであつた。Tさんの孃さんと言へば、若い角帽の群の中にもかなりに評判に立てられてゐた。

治子は今でも思ひ出すことが出來る。その世離れた靜かな海岸を。撫子の咲いてゐる松林を。淸水のあるところからだらだらと濱へ下りて行く路を。碧い湧きかへるやうな海を。少し離れたところに島が

あつて、そこに住んでゐる漁師のジックザックした屋根から夕暮毎にかすかに海に這つて行く暮烟を。半島を隔てた岬の鼻にかすかに光る燈臺の火光を。または夕暮の濱の散歩から歸つて來ると、松林の中の別莊にぽつつり灯がついてゐるさまを。

かれ等は三人してよく磯を散歩した。或は朝に、或は日中に、或は夕暮に….。日中にはかの女も大きな麥稈帽をかぶつて出かけた。磯にはいろいろなものが打寄せられてあつた。夫婦貝、小豆貝、時には遠い海からはるばる流れて來たらしい椰子の實などもあれば、難船した舟の遺物らしい器具などもあつた。Nは學科の工科であつたに拘はらず、Kとは違つて、文學が好きで、レクラムなどを懷に入れて、ロマンチックの小說の話などをよくかの女にしてきかせた。パウルとヴルシニィの話などは中でも殊にかの女の心を波立たゝせた。かの女は今でもその端麗な、色のいくらか青白い顏と、隆い鼻と、靜かなしかし何處かに貴族的なところのある姿をはつきりと思ひ出すことが出來た。

時には餘り暑いからと言つて、男達はサル股一つになつて、岩陰に靜かに湛えてゐる海にザンブと飛び込み、白い肌を碧い波間に巧みに動かして向うの岩まで泳いで行くのをかの女は笑つてじつと見てゐたりした。遊泳にかけては、Nも下手ではなかつたけれども、しかもKの縱横自由に何處までも泳いで行くのには及ばなかつた。あんなところまでと人と思はせるやうなところまでKは平氣で泳いで行つた。

Kはあがつて來て、

「あなたもお入いんなさいな」

などと言つた。

Nと二人きりならば、泳いで見ても好いやうな氣がしたことのあつたことを今でもかの女は思ひ出すことが出來た。その世離れた岩蔭の海、漁師すらも滅多はやつて來ない海、そこで二人で泳いたなら何んなにロマンチックだらうなどとかの女は思つた。

しかし、かの女はKを決して邪魔とは思つてゐなかつた。かの女はKを無邪氣な好い人だと思つた。それに學問が出來て、親切で、篤實で、厭味がなくつて、Nにも畏友視されてゐる形が頼もしかつた。Kはいつも默つてゐるか、でなければにこにこしてゐた。

それでも何うかすると、NとKとは議論をした。その時には、あの沈默勝の人の口から何してあゝした數理的な確乎とした議論が出るかと思はれるやうに、センチメンタルなロマンチックなNの議論を壓倒した。『だつて、さうばかりは言へない。一に一を加へる卽ち二ばかりでは、餘りに殺風景すぎるぢやないか」Nは終にはこんなことを言つて笑つて議論をよした。

それでも治子がNと二人だけで、松林の中や、磯や、または裏の小山に登つたこともないではなかつた。勿論、さうした時にも、二人はまだ戀そのものについては話したこともなければ、觸れて見たこともなかつた。『Kさん淋しがつてゐるでせうから、もう歸りませう」かう言つては歸つて來た。さういふ時にはKはいつもぽつねんとして別莊の緣側にねころんで書などを讀んでゐた。

別莊にはその頃雇つた村の中年の女がゐた。村の女と言つても、純然たる漁師の嬶ではなく、若い時は近い町の工場に行つたり、男を知るやうになつてからは、町の小さな店の主婦となつたやうな女であつたので、何處にか世馴れて、客の世話、炊事の世話なども上手で、何一つ不自由なこともなかつた。

それに話好きなよく笑ふ女であつた。「おい、また、西瓜でも買はうか」かうNが言つて小さな財布から金を出すと、「また西瓜けえ！あきれたもんだぜ！お前さん方に逢つちや西瓜もかなはねえ」こんなことを言つて、その女はそこから松林を越して、近くにある畠に行つて、大きな西瓜を買つて、それをかついで持つて來た。

「大きな西瓜ねえ、いくら？これで」

かうかの女が言ふと、

「あてゝ御覽なさい、お孃さん」

「わからないわ」

十錢持たせてやつた餘のつもりで女はそこに四錢置いた。

「六錢、安いわねえ」

「ウム、六錢は安いな。今日のは安い……」

こんなことを言つて、Nはそれを叩いて見て、

「その代り、赤くないぞ」

「大丈夫だともな……赤いともな……この位になりや、もう……」

女も一緒になつて叩いて見た。

それを、その大きな西瓜を、松林の凹みの冷めたい淸水の中に一時間ほど冷やして置いて、好い時分になつてからいつも出して來た。そして男達は面白がつて、緣側に俎板と庖丁とを持出して、それを與

中から二つに割つて、
「ヤア、赤い。これは旨いぞ」
などと言つて、半月形に切つた奴を啜るやうにして食つた。
「旨い、旨い。何うです、治子さん」かうKは勸めた。
治子もこの別莊に來てから、西瓜の旨い味を始めて覺えた。かの女も二片も三片も食つた。
Nは言つた。
「支那の文章には旨いことが言つてある。美人が赤い桃の實を食ふのを形容して、何れか桃、いづれか唇たるかを辨せざるなりなどと書いてあるが、治子さんの西瓜を食ふところを見ると、丁度さういふ風だね」
「まア、あんなことを」
かう言つてかの女は笑つた。Kも笑つた。
新しい魚類なども、女はよく生きたまゝで買つて來た。鰺などの殊に旨かつたのをもかの女は今でも思ひ出すことが出來た。
かうした忘れ難ない平和なのんきな生活の前に、突然思ひもかけない災厄がひそんでゐやうとは――。しかもその日も別に變つたことはなかつたのである。天氣は好かつたし、風はなかつたし、美しい朝であつたし、また美しい午前であつたし、さうした災厄の前兆は少しも面影を見せなかつたのである。午後になつてから、三人は揃つて出かけた。Nの態度にもKの態度にも何等變つたところは少しもなく、

いつものやうに語り、いつものやうに戯れ、いつものやうに磯を歩いて、そしてその岩陰の海に行つて水泳した。

治子は始めは面白がつて、二人のいつものやうに泳ぐのを見てゐたが、つい足元にめづらしく綺麗な貝を發見したので、その方に氣を取られて、探すともなくあたりを熱心にさがして歩いた。で、少くとも二三十分は經つた。不圖、氣がつくと、Nは非常に遠くに泳いで行つてゐる。平生行きもしないまた行くことも敢てしない白い波の立つてゐる方へと泳いで行つてゐる。Kはそれから見ると、全く別の方で離れて泳いでゐる。「まア、遠くまで行つた！」と思つて見てゐると、ぽつかりNの首が水の中に沈んだ。おやと思つたけれども、別に氣にもとめずにゐると、また首が出てまた沈んだ。その時、何か言つた聲がきこえたが、それは救を呼ぶ必死の聲であつたのである。

暫くして、それと氣がついたらしく、Kがそつちに急いで泳いで行くのを治子は目にした。しかし治子の目には、Kの泳いで行くのが非常に遲く、且まどろこしいやうに感じられた。

三度目に深く沈んだNの首は、もう再び水面にあらはれなかつた。治子は俄かに起つた災厄、それにつゞいて起つたさまざまの光景、盡きない涙、村の漁師を賴んで來て漸く引上げた時の青白い屍、さういふものが歷々と見えた。何年にも思ひ出したことのない、または思ひ出しても、普通の水死以上に感じを惹かなくなつたシインが、再び新らしく眼の前に蘇つて來たかのやうに――。

四

治子はその別莊に滯在してゐた間の三人の狀態を今一度細かく眼の前に展げて見た。また、Nが死ん

だ後のKの狀態をもそれと思ひ浮べて見た。長い時を經過してゐるので、とてもそれとはつきりと思ひ浮べることは出來なかつたけれども、Kがかの女をその時分ひそかに愛してゐたといふことだけは肯定することが出來るやうな氣がした。それからもう一つ不思議なことは、その後Kとの結婚問題が起つた時に、Kがそれを避けやうとしたことであつた。その時分、「私のやうなものはとてもお孃さんを貰ふ資格がない。私とはとても一生幸福な生活を行へさうにもないから」とKは度々その仲介者に言つたといふ。しかも、その頃になつては、Kよりも治子の方が却つてKを思ふやうな形になつてゐた。

それに、思ひ出して見れば、もう一つ忘れられないことがあつた。それは結婚當座であつたが、何故かNのことがいろいろに思ひ出された。Kと夫婦になつたといふことも、Nがあつたがためだとも思ひ、Nが生きてゐたら、それこそ何んなに幸福であつたらうとも思ひ、何故あんな風にしてあそこで水死したのだらうと思ひ、當分はNのことが氣にかゝつて爲方がなかつた。KにもNの話をするのが辛いらしく、その話が出ると、不愉快さうな顏をして、話を別の方へと持つて行つた。その頃、Kは新婚當座のやうな人ではなく、いつも書齋に入つて、熱心に研究ばかりをつゞけてゐた。

しかし博士が死の床に臥して、をりをりNの名を呼んだり、Nに逢つた夢から魘されて覺めなかつたならば、治子は決して今のやうにその昔を思ひ出さなかつたに相違なかつた。かれ等の生活は、世間的から言つても、決して不幸福でもなければ、不滿足でもなく、富貴、名譽年を經て加はり、可愛い丈夫な子供は生ひ立ち、家庭は圓滿に、博士は他の女に心を移すやうなこともなく、唯、博士の沈默と陰欝とが辛いと言へば辛いものゝ一つであつたけれど、それとて治子の好きな派手な生活を遮るやうなもの

ではなかつた。それに、治子は現にそのNの死んだ狀態を自分で見て知つてゐるので、夫に對するさうした疑惑は起したくも起す材料を持つてゐなかつたのであつた。

博士の級友で、矢張Nなどをも知つてゐる O博士が、赴任地の大きな製鐵所から上京した次手に、かれの病氣を見舞つて來た時には、いつもよりは元氣で、いろいろな話をしたが、ふと、

「Nの親や兄弟は何うしたね」

から突如としてK博士は訊いた。

O博士は、

「さア、詳しいことは、僕も知らんが、マザアやファザアはもう死んだらうと思ふね。あのNの弟が何うも出來がわるくつてね、學校にゐたんだけれど、失敗して、今ぢや滿洲へ行つてゐるッて言ふ話はきいたが……」

「困つてゐるんだらうな」

「なんでも、大分落魄れてゐるやうな話だつた……」

「妹は？」

「さうさう妹がゐたね。そんなに容色の好くない……。あれは中學の教師か何かに嫁いた筈だが、何うしたかな」

博士は溜息をついて、

「つらい世の中だな。何處を見ても、彼處を見ても……。もう、僕も今度は治りさうもない」

「そんなことはないよ。君なんか、まだ若いんぢやないか。」

「年は若くつても、あまりに人生は辛すぎた。……とても、もう、この先生きやうとは思はれない」

「何うしてそんなことを言ふんだ。君のすぎて來たレイベンが辛くつちや、辛くない人は一人もゐないぜ。僕なんかでさへ、君のレイベンよりは辛いと思つてゐるぜ」

「さうでない、さうでない」

博士は手で振るやうにして見せた。

暫くしてから、

「何と言つても、學校にゐる時分が一番好かつたな。無邪氣で、何も知らないで……」

「それは、さうだがね」

「まア、しかし、君なんか盛んで、丈夫で好い。長生をするんだな」

「いやに心細いことばかり言ふな」

「でも、今度は、俺はとても治らない。治らない理由があるんだ。死なければならない理由があるんだ。……しかし死ぬ以前に一つ是非しなければならないことがある」と言つて考へて、「ところが、これが中々大問題なんだ。今の僕には非常に重荷なのだ。しかし、これは是非やらなければならないと思つてゐる」

「治るよ、そんなにやきもき思はないでも……治つて、一つゆつくりやるのだ。實際、君なんかにはやつて貰はなければならない爲事はいくらもあるんだから」

其處に、治子はちよつと綺麗な美しい姿をして、莞爾して上つて來た。あとから若い小間遣がビイルに菓物を運んで來た。

「奥さん、いつもお若いですね」

「いゝえ、もう」

いくらかきまりがわるいといふ風で艶に笑つて見せた。

病人はちよつと治子の方を見たが、そのまゝ眼を落して了つた。さびしさうな表情がその顔を掠めた。

「でも、今日は好いやうですね。僕は新聞で見て、もつとわるいのかと思つて、心配して來た。これぢや、もう少し氣永に養生すれば、全快近きにありだ……」

「何うも氣が弱くばかりなつて、爲方がないんですよ。昔のことなんぞばかり考へるんですもの」

「何うしても、病氣をするとさうなりますな」

二階の晴々した窓には、梅雨あがりの日影が麗かにさして、新しい簾には綠の青い影が靜かに搖いた。

五

博士の病氣は次第に重くなつて行つた。滋養分が十分に攝取することが出來ないので、體は痩せるばかり、鼻はいやに尖り、頰はわるく骨立ち、脛などは阜斷のやうに痩せこけて了つた。もう一日二日持つか持たないかといふやうな醫者の口吻は、治子や周圍の人達や子供達を悲しませた。

それに、時々苦痛が起つた。さうした時には、看護婦や治子達にも手に餘るほどであつた。力がなくなつて體も自由に動かすことが出來ないほどであるにも拘らず、その時ばかりは、身もだえして、枕を何遍となく外した。

醫者が來て、注射をして、いくらか樂になつた時には、苦痛の名殘のやうに呼吸をはづませて、『しかし、……しかし……この苦しみよりは、……これよりは、俺の送つて來た一生の方がもつと苦しかつた』から小聲で獨言のやうに言つた。

「あゝ、もう死ねさうなもんだ……。この位、苦しめば、俺の罪障も滅しさうなもんだ……しかし……しかし』何か言はうとしてそしてまた急に口を噤んだ。

治子が見てゐると、仰向けに寢てゐる痩せた土色の頬の上ををりをり涙が靜かに傳はつて流れた。

看護婦がゐない時に、

「何か仰有ることがお有りになるなら……」から小聲で治子は訊いた。

「ウム、ウム」

と言つたばかりで博士は何も言はなかつた。涙はまた流れた。

治子にもいろいろのことが一杯に胸に押し寄せて來た。

この頃でも、をりをりNの夢は見るらしかつた。さうした時には、手で拂ひ退けるやうな形をしたり、何かに壓迫されるやうな狀態を見せたり、微かに唸つたり、顏を苦しげに歪ませたりした。ある日、あたりを見廻してゐたが、決心したやうに、

「治。」

丁度、其處には、看護婦と總領の娘としかついてゐなかつた。

「治。」

「母さんですか」

かう娘が覗くやうにして訊いた。

博士は點頭いて見せた。

治子はやがて呼ばれて病床に來た。「何うかなさいましてッ」

博士は眼を明いたが、あたりを見廻して、手で、皆な下に下りて行つてゐよといふしるしをして見せた。

「私に、何か話すことでもおありなさるのですか」

博士は點頭いて見せた

で、看護婦も、娘も下に下りて行つた。

治子は近寄つて、

「何か――」

「もう、誰もゐないか、お前一人か」

「え、誰も……」

博士はそれでも今一度そこらを見わたして、

「治。」

「はい……」

「俺は……俺は……是非、一つお前に言はなければならないことがある……」これだけ言ふのも、苦しさうで、胸から肩へかけて呼吸が大きく刻むのを治子は見た。「俺は、俺はこの苦しみを一人墓に背負つて行かうと思つた。……お前のために、またあとに殘して行く子供達のために……。しかし、それは俺には出來ない……。俺はそれを言はない中は、死ぬことが出來ない……」

「…………?」

暫く博士の言葉は途絶えた。

「治。」

「はい」

「俺は辛かつた。そのために、俺の一生は虐まれて來た。治。Nが水死したのは、俺が殺したやうなものだ」

「何うして?」

驚愕が治子の胸を轟かした。

「俺はあの時、救へば救ふことが出來たのだ。……いや、それよりも、もつとわるい。Nをあゝした遠い海までおびき出したのは、俺がしたことだ。……俺はあの時、何んなにNに對して嫉妬を抱いたであらう……。人知れない嫉妬、秘密と言ふことは、何んなに恐ろしいものだつたつたらう。……しかし、

治。許して呉れ、俺はその重荷を抱いて一生苦んだ」

博士の顔には言ふに言はれない苦痛の色が漲りわたつた。

「でも……」

かう治子が言ひかけるのを遮つて、

「お前は、あの時ちやんと見てゐた。だからそんなことはないと言ふんだらう。それは俺は手を下したといふわけではない。しかし、救ふつもりなら、無論、俺が救つてやることが出來たのだ。……しかも俺の心は、あの時、Nの死を喜んでゐたのだ。さうすれば、お前は俺のものになると思つてゐたのだ。あゝした樂しかつた海岸の一夏にも、さうした恐ろしい毒の影が周圍を取卷いてゐたのだ……。だから、あの災厄が突然に來たやうに誰も思つたが、決してさうぢやなかつたのだ……。さうした暗い人間の心からあゝしたことが出來たのだ」

「でも、そんなことは――」

「いや、さう言つて呉れるのは、かうして夫となり妻となつたお前の情けだ。手を下したのではないからと言ふんだらう。しかしそれは同じことだ。……俺はお前のために、親友を深い危い海につれ出して、そして救ふことの出來るのを見殺しにしたのだ……。お前はNと一生を暮すべきだつたのだ。その方が幸福だつたのだ」

治子も驚愕の後の悲哀に堪へないといふやうに深く低頭いた。この間から、博士が内心に苦んでゐたさまが一々わかつて來た。治子は女の罪の深さを思はずにゐられなかつた。

「だから、あの時、お前のNに對して濺いだ涙は、俺は見てゐるに忍びなかつた……實際忍びなかつた。だから、あそこから歸つてからは、俺は成るたけお前を見ることを避けた。お前を俺の物にしやうと思つたそのわるい心も、Nがゐなくなつてから、またお前の涙を見てから、すつかりさめた。俺はお前を妻にしなければ好かつたのだ。けれど、俺は既に一度さうした罪に觸れた。お前を妻にしなければならなかつた。そして一生心の中で苦しまなければならない報酬は既にその時に醸されてあつたのだ。考へて見ると、俺の一生は、その罪過のためにのみ暗くされて來た。Nが始終俺の心の中に生きてゐた。またお前の中にもNが生きてゐた。お前を見ると、何んな時でも、Nが俺にまつはつて來た。夜の床の中までも入つて來た。俺は辛かつた。その辛いのをまぎらせるために、俺は書齋に沒頭した。そしてそれが俺の名譽と富貴とになつたと思ふと、悲しまずにはゐられなかつた。」長い言葉に勞れたやうに、またはこれだけのことを言ふにも一方ならぬ努力であるやうに、最後の努力のやうに、博士は呼吸を深く切つて、「治、許して呉れ、これは言はずに死なうと思つたが、それを言はない中は、俺は何うしても死れない。許して呉れ、治。」

かう言つた博士の頬には涙が靜かに流れた。



叔母さん

正宗白鳥

古川玄一は尾道の汽船待合所の二階で、寝たり起たりして、自分が乘るべき汽船の着くのを待ちあぐんでゐた。前夜宿屋の一室で、雨の音を聞きながら煙草を吸つてのみ退屈な春の夜を過ごすのが詰らなかつたので、知合ひの女中の勸めを幸ひに、隣室の客などゝ一緒になつて、偕樂座といふ芝居小屋へ、西川の名取連の舞踊を見に行つたのであつたが、そのために夜を更かした上に、今朝は乘船時刻に急立てられて早く呼起されたので、彼れは絶えず眠足らない思ひをしてゐた。

春の明け方の快い夢を無理に破つて、どしや降りの雨を冒して驅けつけたのに、大阪から神戸や高松などを經て來る筈の內海通ひの汽船は、闇夜の雨に航路を妨げられたのか、待てども〳〵その姿を現さなかつた。

近所の子供はこの待合所の二階を雨の日のいゝ遊び場として、飛んだり跳ねたり、喧しく叫んだり笑つたりしてゐた。古川と同じやうに待ちあぐ

んでゐる人々の中には、將棋を差したり碁を打つたりしてゐるものもあつた。因ノ島の造船所から渡つて來たといふ四五人の職工は、この後の方針について互ひに意見を述合つてゐた。皆んな一先づ吳の工廠へ行つて樣子を調べて見やうとしてゐるのであつたが、其處の待遇が果して今までの所に勝つてゐるかどうかといふことが彼等の疑問となつてゐた。

「とにかく、あんな豚小舍見たいな合宿所には居られんでな、給金が少々安うても、もつと人間らしうして手足を伸して寢られる所へ行きたいよ」と、その中の一人は憤慨した口調で云つてゐた。

古川も一先づ吳へ行くつもりで、其處までの切符を買つてゐた。廣島宮島岩國など、その他曾遊の土地未見の土地の差別なく、足の向くにまかせて、山陽の花の名所を見巡らうと企てて、數日前に故鄕を踏出したのであつたが、この氣儘な旅行に、自からつくつた唯つた一つの束縛は、親戚の端くれと云へば云はれる人を吳に訪ねやうとすることで、豫め通知をして置いたのであつた。其處へ行くについてはある用事をも秘かに持つてゐた。

彼れはその用事についても、吳にゐる男女についても飽きるほど考へた。前夜見た溫習會の踊り子の姿態や同じ觀覽席にゐた若い女どもの素振りなどをも頻りに思出してゐた。直ぐ目の下の岸に沿つて店を出してゐる煮賣屋や鮨屋へ下りて行つて、何となく汚らしいのに躊躇しながらも、無駄口を利き〱立喰ひをしたり、近くの菓子屋から駄菓子を買つて來て、ダラシなく食つてゐたりしたが、七時のが十二時になつても豫定の船は來なかつた。會社の無責任を憤つて切符を返して停車場へ行く者もあつた。

古川は雨に飽き眺めに飽き喰物にも飽いて、周圍で騷いでゐる町の子供等の惡騷ぎにも何の感じもな

くなつたが、既に汽船と定めた以上、行路を變へないで何時までも待つ氣になつてゐた。詰らないことにでも最初の決心を動かさないやうな執拗なところが彼れの心にはあつた。

一時過ぎになつて、××丸といふ宇品尾道間通ひの小汽船に乘つて、やうやく陸を離れることが出來たが、長い間待惱んだ甲斐があつて、海上の眺めは刻々に美しさを增した。古川は繁吹のかゝるのを關はずに、絕えず甲板に出て、雨に濕つてゐる左右の島々を眺めてゐた。職工達は船員や他の乘客と所々の造船所や內外の航路のことを訊いたり訊かれたりしてゐたが、古川も待合所以來の顏馴染なので、をりをり話の仲間に加はつた。

「一度歐洲航路へ乘込めば確かに千圓は攫んで來られるんだがね。そのかはり船が港に着くと、船長が外から鍵をかけちやつて、我々下級船員は一足も陸へは上れないんだから辛抱がしづらいさうだ」と髯の濃い船員が云つて、千圓といふ聲に心を動かした職工達は、てんでにそれに對する意見を述べだした。古川も金儲けの話には聞耳を立てる方であつた。そして、船乘りのやうな荒仕事は出來ないにしても、多少の冒險は厭はないから、自分に相應した面白い儲け仕事は何かないものかと考へたりしてゐた。

「吳の造船所は官立だから、因ノ島なんぞよりや嚴重ぢや。特別手當も碌に出りやしない。夜勤で居眠りを二度見つけられると、もう給金を差引かれるんぢやから溜らん」と、先頃まで其處の砲熕部で勤めてゐたといふ男が細かに內幕を話して、聽手を失望させた。

凪の無い日であつたが、ところどころ船の動搖は免れないので、醉つて靑い顏した女客などで、部屋を

匐出して甲板のベンチに凭れて風に、吹かれてゐるのもあつた。雨足が繁くて間近な島さへ雲のかたまりのやうに茫漠たる姿を現はしてゐることもあつたが、をり〳〵は桃畝の紅い色が鮮かな島の春を見せてゐることもあつた。

古川は路程の半ばを過ぎた頃から、甲板脇の小さな二等室へ入つて、客席に身を横へて快く一睡した。船の進みがのろくて春の長い日も暮れて、港々には燈火が朧ろげに見られた。呉の闇を照らしてゐる無數の燈火は都會の賑はひを反射してゐるやうで殊に美しかつた。やがて汽船は吉浦といふ港に着いて、呉行の客は皆な其處で下ろされたが、呉の町へ行くには更に汽車に乘らなければならなかつた。職工の一組は身仕度して、徒歩で市中へ向ふやうな打合せをしてゐたが、古川は夜更けての訪問の不便を思つて、吉浦の宿に一泊することにした。成べく奇麗な宿をと、狹い土地を一巡して選んだのであつたが、入つて見ると、壁のべた〳〵した汚らしい家であつた。襖もぴつたり閾に箝つてはゐないで隣の座敷が隙間から見られた。電氣が晃々と照つてゐるにも關はらず、何となく陰氣くさかつた。

古川は浴室へ案内されたが、板の間が氣味の惡いほどぬる〳〵して、浴槽の乏しい湯も汚い色をしてゐるのに怖ぢて、殆んど手拭すら濡らさないで、爪立足をして其處を出た。食事にしても、見たばかりで箸を下す氣のしないやうな物ばかりが膳の上に並んでゐた。こんなことゝ知つてゐたら、呉まで行つて宿を取るのであつたのにと、一晩でも不快な寢床に就かねばならぬのを彼れは後悔してゐた。が、適度な疲勞のお蔭で、枕に就くと直ぐに熟睡に落ちて、夜具の汚なさや部屋の臭氣などは夢の中にも感ぜられなかつた。

翌朝目が醒めた時には春らしい冴えた光が障子に映つてゐて、肌に觸れる風は稍々寒かつた。さしもの宿雨も名殘りなく霽れたらしいのに、古川は元氣づいて、寢床の中から手を叩いて女中を呼んで、食事の仕度を急がせた。そして、一刻もこんな宿屋に留つてゐるのを嫌つて、箸を擱くと直ぐに立上つた。

二番の下りにはまだ餘程の間があると云つてゐる宿の者の注意をも閑流して、表へ飛出した。泥濘の町を低い下駄で歩き惱みながら彼方此方見物して停車場へ行つた。停車場の櫻も半ば花を開いて、雨後の朝日に光つてゐた。

古川はぢつとしてゐると寒さを覺えるので、足に力を入れて待合室の內外を行きつ戻りつして、發車時刻を待つてゐた。近い所や遠い所の一本二本の櫻の花を見上げたり、水溜りにきら〳〵してゐる日の光を見入つたりなどしてゐたが、さうしてゐる間に、チク〳〵と何かで刺すやうな疼みが胃の腑に感ぜられた。寢冷えか食中りかと思ひをめぐらせたが、疼みはさしたることもないので、彼れは沈みかけた氣を取直して汽車に乘つた。この驛にでも下車客の多くは、洋服に足駄を穿いて辨當箱を提げた職工連であつた。

煙草一本吸盡す間もなく、汽車は油煙で空の汚れてゐる吳の町へ着いた。古川は前夜海上から見渡して想像してゐたほどの美い土地ではないと思ひながら停車場を出た。そして、職工募集の廣告板などを傍見しながら電車道へ向かつてゐたが、と、ふと、先つきよりも烈しい、何かで抉られるやうな疼みが胃の腑に感ぜられだした。一歩も動けなくなつた。

「昨夕の料理が變な味がした。今朝の飯蛸も氣味が惡かつた」と、彼れはその宿を憎んだ。そんな宿へ泊つたことを後悔した。道傍に蹲んで腹を壓えてゐたが、たやすく收まりさうではないので、通りがゝりの俥を呼んで、これから訪問すべき筈の家へ、とにかく連れて行かせることにした。俥に乘ると目を瞑つて齒を喰締めて、腹部を壓えて、程なく疼の去るやうにと念じながら、市街の有樣をば殆んど目にも留めなかつた。

××町は意外に近かつた。目差してゐる福田といふ家も雜作なく見つかつた。古川は俥を下りて、教へられた家の格子戸を開けて入ると、遠慮もなく玄關先にうつ俯しになつた。取次に出た小女は、怪みながら名刺を持つて奥へ行つたが、やがてあはてゝ出て來たのは、主婦のおきよであつた。

「玄一さんですか。どうなすつたんです」と側へ寄つて來たおきよの顏を、古川は蹙め面して見上げて、

「些つとお腹が疼むのですか、何處にでも少しの間寢かして與れませんか」と、苦しげな聲を出して頼んだ。

「ぢや此方や入らつしやい、直ぐに床を延べますから。なんならお醫者に診てお貰ひなさるとよ御座んすよ」

何か云つては慰めながら先に立つたおきよの後に隨いて、古川は茶の間に通つて、梯子段を上つた。二階は二室つときであつたが、「些つと其方で横になつてゝ下さいな」と、おきよは廣い部屋に客を待たせて置いて、狹い方へ寢床を延べた。

おきよが歳の割にまだ婆さん染みてゐないで、奇麗だつた昔の影に殘つてゐることや、長女のおさいの姿の其處等に見えなかつたことや、二階の部屋の取散らかされて拭掃除も行届いてゐないことなどを、古川は苦しい夢の中の光景として思浮べてゐた。そして、おきよに招かれて寢床へ入つてからも、腹の疼みを忘れる手段として、此處の家庭のことに思ひを馳せるやうに努めてゐた。

「も少しかうして我慢してゐませう」と、醫者を勸められるのを斷はつて、をり〳〵厠へ下りて吐出せるものは吐出したりして、三疊の室に靜臥して、徐々に回復するらしいのを心頼みにしてゐた。

おきよは、腹を温めるための熱湯を詰めた麥酒罎を持つた來たり、仁丹や健胃丸など持合せの賣藥を持つて來たりして、お愛相だけにでも病人の肩を揉み脊を撫でた。古川は他家へ厄介を掛けまいとする意氣込みのために一時の病氣に打勝つたのか、正午前に疼みは殆んど感ぜられぬくらゐになつた。

「吉浦の宿がいけなかつたんです。座敷へ通つた時から、何か災難に罹りさうな氣がしましたよ」と云つて、その宿の給仕女の脂ぎつた顏付や、粗末だつた食物のことなどを細かに話した。郷を出てからの旅中の見聞や、東京での生活の近狀などをも訊かれるまゝに話したが、此處の一家のことについては、まだ訊糺さうとはしなかつた。

「おさいは都合があつて先月から岩國の方へ行つてるんです」と云はれて、古川は輕い失望を感じた。そして、今日一日は液體の一杯をも採らぬことにして、假睡と空想とで時を過してゐた。六時頃に主人が歸つて來るまでは誰れにも氣兼ねをしないで寢てゐればいゝのだと、自から心を緩めてゐた。

疼みが去つた後は、先つきからぼんやり目に觸れてゐた家の樣子や人の樣子が新たに考へられ出した。

昔から叔母さんと呼馴れてゐるおきよについても、腹痛の介抱を受けたがためか、却つて異樣な感じを加へて昔の記憶を一層明かに思浮べた。……二十年も前に、古川がまだ十歳前後だつたころ、この叔母さんは明石に住んでゐて、ある役目で支那か亞米利加かへ出張してゐる夫の留守を守つてゐたのだが、古川は海水浴をしたいために一夏其處に寄食して、叔母さんの世話になつたことがあつたのだ。

初めて會つた叔母さんの顏は、生れて初めて美しい人を見たやうに美しく思はれた。叔母さんは毎日お化粧をして奇麗な衣服を着て、琴を鳴らしたり海邊を散歩したりしてゐた。古川が海に漬る時には、彼女も蝙蝠傘を差して白い足を水に浸して見守つて吳れた。叔母さんの家は鐵道線路の近くにあつて、線堺の上に拓榴の花が垂れてゐた。……二十年前を回顧するたびにこの拓榴の花が、何よりも鮮かに古川の目に浮んだ。

が、彼れはこの「叔母さん」のおきよを無邪氣な追憶にのみ關連させてはゐなかつた。未熟な慾望を頻りに唆かされたことも忘れがたい記憶の一つであつた。異性に對して子供らしからぬ考へを起させるやうに仕向けられたことも覺えてゐた。大人になつてから二度や三度、小奇麗な女の目顏に魅せられて頓間な眞似をした時もあつたが、さういふ時にも、幼い頭に刻まれたおきよの美しい姿は、屢々影法師を前に映した。そして、居所が遠く離れて、手紙の遣り取りもしなければ、三年や五年噂を耳にすることさへなくつても、何時何處でゞも會ひさへすればおきよの懷中に飛込めるほどの親しみを持つてゐるつもりでゐた。岸本や根井の眞正の叔母さんよりも、まさかの時には、この叔母さんの方が無理な願ひをも聞いて吳れるであらうと、彼れは平生賴みにしてゐたのであつた。……あの女は度々亭主困らせをし

て身持がよくないとか、福田の家は年々逼塞してゐるらしいとか、親類中で惡樣に云つてゐるのをたまに耳に觸れたこともあるし、父祖の遺產は次第に磨り減らすのみで、職務の上の出世は少しもしてゐないのをよく知つてゐたが、そんなことのために、この「叔母さん」や「叔父さん」を侮つたり憫んだりするやうな古川ではなかつた。

「橫須賀や東京に住んでゐた時よりも、もつと貧乏してゐると見える」と、彼れは吉浦の安宿にも劣らぬやうな襤褸の汚れた部屋を見詰めた。遺產を費ひ盡したと云はれる家に似合はず、贅澤な品物はどの部屋にもなさゝうであつた。

「お腹(なか)の加減は？……」と、おきよは梯子段から顏を出して、「なんでも召上りたいものがあればさう仰有いな」と云つて、閾に手を掛けて古川の顏をしげ〳〵見詰めながら、「まだ顏の色が靑う御座んすよ。平生は御丈夫なんでせうのに。とんでもない災難に會ひなすつたわね」

「災難と云ふほどぢやないが、こんなことで叔母さんの御厄介にならうとは思ひませんでしたよ。先つきから不思議に思つてるんです。それに停車場から此處までは夢中で奥の市の樣子を殆んど見てゐないんですから、この部屋が餘程不思議に思はれますよ。」

「家がお粗末だから尙變に見えるでせう。だけど、何時までこの土地にゐられるやら分らないのだから、家なんぞ雨風が凌げさへすれば澤山だと思つてるんです。……福田は零落(おちぶ)れて貧乏長屋に燻つてるなんて吹聽しちやいけませんよ」

「叔母さんにも似合ない、詰らないことを氣にしてるんですね。」

「でも、親類うちで惡くばかり評判されるのはいやなもんですからね」と、おきよは邪氣のない笑ひを洩らして、「貴下の先日の葉書には私に用事があるやうに書いてありましたが、どんな事なんです？」

「それはもつと氣分がよくなつてから緩くりお話しませう。此度此方へ伺ふことは親爺にも母にも云つて置かなかつたんですよ。秘密にした譯ぢやないんですけど」

「ぢや、私思違ひしてゐましたよ。玄一さんお獨りで思立つて訪ねて來て下すつたの？私は貴下がお母さん達と話合ひの上で、御自分でお使ひになつて入らつしやるんだらうと思つてましたよ」

「でも私が使ひに立つて此方へ伺ふやうな用事のある筈はないぢやありませんか」

「さう云へばさうですけれど」

おきよは上り段の閾に腰を掛けた。ふと娘のおさいのことを思出して、「あの子も東京へ行きたい〳〵と云つてましたから、貴下が入しつてることを知つたら、お目に掛つて東京のお話をどつさりお聞きしたいと思ひますよ。貴下が幾日も御逗留なされるやうなら、あれに知らせてやるとよろしいんですけど……」

「どうせ私も宮島から岩國へは廻るつもりですから、差支えがなければおさいさんのゐる所へお寄りしてもいゝんです」

「岩國は公園の櫻がこゝ四五日の間が見頃だつて云ひますから、都合がつけば私が貴下のお伴をして岩國まで遊びに出掛けるんですけれどね」

「それはよ御座んすね。差支えがあるんですか」

「出掛けられないつてことはありませんがね。……まあ考へて見ませうよ」

おきよは娘の寄寓して家のことや、岩國が近縣に並びない櫻の名所であることなどを話しながらも、口調や素振りは例のやうに極めて冷かだつたが、古川は一種の興奮を覺えて聞いてゐた。明石以來自分の胸には深い馴染として刻まれてゐるこの叔母さんと連立つて、この叔母さんにそつくりだと云はれてたる年頃のおさいを花の名所へ訪ねて行くのは、結果は兎に角、今度の春季旅行の餘興として、この上もない面白いことに思はれた。

彼れの寢てゐる狹い部屋は日が當らなくつて陰氣だが、襖を開けて次の室を見ると、其處は明るくて春の眞晝らしかつた。おきよがゐなくなつてから、古川はそつと起きて、氣怠い足を動かして廣い部屋を歩廻つたり、障子を開けて、向ひの三階に遮られて狹苦しく見える戸外を眺めたりして、疲れると、元の寢床に横たはつた。下駄の音でも俥の音でも戸外のすべての物音が物珍らしく耳に響いて、をり〳〵は異境に在るやうな氣持をしながら、彼れはとろ〳〵と眠りに落ちてゐた。

主人が歸つて來たら一先づ起きて挨拶しなければならぬと思つてゐたゝめか、表の戸がガラット開くと、自から目が醒めて身體も夜具から乘出るやうになつた。時刻が分らないので、二三度戸の音に欺かれて衣服を整えなどした。衣服を着直した次手に粘つこい口の内を清めて來ようとして階下へ下りたが、例の小女の外には誰れもゐなかつたので、

「奧さんは何處かへ出て行つたんですか」と訊くと、

「お風呂へ行きなさいました」と小女は答へた。

古川は臺所仕事をしてゐる小女の側で顏を洗つて、鹽で齒を磨いたり口を漱いだりしたが、洗つても磨いても口中のいやな粘りのまだ取れないのでもどかしかつた。で、諦めて寢床に橫はるつもりで臺所を出ると、意外にも主人の善助が帽子を被つたまゝに突立つて、此方を見詰めてゐたのに驚かされた。たびたび氣をつけてゐた肝心の戶の音の聞えなかつたのを不思議に思ひながら、古川は不格好に膝をついてお時儀をした。

「玄一さんか、誰れかと思つたら」と、善助は微笑して、茶の間の眞中に腰をおろして、改まつて挨拶をした。顏はとにかく、その頭の著しく白くなつてゐるのが、何よりも古川の目を惹いた。腹痛の話をすると、

「それはいかんね。遠慮せんで二階へ行つて寢てゐたまへ」と主人が親身に云つて吳れたので、古川はさして餘計な話をしないで、二階へ上つた。

長く正座してゐるには堪へられないので、のびのびと寢床に手足を伸したが、階下に主人がゐるのだと思ふと、今までとは異つて、多少の氣兼ねが出ていけなかつた。小女に命令してゐる主人の尖つた聲の聞えるのも不愉快であつた。

朝の間こそ薄ら寒かつたが、次第に溫かくなつて、日は麗かに照つてゐるし、風は無いし、田舍道でも市中でもぶらぶら步きながら見物するに相應しい日であるのに、惜しいことをしたと、古川は眠氣の取れた冴えた頭に、見て來た土地やまだ見ぬ土地の春景色を新たに描いてゐたが、するとそこへ、靜かに

階子段を踏んで主人が上つて來た。目を閉ぢて横へ向いて眠つた風をしてゐると、主人は音のせやうに襖を開けて次の室へ入つた。

主人が隣室で煙管の音をさせたり咳をしたりするたびに古川は氣詰りな思ひをしてゐたが、ふと寢返りしたゝめに氣づかれたのか、

「玄一さん、目が醒めてるんですか」と聲を掛けられたので、ドキマギしながら、

「えゝ」と、少し身體を持上げて返事をした。

「退屈だらうね。君が歩ければ市中を案内して、洋食でも晩に食べに行くんだが。……この市には西洋料理なら中々旨く喰はせる家があるよ」

「まだ食慾が起らないから駄目です」

「ぢや、それは明日か明後日に延すことにして、……」と、主人は座を立つて、竹細工の書翰入を床の間から持つて來て、見たい手紙を捜しながら、「君が旅行の次手に此方へ寄つて呉れるといふ手紙を見た時から、丁度幸ひだから、一つ頼まれて貰ひたいと思つてることがあるんだがね。どうでせう、頼まれて呉れますかな」

「えゝ……」古川は即答はし兼ねて、「それは何です？」

「なに六ヶ敷ことぢやない。東京にゐるある靑年の素行を調べて貰ひたいと思つてるのさ。無論君が彼方へ歸つてからでいゝんだがね。當人に知れないやうにして調べて貰ひたいのだ」

「此家で懇意にしてる人ですか」

「いや、さうでもない。君だから話してもいゝが、家では縁談が出來かゝつてるんでね」

「へえ、……おさいさんにですか」

古川は意外に感じた。しかも氣持の惡い意外な感じであつた。腹痛後の衰弱した神經には殊にそれがいやに響いて胸の鼓動を早めた。心に隔てのない筈のおきよからは却つて一言もそんな話を聞かなかつたのも不思議であつた。主人は捜出した手紙を見て、その青年の現住所を云つて、

「君は今何處に住まつて居るね」と訊ねた。

「芝の××町です」

「ぢや、慶應義塾へさう遠くはないのだらう。その男は去年慶應を出たんださうだ。學校の成績は可なりよかつたらしい」

主人は青年について尚二三の問はず語りをしてゐた。古川は間を遮つた古びた襖の方へ目を向けながら、好ましくもない頼まれ事について考へてゐた。

その青年の姓名をも、この家の者がその男と知合ひになつた道筋をも、今は強いて訊ねなかつた。がさういふ男の影が彼れの目の前に現はれて來たゝめに、道すがら樂んでゐた夢のやうな樂みは著しく傷けられた。……まだ子供々々したゐた時分に見たつきり、暫く會はない間に、母親生寫しのおさいがどれほど美しい娘姿に生立つてゐるかを見たかつたので、あながち物慾しさうな若い思ひをこの女に寄せてゐるのではなかつたが、それでも他の男と約束濟みになつてゐると聞くと、不思議に興の削がれる氣持がした。

自分一人の考へである用事を持つて來たと叔母さんに云つたのだが、主人の先つきの話を聞いた上は、戯談半分のその用事をも明らさまに口から言出せさうでなかつた。……明石以來の親しみのある「叔母さん」のおきよに向つて、自分がさも深く娘のおさいを慕つてゐるらしい風をして揶揄ふつもりの企らみも、これでは充分に果せさうでなかつた。……出來かゝつてゐる幸福な縁談に暗い影を投げるやうな役目を古川自身演ずるのは、流石に躊躇されるのであつた。

「遠慮せんで氣儘にしとりたまへ」と、主人は狹い部屋を通りながら云つて階子段を下りた。古川は主人がゐなくなると、云はれなくても氣儘なざまをして、次の室から煙草盆をも持つて來た。

その夜夫婦は階下へ寢床を移した。古川は終日假睡をしてゐたゝめに、夜が更けるほど却つて目が冴えてゐた。絶食後の饑ゑも感ぜられ出した。便所へ下りると、小女の寢床の側をも夫婦の寢床の側をも通らねばならなかつたが、それによつてもこの一家の零落の樣が古川には想像された。寢室へ客に踏込まれるやうぢや厭だらうと、非常な不快なことのやうに獨り極めにしてゐた。

翌朝、海軍工廠の經理部とかへ奉職してゐる主人が定刻に家を出るのを待つて、古川は階下へ下りた。そして、茶の間の火鉢で、昨夕頼んで置いた牛乳を自から温めて飲みながら、粗末な土地の新聞を讀んで、その記事についておきよに訊ねたりしてゐた。腸窒扶斯の蔓延を知つて、

「この近邊で遊んでゝ傳染しちや堪らないから、早く遠方へ逃げませうかね」と云つて、その次手に岩國行のことを訊ねた。

「玄一さんは案外臆病なのね。この近所には悪い病人はないんだから安心してゐらつしやいよ。……さう云へば貴下は昨日叔父さんに大變な用事を頼まれたのですつてね。そんなことを眞に向けて詰らない目に會はないやうになさいな」

「だつて叔父さんの話は事實なんでせう」

「それは多少事實なんでせうけど、玄一さんに向うの男の身元調べなんぞして貰つちや氣の毒ですからね。」

「私も貴女方のために役に立つのなら、そのくらゐの勞力は厭ひませんが、その人はどんな人なのです？寫眞はありませんか」

「寫眞はどうですかね。おさいが岩國へ持つて行つてるかも知れませんよ。」

平氣でさう云つたおきよの顔を見詰めながら、古川は微笑を洩らした。

岩國々々と、おさいがある岩國の裁判官の家へ寄宿してゐることや、岩國の公園の花が咲盛つてゐることや、其處へは日歸りでも緩くり遊んで來られることなど話してゐる中に、おきよは、ふと、今直ぐにでもその岩國へ出掛たくなつた。

「玄一さんの身體がいゝと、これから直ぐに仕度して行くんですがね。今年はまだ一度も他所へ行つたことがないから、かういう折にでも出掛けなければなりませんよ」

「貴女に差支えがなければ私は今だつて構はないです」

古川はまだ手足に力の入らないのを忘れて、面白づくでさう云つたが、おきよは、「本當にいゝんです

か」と念を推して座を立つた。急に元氣づいて、笑ひを含んだ目付はいや味なほどに若々しくなつた。「さうと極つたら一分間でも早くしなければ」と、小女を呼んで鏡臺を出させたり湯を沸かさせたりしたが、その喜んでソハ〳〵してゐる樣子と云つたら、顏に小雛の寄りかけてる女の素振りとは思はれなかつた。幼い女の子が祭見に誘はれてでもゐるやうな風であつた。

あまりに事が早く運ぶので、古川は却つて氣遣ひながら、「叔父さんは承知してゐなさるんですかね」と訊くと、「それは關はないんですとも」と、事もなげに答へられた。

で、おきよが出仕度をしてゐる間に、古川は二階へ上つて夜具を片付けて、風邪をひかぬやうに有りつたけの衣服を身に着けたが、五體はまだ懶くて、今一日ほどは横になつてゐたかつた。それにおきよの思立ちのいかにも突飛なやうなのが危まれないでもなかつた。

「邪魔な物は家に置いて手ぶらでいらつしやいな」と、おきよが化粧をして縮緬の羽織なんか着て、呼びに來た時には、古川は後退してはゐられなかつた。も一日延したいなどゝ悠長な口は利けなかつた。

「旦那樣が戻んなさつたら、先つき私の云つたことを忘れないで云つてお吳れ」

おきよは何の屈託もなく躊躇もせず、溫かな晴れた日を喜んで家を出て、手土產に朝鮮飴を買つて、停車場まで電車に乘つた。發車間際で、改札口では乘客が列をつくつてゐた。古川は二人の切符を買つて汽車に乘つたが、何だか後目たいことをしてゐるやうで、豫期したほどの樂みは得られなかつた。車窓に映る春の海は何時もの通り美しく、顏に觸れる汐風も相變らずいゝ氣持で、狹苦しい三疊の室に寢てゐるよりも、却つて衰弱の回復を早めさうであつたが、この叔母さんと膝を並べて旅してゐるのがひ

そかに疚しくてならなかつた。夫に無斷で身を隱したことはおきよの過去には珍らしくなかつたので、娘に會ひに行くくらゐは何でもないのだらうけれど、古川はさも自分が誘出したやうに叔父さんに思はれるのが無氣味であつた。

おさいが岩國の豐村といふ裁判官の家で家事の手助けをしながら、其處の妻君に英語などを敎へられてゐることや、その妻君には非常に可愛がられてゐて、親の側にゐるよりも却つて當人のためになることなどが、おきよの口から止切れ〳〵に話されるのを聞きながらも、古川の心は充分におさいの方へ向かなかつた。

切符は岩國までのを持つてゐても、廣島で乘換えなければならなかつた。古川は待合せる間を利用して獨り俥を驅つて饒津神社へ遊んだが、其處の櫻も略々見頃に咲いてゐた。淋しくもなく雜沓もしないほどに人が寄つてゐて、花の下の掛茶屋も小ザッパリしてゐた。彼れは時計を見い〳〵可成りに廣い境内を一まはりしたが、さうしてゐる間に、出來ることなら叔母さんを放つたらかして、自由な一人旅をしたくなつた。俥夫に促されて停車場へ歸つて、おきよに促されて汽車に乘ることは乘つても、容易に落着かれなかつた。

山陽線のこの下り列車には宮島や岩國などへの多くの遊覽客が乘合せてゐて、室内は陽氣であつた。おきよはいゝ工合に隣同士になつた話好きな女客と世間話をはじめた。古川は宮島近くまで來ると、「私だけ此處で下りて一泊して、明日岩國へ行つちやいけないんですかね。宮島は無論私の旅行日程に入つてるんですから」と云ふと、

「私も久振りで宮島さんへお詣りしてもよ御座んすよ」と、おきよは無雜作に乘出した。「終列車で岩國へ着いたつて構やしません」

「……いつそ歸りに寄ることにしませうか」

古川の考の直ぐに變つたのをおきよは怪みもしなかつた。

「私も久振りで出て來たんですから、日返りや一晩泊りぢや詰らないと思つてゐますよ。かうして汽車に乘つてるだけでも胸がせい〴〵して、もつと乘りでのする所へ行つて見たいと思はれるんですもの。……玄一さんは丁度いゝ時に來て下すつたのね。かうして出て來られるやうになつたのもつまりは貴下のお蔭なのよ。四五日前から東の方へでも西の方へでも行きたい〳〵と思つてゐたんですけど、一人では思切つて出られなかつたの」

「しかし岩國へ行つても、私は貴女に隨いて豐村さんの家へ行くことは出來ませんね」

「ぢや、貴下だけ別に宿を取つてゐらつしやいな。私がおさいを連れて遊びに行きますから」

「日が長いから、今日中にゆつくり花見が出來るでせう」

古川は病後の衰弱で心が弱くなつてゐるためか、何でもないことを獨りで狹しがつてゐる自分を笑つたりしたが、明石以來この叔母さんに會ふと感ぜられる恣まゝな妄想が、今日はことに激しく起つて、叔母さんの態度次第で、傍からどんな疑ひを受けても言解けないやうになるかも知れんと思はれた。そしてあの叔父さんの力のない目付も怖さうに光つた。

宮島で遊覽客の下りた後では、多少の空席が出來たので、古川はおきよの側を離れて身を横へて目を

眠つてゐた。「貴下はまだ顔色が惡くて元氣がなさゝうだから眠つてゐらつしやい。汽車が着いたら私が起して上げますから」と、おきよが風呂敷包で枕をつくつて呉れたり、外套を裾へ掛けて呉れたりするのが、一々古川の妄想を刺戟して、遠い昔の明石の夏の夜をまざ〳〵と思出させた。

「この土地くらゐ人氣の惡い土地は珍らしい」と、周防境のある町を過ぎてゐる時に枕許の客の話してゐる言葉が、彼れの耳に入つたのでふと頭を持上げて窓外を一瞥したが、人氣の惡いといはれてゐる町の後の丘は、一帶の桃畝で美しい色をしてゐた。

岩國に着いた時には、おきよの方が假眠をしてゐて、却つた古川に呼醒まされた。

汽車を下りて電車の乘り場へ向つてゐると、車掌臺へまで客の溢れてゐる電車が、町の方から勢一杯の速力でやつて來た。下りた客は停車場を差してわれ勝ちに急ぎ出したが、その大勢の男女の中の一人がふと古川の目を惹寄せた。古川は氣の迷ひかと默つてゐたが、その女は笑顔で驅寄つた。

「電報が屆いたの？」おきよはさう云つて些つといやな顔をした。

「電報はお父さんが打つたらしいのね。私、間に合はないかと思つて、こんな服裝で大急ぎで……」と、不斷着のおさいは粉飾してゐる母と並んで、人に見られるのを氣にしてゐた。

古川は明石の頃の「叔母さん」に生寫しのおさいの顔形を見ぬやうな風で、絶えず目に留めながら、先つきまでの妄想の恐れから免れかけた。

「お父さんも後から來なさるんでせうけれど、おまつ一人でお留守が出來るか知ら」と、おさいは云つたが、母の來たこと、父の來ることについてさして喜んではゐなかつた。

「でも、お父さんにはお勤めがあるんだから、遠方へ出る譯には行くまいよ」と、おきよの言葉は空々しかつた。

電車に乘つてから、古川は自分一人の泊るべき宿を二人に相談したり、空模樣の當てにならない明日を待たずに、この夕暮までに、おさいに案内させて一緒に公園へ花を見に行く約束をしたりしてゐたが、おさいが自分の側にゐるやうになつてからは、叔母さんに對しての不思議な恐れはます〳〵消えるばかりで、晴々した力は新に彼れの心に湧立つた。

あの叔父さんが後からやつて來て、叔母さんとの間にいやな諍（いさかひ）が起つたつて、自分に取つては最早何でもないやうに思はれた。

蘇峰德富猪一郎新著

識者の好評如湧

内容一斑申込次第贈呈

支那漫遊記

特製 最上洋紙布製天金函入六百卅頁 定價金五圓 郵税十六錢

上製 總クロース上製四六版六三〇頁 定價二圓五十錢 郵税金八錢

前篇「禹域鴻爪錄」 三十五章 百三十六節

頂天立地不羈自由の蘇峰學人

著者の支那漫遊は、其名の示す如く眞の漫遊也。官憲の屏書あるに非ず、政黨の色彩を帶ぶるに非ず、況や事業家たるの資格をや、著者は實に一個の蘇峰學人として終始したり。されば一個の蘇峰學人は、頂天立地不羈自由にして、其の遊跡は、則ち自ら行かんと欲する所に行き自ら止らんと欲する所に止まり、何等の制限を受けず。其の觀察は、則ち自己の眼を以て視、自己の耳を以て聽き自己の意志を以て考へ、何等の拘束を受くる無し。故に其の結果や、覺然として大に他と異るもの有矣。

興會異常、文字亦高調に達す

尋常遊記と雖も一たび著者の手を經れば、則ち他と異なる、況や斯遊に於てをや。天命人事共に浹洽し、著者をして異常の高調に達せしめたる斯遊の如きは蓋し稀也。故に其の文字亦た高調に達し、絲毫も彫琢を假らず、一氣呵成、泉源混々として、支那北中東部の山川人物、文化を活現展開し來りて、眞に偉觀を極む。

他の望んで得難き方面の歡迎

蘇峰學人は天下の士也。支那在朝在野如何なる貴戚名士、權勢家と雖も、苟も自已の會はんと欲する者、誰か語らんと欲する者、誰か會ひ且語るを得ざるものぞ。然も是は難からず、眞に難きは、有ゆる方面の歡迎也。乃ち支那の文藝家、博雅の君子、若くは憂國の隱士と云ふが如き方面の交驩也。斯の如きは多數の游支者中、恐くは獨り我が蘇峰學人の享け得たる特權にして。本書の特色は實に現勢的方面のみならず、亦是等有らゆる階級をも網羅したるに存する也。

咳唾珠を成す七絕五十有餘首

著者の行程、到處吟嘯を絕たず。本書載する所、七絕五十有餘首咳唾皆珠。所謂「眞故新」の實現にして、專門の士と雖も、[illegible]んで讚歎せる所也。

後篇「遊支偶錄」 八十六章

文章の新機軸として最も珍重

著者が自己の眼を以て視、自己の耳を以て聽き、自己の意志を以て考へたる觀察、感想、斷制等に至りては、則ち「遊支偶錄」に於て之を見るを得べし。「遊支偶錄」は八十六章より成り、章段簡勁にして、行文平易を貫し、而も警句、秀句、名句、錯落として層見疊出す。文章の新機軸としても洵に珍重するに足る。

支那人經綸策の輪廓を構成す

而も文章は末のみ「遊支偶錄」は著者が支那經綸策の輪廓を構成するものにして、此の輪廓こそは、著者非凡の眼力と、超世の識見とを立證するものに非ずして何ぞや。輪廓とは他なし、必ずしも細論せず、其大經大綱を示せば也。孰れも動かす可らざる支那經綸の大本たるや論なし。

著者は支那及支那人の眞知己

支那及支那人は、他より指摘せらるゝ何等の短所なしと思はゞ大なる間違ひ也。然れども短所のみにて何等の長所なしと思ふ者あらば、是亦た大間違ひ也。而して世人の多く皆是也。此の點に於て著者の眼光は毀しき程支那及支那人の窮處に中るもの有りと雖も、亦實に著者程善く其の長所を認め、且之を發揮したる者はあらざる可し支那及支那人たる者、爾の眞知己に感謝して可也。

著者獨特の史的薀蓄を發揮す

著者獨特の史的薀蓄に依りて、支那を叙述し論斷する所、精采煥發、往々一唱三歎のものあり。「遊支偶錄」は。唯り乾燥なる現代式論策に非ざるや勿論也。

× × × × × × ×

[illegible]挿入したる支那各地の風俗[illegible]三十餘種の寫眞は、著者と同[illegible]影する所に係る。又た支那諸[illegible]して面の當り著者に贈られたるも[illegible]興の餘多なる、是亦た本書の[illegible]

發行所 東京市京橋區日吉町 民友社 電話新橋一五六〇 振替一三一〇〇

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金參拾錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

册數／國別	內國	外國
六册	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二册	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
	以上郵税共	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

本號特價　金六拾錢　郵税金四錢

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を**本郷區西片町十番地中央公論社**とし、拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取さるゝ憂なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり

一郵劵代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒ます

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

　一金一圓迄　金六錢（貯金委託料及送料共）
　一金五圓迄　金七錢

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正七年七月十四日印刷納本
大正七年七月十五日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　菅谷憲治
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長小石川一四四四
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正七年七月十四日印刷納本
大正七年七月十五日發行（毎月一回一日發行）

中央公論 秘密と開放號（第三十三年第八號）